上

はしがき

インドにおいて西暦前後、在家の仏教徒が中心となり、仏教改革運動をおこしたが、そのさい、かれらは自分たちの仏教を真理にいたる大きな乗物、すなわち大乗（Mahā-yāna）と称し、それまでの仏教（部派仏教）を真理にいたる小さな乗物、すなわち小乗（Hīna-yāna）と評した。およそ二点について批判が加えられた。一点は、部派仏教が出家主義に傾き、僧院主義に陥って、現実社会から遊離したことである。もう一点は、仏教の根本真理である空を虚無的なものに解して、人生の本質ないし人間の本性を無とみなし、ひいては、死んで無に帰することを理想（涅槃）と考えるにいたったことである。現実社会のただ中で活動していた大乗教徒たちは、この二点に批判の眼を投じながら、仏教を現実に生かし、仏教によって現実を生かすことに努めた。そこに釈迦の真意があると考え、経典の編集をし直すにもいたる。こうして、大乗経典の誕生となる。

大乗経典として最初に編集されたものが維摩経を含め原始般若経で、空が現実の事物の成立根拠であることを明らかにした。しかし、なおまだ原理的解明にとどまっていたために、空にたいする誤解を十分に除くまでにはいたらなかった。そこで、空の根本真理を現実の具体的なことがらにあてはめつつ、一段と積極的な表現に盛る試みがなされ、法華経および華厳経（原始分）が編集されてくる。

法華経は般若経のあと、西暦五〇年から一五〇年にかけて、二十七章（提婆達多品は後世の付加として除く）という形になったと思われる。法華経を、出来上がった全体的立場と原典の成立史的立場か

ら合わせ見ると、一乗妙法・久遠釈迦・菩薩行道が法華経の三大特色と言えてこよう。大乗仏教の三要素（三宝）である法・仏・菩薩について、統一的見解を示したものであり、空の根本真理を積極的に表現したものでもある。中国や日本で仏教の統一体系が樹立されたとき、常に法華経が柱となったゆえんである。

　中国における法華経の漢訳は、たびたびに及ぶが、全訳に関しては六訳三存三欠ということが言われる。そのうち、鳩摩羅什訳（四〇六）の『妙法蓮華経』が名訳として、もっぱら用いられてきた。日本においても、仏教界は言うに及ばず、文芸作品に盛んに引用された。『妙法蓮華経』なくしては、日本仏教は成りたたず、日本文化は語れないと言って、過言ではない。そういうわけで、『妙法蓮華経』をとり上げて現代訳し、注釈と解説を施したのが、本書である。序論の一から四までは小生が執筆したが、五の「法華経版経について」と本論のすべては藤井教公氏の筆になるもので、特にサンスクリット原語を併記しての詳細な語句の注釈は、有能な少壮気鋭の学者である藤井氏にして始めて可能と言えよう。それだけでも、今までに見られない労作と評しうる。本書を通して『妙法蓮華経』が多くの人びとに改めて味読されることを念願してやまない。

昭和六十三年二月

田村芳朗

法華経　上巻　目次

巻第一

巻第二

目次

巻第四

題字　谷村憙齋

序論

一　法華経の原典と訳本

中国において経典が漢訳されると、不思議なことにサンスクリット語（梵語）原典は散逸してしまった。法華経もそうで、漢訳にさいして用いた原典は残存しない。しかし、幸いなことに、のちに改めて書き写された原典写本が一九世紀半ば以降、相次いで発見されるにいたった。その先がけがネパール駐在公使であったイギリスのホジソン（B.H.Hodgson 一八〇〇―一八九四）で、多数の梵語写本を収集したが、その中に法華経の写本も見いだされる。それより今日にいたるまで、多くの法華原典の写本が発見され、それらの整理・校合とともに刊行もなされ、原典を通しての法華経の研究も次第に成果をあげるようになった。

原典写本は、大きくはネパール系のものと中央アジア（西域）系のものとに分けられるが、ネパール系写本は完全な形をしているものが多いのにたいし、中央アジア系写本は断片が多い。ただし、ペトロフスキー本（カシュガル本）とファルハード・ベーグ本は、相当まとまった形で残っている。筆写年代については、ネパール系は一一世紀以降、中央アジア系はそれ以前と考えられ、ペトロフスキー本などは七、八世紀の筆写と推定される。書体は、ネパール系はシッダム（悉曇）文字かネワーリー（総称的にはナーガリー）文字、中央アジア系は直立グプタ文字である。

なお、一九三一年にカシミールのギルギットで発見された写本があり、筆写年代は六、七世紀ごろ

と推定され、内容的にはネパール系に近いとされる。書体は、中央アジア系諸本と同様に直立グプタ文字ではあるが、非常に丸味を帯びているのが特色である。全巻の四分の三が収集されており、法華経の原典研究に貴重な資料となる。

原典写本の発見にともなって、その整理・校訂の事業も進み、法華原典の刊行・翻訳も試みられるにいたった。原典の刊行については、一九〇八年から一二年にかけて、オランダのインド学・仏教学者であるケルン（H. Kern）と日本の南条文雄が、デーヴァ・ナーガリー文字で法華原典を出版した。ネパール系諸本に中央アジア系のペトロフスキー本などを加えて校訂したものである。一九三四年から三五年にかけては、荻原雲来と土田勝弥が、ケルン・南条本に河口将来写本およびチベット語訳・漢訳を校合し、ローマナイズして出版した。そのほか、ダット（N. Dutt）の刊本（一九五三）、ヴァイドヤ（P.L. Vaidya）の刊本（一九六〇）などがある。なお、校訂本ではないが、河口慧海がチベットより将来したネパール系貝葉写本が、一九二六年にコロタイプ版で出版され、一九四九年には、本田義英・出口常順撮影将来『西域出土梵本法華経』が出版された。ペトロフスキー本を除いて他の中央アジア系写本のほとんどが撮影将来され、刊行されたものである。以来、法華経の原典写本の対校・校訂の出版や研究は、内外の学者によって一段と推進され、今日にいたっている。以上のごとき校訂出版や研究成果をふまえつつ、一九七七年から八二年にかけて、『梵文法華経写本集成』（梵文法華経刊行会）一二巻が刊行された。ネパール系、中央アジア系、カシミール（ギルギット）系の写本三〇数種を網羅的に収集し、写真版によって対照させたものである。

原典写本の校訂ないし刊行と並んで、それからの翻訳も試みられるにいたった。フランスの言語学

者で東洋学者であったビュルヌフ（E. Burnouf）は、ホジソンから贈られた写本にもとづいてフランス語に訳し、一八五二年にパリから出版され、一八八四年には、ケルンによる英訳がオックスフォードから出版された。日本語訳が南条文雄・泉芳璟によって試みられ、一九一三年、『梵漢対照新訳法華経』という題名で出版された。そのほか、岡教邃訳『梵文和訳法華経』（一九二三）、岩本裕訳『法華経』（一九六二―七、岩波文庫本）がある。原典からの翻訳は、まだ過渡的なもので、最も新しいものでも誤訳と思われる箇所があり、今後、写本類の対校とともに、漢訳・チベット語訳なども参照しつつ、いっそう厳密な訳業が期待される。

　漢訳は、全訳と部分訳と合わせ、多数にのぼることが記録に見え、全訳については、六訳三存三欠などといわれてきたが、それはともかくとして、現存する漢訳本は、二八六年に竺法護が訳した『正法華経』十巻二十七品、四〇六年に鳩摩羅什が訳した『妙法蓮華経』七巻二十七品（後に八巻二十八品）、六〇一年に闍那崛多と達摩笈多が訳した『添品妙法蓮華経』七巻二十七品の三つである。第三本は、第二の羅什訳を補訂したものである。翻訳年代としては法護のものが最も古いわけであるが、しかし、このことがそのまま、法護の使った原典写本が最も古いとする決め手とはならない。いっぽう、羅什は中央アジアのクチャ（亀茲）出身で、したがって、かれの使用した原典写本は中央アジア系と想像しうるが（添品法華の序に「什似亀茲之文」という）、だから、このほうが古いということもいえない。ともあれ、法護の訳は難解であり、羅什の訳は達意的で、現存の原典写本と対比しながら両者の用いた原典写本の系統・新旧を推定することは容易ではない。この点についても、今後の検討が待たれる。訳としては、羅什訳が名訳で、美文に満ちており、その結果、今日にいたるまで、もっぱら鳩摩羅什

訳の『妙法蓮華経』が用いられてきた。なお、経題の原名 Saddharma-puṇḍarika-sūtra についても、羅什訳の「妙法蓮華経」が最もふさわしい訳といえよう。

チベット語訳は、八世紀末から九世紀初めにかけてスレーンドラボーディとエシエーデーによってなされ、河口慧海は梵本を参照しつつ、さらに日本語に訳し、一九二四年、『梵蔵伝訳妙法白蓮華経』という題で刊行した。そのほか、西夏語訳・蒙古語訳・満州語訳・朝鮮諺文（ハングル）訳・安南語訳など、諸国語に法華経は翻訳ないし重訳され、広く珍重される。

二　法華経諸本間の異同

法華経の原典写本の発見によって、法華原典の成立研究も可能になった。そこで成立年代であるが、概括的には、第一期大乗経典（一―三世紀）の中に入れられる。第一期大乗経典とは、般若経・維摩経・法華経・華厳経の順序で成立し、それに無量寿経・阿弥陀経などが加えられたものである。般若経にしても、華厳経にしても、諸種ないし大部のものからなり、原始分と増広分の判別が成立史の主要課題となっているが、法華経についても同様である。結論的にいえば、西暦五〇年ごろに法華経の原始分が成立し、それから次第に増広されていって、全体が整うのは西暦一五〇年ごろと考えられる。下限を西暦一五〇年ごろとするのは、龍樹（約一五〇―二五〇）の『大智度論』に法華経の最後の章まで引用されているところからである。

それでは、どの部分が法華経の原始分であり、また増広分なのか。一口にいって法華経の成立史的区分づけであるが、その考察に資するために、法華経の諸本間に異同のある部分を表にしておくと、

○薬草喩品後半――梵・蔵・正・添にあり、妙・現妙になし。
○五百弟子受記品・法師品の前半――正のみ。
○提婆達多品――梵・蔵・正・添では見宝塔品の後半、妙はなく、現妙では見宝塔品の次章（第十二）。
○嘱累品――梵・蔵・正・添では最後（第二十七）、妙・現妙では如来神力品の次章（妙では第二十一、現妙では第二十二）。
○観世音菩薩普門品偈――梵・蔵・添・現妙にあり、正・妙になし。
○普門品偈中の阿弥陀頌――梵・蔵のみ。
○陀羅尼品――梵・蔵・添では如来神力品の次章（第二十一）、正・妙・現妙では普門品の次章（正では第二十四、妙では第二十五、現妙では第二十六）。

（梵――梵語原典写本、蔵――チベット語訳本、正――正法華経、妙――妙法蓮華経、現妙――現行妙法蓮華経、添――添品妙法蓮華経。品名は妙法蓮華経による）

などとなる。ほかに細かい異動は二、三あるが、大きな異動は以上のごとくである。

右の異動のうち、最も論議を呼んだ提婆達多品について検討を加えておくと、梵本ではカシミールのギルギット本も含め、提婆品は宝塔品の後尾に包摂されているが、中央アジアのペトロフスキー本だけは宝塔品の次に別立し、したがって、全体としては二十八品を形成する。なお、ファルハード・

ベーグ本には、提婆品に相当する部分が見いだされない。正法華経は、現存最古の経録である僧祐（四四五―五一八）の『出三蔵記集』や唐代までの諸経録を集大成した智昇（六五八―七四〇）の『開元釈教録』（七三〇）に二十七品と章数が記載されており、提婆品が宝塔品の後尾に包摂されたことを示すものである。ただし、宋・元・明の三本および宮内庁本では梵志品第十二として別立され、全体が二十八品となっており、後世にいたっては提婆品の別出も正法華経においてなされたことを知る。

妙法蓮華経に関しては、『出三蔵記集』に七巻という巻数が付記され、さらに「妙法蓮華経提婆達多品第十二　巻一」の項目のもとに、提婆品について解説が施されている。提婆品は、すでに正法華経の訳出（二八六）のときに宝塔品の後尾に包摂されており、いっぽう妙法蓮華経（四〇六訳出）には欠けていたわけであるが、解説によると、僧祐の師の法献が高昌国におもむいて、改めて法華経の梵本から提婆品の部分（あるいは独立の一本としての提婆品）を写しとり、それを持ち帰って、永明八年（四九〇）に法意（達摩摩提）とともに訳出したという。ただし、宝塔品の次章（第十二）として正式に妙法蓮華経に編入されるのは、もう少し後と見ねばならない。というのは、光宅寺法雲（四六七―五二九）が妙法蓮華経を注釈した『法華義記』においてさえも、提婆品は存在していないからである。妙法華経の注疏において提婆品が含まれてくるのは、天台智顗（五三八―五九七）の『法華文句』（五八七）以降である。

経録を通して検討してみると、費長房の『歴代三宝記』（五九七）に「妙法蓮華経七巻」と「妙法蓮華経八巻」の二種があがり、道宣の『大唐内典録』（六六四）には「七巻或八巻」とあり、智昇の『開元釈教録』（七三〇）になると、「妙法蓮華経八巻二十八品或七巻」と記されてくる。これからおして、

妙法蓮華経は羅什訳出のときは七巻二十七品であり、智顗以降、提婆品が加わって七巻二十八品あるいは八巻二十八品となり、中唐ごろには、八巻二十八品が通常となったといえよう。

以上のごとき提婆品の訳出・包摂ないし編入の事情を参照しつつ、提婆品の原典について結論づけると、提婆品は、もと独立の一本として作成され、そうして法華経の宝塔品の後尾に包摂され、あるいは次章として編入されるにもいたったということである。したがって、梵本としては、提婆品が独立した形のままで流伝していったものも考えられ、法華経については、提婆品が付加されないままで流伝したもの、提婆品を宝塔品に包摂したもの、宝塔品の次に編入したものの三通りが考えられる。さきにふれたごとく、近年になって発見された法華梵本にも、この三通りがうかがえるところである。

右のことは、訳出にも関係してくるので、正法華経の訳者・法護の用いた梵本は第二型のもの、妙法華経の訳者・羅什の用いた梵本は第一型のものと考えられる。現行妙法華経は、型としては第三にあたるが、法献・法意訳の提婆品が後に編入されてそうなったことは、前述したところである。なお、西晋（二六五―三一五）時代の訳出とされるが、訳者不明の薩曇分陀利経なるものが現存し、法経の『衆経目録』（五九四）にも掲載されている。これは、提婆品を中心として宝塔品の少分を頭につけ加えたものである。

なお、龍樹の『大智度論』には提婆品の名があがらず、世親の『法華経論』は提婆・龍女の成仏（授記）にふれており、前者は妙法華系、後者は正法華系といわれたりしているが、あるいは、提婆品の作成は龍樹以後との考えも可能かもしれない。ただ、『大智度論』は羅什訳のほかに原典もなく、羅什が訳したときには、かれの手がかなり入っていると思われる。その点、妙法華経も同様で、両書

あわせて羅什の訳しかたというものを考慮にいれる必要がある。

方便品（ほうべんぼん）第二のいわゆる十如是（じゅうにょぜ）が、その好例で、正法華経のこの部分は難解であるが、五種のごときであり、世親の『法華経論』も現存の梵本も五種ないし、そのくりかえしとなっている。妙法華経のみが十種のカテゴリーを立てており、これは、直接には『大智度論』に九種のカテゴリーが立てられているものを羅什が援用したものであろうと古くから指摘されてきた。しかし、智度論の九種のカテゴリーにしても羅什の意訳かもしれず、もしそうなら、十如是は羅什の全き独創となりかねない。

ともあれ、形の上からは、提婆品のない羅什使用の梵本が最も古いものといえるが、法護使用の梵本も、提婆品そのほか妙法華経にない部分を除けば、羅什使用の梵本と同じであったかもしれず、また、たとい羅什使用の梵本が最も古いとしても、それは形の上でのことで、内容的には別問題である。提婆品のない、その意味では原形のまま流伝していくうちに、原形部分に新しい要素が入りこんだかもしれず、その入りこんだものを写しとったのが羅什使用の梵本かもしれない。逆に法護使用の梵本は形の上では羅什本より新しいといえるとして、羅什本と同じうするところ、つまり原形部分では、むしろ古いままを伝えているかもしれない。現在、羅什使用の梵本にしても、法護使用の梵本にしても、また参考資料としての『大智度論』や『法華経論』の梵本にしても、ともに存せず、その上、訳本には訳者の手が入っている恐れもあり、いずれが、より古い内容を伝えているか、その判断は至難のわざといわねばならない。

普門品（ふもんぼん）の偈頌（げじゅ）については、さきの表で正法華・妙法華ともになく、添品法華・現行妙法華および梵・蔵にあることを見たが、梵本のうちでも、ペトロフスキー本だけは、それがない。現行妙法華経に

あるのは、添品法華から取り入れたものと推定されている。そこで経録を見てみると、『歴代三宝記』（五九七）に「妙法蓮華経普門品重説偈」の名があがり、闍那崛多の訳としている。これによれば、普門品偈は五九七年前に訳出され、六〇一年、添品法華の訳出時に、それが同経に編入されたと思われる。その添品から妙法華に普門品偈を取り入れてくる時期であるが、慈恩窺基（六三二―六八二）の妙法華注疏『法華玄賛』に始めて普門品偈が解釈されており、七世紀半ばの初唐ごろ、妙法華に取り入れられたと想像される。そのころは、ちょうど添品法華の名が経録に見えだす時である。静泰の『衆経目録』ないし道宣の『大唐内典録』（六六四）に、添品法華が紹介されはじめている。普門品偈の作成は、提婆品の作成より一段と遅く、さらに梵・蔵のみに見られる普門品偈中の阿弥陀頌は、最も遅い成立といえよう。

最後に検討を加えておく必要のあるものとして、嘱累品の位置の問題がある。嘱累品は、妙法華だけが如来神力品の次に置き、他の諸本はすべて最後に置いており、そういうことから、嘱累品は最後にあるのが本来であるといわれたりした。しかし、近年、法華経の成立史的研究が高まるとともに、妙法華のほうが嘱累品の正しい位置を示しているとの説が有力となってきた。たとえば、法華経を英訳したケルンは、訳本の序において、法華経の古い部分は序品から如来神力品までの二十章と嘱累品第二十七であるとのべ、松本文三郎博士は、『仏典批判論』において、嘱累品の内容が如来神力品第二十までの部分に密切に関係していることから、もとは嘱累品第二十一であったこと、それが六章の増加にともなって最後に移され、第二十七となったと論じている。

いま嘱累品の内容を検討してみると、嘱累品（Anuparīndanā Parivarto）という題名が示してい

るように、法の付託ないし使命の付与が中心となっており、如来神力品と直結するものであることを知る。後でふれるように、法師品第十から法の実践・弘通としての菩薩行、そのような実践・弘通の使命付与（付嘱・嘱累）が強調されており、嘱累品第二十一をしめくくりとして、その間が一群をなして作成されたことを思わせる。薬王菩薩本事品第二十二以下は、それぞれ個々に、そのときおりの一般信仰などを参照して作成され、法華経に付加されていったものであろう。そういうわけで、妙法華経のように嘱累品が神力品の次にあるのが本来の形で、他の諸本は、薬王品以下の付加にともなって、結びの体裁をなしている嘱累品を最後に移したと推定される。

以上から、細かい内容の点では検討を要するとして、少なくとも形の上では、羅什の訳出当時の妙法蓮華経が最も古いスタイルを伝えているといえよう。すなわち、序品第一から嘱累品第二十一までが法華経の原形ということである。そのさい、梵・蔵・正・添に見られる薬草喩品の後半、正のみに見られる五百弟子受記品・法師品の前半、および提婆品は除かれる。付加・増広部分の年代的順序については、本田義英博士が『法華経論』において、薬王菩薩本事品以下の六章、薬草喩品の後半、五百弟子・法師両品の前半、提婆品、普門品偈、普門品偈中の阿弥陀頌の順序で列記しており、だいたい、このような順序で付加されていったと見てよかろう。なお付加の六章のうち、陀羅尼品の位置に異動が存しているが、正法華と妙法華とは一致しており、両経ともに、かなり後世の付加と思われる普門品偈を有しないことなどを考えあわせれば、正・妙両経における陀羅尼品の位置（普門品の次）が本来的なものといえよう。

三　法華経の科段と特色

インドにおいては、龍樹の『大智度論』（三世紀）、涅槃経（四世紀）、堅意の『入大乗論』（五世紀）、世親の『法華経論』（同）などに法華経が引用・注釈されたが、法華経・方便品第二を中心として一乗平等の統一的真理（妙法）を明かし、それによって成仏しないと非難された声聞・縁覚の二乗（小乗）も起死回生し、大乗の菩薩と同じように成仏する（二乗作仏）と説いた点に注目し、共通して法華経の特色は普遍平等性にあるとした。そこには、普遍性の尊重というインド的思考が関係していると思われる。

中国においては、経典を科段に分けて（分科）、特色づけることがしきたりとなり、法華経については、安楽行品第十三（第十四）と従地涌出品第十四（第十五）との間で分段することが伝統的となった。まず、羅什門下の道生（—四三四）は、『妙法蓮華経疏』において序品第一から安楽行品第十三までを「三因を明かして一因と為す」とし、従地涌出品第十四から嘱累品第二十一までを「三果を弁じて一果と為す」として因果二門に分けた。なお、薬王品以下は「三人を均くして一人と為す」と釈しており、流通分にあたるといえよう。ここで、因門は方便品を中心として一乗の真理（法）、果門は如来寿量品を中心として常住の生命（仏）を明かすものとされる。

次に法雲の『法華義記』であるが、そこでは、序品の一品を序分、方便品から分別功徳品の弥勒の

偈頌までの十四品半を正宗分、それに続く長行から経の最後までの十一品半を流通分とし、さらに、それぞれを二区分した。正宗分については、方便品から安楽行品までの十二品を「開三顕一、以て因の義を明かす」とし、従地涌出品から分別功徳品の弥勒偈頌までの二品半を「開近顕遠、以て果の義を明かす」としている。正宗分のこのような二区分法に、道生を受けついだものが見られる。ちなみに、「開三顕一」とは、声聞・縁覚・菩薩の三乗を統合して一乗の法を明かすという意であり、「開近顕遠」とは、現実の釈迦は本来は永遠の仏であることを明かすという意である。なお、それぞれ二区分したものをさらに細分し、結果は三段・六段・二十四段の三重の分科となっている。

智顗の『法華文句』では、法雲と同様に全体を序・正・流通に三分段（一経三段）したが、改めて序品から安楽行品までを迹門、涌出品から以降を本門とし、その上で本迹二門それぞれを序・正・流通に三分段（二経六段）した。細分・繁雑化した法雲の分科法を整理したものといえよう。なお、因門、果門を迹門、本門と呼びかえたのは、両門それぞれに因果の二義が存し、したがって前部を因門、後部を果門と限定するのはおかしいということからである。

三者の分科法は、細かい点では相違が見られるが、共通するところは、安楽行品と従地涌出品との間で一線を引いたことである。これは、できあがった法華経を全体的にながめて区分づけたものである。ところで、近年、法華経の成立史的研究が進むにつれ、その観点から新たな区分づけが試みられるようになった。まず認められたことは、前項にふれたように、提婆品を除いて序品から嘱累品までが法華経の原形ということである。つまり嘱累品と次の薬王品との間で一線を引くことである。ここから進んで、その原形部分においても、さらに区分づけが試みられるにいたった。種々の区分づけが

なされ、いまだ定説となったものはないが、私見としては、布施浩岳博士が『法華経成立史』の中で、授学無学人記品第九と法師品第十との間に区切れを入れたことに賛意を表したい。

授学無学人記品第九と法師品第十との間で一線が画されることについて、注目すべきことがらの一つに、人記品までは対告衆が声聞であるのにたいし、法師品以下では菩薩となっていることがあげられる。ただし、序品第一だけは菩薩となっており、これは、法師品以下の成立部類に属するものといえよう。なお、布施博士は随喜功徳品第十七を前後連絡の上から人記品までの部類に属せしめているが、序品と同じく対告衆が弥勒菩薩であり、博士の見解とは逆に、序品を法師品以下の部類に移し、随喜功徳品は、そのままの位置にとどめるべきであろう。

さらに注目すべきことは、法師品以前では個人成仏についての「授記」（vyākaraṇa）が説かれているのにたいし、法師品からは社会布教の「付嘱」（nikṣepa）ないし「嘱累」（parindanā）が強調され、加えて、法師品には「如来使」（tathāgata-dūta）、「如来所遣」（tathāgata-saṃpreṣita）、「仏所使」（preṣito loka-nathena）などの語が見え、勧持品第十二や嘱累品第二十一には仏の勅命あるいは使命（ājñapti, ājñā, preṣaṇa）が説かれている。それにともなって、末世（paścima kāla, paścāt-kāla）における殉教・忍難の菩薩行が唱道され、そのモデル・ケースとして、従地涌出品第十四に上行（Viśiṣṭa-cāritra）等の四菩薩を首とする地涌の菩薩たちが登場し、如来神力品にいたって地涌の菩薩たちに、嘱累品にいたって他の一切の菩薩たちに法の付託（parindanā）がなされる。

そのほか、菩薩道に関連しての dharma-bhāṇaka（法師）の用語、舎利塔（stūpa）に代わっての経（法）塔（caitya）の主張など、法師品の以前と以後とに一線が画される材料が、いくつかあげられる。

それらの材料にもとづいて結論づけるなら、法師品第十から嘱累品第二十一までは、大乗菩薩道の発揚を主旨としており、その主旨のもとに一グループとなって作成され、授学無学人記品第九までの部分に増補されたといえよう。なお、序品は対告衆が菩薩であり、また dharma-bhāṇaka の語も数度にわたって使われており、特に bodhisattva vid-dharma-bhāṇaka（賢明な法師・菩薩、七四偈）のごとき用例も見られ、おそらく、法師品以後が増補されるときに、以前と以後を結合させるために作成され、最初に配置されたものであろう。

こうして、法華経の原形部分についても、法師品の以前と以後とに分けられ、以前の部分は、方便品を基にして三乗統一の一乗妙法を主張し、以後の部分は、それの現実具現としての菩薩行を強調したものと考えられる。以後の部分は以前の部分よりも遅れて成立したものではあるが、法華経の究極的意図は、そこにつきるといえよう。つまり、真理の現実具現としての菩薩行の強調である。注意すべきことは、ここでの菩薩は、三乗の中の菩薩とはニュアンスを異にすることである。三乗の中の菩薩は悟りへ向っての修行者という意味が残存しているが、ここでの菩薩は、逆に悟りの世界から現実へ還帰し、悟りの真理（妙法）の現実実践ないし具現に努める者のことである。従地涌出品第十四において、現実の娑婆（しゃば）世界を往処とする地涌の菩薩たちこそ、釈迦の本来の弟子と明かされたゆえんである。大乗菩薩の精神は、ここに真に発揮されるにいたったといえよう。

法華経は、できあがった形からすれば、従地涌出品の以前と以後とに分ける伝統的解釈が認められるが、成立史的には、法師品から嘱累品までを、菩薩行を強調する一つのグループとして取りだすことが可能である。伝統的には久遠仏を明かしたものとして後半部門の中心とされた如来寿量品も、実

は、この菩薩行を強調したグループに入れて考えられるものである。事実、かぎりなく、たゆることのない菩薩行を通して、仏の久遠が証明されているのである。釈迦の寿命無量（aparimita āyus）を説きつつ、そのあとに、「わたしには、いまなお、かつての菩薩行は成しとげられていず、寿命の量もまた満たされていない」（我本行二菩薩道一所レ成寿命。今猶未レ尽）というところである。

中国の教相判釈（きょうそうはんじゃく）（五、六世紀）においては、法華経の前半の特色である統一的真理（一乗妙法）にたいしては賛嘆し、法華経を万善（まんぜん）同帰教と規定したが、後半の特色である永遠の仏（久遠釈迦）については、菩薩行が尽きないという右のことばに理解がいかず、それは仏の永遠性を限定づけるものであり、その点で法華経は不完全な教え（未了義教）であると評した。そうして、仏性（ぶっしょう）・如来蔵（にょらいぞう）や法身（ほっしん）常住など、時間・空間を超越した形で永遠を説き明かした涅槃経こそは完全な教え（了義教）とみなし、常住教と規定しつつ、法華経の上にすえるにいたった。法華経の一乗妙法を絶対の真理と賛嘆した光宅寺法雲も、久遠（くおん）釈迦の説については同様の見解に立ち、結局は涅槃経に席を移すにいたった。いずれも、菩薩行の強調という原典の成立史的観点からの特色に思いがいたらなかった結果といえよう。

さきの菩薩行が尽きないというただし書きは、釈迦の永遠性を限定づけたものではなく、菩薩行をなす現実の釈迦にこそ、永遠な仏の生きた姿が見られるということである。一般的にいえば、現実における菩薩行を通して、永遠の生命は生きてつかまれるということである。そういうことで法師品から嘱累品にかけて、有限な、しかも苦難に満ちた人生に生まれあわせた意味を明らかにしつつ、忍難殉教・慈悲利他の菩薩行に励むことが説きすすめられ、その典型として地涌（じゆ）の菩薩（従地涌出品）が、そのモデル・ケースとして常不軽（じょうふきょう）菩薩（常不軽菩薩品）が説き示され、しめくくりとして、神力品・嘱

累品で菩薩へ布教の使命が付与（付嘱・嘱累）されるにいたる。
以上、伝統的立場と成立史的観点とを合わせて結論すると、宇宙の統一的真理（一乗妙法）、久遠の人格的生命（久遠釈迦）、現実の人間的活動（菩薩行道）が法華経の三大特色といえよう。これらは大乗仏教の三要素（三宝）をなすもので、古来、宗派の別なく、法華経が鑽仰されたゆえんである。

四　法華思想・行事・文芸

法華経鑽仰の一つとして法華思想の体系化があげられるが、手始めに法華経にたいする注釈がなされた。インドでの法華注釈書としては、世親の『法華経論』（五世紀）が存するが、中国では、羅什訳の法華経に基づいて、数多くの注釈書や思想体系書が著わされた。現存するものとして、道生（―四三四）の『妙法蓮華経疏』、光宅寺法雲（四六七―五二九）の『法華義記』、天台智顗（五三八―五九七）の『法華文句』『法華玄義』『摩訶止観』、三論宗の祖である嘉祥吉蔵（五四九―六二三）の『法華義疏』『法華玄論』『法華統略』『法華遊意』、法相宗の祖である慈恩窺基（六三二―六八二）の『法華玄賛』があげられる。なかでも、天台智顗の『法華文句』『法華玄義』『摩訶止観』は、法華解釈論・法華思想論・法華実践論とみなしうるもので、古来、法華（天台）三大部の呼称のもとに珍重され、日本の近世末にいたるまで、宗派の別を問わず、三大部にたいする注釈がなされた。
天台智顗の直接の意図は、統一的真理（一乗妙法）を明かした法華経によって仏教の諸経・諸思想を

総合・統一し、教判論議に終止符を打つにあった。つまり、統一仏教の樹立である。この統一仏教の樹立は、さらに総合・統一的な世界観・人生観の確立ともなった。世界観としては、一念三千論（『摩訶止観』巻第五上）があげられる。ミクロ（極小、一念）の世界とマクロ（極大、三千）の世界が一乗妙法という統一的真理に貫かれて相即相入し、渾然一体となっていること、極微の一念に三千の全宇宙が満ち満ち、三千の全宇宙に極微の一念が満ち満ちていることをいったものである。ここで三千という数であるが、まず宇宙の諸存在は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏の十界に分けられる。極悪の地獄から極善の仏界へと諸存在を段階的に配当したものである。ところで十界は別々にあるのではなく、相関係しあっている。つまり、十界のそれぞれに十界がそなわっており（十界互具）、数でいえば、百界となる。次に法華経・方便品第二（羅什訳）には、すべての事物が相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等の一〇個の型で生じ、動いていくと説かれ、各一〇個には「是の如き」という訳語が冠せられているところから、十如是と呼ばれる。これを百界に掛け合わせると、千如是となる。さらに一つの存在を取りあげてみると、主体（衆生世間）と環境（国土世間）と、それらを構成する物心五要素（五陰世間）の三つ（三種世間）が考えられる。この三種世間を千如是に掛け合わせると、三千という数が出てくる。要は宇宙の全存在を総括したものであり、一念三千は、全体宇宙の織りなす姿を巧みに描きだしたものといえよう。それについて、方便品第二には、羅什の訳として「諸法実相」と表現されており、これを現代的にいいかえれば、宇宙実相ということになろう。日本で改めて法華思想の体系化に努めた日蓮（一二二二—一二八二）は、その宇宙像を十界曼荼羅という形に図示し、法華経を童話や詩に盛りこんだ宮沢賢治（一八九六—一九三三）は、『農民芸術概

論綱要』の中で、「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう」と訴えた。法華経を通して、無限宇宙への自己投入をすすめたものである。

天台智顗における統一的な人生観としては、理想と現実との統合ということがあげられる。具体的現実（事）に即して理想としての真理あるいは世界を見るということで、『法華玄義』に「即事而真」とか「即事顕理」と説かれている。法華経・如来寿量品第十六の久遠釈迦についても、これがあてはめられる。すなわち、現実の釈迦に即して永遠なる仏の理想像を見るということである。われわれの生きかたにあてはめれば、現実離れした理想主義ではなく、善悪・苦楽の相交わる現実に立脚しつつ、理想の善・楽を求めるということである。天台智顗は、「悪によって善あり、悪を離れて善なし」「悪はこれ善の資なり。悪なければ、また善もなし」（『法華玄義』巻第五下）とて、善悪相資を主張し、進んでは、極善の仏にも本性として悪（性悪）があると説くにもいたる。現実における善と悪の拮抗に、積極的な意味を与えたものといえよう。天台智顗の場合は、善と悪、理想と現実の統一ということが基調となっているが、のちにふれるように、菩薩行という法華経の第三特色から、そのような現実に生きる意味を見いだしたのは、日蓮である。

日本における最初の法華注釈書としては、聖徳太子（五七四―六二二）の『法華義疏』があげられる。『勝鬘経義疏』『維摩経義疏』と合わせて『三経義疏』と呼ばれるものである。光宅寺法雲の『法華義記』が参照されているが、注意すべきことは、「私釈少しく異り」とか「今、之を須ひず」とて、現実肯定の日本的立場から解釈を変えたり、取捨選択を行なっていることである。ちなみに、中国も日本も、ともに現実中心といえるが、中国の場合は実際的現実の重視ということで、天台智顗の法華思

想にも、その影響が見られる。日本の場合は四季の自然と一体となった生活が営まれ、ひいては、生まれたままの自然な心情が尊ばれ、自然に与えられた現実に順応するにいたった。つまり、自然順応に端を発して現実順応となり、さらに現実肯定へと進む。そういう意味での現実中心で、これが仏教の日本的変容をもたらすことになる。『法華義疏』に、その一端がうかがえる。

平安時代の初めには最澄（七六七―八二二）が出現し、日本における天台法華宗の確立に努めるが、最澄が根拠地とした叡山から次々に学僧が輩出して最澄のあとを継ぎ、また、法然・親鸞・道元・日蓮など、いわゆる鎌倉新仏教の祖師たちも、一度は叡山で勉学した。そのうち、特に法華経を信奉したのは道元と日蓮で、道元（一二〇〇―一二五三）は曹洞禅の祖であるが、大著の『正法眼蔵』に最も多く法華経を引用しており、また、死に瀕する病気におちいったとき、法華経・如来神力品第二十一の「若於園中。若於林中。……諸仏於此。而般涅槃」の句を部屋をめぐりながら唱え、唱え終っては、その部屋を妙法蓮華経庵と名づけたという。なお、自然の風光にことよせながら、法華経を歌によみこんでもいる。自然順応という日本的特色が、道元の法華経観にも見られるといえよう。『正法眼蔵』にも、しばしば自然の風光が取りこまれている。

日蓮（一二二二―一二八二）は、天台法華教学を学びつつ、改めて法華思想の体系化に努めたが、その法華経観において注目すべき点は、伊豆流罪（四十歳）や佐渡流罪（五十歳）などのたび重なる受難を契機として、菩薩行を強調した法華経の第三部門ないし第三特色を読みとり、そこに説かれた忍難殉教の菩薩、特に上行等の地涌の菩薩に自己を擬するにいたったことである。そこから、苦難に満ちた現実を生きることに、積極的な意味を見いだすにもいたる。そういうわけで、伊豆流罪中の遺文に

法華経の第三部門が引用されはじめ、それが日蓮独自の法華思想を形成せしむることになった。なお、佐渡流罪から身延退隠（五十三歳）にかけて、人生を静思する機会が訪れ、自然の風光を通して法華経の諸法実相を観照するようにもなる。進んでは、自然と人生・人間との一体を強調するにもいたる。『事理供養御書』（五十五歳）に、諸経では、「心のすむは月のごとし、心のきよきは花のごとし」とて、心のたとえとして自然の風光が用いられているが、「法華経はしからず、月こそ心よ、花こそ心よと申す法門なり」という。法華経では、自然の風光そのものが心だという主張である。この点は道元の場合と同様に、自然順応を基調とする日本的思考に法華経が受容されたものといえよう。

日蓮の法華思想は、門下たちに継承され、日蓮教団の発生となったが、一般への影響として特記すべきことは、室町時代（一五世紀）において、京都の自治組織を持った町民（町衆）の大半が、日蓮法華の信者となったことである。その京都町衆によって、文化も形成されていった。それを法華町衆文化と呼ぶ。美術・工芸で有名な本阿弥光悦（一五五八―一六三七）は、リーダー格の法華町衆の一人である。京都町衆と日蓮法華信仰とが結びついた理由であるが、法華経における現世の営みの説に加えて、日蓮における忍難殉教の現実活動が、営利のために刻苦・勉励する商工業者としての町衆の精神に合致したことが考えられる。室町時代の法華町衆文化は、近世の町人文化へとひきつがれていった。近世末にいたるまで、文芸の世界における有名人の多くが日蓮法華の檀信徒であることが、それを物語っている。

古代にもどって、一般における法華経の受容状況を概観すると、信仰の功徳を説いた部分にポイントを置いて、鎮護国家・除災招福のために法華経を用いた。金光明経・仁王経とともに、護国三部

経の一つとなったゆえんである。行事としては、平安時代に入って、法華八講・十講・三十講や法華懺法などの法会が催されるにいたる。法華八講とは、法華経八巻を朝夕一巻ずつ四日間にわたって講読することで、七九六年に石淵寺の勤操(三論宗)が始めたと伝える。七九八年には、最澄が法華経八巻に開経の無量義経と結経の観普賢経を加えて、法華十講を催した。法華三十講とは、法華経二十八品に開経・結経を加えて三十の法座としたもので、平安時代の中期あたりから見えてくる。後期になると、法華百座も行なわれた。法華懺法とは、法華経に基づいて自己の罪を懺悔する儀式で、法華三昧堂を中心として行なわれた。滅罪のために法華経を用いることは、すでに奈良時代に見られるところで、七四一年、聖武天皇が国ごとに国分寺・国分尼寺を置くことを命じたが、国分寺は金光明四天王護国之寺と号し、金光明最勝王経各十部が納められ、それにたいして、国分尼寺は法華滅罪之寺と号し、法華経各十部が納められた。法華経・提婆達多品第十二に、釈迦にそむいた極悪者の提婆達多の成仏と、八歳の龍女がたちまちに成仏したことが説かれており、そこから悪人成仏あるいは女人成仏の典拠とされたことによる。

　法華経の書写も功徳あるものとして盛んになされた。法華経には、しばしば受持・読・誦・解説・書写のいわゆる五種法師の功徳が強調されており、それにのっとったものである。書写の最初は、七四八年、光明皇后が先帝の追善供養として法華経を千部書写させたことにある。これがのちの法華千部会の起源ともなった。平安時代になると、写経は一種の芸術のごときものとなり、色紙を使ったり、下絵を描いたり、金箔を用いたりするなど、いわゆる装飾経と呼ばれるものが作られるにいたる。装飾経の多くは法華経関係で、有名なものとしては、久能寺経・平家納経(厳島経巻)・扇面法華経など

があげられる。類似の秀作として鎌倉初期のものであるが、慈光寺経や長谷寺蔵のものが存する。法華経の書写に関連して如法経といわれる行事もおきた。法華経を書写して筒に入れ、山などに埋めることで、慈覚大師円仁（七九四—八六四）が始めたといわれる。のちには、書写の法会や書写された経典をも如法経と呼ぶにいたる。そのほか、法華経の説相を図絵に表わした法華変相（法華曼荼羅）も作成された。

法華経は、また説話にも盛んに取り入れられた。説話とは、神話・伝説・民話・童話などを総称したもので、それを文章化したのが説話文学である。そのうち、宗教を題材としたものに、特に教訓的な要素が多く含まれており、日本では、平安初期の八二二年、僧景戒が著わした『日本霊異記』三巻が最も古いものである。その後、源為憲の『三宝絵詞』三巻（九八四）、編者不明の『今昔物語集』三一巻（一二世紀初め）と続く。これらの中に、法華経に生きた人びとの話が、かなり語られている。また、法華経の書写や読誦の功徳によって救われた話も、たびたび出てくる。なお、慶滋保胤の『日本往生極楽記』一巻（九八六）、それを補った諸種の往生記（一二世紀初め）にも、実在・伝説とりまぜて法華経を受持した人びと（持経者）のことが紹介されている。鎮源の『大日本法華経験記』三巻（一〇四三）は、もっぱら法華経に生きた人びと一二九人の伝記を集めたものである。

法華経を歌によむことも、大いに流行した。いわゆる釈教歌・法文歌のほとんどは、法華経に関するものといっても、いいすぎではない。法華経を一章ごとに歌に詠み、それを編集したものもあり、その代表的なものが選子内親王の『発心和歌集』である。選子内親王は村上天皇の皇女で、平安中期の歌人の一人となった。同和歌集は五十五首からなるが、そのうち、三十一首が法華経二十八品（化

城喩品のみ二首）と開結二経を詠んだものである。後白河法皇が編集した歌謡集に『梁塵秘抄』（一二世紀末）があり、今様式に四句からなる法文歌二百二十首のうち、法華三部経の各章を詠んだものが百十七首あり、過半数をしめている。そのほか、雑法文歌にも、法華讃歌が十数点入っている。これらは、民間において盛んに口ずさまれたもので、当時の一般の人びとの法華信仰の姿が思い浮かんでくる。

紫式部の『源氏物語』（一〇〇五年ごろ）のような一般の文学作品の中にも、法華経に関することがらが頻出してくる。読誦・書写・法会など法華経に関する行事だけではなく、思想的に法華経が取りあげられており、そこには法華経に基づいた天台教理が影響していると思われる。事実、源氏天台一体説がおきたところである。著者の紫式部みずから天台法華の教理を学び、奥義を究めたといわれる。その後も、しばしば法華経が文学作品や文芸理論の材料となり、中世へと奉持されていった。中世に例をとれば、藤原俊成（一一一四―一二〇四）・定家（一一六二―一二四一）によって中世歌論が大成されたが、その歌論の樹立にさいして法華経ないし天台法華の教理が柱となった。たとえば俊成の『古来風体抄』（初撰本、一一九七）に、法華経の実相説や観普賢経（結経）の実相観、さらには天台止観が和歌の深き道につながると論ぜられている。文学作品としては、たとえば能の脚本である謡曲に、しばしば法華経の諸品が引用され、また題材にもなっており、これらによって一般の人びとが法華経に心をよせた様子が知られよう。

（田村芳朗）

五　法華経版経について

1　『妙法華』の本文系統

法華経漢訳諸本のうちで、中国においても、またわが国においても、現在に至るまで最も広く流布したのが、羅什訳『妙法蓮華経』である。したがって、今は漢訳諸本のうち直接かかわりのある『妙法華』に限って述べることにする。

『妙法華』は、現在わが国で行なわれているものは二十八品八巻本であるが、もとは二十七品七巻で、品数・調巻に変遷があったことは先述のとおりである。[1]わが国に最も古く伝来した聖徳太子所持経と伝えられているものも七巻本であった。[2]しかし、また同時に八巻本も伝わっており、[3]奈良時代には七巻、八巻両様の調巻のものが伝わっていた。

しかし、ことは経の体裁としての調巻の問題のみにとどまらず、長い間の伝承過程のうちに、経の本文そのものも少しずつ違ったものが伝えられてきており、その結果、この『妙法華』にはいくつかの伝承を異にする本文系統が存在することになった。たとえば例を挙げると、中国の宋・元・明本、朝鮮の高麗（こうらい）本、わが国の春日本（かすがぼん）などである。このように幾通りかの本文系統が生じた所以は、経が印刷技術が発明されるまでは専ら書写によって伝えられてきたことに由来すると思われるが、印刷技術

が発明された後でも、経が開版摺写される際には、各版ごとに、ある特定の書写経を底本として選んで印刷に付すわけであるから、その特定の本文系統のものがそのまま伝えられるわけである。もっとも、『妙法華』の場合、本文の相違といっても、多少の字句、用字の相違であって、経の文意が各系統の本文によってそれぞれ相違しているというような大きな違いのものではない。

2　中国における法華経の開版

中国では、すでに七世紀末には印刷技術が発明され、九世紀頃には個々の経典類が印刷されていたというが、現在、その当時開版され、印刷に付された『妙法華』が遺っていないので開版の有無は不明である。現在それが跡づけられるのは、大蔵経の中に一経として入蔵しているものについてである。すなわち、中国では北宋代になって初めて大蔵経が刊行されたが、『妙法華』はその大蔵経中に入蔵している一経として開版されている。その大蔵経開版の嚆矢は、北宋代、太祖の勅版による蜀版大蔵経（九七一—八三）である。この蜀版を承けて、朝鮮半島の高麗では成宗の十年から顕宗の二年（九九一—一〇一一）にかけて高麗版大蔵経が開版された。しかし、後にこの時の板木は元軍の兵火によって焼失したので、高宗の時に再雕が企てられ、高宗の三八年（一二五一）に、初雕本に契丹版大蔵経や古写経を対校して厳密な校訂を施した再雕本が完成された。これを海印寺版大蔵経とも呼び、わが国の大正新脩大蔵経はこの海印寺版の高麗大蔵経を底本としている。

中国の宋代には、さきの蜀版のほかに福州東禅寺等覚院版、福州開元寺版（福州版、閩本）、湖州円覚寺版（宋版、思渓蔵）、磧砂版などが開版されており、さらに南宋から元代にかけては、普寧寺版大

蔵経（元本。思渓蔵にもとづく。一二九〇年）が開版された。元代には、このほか世祖の勅版である弘法寺版（北宋の蜀版系の金蔵を受けたもの）も開版されている。

明代には勅版の大蔵経として、太祖の時（十四世紀後半）の南京大報恩寺版大蔵経（南蔵）と、成祖永楽帝の時（十五世紀前半）の北京勅版大蔵経（北蔵）の二種があり、私版に武林版（現存せず）と明末紫柏真可らの万暦版大蔵経（明版）二種がある。特に後者は方冊版で広く流布し、わが国にも多く伝来した。

清代には雍正帝の時（十八世紀前半）の龍蔵本がある。

以上、中国、朝鮮における大蔵経の刊行について略述したが、『妙法華』はこれらの大蔵経中の一経として開版されてきており、このうち、高麗版のものは大正新脩大蔵経の底本となり、宋代の宋版（思渓蔵）と、それをうけた元本、及び明代の万暦版の三版中のものはそれぞれ、大正新脩大蔵経のなかで、宋本・元本・明本として対校本として使われているものである。そして、宋・元・明の三本は同一系統のものであるが、高麗本はそれとは又別系統のものとなっている。

3　わが国における法華経の開版

一方、わが国においては、大蔵経の開版刊行というような大がかりな事業は江戸時代に至って天海版が刊行されるまで（一六三七—四九）、行なわれたことはなかった。そのかわり、個々の経典類は、版経が実用化されるようになった鎌倉期以降に多く開版されてきた。それら開版された個々の経典類のうちで最もその数が多いのが法華経である。わが国の法華版経の研究については故兜木正亨博士に

よってすぐれた成果が出されているので、[4]今はその成果を踏まえて、わが国における『妙法華』開版について略述してゆくことにする。

わが国で、本経が開版されるようになったのは、平安中期の藤原時代からである。この時代には、ある経を一定部数摺写して故人の追善に資したり、病気平愈を祈念したりすることが行なわれるようになって、摺写供養経があらわれた。本経もその摺写供養経として開版されるようになったのが開版のはじめで、それ以前は専ら写経が行なわれていた。その写経もすべてがみな同一の本文を有するものではなくて、写経本相互間でそれぞれ本文の字句や用字の相違がみられるもの、すなわち本文系統を異にするものであった。本経の版経もそのことを反映して、それぞれ本文の系統を異にする版経が開版されていた。しかも、それらの版経は、十二世紀初頭までにはすでに大陸から伝来していた蜀版、東禅寺版、開元寺版や高麗版の版経とは版式の上でも書風の上でも異なっており、また本文系統も異なるものであった。

鎌倉時代は経典の開版事業が盛んに行なわれて版経が写経に完全にとってかわった時代であった。この時代には南都奈良の寺院を中心に各地で多くの経典が開版されたが、そのうち興福寺で開版されたものを春日版と呼んでおり、[5]この春日版は中世印刷文化史上最も精彩に富むものである。

法華経はこの時代に開版された経典類のなかで最も数多く開版されているが、そのうち重要なのが春日版法華経で、その春日版法華経のうちでもとりわけ後世に大きな影響を与えたものが興福寺僧心性（しんしょう）の開版した心性版である。心性は法華経版経の普及に最も力を注ぎ、存命中に十二度の重版、没後も含めて南北朝代までに十五度の開版が行なわれている。その結果、心性の開版した春日版法華経は

法華版経中最もその数多く普及することになった。この心性の開版は、やはり同じ興福寺僧弘睿が嘉禄元年（一二二五）に開版した春日版法華経を直接に承けて開版したものであった。兜木博士は、現行法華経から溯及してゆき、わが国における法華経の定本はこの心性開版の春日版法華経であることを明らかにされた[6]。これは博士の大きな功績である。

くり返し重版を重ねてその普及度の最も大きかった心性版法華経の出現によって、鎌倉期以降の法華経はその版式（春日版）、本文系統とも心性版を受けたものが大勢を占めることになったが、しかしそれ以外の本文系統のものがすべてなくなってしまったというわけではなく、室町や江戸時代においても心性版とは異なった系統の本文をもつものが開版されている。

南北朝代には京都五山を中心に新しい仏典類の開版事業がおこされて、大陸の影響をうけた五山版が開版された。他の経典が唐版の復刻本として開版されるなかで、法華経はやはり版式、本文とも心性版を受けついだものが開版されており、心性版法華経がいかに影響力の大きなものであったかを物語っている。心性版は、その先駆となる弘睿版にしろ、その本文はもともとわが国の奈良朝期以降の写経本の一本をとって開版したものであるから、大陸の宋版や朝鮮の高麗版とも版式、本文系統を異にしているものである。ただ現在、この弘睿版・心性版がいずれの写経を原本として開版したのであるかという点についてはこれを知る手がかりはない[7]。

南北朝代で法華経開版について特筆すべきは和点版の出現である。その一は応安五年（一三七二）に開版された希杲版（嵯峨本）で、本文の右傍にカタカナの音読点を付し、さらに四声点と句読を付したものである。いま一つは、嘉慶元年（一三八七）の心空版である。これは音読仮名はないが、返

り点と送り仮名を付し、句点を施したものである。それまでの法華経版経は、いわゆる白文に句読なしのものであるから、この二種は日本化された新しい版経ということができる。[8]本文は春日版のものである。

これ以後、室町、江戸期を通じて法華経は数多く開版されてきたが、各時代を通じてその主流は春日版法華経であり、この春日版法華経がわが国法華経の定本のようになった。

江戸時代にはいくつかの法華経開版が行なわれているが、それらはほとんどすべて春日版を基礎とし、それに音韻学によって本文の用字や読み音、訓みを改めたものであった。法華経は古くから現在に至るまで読誦されてきており、真読（音よみ）、訓読（書き下しよみ）両様について古くからの幾通りものよみの伝承がある。江戸時代にはこれらのよみの混乱があり、音義書の流行と相俟って、経のよみを正すという目的で開版が行なわれたものである。

江戸初期の日蓮宗僧、心性院日遠（一五七二―一六四二）は音義をよくし、『法華経随音句』『法華訳和尋跡抄』の著書がある。彼は慶長年間に春日版を原本として、その本文の行間上下欄に論疏の章句、諸点本によって改正した返り点、訓点、四声点を付した文段法華経を作り、それを元禄年間以降に『文段妙法蓮華経並開結』十巻として開版した。[9]

続いて元禄五年には、天台宗の僧慈海宋順が春日版でなく明版と考えられているものを原本にし、それにところどころに仮名を付した慈海版法華経を刊行。またほぼ同時期に日蓮宗の遠沾院日亨（一六四六―一七二一）と久成院日相（一六三五―一七一八）とによってそれぞれ新版が開版された。日亨は『説文解字』によって法華経本文の文字を改正し、八巻に開結を加えて十帖とし、さらにその改正し

た文字の単字を序品から勧発品二十八までと開結二経の単字とをまとめて一帖分となし、『改正・妙法蓮華経開結三経文字』十一帖として元禄十年（一六九七）に刊行した。この版経の各帖末には校異の内容を載せている。

日相は、先の日亨とその師（寂遠院日通）を同じくする法兄弟で、特に音義に通じており、『法華音義補闕』五巻などの音韻に関する著作がある。彼は仮名つき本の嵯峨本（希杲版法華経）にもとづき、その嵯峨本の音の誤りを正すべく、日遠の『法華随音句』や自らの『法華音義補闕』、さらに他の音韻書などによって音を改正して日相板『妙法蓮華経並開結』として刊行した。[10]この版経は全文仮名つきで、音点と四声点を付したものであって、嵯峨本の仮名音の誤りを正し、また四声点を改めたものであった。この日相本は現在でも日蓮門下において音読読誦の際の一指南となっている。

以上のほかに、幕末に伊勢西来寺の天台僧真阿宗淵（一七八六―一八五九）が天保六年（一八三五）に開版した山家本法華経八巻がある。これは宗淵が伝教大師真筆になる経を開版したものを復刻したと伝えられているが、兜木博士の研究によれば、[11]事実は心性版法華経を原本とし、それに慈覚大師の点を付して、天台正統の読みを確立しようとしたものだという。この版経には経の各文字に四声点、本文のところどころに音読み点が付されているものである。

以上のように江戸時代に開版された新版は、経のよみと文字の改正とに重点を置いて、それを正そうと意図されたものであった。経の読みは、読誦者にとっては大きな問題で、現在通用している読誦用の経本はほとんどこの江戸時代のものを基礎としている。

4　現行本法華経について

ここで現行本というのは、現在行なわれ流布している本という意味である。現在、実際に読誦用などとして刊行されているものは多種多様あるが、その主なものを列挙してみると、

(一)頂妙寺蔵版『妙法蓮華経』改正訓点句読清濁、八巻本。(平楽寺書店)
(二)日蓮宗大教院蔵版『妙法蓮華経』復刻版、八巻本。明治十三年に新居日薩が訓読を改正して開版したものの復刻版。(ニチレン出版、昭和六十二年)
(三)日相本『妙法蓮華経並開結』洋本一冊本。(京都本満寺発行、昭和四十五年)
(四)『妙法蓮華経』乾坤二巻本。(平楽寺書店、昭和三年)
(五)『真訓両読妙法蓮華経並開結』洋本一冊本。(平楽寺書店、大正十三年)
(六)『法華経』上・中・下三冊本。(坂本幸男・岩本裕訳注、岩波文庫、一九六七年)

などがある。(一)は日蓮宗寺院に普及しているもので、上妙院日瞻(にっせん)が訓点を施して天保五年(一八三四)に開版。送り仮名つき、ところどころ濁音につけられた声点がある。この声点は古くからつけられた声点によっている。(二)は、新居日薩(一八三〇—一八八八)が、その師の優陀那日輝(うだなにちき)(一八〇〇—五九)が訓読を重視したのをうけ、草山元政(げんせい)(一六二三—六八)の印本を最上として、それに諸本を参校して折衷冊補したものである。[12] (三)は先述の江戸元禄年間に久成院日相が開版した仮名付本の復刻版である。(四)は仮名付本で、活字印刷。この四番目以降のものはすべて活字本である。(五)は上段に真読、下段に訓読を配置したもので、真読は日相本に、訓読は頂妙寺版によっている。(六)は右頁上段に『妙法蓮華

経』本文、下段に訓読書き下し、左頁に梵文訳を対置したもの。『妙法華』本文は春日本により、書き下しは坂本幸男博士の独自の手になるものである。
以上は手許にあるもののみを挙げたが、㈥を除いて㈡㈣㈤の三種はいずれも江戸時代開版の㈠㈢か、あるいはやはり他の江戸期開版のものによっている。いずれも本文は春日版にもとづいたものである。

註

① 二十八品を有する法華経の現存最古のものは隋代の房山石刻経であるという。兜木正亨『法華版経の研究』二〇九頁(昭和二十九年、平楽寺書店)。
② 『御同朋経』七巻一部本。長寿三年(六九四)に書写された唐経。
③ 太子経と称される天王寺本八巻経。
④ 兜木正亨前掲書、及び『法華版経の研究』『法華写経の研究』『法華経と日蓮聖人』(『兜木正亨著作集』三巻、昭和五十七年―六十年、大東出版社)がその成果としてある。
⑤ 春日大社に奉献されたのでこの名がある。広義には、興福寺で開版されたものと同一の版式のものを春日版と呼ぶ。
⑥ 兜木正亨『法華版経の研究』二二〇―三頁。
博士は唐招提寺蔵の心性第四度版法華経を『敦煌目録対照定本法華経八巻　春日版』として出版された(霊友会、一九七八年)。
⑦ 兜木博士は、春日版法華経の原本を、中国北方の唐代の系統をひく一写本と推定されている。同前書二二〇頁。

⑻ これ以前にすでに藤原時代に漢字カナまじり本の仮名本が出現しており、仮名本書写経の完本として現存する鑁阿寺本（一三三〇年）は有名。仮名版の開版は鎌倉期に行なわれている。
⑼ これは昭和四十五年、京都本満寺によって復刻されている。
⑽ 昭和四十五年、京都本満寺によって復刻。
⑾ 兜木正亨『法華版経の研究』一三六―八頁、及び「法華経開版史上における宗淵上人の業績」（『兜木正亨著作集』第一巻、四四一―四五五頁）。
⑿ ㈡の跋文で日薩は、法華経版経中、草山元政による草山印本（瑞光院版）を最正のものとなしている。瑞光院版は、元政在世中に平楽寺書店初代村上勘平衛が開版したもの。京都を中心に関西一円に流布した。現在その版木が京都伏見の瑞光寺に遺っている。

（藤井教公）

凡例

一　本書の依用したテキストは、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』の大正新脩大蔵経巻九所収本である。大正蔵経本は、わが国の法華経の定本とされる春日本とは本文系統を異にしているが、次の二点の理由からこのテキストを採用した。第一に、本書の性格が大正蔵経所収の主要経論を解説する一書であるということ。第二に、わが国で現在一般に刊行されている『妙法華』がすべて春日本によっていて大正蔵経本はあまり知られていない。それゆえここで大正蔵経本を出して春日本との相違を示しておくことは意義あることと考えたこと。以上の二点である。

二　そのため、本文には春日本との対校記を付した。原文表記上、テキストに付されている返り点はこれを省き、句点は現行流布本を参照し、一部を改めて付した。春日本は心性第四度版である兜木正亨『敦煌目録対照定本法華経八巻　春日版』を使用した。

三　書き下し文は、主に頂妙寺版の訓みにもとづき、一部これを改めた。従来の訓みを改めた部分については、その理由根拠を語注において示した。ただし、主格と呼格の区別を明瞭に区別するため呼格の格助詞「よ」を入れたり、主格を示す格助詞「は」を一部入れたりしたような場合は、これを一々断ってはいない。

四　現代語訳は原文に忠実であることを第一に心がけた。（　）の部分は、意味を通りやすくするための筆者

の補いである。仏教用語もなるべく現代語訳するように心がけたが、わかりやすいものや、訳すと冗長になるものは一部そのまま用いた。

五　偈文の訳に付した偈番号は、サンスクリット本（『南条・ケルン本』）に一致させたものである。羅什は偈文について原則として一偈を四句で訳しているが、時に六句、五句、三句、二句と破格の句数で訳す場合があり、一偈の範囲が判然としないことが多い。そのためにサンスクリット本を基準にしてその範囲を決定した。それ故一偈に⒁・⒂というように二つ以上の番号のあるものは、羅什訳のその一偈がサンスクリット本の⒁、⒂の二偈に対応するという意味である。

六　解説や語注においてサンスクリット本（梵本）という場合は、『南条・ケルン本』に依り、SADDHARMAPUṆḌARĪKA Edited by H. Kern and Prof. Bunyiu Nanjo. West Germany, 1970. (Bibliotheca Buddhica X) の頁・行数を挙げた。

本文解説

(1)……妙法蓮華經卷第一……(1)

(2)……後秦龜茲國三藏法師
鳩摩羅什奉……(2)詔訳

(3)序品第一

如是我聞。一時佛住。王舍城。耆闍崛山中。與大比丘衆。萬二千人俱。皆是阿羅漢。諸漏已盡。無復煩惱。逮得己利。盡諸有結。心得自在。其名曰。阿若憍陳如。摩訶迦葉。優樓頻螺迦葉。迦耶迦葉。那提迦葉。舍利弗。大目揵連。摩訶迦旃延。阿㝹樓駄。劫賓那。憍梵波提。離婆多。畢陵伽婆蹉。薄拘羅。摩訶拘絺羅。難陀。孫陀羅難陀。富樓那彌多羅尼子。須菩提。阿難。羅睺羅。如是衆所知識。大阿羅漢等。

(1)……(1)春日本になし。但し、各巻巻頭の章題の下に巻数を表示する数字のみあり。以下同様（*印）。
(2)……(2)春日本になし。以下同様（*印）。(3)春日本は章題の頭に経題を付す。以下同様（*印）。

是の如く我れ聞きぬ。一時、仏、王舎城・耆闍崛山の中に住したまい、大比丘衆万二千人と倶なりき。皆是れ阿羅漢なり。諸漏已に尽して、復、煩悩なく、己利を逮得し、諸の有結を尽して、心自在を得たり。其の名を

阿若憍陳如・摩訶迦葉・優楼頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・舎利弗・大目揵連・摩訶迦旃延・阿㝹楼駄・劫賓那・憍梵波提・離婆多・畢陵伽婆蹉・薄拘羅・摩訶拘絺羅・難陀・孫陀羅難陀・富楼那弥多羅尼子・須菩提・阿難・羅睺羅という。是の如き、衆に知識せられたる大阿羅漢等なり。

〔訳〕このように、わたしは聞いた。ある時、仏は王舎城の耆闍崛山のなかにとどまられ、大勢の比丘達、一万二千人とともであった。彼ら比丘達はみな阿羅漢で、すべての心の汚れを滅し尽し、煩悩なく、自己のさとりという利益を得て、すべての生死の迷いをひきおこす煩悩の束縛を断ち、心に自在を得ていた。彼らの名を、阿若憍陳如・摩訶迦葉・優楼頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・舎利弗・大目揵連・摩訶迦旃延・阿㝹楼駄・劫賓那・憍梵波提・離婆多・畢陵伽婆蹉・薄拘羅・摩訶拘絺羅・難陀・孫陀羅難陀・富楼那弥多羅尼子・須菩提・阿難・羅睺羅という。このような、人々によく知られた、偉大な阿羅漢たちであった。

《如是我聞》 経典の書き出しの定型句。evaṃ mayā śrutam の訳。「我」とは、第一結集の際に経蔵を誦出した阿難をさす。普通、この後に説法の時と処、聴衆（対告衆）が記される。**《一時》** ekasmin samaye の訳。「ある時」の意。近年、諸学者の間でこの句を前の「如是我聞」にかけるか、あるいは後の「仏住」にかけるかで議論がわかれている。今は伝統的解釈に従う。**《王舎城》** Rājagṛha 中インド・マガダ国の首都。現在のパトナのビハール地方、ラジギル（Rajgir）にあたる。この地には法華経説法の場所である霊鷲山や、第一結集の場所であるピッパラ山崛、それに竹林精舎などがある。**《耆闍崛山》** Gṛdhrakūṭa-parvata 霊鷲山、鷲峰山などともいう。山頂が鷲の形に似ており、また鷲が多く棲むのでこの名があるという。山と

いっても、平原にある小高い丘ほどのもので、奇岩が多く、四囲には赤茶けた地に森とはいえぬ密度で樹木がひろがっている。近年は仏跡の整備がすすみ、山頂まで立派な道がついている。《**比丘**》bhikṣu の音訳。男性の出家修行者をいう。これに対して、女性の出家修行者を比丘尼(bhikṣuṇī)という。《**阿羅漢**》原語は arhat. 阿羅漢は単数・主格の arhan の音訳。修行を完成し、究極の悟りに到達した人をいう。もはや学ぶべきものがなくなったので無学といい、世の尊敬を受けるに値する人であるから応供という。如来の十号の一つで、仏の尊称として用いられるが、大乗仏教にあっては、小乗二乗のうちの声聞の到達しうる最高の聖者をさす。そして、この小乗の聖者も大乗の修行者に及ばないものとされ、二乗の今一つの縁覚とともに、仏となることができない者とされた。《**諸漏**》多くの漏。漏(āsrava)とは、漏れ出るものの意で、煩悩の汚れのこと。《**逮得**》「逮」は「及ぶ」。己が利に達し及ぶことを得たの意。《**己利**》己れの利益。すなわち、自らの悟りを究極の目的とする二乗の自利をいい、菩薩の衆生済度を目的とする利他に対す。《**有結**》bhavasaṃyojana 有(bhava)とは迷いの生存、結(saṃyojana)は身心を束縛することで、迷いの生存に束縛されること。《**阿若憍陳如**》Ājñātakauṇḍinya 釈尊の初転法輪を聞いた最初の弟子の五比丘の一人。《**摩訶迦葉**》Mahākāśyapa 大迦葉、大飲光ともいう。釈尊の十大弟子の一人。頭陀第一として知られ、仏滅度の後、第一結集を主宰した。《**優楼頻螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉**》Uruvilvākāśyapa, Gayākāśyapa, Nadīkāśyapa 三兄弟で、もと外道を奉じていたが、ともに釈尊に帰依し、三迦葉と呼ばれた。《**舎利弗**》Śāriputra 身子ともいう。釈尊十大弟子の一人で智慧第一と称される。もと、六師外道の一人、懐疑論者であるサンジャヤ(Sañjaya)に従っていたが、目連を誘って仏教に帰依した。本経では第二章、第三章において二乗の作仏を説くうえで、重要な役割を演じている。《**大目犍連**》Mahāmaudgalyāyana 略して目連ともいう。仏の十大弟子の一人で、神通第一と称される。もと外道を奉じていたが舎利弗に誘われて仏に帰依した。

《摩訶迦旃延》Mahākātyāyana 仏十大弟子の一人。論議第一と称せられる。《阿㝹楼駄》Aniruddha 阿那律ともいう。仏十大弟子の一人で、釈尊の従弟にあたる。不眠の修行の結果、失明したが天眼を得、天眼第一と称せられる。《劫賓那》Kapphiṇa 天文暦数に通じて、知星宿第一と称せられる。《憍梵波提》Gavāmpati 牛王、牛呞等と訳される。過去世に罪あって牛となったのでこの名があるという。耶舎（Yaśa）の四友の一人で、他の三人とともに、鹿野苑で出家。《離婆多》Revata 舎利弗の実弟にあたる。禅定を好んだという。《畢陵伽婆蹉》Pilindavatsa バラモン出身で、その性もと憍慢で他人を軽んじ、呪術をよくして名声を得ていたが、仏に遇ってその呪力を失い、仏に帰依して出家した。《薄拘羅》Bakkula 無病第一で、釈尊入滅後百六十歳で寂したという。《摩訶拘絺羅》Mahākauṣṭhila 大膝と訳す。舎利弗の叔父で、もと外道を奉じて長爪梵志と呼ばれたが、仏に帰依して十大弟子の一人となり、問答第一といわれる。《難陀》Nanda もと牧牛者だったので牧牛難陀と呼ばれる。《孫陀羅難陀》Saundarananda 釈尊の異母弟。浄飯王と摩訶波闍波提の子。釈尊が成道後、カピラ城に帰省して出家を促した。《富楼那弥多羅尼子》Pūrṇamaitrāyaṇīputra カピラ城主浄飯王の国師の子で、釈尊の成道を聞き、仏弟子となる。弁舌が巧みで、説法第一といわれる。《須菩提》Subhūti 十大弟子の一人で、解空第一といわれる。祇園精舎で仏の説法を聞いて出家した。《阿難》Ānanda 阿難陀の略。十大弟子の一人で、釈尊の従弟にあたる。釈尊の侍者となって二十五年の間よく釈尊に仕えた。《羅睺羅》Rāhula 釈尊が出家以前にもうけた子で、生長して出家、十大弟子の一人となった。よく禁戒を守って密行第一といわれる。

復有學無學二千人。摩訶波闍波提比丘尼。與眷屬六千人倶。羅睺羅母。耶輸陀羅比

丘尼。亦與眷屬俱。菩薩摩訶薩八萬人。皆於阿耨多羅三藐三菩提。不退轉。皆得陀羅尼。樂說辯才。轉不退轉法輪。供養無量百千諸佛。於諸佛所。殖衆德本。常爲諸佛。之所稱歎。以慈修身。善入佛慧。通達大智。到於彼岸。名稱普聞。無量世界。能度無數。百千衆生。其名曰。文殊師利菩薩。觀世音菩薩。得大勢菩薩。常精進菩薩。不休息菩薩。寶掌菩薩。藥王菩薩。勇施菩薩。寶月菩薩。月光菩薩。滿月菩薩。大力菩薩。無量力菩薩。越三界菩薩。(1)跋陀婆羅菩薩。彌勒菩薩。寶積菩薩。導師菩薩。如是等菩薩摩訶薩八萬人俱。

（1）跋＝颰

復、学・無学の二千人あり。摩訶波闍波提比丘尼、眷属六千人と倶なり。羅睺羅の母耶輸陀羅比丘尼、亦、眷属と倶なり。菩薩摩訶薩、八万人あり。皆、阿耨多羅三藐三菩提に於いて退転せず、皆、陀羅尼を得、楽説弁才あって、不退転の法輪を転じ、無量百千の諸仏を供養し、諸仏の所に於て衆の徳本を殖え、常に諸仏に称歎せらるることを為、慈を以て身を修め、善く仏慧に入り、大智に通達し、彼岸に到り、名称普く無量の世界に聞こえて、能く無数百千の衆生を度す。其の名を文殊師利菩薩・観世音菩薩・得大勢菩薩・常精進菩薩・不休息菩薩・宝掌菩薩・薬王菩薩・勇施菩薩・宝月菩薩・月光菩薩・満月菩薩・大力菩薩・無量力菩薩・越三界菩薩・跋陀婆羅菩薩・弥勒菩薩・宝積菩薩・導師菩薩という。是の如き等の菩薩摩訶薩八万人倶なり。

〔訳〕また、学びつつあるものや、もはや学ぶべきものがなくなったものたちの二千人がいた。摩訶波闍波提比丘尼は、六千人の（尼僧の）なかまと一緒であった。羅睺羅の母、耶輸陀羅比丘尼もまた、

そのお供と一緒であった。また、偉大な菩薩たち八万人がいた。みな、無上の正しい悟りに達しようとして退くことがなかった。彼らはみなダーラニーを得ており、人々に自在に法を説く弁舌の才を有していて、退き後もどりすることのない教えの輪を廻し、千の百倍の無量倍という多くの仏達に仕えて、それらの仏のみもとで多くの善の根本をつちかい、常に仏たちに讃歎され、慈しみの心をもってその身を修めて、巧みに仏の智慧に入り、大いなる智慧に達して、悟りの境の彼岸に到達し、その名はあまねく無量の世界に聞こえて、千の百倍の無数倍という数の衆生たちを済度した。彼らの名を、文殊師利菩薩・観世音菩薩・得大勢菩薩・常精進菩薩・不休息菩薩・宝掌菩薩・薬王菩薩・勇施菩薩・宝月菩薩・月光菩薩・満月菩薩・大力菩薩・無量力菩薩・越三界菩薩・跋陀婆羅菩薩・弥勒菩薩・宝積菩薩・導師菩薩という。このような偉大な菩薩ら八万人が一緒であった。

《学・無学》学は有学の略で、まだ学ぶべきものを残している段階をいい、阿羅漢以前の修行者をいう。これに対して、無学は修行を完成して、もはや学ぶべきものがなくなった阿羅漢をいう。小乗仏教では、声聞の、悟りへと向かう位を四種類に分かつ。㈠預流（srota-āpanna 須陀洹と音写）、「流れに預る」という意味で、仏教の流れの中に入り、二度と退かない段階。㈡一来（sakṛd-āgāmin 斯陀含）、「もう一度だけ帰ってくる」という意で、修行の結果、死後天界に生まれるが、そこでは涅槃に入れずもう一度だけ人間界に帰ってくる者の段階。㈢不還（anāgāmin 阿那含）、「この世に帰り来ない」という意で、さらに修行を積むことによって、死後、天界に生まれてそこで涅槃に入り、人間界にもどってこない者の段階。㈣阿羅漢（arhat）、修行が完成し、すべての煩悩を断尽して、この世で涅槃に入る者の段階。以上の四種のそれぞれの段階において、その段階に至ろうとする者（これを向という。たとえば、預流向など）と、その段階に至った

者（これを果という。たとえば預流果）との二種があり、四段階のすべてについて計八種の人がいることになる。これを四向四果の八輩（あるいは四双八輩）といい、この中で最高の位が阿羅漢果の人で、もはや学ぶべきものがないので無学（aśaikṣa）といい、他の七種の人はまだ学ぶものが残っているので有学（śaikṣa）という。《**摩訶波闍波提比丘尼**》Mahāprajāpatī 釈尊の生母の摩耶（Māyā）夫人の妹。夫人の死後、釈尊の父浄飯王（Śuddhodana）の妃となって、年少時代の釈尊を養育し、異母弟難陀を生む。後に出家して、仏教教団最初の比丘尼（尼僧）となった。《**耶輸陀羅比丘尼**》Yaśodharā 釈尊の出家以前、太子時代の正妃で、羅睺羅の生母、釈尊成道の五年後、出家したという。なお、『正法華』には比丘尼衆の記述を欠いている。《**菩薩摩訶薩**》bodhisattva-mahāsattva 偉大な修行者の意。「菩薩」は、自ら仏の悟りに向かって修行しつつ（上求菩提＝自利）、他の人々を救済する（下化衆生＝利他）人のことで、大乗仏教では、一般に大乗の修行者を指す。「摩訶薩」は大士と訳され、偉大な人という意味。多く菩薩を修飾する修飾語として、ここの例のように用いられる。以下に十八人の菩薩名が列挙されるが、『正法華』には二十四人の名が挙げられている。すなわち、印手、解縛、宝事、恩施、雄施、水天、帝天、妙意の八菩薩を増して跋陀婆羅と宝積との二菩薩を欠いている。また梵本では二十五名が挙げられており、Sarvārthanāman（一切義名）、Bhaiṣajyasamudgata（薬上）、Vyūharāja（荘厳王）、Mahāpratibhāna（大弁才）、Satatasamitābhiyukta（常恒精進）、Dharaṇīṃdhara（持地）、Akṣayamati（無尽意）、Padmaśrī（蓮華徳）、Nakṣatrarāja（宿王）、Siṃha（獅子）の十菩薩が増し、跋陀婆羅、宝積、導師の三を欠いている。さらに、菩薩の後に十六のsat-puruṣa（善き人々）を挙げており、その中に前記の跋陀婆羅、宝積の名がみえる。十六の sat-puruṣa の名は『正法華』には全くみられず、羅什訳にも二名がみられるのみ。このような相違は三訳それぞれの伝承の相違をうかがわせる。《**阿耨多羅三藐三菩提**》anuttara-samyak-saṃbodhi の音写。無上正等正覚と意訳され

る。真理にめざめた無上の正しい悟りをいう。**《陀羅尼》**dhāraṇī の音写。「総持」と漢訳する。「保持すること」の意で、教法を心にとどめて忘失しないという意味がある。普通は神秘的な力を有する章句・呪文を指す。本経では、第二十六章の陀羅尼品、第二十八章の勧発品に、長句の陀羅尼が説かれている。**《楽説弁才》**楽説(ぎょうせつ)はこころよく法を説くこと。弁才はたくみな弁舌の才をいう。**《到於彼岸》**彼岸は向う岸のことで、迷いの世界である此岸(しがん)に対して、悟りの理想の世界を彼岸(ひがん)という。それ故、彼岸に到るとは、迷いの世界から悟りの世界へ到達することである。なお、波羅蜜(はらみつ)(pāramitā の音写)は到彼岸とも漢訳するが、この場合は、彼岸に到った、すなわち、完成した、完全な、絶対の、という意味が本義である。ちなみに、梵本ではこの箇処は、'prajñāpāramitā-gati gatair……,(般若波羅蜜に到る道に趣き……)とある。**《衆生》**sattva 生きとし生けるもの、生あるもの、の意。新訳では、有情と訳す。**《文殊師利菩薩》**Mañjuśrī 文殊菩薩とも略す。妙徳、妙吉祥などとも漢訳され、智慧の徳をあらわす菩薩で、普賢菩薩とともに釈尊の脇士(わきじ)(仏の両脇に立ち、仏を佐助する菩薩)とされる。本経では法王子と称せられ、教法の後継者の位置を与えられており、この第一章序品は、眼前に現わされた瑞相の意味を弥勒菩薩が問い、文殊師利菩薩がそれに応えるという形式で進行する。この文殊師利菩薩から、以下に続く導師菩薩までは、これまでに登場した聴衆とちがって実在の人物ではなく、その行徳から名を得た架空の菩薩達である。**《観世音菩薩》**Avalokiteśvara 観音と略し、観自在、光世音などとも訳される。『首楞厳経(しゅりょうごん)』にその名の由来が説かれており、大慈悲をもって衆生を救済するのを本願とする菩薩。本経の第二十五章普門品は、この菩薩の功徳がテーマである。**《得大勢菩薩》**Mahāsthāmaprāpta「偉大な力を得た」という名の菩薩。また大勢至(だいせいし)ともいう。先の観世音菩薩とともに阿弥陀如来の脇士とされている。**《常精進菩薩》**Nityodyukta「常に努力する」という名の菩薩。『維摩経(ゆいま)』・『仏蔵経』などにもその名がみえる。**《不休息菩薩》**Anikṣiptadhura「載荷を捨てない」とい

う名の菩薩。『維摩経』・『思益経』などにも説かれ、修行して休むことのないところから名づけられた。**《宝掌菩薩》** Ratnapāṇi「宝を手にした」という名の菩薩。『大智度論』巻四十五に、七宝をその手から出して衆生に給施する、とある（大正蔵二五・三八七下）。**《薬王菩薩》** Bhaiṣajyarāja「薬の王」という名の菩薩。『観薬王薬上二菩薩経』に説かれる。雪山（ヒマーラヤ）に産する上薬を衆生の心身を治せんとして衆僧に供養したところから名づけられた。**《勇施菩薩》** Pradānaśūra「施与の勇士」という名の菩薩。**《宝月菩薩》** Ratnacandra「宝の月」という名の菩薩。**《月光菩薩》**「月の光」という名の菩薩。梵本の'Ratnaprabha'（宝の光）に相当するか。**《満月菩薩》** Pūrṇacandra「満月」という名の菩薩。**《大力菩薩》** Mahāvikrāmin「大いに勇猛なる」という名の菩薩。**《無量菩薩》** Anantavikrāmin「無限に勇猛なる」という名の菩薩。**《越三界菩薩》** Trailokyavikrāmin「三界を越えた」という名の菩薩。三界とは我々の迷いの世界の総称で、欲界・色界・無色界の三種の世界をいい、この三界を越えるということは輪廻の生存を断ち切ること。**《跋陀婆羅菩薩》** Bhadrapāla 賢護、善守などと漢訳される。「善き守護者」という名の菩薩。**《弥勒菩薩》** Maitreya 慈氏と漢訳する。未来に兜率天からこの世に仏として下生して衆生を救済すると予言された菩薩。実在の人物のインド瑜伽行派の祖である弥勒とは別であることに注意。**《宝積菩薩》** Ratnākara「宝の聚り」という名の菩薩。**《導師菩薩》** 導師とは人々を正しい道に導く人のこと。梵本では Susārthavāha（良き商主）という。

爾時釋提桓因。與其眷屬。二萬天子俱。復有名月天子。普香天子。寶光天子。四大天王。與其眷屬。萬天子俱。自在天子。大自在天子。與其眷屬。三萬天子俱。娑婆世界主。梵天王。尸棄大梵。光明大梵等。與其眷屬。萬二千天子俱。有八龍王。難陀龍王。跋難陀龍王。

娑伽羅龍王。和脩吉龍王。德叉迦龍王。阿那婆達多龍王。摩那斯龍王。優鉢羅龍王等。各與若干。百千眷屬俱。有四緊那羅王。法緊那羅王。妙法緊那羅王。大法緊那羅王。持法緊那羅王。各與若干。百千眷屬俱。有四乾闥婆王。樂乾闥婆王。樂音乾闥婆王。美乾闥婆王。美音乾闥婆王。各與若干。百千眷屬俱。有四阿修羅王。婆稚阿修羅王。佉羅騫駄阿修羅王。毘摩質多羅阿修羅王。羅睺阿修羅王。各與若干。百千眷屬俱。有四迦樓羅王。大威德迦樓羅王。大身迦樓羅王。大滿迦樓羅王。如意迦樓羅王。各與若干。百千眷屬俱。韋提希子。阿闍世王。與若干。百千眷屬俱。各禮佛足。退坐一面。

爾の時に釈提桓因、其の眷属二万の天子と倶なり。復、名月天子・普香天子・宝光天子・四大天王あり。其の眷属一万の天子と倶なり。自在天子・大自在天子、其の眷属三万の天子と倶なり。娑婆世界の主、梵天王・尸棄大梵・光明大梵等、其の眷属万二千の天子と倶なり。八龍王あり。難陀龍王・跋難陀龍王・娑伽羅龍王・和脩吉龍王・徳叉迦龍王・阿那婆達多龍王・摩那斯龍王・優鉢羅龍王等なり。各若干百千の眷属と倶なり。四緊那羅王あり。法緊那羅王・妙法緊那羅王・大法緊那羅王・持法緊那羅王なり。各若干百千の眷属と倶なり。四乾闥婆王あり。楽乾闥婆王・楽音乾闥婆王・美乾闥婆王・美音乾闥婆王なり。各若干百千の眷属と倶なり。四阿修羅王あり。婆稚阿修羅王・佉羅騫駄阿修羅王・毘摩質多羅阿修羅王・羅睺阿修羅王なり。各若干百千の眷属と倶なり。四迦楼羅王あり。大威徳迦楼羅王・大身迦楼羅王・大満迦楼羅王・如意迦楼羅王なり。各若干百千の眷属と倶なり。韋提希の子阿闍世王、若干百千の眷属と倶なりき。各仏足を礼し退いて一面に坐しぬ。

〔訳〕その時、帝釈はお供の二万の天子たちとともにいた。また、名月天子・普香天子・宝光天子と四人の大天王がおり、彼らのお供の一万の天子たちと一緒であった。自在天子と大自在天子は、そのお供の三万の天子たちとともにいた。娑婆世界の主である梵天王と、尸棄大梵・光明大梵らは、そのお供である一万二千の天子たちとともにいた。（また）八龍王がいた。すなわち、難陀龍王・跋難陀龍王・沙伽羅龍王・和脩吉龍王・徳叉迦龍王・阿那婆達多龍王・摩那斯龍王・優鉢羅龍王たちである。おのおの千の百倍の若干倍のお供たちと一緒であった。（また）四緊那羅王がいた。法緊那羅王・妙法緊那羅王・大法緊那羅王・持法緊那羅王である。おのおの千の百倍の若干倍のお供と一緒であった。（また）四乾闥婆王がいた。楽乾闥婆王・楽音乾闥婆王・美乾闥婆王・美音乾闥婆王である。おのおの千の百倍の若干倍のお供と一緒であった。（また）四阿修羅王がいた。婆稚阿修羅王・佉羅騫駄阿修羅王・毘摩質多羅阿修羅王・羅睺阿修羅王である。おのおの千の百倍の若干倍のお供と一緒であった。（また）四迦楼羅王がいた。大威徳迦楼羅王・大身迦楼羅王・大満迦楼羅王・如意迦楼羅王である。おのおの千の百倍の若干倍のお供と一緒であった。韋提希夫人の子の阿闍世王も、千の百倍の若干倍のお供とともにいた。おのおのの者は、仏のみ足を頭にいただいて礼拝し、退いて（その会座の）一隅に坐した。

《釈提桓因》Sakra devānām indra の音写語「釈提桓因陀羅」の略。帝釈天のこと。もとヒンドゥー教のインドラ神が仏教に入り、仏教の守護神となった。須弥山の頂上の忉利天（三十三天の住みか）の主。釈尊の修行時代にはたびたび身を変じて釈尊を試したが、成道後には守護に努める。《名月・普香・宝光》名月（Can-

dra）・普香（Samantagandha）・宝光（Ratnaprabha）の三天子は、智顗の『文句』によれば、三光天子のことで、それぞれ月天・明星天・日天に相当するという。南条・ケルン本では、さらにSūryadevaputra（日天子）・**Avabhāsaprabha devaputra**（光燿天子）が加わる。**《四大天王》**須弥山の中腹の東西南北四方に居してそれぞれの方角を守護している四天王で、帝釈の外将として仏教を守護する。護世四天王ともいう。東は持国天、西は広目天、南は増長天、北は毘沙門（多聞）天の四天王をいう。**《自在・大自在》**自在（Iśvara）・大自在（Maheśvara）はもともとヒンドゥー教のシバ神（Śiva）の異名。本来、色界（欲界の上にある欲望を離れたものの世界）の最高処である色究竟天に居るとされるが、このパラグラフは欲界の列衆を挙げている部分であるから、『文句』では自在・大自在はそれぞれの欲界の第五楽変化天、第六他化自在天に相当するとしている。以上で欲界の天人を挙げ、次には色界の天人を挙げる。

《娑婆世界主梵天王》娑婆は sahā の音写で忍土と訳す。堪え忍ぶことの多い、この現実世界のこと。梵天王はもともとインド宗教思想における宇宙の根本原理であるBrahman（梵）が神格化されたもので、仏教にとり入れられて色界の初禅天に住む天人とされた。色界には下から、初禅・二禅・三禅・四禅と順次高まってゆく四つの段階があるが、梵天王はこの第一番目の初禅天に居て娑婆世界を統括している。この初禅天にも、さらに下から梵衆天・梵輔天・大梵天の三段階があり、その最高処にいるのが梵天王で、大梵天と呼ばれる。**《尸棄大梵・光明大梵》**尸棄（Śikhin）・光明（Jotiṣprabha）はそれぞれ大梵天の名。**《八龍王》**仏教では、人間以外の仏法を守護する者たちを、天龍八部とか龍神八部とかいって、八種類挙げている。それらは、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽の八種で、経もこれらを順次挙げているわけである。先に天を挙げたので、次に龍を出す。難陀龍王（Nanda Nāgarāja）、難陀は歓喜の意。跋難陀（Upananda）は善と訳す。沙迦羅（sāgara）は海の意味で、後の第十二章の提婆達多品では、この龍王

の八歳になる娘が登場して女人成仏の主人公となっている。和脩吉（Vāsuki）、徳叉伽（Takṣaka）、阿那婆達多（Anavatapta）、摩那斯（Manasvin）、優鉢羅（Utpalaka）、以上が龍で、次に緊那羅を挙げる。**《四緊那羅王》**緊那羅（Kiṃnara）は人非人と訳す。その形は人に似ているが、人とも神とも畜類とも決定しがたい想像上の天上の楽神。美しい声をもち、歌舞をよくして帝釈に侍するという。それぞれの名は梵本では、法緊那羅王（Druma Kiṃnararāja 但し Drumaは「樹」の意）、妙法緊那羅王（Sudharma K.）、持法緊那羅王（Dharmadhara K.）、大法緊羅那羅王（Mahādharma K.）。

《四乾闥婆王》乾闥婆（Gandharva）は緊那羅と同様に天の楽神で、帝釈に仕えるという。ただ香のみを食するので、食香と訳す。人が死んで、次の生存をとるまでの中有の期間の存在をやはり乾闥婆というが、これは別のもの。それぞれの名は、楽乾闥婆（Manojña Gandharva）、楽音乾闥婆（Manojñasvara G.）、美乾闥婆（Madhura G.）美音乾闥婆（Madhurasvara G.）。**《四阿修羅王》**阿修羅（asura）は古く『リグ・ヴェーダ』の時代には善神であったが、後に悪魔的存在として懼れられるようになった。須弥山の下の海底に住み、常に帝釈と戦闘を行うという。仏教では六道の存在の一つとせられ、また仏法守護の八部衆の中の鬼神とされている。四王のそれぞれの名は、婆稚阿修羅王（Balin Asurendra）、佉羅騫駄（Kharaskandha）、毗摩質多羅（Vemacitrin）、羅睺（Rāhu）。最後の羅睺阿修羅は、日食・月食をおこすものという神話で名を知られている。**《四迦楼羅王》**迦楼羅（Garuḍa）は金色の翼をもつインド神話上の大鳥で、ヴィシュヌ神の乗物とされた。龍の子を捕えて瞰うという。金翅鳥と訳す。四王の名はそれぞれ、大威徳迦楼羅王（Mahātejas Garuḍendra）、大身（Mahākāya）、大満（Mahāpūrṇa）、如意（Maharddhiprāpta）。**《韋提希》**Vaidehī マガダ国ビンビサーラ王の后。実子の阿闍世のために幽閉された王を救おうとして発覚し、また自らも獄につながれた。**《阿闍世王》**Ajātaśatru 未生怨と訳す。母の韋提希が阿闍世を懐胎した時、占師に、この子は

長じて父を害すると言われたためにこの名がある。太子の時に、釈尊教団の敵対者、提婆達多の言を容れて、父王を弑し、母も幽閉して王位についたが、釈尊の教えに接し、改心して熱心な仏教信者となった。

一　法を聴く者たち

釈尊は、三十五歳で菩提樹下で悟りを開かれてから、四十五年の長きにわたって教えを説かれ続けた。釈尊最後の説法が『涅槃経』であり、その直前に説かれたのがこの『法華経』である。というのも、見宝塔品に「如来久しからずしてまさに涅槃に入るべし」とか、従地涌出品に「如来、太子たりし時、釈の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまえり。是れより已来始めて四十余年を過ぎたり。」とあるから、経典成立の歴史的事実はさておき、『法華経』は釈尊晩年の説法ということになる。

さて、『法華経』はこの序品から始まる。序品という言葉から理解されるように、この章は『法華経』全体の序に相当する。従って序品は、いつ（説時）、どこで（説処）、誰によって（説主）、誰に対して（会衆）説かれたものであるかを示し、『法華経』が説かれるまでの舞台設定をする章である。そこで経は、ある時、仏は王舎城郊外の耆闍崛山（霊鷲山）中に千二百人の比丘達とともに住されていたと説き出し、説時・説処・会衆を明らかにしてゆくのである。ここで、説処は霊鷲山とされているが、実は『法華経』では中ほどでこの説処が一時虚空に移される。古来『法華経』の会座（説法の場）については二処三会といわれており、説法の会座が初め（序品から法師品まで）は霊鷲山、次に虚空（見宝

塔品から嘱累品まで）、そして最後に再び霊鷲山（薬王菩薩本事品から普賢菩薩勧発品まで）というように変化している。これは見宝塔品において、虚空に多宝塔が出現して、仏がその多宝塔の中に多宝仏と並んで坐し、人々を神通力で虚空に置かれたためである。このことから初めの霊鷲山の会座を前霊山会といって、後の霊鷲山の会座と区別している。

それでは、この霊鷲山に集まり、仏の『法華経』説法の会座に列なって法を聴いたのはどのような人々であろうか。経によれば、一万二千人の大阿羅漢たち、この中には舎利弗、大目揵連、須菩提、摩訶迦葉の四大弟子もいた。そして学と無学の二千人の声聞達、六千人の比丘尼、文殊師利・観世音などの八万人の菩薩達がいたという。そしてさらに、仏法を守護する人間以外のもの達の、天上界の帝釈や大梵天などの神々・龍王・緊那羅王・乾闥婆王・阿修羅王・迦楼羅王などの異形の神々や鬼神等がいた。そして最後に、人間界の阿闍世王をはじめとする仏教信者の人々がいたのである。このような多くの人々や神々が聴衆として仏を囲み、その説法を片言隻句も聞き洩らすまいとして耳をそばだてていた。これが『法華経』の説かれる舞台設定である。この中で、特に重要な意味をもつのが、声聞（śrāvaka）達である。声聞とは、もともと仏の教えの声を聞いて修行し、悟ろうとする仏弟子のことであった。しかし、後に大乗仏教が興ってくると、声聞は自己の悟りだけを求め励む修行僧のことを指すようになり、この人達はどんなに修行しても阿羅漢という聖者になれるだけで、決して仏になることはできないとされるに至った。大乗仏教では、この声聞を縁覚（師なくして一人で悟っても、その教えを人々に説こうとしない聖者）とともに小乗の二乗と貶称する。実際、釈尊の在世当時に直接にその教えに触れた仏弟子たちにしても、釈尊の偉大さを知れば知るほど、自らも仏となったと確信でき

る者はいなかったであろうし、また釈尊滅後に、その遺教(ゆいきょう)を無上のものとするあまりに聖典の言句に滞り、理論的学問的研究に拘泥(こうでい)する者達は、仏の悟りから次第に遠のいたにちがいない。こうして大乗仏教の立場では、声聞は決して仏となることができないとされてきたのであった。『法華経』は大乗仏典でありながら、こうした声聞二乗を登場させ、しかも、前半の序品から授学無学人記品までをこれら声聞たちを説法の対象としているということにこの経の重要な意味があるのである。この意味は順次、章を追ってゆくうちに次第に明らかにされてゆくであろう。

なお、本章で挙げられている聴衆達を検討してみると、今日の他の経論などによって伝えられる歴史的伝承と合致しないものがある。たとえば、仏陀の最初の弟子の一人である阿若憍陳如(あにゃきょうじんにょ)や、やはり古い弟子である優楼頻羅迦葉(うるびんらかしょう)・伽耶迦葉(がやかしょう)・那提迦葉(なだいかしょう)の三兄弟、それに舎利弗(しゃりほつ)や目連(もくれん)などは、この法華経が説かれた時点、すなわち仏陀の晩年にはすでに入滅してしまっているはずである。

このことは、法華経の経典創作者が歴史的事実を知らなかったということではなく、むしろそういった事実にとらわれずに仏弟子たちを実在の人物だけではなく、架空の菩薩たちも含めて自由に登場させ、自在に活躍させることによって、自らの新しい宗教的思想を表現しようとしたものであり、逆にいえば、法華経がこれまでの経典の枠組の中ではおさまりきらないほどの大きくて自由な思想を有していたということである。

爾時世尊。四衆圍遶。供養恭敬。尊重讃歎。爲諸菩薩。說大乘經。名無量義。教菩薩法。佛

所護念。佛說此經已。結加[1]趺坐。入於無量義處三昧。身心不動。是時天雨。曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。曼殊沙華。摩訶曼殊沙華。而散佛上。及諸大衆。普佛世界。六種震動。爾時會中。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。天。龍。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人。及諸小王。轉輪聖王。是諸大衆。得未曾有。歡喜合掌。一心觀佛。爾時佛放。眉間白毫[2]相光。照東方。萬八千世界。靡不周遍。下至阿鼻地獄。上至阿迦尼吒天。於此世界。盡見彼土。六趣衆生。又見彼土。現在諸佛。及聞諸佛。所說經法。并見彼諸。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。諸修行得道者。復見諸菩薩摩訶薩。種種因緣。種種信解。種種相貌。行菩薩道。復見諸佛。般涅槃者。復見諸佛。般涅槃後。以佛舍利。起七寶塔。

爾時彌勒菩薩。作是念。今者世尊。現神變相。以何因緣。而有此瑞。今佛世尊。入于三昧。是不可思議。現希有事。當以問誰。誰能答者。復作此念。是文殊師利。法王之子。已曾親近供養。過去無量諸佛。必應見此。希有之相。我今當問。爾時比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。及諸天龍。鬼神等。咸作此念。是佛光明。神通之相。今當問誰。爾時彌勒菩薩。欲自決疑。又觀四衆。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。及諸天龍鬼神等。衆會之心。而問文殊師利言。以何因緣。而有此瑞。神通之相。放大光明。照于東方。萬八千土。悉見彼佛。國界莊嚴。

（1）加＝跏　（2）毫＝豪

爾の時に、世尊、四衆に囲遶せられ、供養、恭敬、尊重、讃歎せられて、諸の菩薩の為に大乗経の無量義・教菩薩法・仏所護念と名づくるを説きたもう。仏、此の経を説き已って、結加趺坐し、無量義処三昧に入って、身心動じたまわず。是の時に、天より曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華を雨らして、仏の上及

び諸の大衆に散じ、普仏世界六種に震動す。爾の時に、会中の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷と天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽との人と非人、及び諸の小王・転輪聖王、是の諸の大衆、未曾有なることを得て、歓喜し合掌して、一心に仏を観たてまつる。爾の時に、仏、眉間白毫相の光を放って、東方万八千の世界を照らしたもうに、周遍せざることなし。下、阿鼻地獄に至り、上、阿迦尼吒天に至る。此の世界に於いて、尽く彼の土の六趣の衆生を見、又、彼の土の現在の諸仏を見、及び諸仏の所説の経法を聞き、並びに彼の諸の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の諸の、修行し得道する者を見、復、諸の菩薩摩訶薩の、種種の因縁・種種の信解・種種の相貌あって、菩薩の道を行ずるを見、復、諸仏の般涅槃したもう者を見、復、諸仏般涅槃の後、仏舎利を以て七宝の塔を起つるを見る。

爾の時に、弥勒菩薩、是の念を作さく、

「今者、世尊、神変の相を現じたもう。何の因縁を以て此の瑞ある。今、仏・世尊は三昧に入りたまえり。是の不可思議に希有の事を現ぜるを、当に以て誰にか問うべき。誰か能く答えん者なる」と。

復、此の念を作さく、

「是の文殊師利法王の子は、已に曾て過去無量の諸仏に親近し供養せり。必ず此の希有の相を見るべし。我、今、当に問うべし」と。

爾の時に、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷及び諸の天・龍・鬼神等、咸く此の念を作さく、

「是の仏の光明神通の相を、今当に誰にか問うべき」と。

爾の時、弥勒菩薩、自ら疑を決せんと欲し、又、四衆の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷及び諸の天・龍・鬼神等の衆会の心を観じて、文殊師利に問うて言わく、

「何の因縁を以て、此の瑞神通の相あり、大光明を放ち、東方万八千の土を照らしたもうに、悉く彼の仏の国

界の荘厳を見るや」と。

〔訳〕その時、世尊は四衆にかこまれて供養され、敬い尊ばれ、尊崇され、讃歎されたので、そこで多くの菩薩たちのために、「無量の意義を含む菩薩を訓誨する法、仏に護持せられるもの」と名づける大乗の経を説かれた。仏は、この経を説きおえられると、結跏趺坐され、「無量の意義の基礎」という三昧に入って、身心ともに動じられなかった。

この時、天から曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華の花が雨のようにふりそそぎ、仏のみ上や大ぜいの人々の上に散り落ち、仏のいますこの全世界が六種に震動した。その時に、その会座にいた比丘、比丘尼、信男、信女と天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽との人間や人間以外のもの、及び多くの小王と転輪聖王、これらの大ぜいの大衆たちは、このいまだかつてない出来事に遭って歓喜し、合掌して一心に仏を観たてまつった。

その時、仏は眉間にある白い巻き毛から、一条の光を放ち、東方の一万八千の世界をあまねく隅から隅まで照らし出された。（その光は）下は阿鼻地獄にまで、上は阿迦尼吒天にまで至った。この世界にありながら、かの国土の六種の境遇にある衆生たちがことごとく見え、またかの国土におられる仏たちが見え、それらの仏たちの説かれる教えが聞かれた。また、かの多くの比丘、比丘尼、信男、信女たちが、さまざまに修行し、さまざまに道を体得しているのが見られた。また多くの偉大な菩薩たちが、種々のいわれ、種々の信による理解、種々の姿かたちをもって、菩薩の道を修行しているのが見えた。また多くの仏たちが、完全で円満な涅槃に入られるのが見え、また多くの仏たちが、完全

円満な涅槃に入られた後、仏の遺骨をおさめるための七宝づくりの塔が建てられるのが見えた。
その時、弥勒菩薩は、このように考えた。
「今、世尊は不思議な奇蹟のさまを現わされた。一体どのようなわけで、この奇瑞があるのだろうか。今しも、仏世尊は三昧に入られている。この思いも及ばぬ稀有なことが現われたことを、一体誰に問えばよいのであろうか。誰が答えてくれるであろうか」と。
また彼は、このように考えた。
「この教えの王者の子である文殊師利は、すでに昔、過去のはかり知れない程の多数の仏たちに親しくお仕えし、供養してきた。（それ故、彼は）きっと、このめずらしい瑞相を見たことがあるにちがいない。私は今、彼に問うてみよう」と。
その時に、比丘・比丘尼・信男・信女と、多くの天・龍・鬼神たちは、みな次のような思いをなした。
「仏のこのような光明の神通力によってあらわされた様を、今一体、誰に問えばよいであろうか」と。
その時、弥勒菩薩は、みずからこの疑問を解決しようと思い、また比丘・比丘尼・信男・信女の四衆と、多くの天・龍・鬼神ら、これら大勢集っているものたちの心中を察して、そこで文殊師利に質問して言った。
「どのようなわけで、仏の神通力によるこの奇瑞があらわれたのですか。仏が大いなる光明を放たれ、そして東方の一万八千の国土が照らされると、その仏の国土の領域のおごそかなありさまがことごとく見られたというのは。」

《四衆》出家の僧である比丘と尼僧の比丘尼、及び男性の在俗信者の優婆塞と女性の在俗信者である優婆夷、この四者を四衆という。《無量義・教菩薩法・仏所護念》無量義とは、無限の奥深い意義を有するの意で、梵本では、長行部分では mahā-nirdeśa（偉大な説示）、偈頌においては ananta-nirdeśa（無限の説示）という。教菩薩法は、菩薩たちを教化する法、仏所護念は、仏が護り支持するという意味。従って訳のように「無量の意義を含む、菩薩を訓誨する法、仏に護持せられるもの」と名づけられる大乗経典の意になる。古来この経が、『法華経』の直前に説かれ、開経とされてきた『無量義経』であるといわれているが、これが現存の『無量義経』に相当するということには早くから疑義が出されている（『荻原雲来文集』所収「無量義とはなにか」、及び横超慧日『法華思想の研究』所収「無量義経について」参照）。《結加趺坐》趺（足の甲）を左右の胜上（ももの上）に結加して坐す坐し方。すなわち両膝を曲げて両足の裏を上に出す坐り方。如来の坐り方で如来坐ともいう。「結加」の「加」は「跏」とするのが普通。《無量義処三昧》原語は ananta-nirdeśa-pratiṣṭhāna「処」（pratiṣṭhāna）とは、確乎たる立場、基礎の意。三昧は samādhi の音写で、定、等持などと漢訳する。心を一点に集中して統一し、静かな安定した状態に入ることをいう。《曼陀羅華》mandārava 色が美しく芳香を放ち、見るものの心を悦ばせるという天界の花。《摩訶曼陀羅華》摩訶（mahā）は大きいという意味。大きな曼陀羅華のこと。

《曼殊沙華》mañjūṣaka 日本では真紅の彼岸花を指すが、もともと柔かく白色をした天界の花の一種のこと。この花を見るものは悪業を離れるとされている。《摩訶曼殊沙華》mahā-mañjūṣaka 大きな曼殊沙華のこと。《普仏世界》仏の統べるすべての世界の意。「普」を「あまねく」と副詞に訓む読み方があるが、今は日遠の『法華訳和尋跡抄（ほっけやくわじんしゃくしょう）』の訓みに従う。これが梵本の意に最も近い。《六種震動》東西南北と上下に

六とおりに震動すること。大神変の一つで、仏の偉大な説法が述べられる際などにおこる瑞相の一種である。**《優婆塞・優婆夷》** upāsaka, upāsikā の音写。在俗の男性信者、女性信者のこと。**《夜叉》** yakṣa の音写。鬼神の一種で、凶悪で人を害するとされているが、仏教では天龍八部衆の中に入れられ、仏法守護の鬼神とされている。**《摩睺羅迦》** mahoraga の音写。大蛇のことで、八部衆の一類。仏法守護の蛇神である。**《転輪聖王》** 古代インドで考えられていた、全世界を統一支配する帝王の理想像。武力によらず、正義のみをもって支配する帝王で、仏伝では、釈尊は生誕時に、出家しなければ転輪聖王になると予言されたという。**《眉間白毫相》** 仏の三十二相の一つで、仏の眉間にある白毛の右巻きの渦巻。**《阿鼻地獄》** Avīci の音写。八大地獄の一つで、贍部州（人間の住む世界）の地底の最も奥深いところにあるという地獄で、罪人が休みなく責めさいなまれるので、無間地獄ともいう。

《阿迦尼吒天》 Akaniṣṭha の音写。三界のうちの色界の最高処の天をいう。色究竟天ともいい、また形体（＝色）を有する存在（＝有）としての頂上に位置する天であるから有頂天ともいう。**《六趣》** 六道ともいう。すべての生類が、生前に自らのなした行為によって死後にその果報を受けて趣く六種の世界で、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天の六つをいう。**《般涅槃》** parinirvāṇa 完全な涅槃のこと。涅槃の原語 nirvāṇa は語根 nir-√vṛ（吹き消す）から派生した名詞形で、従って涅槃の意味は本来煩悩の火を吹き消した平安な悟りの境地をいうが、仏の入滅することを指すことばとしても用いられる。ここでは後者の意。**《仏舎利》** 仏の遺骨のこと。舎利は śarīra の音写で、遺骸・身骨等の意味。**《七宝塔》** 七宝（金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・真珠・玫瑰）で造られた塔廟。塔は卒塔婆（stūpa）の略で、もと古代インドの墳墓の形式であったが、釈尊の滅後、その遺骨などを収めた仏舎利塔が造られて以後、重要な崇拝の対象となり、この塔を中心として新しい仏教運動が興起して大乗仏教に発展したといわれる。本経においても仏塔は随所に説か

れ、重要な意味を有している。《国界》界は境界・領域の意で、仏国土の領域を指す。

二　奇瑞

仏は比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆に囲まれて、無量義・教菩薩法・仏所護念と名づけられる大乗経を説き終えられると結跏趺坐し、無量義処三昧に入られて微動だにされない。仏が大法を説かれる前には三昧に入られるのが通例で、四衆は次に仏が何の法を説かれるのかとじっと仏を見つめている。と、そこに世にも不思議な現象が現出した。空から美しい花びらが降ってきて、仏のいますこの大地は上下四方に震動し、端座した仏の眉間の白い巻毛からは一条の光が放たれ、東方一万八千の世界が照らしだされて、そこのあらゆる出来事がまざまざと見られた。これが『法華経』の説かれようとしたときにあらわれためでたい前兆である。

中国の註釈家、梁の法雲はこの奇瑞を此土に六瑞、他土に六瑞あるとしている（『法華経義記』）。それによると此土の六瑞は、

㈠ 仏が無量義経を説かれたこと（説法瑞）
㈡ 仏が無量義処三昧に入られたこと（入定瑞）
㈢ 天から華がふってきたこと（雨華瑞）
㈣ 大地が六種に震動したこと（地動瑞）
㈤ 会中の四衆・天龍八部衆たちがそれを見て歓喜したこと（衆喜瑞）

㈥ 仏が眉間白毫相から光を放たれたこと（放光瑞）

であり、一方、他土の六瑞は、

㈠ 彼の土の六趣の衆生を見たこと（見六趣瑞）

㈡ 彼の土の現在の諸仏を見たこと（見諸仏瑞）

㈢ 諸仏の説法を聞いたこと（聞諸仏説法瑞）

㈣ 四衆が修行し得道するのを見たこと（見四衆得道瑞）

㈤ 諸の菩薩たちが修行するのを見たこと（見行瑞）

㈥ 諸仏が般涅槃するのを見たこと（見仏涅槃瑞）

である。ここで此土というのは、釈尊とそれをとりまく大衆の一座の場所、すなわち霊鷲山であり、他土というのは仏の眉間の白毫より放たれた光明によって照らし出された東方万八千の世界である。

隋の天台大師智顗も法雲の説を採っているが、嘉祥大師吉蔵は瑞相を雨華・動地・放光の三瑞として、此土六瑞・他土六瑞の解釈を採らない（『法華経義疏』）。

ともあれ、このような瑞相は、仏の生誕、成道、説法、涅槃などの際には必ず現わされるものである。たとえば『普曜経』第二、三十二瑞品には、仏の誕生の当夜において、園林の樹木に自然に果実がなったり、陸地に車輪のような青蓮華が生じるなどの三十二の瑞相が現われたことが説かれ、また『大般涅槃経』第一、寿命品には仏が入滅されるその日の早朝、仏が種々の色の光を放って三千大千世界を照らされると同時に、大地や山々、海までも震動したと説かれているが如くである。

しかし、今ここで現わされた奇瑞は、この座にいならぶ大衆に、いままでにない前代未聞の思いを

懐かせ、不思議の念をおこさせるほどの大神変であった。仏は一体、何のためにこの不思議の神変を示現せられたのか、この疑念が皆の思いであった。しかし、仏は無量義処三昧に入っておられ、お聞きするわけにはゆかない。そこで、弥勒菩薩が一座を代表してこの疑問を文殊師利菩薩に問うたのである。それは、文殊師利菩薩は諸仏にこれまでつかえてきた菩薩であるから、仏のこの瑞相のいわれを知っているにちがいないと思われたからである。こうして次に文殊師利菩薩によって、今のこの大神変のいわれが明かされるのである。

以下に詩頌のスタイルをとった偈文が始まる。本経の偈文は重頌（geya）といって、長行（散文で書かれた部分）の後に置かれて、先行する長行の内容を詩頌でくり返して述べたものである。しかし、くり返しとはいっても全く同一内容ではなくて、長行で説かれていないものもあり、おおむね偈文の方が内容的に詳しくなっている。これは多くの経典がそうであるように、偈文の部分は韻文であるから吟誦されて人々に口から口へと伝えられ、その間に徐々に増広されていったものと考えられる。今日でもインドでは、各地で吟遊詩人達が『ラーマーヤナ』や『バガバッド・ギーター』などの古典を朗々と人々の前で吟じているのを見ることができる。

本経では、長行と偈文は内容的に重なる部分が多いが、長行にはなく偈文のみに説かれていることで内容的に重要なものが説かれている場合もあるので注意を要する。たとえば、次章の方便品の偈文には、長行にない、種々の仏道修行の方法が説かれており、そのなかには仏像や仏塔の造営、礼拝など具体的な記述がみられるのである。

於是彌勒菩薩。欲重宣此義。以偈問曰。

文殊師利　導師何故　眉間白毫(1)　大光普照
雨曼陀羅　曼殊沙華
栴檀香風　悅可衆心　以是因緣　地皆嚴淨
而此世界　六種震動
時四部衆　咸皆歡喜　身意快然　得未曾有
眉間光明　照于東方
萬八千土　皆如金色　從阿鼻獄　上至有頂
諸世界中　六道衆生
生死所趣　善惡業緣　受報好醜　於此悉見
又覩諸佛　聖主師子
演說經典　微妙第一　其聲清淨　出柔輭音
敎詔菩薩　無數億萬
梵音深妙　令人樂聞　各於世界　講說正法
種種因緣　以無量喩
照明佛法　開悟衆生　若人遭苦　厭老病死
爲說涅槃　盡諸苦際
若人有福　曾供養佛　志求勝法　爲說緣覺
若有佛子　修種種行
求無上慧　爲說淨道　文殊師利　我住於此
見聞若斯　及千億事
如是衆多　今當略說　我見彼土　恒沙菩薩
種種因緣　而求佛道
或有行施　金銀珊瑚　眞珠摩尼　車𤦲馬腦
金剛諸珍　奴婢車乘
寶飾輦輿　歡喜布施　廻向佛道　願得是乘
三界第一　諸佛所歎
或有菩薩　駟馬寶車　欄楯華蓋　軒飾布施
復見菩薩　身肉手足
及妻子施　求無上道　又見菩薩　頭目身體
欣樂施與　求佛智慧
文殊師利　我見諸王　往詣佛所　問無上道
便捨樂土　宮殿臣妾

剃除鬚髮　而被法服　或見菩薩　而作比丘　獨處閑靜　樂誦經典
又見菩薩　勇猛精進　入於深山　思惟佛道　又見離欲　常處空閑
深修禪定　得五神通　又見菩薩　安禪合掌　以千萬偈　讚諸法王
復見菩薩　智深志固　能問諸佛　聞悉受持　又見佛子　定慧具足
以無量喩　爲衆講法　欣樂說法　化諸菩薩　破魔兵衆　而擊法鼓
又見菩薩　寂然宴默　天龍恭敬　不以爲喜　又見菩薩　處林放光
濟地獄苦　令入佛道　又見佛子　未嘗睡眠　經行林中　懃[2]求佛道
又見具戒　威儀無缺　淨如寶珠　以求佛道　又見佛子　住忍辱力
增上慢人　惡罵捶打　皆悉能忍　以求佛道　又見菩薩　離諸戲笑
及癡眷屬　親近智者　一心除亂　攝念山林　億千萬歲　以求佛道
或見菩薩　餚[3]饍[4]飲食　百種湯藥　施佛及僧　名衣上服　價直千萬
或無價衣　施佛及僧　千萬億種　栴檀寶舍　衆妙臥具　施佛及僧
清淨園林　華菓[5]茂盛　流泉浴池　施佛及僧　如是等施　種種[6]微妙
歡喜無厭　求無上道　或有菩薩　說寂滅法　種種敎詔　無數衆生
或見菩薩　觀諸法性　無有二相　猶如虛空　又見佛子　心無所著
以此妙慧　求無上道　文殊師利　又有菩薩　佛滅度後　供養舍利
又見佛子　造諸塔廟　無數恒沙　嚴飾國界　寶塔高妙　五千由旬
縱廣正等　二千由旬　一一塔廟　各千幢幡　珠交露幔　寶鈴和鳴
諸天龍神　人及非人　香華伎樂　常以供養　文殊師利　諸佛子等

為供舍利　嚴飾塔廟　國界自然　殊特妙好　如天樹王　其華開敷
佛放一光　我及衆會　見此國界　種種殊妙　諸佛神力　智慧希有
放一淨光　照無量國　我等見此　得未曾有　佛子文殊　願決衆疑
四衆欣仰　瞻仁及我　世尊何故　放斯光明　佛子時答　決疑令喜
何所饒益　演斯光明　佛坐道場　所得妙法　爲欲說此　爲當授記
示諸佛土　衆寶嚴淨　及見諸佛　此非小緣　文殊當知　四衆龍神
瞻察仁者　爲說何等

(1)毫＝豪　(2)懃＝勤　(3)餚＝肴　(4)饍＝膳　(5)菓＝果　(6)底本は「果」であるが、高麗蔵は「種」。大正蔵の誤りか。春日本も「種」。今、改む。

是に於いて弥勒菩薩、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を以て問うて曰く
「文殊師利よ　導師何が故ぞ　眉間白毫の　大光普く照したもう。
曼陀羅　曼殊沙華を雨らして　栴檀の香風、衆の心を悦可す。
是の因縁を以て　地皆、厳浄なり　而も此の世界　六種に震動す。
時に四部の衆　咸く皆歓喜し　身意快然として　未曾有なることを得。
眉間の光明　東方　万八千の土を照らしたもうに　皆、金色の如し。
阿鼻獄より　上、有頂に至るまで　諸の世界の中の　六道の衆生
生死の所趣　善悪の業縁　受報の好醜　此に於いて悉く見る。
又、諸仏　聖主師子　経典の微妙第一なるを演説したもうに

其の声清浄に　柔軟の音を出して　諸の菩薩を教えたもうこと　無数億万に
梵音深妙にして　人をして聞かんと楽わしめ　各世界に於いて　正法を講説するに
種種の因縁をもってし　無量の喩を以て　仏法を照明し　衆生を開悟せしめたもうを覩る。
若し人、苦に遭うて　老病死を厭うには　為に涅槃を説いて　諸苦の際を尽さしめ
若し人、福有って　曾て仏を供養し　勝法を志求するには　為に縁覚を説き
若し仏子有って　種種の行を修し　無上慧を求むるには　為に浄道を説きたもう。
文殊師利よ　我、此に住して　見聞すること斯の若く　千億の事に及べり。
是の如く衆多なる　今、当に略して説くべし。
我、彼の土の　恒沙の菩薩　種種の因縁をもって　仏道を求むるを見る。
或は施を行ずるに　金・銀・珊瑚・　真珠・摩尼　車渠馬脳　金剛・諸珍　奴婢・車乗
宝飾の輦輿を　歓喜して布施し　仏道に廻向して　是の乗の
三界第一にして　諸仏の歎めたもう所なるを得んと願うあり。
或は菩薩の　駟馬の宝車　欄楯華蓋　軒飾を布施するあり。
復、菩薩の　身肉手足　及び妻子を施して　無上道を求むるを見る。
又、菩薩の　頭目身体を　欣楽施与して、仏の智慧を求むるを見る。
文殊師利よ　我諸王の　仏所に往詣して　無上道を問いたてまつり、
便ち楽土　宮殿臣妾を捨てて　鬚髪を剃除して　法服を被るを見る。
或は菩薩の　而も比丘と作って　独り閑静に処し　楽って経典を誦するを見る。
又、菩薩の　勇猛精進し　深山に入って　仏道を思惟するを見る。

又、欲を離れ　常に空閑に処し　深く禅定を修して　五神通を得るを見る。
又、菩薩の　禅に安じて合掌し　千万の偈を以て　諸法の王を讃めたてまつるを見る。
復、菩薩の　智深く、志固くして　能く諸仏に問いたてまつり　聞いて悉く受持するを見る。
又、仏子の　定慧具足して　無量の喩を以て　衆の為に法を講じ
欣楽説法して　諸の菩薩を化し　魔の兵衆を破して　法鼓を撃つを見る。
又、菩薩の　寂然宴黙にして　天・龍恭敬すれども　以て喜とせざるを見る。
又、菩薩の　林に処して光を放ち　地獄の苦を済い　仏道に入らしむるを見る。
又、仏子の　未だ嘗て睡眠せず　林中に経行し　仏道を懃求するを見る。
又、戒を具して　威儀欠くることなく　浄きこと宝珠の如くにして　以て仏道を求むるを見る。
又、仏子の　忍辱の力に住して　増上慢の人の　悪罵捶打するを
皆悉く能く忍んで　以て仏道を求むるを見る。
又、菩薩の　諸の戯笑　及び癡なる眷属を離れ　智者に親近し
一心に乱を除き　念を山林に摂め　億千万歳　以て仏道を求むるを見る。
或は菩薩の　餚饍飲食　百種の湯薬を　仏及び僧に施し
名衣上服の　価直千万なる　或は無価の衣を　仏及び僧に施し
千万億種の　栴檀の宝舎　衆の妙なる臥具を　仏及び僧に施し
清浄の園林　華菓茂く盛んなると　流泉浴池とを　仏及び僧に施し
是の如き等の施の　種種微妙なるを　歓喜し厭くことなくして　無上道を求むるを見る。
或は菩薩の　寂滅の法を説いて　種種に　無数の衆生を教詔する有り。

或は菩薩の　諸法の性は　二相有ること無し　猶お虚空の如しと観ずるを見る。
又、仏子の　心に所著なくして　此の妙慧を以て　無上道を求むるを見る。
文殊師利よ　又、菩薩の　仏の滅度の後　舎利を供養する有り。
又、仏子の　諸の塔廟を造ること　無数恒沙にして　国界を厳飾し
宝塔高妙にして　五千由旬　縦廣正等にして　二千由旬
一一の塔廟に　各千の幢幡あり。　珠を以て交露せる幔あって　宝鈴和鳴せり。
諸の天・龍神　人及び非人　香華伎楽を　常に以て供養するを見る。
文殊師利よ　諸の仏子等　舎利を供せんが為に　塔廟を厳飾して
国界自然に　殊特妙好なること　天の樹王の　其の華開敷せるが如し。
仏、一の光を放ちたもうに　我及び衆会　此の国界の　種種に殊妙なるを見る。
諸仏は神力　智慧希有なり　一の浄光を放って　無量の国を照らしたもう。
我等此れを見て　未曾有なることを得。　仏子文殊よ　願わくは衆の疑を決したまえ。
四衆欣仰して　仁及び我を瞻る　世尊は何が故ぞ　斯の光明を放ちたもう。
仏子よ、時に答えて　疑を決して喜ばしめたまえ。　何の饒益する所あってか　斯の光明を演べたもう。
仏、道場に坐して　得たまえる所の妙法　為めて此れを説かんとや欲す　為めて当に授記したもうべしや。
諸の仏土の　衆宝厳浄なるを示し　及び諸仏を見たてまつること　此れ小縁に非じ。
文殊よ、当に知るべし　四衆龍神　仁者を瞻察す　為めて何等をか説きたまわん。」

〔訳〕ここにおいて、弥勒菩薩は重ねてこの意趣を宣べようとして、詩頌によって質問した。

「文殊師利よ、導師は何の故からであろうか。眉間の巻き毛より大いなる光を放って普く照らされたのは。(1)

曼陀羅華と曼殊沙華の花を雨ふらして、栴檀の芳香を含んだ風は人々の心を悦ばせた。(2)

そのために、大地はみなおごそかで浄らかになり、そして、この世界は六種に震動した。

その時に、四衆の人々は皆ことごとく歓喜し、身も心も快く、未だ曾てない思いをした。(3)

眉間からの光明が、東方の、一万八千の国土を照らし出すと、（その土は）みな金色に輝きわたった。(4)

（下は）阿鼻地獄から、上は有頂天に至るまで、さまざまな世界の中の、六種の境界のなかにいる衆生たちの、(5)

生れ死にして趣く所と、善業と悪業との条件、それによって受ける報いの好醜とが、ここにおいてことごとく見られた。(6)

また、至尊の主であり、獅子である多くの仏たちが、経典の、すぐれて精妙第一なるものを演説された。

その声は清浄で、柔く響く音を出され、多くの菩薩たちを教えられること、その数は億万の無数倍であった。

梵天王の声のように清らかで、おごそかな音声は、人々に喜び聞かんと願わせるものであり、(7)

各々の仏はそれぞれの世界において、正しい教えを講説されるのに、

種々のいわれや、はかりしれない程の喩えを用いて、仏の教えを明らかにし、衆生たちに悟りを開かしめられるのが見えた。(8)

もし人が苦に遭遇し、老いと病いと死とを厭うのならば、その人のために涅槃を説いて、多くの苦の終わりを尽さしめられる。(9)

もし福徳があって、すでに仏を供養したことがあり、勝れた教法を求める者には、その人のために縁覚（の教え）を説かれる。(10)

もし仏の子がいて、種々の修行を行い、この上ない智慧を求める者のためには、浄らかな道を説かれる。(11)

文殊師利よ、私はここにいて、見聞きすることは以上のごとくであり、それは一千億もの事柄に及んでいる。

このように数多くの事柄があるけれども、今はかいつまんでそれらを述べよう。(12)

私は、かの国土にいるガンジス河の砂の数のように多くの菩薩達が、種々のいわれをもって仏道を求めているのを見る。(13)

（そのなかの）或る者は布施を行じ、金・銀・珊瑚・真珠・摩尼珠・硨磲・碼碯、金剛や多くの珍宝と、下男、下婢や車と乗りものと、(14)

宝で飾った輿などを、喜んで布施して、（その布施の功徳を）仏道にふりむけて、(15)

この（教えの）乗りものが、（欲界・色界・無色界の）三界のなかで第一のものであり、多くの仏達によって称讃されるものであることを願っている者がいる。(16)

或いはまた、四頭だての宝で飾った車、それに縦横の欄干をめぐらし、華の傘のついた、飾りを高くかかげた車を布施する菩薩がいる。(17)

またある菩薩が、自らの身肉手足、及び妻子を施して、無上の道を求めているのが見られる。(18)

またある菩薩は、自らの頭、目、身体を、喜んで施し与え、仏の智慧を求めているのが見られる。(19)

文殊師利よ、私は多くの王達が、仏のもとに詣でて、無上の道を問い、(20)

楽しい国土、宮殿、臣下、側室、それらをすべて捨て去って、鬚や髪を剃りおとして、衣をまとうのを見る。(21)

或いはまた、菩薩が比丘となって独り静かなところに住み、このんで経典を読誦しているのが見られる。(22)

また、菩薩が、勇んで強い心をもって精進にはげみ、奥深い山に入って、仏の道について考えているのが見られる。(23)

また、欲を離れ、つねに修行に適した静かなところに居り、深く禅定を修めて、五神通を体得するのが見られる。(24)

また、菩薩が、心安らかに瞑想して合掌し、千万もの偈頌で、多くの法王たちを讃えているのが見える。(25)

また菩薩が、その智慧が深く（仏道への）志が堅固であり、多くの仏たちに問いたてまつり、

（その答えを）聞いて、それらすべてを心にしっかりとどめおくのが見える。(26)
また私は見る、仏の子が、禅定と智慧とを兼ねそなえ、無量の喩えをもって、人々に法を講じ、(27)
心から欣んで法を説いて、多くの菩薩たちを教化し、魔の軍勢を撃破して、法の鼓を打ちならしているのを。(28)
また菩薩が、寂静に心安らかに黙して、天の神々や龍神たちに敬われようとも、それを喜びとはしないのを見る。(29)
また菩薩が、林の中にとどまって、光を放ち、（人々の）地獄の苦しみを済い、仏の道に入らせるのが見える。(30)
また仏の子が、未だかつて睡眠をとらず、林の中を静かに往き来し、仏の道を熱心に求めているのが見える。(31)
また、戒律をそなえ、そのおごそかな立居ふるまいには欠けるところがなく、宝玉のように清浄である、そのような人が仏の道を求めているのが見える。(32)
また仏の子が、忍耐の力をそなえもち、高慢な人が悪口雑言し、むちで打ちかかるのを、すべてよく耐え忍んで、仏の道を求めているのが見える。(33)
また菩薩が、多くのたわむれや、愚かな仲間を離れ、智者に親しく近づき、(34)
一心に心の乱れを除いて、思いを山林にとどめることが、億千万年にも及び、そうして仏の道を求めているのが見える。(35)

或いはまた、菩薩が、料理されそなえられた、飲みものや食べものと、百種もの薬とを、仏とその僧団に施し、(36)
立派な衣や上等の服の、千万もの値打があるものを、あるいは値打のつけようのないほどの衣を、仏や僧団に施し、(37)
千万億もの種類の、栴檀で造った宝の精舎と、多くの立派な寝具とを、仏とその僧団に施し、(38)
また浄らかな園林の、花が咲き、果物がなり茂っていて、泉からは水が流れ、水浴びの池のあるものを、仏とその僧団に施し、(39)
以上のような布施の、種々にわたりすぐれたものを、歓んで厭くことなく布施しつづけ、無上なる道を求めているのが見える。(40)
或いは菩薩のうちで、心の究極の平安という教えを説いて、種々に無数の衆生たちを教え導くものがいる。(41)
或いは菩薩が、すべての存在の本体は　二つのすがたをとることはない、虚空のように（差別も対立もない一つのすがたである）と観じるのを見る。
また、仏の子が、心に何のとらわれもなく　このすぐれた奥深い智慧をもって、無上なる道を求めているのが見える。(42)
文殊師利よ、また菩薩で、仏がなくなられた後、その遺骨を供養するものがいる。(43)
また仏の子が、多くの塔廟を造り、その数はガンジス河の砂の数ほどに無数であり、国土をお

ごそかに飾り、(44)

それらの宝玉で造られた塔はすばらしく高く、その高さは五千ヨージャナ、縦横の長さは等しく、二千ヨージャナある。(45)

その一つ一つの塔廟には、おのおの千の旗のぼりがついており、珠をぬいつけた幕があって、宝の鈴が鳴り響いている。

多くの天や龍神、人間や人間にあらざるものたちが、香や花、音楽でもって、常に供養しているのが見える。(46)

文殊師利よ、多くの仏の子たちが　仏の遺骨を供養するために、塔廟をおごそかに飾って、(そのために)国土が自然に、格別すばらしくよきものになっていることは、あたかも天上界にある樹の王が、その花を一せいに開いたかのようである。(47)

仏が一条の光を放たれると、私と及びそこに集っている多くのものたちは、この国土の領域が、種々にすばらしいさまになっているのを見る。(48)

多くの仏たちの神通力とその智慧は、世にもまれなほどすばらしいものであり、一条の浄い光を放って、無量の国土を照し出される。(49)

私たちはこれをみて、かってない(不思議な)思いに打たれた。仏の子、文殊師利よ、どうか多勢のものたちの疑問を解いていただきたい。(50)

(僧・僧尼・信男・信女の)四衆の人々は心をはずませて、私とあなたとに注目している。世尊はどういうわけで、この光明を放たれたのであろうか。(51)・(52)

仏の子よ、この時にあたって、疑問を氷解して、喜ばせていただきたい。どのような利益を人人に与えるために、（仏は）この光明を放たれたのであろうか。[53]

仏が道場に坐して、得られたこよなき法、まさにそれを説かれようとするのであろうか、あるいは、必ず（仏になれるという）予言を授けられようとするのであろうか。[54]

多くの仏国土が、多くの宝によっておごそかに浄められているということが示され、また、多くの仏を見たてまつったということは、これはなまなかな理由によるものではない。[55]

文殊師利よ、知らなくてはいけない。（僧・僧尼・信男・信女の）四衆の人達や龍神は、あなたを仰ぎ見つめている。きっと何かを説かれるであろうと。」[56]

《**得未曾有**》未曾有は、原語 adbhuta の漢訳語。原語は「驚いた」「奇異に打たれた」「不思議な」などの意だが、漢語としての意味は、「未だ曾て有らざる」すなわち、これまでになかったような（不思議な、めずらしい）ことの意である。

《**四部衆**》四衆ともいう。比丘、比丘尼、優婆塞（在俗の男性信者）、優婆夷（在俗の女性信者）の四種のあつまりをいう。《**六道**》六趣のこと。衆生がそのなした業の報いによって趣く六種の世界。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六種の道をいう。《**聖主師子**》聖主であり、師子にもたとえられる仏。仏は人中の王であるので獅子に喩えられる。《**梵音**》brahmasvara 梵天のように清らかな声の意。仏の音声をたたえていう。仏の三十二相の一つに梵音相があり、その音声は清らかで十方に響き、これを聞く者はみな道果を得るという。《**縁覚**》pratyeka-buddha 辟支仏（びゃくしぶつ）とも訳す。十二因縁の理法を観ずることによって悟り、或いは飛葉落花などを観じて外縁によって悟るので、縁覚と訳す。また、一人で師なくして悟るので独覚ともいう。

大乗仏教では、声聞とともに二乗と貶称される。

《**恒沙**》恒河沙の略。恒河（ガンジス河）の沙のこと。すなわち、ガンジス河の砂の数ほど多いという意味で、数の極めて多いことを表わす語。仏典ではしばしば多用される。《**摩尼**》摩尼宝珠のこと。「摩尼」はmaṇi の音写で、宝珠の総称。《**車琹**》普通は「硨磲」と表わす。七宝の一つで、南海の珊瑚礁に住むおうぎ貝のこと。《**輦輿**》字義どおりでは天子の乗る立派な車を指す。ここでは人力で引く立派な輿のような乗り物をいうのであろう。《**三界**》仏教では衆生の生存する世界を三種類に分ける。㈠欲界は、欲望のうずまく世界。㈡色界は、欲を離れた清らかな世界で、欲界の上にある。㈢無色界は、最上の世界で、精神のみが存在する世界。以上の三者をあわせて三界という。この三界は輪廻の生死をくりかえす世界で、この三界を超えることが輪廻の生存から脱することである。

《**軒飾**》「軒」は高いという意味。空高くかかげた飾りのこと。また「軒」は本来、車を意味する。《**空閑**》人里離れた閑静な場所のこと。《**禅定**》もとパーリ語 jhāna (Skt. dhyāna) の音写語と、意訳語である「定」とを合成した語。それ故、「禅」と「定」は同じ意味である。心を静め、精神を集中して、精神統一をはかること。《**定慧**》禅定と智慧のこと。《**仏子**》仏の子の意であるが、仏弟子を指す。《**湯薬**》医薬のこと。《**寂滅法**》「寂滅」は煩悩の火が消えた、涅槃の寂静の状態をいう。究極の悟りの法のこと。《**由旬**》yojana の音写。インドの距離の単位で、一ヨージャナは牛車の一日の行程距離とされるが、種々異説があり確定していない。マクドネルの辞書によれば、およそ九マイルという。《**授記**》仏が仏弟子に、将来仏となるであろうという予言を与えること。記別ともいう。《**仁者**》二人称代名詞。敬意を含んだ丁寧語で「あなた」の意。自分と同格以上の者に対して用いられる。

爾時文殊師利。語彌勒菩薩摩訶薩。及諸大士。善男子等。如我惟忖。今佛世尊。欲說大法。雨大法雨。吹大法螺。擊大法鼓。演大法義。諸善男子。我於過去諸佛。曾見此瑞。放斯光已。卽說大法。是故當知。今佛現光。亦復如是。欲令衆生。咸得聞知。一切世間。難信之法。故現斯瑞。諸善男子。如過去無量無邊。不可思議。阿僧祇劫。爾時有佛。號日月燈明如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。演說正法。初善。中善。後善。其義深遠。其語巧妙。純一無雜。具足淸白。梵行之相。爲求聲聞者。說應四諦法。度生老病死。究竟涅槃。爲求辟支佛者。說應十二因緣法。爲諸菩薩。說應六波羅蜜。令得阿耨多羅三藐三菩提。成一切種智。次復有佛。亦名日月燈明。次復有佛。亦名日月燈明。如是二萬佛。皆同一字。號日月燈明。又同一姓。姓頗羅墮。彌勒當知。初佛後佛。皆同一字。名日月燈明。十號具足。所可說法。初中後善。其最後佛。未出家時。有八王子。一名有意。二名善意。三名無量意。四名寶意。五名增意。六名除疑意。七名響[1]意。八名法意。是八王子。威德自在。各領四天下。是諸王子。聞父出家。得阿耨多羅三藐三菩提。悉捨王位。亦隨出家。發大乘意。常修梵行。皆爲法師。已於千萬佛所。殖諸善本。是時日月燈明佛。說大乘經。名無量義。敎菩薩法。佛所護念。說是經已。卽於大衆中。結加[2]趺坐。入於無量義處三昧。身心不動。是時天雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。曼殊沙華。摩訶曼殊沙華。而散佛上。及諸大衆。普佛世界。六種震動。爾時會中。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。天。龍。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人。及諸小王。轉輪聖王等。是諸大衆。得未曾有。歡喜合掌。一心觀佛。爾時如來。放眉間白毫[3]相光。照東方萬八千

佛土。靡不周遍。如今所見。是諸佛土。彌勒當知。爾時會中。有二十億菩薩。樂欲聽法。是諸菩薩。見此光明。普照佛土。得未曾有。欲知此光。所爲因緣。時有菩薩。名曰妙光。有八百弟子。是時日月燈明佛。從三昧起。因妙光菩薩。說大乘經。名妙法蓮華。敎菩薩法。佛所護念。六十小劫。不起于座。時會聽者。亦坐一處。六十小劫。身心不動。聽佛所說。謂如食頃。是時衆中。無有一人。若身若心。而生懈惓。日月燈明佛。於六十小劫。說是經已。卽於梵魔。沙門。婆羅門。及天人。阿修羅衆中。而宣此言。如來於今日中夜。當入無餘涅槃。時有菩薩。名曰德藏。日月燈明佛。卽授其記。告諸比丘。是德藏菩薩。次當作佛。號曰淨身。多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀。佛授記已。便於中夜。入無餘涅槃。佛滅度後。妙光菩薩。持妙法蓮華經。滿八十小劫。爲人演說。日月燈明佛八子。皆師妙光。妙光敎化。令其堅固。阿耨多羅三藐三菩提。是諸王子。供養無量百千萬億佛已。皆成佛道。其最後成佛者。名曰燃燈。八百弟子。中有一人。號曰求名。貪著利養。雖復讀誦衆經。而不通利。多所忘失。故號求名。是人亦以。種諸善根。因緣故。得値無量百千萬億諸佛。供養恭敬。尊重讚歎。彌勒當知。爾時妙光菩薩。豈異人乎。我身是也。求名菩薩。汝身是也。今見此瑞。與本無異。是故惟忖。今日如來。當說大乘經。名妙法蓮華。敎菩薩法。佛所護念。

(1)嚮=響　(2)加=跏　(3)毫=豪

爾の時に、文殊師利、弥勒菩薩摩訶薩及び諸の大士に語らく、

「善男子等よ、我が惟忖するが如き、今、仏・世尊、大法を説き、大法の雨を雨らし、大法の螺を吹き、大法の鼓を撃ち、大法の義を演べんと欲するならん。諸の善男子よ、我、過去の諸仏に於て、曾て此の瑞を見たて

まつりしに、斯の光を放ち已って、即ち大法を説きたまいき。是の故に当に知るべし、今、仏の光を現じたもうも、亦復是の如く、衆生をして咸く一切世間の難信の法を聞知することを得せしめんと欲するが故に、斯の瑞を現じたもうならん。

諸の善男子よ、過去無量無辺不可思議阿僧祇劫の如き、爾の時に仏います、日月燈明如来、応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊と号く。正法を演説したもうに、初善・中善・後善なり。其の義深遠に、其の語巧妙に、純一無雑にして、具足・清白・梵行の相なり。声聞を求むる者の為には応ぜる四諦の法を説いて、生老病死を度し、涅槃を究竟せしめ、辟支仏を求むる者の為には応ぜる十二因縁の法を説き、諸の菩薩の為には応ぜる六波羅蜜を説いて、阿耨多羅三藐三菩提を得、一切種智を成ぜしめたもう。

次に復、仏います、亦、日月燈明と名づく。次に復、仏います、亦、日月燈明と名づく。是の如く二万仏、皆同じく一字にして日月燈明と号く。又、同じく一姓にして、頗羅堕を姓とせり。弥勒よ、当に知るべし、初仏・後仏、皆同じく一字にして日月燈明と名づけ、十号具足したまえり。説きたもう所の法、初・中・後善なり。其の最後の仏、未だ出家したまわざりし時、八王子あり。一を有意と名づけ、二を善意と名づけ、三を無量意と名づけ、四を宝意と名づけ、五を増意と名づけ、六を除疑意と名づけ、七を嚮意と名づけ、八を法意と名づく。是の八王子、威徳自在にして各四天下を領す。是の諸の王子、父の出家して阿耨多羅三藐三菩提を得たもうと聞いて、悉く王位を捨て、亦、随い出家して、大乗の意を発し、常に梵行を修して、皆、法師と為れり。已に千万の仏の所に於いて、諸の善本を殖えたり。

是の時に、日月燈明仏、大乗経の無量義・教菩薩法・仏所護念と名づくるを説きたもう。是の経を説き已って、即ち大衆の中に於いて結加趺坐し、無量義処三昧に入って、身心動じたまわず。是の時に、天より曼陀羅華・摩

訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華を雨らして、仏の上、及び諸の大衆に散じ、普仏世界六種に震動す。爾の時に、会中の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人及び諸の小王・転輪聖王等、是の諸の大衆、未曾有なることを得て、歓喜し合掌して、一心に仏を観たてまつる。爾の時に、如来、眉間白毫相の光を放って、東方万八千の仏土を照らしたもうに、周遍せざることなし。今見る所の是の諸の仏土の如し。

弥勒よ、当に知るべし。爾の時に、会中に二十億の菩薩あって、法を聴かんと楽欲す。是の諸の菩薩、此の光明の普く仏土を照らすを見て、未曾有なることを得て、此の光の所為因縁を知らんと欲す。時に菩薩あり、名を妙光という。八百の弟子あり。是の時に、日月燈明仏、三昧より起って、妙光菩薩に因せて大乗経の妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念と名づくるを説きたもう。六十小劫、座を起ちたまわず。時の会の聴者も、亦、一処に坐して、六十小劫身心動ぜず。仏の所説を聴くこと、食頃の如しと謂えり。是の時に、衆中に、一人の若しは身、若しは心に懈惓を生ずるあることなかりき。日月燈明仏、六十小劫に於いて是の経を説き已って、即ち梵・魔・沙門・婆羅門及び天・人・阿修羅衆の中に於いて、此の言を宣べたまわく、『如来、今日の中夜に於いて、当に無余涅槃に入るべし』と。時に菩薩あり、名を徳蔵という。日月燈明仏、即ち其れに記を授け、諸の比丘に告げたまわく、『是の徳蔵菩薩、次に当に作仏すべし。号を浄身多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三仏陀といわん』と。仏、授記し已って、便ち中夜に於いて無余涅槃に入りたもう。仏の滅度の後、妙光菩薩、妙法蓮華経を持ち、八十小劫を満てて、人の為に演説す。日月燈明仏の八子、皆、妙光を師とす。妙光、教化して、其れをして阿耨多羅三藐三菩提に堅固ならしむ。是の諸の王子、無量百千万億の仏を供養し已って、皆仏道を成ず。其の最後に成仏したもう者、名を燃燈という。八百の弟子の中に一人あり、号を求名という、利養に貪著せり。復、衆経を読誦すと雖も、而も通利せず、忘失する所多し、故に求名と号く。是の人亦、諸の善根を種えたる因縁

を以ての故に、無量百千万億の諸仏に値いたてまつることを得て、供養・恭敬・尊重・讃歎せり。弥勒よ、当に知るべし、爾の時の妙光菩薩は豈に異人ならんや、我が身、是れなり。求名菩薩は汝が身、是れなり。今、此の瑞を見るに、本と異なることなし。是の故に、惟忖するに、今日の如来も当に大乗経の妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念と名づくるを説きたもうべし。」

〔訳〕その時、文殊師利は、偉大な弥勒菩薩や多くの立派な人々に語った。

「善男子たちよ、私が思い測るとおりであるならば、今、仏・世尊は、大いなる法を説き、大いなる法の雨を降らし、大いなる法のほら貝を吹き、大いなる法の鼓をうち、大いなる法のその意味を演べようとしておられるのだ。

多くの善男子たちよ、私は過去の多くの仏たちについて、このめでたいしるしを見させていただいたが、（仏たちは）この光を放たれた後に、大いなる法をお説きになった。だから、必ず知るがよい。つまり、今の仏が光を現わされたのも、また（過去の多くの仏たちと）同様であって、衆生たちにことごとく、この世すべてのものの信じがたい法を聞かせ知らしめようとされて、このめでたいしるしを現わされたのであろう。

多くの善男子たちよ、過去の無量にして無辺、思いもよらず、また数えることもできぬような、遠い劫の昔に、仏がおられた。その名は日月燈明という如来で、供養を受けるにふさわしい人であり、正しくあまねき智慧を具え、智と実践とが完全に具わっており、悟りに到達した人であり、世界のすべてに通じており、最上の人、人間の調教師、諸天と人々との師であり、仏であり、世尊であった。

（その仏が）正しい法を演説されたが、初めもよく、中ほどもよく、そして最後もすぐれていた。その教えの意味は極めて奥深く、またその言葉も精妙で巧みであり、（その内容は）純粋で余分なものはなく、完全無欠で、清浄で、清らかな修行の様相を有していた。声聞を志すもののためには、そのための四諦の法を説いて、生・老・病・死の苦しみを脱して涅槃に至らしめ、辟支仏を志すもののためには、そのための十二因縁の法を説き、多くの菩薩たちのためには、それにふさわしい六波羅蜜の教えを説いて、無上の正しい悟りを得させ、一切智者の智慧を完成させしめたのである。

次にまた仏が出現され、また日月燈明という名であった。次にまた仏が出現され、またやはり日月燈明という名であった。このようにして二万の仏が（出現され）、みな同じく一つの名で、日月燈明という名であった。また同じく、その姓も一つであり、頗羅堕という姓であった。

弥勒よ、まさに知るべきである。初めの仏も、後の仏も、みな同じく一つの名で、日月燈明という名であり、十の如来の尊称を具えられていた。その説かれた法は、初めもよく、中ほどもよく、終わりもよいものであった。その最後の仏が、まだ出家されない時、八人の王子があった。その第一は有意という名であり、第二は善意という名、第三は無量意という名、第四は宝意という名、第五は増意という名、第六は除疑意という名、第七は響意という名、第八は法意という名であった。この八王子は威徳が自在であり、その各々が四大州を領有していた。この多くの王子達は、その父が出家して、無上の正しい悟りを得られたと聞いて、ことごとく王位を捨て去って、（その父に）随って出家し、（自らも悟り、他をも悟らせるという）大乗の心をおこし、常に清らかな修行をなし、みな法師となった。そして千万もの多くの仏のみもとにおいて多くの善の根を植えたのである。

この時に、日月燈明仏は「無量の意義を含む、菩薩を訓誨する法、仏に護持せられるもの」と名づける大乗の経を説かれた。この経を説きおわった後、（仏は）すぐさま大勢の中で結跏趺坐され、「無量の意義の基礎」という三昧に入って、身心ともに動じられなかった。この時、天から曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華・摩訶曼殊沙華の花が雨のようにふりそそぎ、仏の上や大勢の人々の上に散り落ち、仏のいますこの全世界が六種に震動した。その時に、その会座にいた比丘・比丘尼、信男・信女と天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽との人間や人間以外のもの、及び多くの小王と転輪聖王、これら大ぜいの大衆達は、いまだかつてない思いをし、歓喜し、合掌して一心に仏を観たてまつった。

その時、如来は眉間にある白い巻毛から光を放って東方の一万八千の仏の国土を照らされ、（その光が）あまねくいきわたらない所はなかった。（そのありさまは）今、ちょうどここに見える、多くの仏の国土のようであった。弥勒よ、まさに知るべきである。その時、その会座の中に二十億の菩薩がいて、法を聴こうと願い求めていた。この多くの菩薩たちは、この光明があまねく仏の国土を照らし出すのを見て、いまだかつてない思いにとらわれ、この光の由来を知りたく思った。

その時に一人の菩薩がおり、その名を妙光といった。（彼には）八百人の弟子がいた。この時、日月燈明仏は三昧から起ちあがって、妙光菩薩にことよせて、大乗の経の、『妙法蓮華経』という名の、また「菩薩を訓誨する法、仏に護持せられるもの」と名づけるものを説かれた。（仏は）六十小劫もの間、その座を起たれず、その時の会座の聴衆もまた一ところに坐って、六十小劫の間、身心ともに動じなかった。仏の説法を聴いている時間は、ほんの食事を摂る間のように（短いものに）思われた。

その時に集っている人々の中で、一人たりとも身体や心に疲れや、倦怠を覚えるものはなかった。日月燈明仏は六十小劫にわたって、この経を説きおえると、すぐさま梵天や悪魔、修行者、バラモン、及び天（の神々）や人間、阿修羅たちの中において、このことばを宣べられた。『如来は、まさに今日の夜なかに、心身をも滅した完全な涅槃に入るであろう』と。

その時に一人の菩薩がいて、その名を徳蔵といった。日月燈明仏はその菩薩に、将来必ず仏になるであろうとの予言を授けて、大ぜいの比丘たちに告げられた。『この徳蔵菩薩は、（私の）次に必ず仏となるであろう。そして、その名を浄身如来、尊敬さるべき人、正しく覚った人、といわれるであろう』と。仏は成仏の予言をなしおえると、その夜の深更に身心ともに滅した究極の涅槃に入られた。仏が入滅された後、妙光菩薩は『妙法蓮華経』をたもち、八十小劫の間、人々のために（その経を）説き続けた。日月燈明仏の八人の子らは、みな妙光を師と仰いだ。妙光は彼らを教化し、無上の正しい悟りにしっかりと向かわしめた。この多くの王子たちは、数えきれない百千万億という多くの仏たちに供養しおわって後、みな仏道を完成させた。その中で、最後に仏となられたのが、燃燈という名（の仏）であった。（その仏には）八百の弟子たちがいたが、その中の一人に求名という名のものがいた。利得をむさぼり執着し、また多くの経典を読誦しても、精通することなく、忘失してしまうことが多かった。それ故に求名という名があるのである。この人はまた、多くの善根を植えたことによって、数えきれない百千万億という多くの仏たちにあいたてまつって、供養し、敬い、尊重し、讃め歎えた。弥勒よ、まさに知るべきである。その時の妙光菩薩とは、誰あろう、実にこの私だったのだ。そして求名菩薩とは、あなたのことであったのだ。今、このめでたいしるしを見ると、昔と何ら異な

るところはない。それ故、思いはかってみると、今現在の如来も、きっと大乗の経の、『妙法蓮華経』という名の、また「菩薩を訓誨する法・仏に護持せられるもの」と名づけるものを説かれるにちがいない。」

《大士》 mahā-sattva 音写語の摩訶薩に同じ。立派な人、偉大な人の意味である。また開士とも訳し、菩薩のことを指す。それ故、しばしば「菩薩」の語と結びついて用いられる。**《善男子》** kula-putra 原語は「良家の子息」の意味であるが、仏典では在家信者の男子の意に用いられ、教団の比丘に対してはこの語を使用しない。一般に菩薩への呼びかけに用いられるのが普通。なお在家信者の婦人は善女人(kula-duhitṛ)と呼ばれる。**《阿僧祇劫》** asaṃkhya-kalpa 阿僧祇は asaṃkhya(数えきれない)の音写語で、無数と訳す。元来、巨大な数の単位で、十の五九乗とされる。劫は劫波(kalpa)という音写語の略で、きわめて長い時間を表わす単位。そのはかり方は経論によって異説があるが、今、一例を挙げると、四十里四方の巨大な石山を、長寿の人が百年に一度ずつ、細軟な衣でもって払拭し、それによって石山が磨滅してなくなっても、まだ一劫が尽きないといわれるくらいの時間をあらわす(『大智度論』巻五)。従って、阿僧祇劫は10^{59}劫というほとんど無限に近い長い年月をあらわす。**《日月燈明》** Candrasūryapradīpa 「月(candra)と太陽(sūrya)とを燈明(pradīpa)とする者」の意。**《如来》** tathāgata tathā(かくの如く)+ āgata(来れる)と解して「如来」と訳すが、tathā(かくの如く)+ gata(去れる)として「如去」とも訳すことがある。如来は仏のことを指し、悟りを完成した仏の意味であるが、大乗仏教では「如実に来れる者」あるいは「真如より来たれる者」の意味に解される。なお、この「如来」以下「天人師」までの項は後注参照。**《応供》** 阿羅漢(arhat)の別名。天の神々や人々から尊敬、供養を受けるに値する人のこと。**《正遍知》** 正しくあまねく

知れる者、すなわち、正しい悟りに達した者の意味。三藐三仏陀と音訳し、また正等覚者とも意訳する。**《明行足》**明（智慧）と行（実践）とを具足した者の意。仏はこの二者を完全円満に体得しているのでこう呼ばれる。**《善逝》**善く逝った者の意。すなわち、彼岸に、永遠の悟りに行った者という意味での仏の称号。**《世間解》**世間をよく理解している者の意。世間とはこの現実世界と及びそこに住む有情（生あるもの）とを指す。仏はこの世界と、そこに住む生あるものすべてについて知悉し、それによってそれぞれにふさわしい法を説くから、この称号がある。**《無上士》**最高至上の人の意。**《調御丈夫》**人々の調御者、調教師の意。**《天人師》**天の神々や人間の師という意味。**《梵行相》**梵行（brahma-carya）とは清浄な修行の意味。「相」は、ありさま、すがたの意味である。なお、初善・中善・後善、義深遠、語巧妙、純一無雑、具足、清白、梵行相の七項目を七善といい、正法はこの七善を具足するとされる。ただし、これらの項目の開合とその解釈については経論間で異説がある（吉蔵『法華義疏』巻二参照）。**《声聞》**śrāvaka もともと仏の教えを聞く人の意味で、広く仏弟子の意味で用いられたが、後に大乗仏教では、独善的な自分の悟りのみを求める修行者のことを指すようになり、辟支仏とならんで二乗と貶称され、仏となることはできない者とされた。その修行においては四諦の理を観じ、阿羅漢位に到ることを究極の目的とする。『法華経』では辟支仏も含めた二乗の成仏が大きな柱の一つとなっている。**《四諦法》**四聖諦ともいう。「諦（satya）」とは真理のこと。すなわち、苦諦・集諦・滅諦・道諦の四つをいう。十二因縁と並んで仏教の根本教義であり、釈尊の最初の説法の内容とされている。それぞれは、この現実世界は苦であるという真理（苦諦）、その苦の生起の原因は渇愛であるという真理（集諦）、その苦の原因である渇愛を断つことが苦の滅であるという真理（滅諦）、八正道こそが苦の滅に至る道であるという真理（道諦）の意味である。**《辟支仏》**pratyekabuddha 師なく自ら一人で悟るから独覚とも訳され、また十二因縁を観じて迷いを断ち、悟りに到るから、あるいは飛花落葉など

を観じるという外縁によって悟るから縁覚とも訳される。自ら悟りながらも、その悟りを教えとして人に説かないということで、後に大乗仏教において、声聞とともに二乗と貶称された。《**十二因縁法**》十二縁起ともいう。縁起説は釈尊の自内証の法門といわれ、釈尊が菩提樹下で悟られた悟りの内容そのものであるとされる。十二縁起は、衆生の迷いの生存の原因をつきとめ明らかにすると同時に、その原因を断つことを教えるものであって、以下の十二支からなる。㈠無明（迷いの根元）㈡行（無明によって誤たれた潜在的な形成力）㈢識（認識主観としての六識）㈣名色（識の対象としての六境）㈤六入（眼・耳・鼻・舌・身・意の知覚感覚能力）㈥触（感官と対象との接触）㈦受（感受作用）㈧愛（激しい盲目的な欲求）㈨取（執著）㈩有（輪廻の生存）(十一)生（生まれること）(十二)老死（一切の苦）。この十二支は順次に前項のものが後項のものを成立させる条件となっており、無明から老死まで、苦の生ずる相を観ずるのを順観といい、無明がなければ行がなく、乃至、生が無ければ老死がないと観ずるのを逆観という。縁起説は、最初から十二支が確定していたのではなく、五支、九支、十支からなる縁起説もある。十二縁起はそのうちの最も完備した体系。《**六波羅蜜**》大乗の菩薩の実践すべき六種の波羅蜜。波羅蜜は、pāramitā（完成、最上）の音訳語。また、param（彼岸に）＋ita（至れる）と解され、「到彼岸」とも訳される。六種とは以下のとおり。㈠布施（dāna）㈡持戒（śīla）㈢忍辱（kṣānti）㈣精進（vīrya）㈤禅定（dhyāna）㈥智慧（prajñā）。《**一切種智**》sarvajñā-jñāna 一切を知りつくした者の智慧の智という意味。全智者（すなわち、仏）の智をいう。一切智智に同じ。因みに、龍樹（りゅうじゅ）の『大智度論』巻二七（大正蔵二五巻、二五八C以下）によれば、一切種智は一切種の法に通達する仏の智慧をいい、それに対し、声聞縁覚の一切法の総相を知る智慧を一切智といい、菩薩の一切種々差別の道法を知る智慧を道種智といって、三種の智を出している。ここでは梵本との対応から考えて上記の意味にとる。《**頗羅堕**》**Bharadvāja** の音写。バラドヴァージャは「力を身につけてい

る者」の意で、太古の聖仙の姓。《十号》仏の十の尊称。㈠如来（tathāgata）㈡応供（arhat）㈢正遍知（samyak-saṃbuddha）㈣明行足（vidyācaraṇa-saṃpanna）㈤善逝（sugata）㈥世間解（lokavit）㈦無上士（anuttara）㈧調御丈夫（puruṣa-damyasārathi）㈨天人師（śāstā-devamanuṣyānām）㈩仏（buddha）(十一)世尊（bhagavat）以上の十一の称号が挙げられるが、世間解と無上士とを合して一としたり、あるいは無上士と調御丈夫とを、あるいは仏と世尊とを合して一としたりして十号となし、その説は一定しない。原始経典などでは、如来を除いた十項目が如来の十号として数えられていた。いずれにせよ、梵本のように如来が主語となり、それ以下の十の称号を述語のように解すべきであろう。《八王子》有意（Mati）、善意（Sumati）、無量意（Anantamati）、宝意（Ratnamati）、増意（Viśeṣamati）、除疑意（Vimatisamudghāṭin）、嚮意（Ghoṣamati）、法意（Dharmamati）《四天下》四つの天下。すなわち須弥山の四方にあるとされる四大陸のこと。四大州ともいう。《妙光》Varaprabha「最上の光」という意味。《六十小劫》小劫は antara-kalpa の訳。本来は中劫と訳される。「劫」（前注の「阿僧祇劫」の項〈八八頁〉を参照）に大劫と小劫（中劫）とを分け、八十小劫が一大劫とされる。一小劫の長さは経論によって異なりがある。一例を挙げると、人の寿命が十歳の時代から数えて、百年ごとに一歳を増してゆき、人の寿命が八万歳になるまでの時間と、及びその逆に百年ごとに一歳を減じてゆき人の寿命が十歳になるまでの時間、一増一減のこの間の時間を一小劫という。（『大毘婆沙論』巻一三五、及び『倶舎論』巻十二）。六十小劫はこの一小劫の六十倍の長さの時間をいう。《食頃》食事をする間のような短い時間。《梵》Brahmā 梵天のこと。前注参照（五二頁）。《沙門》śramaṇa の音写語。「つとめる人」の意味で、出家して道を求めて修行する人のことをいう。もともとこの語は、インドにおいては仏教徒に限らず、出家者すべてについての総称として使用されていた。《婆羅門》brāhmaṇa インドのカースト制度の中で最上位を占める司祭者階級のこと。《中夜》夜間を初・中・後の三つに分け、

初夜・中夜・後夜というが、中間の中夜は午後十時から午前二時ごろまでを指す。**《無余涅槃》** anupadiśeṣa-nirvāṇa すべての煩悩を断じ尽して悟った人が、死ぬことによって身体の生存の制約からも離脱し、再び生をうけないという完全なる涅槃をいう。これに対し、まだ身心が残っている状態を有余涅槃という。**《徳蔵》** Śrīgarbha **《授記》** vyākaraṇa 仏が弟子たちに将来成仏の予言（記、記莂）を授けること。**《浄身多陀阿伽度》** Vimalanetra-tathāgata「多陀阿伽度」は tathāgata（如来）の音写語。前注「如来」の項参照（八八頁）。**《阿羅訶》** arhat の音写語。「阿羅漢」に同じ。応供と意訳され、尊敬をうける人、供養をうけるにふさわしい人の意。前注の「阿羅漢」の項参照（四三頁）。**《三藐三仏陀》** samyak-saṃbuddha の音写。等正覚、正遍知と漢訳する。正しく悟った人の意。**《滅度》** 無余涅槃のこと。「度」は（彼岸に）わたるという意味。入滅ともいう。**《燃燈》** Dīpaṃkara 原意は「燈明をともすもの」の意で、錠光とも訳される。**《求名》** Yaśaskāma 原意は「名声を欲する者」の意。

三　いわれ

文殊師利菩薩は遠い過去の昔から、多くの仏につかえてきた菩薩であった。弥勒菩薩から大衆を代表して今の仏の示現された瑞相のわけを問われて、こう答える。

今、仏・世尊、大法を説き、大法の雨をふらし、大法の螺を吹き、大法の鼓を撃ち、大法の義を演べんと欲するならん。

すなわち、これから大法＝妙法蓮華経が説かれるであろうと答えたのである。文殊師利菩薩がこの

ように答えることができたのは、彼が、かつて過去の諸仏について今と同じ出来事を経験したことがあったからであった。

さて、その過去の出来事とは、「過去、無量無辺不可思議阿僧祇劫」という思慮をはるかに超えた大むかしの日月燈明仏のはなしである。この日月燈明仏は代々同名の仏が続き、二万仏の日月燈明仏があらわれた。その最後の日月燈明仏のとき、ちょうど今の釈迦仏の時と同じく、まず日月燈明仏が「無量義・教菩薩法・仏所護念」と名づける大乗経を説かれ、説きおわると無量義処三昧に入られた。この時、天より種々の華がふりそそぎ、大地が六種に震動し、仏の眉間の白毫相より光が放たれて、東方の万八千の国土を照らされた。そこで日月燈明仏は、三昧より起って大乗教の「妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念」と名づける大法を説かれた。それ故、この日月燈明仏の前例によれば、今の仏も、まさに法華経を説いて実相の義をあきらかにしようと、この大奇瑞をおこされたのであるから、合掌して法華経の説かれるのを一心に持つがよいと、こう文殊師利菩薩は弥勒菩薩に述べたのである。

ところで、文殊師利菩薩は過去の諸仏につかえた菩薩であったが、実は一座を代表して質問した弥勒菩薩もまた過去の諸仏に奉事したことがあったのである。それならば、弥勒菩薩も文殊と同様の経験をして、今の瑞相の意味がわかるはずであるのに、そうではなく、文殊だけしか理解できなかった。それはなぜか。なぜ弥勒は理解できなかったのであろうか。ここで、経は文殊と弥勒の過去の前身の物語を説いて、それを明らかにするのである。

すなわち、二万仏の最後の日月燈明仏が法華経を説かれた時に妙光という菩薩がいた。日月燈明仏が滅度された後に妙光は、八十小劫という長期間、法華経を持ち、人々に説き、また日月燈明仏の八

人の子を教化したのであった。妙光には八百人の弟子がいたが、そのうちの一人、求名（ぐみょう）という弟子は、名利名聞（みょうりみょうもん）に執着し、いくら多くの経を読んでもすぐ忘れてしまうのであった。実はその時の妙光が、今の文殊であり、求名という弟子が弥勒であったのである。それゆえ、弥勒は過去に自分が諸仏につかえたことも忘れてしまっていて、今の瑞相の意味を理解できなかったというわけである。こうして、仏の示現された瑞相の意味が明かされ、一座は法悦歓喜にみなぎり、釈尊が三昧（さんまい）から起たれて、法華経を説かれるのをじっと待つのである。

なお、この文殊と弥勒の因縁譚（いんねんたん）の中で、日月燈明仏もはるか昔日に法華経を説かれたということが出てくるが、これを奇異なこととしてはならない。これは法華経が時間を超えた普遍的真理であるということを表現しようとしたものであるということに注意さるべきである。法華経の説く内容が、いつ、どこででも、常に真実であり真理であるという意味においては、その真理を説くものは釈迦一仏に限ったことではなく、過去の諸仏もまたこれまでに説いてきた、ということが当然あってよいのである。

爾時文殊師利。於大衆中。欲重宣此義。而説偈言。

我念過去世　無量無數劫　有佛人中尊　號日月燈明
世尊演說法　度無量衆生　無數億菩薩　令入佛智慧
佛未出家時　所生八王子　見大聖出家　亦隨修梵行

時佛說大乘　經名無量義　於諸大衆中　而爲廣分別
佛說此經已　卽於法座上　加[1]趺坐三昧　名無量義處
天雨曼陀華　天鼓自然鳴　諸天龍鬼神　供養人中尊
一切諸佛土　卽時大震動　佛放眉間光　現諸希有事
此光照東方　萬八千佛土　示一切衆生　生死業報處
有見諸佛土　以衆寶莊嚴　琉[2]璃頗梨色　斯由佛光照
及見諸天人　龍神夜叉衆　乾闥緊那羅　各供養其佛
又見諸如來　自然成佛道　身色如金山　端嚴甚微妙
如淨琉[3]璃中　內現眞金像　世尊在大衆　敷演深法義
一一諸佛土　聲聞衆無數　因佛光所照　悉見彼大衆
或有諸比丘　在於山林中　精進持淨戒　猶如護明珠
又見諸菩薩　行施忍辱等　其數如恒沙　斯由佛光照
又見諸菩薩　深入諸禪定　身心寂不動　以求無上道
又見諸菩薩　知法寂滅相　各於其國土　說法求佛道
爾時四部衆　見日月燈佛　現大神通力　其心皆歡喜
各各自相問　是事何因緣　天人所奉尊　適從三昧起
讚妙光菩薩　汝爲世間眼　一切所歸信　能奉持法藏
如我所說法　唯汝能證知　世尊既讚歎　令妙光歡喜
說是法華經　滿六十小劫　不起於此座　所說上妙法

是妙光法師　悉皆能受持　佛說是法華　令衆歡喜已
尋卽於是日　告於天人衆　諸法實相義　已爲汝等說
我今於中夜　當入於涅槃　汝一心精進　當離於放逸
諸佛甚難値　億劫時一遇　世尊諸子等　聞佛入涅槃
各各懷悲惱　佛滅一何速　聖主法之王　安慰無量衆
我若滅度時　汝等勿憂怖　是德藏菩薩　於無漏實相
心已得通達　其次當作佛　號曰爲淨身　亦度無量衆
佛此夜滅度　如薪盡火滅　分布諸舍利　而起無量塔
比丘比丘尼　其數如恒沙　倍復加精進　以求無上道
是妙光法師　奉持佛法藏　八十小劫中　廣宣法華經
是諸八王子　妙光所開化　堅固無上道　當見無數佛
供養諸佛已　隨順行大道　相繼得成佛　轉次而授記
最後天中天　號曰燃燈佛　諸仙之導師　度脫無量衆
是妙光法師　時有一弟子　心常懷懈怠　貪著於名利
求名利無厭　多遊族姓家　棄捨所習誦　廢忘不通利
以是因緣故　號之爲求名　亦行衆善業　得見無數佛
供養於諸佛　隨順行大道　具六波羅蜜　今見釋師子
其後當作佛　號名曰彌勒　廣度諸衆生　其數無有量
彼佛滅度後　懈怠者汝是　妙光法師者　今則我身是

我見燈明佛　本光瑞如此　以是知今佛　欲說法華經
今相如本瑞　是諸佛方便　今佛放光明　助發實相義
諸人今當知　合掌一心待　佛當雨法雨　充足求道者
諸求三乘人　若有疑悔者　佛當爲除斷　令盡無有餘

（1）加＝跏　（2）・（3）琉＝瑠

爾の時に、文殊師利、大衆の中に於いて、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「我、過去世の　無量無数劫を念うに　仏・人中尊有しき　日月燈明と号く。
世尊、法を演説し　無量の衆生　無数億の菩薩を度して　仏の智慧に入らしめたもう。
仏、未だ出家したまわざりし時の　所生の八王子　大聖の出家を見て　亦、随って梵行を修す。
時に仏、大乗経の　無量義と名づくるを説いて　諸の大衆の中に於いて　為に広く分別したもう。
仏、此の経を説き已り　即ち法座の上に於いて　加趺して三昧に坐したもう　無量義処と名づく。
天より曼陀華を雨らし　天鼓自然に鳴り　諸の天・龍・鬼神　人中尊を供養す。
一切の諸の仏土　即時に大に震動し　仏、眉間の光を放ち　諸の希有の事を現じたもう。
此の光、東方　万八千の仏土を照らして　一切衆生の　生死の業報処を示す。
諸の仏土の　衆宝を以て荘厳し　琉璃・頗梨の色なるを見ることあり　斯れ仏の光の照らしたもうに由る。
及び諸の天・人　龍神・夜叉衆　乾闥・緊那羅　各其の仏を供養するを見る。
又、諸の如来の　自然に仏道を成じて　身の色金山の如く　端厳にして甚だ微妙なること、

浄琉璃の中　内に真金の像を現ずるが如くなるを見る。　世尊、大衆に在して　深法の義を敷演したもう。
一一の諸の仏土　声聞衆無数なり　仏の光の所照に因って　悉く彼の大衆を見る。
或は諸の比丘の　山林の中に在って　精進し浄戒を持つこと　猶お明珠を護るが如くなるあり。
又、諸の菩薩の　施・忍辱等を行ずること　其の数恒沙の如くなるを見る　斯れ仏の光の照らしたもうに由る。
又、諸の菩薩の　深く諸の禅定に入って　身心寂かに動せずして　以て無上道を求むるを見る。
又、諸の菩薩の　法の寂滅の相を知って　各其の国土に於いて　法を説いて仏道を求むるを見る。」
爾の時に、四部の衆　日月燈仏の　大神通力を現じたもうを見て　其の心、皆歓喜して
各各に自ら相問わく　『是の事、何の因縁ぞ』と。
天・人、所奉の尊　適めて三昧より起ちて　妙光菩薩を讃めたまわく
『汝は為れ世間の眼　一切に帰信せられて　能く法蔵を奉持す。　我が所説の法の如き　唯、汝のみ能く証知せり』と。
世尊既に讃歎し　妙光をして歓喜せしめて　是の法華経を説きたもう　六十小劫を満つるも
此の座を起ちたまわず　説きたもう所の上妙の法　是の妙光法師　悉く皆、能く受持す。
仏、是の法華を説き　衆をして歓喜せしめ已って　尋いで即ち是の日に於いて　天・人衆に告げたまわく
『諸法実相の義　已に汝等が為に説きつ。　我、今、中夜に於て　当に涅槃に入るべし。
汝、一心に精進し　当に放逸を離るべし。　諸仏には甚だ値い難し　億劫に時に一たび遇いたてまつる』と。
世尊の諸子ら　仏、涅槃に入りたまわんと聞きて　各各に悲悩を懐く　『仏、滅したもうこと、一に何

ぞ速かなる』と。
聖主法の王　無量の衆を安慰したまわく　『我、若し滅度しなん時　汝等憂怖すること勿れ。
是の徳蔵菩薩　無漏実相に於いて　心已に通達することを得たり　其れ、次に当に作仏すべし。
号を曰って浄身と為づけん　亦、無量の衆を度せん』と。
仏、此の夜、滅度したもうこと　薪尽きて火の滅ゆるが如し。　諸の舎利を分布して　無量の塔を起つ。
比丘・比丘尼　其の数恒沙の如し。　倍、復、精進を加えて　以て無上道を求む。
この妙光法師は　仏の法蔵を奉持して　八十小劫の中に　広く法華経を宣ぶ。
是の諸の八王子　妙光に開化せられて　無上道に堅固にして　当に無数の仏を見たてまつるべし。
諸仏を供養し已って　随順して大道を行じ　相継いで成仏することを得　転次して授記す。
最後の天中天をば　号を燃燈仏と曰う。　諸仙の導師として　無量の衆を度脱したもう。
是の妙光法師　時に一りの弟子あり。　心に常に懈怠を懐いて　名利に貪著せり。
名利を求むるに厭くこと無くして　多く族姓の家に遊び　習誦する所を棄捨し　廃忘して通利せず。
是の因縁を以ての故に　之を号づけて求名と為す。　亦、衆の善業を行じ　無数の仏を見たてまつること
を得
諸仏を供養し　随順して大道を行じ　六波羅蜜を具して　今、釈師子を見たてまつる。
其れ後に当に作仏すべし　号を名づけて弥勒と曰わん。　広く諸の衆生を度すること　其の数量あること
無けん。
彼の仏の滅度の後　懈怠なりし者は、汝、是れなり。　妙光法師は　今則ち、我が身、是れなり。
我、燈明仏を見たてまつりしに　本の光瑞此の如し。　是を以て知んぬ、今の仏も　法華経を説かんと欲

するならん。
今の相、本の瑞の如し　是れ諸仏の方便なり。　今の仏の光明を放ちたもうも　実相の義を助発せんとなり。
諸人よ、今当に知るべし　合掌して一心に待ちたてまつれ。　仏、当に法雨を雨して　道を求むる者に充足したもうべし。
諸の、三乗を求むる人　若し疑悔有らば　仏、当に為に除断し　尽して余り有ること無らしめたもうべし。」

〔訳〕その時、文殊師利は、大勢の人々のなかで、再び以上の意義を宣べようとして詩頌を説いて次のように言った。

「私は過去の世の、数えきれない無数の劫の遠い昔を思い出すと、人々の中の至尊の仏がおられ、その名を日月燈明といった。(57)
世尊は法を演説され、はかりしれないほどの衆生たちを、億の無数倍という数の菩薩たちを（彼岸に）度し、仏の智慧に入れさせたもうた。(58)
（この）仏がまだ出家されない時にもうけた八人の王子は　大聖者の出家を見て、またそれに随って清浄な修行を行なった。(59)
ときに仏は、大乗の経の、「無量の意義を含むもの」と名づける経を説き、大勢のあつまりの中で、その人々のために広く説き明かした。(60)

仏はこの経を説きおわると、すぐさま法座の上で、　両足を組んで結跏趺坐し　三昧に入られた。その三昧は「無量の意義の基礎」という名である。(61)

天からは曼陀羅華の花が雨降り、天の鼓がおのずから鳴りわたり、　多くの天神、龍神、鬼神たちは、人々の中の至尊の方に供養した。(62)

一切の多くの仏の国土は、その時すぐさま大いに震動し、　仏は眉間から光を放ち、多くのめずらしい事がらを現わされた。(63)

この光は東方の、一万八千の仏の国土を照らし出し、　衆生たちすべての、生まれ死んで業の報いによって趣く処を示した。(64)

多くの仏の国土は、たくさんの宝によって荘厳となり、　瑠璃色や頗梨色に輝いているのが見られた。これは仏が放たれた光が照らし出していることによるのである。(65)

また多くの天や人、龍神や夜叉たち　乾闥婆、緊那羅たちが、それぞれ仏を供養するのが見られた。(66)

また次のようなものが見られた。すなわち、多くの如来たちが、おのずと仏道を成就して、　その身体の色が金色の山のように輝き、端正でおごそかであり、はなはだすぐれていた。そのさまは清らかな瑠璃の中に　純金の像を現わし出すようであった。　世尊は大勢の集まりの中にあって、奥深い法の意義をひろく演べられた。(67)

多くの仏の国土のその一つ一つには、声聞たちが数えられないほどいたが、　仏の光が照らし出したことによって、ことごとくその大ぜいの集まりが見えた。(68)

あるいは多くの比丘たちが、山林の中にあって　精進努力し、清浄な戒を持っており、それは
美しい宝珠を大事にしているかのようであった。(69)
また多くの菩薩たちが　布施・忍辱等の修行を行なっており、その数はガンジス河の砂のよう
に多いのが見えた。これは仏の光によって照らし出されたことによるのである。(70)
また多くの菩薩たちが、さまざまな禅定に深く入って、身心とも寂静に保ち動ぜず、それによ
って無上の道を求めているのが見られた。(71)
また多くの菩薩たちが、存在するものの究極的な真実のすがたを知って　おのおのがそれぞれ
の国土において、法を説いて仏道を求めているのが見えた。(72)
その時に、（比丘・比丘尼・信男・信女の）四衆の人々は、日月燈仏が　大神通力を現わされ
たのを見て　その心にみな歓びを感じて
おのおのが互いに尋ねあった。『このことは一体どういう理由からであろうか』と。(73)
天や人々に崇められる尊い方は、その時はじめて三昧から立ち上がり、妙光菩薩を讃められ
た。(74)
『汝は世間の眼であり、すべてのものに信じゆだねられて、教えの蔵をよく保持している。
私が説く法は、ただ汝のみが明らめ知ることができたのである。』(75)
世尊はすでに讃歎して、妙光を歓喜させ　この『法華経』を説かれた。六十小劫という年月が
満ちる間、(76)
そのあいだ座を起たれることはなかった。説かれたこのうえなくすぐれた法を　この妙光法

師は、すべてことごとくよく受けて記憶した。(77)

仏はこの『法華経』を説かれて、大勢のものたちを歓喜させると、ついで直ちにこの日において、天や人々の会衆に告げられた。(78)

『すべての存在の真実のありようの意義は、すでに汝たちに説いた。私は今宵、深更に、きっと涅槃に入るであろう。(79)

汝たちは、一心に精進し、放恣怠惰を離れよ。多くの仏たちに会うことは甚だむつかしい。一億劫という長い年月の間においても、たった一度会うことができるほどであろう。』(80)

世尊の多くの子たちは、仏が涅槃に入られると聞き、おのおのは悲しみとはげしい憂いを懐いた。『仏が入滅されるのがどうしてこのように早いのであろう』と。(81)

聖なる主であり、法の王（である仏）は、はかり知れない大ぜいのものたちを安らかに慰められて、次のように言われた。『私がもし入滅した時にも、汝らは憂い怖れてはならない。(82)

この徳蔵菩薩は、煩悩のない智慧によって明らかになる、ものの真実のすがたに その心がすでに通達することができた。彼は次にはきっと仏となることができるであろう。

その名を浄身というであろう。またはかり知れない大ぜいのものたちを（彼岸に）度すであろう。』(83)

仏はこの夜、入滅された。そのさまは、あたかも薪が燃え尽きて、火が消えたかのようであった。

仏の多くの遺骨を分配して（それぞれの遺骨を納める）数えきれないほど多くの塔廟を起てた。(84)

比丘、比丘尼の、その数はガンジス河の砂の数のように多かった。（彼らは）ますます精進に
精進を重ね、無上なる道を求めた。(85)
この妙光法師は、仏の教えの蔵を保持して　八十小劫にわたって、広く『法華経』を説き続け
た。(86)
この八王子たちは、妙光に教え開かれて　無上なる道に固く志して　必ず数えきれぬほどの仏
たちを見るにちがいなかった。(87)
（八王子は）多くの仏たちに供養しおわって、（仏たちに）随って大いなる道を修行して、あい
ついで仏となることができた。そして次から次へと将来仏になるであろうという予言を与えたの
である。(88)
その最後の諸天の中の天である仏は、その名を燃燈仏といった。　多くの仙人たちの導師として、
数えきれない大ぜいのものたちを済度された。(89)
この妙光法師に、一人の弟子があった。　その心に常に懈怠を懐き、名声利益に貪婪で執着して
いた。(90)
名声利益を厭くことなく求め、権門、富裕の家に遊ぶこと多く、　習い読誦したところも棄てて
しまい、忘失して精通することはなかった。(91)
このいわれによって、求名と名づけられたのである。　しかしまた、多くの善業を行ない、数え
きれぬほど多くの仏たちにまみえることができた。(92)
多くの仏たちに供養し、つき随って大いなる道を修行し、　六波羅蜜をそなえて、今、獅子なる

釈尊にまみえたのである。(93)

彼は後に必ず仏となるであろう。そしてその名を弥勒（みろく）というであろう。広く多くの衆生たちを済度して、その数は量り知れないほどであろう。(94)

かの仏が入滅された後、懈怠（けだい）であった者、それがあなたである。妙光法師とは、今のこの私のことである。(95)

私が燈明仏を見たてまつった時も、その本（もと）の光のめでたいしるしはこのようであった。(96)

このことから、今の仏も『法華経』を説かれようとしていると知れるのだ。(97)

今のありさまも、ちょうどもと現わされたしるしのようである。これは多くの仏たちの法を説く手段なのである。今の仏が光明を放たれたのも、この世界の真実のすがたという意義を発露させようとするためである。(98)

もろ人よ、今、知るべきである。合掌して一心に待つがよい。仏は必ず法の雨をふらして、仏の道を求める者を充たし満足させせられるであろう。(99)

三乗を求める多くの人々が、もしも疑いや後悔の心を生じたならば、仏は必ず、その人のためにそれらを除き断ち、余すところなく一掃されるであろう。」(100)

《**大聖**》聖人に、㈠外道の五神通を得た者　㈡阿羅漢・辟支仏　㈢神通を得た大菩薩、の三種があり、仏はこの三種中で最上である故に大聖といわれる。（『中論』巻二、観本際品）。《**頗梨**》sphaṭika　水晶のこと。七宝の一つ。《**法の寂滅の相**》この場合の「法」は「諸法」などといわれる時の法で、現象界に存在している

ものを指す。この世のあらゆる存在の真実のありようは、それぞれの存在が対立しあって各々が独自に固定的にあるのではなく、差別対立を離れて平等に一つのすがたとなって存在するということ。このような法のあり方を「法の寂滅の相」という。《**法蔵**》dharma-kośa　教えの蔵という意味で、仏の教説の含蔵されている経典のことを指す。《**諸法実相義**》すべての存在の真実のありようの意義。現象界のすべての事象は、差別対立を内に含みながら生滅をくりかえす存在であるが、実はそれがそのままで絶対の真実のすがたであり、不生滅な存在である、というのが諸法実相の意味である。この諸法実相は次章の方便品において詳説される。なお、梵本ではdharma-svabhāva-mudrā（法の本質の印）とあり、この語は次章に再出し（p.47 *l*.8）、そこでは羅什は同じ語を「実相印」と訳している。本書次章を参照のこと。《**無漏実相**》漏（āsrava）は煩悩のこと。煩悩のけがれない智慧によって明らかにされる現実界の真実のあり方をいう。《**天中天**》devatideva　諸天の中の最勝の天という意味。仏を指す。《**族姓**》権門、富裕の貴族階級のこと。《**釈師子**》釈尊を百獣の王の獅子に喩えた尊称。《**三乗**》声聞乗、縁覚乗、菩薩乗の三乗をいう。「乗」とは乗りもののことで、声聞、縁覚、菩薩、の三者それぞれを究極の目的に運ぶ手段としての教えをいう。本経では一仏乗（すべてのものが仏となるための教え）を説き、これがメインテーマの一つとなっている。

妙法蓮華經方便品第二

爾時世尊。從三昧。安詳而起。告舍利弗。諸佛智慧。甚深無量。其智慧門。難解難入。一切聲聞。辟支佛。所不能知。所以者何。佛曾親近。百千萬億。無數諸佛。盡行諸佛。無量道法。勇猛精進。名稱普聞。成就甚深。未曾有法。隨宜所說。意趣難解。舍利弗。吾從成佛已來。種種因緣。種種譬喩。廣演言教。無數方便。引導衆生。令離諸著。所以者何。如來方便。知見波羅蜜。皆已具足。舍利弗。如來知見。廣大深遠。無量無礙。力。無所畏。禪定。解脫。三昧。深入無際。成就一切。未曾有法。舍利弗。如來能。種種分別。巧說諸法。言辭柔軟。悅可衆心。舍利弗。取要言之。無量無邊。未曾有法。佛悉成就。止舍利弗。不須復說。所以者何。佛所成就。第一希有。難解之法。唯佛與佛。乃能究盡。諸法實相。所謂諸法。如是相。如是性。如是體。如是力。如是作。如是因。如是緣。如是果。如是報。如是本末究竟等。

爾の時に世尊、三昧より安詳として起ちて、舎利弗に告げたまわく、

「諸仏の智慧は甚深無量なり。其の智慧の門は難解難入なり。一切の声聞、辟支仏の知ること能わざる所なり。所以は何ん。仏曾て、百千万億無数の諸仏に親近し、尽く諸仏の無量の道法を行じ、勇猛精進して、名称普く聞こえたまえり。甚深未曾有の法を成就して、宜しきに随って説きたもう所なれば、意趣解し難ければなり。

舎利弗よ、吾れ成仏してより已来、種種の因縁、種種の譬喩をもって広く言教を演べ、無数の方便をもって衆生を引導して、諸の著を離れしむ。所以は何ん。如来は方便、知見波羅蜜、皆已に具足したればなり。舎利弗よ、如来の知見は広大深遠なり。無量、無礙、力、無所畏、禅定、解脱、三昧あって、深く無際に入り、一切未曾有の法を成就せり。

舎利弗よ、如来は能く種種に分別し、巧みに諸法を説き、言辞柔軟にして衆の心を悦可せしむ。舎利弗よ、要を取って之を言わば、無量無辺未曾有の法を、仏悉く成就したまえり。

止みなん。舎利弗よ、須らく復説くべからず。所以は何ん。仏の成就したまえる所は、第一希有難解の法なり。唯、仏と仏と、乃し能く諸法の実相を究尽したまえばなり。所謂、諸法の如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等なり。」

〔訳〕その時に世尊は、三昧から安らかに起ち上って、舎利弗に告げられた。

「多くの仏たちがそなえている智慧は、極めて深遠であり、はかり知れないものである。その智慧の門は理解しがたく、また入りがたい。一切の声聞、辟支仏たちの知ることのできないものである。そのわけはなぜか。それは、仏はかつて、百千万億という数えきれないほどの多くの仏たちに親しく近づき（そのもとで）多くの仏たちの無量の教えの法をことごとく修行し、勇ましく意志強固に精進努力し、その名声があまねく聞こえていた。そして、はなはだ深遠で、いまだかつてない法を体得した。（その法は）聴くものの能力に応じて（さまざまな形で）説かれたものであるから、その意趣は理解しがたいのである。

舎利弗よ、私は仏となってからこのかた、種々のいわれ、種々の譬喩をもって、広く教えを説き、無数の教化の手段によって、衆生たちを教え導いて、多くの執着を離れさせてきた。それはなぜか。如来は教化の手段と、物の本質を見きわめ覚るうえでの完全性とを、みなすでにそなえているからである。

舎利弗よ、如来の、真理を見きわめ覚る智慧は、広大で深遠である。四無量心、四無礙弁、十力、四無所畏、禅定、八解脱、三三昧があって、深く無際限の境に入り、一切のいまだかつてない法を体得したのである。

舎利弗よ、如来は、種々によくわきまえ、たくみに多くの法を説く。その言葉は柔軟で、多くのものたちの心を悦ばせる。舎利仏よ、要点をかいつまんでいえば、限りなく無量のいまだかつてない法を、仏はことごとく体得されたということなのだ。

やめよう、舎利弗よ、もうこれ以上説くことはできないのだ。それはなぜかといえば、仏が体得されたものは、第一の、まれにしかない、理解しがたい法であり、ただ、仏と仏とのみが、諸法実相という、すべての存在のありのままのすがたをよくきわめ尽すことができるからである。そのすがたとは、次のようなものである。すなわち、すべての存在のこのようなあり方（如是相）、このような特性（如是性）、このような本質（如是体）、このような能力（如是力）、このような作用（如是作）、このような直接的原因（如是因）、このような間接的条件（如是縁）、このような（原因によって生じた）結果（如是果）、このような（結果としての）報い（如是報）、このような（相から報までの）本と末とが究極的に一貫し、平等であること（如是本末究竟等）、以上がそうである。」

《随宜所説》仏は、教えを聴く者たちの能力（機根）に応じて、さまざまな教えの手段（方便）を用いて法を説く。これを対機説法（たいきせっぽう）というが、こうして説かれた教えは種々な形をとった多様性をもつものとなる。しかしながら、いずれの教えも同じ一つの真理に到達するための手段であり、そのうちのいずれかに執し、それに拘泥すれば、それらの奥にある真理を見失うことになる。それ故に「意趣解し難し」といわれるのである。因みに、梵本では saṃdhābhāṣya（密意を含むことば、秘密教とも訳す）とあり、仏の教えの言葉には表面上の意味のほかに、さらにその背後に密意が秘められている、その秘められた密意を知ることはむつかしいという意になる。《方便》upāya 方法、てだて、手段の意味であるが、この語は本章の章名にもなっているように、本経では極めて重要な意味をもっている。仏が、衆生教化のために用いる手段を善巧方便（すぐれた教化手段、upāya-kauśalya）というが、本章では、声聞、縁覚、菩薩のそれぞれのために示された三乗の教えが、実は一仏乗という、すべてのものが仏をめざす真実の教えのための方便であると明かされる（開三顕一）。このテーマは、さらに次章において、長者火宅の喩えによって詳しく明かされることになる。《著》執着のこと。《知見波羅蜜》知とは覚ること、見とは推求すること。知見とは、物事を覚り、推しはかること。波羅蜜は、完成、究極の意であるから、知見波羅蜜は物の本質を見きわめ、覚ることにおいて完全であることを意味する。《無量》四無量心（catvāry apramāṇāni）の略。仏が有する四つの広大な心をいう。その四つとは、㈠慈（maitrī）—衆生に楽を与える心、㈡悲（karuṇā）—衆生の苦しみを抜く心、㈢喜（muditā）—衆生の喜びを自らの喜びとする心、㈣捨（upekṣā）—上記の三心にとらわれず、怨親を平等にする心。この四心が仏にあっては無量であるとされ、仏の徳性の一つに数えられている。以下、三三昧までは同様に、仏のみがもつ徳性が挙げられている。

《無礙》四無礙弁の略。四無礙智とも四無礙解ともいう。仏菩薩の説法における四種の自在な能力をいう。四種とは、㈠法無礙（dharma-pratisaṃvid）—教法について滞りのないこと。㈡義無礙（artha-p°）—教法の意義内容について滞りのないこと。㈢辞無礙（nirukti-p°）—諸方の言語に通達して自在であること。㈣楽説無礙（pratibhāna-p°）—前三種の智をもって衆生のためにこころよく説き自在であること。以上の四種をいう。《力》十力の略。仏の有する十の智力のこと。㈠処非処智力（sthāna-asthāna-jñāna-bala）—道理・非道理を弁別する力、㈡業異熟智力（karma-vipāka-jñāna-bala）—業とその果報の関係を如実に知る力、㈢静慮解脱等持等至智力（mokṣa-samādhi-samāpatti-jñāna-bala）—禅定・八解脱・三三昧・等至などの禅を知る力、㈣根上下智力(indriya-parāpara-jñāna-bala)—衆生の機根の優劣を知る力、㈤種種勝解智力（nānā-adhimuk-tijñāna-bala)—衆生の種種の楽欲を知る力、㈥種種界智力(nānā-dhātu-jñāna-bala)—衆生の本性と類別を知る力、㈦遍趣行智力(sarvatra-gāminī-pratipaj-jñāna-bala)—衆生が業の報いによって生れ趣くところを知る力、㈧宿住随念智力(pūrva-nivāsa-anusmṛti-jñāna-bala)—過去世のことを知悉し思い出すことのできる力、㈨死生智力（cyuty-upapatti-jñāna-bala）—衆生の未来の生死を知る力、㈩漏尽智力（āsvara-kṣaya-jñāna-ba-la)—煩悩を断じた境地を知る力、以上の十種の力をいう。《無所畏》四無所畏(catur-vaiśāradya)のこと。仏が説法するに際して畏れを感じない四種の智徳をいう。その四種は、㈠正等覚無畏—完全に正しい悟りを得ているという無畏の心、㈡漏永尽無畏—煩悩を断じ尽したと明言して畏れない心、㈢説障法無畏—道の障害となる法を説くことを畏れない心、㈣説出道無畏—煩悩を断じる法を説くことを畏れない心、以上の四つをいう。《禅定》前章の注参照（七九頁）。これに初禅から四禅までの四段階がある。

《解脱》vimokṣa　煩悩の繫縛から脱して、平安なさとりの境地に入ることをいう。ここでは八解脱と解す。八解脱は煩悩の繫縛から脱する八種の解脱の意であるが、一般には解脱に至る八種の禅定の力を指す。《三

味》 samādhi の音写。等持と訳す。冥想に入り、心を平静にたもって対象に専注させること。これに次の三種がある。㈠空三昧—一切は空であり無我であると観ずる、㈡無相三昧—空である故に差別相はないと観ずる、㈢無願三昧—それ故、一切を願い求めるべきではないと観ずる、この三つを三三昧という。**《悦可》** 悦んで可とするの意。**《止みなん、舎利弗よ》** 以下に、仏は自らの法が聴衆に理解されないことを思い、三度にわたって舎利弗をおしとどめられる。それに対し、舎利弗は三度仏に法を説かれることを請願する。これを古来、三止三請という。

《諸法実相》 存在のありのままのすがたの意。「諸法」とは、現象界の事物、存在のすべてを意味する。「法」の原語は dharma で、この語は語根 √dhṛ（保持する）から派生した語である。「かわらないもの」という意味から規範、法則、慣例、理法、教法などの意に拡がり、インド社会一般に極めて多義的に使用されている。仏教ではこれらの意義のほかに、仏教独自の概念として、生滅変化する現象界の事物、この世界に現象としてあらわれている個々の実在という意味でこの語が使われる。この場合の諸法とか、あるいは一切法とかいわれる場合には、この用法である。「実相」とは、真実のありのままのすがたの意であるが、梵本には、直接これに相当する語句は見あたらない。第一章序品では dharma-svabhāva（法の自性）の語に実相という訳語が与えられている(p.25. 13ℓ, p.28. 8ℓ)。また羅什訳の他の訳経論書、『小品般若』『大品般若』『維摩経』『中論』『大智度論』などにも諸法実相の語がみえており、その意味する内容は、法性、真実相、真実理などである。諸法実相は特に中国天台で重視され、生死即涅槃、煩悩即菩提などの思想を生んだ。**《如是相……本末究竟等》** 中国天台はこの十項を十如是（にょぜ）（十如とも略す）とよんだ。すべての存在のあり方と生起を十のカテゴリーであらわしたものであるが、梵文原典、蔵訳にはこの十項はなく、ただ五項が挙げられており、『法華経論』は（菩提留支訳ならびに勒那摩提訳とも）何等法・云何法・何似法・何相法・何体法の五種法

を挙げて、梵文・蔵訳とよく一致する。『正法華経』も同じ。羅什がここで十種に訳したのは、『大智度論』巻三十二にみえる、体・法・力・因・縁・果・性・限礙・開通方便の九種法にヒントを得たものであろうとされている（本田義英『仏典の内相と外相』、昭和九年、坂本幸男「法華経の教理」金倉円照編『法華経の成立と展開』所収、昭和四十九年、等を参照）。

一　諸法実相

十如是

無量義処三昧に入られていた釈尊は、この方便品においてようやく三昧から起って舎利弗に、

仏の悟りの奥堂はまことに深く、なんじら声聞、辟支仏のうかがい知るところではない。

といわれた。これが法華経における仏の第一声である。仏の悟りは、仏と仏とのみよく究め尽したものであって、余人のあずかるところではない。それは諸法実相、すなわち一切万物の真実ありのままの相を明かすものであるという。それでは、一切万物の真実相である諸法実相とはどのようなものであるか。経はこれを存在のあり方を示す十種のカテゴリーとして示している。すなわち、如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等の十種の範疇である。この十項目は頭にみな如是ということばが冠されているので、古来これを十如是、あるいは十如と呼びならわしている。この十如是の一々は、

相とは、すがた、かたち、
性とは、そのものの本来もっている性質、
体とは、相と性とのよりどころとなる本質、
力とは、潜在的な能力、
作とは、作用・はたらき、
因とは、ものが生起し変化する直接的原因、
縁とは、助縁、すなわち原因を助ける間接的原因、
果とは、因縁によって生じた結果、
報とは、その結果が具体的に現われ出ること、
本末究竟等とは、第一の如是相を本とし、第九の如是報を末として、この本から末までが一貫して等しいことを「究竟して等し」という。等しいというのは各範疇がことごとく空であり、平等であり絶対であることをいう、つまり、さきの九如是を別論とすれば、この本末究竟等は総論である。

これが十如是であり、物心をとわず、すべての事物に一貫した法としてそなわり、それぞれの存在を支える真理となっている。すなわち、すべての事物の生起、存在はこの十如是の法則にしたがっているということである。これが一切万物の真実ありのままのすがたであり、諸法実相といわれるのである。

この十如是は、竺法護訳の『正法華経』には五項目となっており、インド唯一の法華経の注釈書で

ある世親（せしん）の『法華経論』も、「何等法」「云何法」「何似法」「何相法」「何体法」の五項目である。多くのサンスクリット本も五項目であり、チベット訳も同じく五項目である。ある学者は、*羅什（らじゅう）が『妙法蓮華経』を翻訳する際に、『大智度論』巻三十二に出づる「九種法」にヒントを得て、十の項目にまとめたものと論じている。

諸法の実相をあらわすものとして、あえて十如是に固執する必要はない。五如是でも三如是でも実相をあらわしておればそれでよい訳である。もし羅什が翻訳の際に五如是を十如是としたとするならば、翻訳という点では問題があるにしても、これは羅什の卓見であり、実相の範疇の整備を試みたものとして評価すべきであろう。

*本田義英『仏典の内相と外相』三八三頁。

一念三千

この十如是は、仏教の悟りのうえでどのようなはたらきをもつであろうか。

この十如是に着目して、仏道修行者の主体的な世界観としての「一念三千」の法門を構築し、それによって実践観法の体系をつくりあげたのが、中国の天台宗の大成者智顗（ちぎ）である。

一念三千というのは、一念心、つまりわれわれの日常に一瞬一刹那（せつな）に起こる心のことで、その一瞬の心のうちに三千という数に代表されるあらゆる事物、世界、宇宙全体が包含され、そなわっているとする法門である（ただし一念三千という用語の使用は天台六祖湛然にはじまる）。この法門はどのようにして導き出されたものかといえば、智顗の『摩訶止観（まかしかん）』巻五によると、

まず、十如是が万物の真実相であるならば、万物に平等に十如是は存在する。ここで、万物の存在は、これを地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天、声聞、縁覚、菩薩、仏の十の世界（十界）に分けることができる。このように、世界を迷いと悟りという観点から十の階層に分けるのは、華厳の世界観であるが、この十界は悟りへの可能性の上から、さらにその十界におのおの十界を具足しており（十界互具）、百界であるとする。それは、たとえば、地獄界の衆生も修行によってよく仏となりうるのも、地獄にも他の九界を具足しているからであり、また人間が地獄に堕ちたり、あるいは逆に菩薩となったりすることのできるのも、人界に他の九界を具足しているからである。このように十界にそれぞれ十界を具足して百界となるのが、修行上よりみた真実の世界相である。この百界はそれぞれ等しく十如是という存在のあり方によって支えられているから、この百界に十如是を乗じて、百界千如となる。この千如の一一は、衆生（主体）、五陰（主体を構成する物心五要素）、国土（環境）の三種の世間に存在するところから、千如に三種の世間をかけあわせると三千の法となるのである。この三千の法が、心を足場として現在前するとき、事事物物はみな融通して、餓鬼も仏となり、また草木も仏となる。その反対には仏も地獄となり、声聞も修羅となる。これをおしすすめると、仏界を除いた九界の衆生のうちにも仏界がそなわっており、また逆に、仏界にも地獄も含めた九界がそなわっているのであるから、ここに地獄にも善があるという性善説、そして仏にも悪があるとする性悪説にまでゆきつく（『観音玄義』）。この時、地獄の成仏も可能となり、仏の悪への救済も可能となるのである。

このように天台は十如是に依って一念三千の法門をたて、修行者の体得すべき究極の目的としたのであるが、この法門は日本天台に継承され、更に日蓮に至って「事の一念三千」として開花したので

ある。これは、天台の迹門（序品から安楽行品までの前十四品）、特に方便品に依った一念三千は衆生成仏の可能性を理法として示す因人理性の一念三千であって、修徳によって顕現する一念三千であり、これを理の一念三千と呼ぶ。これに対し、日蓮の本門（従地涌出品から勧発品までの後半十四品）、特に寿量品に依った一念三千は、仏の久遠実成が明かされたことにより、仏凡一如の上にたった果上顕現の一念三千であり、修徳によらずとも、凡夫の見るままの世界がそのまま仏界のあらわれであるとするものであり、これを事の一念三千と呼ぶのである。天台に始まる一念三千は、日蓮の「事の一念三千」に至って、法門としてのクライマックスに達したということができるであろう。

なお、この十如是に「三転読文」（または十如三転ともいう）といって、これを空、仮、中の三諦に読み、三度繰返して読むことがある。「是相如、是性如……」（是の相は如なり、是の性は如なり）と如で句を切れば、これは十界平等の空諦よみであり、「如是相、如是性……」（是の如きの相、是の如きの性）と相、性などで切れば、これは十界差別の仮諦よみである。そして、「相如是、性如是……」（相は如是、性は如是）と是で切れば、これは十界の実相をあらわす中諦よみである。天台ではこのように一文をそれぞれ三様に読んで、空・仮・中の三諦が円融していると説く。現在でも方便品を読誦する際に十如是を三度繰返して読むのはここに由来している。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

世雄不可量　諸天及世人　一切衆生類　無能知佛者

佛力無所畏　解脫諸三昧　及佛諸餘法　無能測量者
本從無數佛　具足行諸道　甚深微妙法　難見難可了
於無量億劫　行此諸道已　道場得成果　我已悉知見
如是大果報　種種性相義　我及十方佛　乃能知是事
是法不可示　言辭相寂滅　諸餘衆生類　無有能得解
除諸菩薩衆　信力堅固者　諸佛弟子衆　曾供養諸佛
一切漏已盡　住是最後身　如是諸人等　其力所不堪
假使滿世間　皆如舍利弗　盡思共度量　不能測佛智
正使滿十方　皆如舍利弗　及餘諸弟子　亦滿十方刹
盡思共度量　亦復不能知　辟支佛利智　無漏最後身
亦滿十方界　其數如竹林　斯等共一心　於億無量劫
欲思佛實智　莫能知少分　新發意菩薩　供養無數佛
了達諸義趣　又能善說法　如稻麻竹葦　充滿十方刹
一心以妙智　於恒河沙劫　咸皆共思量　不能知佛智
不退諸菩薩　其數如恒沙　一心共思求　亦復不能知
又告舍利弗　無漏不思議　甚深微妙法　我今已具得
唯我知是相　十方佛亦然　舍利弗當知　諸佛語無異
於佛所說法　當生大信力　世尊法久後　要當說眞實
告諸聲聞衆　及求緣覺乘　我令脫苦縛　逮得涅槃者

佛以方便力　示以三乘教　衆生處處著　引之令得出

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「世雄は量るべからず　諸天及び世人　一切衆生の類　能く仏を知る者無し。
仏の力、無所畏　解脱、諸の三昧　及び仏の諸余の法は　能く測量する者無し。
本、無数の仏に従って　具足して諸の道を行じたまえり。　甚深微妙の法は　見難く了すべきこと難し。
無量億劫に於いて　此の諸の道を行じ已って　道場にして果を成ずることを得て　我已に悉く知見す。
是の如き大果報　種種の性相の義　我及び十方の仏　乃し能く是の事を知しめせり。
是の法は示すべからず　言辞の相寂滅せり。　諸余の衆生の類　能く得解すること有ること無し。
諸の菩薩衆の　信力堅固なる者をば除く。
諸仏の弟子衆の　曾て諸仏を供養し　一切の漏已に尽くして　是の最後身に住せる　是の如き諸人等
其の力堪えざる所なり。
仮使、世間に満てらん　皆、舎利弗の如くにして　思を尽くして共に度量すとも　仏智を測ること能わじ。
正使、十方に満てらん　皆、舎利弗の如く　及び余の諸の弟子　亦十方の刹に満てらん
思を尽くして共に度量すとも　亦復、知ること能わじ。
辟支仏の利智にして　無漏の最後身なる　亦十方界に満ちて　其の数竹林の如くならん。
斯れ等、共に一心に　億無量劫に於いて　仏の実智を思わんと欲すとも　能く少分をも知ること莫けん。
新発意の菩薩の　無数の仏を供養し　諸の義趣を了達し　又、能善く法を説かんもの　稲麻竹葦の如

くにして　十方の刹に充満せん。
一心に妙智を以て　恒河沙劫に於いて　咸く皆共に思量すとも　仏智を知ること能わじ。
不退の諸の菩薩　其の数、恒沙の如くにして　一心に共に思求すとも　亦復知ること能わじ。
又、舎利弗に告ぐ　無漏不思議の　甚深微妙の法を　我、今已に具え得たり。
唯我是の相を知れり　十方の仏も亦然なり。
舎利弗よ、当に知るべし　諸仏は語異なること無し。　仏の所説の法に於いて　当に大信力を生ずべし。
世尊は法久しくして後　要ず当に真実を説きたもうべし。
諸の声聞衆　及び縁覚乗を求むるものに告ぐ　我、苦縛を脱し涅槃を逮得せしめたることは
仏、方便力を以て　示すに三乗の教を以てす。　衆生の処処の著　之を引いて出ずることを得せしめんとなり。」

〔訳〕その時に、世尊は、重ねて以上の意義を宣べようとして、次のような偈頌を説いていわれた。

「世間の雄者である仏たち（の数）は量ることができないほどである。多くの天と及び世の中の人々、そしてすべての生きとし生けるものの類いの中で、仏を知ることができるものはいない。(1)

仏の十力、四無所畏、八解脱、さまざまの三昧　及び仏の有するその他の法について、思いはかることのできるものはいない。(2)

（仏は）昔、無数の仏につき従い、多くの道法を身につけ修行したのだ。はなはだ深遠ですぐ

れた法は、見きわめ難く、また了解し難い。(3)

量り知れない億劫という長い間にわたって、この多くの道を修行してきた結果、道場において、その成果を見ることができ、私はすでにことごとく、見きわめさとることができた。(4)

このような大いなる果報と種々の、存在の本質とあり方という意義については、私と及び十方の仏とが、このことを知ることができたのである。(5)

この法は（ことばでは）示すことができない。それを言いあらわすことばがないからである。（仏以外の）他の生きとし生けるものの類いで、理解し体得することができるものは誰もいない。(6)

ただ、多くの菩薩たちの中で、信の力が堅固であるものだけを除いては。(7)

多くの仏たちの弟子たちの中で、かつて多くの仏たちに供養し、すべての煩悩(ぼんのう)がすでに断じ尽されて、（この世において）最後の肉体にとどまっている、そのような人々たちでさえ、その力の及ぶところではない。(8)

たとい、この世にみな、（智慧第一といわれる）舎利弗のような人が満ちあふれ、思慮を尽してともに思い量っても、なお仏の智慧を測ることはできない。(9)

（第十、十一偈は羅什訳にこれを欠く。）

辟支仏(びゃくしぶつ)で、利智を有し、煩悩のないこの世における最後の身体を有している人たちが、また十方世界に満ちて、その数が竹林のように多くあり、(12)

これらの人々がともに一心に、無量の億劫(おくこう)にわたって　仏の真実の智慧を思いはかろうとして

も、そのほんの少分をも知ることができないであろう。[13]　多くの（教えの）意趣を理解し通達し
新たに仏道に発心した菩薩で、無数の仏たちに供養し、
て、またよく法を説くことのできるもの、[14]
そのような人たちが、稲・麻・竹・葦のように、十方の国に充ちていたとして　一心にすぐれ
た智慧をもって、[15]
ガンジス河の砂の数のように多くの劫にわたって、　ことごとく皆ともに思い量ったとしても、
それでもなお、仏の智慧を知ることはできない。[16]
決して退くことのない位にある多くの菩薩たちが、ガンジス河の砂の数ほどいて、　一心にとも
に思いをめぐらしたとしても、またやはり、（仏の智慧を）知ることはできない。[17]
また、（私は）舎利弗に告げよう。『煩悩の汚れのない、不思議な、　きわめて深遠ですぐれた法
を、私は今すでにそなえることができた。
ただ私だけが、この（法の）あり方を知っている。十方の仏もまたそうである。[18]
舎利弗よ、当然知らねばならない。多くの仏たちにあっては、その言葉に異なるところはないと
いうことを。　仏の説かれた法に対して、必ず大きな信の力を生ずべきである。
世尊は、久しい間、法を（説かれた）後に、必ず、真実を説かれるであろう。[19]
多くの声聞たち、及び縁覚の教えの乗りものを求める者たちに告げる。　私は苦の繋縛から脱せ
しめ、涅槃を体得せしめたが、[20]
それには、仏は教化の手段の力によって、三乗の教えを示したのである。　衆生たちの、そのあ

れこれにおける執着、それを離れさせ、そこから出させようとしたからである』」と。(21)

《世雄》仏の異名。仏は世間において最も雄猛で、一切の煩悩を断じ尽したのでこう呼ばれる。《最後身》最後有ともいう。煩悩を断尽し、生死輪廻の生存から脱した聖者は、再び生をとることがないので、現在の肉体が最後のものとなる。これを最後身といい、阿羅漢がこれに相当する。《新発意》新たに発心し、仏道を求める心を起したものをいう。《不退菩薩》不退転の位に達した菩薩のこと。すなわち、仏道修行において、今までに得た功徳を決して失うことなく、将来仏となることが確定している菩薩のことをいう。

爾時大衆中。有諸聲聞。漏盡阿羅漢。阿若憍陳如等。千二百人。及發聲聞。辟支佛心。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。各作是念。今者世尊。何故慇懃。稱歎方便。而作是言。佛所得法。甚深難解。有所言說。意趣難知。一切聲聞。辟支佛。所不能及。佛說一解脫義。我等亦得此法。到於涅槃。而今不知。是義所趣。

爾時舍利弗。知四衆心疑。自亦未了。而白佛言。世尊。何因何緣。慇懃稱歎。諸佛第一方便。甚深微妙。難解之法。我自昔來。未曾從佛。聞如是說。今者四衆。咸皆有疑。唯願世尊。敷演斯事。世尊何故。慇懃稱歎。甚深微妙。難解之法。

爾時舍利弗。欲重宣此義。而說偈言。

慧日大聖尊　久乃說是法　自說得如是　力無畏三昧
禪定解脫等　不可思議法　道場所得法　無能發問者

我意難可測　亦無能問者　無問而自説　稱歎所行道
智慧甚微妙　諸佛之所得　無漏諸羅漢　及求涅槃者
今皆墮疑網　佛何故説是　其求縁覺者　比丘比丘尼
諸天龍鬼神　及乾闥婆等　相視懷猶豫　瞻仰兩足尊
是事爲云何　願佛爲解説　於諸聲聞衆　佛説我第一
我今自於智　疑惑不能了　爲是究竟法　爲是所行道
佛口所生子　合掌瞻仰待　願出微妙音　時爲如實説
諸天龍神等　其數如恒沙　求佛諸菩薩　大數有八萬
又諸萬億國　轉輪聖王至　合掌以敬心　欲聞具足道

爾の時に大衆の中に、諸の声聞、漏尽の阿羅漢、阿若憍陳如等の千二百人、及び声聞、辟支仏の心を発せる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷有り、各是の念を作さく、

「今者世尊、何が故ぞ、慇懃に方便を称歎して、是の言を作したもう。仏の得たまえる所の法は、甚深にして解し難く、言説したもう所有るは、意趣知り難し。一切の声聞、辟支仏の及ぶこと能わざる所なり。仏、一解脱の義を説きたまいしかば、我等も亦、此の法を得て涅槃に到れり。而るに、今、是の義の所趣を知らず。」

爾の時に舎利弗、四衆の心の疑を知り、自らも亦未だ了せずして、仏に白して言さく、

「世尊よ、何の因、何の縁あってか、慇懃に諸仏第一の方便、甚深微妙難解の法を称歎したもう。我昔より来、未だ曾て、仏より是の如き説を聞きたてまつらず。今者、四衆、咸く皆疑有り、唯、願わくは世尊よ、

斯の事を敷演したまえ。世尊よ、何が故ぞ、慇懃に甚深微妙難解の法を称歎したもうや。」
爾の時に舎利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

「慧日大聖尊　久しくあって乃し是の法を説きたもう。
自ら是の如き　力・無畏・三昧　禅定・解脱等の　不可思議の法を得たりと説きたもう。
道場所得の法は　能く問を発す者無し。　我が意測るべきこと難し　亦能く問う者無し。
問うこと無けれども而も自ら説いて　所行の道を称歎したもう。
知慧甚だ微妙にして　諸仏の得たまえる所なり。
無漏の諸の羅漢　及び涅槃を求むる者　今、皆、疑網に堕しぬ　仏何が故ぞ是れを説きたもう。
其の縁覚を求むる者　比丘・比丘尼　諸の天・龍・鬼神　及び乾闥婆等
相視て猶予を懐き　両足尊を瞻仰す。　是の事云可なるべき　願わくは仏よ、為に解説したまえ。
諸の声聞衆に於いて　仏、我を第一なりと説きたもう。
我、今、自ら智に於いて　疑惑して了すること能わず。　是れ究竟の法とや為ん　是れ所行の道とや為ん。
仏口所生の子　合掌瞻仰して待ちたてまつる　願わくは微妙の音を出して　時に、為に実の如く説きたまえ。
諸の天・龍神等　其の数恒沙の如し。　仏を求むる諸の菩薩　大数八万有り。
又諸の万億国の　転輪聖王の至れる　合掌し敬心を以て　具足の道を聞きたてまつらんと欲す。」

〔訳〕その時に、大勢のあつまりの中に、多くの声聞、煩悩を断じ尽した阿羅漢たち、すなわち阿若憍

陳如たちをはじめとする千二百人と、及び声聞や辟支仏を志そうとする比丘、比丘尼、信男、信女たちがおり、おのおのは次のように考えた。

「いま、世尊はどういうわけで、ねんごろに教化の手段をたたえて、このような言葉を口にされたのであろうか。『仏の体得された法は、深遠で理解しがたく、その説かれたものについても、その意義は知ることがむつかしい。すべての声聞や辟支仏たちの（理解の）及ぶところではない』と。仏は一つの同じ解脱を説かれたのであってみれば、我々もまた、この法を体得して、涅槃に到達しているわけである。しかしながら、今、仏がこのように説かれたその意義が、我々には理解することができない」と。

その時に、舎利弗は、比丘、比丘尼、信男、信女の人々の心中の疑念を察し、みずからもまた了解することができなかったので、仏にこう申しあげた。

「世尊よ、なんの理由、なんのいわくがあって、ねんごろに仏たちの第一の教化の手段と、深遠ですぐれた理解しがたい法を称讃されたのでしょうか。私は、昔から今日に至るまで、仏からいまだかつてこのような説をお聞きしたことがありません。今、比丘、比丘尼、信男、信女の人々は、みな疑いを懐いております。どうか、世尊よ、お願い申し上げます。このことを広く説いて下さいますように。世尊は、どういうわけで、ねんごろに深遠ですぐれた理解しがたい法を称讃されたのでしょうか」と。

その時に、舎利弗は、再び以上の意義を宣べようとして、偈頌を説いて言った。

「太陽のように明らかな智慧を有する大聖者は、長い年月の後、やっとこの法を説かれました。

（仏は）自らこのような、十力・四無所畏・三三昧、禅定、八解脱等の、不可思議な法を体得されたと説かれました。(22)

（仏が）道場にて得られた法については、問を発することのできる者さえおりません。（仏がいわれた）『私の心は思い測ることはむつかしい』ということについても、（その意義を）問うことのできるものさえもおりません。(23)

問うものもいないのに、（仏は）みずから説いて、（御自身の）修行された道を称歎されます。

（仏の）智慧ははなはだすぐれたものであり、多くの仏の得られたものであります。(24)

煩悩の汚れのない多くの阿羅漢と、及び涅槃を求める者たちは、今、皆、疑惑をもち、とまどっております。仏はどういうわけで、これを説かれたのであろうかと。(25)

縁覚を志す者、比丘、比丘尼　多くの天、龍、鬼神たち、及び乾闥婆等は(26)

たがいに顔を見あわせ、疑念を懐き、人中の最高者をじっとあおぎ見ております。　このことは

一体どういうことであるか、と。どうか、仏よ、これらのもののために、解説されよ。(27)

多くの声聞たちの中で、仏は私を（智慧において）第一であると言われました。(28)

その私は今、自身の智慧では、疑惑が生じ、了解することができません。（私がこれまでに獲得した法は）一体、これは究極の法であるのか、それとも、いまだに修行の道にあるところのものなのか、(29)

仏の口より生れた子（である仏弟子）たちは、合掌し、じっと仰ぎみて待ち上げております。

どうか、願わくは、すぐれたみ声を出して、（我々の）ためにあるがままを説かれたまえ。(30)

多くの天や龍神らは、ガンジス河の砂の数のように数多くおり　仏（の悟り）を求めている多くの菩薩たちの、その数は八万人もおります。(31)
また、多くの万億という国々の、転輪聖王（てんりんじょうおう）までやって来ており、合掌し、敬いの心をもって、「完全な道をお聞きしたいと思っております。」(32)

《阿若憍陳如》 Ajñāta-kauṇḍinya の音写。第一章序品の語注参照。**《一解脱》** 一つの同一の解脱。小乗においては、声聞、縁覚、菩薩の三乗は同一の解脱に到達するという意味。**《白仏言》**「白」は「いう」の意。仏典では、多く「言」の字を下にともなって、下位のものが上位のものに「申し上げる」の意で用いる。「白仏言」で、仏に申し上げるの意。**《慧日大聖尊》** 太陽のように明らかな智慧を有する尊い大聖者の意。仏をたたえる語。**《力・無所畏・解脱・諸三昧》** 前注（一一一―一一二頁）参照。**《道場》** 悟りを開いた場所。狭義には釈尊が悟りを開かれた Buddhagayā（ブダガヤー）の菩提樹下の金剛座を意味するが、一般には仏の悟りの場所すべてを指す。**《猶予》** もともと猶も予も、疑い深い獣のことを指すというが、疑惑、疑念の意。**《両足尊》** 仏の異称。仏は二本の足を有する衆生の中で最尊なのでこの名がある。

爾時佛告。舍利弗。止。止。不須復說。若說是事。一切世間。諸天及人。皆當驚疑。舍利弗。重白佛言。世尊。唯願說之。唯願說之。所以者何。是會無數。百千萬億。阿僧祇衆生。曾見諸佛。諸根猛利。智慧明了。聞佛所說。則能敬信。
爾時舍利弗。欲重宣此義。而說偈言。

法王無上尊　唯說願勿慮　是會無量衆　有能敬信者

佛復止舍利弗。若說是事。一切世間。天人阿修羅。皆當驚疑。增上慢比丘。將墜於大坑。

爾時世尊。重說偈言。

止止不須說　我法妙難思　諸增上慢者　聞必不敬信

爾時舍利弗。重白佛言。

世尊。唯願說之。唯願說之。今此會中。如我等比。百千萬億。世世已曾。從佛受化。如此人等。必能敬信。長夜安隱(1)。多所饒益。

爾時舍利弗。欲重宣此義。而說偈言。

無上兩足尊　願說第一法　我爲佛長子　唯垂分別說
是會無量衆　能敬信此法　佛已曾世世　教化如是等
皆一心合掌　欲聽受佛語　我等千二百　及餘求佛者
願爲此衆故　唯垂分別說　是等聞此法　則生大歡喜

(1)隱＝穩

爾の時に仏、舎利弗に告げたまわく、

「止みなん、止みなん、復説くべからず。若し是の事を説かば、一切世間の諸天及び人、皆当に驚疑すべし」

舎利弗、重ねて仏に白して言さく、

「世尊よ、唯願わくは之を説きたまえ、唯願わくは之を説きたまえ。所以は何ん。是の会の無数百千万億阿僧祇の衆生は、曾て諸仏を見たてまつり、諸根猛利にして、智慧明了なり。仏の所説を聞きたてまつらば、則ち能く敬信せん」

爾の時に舎利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

「法王・無上尊よ　唯説きたまえ、願わくは慮したもうこと勿れ。　是の会の無量の衆は　能く敬信すべき者有り」

仏、復、

「止みなん。舎利弗よ、若し是の事を説かば、一切世間の天、人、阿修羅、皆当に驚疑すべし。増上慢の比丘は将に大坑に墜つべし」

爾の時に世尊、重ねて偈を説いて言わく、

「止みなん、止みなん、須く説くべからず　我が法は妙にして思い難し。　諸の増上慢の者は　聞いて必ず敬信せじ」

爾の時に舎利弗、重ねて仏に白して言さく、

「世尊よ、唯願わくは之を説きたまえ。唯願わくは之を説きたまえ。今、此の会中の我が如き等比、百千万億なるは世世に已に曾て仏より化を受けたり。此の如き人等、必ず能く敬信し、長夜安隠にして饒益する所多からん」

爾の時に舎利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

「無上両足尊よ　願わくは第一の法を説きたまえ。　我は為れ仏の長子なり　唯分別し説くことを垂れたまえ。

是の会の無量の衆は　能く此の法を敬信せん。

仏已に曾て世世に　是の如き等を教化したまえり。　皆一心に合掌して　仏語を聴受せんと欲す。

我等千二百　及び余の仏を求むる者あり。
願わくは此の衆の為の故に　唯分別し説くことを垂れたまえ。　是れ等、此の法を聞きたてまつらば　則ち大歓喜を生ぜん。」

〔訳〕その時、仏は舎利弗に告げられた。
「止めよ、止めよ。二度と説くことはできないのだ。もしこのことを説くならば、すべての世間の多くの天や人々は、みな驚きあやしむにちがいない。」
舎利弗は、また重ねて（再度）仏に申し上げた。
「世尊よ、お願いです。どうかこれをお説き下さい。お願いです。どうかこれをお説き下さい。なぜなら、ここに集っている聴衆の、数えきれないほど多くの、百千万億の無数倍という衆生たちは、昔、多くの仏たちに見え、多くのすぐれた能力を有し、その智慧は明らかです。仏の説かれることをお聞きするならば、すぐさまそのことを敬い信ずることができるからであります。」
その時に、舎利弗は、重ねてこの意趣を宣べようとして、偈頌を説いて言った。
「法の王である、この上なく尊い方よ。どうかお説き下さい。なにとぞためらわれませんように。この会座にいるはかり知れない大勢のものたちは、（仏の説法を）敬い信ずることのできるものたちであります。」(33)
仏はまた言われた。
「止めよ、舎利弗よ。もしこのことを説いたならば、すべての世間の天や人々、阿修羅たちは、みな

きっと驚きあやしむにちがいない。思いあがった比丘は大きな穴に落ちこんでしまうであろう」と。

その時に世尊は、重ねて偈頌を説いて言われた。

「止めよ、止めよ。説いて何になろう。私の法はすぐれていて、思議することはむつかしい。

多くの思いあがった者たちは、聞いても必ず敬い信ずることはしないであろう。」(34)

その時、舎利弗は重ねて（三度）仏に申し上げた。

「世尊よ、どうかお願いです。これをお説き下さい。どうかお願いです。これをお説き下さい。今、この会座にいる私のような百千万億という大ぜいのものたちは、世々にわたって、すでに過去において仏から教えを受けてきました。このような人々は、きっと（仏の説法を）敬い信じることができ、それによって長い間、心が安泰となり、利益するところが多いことでしょう。」

その時、舎利弗は、重ねてこの意趣を宣べようとして、偈頌を説いて申し上げた。

「この上ない人中の最高者よ、どうか第一なる法を説かれたまえ。　私は、仏の長子たるものです。どうかことわけし、お説き下さいますように。

この会座のはかり知れない大ぜいのものたちは、その法を敬い信ずることができましょう。(35)

仏はすでにかつて世々にわたって、これらのものたちを教化せられました。　皆、心を一つにして合掌し、仏のお言葉をお聴きしようとしています。(36)

私たち千二百人と、及びそのほかにも仏を求めているものたちがおります。

お願いです。この大ぜいのものたちのために、ことわけしお説き下さいますように。　このものたちは、その法をお聞きしたならば、直ちに大きな歓びを生ずるでありましょう。」(37)

《**諸根猛利**》根（indriya）とは本来、感覚器官と、その器官の有する能力をいうが（たとえば「眼根」といえば、眼の感覚器官そのものと「見る」という能力との両義を同時に意味する）、ここでは、衆生を悟りに向かわしめる五種の能力、信・精進・念・定・慧の五根を意味する。それらの能力が非常にすぐれているから、仏の説法を理解することができると舎利弗はいうのである。

爾時世尊。告舍利弗。汝已慇懃三請。豈得不說。汝今諦聽。善思念之。吾當爲汝。分別解說。

說此語時。會中有比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。五千人等。卽從座起。禮佛而退。所以者何。此輩罪根深重。及增上慢。未得謂得。未證謂證。有如此失。是以不住。世尊默然。而不制止。

爾時佛告舍利弗。我今此衆。無復枝葉。純有貞實。舍利弗。如是增上慢人。退亦佳矣。汝今善聽。當爲汝說。舍利弗言。唯然。世尊。願樂欲聞。佛告舍利弗。如是妙法。諸佛如來。時乃說之。如優曇鉢華。時一現耳。舍利弗。汝等當信。佛之所說。言不虛妄。舍利弗。諸佛隨宜說法。意趣難解。所以者何。我以無數方便。種種因緣。譬喩言辭。演說諸法。是法非思量分別。之所能解。唯有諸佛。乃能知之。所以者何。諸佛世尊。唯以一大事因緣故。出現於世。舍利弗。云何名諸佛世尊。唯以一大事因緣故。出現於世。諸佛世尊。欲令衆生。開佛知見。使得淸淨故。出現於世。欲示衆生。佛之[1]知見故。出現於世。欲令衆生。悟佛知見

故。出現於世。欲令衆生。入佛知見道故。出現於世。舍利弗。是爲諸佛。唯(2)以一大事因縁故。出現於世。

(1)之＝春日本になし。　(2)唯＝底本になし。春日本で補う。

爾の時に世尊、舎利弗に告げたまわく、
「汝已に慇懃に三たび請じつ。豈説かざることを得んや。汝よ、今、諦かに聴き、善く之を思念せよ。吾当に汝が為に分別し解説すべし。」
此の語を説きたもう時、会中に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷五千人等有り。即ち座より起って仏を礼して退きぬ。所以は何ん。此の輩は罪根深重に、及び増上慢にして、未だ得ざるを得たりと謂い、未だ証せざるを証せりと謂えり。此の如き失あり。是を以て住せず。世尊黙然として制止したまわず。
爾の時に仏、舎利弗に告げたまわく、
「我が今此の衆は復枝葉無く、純ら貞実のみあり。舎利弗よ、是の如き増上慢の人は、退くも亦佳し。汝よ、今善く聴け、当に汝が為に説くべし。」
舎利弗の言さく、
「唯然。世尊よ、願楽わくは聞きたてまつらんと欲す。」
仏、舎利弗に告げたまわく、
「是の如き妙法は、諸仏如来、時に乃し之を説きたもう。優曇鉢華の、時に一たび現ずるが如きのみ。舎利弗よ、汝等当に信ずべし。仏の所説は、言虚妄ならず。舎利弗よ、諸仏の随宜の説法は意趣解し難し。所以は何ん。我、無数の方便、種種の因縁、譬喩、言辞を以て諸法を演説す。是の法は思量分別の能く解する所に非ず。唯諸仏のみ有して、乃し能く之を知しめせり。所以は何ん。諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以ての故に、

世に出現したもう。舎利弗よ、云何なるをか諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以ての故に、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なることを得せしめんと欲するが故に世に出現したもう。衆生に仏の知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舎利弗よ、是れを諸仏は唯一大事の因縁を以ての故に、世に出現したもうと為づく。」

〔訳〕その時に、世尊は舎利弗に告げられた。

「汝はすでに、くりかえし三たびにわたって、私に請うた。どうして説かずにおられよう。汝よ、今、つまびらかに聞き、よく思惟し、心に念え。私は、汝のためにことわけし、解説しよう」と。

仏がこの言葉を説かれた時、その会座の中に、比丘、比丘尼、信男、信女たち、五千人がいたが、すぐさまその座を起って、仏に礼拝して退出した。そのわけは、これらの輩は罪の根が深く重いばかりでなく、思い上っており、いまだ得ていないものを得たと思いこみ、いまだ悟っていないものを悟ったと思いこんでいたという、このような過失があった。そのようなわけで、（この座に）とどまらなかったのである。世尊は、沈黙をまもって、彼らを制止されなかった。

その時に仏は、舎利弗に次のように告げられた。

「今、私のまわりに集っているものたちの中には、枝葉が除かれ、純粋に正しく実のあるものたちだけとなった。舎利弗よ、このような思い上った人々は、退くのもまたよい。汝よ、今、よく聴くがよい。まさに汝のために説こう」と。

舎利弗は申し上げた。

「はい、そのとおりです。世尊よ、お聞きしたいと思います」と。

仏は舎利弗に告げられた。

「このようなすぐれた法は、多くの仏、如来が、ある一ときに説かれるものである。ちょうど、優曇鉢の花があるときに一度だけ現われるようなものである。舎利弗よ、お前たちは必ず信じるべきである。仏の説くところは、その言葉に虚偽はない。舎利弗よ、多くの仏たちの、それぞれの対象に応じた説法は、その意趣は理解しがたいものである。なぜならば、私は無数の教化の手段、種々のいわれ、譬喩や言葉によって多くの法を演説したからである。この法は、思慮分別によって理解できるものではない。ただ、多くの仏たちのみが、この法を知ることができるのみである。それはなぜかといえば、多くの仏、世尊たちは、ただ一つの大事ないわれのみの故に、世に出現されるからである。舎利弗よ、一体、いかなるものを、多くの仏・世尊はただ一つの大事ないわれのみの故に世に出現されると名づけるのであるか。(それはこうである。)多くの仏・世尊は、衆生たちに、仏の知見を開かしめて、(彼らが)清浄になることができるようにさせたいと思われるが故に、この世に出現された。衆生たちに仏の知見を示そうと欲するが故に、この世に出現された。衆生たちに、仏の知見を悟らせようと欲するが故に、この世に出現された。衆生たちに、仏の知見を得るための道に入らせようとするが故に、この世に出現されたのだ。舎利弗よ、これらのことを、多くの仏はただ一つの大事ないわれの故に、この世に出現されたというのである。」

《五千人等……礼仏而退》これを五千起去といい、この五千人の扱いをめぐって、後世、教学上種々の解釈が行なわれる。例えば、天台教学においては、これらの五千人は今の法華経の説法の直接の対象（当機）ではなく、その後に説かれる追説追泯たる涅槃経によって済度されるとする。《唯然》「唯」は間をおかない丁寧な肯定の返事の声。「然」は状態をあらわす接尾辞。「唯然」で、「はい、さようでございます」ほどの意。《優曇鉢》udumbara の音写。優曇華（うどんげ）とも訳す。樹木の名で、三千年に一度花を咲かせるといわれる。この花が咲く時は、仏または転輪聖王が出現するとされる。《仏知見》tathāgata-jñāna-darśana 知見とは、ものの本質を見きわめさとることをいう。仏は、この世界の如実の相を見きわめ悟ったものである。その仏の智慧について仏知見という。この仏の智慧を衆生に開・示・悟・入させることが、仏の一大事因縁である。なお、この開示悟入の四項を四仏知見というが、現存のサンスクリット諸本では、順に samādāpana（教化）、saṃdarśana（示）、avatāraṇa（入）、prati-bodhana（悟）の五項目となっている。しかし、世親の『法華経論』は羅什訳と同じく四仏知見を出だす。（苅谷定彦「四仏知見の本文想定」『印仏研』第十二巻一号、一七〇―三頁参照）

二　一大事因縁

無量義処三昧（むりょうぎしょさんまい）から起（た）たれた釈尊は、まず舎利弗にむかって諸法実相、すなわち十如是（じゅうにょぜ）を説かれ、これは汝らのうかがい知るところではない、ただ仏と仏とのみよく究め尽すところであるといわれた。

そしてそれに続けて、声聞・縁覚の二乗に対して、苦より解脱し涅槃を得せしめたところの仏の教えは、実は方便力をもって三乗の教えとして説いたものであって、これから説くところの教えが真実であると告げられた。

これを聞いた阿若憍陳如等の千二百人の阿羅漢をはじめ、多くの弟子達は愕然として驚き、われらは既に解脱を得ているのに、何故に仏の悟りと天地の懸隔があるのであろうかと、仏の真意を了解するのに苦しんだ。そこで舎利弗はこの疑団を代表して仏に問う。仏は何のために諸仏第一の不可思議の法を歎美されるのでありましょうか、昔より仏につかえたわたくしですら、いまだかつてこのことを聞いたことがなく、大衆はみなこの疑雲に閉ざされております、願わくは仏、これを説きたまえと。

この願いに対して仏は、

止みなん、止みなん、また説くべからず、と拒否された。舎利弗は二度、三度と同じお願いをし、仏は三度目にやっとその請いをいれて、真実の法を説かれることとなった（これを三止三請という）。

だが、この時、聴衆の一角より座をたち、仏を礼して退去した者たちがいた。およそ五千人の僧俗の増上慢を懐いている者たちであった。その時、仏は、舎利弗よ、かくのごとき増上慢の人は、退くもまたよしといわれ、彼らを制止なさらなかった。これを五千起去といっている。

ちなみに羅什訳は「退亦佳矣」とあり、「矣」の字を付している。本経中、この強意の「矣」の字の使用されるのはこの箇処だけである。

五千人の退座を見とどけてから、さて仏が舎利弗に説かれた教えは何であったか。これが「一大事因縁」の説法である。

一大事因縁

仏は舎利弗にむかい、諸仏の智慧は甚深であり無量であり、声聞・縁覚のよく知るところではない、これは「ただ仏と仏とのみよく究め尽す」といわれた。舎利弗はこれを聞いて、その甚深微妙の法を説き示したまえと請うこと三たびに及んで、仏は始めて、如来の此の世に出現したもうは一大事因縁のためであると説かれた。それでは一大事因縁とはなにか。それを経典はこのように説く。

諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なることを得せしめんと欲するが故に世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏の知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舎利弗よ、これを諸仏は唯だ一大事の因縁をもっての故に、世に出現したもうと為づく。

つまり、一大事因縁とは、仏知見、すなわち仏の悟りの智慧を衆生に開示悟入せしめるということである。仏知見（tathāgata-jñāna-darśana）とは、仏の悟りの智慧によってのみ得られる真実の見解である。これをすべての衆生に開き示し、悟らせ、入らしめるということは、すべての衆生に仏と同じ悟りを得させ、仏と同じ悟りの道に入らしむることである。その仏となる道とは仏へと導く乗りもの、つまり仏乗である。仏知見の開示悟入（これを四仏知見という）とは、すべての衆生を等しく一つの仏乗に帰入せしめようとすることにほかならない。それでは、そのことが何故に一大事因縁といわ

れるのであろうか。

それについて、後に説かれる偈頌のなかで、次のように仏の心のなかを説き明かしている。

仏は悟りを開いて道場に坐し、また歩き、三七日（さんしちにち）、すなわち二十一日のあいだこのようなことを考えた。

仏の得た智慧は最第一なるものである。それに反して衆生の資質は鈍にして昧く（くらく）、快楽（けらく）になずみ、愚痴におおわれている。このような衆生をどのようにして救済すべきか。こう考えた時、梵天王、帝釈天、四天王、大自在天等は仏に教えを説くように要請した。しかし、考えてみると、このような愚鈍の衆生にただ成仏道だけを説けば、この教えを信ずることができず、不信のとがによって三悪道に墜ちるであろう。それならばむしろ、法を説かないでこのまま涅槃に入ろうとさえ思った。だが、過去仏のなされたことを思うと、方便をもって法を説かれたから、今自分も、それにならって、得たところの仏の智慧、方便を設けて声聞・縁覚・菩薩の三乗の教えをもってこれを説くことにしようと、こう決意したのであった。

そして、このような経過を経て、声聞の教え、縁覚の教え、菩薩の教えというように、それぞれ法を聴く者に応じて法を説き、涅槃の法をたたえて生死の苦から永く彼らを救済した。しかし、仏の本当の願いは、一切の衆生が仏となるという教え（＝仏乗）を説くことにあった。

そこで、いよいよこの仏の悟りの智慧を説くことになれば、これまで生死の苦より救済せられて涅槃の法に愛着を覚えた声聞・縁覚の人々は、これ以上の法があると説かれても、それを信じることができなくて、疑うか、反発するか、拒否するかのいずれかであろう。事実、五千人余の増上慢の者た

ちは退場してしまった。

だが、今その仏の智慧を説く時がきた。経は偈頌の中でいう、

> 如来出でたる所以(ゆえん)は、仏慧(ぶって)を説かんが為の故なり。今、正しく是れその時なり。舍利弗よ、まさに知るべし、鈍根小智の人、著相(じゃくそう)憍慢の者は、この法を信ずること能わず。今、我、喜んで畏れなし。諸の菩薩の中において、正直に方便を捨てて、但だ無上道を説く。菩薩、この法を聞いて疑網(ぎもう)皆已(すで)に除く。千二百の羅漢、悉(ことごと)く亦まさに作仏すべし。

仏は今この時にあたって、直ちに方便の教えを捨て、最上の仏の教えを説くという。その教えによって菩薩はもちろん、千二百の阿羅漢たちも仏となることができるというのである。

これは二乗の修行道の価値転換である。すなわち、生死の苦から解脱した阿羅漢、縁覚道に対してそれが方便であることを明かし、一切衆生の苦しみを救済する仏道を称揚したということは、これまでの修行の価値を一変せしめる大宣言である。これは修行者にとっては一大変革であって、まさに一大事であるはずである。

人間の救済という宗教上の観点から、個人の解脱と、人類全体の救済とを比較するとき、人類全体の救済の方がより次元が高いことは自明の理である。仏教は個人の救済より出発したが、これを方便思想をもって蟬脱(せんだつ)し、より次元の高い大乗教にまで昇華したことは、宗教史上、大きな功績である。これを経典みずからが「一大事の因縁」と称したのもむべなるかなである。

佛告舍利弗。諸佛如來。但教化菩薩。諸有所作。常爲一事。唯以佛之知見。示悟衆生。舍利弗。如來但以。一佛乘故。爲衆生說法。無有餘乘。若二若三。舍利弗。一切十方諸佛。法亦如是。舍利弗。過去諸佛。以無量無數方便。種種因緣。譬喩言辭。而爲衆生。演說諸法。是法皆爲。一佛乘故。是諸衆生。從諸佛聞法。究竟皆得。一切種智。舍利弗。未來諸佛。當出於世。亦以無量。無數方便。種種因緣。譬喩言辭。而爲衆生。演說諸法。是法皆爲。一佛乘故。是諸衆生。從諸佛聞法。究竟皆得。一切種智。舍利弗。現在十方。無量百千萬億。佛土中。諸佛世尊。多所饒益。安樂衆生。是諸佛。亦以無量。無數方便。種種因緣。譬喩言辭。而爲衆生。演說諸法。是法皆爲。一佛乘故。是諸衆生。從佛聞法。究竟皆得。一切種智。舍利弗。是諸佛。但教化菩薩。欲以佛之知見。示衆生故。欲以佛之知見。悟衆生故。欲令衆生。入佛之(1)知見道(2)故。舍利弗。我今亦復如是。知諸衆生。有種種欲。深心所著。隨其本性。以種種因緣。譬喩言辭。方便力故。(3)而爲說法。舍利弗。如此皆爲。得一佛乘。一切種智故。舍利弗。十方世界中。尚無二乘。何況有三。舍利弗。諸佛出於。五濁惡世。所謂劫濁。煩惱濁。衆生濁。見濁。命濁。如是舍利弗。劫濁亂時。衆生垢重。慳貪嫉妬。成就諸不善根故。諸佛以方便力。於一佛乘。分別說三。舍利弗。若我弟子。自謂阿羅漢。辟支佛者。不聞不知。諸佛如來。但教化菩薩事。此非佛弟子。非阿羅漢。非辟支佛。又舍利弗。是諸比丘。比丘尼。自謂已得。阿羅漢。是最後身。究竟涅槃。便不復志求。阿耨多羅三藐三菩提。當知此輩。皆是增上慢人。所以者何。若有比丘。實得阿羅漢。若不信此法。無有是處。除佛滅度後。現前無佛。所以者何。佛滅度後。如是等經。受持讀誦。解其義者。是人難得。若遇餘佛。於此法中。便得決了。舍利弗。汝等當一心信解。受持佛語。諸佛如來。言無虛妄。無有餘

乘。唯一佛乘

(1)之＝春日本になし。　(2)道＝底本になし。春日本にて補う。　(3)故＝底本になし。春日本にて補う。

仏、舎利弗に告げたまわく、

「諸仏如来は但菩薩を教化したもう。諸の所作有るは常に一事の為なり。唯仏の知見を以て、衆生に示悟したまわんとなり。舎利弗よ、如来は但一仏乗を以ての故に、衆生の為に法を説きたもう。余乗の若しは二、若しは三有ること無し。舎利弗よ、一切十方の諸仏の法も亦是の如し。

舎利弗よ、過去の諸仏も、無量無数の方便、種種の因縁、譬喩、言辞を以て、衆生の為に諸法を演説したもう。是の法も皆一仏乗の為の故なり。是の諸の衆生の、諸仏より法を聞きしも、究竟して皆一切種智を得たり。舎利弗よ、未来の諸仏の、当に世に出でたもうべきも亦、無量無数の方便、種種の因縁、譬喩、言辞を以て、衆生の為に諸法を演説したもう。是の法も、皆一仏乗の為の故なり。是の諸の衆生の、諸仏より法を聞かんも、究竟して皆一切種智を得ん。

舎利弗よ、現在十方の無量百千万億の仏土の中の諸仏世尊の、衆生を饒益し安楽ならしめたもう所多き、是の諸仏も、亦無量無数の方便、種種の因縁、譬喩、言辞を以て、衆生の為に諸法を演説したもう。是の法も、皆一仏乗の為の故なり。是の諸の衆生の、仏より法を聞けるも、究竟して皆一切種智を得。舎利弗よ、是の諸仏は、但菩薩を教化したもう。仏の知見を以て衆生に示さんと欲するが故に、仏の知見を以て衆生に悟らしめんと欲するが故に、衆生をして仏の知見の道に入らしめんと欲するが故なり。舎利弗よ、我も今、亦復是の如し。諸の衆生に、種種の欲、深心の所著有ることを知って、其の本性に随って、種種の因縁、譬喩、言辞、方便力を以ての故に、而も為に法を説く。舎利弗よ、此の如きは、皆一仏乗の一切種智を得せしめんが為の故なり。

舎利弗よ、十方世界の中には、尚二乗無し、何に況や、三有らんや。舎利弗よ、諸仏は五濁の悪世に出でたもう。所謂、劫濁、煩悩濁、衆生濁、見濁、命濁なり。是の如し。舎利弗よ、劫の濁乱の時は、衆生垢重く、慳貪、嫉妬にして、諸の不善根を成就するが故に、諸仏、方便力を以て、一仏乗に於いて分別して三と説きたもう。舎利弗よ、若し我が弟子、自ら阿羅漢、辟支仏なりと謂わん者、諸仏如来の、但菩薩を教化したもう事を聞かず知らずんば、此れ仏弟子に非ず、阿羅漢に非ず、辟支仏に非ず。又舎利弗よ、是の諸の比丘、比丘尼、自ら已に阿羅漢を得たり、是れ最後身なり、究竟の涅槃なりと謂いて、便ち復、阿耨多羅三藐三菩提を志求せざらん。当に知るべし、此の輩は、皆是れ増上慢の人なり。所以は何ん。若し比丘の、実に阿羅漢を得たる有って、若し此の法を信ぜずといわば、是の処有ること無けん。仏の滅度の後、現前に仏無からんをば除く。所以は何ん。仏の滅度の後に、是の如き等の経を受持し、読誦し、其の義を解せん者、是の人得難ければなり。若し余仏に遇わば、此の法の中に於いて、便ち決了することを得ん。舎利弗よ、汝等当に一心に信解し、仏語を受持すべし。諸仏如来は言虚妄無し。余乗有ること無く、唯一仏乗のみなり。」

〔訳〕仏は舎利弗に告げられた。

「多くの仏、如来はただ（仏をめざす）菩薩だけを教化されるのだ。（仏の）なされることは多々あるけれども、それも常にただ一つのことのためである。すなわち、ただ仏の知見を衆生たちに示し、悟らせるということのみのためである。舎利弗よ、如来はただ一つの仏の乗りものをもってして、衆生たちのために法を説かれるのである。ほかの乗りものの、二つの（乗り）もの、あるいは三つの（乗り）ものは存在しないのだ。舎利弗よ、一切の十方の多くの仏たちの法も、また同様である。舎利弗よ、過去の多くの仏たちも、はかりしれない無数の教化の手段、種々のいわれ、譬喩やことばに

よって、衆生たちのために多くの法を演説された。この（多くの）法も、みな一つの仏の教えの乗りもののためなのである。この多くの衆生たちも、多くの仏たちから法を聞き、ついにみな、一切を知る仏の智慧を得たのである。

舎利弗よ、未来においても多くの仏たちが、世に出現されるであろう。その仏たちも、またはかりしれない無数の教化の手段、種々のいわれ、譬喩やことばをもって、衆生たちのために多くの法を演説されるであろう。その法も、みな一つの仏の教えの乗りもののためなのである。

この多くの衆生たちも、多くの仏たちから法をお聞きし、ついに、一切を知る仏の智慧を得るであろう。

舎利弗よ、現在における十方のはかりしれない百千万億という数の仏の国土の中の多くの仏、世尊が、生きとし生けるものに利益を与え、安楽ならしめられることは多くある。この多くの仏たちもまた、はかりしれない無数の教化の手段、種々のいわれ、譬喩のことばによって、衆生たちのために多くの法を演説される。その法も、みな一つの仏の教えの乗りもののためである。その多くの衆生たちも、仏から法をお聞きして、ついに一切を知る仏の智慧を得るのである。

舎利弗よ、この多くの仏たちは、ただ（仏をめざす）菩薩のみを教化されるのである。それは、仏の知見を衆生たちに示されんとするが故に、仏の知見を衆生に悟らせようとされるが故に、仏の知見の道に衆生たちを入らせようとされるが故からなのだ。

舎利弗よ、私も今、また同様である。さまざまな衆生たちには、種々さまざまな欲望や、心に深く執着するものがあることを知って、それぞれの本性に応じて、種々のいわれ、譬喩、ことば、教化の

手段の力によって（彼らの）ために法を説くのである。

舎利弗よ、十方世界の中には二つの乗りものすら存在しない。まして、どうして三つの乗りものが存在しようか。

舎利弗よ、多くの仏たちは五種の汚れに充ちた悪世に出現された。（その五種の汚れとは）すなわち、時代そのものの汚れ、生ける者の煩悩が盛んであることの汚れ、生ける者の心身が衰退することの汚れ、誤った思想が盛んであることの汚れ、生ける者の寿命が短命になることの汚れ、以上のごとくである。

舎利弗よ、時代が汚れ乱れている時には、衆生たちの汚れも重く、ものおしみと貪りの心が強く、嫉妬の心も深い。そして、彼らが多くの不善の行いをなすために、多くの仏は教化の手段の力によって、（本来）一つの仏の乗りものを、ことわけして三つ（の乗りもの）と説かれたのである。

舎利弗よ、もしも私の弟子のなかで、みずから自分は、阿羅漢である、辟支仏であると思っているものたちが、多くの仏、如来は、ただ菩薩のみを教化されるのであるということを聞かず、知らなかったとしたら、（彼らは）仏の弟子ではない、阿羅漢でもなく、辟支仏なぞでもない。

また、舎利弗よ、これらの多くの比丘、比丘尼たちが、みずから、既に阿羅漢となることができた、これがこの世における最後の肉体である、これが究極の悟りであると思いこんで、再び無上の正しい悟りを求める心をおこさなかったとしよう。まさに知るべきである。これらの輩は、みな思い上った慢心の人々であるということを。それはなぜか。もし、比丘であって、本当に阿羅漢となることができたものがいたならば、この法を信じないというような、そのような道理はありようがないからであ

る。ただ、仏が入滅された後で、その時現在、仏がおられない場合は別である。なぜなら、仏が入滅されたあとにあっては、このような経を受け持ち、読誦し、その意義を理解しうる者、そのような人は得がたいからである。(それ故、仏が入滅されて、後にのこされた人々は)もし、ほかの仏に出会うならば、その(仏の説かれた)法によって、確乎とした不動心を得ることができるであろう。

舎利弗よ、汝らは一心に信じ、理解し、仏のことばを受け持つべきである。多くの仏、如来の、そのことばの中にはいつわりはない。ほかの乗りものがあることはなく、ただ一つの仏の乗りものだけなのである」

《若二若三》 この語句には二様の解釈がある。その一は、「もしは二、もしは三」を二乗、あるいは三乗と解し、一仏乗のほかには声聞・縁覚の二乗、声聞・縁覚・菩薩の三乗という区別は存在しないという意にとるもの。次章の譬喩品で、声聞・縁覚・菩薩の三乗はそれぞれ、羊・鹿・牛車の三車の乗りものに喩えられ、一仏乗は大白牛車に喩えられているが、今の解釈の場合でいうと、三乗中の牛車に喩えられる菩薩乗は、大白牛車である一仏乗とは異なるものとなり、牛車のほかに大白牛車があることになる。それ故、乗としての車の数は四車となる。このことからこの解釈をとる学派を四車家といい、天台宗、華厳宗などがこれに相当する。一方、いま一つの解釈は、「もしは二、もしは三」を「第二の乗、第三の乗」と解するもので、この場合は、三乗中の菩薩乗(仏乗)のほかに、第二、第三の縁覚乗、声聞乗は存在しないという意となり、車でいえば、牛車と大白牛車とは同一のものということになる。したがって車の数としては三車となるから、この解釈をとる学派を三車家という。三論、法相の二宗がこれにあたる。この三車・四車の両義に関して古来、中国仏教においてさかんに論争がおこなわれ、この問題は日本の最澄と徳一の論争にまでもちこされ

た。南条・ケルン本の梵本では、この箇所は、dvitīyaṃ vā tṛtīyaṃ vā yānaṃ（第二、もしくは第三の乗りもの）とあり（p.40.l.14）、三車家の説に同じ。漢語としては、序数と解すよりも、「二つ」「三つ」ととる方が自然であろう。《一切種智》仏の、一切を知り尽くしたものの智慧。《十方》四方、四維（しゆい）、上下の十方向をいう。あらゆる方角を指す。《五濁》pañca-kaṣāga 悪世における五種の汚れのこと。今、仏教の世界観を『倶舎論』によって略述すると、この世界は成立期（成劫）、継続期（住劫）、破壊期（壊劫）、空漠期（空劫）の四つの時期（四劫という）を一つの周期として、これを無限にくりかえすという。各々の劫の長さは二十小劫（八八頁の語注参照）で、現在我々の世界は住劫の期間内にある。この住劫は成劫の二十小劫目が終った時に始まるが、この時、人間の寿命は無限であるという。それが住劫の二十小劫のうちの第一小劫の期間に漸次減少し、最後は十年となる（この、人の寿命が減少する期間を減劫という）。次の第二小劫目からは、十歳から次第に増加し（人の寿命が増加する期間を増劫という）、八万年にまで達し、そこから再び減少して、第二小劫の終りにはまた十年に至る。これが第十九劫までくりかえされる。つまり第二劫目以後は一小劫の間に、人の寿命は十歳から増加していって八万歳に達し、そこから再び減少していって十歳までになる。これを増・減劫という。第十九劫の終りで十年となった人の寿命は、最後の二十小劫が満了するまでに八万年に達して、そこで住劫が終わり、壊劫が始まる。ところで、人の寿命が減少していって、最後は十年になるという減劫の期間のうちで、八万年から減じていって人の寿命が百年から最低の十年までの間、これを五濁の悪世といい、五種の汚れが充満した時代である（『悲華経』巻五によれば、五濁の悪世の始まりは、人寿が二万歳に減じた時から始まるという）。普通、仏が出現されるのは、住劫を通じて十九回ある減劫のうちにただ一度だけであり、しかも人寿が八万年から百年に減ずるまでの期間内に限るとされている。それは、人寿が百年以下の時代には五濁が盛んで衆生の能力がとみに低下し、仏の法を聴くに堪えないから

である。しかし、本経においては、仏は五濁の悪世の中においてこそ、仏は出現されると説かれる。この点に注意すべきである。なお、五濁の悪世については、経論間で種々異説があり一定していない（『法苑珠林』巻九八参照）。《**劫濁**》kalpa-kaṣāya 天変地異などが多くなる時代そのものの汚れ。《**煩悩濁**》kleśa-kaṣāya 衆生の煩悩が盛んになること。《**衆生濁**》sattva-kaṣāya 衆生の心身が衰退し、苦が多く福が少なくなるという、衆生の資質そのものの低下。《**見濁**》dṛṣṭi-kaṣāya 見とは見解のこと。邪見や偏見（一方に偏った見解）、有身見（我執）などの悪見が盛んになること。《**命濁**》āyuṣ-kaṣāya 衆生の寿命が次第に短くなり、ついには十年にまで減少する。《**慳貪**》「慳」はものおしみ、「貪」はむさぼりのこと。

三　二乗作仏

二乗（にじょう）とは、仏の修行道（しゅぎょうどう）にたえられないことから、これをさけて声聞道（しょうもんどう）、縁覚道（えんがくどう）にすすんだものをいう。

二乗は自己の心の煩悩を滅（めっ）し尽（つく）し、最後には身体をも滅した状態（これを灰身滅智（けしんめっち）という）を究極の目的とするのであるから、身心を滅したならばもはや再生することはない。すなわち寂滅（じゃくめつ）の世界に遊ぶこととなる。従って、いかなる法もそこには成立しない。悪人は地獄におちるが、再生することができるから、修行次第でやがては仏にもなりうる可能性を残している。だが、二乗は徹底して空寂であるから、成仏の可能性は絶対にありえないことになる。これが仏教のたてまえである。だから二乗が成仏するとなれば、焦種（しょうしゅ）が芽を生ずるのと同じく、一切が成仏できるということの証明となる。だ

から一切衆生が成仏することをめざす大乗仏教にとっては、まさに二乗の成仏が大乗教そのものの成否と価値とに関する大きな指標となる訳である。

大乗教にあって、なかには二乗は成仏せずと説くものもあった。たとえば、『般若経』や『維摩経』などの経典では、二乗は成仏不可能の敗種として斥けられていた。だが、多くの大乗教は二乗の成仏を説いた。完全涅槃に入った二乗を覚醒して、あらたに仏となるための修行の歩みを実践せしめるために、大乗教は大いに苦慮したのである。二乗に仏道修行を実践せしめるためには、まず二乗を再生させなければならないとして、煩悩を仔細に検討し、二乗は完全涅槃するといっても、無明住地という究極的な煩悩はいまだ残している、二乗は三界内の分段生死を超えただけであり、無明住地の煩悩を残している限り、まだ三界の外の不思議変易生死をまぬかれない、だから二乗も再生するのであるといって、仏道修行の機縁を与えたものもあった（『勝鬘経』）。

それでは、法華経はどのようにして二乗を涅槃のねむりからさましたのであろうか。それは法華経の場合は、あくまで聞法の功徳によったのである。

方便品において釈尊は、舎利弗にむかってまず諸法の実相、すなわち十如是を説かれた。すなわち、諸法におのおの十如是を具有することによって一切万物の差別も、平等のうえに成り立っていることを法の上から説かれ、さきに声聞の教え、縁覚の教え、菩薩の教えとして分別して説いたのも、実は方便として施設したにすぎなく、今から仏の真実の教えを説くと宣言されたのである。これをもって一大事の因縁であるといって舎利弗を覚醒せしめるのである。その真実の教えとは、一仏乗、すなわちすべての衆生が仏になるという教えであり、そこには声聞・縁覚や菩薩の二乗とか三乗とかいうよ

うな区別はない。すべておしなべて仏にむかう菩薩のみの世界である。経はこのことを「諸仏如来は但菩薩のみを教化したもう」と説く。

この教えを聞くことによって、舎利弗をはじめとする二乗の人々は、自らの過ちに気づき、心を大乗へとめぐらして仏をめざす大乗の菩薩の道へ入ることができた。これが聞法の功徳であり、二乗の人々はここに大乗の菩薩として生まれかわり再生したのである。

それでは、二乗が廻小向大(えしょうこうだい)し、大乗の菩薩道に再生することを可能にするもの、すなわち聞法の功徳の、その根拠は何であろうか。本章では仏の智慧は難解難入であり、「唯仏与仏乃能究尽(ゆいぶつよぶつないのうぐうじん)」であると説かれる。それ故、仏の智慧は仏によってしかうかがい知ることはできない世界である。そして、その仏の智慧によって説かれた一仏乗の教えもまた、二乗には本来知られない教えである。したがって、二乗がその一仏乗の教えを聞いて、自から真に仏子であるという自覚をもつためには、何よりもまず、仏のその教えを信ずるという大前提がなければならない。仏が、たといどんなにすぐれた法を説いても、それを信じない者にとってはそれは画に描いた餅である。だから仏の説法の前に座をたった五千人の人々は、ついに仏子たりえず法華経によっては救われることはなかった。この仏のことばを信ずるということ、「信仏語」が廻小向大の何よりの根本条件であり、またそれ以外に仏の智慧にあずかる手段はないのである。仏の一仏乗の教えを信ずるということ、そのことによって仏子たることの自覚が生じ、ひいては仏から未来成仏の記が授けられるのであるから、大きくいえば、「信」は本経の一乗思想が成立するための根本条件でもある。経が「以信得入」と説いて「信」を強調するのもそのためであり、これはまた、一乗思想を説く他の経典でも同じことなのである。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

比丘比丘尼　有懷增上慢　優婆塞我慢　優婆夷不信
如是四衆等　其數有五千　不自見其過　於戒有缺漏
護惜其瑕疵　是小智已出　衆中之糟糠　佛威德故去
斯人尠(1)福德　不堪受是法　此衆無枝葉　唯有諸貞實
舍利弗善聽　諸佛所得法　無量方便力　而爲衆生說
衆生心所念　種種所行道　若干諸欲性　先世善惡業
佛悉知是已　以諸緣譬喩　言辭方便力　令一切歡喜
或說修多羅　伽陀及本事　本生未曾有　亦說於因緣
譬喩幷祇夜　優婆提舍經　鈍根樂小法　貪著於生死
於諸無量佛　不行深妙道　衆苦所惱亂　爲是說涅槃
我設是方便　令得入佛慧　未曾說汝等　當得成佛道
所以未曾說　說時未至故　今正是其時　決定說大乘
我此九部法　隨順衆生說　入大乘爲本　以故說是經
有佛子心淨　柔軟(2)亦利根　無量諸佛所　而行深妙道
爲此諸佛子　說是大乘經　我記如是人　來世成佛道
以深心念佛　修持淨戒故　此等聞得佛　大喜充遍身

佛知彼心行　故爲說大乘　聲聞若菩薩　聞我所說法
乃至於一偈　皆成佛無疑　十方佛土中　唯有一乘法
無二亦無三　除佛方便說　但以假名字　引導於衆生
說佛智慧故　諸佛出於世　唯此一事實　餘二則非眞
終不以小乘　濟度於衆生　佛自住大乘　如其所得法
定慧力莊嚴　以此度衆生　自證無上道　大乘平等法
若以小乘化　乃至於一人　我則墮慳貪　此事爲不可
若人信歸佛　如來不欺誑　亦無貪嫉意　斷諸法中惡
故佛於十方　而獨無所畏　我以相嚴身　光明照世間
無量衆所尊　爲說實相印

(1)尟＝尠　(2)軟＝輭

爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、
「比丘・比丘尼の　増上慢を懐くこと有る　優婆塞の我慢なる　優婆夷の不信なる
是の如き四衆等　其の数五千有り。
自ら其の過を見ず　戒に於いて欠漏有って　其の瑕疵を護り惜しむ　是の小智は已に出でぬ。
衆中の糟糠なり　仏の威徳の故に去りぬ。　斯の人は福徳尟くして　是の法を受くるに堪えず。
此の衆は枝葉無し　唯諸の貞実のみ有り。
舎利弗よ、善く聴け　諸仏所得の法は　無量の方便力をもって　衆生の為に説きたもう。
衆生の心の所念　種種の所行の道　若干の諸の欲性　先世の善悪の業、

仏悉く是れを知しめし已って　諸の縁・譬喩・言辞・方便力を以て　一切をして歓喜せしめたもう。

或は修多羅　伽陀及び本事　本生・未曾有を説き　亦、因縁　譬喩並びに祇夜　優婆提舎経を説きたもう。

鈍根にして小法を楽い　生死に貪著し　諸の無量の仏に於いて　深妙の道を行ぜずして　衆苦に悩乱せらる　是れが為に涅槃を説きたもう。

我、是の方便を設けて　仏慧に入ることを得せしむ。　未だ曾て汝等　当に仏道を成ずることを得べしと説かず。

未だ曾て説かざる所以は　説時未だ至らざる故なり。　今、正しく是れ其の時なり　決定して大乗を説く。

我が此の九部の法は　衆生に随順して説く。　大乗に入るに為れ本なり　故を以て是の経を説く。

仏子の心浄く　柔軟に亦、利根にして　無量の諸仏の所にして　深妙の道を行ずる有り。

此の諸の仏子の為に　是の大乗経を説く。

我、是の如き人　来世に仏道を成ぜんと記す。　深心に仏を念じ　浄戒を修持するを以ての故に

此れ等仏を得べしと聞いて　大喜、身に充遍す。　仏、彼の心行を知れり　故に為に大乗を説く。

声聞若しは菩薩　我が所説の法を聞くこと　乃至一偈に於いてもせば　皆成仏せんこと疑い無し。

十方仏土の中には　唯一乗の法のみ有り。　二無く亦三無し　仏の方便の説をば除く。

但、仮の名字を以て衆生を引導したもう。

仏の智慧を説かんが故に　諸仏世に出でたもうには　唯此の一事のみ実なり　余の二は則ち真に非ず。

終に小乗を以て　衆生を済度したまわず。

仏は自ら大乗に住したまえり　其の所得の法の如き　定慧の力荘厳せり　此れを以て衆生を度したもう。

自ら無上道　大乗平等の法を証して　若し小乗を以て化すること　乃至一人に於いてもせば、我則ち慳貪に堕せん　此の事は為めて不可なり。

若し人、仏に信帰すれば　如来欺誑したまわず。亦、貪嫉の意無し　諸法の中の悪を断じたまえり。

故に仏、十方に於いて　独り畏るる所無し。

我、相を以て身を厳り　光明世間を照らす。無量の衆に尊まれて　為に実相の印を説く。

〔訳〕その時に、世尊は重ねてこの意義を宣べようとして偈頌を説いて言われた。

「比丘・比丘尼のなかで思い高ぶりをいだくものがある。信男で、おのれをたのんで心おごれるもの、信女で、信心を欠いたものがある。

そのような四衆の人々の、その数は五千であった。(38)

みずからはその過失に気づかず、戒をたもつことにおいて欠けるところがあり、その欠点を、そのまま後生大事にかかえこんでいる。そのような智慧少きものたちは、既に出ていった。(39)

(彼らは) 集まりの中の糠の粕である。仏の威厳ある徳の故に去っていった。これらの人々は福徳が少くて、この法を受けることに堪えられないからである。(40)

(いまや、) この集まりの中には余分な枝や葉はない。ただ多くの純粋に実のあるものたちだけがいる。(41)

舎利弗よ、よく聴け、多くの仏たちが得られた法は　はかりしれない教化の手段の力をもって、
これを衆生たちのために説かれるのである。(42)

生きとし生けるものの心に思うところと、種々の修行の道、　なにがしかの意欲と、過去世にお
ける善悪の行いの結果、(43)

仏はことごとくこれらを知りおわってから、多くのいわれと譬喩と、　ことばの教えの手段の力
とをもって、すべてのものたちを歓喜させる。(44)

あるいは経典、詩頌及び過去世の物語と、　本生譚、奇蹟物語とを説き、またいわれと、　喩え
話、並びに重頌と、論議と（の九部の法）を説かれるのである。(45)

智慧において鈍く、劣った法を楽しみ、生死の世界に執着し、　多くのはかりしれないほどの仏
のもとで、深遠ですぐれた道を修行せずに　多くの苦に悩み乱されている。このような人々の
ために（仏は）涅槃（という心の絶対の平安）を説かれるのだ。(46)

私は、以上のような教化の手段を設けて、仏の智慧に入ることができるようにさせてきた。
（しかしながら、私は）いまだかつて、汝たちは必ず仏道を成就することができるであろうとは
説かなかった。(47)

いまだかつてそのように説かなかったそのわけは、説くべき時がいまだ到来しなかった故である。
今が、まさしくその時である。確乎として大乗の教えを説こう。(48)

私はこの九部の法を、衆生たちそれぞれに随って説いた。　大乗の教えに入る本であるからであ
る。それ故、この経を説いたのだ。(49)

仏の子で、心浄く、心が柔軟で智慧においてすぐれ、　はかり知れないほどの多くの仏たちのもとで、深遠ですぐれた道を修行するものたちがいる。

この多くの仏の子たちのために、（私は）この大乗の経典を説く。(50)

私は、このような人が　来世において仏道を成就すると予言するのである。　深く心に仏を念じ、浄い戒を修め持（たも）っているからである。(51)

これらの人々は、仏となることができると聞いて、大きな喜びで身体が充たされた。　仏は彼らの心のうちを知った。それ故に、彼らに大乗の教えを説くのである。(52)

声聞あるいは菩薩が、私の説く法を、　ほんの一つの詩句でも聞くならば、彼らはみな仏と成ることは疑いのないことである。(53)

十方の仏の国土の中には、ただ一つの乗りものの法のみあって、　二つのものもなく、三つのものもない。ただ仏の教えの手段としての説法は別である。

ただ仮りのことばによって、生きとし生けるものを導き入れるのだ。(54)

仏の智慧を説こうとする故に、多くの仏が世に出現されるのであるが、その場合　ただこの一つの（仏の乗りものという）ことだけが真実であり、そのほかの二は真（の乗りもの）ではない。

（仏は）究極的には、小さな教えの乗りものをもって生きとし生けるものを救われるということはないのだ。(55)

仏はみずから大きな教えの乗りものにとどまられており、その得られたところの法は　禅定（ぜんじょう）と智慧との力によっておごそかに飾られている。この法によって生きとし生けるものを済度される

のである。(56)

みずからこのうえない道である　大きな教えの乗りものの、すべてに対して平等な法をさとり、もし小さな教えの乗りものによって、ほんの一人でも教化したとするなら、　私はものおしみと貪り（むさぼり）の心に堕してしまうだろう。このようなことはありえないことである。(57)

もしも人が仏を信じて帰依（きえ）すれば、如来は欺（あざむ）くことはしない。　また貪り、嫉妬の心もない。すべてのものの中の悪を断じ尽しているからである。

それ故、仏は十方において、ただ一人、畏れるもののないものである。(58)

私は（三十二の）すがたをもって身を飾り、光明をもって世間を照らし出す。　はかり知れないほどの人々に尊ばれて、彼らのために、この世界の真実のすがたのしるしを説くのである。(59)

《我慢》自己の内に「我」があると執し、それをたのんで心がおごりたかぶること。**《修多羅》**sūtra の音写。契経と訳し、経典のこと。以下の「優婆提舎」までの九項は、九分教、あるいは九部経（navāṅgaśāsana）、といわれ、経典をその内容形式によって九種に分類したものである。**《伽陀》**gāthā の音写。偈頌、諷頌などと訳す。韻文体の経文をいうが、後の項の「祇夜」と区別して孤起頌ともいう。**《本事》**itivṛttaka 仏弟子の前世における由来を説いたもの。**《本生》**jātaka 仏の本生譚。仏の前生における種々な修行の物語を記したもの。**《未曾有》**adbhutadharma 奇蹟などの不思議な事蹟を記したもの。**《因縁》**nidāna ことの種々ないわれ、由来を説いたもの。**《譬喩》**avadāna 比喩を用いて説いた部分。**《祇夜》**geya の音写。重頌、応頌と訳す。散文部分（長行という）の内容を再び韻分で説いた部分のこと。

《優婆提舎》 upadeśa の音写。論議と訳す。問答形式による教理の議論の部分。**《鈍根》** 根とは素質、能力のこと。素質が遅鈍なのを鈍根といい、その反対を利根という。**《仏子》** 第一章の語注（七九頁）参照。大乗仏教では、菩薩のことを指すが、広く、仏の教えを聞く仏弟子をすべて仏子という。だから、声聞も菩薩も本来、仏子である。先段の偈の、舎利弗が仏に説法を三請するところで、声聞の舎利弗が自身を「仏口所生の子」「仏の長子」と呼んでいるのはその例。しかし、次章譬喩品の冒頭では、仏の一乗真実の法を聞いて領解した舎利弗が、「真にこれ仏子なり、仏の口より生じ、法化より生じて」と自己の感慨を述べているように、「真の仏子」とは、一仏乗の教えを聞き、廻小向大して声聞から大乗の菩薩となったものをいうとする。なお、本経の仏子論については、高崎直道『如来蔵思想の形成』四三〇―四四二頁を参照。**《心行》** caryā 心の動き、働きをいう。**《諸法中悪》** 諸法とは、すべての存在、ありとあらゆるものという意味（原語は sarvadharmāḥ）。すべてのものの中の悪。**《実相印》**「印」とは、しるし、標章、標識の意味で、諸法実相（すべての存在のありのままの真実のすがた）の理法は、この法華経のしるしであるというところから実相印とされる。梵本では（p.47 *l*.8）、dharma-svabhāva-mudrā とあり、直訳すれば「法の本性の印」となる。この語は第一章にもあらわれ、そこでは「諸法実相義」と訳されている。羅什訳ではいずれも dharma（法）をすべての存在である諸法ととっているが、一方、竺法護の『正法華』光瑞品では、この原語に対して「経典自然之誼」という訳をつけており（大正蔵、九巻、六六上）、この場合には dharma（法）は、経典、即ち教えの意にとられている。したがって、この原語については二様の解釈があることになる。

ここより以下に、長い偈文が本章のおわりまで続く。偈文の内容はこれまでの長行（じょうごう）部分と同一趣旨

である。しかし、記述はより詳細であり、長行に説かれていない内容もある。長行では、諸法実相、十如是、そして仏出世の本懐である仏知見の開示(かいじ)悟入(ごにゅう)が説かれていた。ところが、諸法実相の内容である十如是は羅什訳にのみ見え、羅什の創作に近いものであるところから、もともとの法華経では、長行部分における力点は、三乗方便一乗真実のうえに立った仏知見の開示悟入であるということになる。そして、このような視点に立つと、後段に説かれる仏道修行の種々相は、長行部分で説かれた仏知見の開示悟入のための具体的方法を説き明かしたものとみることができるのである。それ故に、従来重視されてきた長行部分よりも、むしろ偈文の中にこそ方便品の真の趣旨があり、そのなかに衆生に仏の知見を得さしめる秘説が開陳されているという見方があるのである。

このような見方がされるほどに偈文も長行にない重要なものを含んでいる場合があり、同一趣旨のくりかえしといって通り一遍に通過さるべきではない。

この段の要旨は次のごとくである。仏は衆生のために九部(くぶ)の法というさまざまな教えを説き、人々を苦から救ったが、しかし仏になる道は説かなかった。それは機がまだ熟さなかったからであるが、今説くべきその時が来た。もともと仏がさまざまな教えを説いたのもすべて大乗に入らしめるためであり、大乗の教えを聞くものは必ず成仏することができる。仏の教えには本来一仏乗のみあり、それ以外の二種あるいは三種の教えは存在しないというのである。

舎利弗當知　我本立誓願　欲令一切衆　如我等無異

如我昔所願　今者已滿足　化一切衆生　皆令入佛道
若我遇衆生　盡教以佛道　無智者錯亂　迷惑不受教
我知此衆生　未曾修善本　堅著於五欲　癡愛故生惱
以諸欲因緣　墜墮三惡道　輪廻六趣中　備受諸苦毒
受胎之微形　世世常增長　薄德少福人　衆苦所逼迫
入邪見稠林　若有若無等　依止此諸見　具足六十二
深著虛妄法　堅受不可捨　我慢自矜高　諂曲心不實
於千萬億劫　不聞佛名字　亦不聞正法　如是人難度
是故舍利弗　我爲設方便　說諸盡苦道　示之以涅槃
我雖說涅槃　是亦非眞滅　諸法從本來　常自寂滅相
佛子行道已　來世得作佛　我有方便力　開示三乘法
一切諸世尊　皆說一乘道　今此諸大衆　皆應除疑惑
諸佛語無異　唯一無二乘

舎利弗よ、当に知るべし　我、本、誓願を立てて　一切の衆をして　我が如く等しくして異なること無からしめんと欲しき。
我が昔の所願の如き　今者は已に満足しぬ。　一切衆生を化して　皆仏道に入らしむ。
若し我、衆生に遇いて　尽く教うるに仏道を以てせば　無智の者は錯乱し　迷惑して教えを受けず。
我知んぬ、此の衆生は　未だ曾て善本を修せず。　堅く五欲に著して　癡愛の故に悩みを生ず。

諸欲の因縁を以て　三悪道に墜堕し　六趣の中に輪廻して　備さに諸の苦毒を受く。
受胎の微形　世世に常に増長し　薄徳少福の人として　衆苦に逼迫せらる。
邪見の稠林　若しは有、若しは無等に入り　此の諸見に依止して　六十二を具足す。
深く虚妄の法に著して　堅く受けて捨つべからず。　我慢にして自ら矜高し　諂曲にして心不実なり。
千万億劫に於いて　仏の名字を聞かず　亦、正法を聞かず　是の如き人は度し難し。
是の故に、舎利弗よ　我、為に方便を設けて　諸の尽苦の道を説き　之に示すに涅槃を以てす。
我、涅槃を説くと雖も　是れ亦、真の滅に非ず。　諸法は本より来　常に自ら寂滅の相なり。
仏子、道を行じ已って　来世に作仏することを得ん。
我、方便力有りて　三乗の法を開示す。　一切の諸の世尊も　皆一乗の道を説きたもう。
今此の諸の大衆　皆応に疑惑を除くべし。
諸仏は語異なること無し　唯一にして二乗無し。

〔訳〕

舎利弗よ、必ず知るべきである。私は、もと誓願を立てて、すべてのものたちを私と等しく、異なることのないようにさせようと欲した。(60)

私が昔願ったその願いは、いまはすでに満たされた。すべての衆生たちを教化して、みな仏道に入らせたのである。(61)

もし私が、衆生たちに出会って、ことごとく仏道を教えるならば、智慧のないものは、錯乱し、

迷い惑って、その教えを受けとることができないであろう。(62)

私は知っている。これらの衆生たちは、いまだかつて善根をつんだことがなく、五つの感官の欲望にかたくとらわれ、愚迷と激しい煩悩のために悩みを生じていることを。(63)

多くの欲望のために、三種の悪道のなかに堕ち、六種の境涯の中で生死を繰り返して、ことごとに多くの苦痛を受けている。

受胎によって生じた微細な身体は、世々に増大してゆき、徳が薄く、福が少ない人となって、多くの苦しみにさいなまれる。(64)

よこしまな見解の密林の中に踏みこんで、あるいは「(一切は)有である」とか、あるいは「(一切は)無である」とか、多くの、このような誤った見解をよりどころとし、ついに六十二種の見解をそなえるに至っている。(65)

深く虚偽の説に執着して、かたくなにそれを受け入れて、捨てることができない。おのれをたのんで思い上ってみずから高ぶったり、他におもねって自らの心を曲げたりして、その心は不実である。

千万億劫という長時にわたって、仏の名を聞かず、また正しい教法を聞くこともない。このような人々は救うことが困難である。(66)

それ故、舎利弗よ、私はそのために教化の手段を設けて、苦を滅しつくす多くの道を説き、涅槃を示して見せるのだ。(67)

私が涅槃を説き示すといっても、これは真実の涅槃の境地ではない。(なぜなら)この世に存

在するものはすべて、もともとそのままでおのずと（本来の）涅槃の境地のすがたを示しているのである。

仏の子は仏道を修行しおわれば、来世には仏となることができよう。(68)

私には教化の手段の力があり、（それによって）三種の乗りものの法を開き示したが、すべての世尊たちは、みな一つの乗りものの道を説かれたのである。(69)

今や、この大勢のものたちは、すべて、（この点についての）疑惑が除かれるであろう。

多くの仏たちのことばはそれぞれ異なるものではなく、ただ一つであって、二つの乗りものは存在しないのである。(70)

《五欲》 眼・耳・鼻・舌・身の五つの感官の欲望をいう。**《癡愛》** 癡は愚迷で無知な心をいい、愛は渇愛のことで、のどの渇きのように激しい煩悩のことを指す。**《三悪道》** 六道（六趣）のうち、地獄・餓鬼・畜生の三種の悪道をいう。**《六趣》** 輪廻をくりかえす有情の六種の生存の形態あるいは境涯のことで、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六種類をいう。この六種の輪廻の生存から脱することを解脱という。**《受胎之微形・世世常増長》** この二句は、梵本では、kaṭasī ca vardhenti punaḥ punas te (p.48 *l*. 4, 64v.) に相当する。渡辺照宏博士は、諸写本との対照によって、この句の正しい読みは、kaṭasim vivardhenti〈尸林を増大する、すなわち徒らに生死を繰返すの意〉であるとし、これは訳者鳩摩羅什が kaṭasī（尸林）を kalala（羯羅藍＝受胎の初めから七日間までの胎児の状態）と取り違えたものらしいとしている。（渡辺照宏「法華経原典の成立に関する一考察」、金倉円照編『法華経の成立と展開』pp.103―104）しかし、訳者の誤りか、羅

什の使用したテキスト自体の写誤かは決定できない問題である。《六十二見》釈尊在世当時、インドに行なわれていた仏教以外の思想を総称したもの。《諂曲》おもねりへつらい、自らの心を曲げること。《方便力》衆生を教化するためさまざまな手段をめぐらす智慧の力を指す。《疑惑》仏は衆生を教化するのに声聞・縁覚・菩薩の三乗の教えを示されたのに、仏の教えはただ一つしかないと聞いて生じる疑惑。三乗は教化の手だて（方便）として施設されたものであって、一乗が真実であると明かされる。《無二乗》梵本では「第二のもの」（dvitīya）という。

この段では、仏は昔、すべての衆生を仏にならせるという誓願をたてたのに、しかも三乗それぞれの教えを説いたのはなぜかということを、長行部分よりもより一層詳しく述べている。仏が三乗の教えを説かなければならなかったのは、衆生の機根が熟せず正法を聴くにたえられなかったからであり、そのために方便としてかりに三乗の教えを説いたのであった。しかし、仏の真意は唯一つの仏乗、仏になるための教えを説くことにあり、それは今の仏も多くの仏も同じであり、ただ一つの仏乗のみあって更に余乗は存在しないのであると。

過去無數劫　無量滅度佛　百千萬億種　其數不可量
如是諸世尊　種種緣譬喩　無數方便力　演說諸法相
是諸世尊等　皆說一乘法　化無量衆生　令入於佛道

又諸大聖主　知一切世間　天人群生類　深心之所欲
更以異方便　助顯第一義　若有衆生類　値諸過去佛
若聞法布施　或持戒忍辱　精進禪智等　種種修福慧(1)
如是諸人等　皆已成佛道　諸佛滅度已　若人善軟(2)心
如是諸衆生　皆已成佛道　諸佛滅度已　供養舍利者
起萬億種塔　金銀及頗梨　車璖與馬腦　玫瑰琉璃珠
清淨廣嚴飾　莊(3)校於諸塔　或有起石廟　栴檀及沈水
木樒并餘材　塼瓦泥土等　若於曠野中　積土成佛廟
乃至童子戲　聚沙爲佛塔　如是諸人等　皆已成佛道
若人爲佛故　建立諸形像　刻彫成衆相　皆已成佛道
或以七寶成　鍮石赤白銅　白鑞及鉛錫　鐵木及與泥
或以膠漆布　嚴飾作佛像　如是諸人等　皆已成佛道
彩(4)畫作佛像　百福莊嚴相　自作若使人　皆已成佛道
乃至童子戲　若草木及筆　或以指爪甲　而畫作佛像
如是諸人等　漸漸積功德　具足大悲心　皆已成佛道
但化諸菩薩　度脫無量衆　若人於塔廟　寶像及畫像
以華香幡蓋　敬心而供養　若使人作樂　擊鼓吹角貝
簫笛琴箜篌　琵琶鐃銅鈸　如是衆妙音　盡持以供養
或以歡喜心　歌唄頌佛德　乃至一小音　皆已成佛道

若人散亂心　乃至以一華　供養於畫像　漸見無數佛
或有人禮拜　或復但合掌　乃至擧一手　或復小低頭
以此供養像　漸見無量佛　自成無上道　廣度無數衆
入無餘涅槃　如薪盡火滅　若人散亂心　入於塔廟中
一稱南無佛　皆已成佛道　於諸過去佛　(5)在世或滅後(6)
若有聞是法　皆已成佛道

(1)慧=德　(2)軟=輭　(3)塼=甎　(4)彩=綵　(5)在世=現在　(6)底本は「度」。意味上から底本の対校記及び春日本に従って「後」とする。

過去無数劫の　無量の滅度の仏　百千万億種にして　其の数量るべからず。
是の如き諸の世尊も　種種の縁・譬喩　無数の方便力をもって　諸法の相を演説したまいき。
是の諸の世尊等も　皆、一乗の法を説き　無量の衆生を化して　仏道に入らしめたまいき。
又、諸の大聖主　一切世間の　天・人・群生類の　深心の所欲を知しめして
更に異の方便を以て　第一義を助顕したまいき。
若し衆生、類有って　諸の過去の仏に値いたてまつって　若しは法を聞いて布施し　或は持戒・忍辱
精進・禅・智等　種種に福慧を修せし　是の如き諸人等　皆已に仏道を成じき。
諸仏、滅度し已って　若し人、善軟の心ありし　是の如き諸の衆生　皆已に仏道を成じき。
諸仏、滅度し已って　舎利を供養する者　万億種の塔を起てて　金・銀及び頗梨、
車𤦲と馬脳　玫瑰・瑠璃珠とをもって　清浄に広く厳飾し　諸の塔を荘校し、

或は石廟を起て　栴檀及び沈水　木樒並びに余の材　塼瓦泥土等をもってする有り。
若しは曠野の中に於いて　土を積んで仏廟を成し
乃至、童子の戯れに　沙を聚めて仏塔と為せる　是の如き諸人等　皆已に仏道を成じき。
若し人、仏の為の故に　諸の形像を建立し　刻彫して衆相を成せる　皆已に仏道を成じき。
或は七宝を以て成し　鍮石・赤白銅
白鑞及び鉛・錫　鉄・木及与び泥、　或は膠漆布を以て　厳飾して仏像を作れる　是の如き諸人等
皆已に仏道を成じき。
彩画して仏像の　百福荘厳の相を作すこと　自らも作し、若しは人をしてもせる　皆已に仏道を成じき。
乃至、童子の戯れに　若しは草木及び筆　或は指の爪甲を以て　画いて仏像を作せる
是の如き諸人等　漸漸に功徳を積み　大悲心を具足して　皆已に仏道を成じて、
但、諸の菩薩を化し　無量の衆を度脱しき。
若し人、塔廟　宝像及び画像に於いて　華香幡蓋を以て　敬心にして供養し、
若しは人をして楽を作さしめ　鼓を撃ち角・貝を吹き
簫・笛・琴・箜・篌　琵琶・鐃・銅鈸　是の如き衆の妙音　尽く持って以て供養し、
或は歓喜の心を以て　歌唄して仏徳を頌し　乃至、一小音をもってせしも　皆已に仏道を成じき。
若し人、散乱の心に　乃至、一華を以て　画像に供養せし　漸く無数の仏を見たてまつりき。
或は人有りて礼拝し　或は復、但、合掌し　乃至、一手を挙げ　或は復少し頭を低れて
此れを以て像に供養せし　漸く無量の仏を見たてまつり、　自ら無上道を成じて　広く無数の衆を度し

無余涅槃に入ること　薪尽きて火の滅ゆるが如くなりき。
若し人、散乱の心に　塔廟の中に入って　一たび南無仏と称せし　皆已に仏道を成じき。
諸の過去の仏の　在世或は滅後に於いて　若し是の法を聞くこと有りし　皆已に仏道を成じき。

〔訳〕

数えきれないほどの多劫の昔に、涅槃に入られた無量に多くの仏たちの、　その仏たちの種類は百千万億もあって、その数ははかり知られない。(71)

このような多くの世尊たちも、種々のいわれ、喩えと、　数えきれないほどの教化の手段の力とをもって、一切の存在のありようを演説された。(72)

この多くの世尊たちも、みな一つの乗りものの法を説き、　はかりしれないほどの衆生たちを教化して、仏道に入らしめられた。(73)

また、多くの偉大な、諸聖の上首は、一切の世間の、　天と人、多くの生類たちの、心の底にある意向を知られて、　さらに異なった教化の手段によって、最もすぐれた法を明らかにされたのだ。(74)

もし、衆生たちのなかで、多くの過去の仏に出会って、　その教えを聞いて布施を行ない、戒を持ち、忍耐の行をし、(75)

精進、禅定、智慧とをもって、さまざまに福徳智慧を修めるような、　そのような数多くの人たちは、みなすでに仏道を成就しているのである。(76)

多くの仏が入滅(にゅうめつ)したあと、その時もし人々に善い柔軟な心があったならば、そのような多くの衆生たちは、みなすでに仏道を成就しているのである。(77)

多くの仏が入滅したあとに、その遺骨を供養するものがいて、万億種類もの塔を建て、金・銀及び水晶、(78)

おうぎ貝と碼碯(めのう)と、赤玉、瑠璃珠とをもって、きよらかに、広くおごそかに飾って、多くの塔を建立し、(79)

あるいは石づくりの廟を建て、あるいは栴檀及び沈香(じんこう)の木、木樒(もくみつ)やそのほかの材料、瓦や泥土などをもって塔廟を建てるものもいる。(80)

あるいは、荒野において、土を積んで仏の廟を造ったり、(81)

子どもたちがたわむれに、砂を集めて仏塔をつくる、このような人々らは、みなすでに仏道を成就しているのである。(82)

もし、誰でも、仏のために、多くの形像(ぎょうぞう)を建て、それに多くのすがたを彫刻したとすれば、その人たちは、みなすでに仏道を成就している。(83)

あるいは七種の宝玉をもって、あるいは自然銅、真鍮(しんちゅう)、(84)

白鑞(はくろう)及び鉛(なまり)、錫(すず)、鉄、木及び泥をもって作ったり、あるいは漆喰(しっくい)の布で、おごそかに仏像を作る、このような人たちは、みなすでに仏道を成就している。(85)

仏像の画を描いて、多くの福徳をそなえたおごそかなすがたを、みずからも作り、あるいは人にも作らせたりするならば、その人たちはみなすでに仏道を成就しているのだ。(86)

あるいはまた、子供たちのたわむれに、草木や筆、もしくは指の爪で、仏像を画く、(87)
このような人々たちは、漸次功徳を積みかさね、大きなあわれみの心をそなえて、みなすでに仏道を成就しており、そして、多くの菩薩たちを教化し、はかりしれないほどのものたちを救済しているのである。(88)

もし、誰かが、塔廟や、宝像及び画像に、花や香、旗と天蓋をうやうやしく供えたり、(89)
あるいは誰かに音楽を奏させて、鼓をうたせ、つの笛、ほら貝をふかせて、(90)
簫・笛・琴・二十三弦琴・琵琶・鐃鈸など、すべてこのような多くの妙なる音をもって供養したり、(91)
あるいはまた、歓喜の心をもって、仏を讃嘆する唄を歌い、仏の徳を詩って、(92)
ほんのわずかな音をもって供養しても、(そのような人々は)みなすでに仏道を成就しているのである。(93)

もし誰かが、心乱れながらも、一本の花でも(仏の)画像に供えるならば、その人は次第に無数の仏に見えることになるであろう。(94)

あるいはまた、礼拝したり、ただ合掌しただけでも、または片手を挙げ、あるいはわずかに頭をたれて、
このようなことで(仏の)像に供養しただけでも、次第に無量の仏に見えることとなり、みずからこの上ない道を成就して、広く無数のものたちを救済したうえで、身心ともに滅した究極の涅槃に入る。そのさまはちょうど、薪が燃えつきて火が消えてゆくようである。(95)

もし、誰かが心乱れたままで、塔廟の中に入って、一たびでも「仏に帰依したてまつる」と称えるならば、その人たちは、みなすでに仏道を成就している。(96)

多くの過去の仏や　在世中（の仏）、あるいはその滅後に（これらの仏から）もしもこの法を聞くことがあったなら、その人たちはみなすでに仏道を成就しているのだ。(97)

《大聖主》聖主とは聖賢たちの上首の意で、仏のことを指す。**《第一義》**ならぶもののない最高の教え、真理のこと。**《布施・持戒・忍辱・精進・禅・智》**菩薩のなすべき六種の修行の徳目で、これを六波羅蜜（六度）という。**《栴檀》**candanaの音写。芳香をもつ香木の一種。**《沈水》**沈水香のこと。沈香と略す。上等な香木で、重くて水に沈むのでこの名がある。**《木櫁》**白檀に似た香木の一種（『文句』）。あるいは槐に似るともいう（『玄賛』）。**《七宝》**七種の宝石のことで、経論によって内容上の異同がある。本経でも、この章では金・銀・頗梨（水晶）・硨磲（おうぎ貝）・馬碯・玫瑰（赤玉）・瑠璃の七種の名が見え、授記品では頗梨のかわりに真珠があげられている。**《鍮石》**自然銅の良質なもの。

《百福荘厳相》百の福徳によって飾られた相。仏には凡夫にはない三十二種の特徴ある相貌があるが、その三十二の相にそれぞれ百の福徳が具わっていることをいう。**《箜篌》**二十三弦の琴。くだら琴。**《鐃》**銅製の皿形をしたシンバルに似た楽器で、打ち合せて音を発する。**《無余涅槃》**煩悩を断じ尽して涅槃に入り（これを有余涅槃という）心の平安を得ている人が、その肉体も滅することによって入る、完全で究極的な寂静の状態をいう。**《過去仏》**釈尊以前にこの世に出現したとされる仏たち。一般には過去七仏が有名であるが、本経の第一章序品にも二万の日月燈明仏などとあるように、多数の過去仏が説かれている。

ここでは、過去の無数の諸仏たちもみな一乗の教えを説き、一切衆生を救済してきたことを述べ、衆生たちが六波羅蜜（ろくはらみつ）の修行や、仏像仏塔を造立し、供養したり、あるいは一たび南無仏と称えるだけで仏になることができたという、衆生の成仏のためのさまざまな具体的実践方法が説かれている。

過去の諸仏のもとでのこうした修行は、また現在と未来における修行を示したものにほかならない。なぜなら、仏の教えは過去から現在、未来にわたって一貫して不変の真理だからであり、それ故に次の段で、未来の仏もまた同じ一仏乗を説いて衆生を救済すると説かれるのである。そして、仏の法を聞く者は一人残らずすべて仏となるのであり、それが諸仏の誓願（せいがん）であると説かれる。

未來諸世尊　其數無有量　是諸如來等　亦方便説法
一切諸如來　以無量方便　度脱諸衆生　入佛無漏智
若有聞法者　無一不成佛　諸佛本誓願　我所行佛道
普欲令衆生　亦同得此道　未來世諸佛　雖説百千億
無數諸法門　其實爲一乘　諸佛兩足尊　知法常無性
佛種從縁起　是故説一乘　是法住法位　世間相常住
於道場知已　導師方便説　天人所供養　現在十方佛
其數如恒沙　出現於世間　安隱(1)衆生故　亦説如是法
知第一寂滅　以方便力故　雖示種種道　其實爲佛乘
知衆生諸行　深心之所念　過去所習業　欲性精進力

及諸根利鈍　以種種因縁　譬喩亦言辭　隨應方便說

（1）隱＝穩

未来の諸の世尊　其の数、量有ること無けん。　是の諸の如来等も　亦、方便して法を説きたまわん。
一切の諸の如来　無量の方便を以て　諸の衆生を度脱して　仏の無漏智に入れたまわん。
若し法を聞くこと有らん者は　一りとして成仏せずということ無けん。　諸仏の本誓願は　我が所行の仏道を　普く衆生をして　亦、同じく此の道を得せしめんと欲す。
未来世の諸仏　百千億　無数の諸の法門を説きたもうと雖も　其れ実には一乗の為なり。
諸の仏・両足尊　法は常に無性なり、　仏種は縁に従って起ると知しめす　是の故に一乗を説きたまわん。
是れ、法住・法位にして　世間の相、常住なりと　道場に於いて知しめし已って　導師、方便して説きたまわん。
天・人の供養したてまつる所の　現在十方の仏　其の数、恒沙の如く　世間に出現したもうも　衆生を安隠ならしめんが故に　亦、是の如き法を説きたもう。
第一の寂滅を知しめして　方便力を以ての故に　種種の道を示すと雖も　其れ実には仏乗の為なり。
衆生の諸行　深心の所念　過去所習の業・欲性・精進・力
及び諸根の利鈍を知しめして　種種の因縁、譬喩、亦、言辞を以て　応に随って方便して説きたもう。

〔訳〕

未来の（世に出現する）多くの世尊は、その数ははかりしれないであろうが、それら多くの如来たちも、また教化の手段を講じて法を説かれるであろう。(98)

一切すべての如来は、はかりしれないほどの教化の手段をもって　多くの衆生たちを救済して、仏の、煩悩を滅し尽した智慧に入らせるであろう。(99)

もし法を聞くということがあるならば、その人たちは、一人として仏にならないものはないであろう。　多くの仏の本来の誓願は、私が行じてきた仏の道を　あまねく衆生たちにこの道を同じように得させようというものなのだ。(100)

未来の世の多くの仏たちは、百千億の　無数に多くの法門を説かれるであろう。しかし、それも実には一つの（仏の）乗りもののためなのである。(101)

人中の最高者である多くの仏たちは、この世のものにはそれ自身の固定的な存在性というものはなく、　仏の種子は縁起の理法によって生じると知って、それ故に一つの教えの乗りものを説かれるのである。(102)

これは、もののとどまり方、ものの本来的あり方そのものであって、世間のすがたはそのままで不変の真理のあらわれであると、　道場において悟られたのち、導師は教化の手段を用いて説かれるであろう。(103)

天と人に供養される、現在世の十方の仏は、　ガンジス河の砂のように数多く、世間に出現されるのも、　衆生たちを安らかにさせるためであり、またその故に、このような法を説かれるのである。(104)

最高の悟りの安らかな境地を知りながら、教化の手段の力をはたらかせて　種々の道を示すのであるが、それは実には仏の乗りもの（を説かんが）ためなのである。(105)

衆生たちの行いと、心の底にある思いと、　過去になしてきた行為の結果、意欲、精進、気力と、(106)
および、もろもろの素質能力がすぐれているか否かということを知って、種々のいわれ、喩えや言葉によって、それぞれの素質に応じて、教えの手段を設けて説法されるのである。(107)

《法常無性》 法とは現象界の事物。すべてのものは縁起によって成り立つ存在で、それ自体に個定的存在性を有せず、生滅変化をはなれた実体というものはみとめられない。このことを無自性といい、空ともいう。無性は無自性の略。**《仏種従縁起》**「仏種」は次章の譬喩品において二回あらわれるが、梵文にはこれに相当する語はみあたらない。『正法華』にもない。古来の注釈家はこの語を、「仏」(道生『妙法蓮花経疏』、法雲『法華経義記』)と解したり、仏の因としての「正因仏性」(智顗『法華文句』)、「菩提心」(吉蔵『法華義疏』)と解している。ここでは、後の譬喩品の用例から考えて、仏の因としての仏性、如来蔵の意ととる。そして「縁に従って起る」とは、直前の句の「法は常に無性」が縁起の理法を指しているものであるから、「縁」を縁起の理法と解して、成仏の因は縁起の理法にあり、この理法を知るものが仏となるという意にとっておく。この解釈は、道生の「仏縁レ理生」という解釈に近い。**《是法住法位・世間相常住》** 相当する梵文は次の如くである。dharmasthitāṃ dharmaniyāmatāṃ ca nityasthitāṃ loki imāmakampyāṃ (この法の常住性〔法住〕と法の不変性〔法位〕は、世間において、不動にして、常に存在する。) (p.53 9l.)
これでみると、「是法住法位」に関して、複合語 dharma-sthitā と dharma-niyāmatā とがそれぞれ、法住、法位に相当していることが知られる。法雲と吉蔵はこの句を「是の法は法位に住して」と訓読される理解を示しており、この訓み方がわが国でも今日まで一般的である。しかし、梵文との対応から考えると、この句

をそのように訓むのは適当ではない。それ故今は「是れ、法住・法位にして」と、岩波本と同様の訓みをした。「法住」とは、法の本来的なとどまり方、「法位」は、本来的あり方をいう。すなわち、法（もの）は縁によって生じたもので、それ自体に不変の固定的実体はなく、空である。それが法（もの）の本来的あり方であるというのである。「世間相常住」とは、生滅変化してゆく無常な世間にあって、縁起によって成り立っている存在（法）が、そのあるがままでその本来的な不変の真実のすがたをあらわしているという意味である。すなわち、生滅変化してゆく存在（法）は、そのままで不変の真理のあらわれであって、常住であるということである。この、現象のうえにただちに真理をみるという思想は中国天台において特に重要視され、それは日本天台に継承されて、天台本覚法門を生んだ。**《第一寂滅》**寂滅は涅槃の境地をいい、煩悩を断じ、生死の世界を超越したところに得られる絶対平安の状態をいうが、本経では、これは先に「真の滅には非ず」といって否定された小乗の涅槃のことを指している。超えられるべき生死の世界が、実はそのまま本来、寂静の涅槃の状態にあるとするのが、第一の寂滅であるという。「諸法従本来、常自寂滅相」「諸法実相」も同意味である。**《欲性》**意向、意欲のこと。adhimukti の訳。**《力》**直前の「精進」の語と結びつけて「精進力」と解すのが従来の訓み（ただし、岩波本は「精進と力と」と訓む）であるが、梵本では相当箇処（五三頁、一六行）は、vīryaṃ ca sthāmaṃ ca viditvā jñātvādhimuktiṃ ca prakāśayanti // (106) のごとくで、「精進（vīrya）と力（sthāman）」とある。ここでは「力」は衆生の身体、あるいは精神の力、勢力を意味するか。

先の段に続き、未来及び現在の仏もまた、過去の仏と同様に衆生の機根を考慮してまず三乗という方便を設けて衆生を誘引し、次にただ一つの仏乗を明らかにしてそれによって一切衆生を救済するの

だということが説かれる。次段においては、そのことが釈尊の成道時の梵天勧請の仏伝によって一層詳しく説かれている。

今我亦如是　安隠(1)衆生故　以種種法門　宣示於佛道
我以智慧力　知衆生性欲　方便説諸法　皆令得歡喜
舍利弗當知　我以佛眼觀　見六道衆生　貧窮無福慧
入生死嶮(2)道　相續苦不斷　深著於五欲　如犛牛愛尾
以貪愛自蔽　盲瞑無所見　不求大勢佛　及與斷苦法
深入諸邪見　以苦欲捨苦　爲是衆生故　而起大悲心
我始坐道場　觀樹亦經行　於三七日中　思惟如是事
我所得智慧　微妙最第一　衆生諸根鈍　著樂癡所盲
如斯之等類　云何而可度　爾時諸梵王　及諸天帝釋
護世四天王　及大自在天　并餘諸天衆　眷屬百千萬
恭敬合掌禮　請我轉法輪　我即自思惟　若但讚佛乘
衆生沒在苦　不能信是法　破法不信故　墜於三惡道
我寧不説法　疾入於涅槃　尋念過去佛　所行方便力
我今所得道　亦應説三乘　作是思惟時　十方佛皆現
梵音慰喩我　善哉釋迦文　第一之導師　得是無上法

隨諸一切佛　而用方便力　我等亦皆得　最妙第一法
爲諸衆生類　分別説三乘　少智樂小法　不自信作佛
是故以方便　分別説諸果　雖復説三乘　但爲敎菩薩

(1)隱＝穩　(2)嶮＝険

今、我も亦、是の如し　衆生を安隠ならしめんが故に　種種の法門を以て　仏道を宣示す。
我、智慧力を以て　衆生の性欲を知って　方便して諸法を説いて　皆、歓喜することを得せしむ。
舎利弗よ、当に知るべし　我、仏眼を以て観じて　六道の衆生を見るに　貧窮にして福・慧無し。
生死の嶮道に入りて　相続して苦断えず　深く五欲に著すること　犛牛の尾を愛するが如し。
貪愛を以て自ら蔽い　盲瞑にして見る所無し。　大勢の仏　及与び断苦の法を求めず
深く諸の邪見に入りて　苦を以て苦を捨てんと欲す。　是の衆生の為の故に　而も大悲心を起こしき。
我、始め道場に坐し　樹を観じ、亦、経行して　三七日の中に於いて　是の如き事を思惟しき。
『我が所得の智慧は　微妙にして最も第一なり。　衆生の諸根、鈍にして　楽に著し癡に盲いられたり。
斯の如きの等類　云何がして度す可き』と。
爾の時に、諸の梵王　及び諸の天帝釈　護世四天王　及び大自在天　並びに余の諸の天衆　眷属百千万　恭敬、合掌し礼して　我に転法輪を請ず。
　我即ち自ら思惟すらく　『若し但、仏乗を讃めば　衆生、苦に没在し　是の法を信ずること能わじ。
法を破して信ぜざるが故に　三悪道に墜ちなん。　我、寧ろ法を説かずとも　疾く涅槃にや入りなん。』
尋いで過去の仏の　所行の方便力を念うに　『我が今得る所の道も　亦、応に三乗と説くべし』と。

是の思惟を作す時　十方の仏、皆現じて　梵音をもって我を慰喩したもう　『善い哉、釈迦文よ
第一の導師よ　是の無上の法を得たまえども　諸の一切の仏に随って　方便力を用いたもう。
我等も亦、皆　最妙第一の法を得れども　諸の衆生類の為に　分別して三乗と説く。
少智は小法を楽って　自ら作仏せんことを信ぜず
是の故に方便を以て　分別して諸果を説く。　復、三乗を説くと雖も　但、菩薩を教えんが為なり』と。

〔訳〕

私も今はまた、そのとおりである。衆生たちを安らかにさせようとして、　種々の教えの入り口を用意して、仏の道を説き示すのである。(108)

私は智慧の力によって、衆生たちの心の意向を知り、　教化の手だてを用いて多くの法を説き、彼らすべてが喜ぶことのできるようにする。(109)

舎利弗よ、まさに知るべきである。私は仏の眼をもって観察して、　六種の輪廻の境界にある生きとし生けるものを見ると、貧に窮しており、福徳と智慧がなく、生死のけわしい道に入って、苦はあいついで、断えることがない。(110)

五つの感官の欲望に深く執着し、そのさまは犛牛が自らの尾に愛着するがごとくである。激しい欲望で自らをおおい、そのために盲目となって、くらく見ることができない。　そして、偉大な力をもつ仏と、苦しみを断つ法とを求めないでいる。(111)

多くの誤った見解に深く入りこみ、（新たな）苦によって（今の）苦を捨て去ろうとしている。

これらの衆生たちのために、私は大きなあわれみの心を起こしたのだ。(112)
私は、始め悟りを開いた（菩提樹下の）場に坐し、そして（立ちあがって）菩提樹の木を見、またそこここを歩きまわって、　三七・二十一日間のあいだ、このようなことを思った。(113)
『私が得た智慧は、奥深くすぐれたこのうえないものである。　しかし、衆生たちのもろもろの素質は鈍く、快楽に執着し、愚迷さのために盲目となっている。　そのようなものたちを、一体どのようにしたら済度することができようか』と。(114)
その時、多くの梵天王、帝釈天、　世界の守護者の四天王、及び大自在天、　さらに他の多くの天たちと、そのお伴の百千万の天たちは、(115)
うやうやしく合掌し礼拝して、私に教えの輪を廻すことを請うた。　私はそこで、このように思った。『もし、私が、仏の教えの乗りものだけを讃えたならば、　衆生たちは、苦にうもれていて、この（悟りの）法を信ずることができないであろう。(116)
それどころか、その法を破って信ぜず、そのために、三種の悪道に墜ちるであろう。　それならば、私は彼らに法を説くことをせず、むしろこのまま速かに涅槃に入ろう』と。(117)
それについで、私は過去世の仏の行なった教化の手だての効力を心に思い、　『私が、今得た道も、また三つの教えの乗りものとして説こう』と、(118)
このように思った時、十方の仏たちがすべて現われて、　清らかな音声で、私をなぐさめとされた。　『善いかな、釈迦文よ、(119)
導師の第一人者よ、この無上な法を得られながら、　多くの一切の仏たちにならって、教化のて

だての力を用いられるとは。(120)

私たちもまた、みな最もすぐれたこのうえない法を得たけれども、多くの衆生たちのために、ことわけして三つの乗りものとして説くことにしよう。

智慧少きものたちは、劣った法を好んで、みずからが仏となるということを信じようとはしない。(121)

それゆえに、教化の手だてとして、ことわけして（それぞれの教えを修行した結果としての）多くの果報を説く。しかしまた、三つの乗りものを説くといっても、それは（仏をめざす）菩薩だけを教化するためなのである』と。(122)

《性欲》欲性に同じ。心の意向、意欲のこと。adhimukti の訳。《仏眼》仏の眼。悟った仏のみが有する、すべてを見わたし、一切を知ることのできる眼。《五欲》眼・耳・鼻・舌・身の五官の欲望のこと。《犛牛》ヤク牛のこと。原語は camara（または camarī）その尾は蠅を追い払うのに使用され、また王位の飾章の一つとされていた。《貪愛》むさぼり愛すること。激しい欲望。《梵王・天帝釈・護世四天王・大自在天》いずれももとヒンドゥー教の神々であるが、仏教にとり入れられて、仏教守護の神々となった。（第一章の語注五一〜五二頁参照）。なお、これらの神々が、成道して仏となった釈尊に、衆生のために法を説くように要請したことを梵天勧請（ぼんてんかんじょう）という。これは仏教教団の中で作られた説話ではあるが、究極の目的である悟りを得た釈尊が、目的達成の後に、人々にその悟りの法を説くに至るまでにはある決意が必要であったこと、そしてそれによって仏教が興ったこと、そこに仏と辟支仏との間に決定的な距離があるということなどの点

において、重要な問題を含んでいることに注意。《**三悪道**》六種の輪廻の生存のなかの地獄・餓鬼・畜生道の三種の悪道。《**梵音**》梵天(Brahmā)のように清らかな音声。梵天はインド思想において万有の根源とされるbrahman(梵)が神格化されたもので、仏教にとり入れられて、色界の初禅天とされた。brahmanには「清浄」という意味がある。《**釈迦文**》釈迦牟尼と同じ。Śākya-muniの音写。

過去・現在・未来の三世の諸仏がそうであるように、現在の釈尊もまた衆生の機根に応じて三乗の法を説き衆生救済の方便とする。それは、釈尊が成道(じょうどう)してから二十一日間のあいだの熟慮の結果であるということが梵天勧請(ぼんてんかんじょう)の説話をとおして語られている。これは次の段の初転法輪の記述と連絡する。

舍利弗當知　我聞聖師子　深淨微妙音　喜稱南無佛
復作如是念　我出濁惡世　如諸佛所說　我亦隨順行
思惟是事已　卽趣波羅柰　諸法寂滅相　不可以言宣
以方便力故　爲五比丘說　是名轉法輪　便有涅槃音
及以阿羅漢　法僧差別名　從久遠劫來　讚示涅槃法
生死苦永盡　我常如是說　舍利弗當知　我見佛子等
志求佛道者　無量千萬億　咸以恭敬心　皆來至佛所
曾從諸佛聞　方便所說法　我卽作是念　如來所以出
爲說佛慧故　今正是其時　舍利弗當知　鈍根小智人

著相憍慢者　不能信是法　今我喜無畏　於諸菩薩中
正直捨方便　但說無上道　菩薩聞是法　疑網皆已除
千二百羅漢　悉亦當作佛　如三世諸佛　說法之儀式
我今亦如是　說無分別法　諸佛興出世　懸遠值遇難
正使出于世　說是法復難　無量無數劫　聞是法亦難
能聽是法者　斯人亦復難　譬如優曇花(1)　一切皆愛樂
天人所希有　時時乃一出　聞法歡喜讚　乃至發一言
則爲已供養　一切三世佛　是人甚希有　過於優曇花(2)
汝等勿有疑　我爲諸法王　普告諸大衆　但以一乘道
教化諸菩薩　無聲聞弟子　汝等舍利弗　聲聞及菩薩
當知是妙法　諸佛之秘要　以五濁惡世　但樂著諸欲
如是等衆生　終不求佛道　當來世惡人　聞佛說一乘
迷惑不信受　破法墮惡道　有慚(3)愧清淨　志求佛道者
當爲如是等　廣讚一乘道　舍利弗當知　諸佛法如是
以萬億方便　隨宜而說法　其不習學者　不能曉了此
汝等既已知　諸佛世之師　隨宜方便事　無復諸疑惑
心生大歡喜　自知當作佛

(1)(2)花＝華　(3)慚＝慙

舎利弗よ、当に知るべし　我、聖師子の　深浄微妙の音を聞いて　喜んで南無仏と称す。
復、是の如き念を作す　『我、濁悪世に出でたり、　諸仏の所説の如く　我も亦、随順して行ぜん』と。
是の事を思惟し已って　即ち波羅奈に趣く。
諸法寂滅の相は　言を以て宣ぶべからず　方便力を以ての故に　五比丘の為に説きぬ。
是れを転法輪と名づく　便ち涅槃の音　及以び阿羅漢　法僧差別の名有り。
『久遠劫より来　涅槃の法を讃示して　生死の苦、永く尽くす』と　我、常に是の如く説きき。
舎利弗よ、当に知るべし　我、仏子等を見るに　仏道を志求する者の　無量千万億
咸く恭敬の心を以て　皆、仏所に来至せり。　曾て諸仏より　方便所説の法を聞けり。
我、即ち是の念を作さく　『如来出でたる所以は　仏慧を説かんが為の故なり　今正しく、是れ其の時なり。』
舎利弗よ、当に知るべし　鈍根小智の人　著相憍慢の者は　是の法を信ずること能わず。
今、我、喜んで畏れ無し　諸の菩薩の中に於いて　正直に方便を捨てて　但、無上道を説く。
菩薩、是の法を聞いて　疑網皆、已に除く。　千二百の羅漢　悉く亦、当に作仏すべし。
三世の諸仏の　説法の儀式の如く　我も今、亦、是の如く　無分別の法を説く。
諸仏、世に興出したもうこと　懸遠にして値遇すること難し。　正使、世に出でたもうとも　是の法を説きたもうこと、復難し。
無量無数劫にも　是の法を聞くこと、亦難し。　能く是の法を聴く者　斯の人、亦復難し。
譬えば、優曇花の　一切皆、愛楽し　天・人の希有にする所として　時時に乃し一たび出ずるが如し。

法を聞いて歓喜し讃めて　乃至一言をも発せば　則ち、為れ已に　一切三世の仏を供養するなり。是
の人、甚だ希有なること　優曇花に過ぎたり。
汝等よ、疑い有ること勿れ　我は為れ諸法の王　普く諸の大衆に告ぐ　『但、一乗の道を以て　諸の
菩薩を教化して　声聞の弟子無し』と。
汝等、舎利弗　声聞及び菩薩　当に知るべし、是の妙法は　諸仏の秘要なり。
五濁の悪世には　但、諸欲に楽著せるを以て　是の如き等の衆生は　終に仏道を求めず。
当来世の悪人は　仏説の一乗を聞いて　迷惑して信受せず　法を破して悪道に堕せん。
慚愧清浄にして　仏道に志求する者有らば　当に是の如き等の為に　広く一乗の道を讃むべし。
舎利弗よ、当に知るべし　諸仏の法、是の如く　万億の方便を以て　宜しきに随って法を説きたもう。
其の習学せざる者は　此れを暁了すること能わじ。
汝等、既已に　諸仏の世の師の　随宜方便の事を知りぬ　復、諸の疑惑無く
心に大歓喜を生じて　自ら当に作仏すべしと知れ。

妙法蓮華経巻第一

〔訳〕

舎利弗よ、当然知らねばならぬ。私は、聖なる獅子（である仏）の、奥深く浄らかな美しい音
声を聞き、喜んで『仏に帰依したてまつる』と称えた。(123)

そしてまた、このように考えた。『私は、濁れた悪世に出現した。多くの仏たちが説かれたように、私もまた、そのように行なおう』と。(124)
こう考えた後に、波羅奈（ベナレス）に趣いた。
そしてあらゆるものが、本来そのままで寂静であるというありようは、言葉をもってしてはいいあらわすことができないので、教化の手だてを講じて、五人の比丘たちのために法を説いた。(125)
これを『転法輪』と名づける。これによって『涅槃』ということば、そして『阿羅漢』ということば、『法』と『僧』ということばが、それぞれ区別して、存在することとなった。(126)
『はるか遠い劫の昔から、涅槃の法を讃え示して、生死の苦を永遠に断じ尽くすのである』と、私は常にこのように説いてきた。(127)
舎利弗よ、知るがよい。私が仏の子たちを見てみると、仏の道を求める者たちの、その数は千万億というはかり知れないほどであり、(128)
ことごとく敬いの心をもって、みな仏のところにやってきた。（彼らは）その昔、多くの仏から教化の手だてとして説かれた法を聞いたのである。(129)
私はそこで、このように考えた。『如来が世に出現したわけは、仏の智慧を説こうとするためである。今がちょうど、その時である』と。(130)
舎利弗よ、必ず知るべきである。素質において鈍く、智慧の劣った人や（ものの表面的）すがたにのみとらわれ、おごり高ぶっている者たちは、この法を信じることができない。(131)

今、私は喜びにみち、畏れることなく、多くの菩薩たちのただなかにおいて、正しくまっすぐに、教化の手だてを廃してただ無上なる道のみを説こう。(132) 菩薩はこの法を聞いて、疑いもすべて除かれ、千二百人の阿羅漢たちも、ことごとく仏となることであろう。(133)

(過去・現在・未来の)三世の仏たちの、説法の仕方のとおりに、私も今、またそれにならって、分別をこえた法を説こう。(134)

仏たちが世に出現されるのは、(それぞれ)はるかに遠くへだたっており、(それ故、その時仏に)出あうことはむつかしい。たとい、世に出現されたとしても、この法を説かれるということは、またさらにむつかしいことである。(135)

はかりしれない無数の劫(こう)を経ても、この法を聞くことは、また困難である。そして、この法を聴くことのできる者、このような人も、また得がたい。(136)

たとえば(きわめて得ることのまれな)優曇華(うどんげ)の花は、すべてのものがみな愛(め)でるものであるが、しかし、天や人々にとってはまれにしか見られない、そのような花が、ある時、一たび出現するようなものである。(137)

(そのような得がたい)法を聞き、歓喜し讃嘆して、たった一言でも発すれば、それはすでに、(過去・現在・未来)三世のすべての仏を供養することになるのである。そのような人は、甚だまれであり、優曇華の花以上である。(138)

汝(なんじ)らよ、疑いを懐いてはならない。私は多くの法の王であり、広く大ぜいのあつまりの者たち

に告げる。『ただ一つの乗りものという道のみによって、多くの菩薩たちを教化するのであって、声聞の弟子は存在しない』と。(139)
汝ら、舎利弗と、声聞及び菩薩たちは、まさに知るべきである。このすぐれた法は、多くの仏たちの秘密の教えであるということを。(140)
五種の濁れのある悪世には、ただ多くの欲望のみにとらわれている、そのような衆生たちは、ついぞ仏の道を求めるということはない。(141)
来たるべき世の悪人は、仏の説かれる一つの乗りもの(の法)を聞いても、迷い惑って、それを信じ受けいれることをせず、その法を破壊して、悪道に堕ちるであろう。(142)
(しかし、一方)恥じ入って、浄らかになり、仏の道を志し求める者がいれば、まさにそのようなものたちのために、広く一つの乗りものという道を讃えるべきである。(143)
舎利弗よ、必ず知るべきである。多くの仏たちの法は、このように、万億という数多くの教化の手だてをもって、それぞれにふさわしいように説かれた法であり、学習しないものは、それを明らめることはできないということを。(144)
しかし、汝らはすでに、世界の師である多くの仏たちが、それぞれにふさわしい教化の手だてを設けられたということを知っている。(それ故)また多くの疑惑を懐くことなく、心に大きな歓びを生じて、みずからが仏になることができるのだと知れ。」(145)

《南無仏》「南無」は namas の音写で、帰命、敬礼・帰敬などと訳す。こころから仏に帰依するという意味。

《波羅奈》Vārāṇasī（波羅奈斯）の音写。現在のベナレスのこと。この地はガンジス河流域にあり、釈尊在世当時から、多くの修行者達の集まる所であった。現在はヒンドゥー教の聖地となっている。《五比丘》釈尊が出家した時、父王の命によって行動をともにした、阿若憍陳如（Ajñāta-kauṇḍinya）をはじめとする五人の修行者のこと。釈尊と苦行をともにしたが、釈尊が苦行を捨てたことから釈尊と離れて、当時はベナレス郊外のサールナートにいた。《僧》僧伽の略で、saṃgha の音写。和合衆と訳す。仏教の教団のこと。出家の比丘あるいは比丘尼の四人以上が僧伽の単位で、それ以下は僧伽とは呼ばれない。比丘と比丘尼はそれぞれ比丘僧伽、比丘尼僧伽を形成していた。（平川彰『インド仏教史』上、春秋社、参照）。《著相》相に執着すること。相は nimitta の訳で、ものの外面、外見、表面的様相のこと。すなわち、内面の真実を知らず、外にあらわれている表面的様相のみにとらわれていること。《千二百羅漢》羅漢は阿羅漢の略で、修行を完成した聖者のこと。舎利弗をはじめとする千二百人の聖者で、本章の先の長行部分においては仏に第一の法を説くことを請い、ここでは彼らの成仏が予め示されている。彼らが記莂を授けられるのは第八章五百弟子受記品においてである。《優曇華》「優曇」は udumbara の音写語「優曇鉢羅」の略で、樹木の名。無花果（いちじく）の一種で、その花は、三千年に一度だけ咲くという。きわめてまれなことの喩えとして使われる。《五濁悪世》前注（一四八―一四九頁）参照。

仏の最初の説法、初転法輪は諸仏の所説に随って、方便力をもって説いたものであった。それより以降、今に至るまで仏はさまざまな機根の衆生のために種々の法を説き、三乗の教えを施設した。しかし、仏の本来の目的は仏の智慧を説き、それをすべてのものに得させることであって、今がその時機であり、「正直に方便を捨てて、但無上道を説く」というのである。

このような方便を説いた後に、真実の法を説くという説法の仕方は、いまこの法華経においてはじめてとられた方法ではなく、ともに十方の諸仏、過去・現在・未来の三世の諸仏の儀式であって、したがってこの法華経における説法の儀式も、この教化の仕方にならったものであるという。

以上の本章の長い偈文において、三乗の教えがなぜ説かれたかという理由と、そしてその三乗が方便であり、一乗が真実であると明かすその説法の仕方について、経が詳しく説明しているのは理由のないことではない。それは法華経が、まず三乗の教えが方便であるということを明らかにして、そして次に「方便の門を開いて真実の相を示す」という説法の仕方が、決して法華経ひとりの勝手な独創ではないということを強調するためである。すなわち、三乗方便一乗真実という法華経の教えの正統性を根拠づけるためなのである。そのために、仏伝や梵天勧請(ぼんてんかんじょう)の説話をも用いて仏説の上での正統性と権威とを主張しているのであって、そしてここにこそ、方便門の施設によって全仏教の統一をはかろうとした法華経の真のねらいがあらわれているということができるのである。

なお、本経の分科からいうと、本経全体を迹門(しゃくもん)（序品から安楽行品まで）と本門（従地涌出品から勧発品まで）の本迹二門に分け、それぞれに序分、正宗分(しょうしゅうぶん)、流通分(るづうぶん)の三段に分かつ本迹六段の分科[1]で、迹門については序分は序品、正宗分は方便品から人記品(にんき)まで、流通分は法師品(ほっし)から安楽行品(あんらくぎょう)までとなる。このうちの方便品から人記品に至るまでの正宗分は、法説周（方便品から譬喩品）、譬説周（譬喩品から授記品）、因縁説周（化城喩品から人記品）の三分からなる。

法説というのは譬喩や因縁譚に対して、端的に教理そのものを説いたことをいう。この法説周のうち、今のこの方便品全体が釈尊の説法であり、これを正説(しょうせつ)という。その釈尊の説法に対し、それをう

けたまわった舎利弗は自分の領解を述べる。これを領解といい、その舎利弗の領解に対して仏の印可がある。これを述成という。そして仏より舎利弗に未来成仏の記莂が授けられる。これを授記という。これが法説周の内容であるが、この法説のなかで、領解以下は次の譬喩品において説かれることになる。これを図示すると、

法説
- 正説（釈尊）——方便品第二
- 領解（舎利弗）
- 述成（釈尊）
- 授記（釈尊）
  ——譬喩品第三（領解・述成・授記）

となる。本章の方便品は、三乗方便一乗真実と二乗作仏との本経における最も重要な根本思想を説いた章であり、久遠実成を説く本門の寿量品と並んで法華経全体をなす章である。譬喩品以下、人記品までの正宗分は、方便品の思想を譬喩や因縁譚によって更に敷衍したものであるといってよい。本経の成立史のうえでも方便品は最も古いものとされているから、[2] この点においても本章の重要性は強調されてよい。以上で方便品をおわり、以下譬喩品において説かれることになる。

(1)『妙法蓮華経文句』巻一上、大正蔵三四巻、二頁上。
(2) 平川彰「法華経における『一乗』の意味」金倉円照編『法華経の成立と展開』五六五—七頁。(平楽寺書店)

妙*法蓮華經卷第二

後*秦龜茲國三藏法師
鳩摩羅什奉　詔訳

譬*喩品第三

爾時舍利弗。踊躍歡喜。卽起合掌。瞻仰尊顏。而白佛言。今從世尊。聞此法音。心懷勇(1)躍。得未曾有。所以者何。我昔從佛。聞如是法。見諸菩薩。受(2)記作佛。而我等不預(3)斯事。甚自感傷。失於如來。無量知見。世尊。我常獨處。山林樹下。若坐若行。每作是念。我等同入法性。云何如來。以小乘法。而見濟度。是我等咎。非世尊也。所以者何。若我等待說所因。成就阿耨多羅三藐三菩提者。必以大乘。而得度脫。然我等不解方便。隨宜所說。初聞佛法。遇便信受。思惟取證。世尊。我從昔來。終日竟夜。每自剋責。而今從佛。聞所未聞。未曾有法。斷諸疑悔。身意泰然。快得安隱(4)。今日乃知。眞是佛子。從佛口生。從法化生。得佛法分。

(1)勇＝踊　(2)底本は「授」。大正蔵の対校記、春日本に従って改める。　(3)底本は「豫」。大正蔵の対校記、春日本によって改める。　(4)隱＝穩

爾の時に舎利弗、踊躍歓喜して、即ち起ちて合掌し、尊顔を瞻仰して仏に白して言さく、
「今、世尊より、此の法音を聞いて心に勇躍を懐き、未曾有なるを得たり。所以は何ん。我、昔、仏より是の如き法を聞き、諸の菩薩の受記作仏を見しかども、而も我等は斯の事に預らず。甚だ自ら、如来無量の知見を失えることを感傷しき。世尊よ、我、常に独り山林樹下に処して、若しは坐し、若しは行じて毎に是の念を作しき。『我等も同じく法性に入れり。云何ぞ、如来、小乗の法を以て済度せらるるや』と。是れ、我等が咎なり。世尊には非ず。所以は何ん。若し我等、所因の阿耨多羅三藐三菩提を成就することを説きたもうを待たば、必ず大乗を以て度脱せらるることを得ん。然るに、我等、方便随宜の所説を解せずして、初め仏法を聞いて、遇便ち信受し、思惟して証を取れり。世尊よ、我、昔より来、終日竟夜、毎に自ら剋責しき。而るに今、仏より、未だ聞かざる所の未曾有の法を聞いて、諸の疑悔を断じ、身意泰然として、快く安隠なることを得たり。今日、乃ち知んぬ。真に是れ仏子なり。仏の口より生じ、法の化より生じて、仏法の分を得たり」と。

〔訳〕その時、舎利弗はおどりあがって喜んで、すぐさま起ちあがって合掌し、世尊のお顔を仰ぎみて、仏にこのように申し上げた。
「今、世尊よりこの説法の声を聞き、心のおどるような、いまだかつてない不思議な思いをいたしました。と申しますのも、わたくしは、昔、仏からこのような法を聞き、多くの菩薩たちが（仏から）成仏の予言を受け、仏となるのを見てきましたが、しかしわたくしどもはそのことにあずかることができませんでした。みずからが如来の無量の、真理をさとりきわめる智慧を失っていることに非常に心をいためておりました。

世尊よ、わたくしはつねに一人で、山林や樹下にいて、坐ったり、あるいは歩きまわったりしている時でも、いつもこのように思っておりました。

『わたくしたちも同じように、ものの真実の本性に入ったのだ。それなのに、どうして如来は小さな乗りものの法によって（わたくしたちを）済度（さいど）されたのであろうか』と。

これはわたくしたちの咎（とが）であって、世尊の過失ではありません。なぜならば、（仏になるための）原因である無上の正しい悟りを完成することを仏がお説きになるのを待っていたならば、必ず大きな乗りものによって済度されることができたでありましょう。しかしながら、わたくしたちは、教化の手段として、おのおのにふさわしいように説かれた教えを理解することなく、最初に聞いた仏の法を、すぐさまそのまま信じ受けいれて、思いをめぐらして、（その法によって）悟ったのです。

世尊よ、わたくしは昔からずっと、昼夜なくつねに自分を責めてきました。しかし、今こそ、仏からこれまで聞いたことのない驚嘆すべき法を聞き、多くの疑いや後悔を断ち、身も心もやすらかに、快くおだやかになることができました。そこで、今日はじめてわかりました。（わたくしたちも）真に仏の子であって、仏の口から生まれ、法の化身から生じて、仏の法の一分を得たのだということを。」

《**未曾有**》adbhuta の訳で、まれな、不可思議な、驚きの意をあらわす語。《**法性**》ものの真実の本性、ありのままのすがた。すべての執着から離れた時に、ものの真実のすがたが見えてくる。ここでは、舎利弗が小乗の教えによって煩悩を離れ、ものの真実のすがたの見えてくる悟りの境地へ入ったことをいう。《**方便随宜所説**》仏が衆生を教化する場合に採用するさまざまな手段を方便（upāya）というが、仏の方便は非常

に巧みでそれぞれの機根に最も適した形で法を説かれるので、これを善巧方便（upāya-kauśalya）という。前章ですでに三乗は一乗のための方便と明かされたように、本経では「方便」は極めて重要な意義をもっている。梵本では、saṃdhābhāṣya（秘密の意をこめて語られたことば）といい（p. 60, *ll*. 13–14）、仏の語られたことばが、方便という表面的な意味のほかに、その奥に深い意義を秘めているということを示している。漢訳の「方便随宜所説」の語には梵本のいう秘説のニュアンスはうかがわれないが、「不解方便随宜所説」の句は、与えられた教えが実は方便であったということがわからなかったと解釈するよりも、表面のことばにとらわれたために与えられた方便の教えの、その奥にある仏の真意が完全に理解できなかったと解する方がよりよい解釈であろう。

《従仏口生、従法化生》 仏の正統な後継者たることをあらわす原始仏教経典以来の定型句。『二万五千頌般若』や『勝鬘経』にも同様の表現が見られる。仏の口、すなわち仏の説法によって、あるいは教えの理法によって生まれるということで、真の仏の継承者となるということである。なお、従来「従法化生」を「法より化生して」と訓んでいるが、梵本では dharmanirmito（法の化より、p. 61. *ll*.2–3）とあることから、「法の化より生じて」と改める。

これより以下譬喩品が始まる。この章は、前章の方便品にひき続いて、有名な長者火宅の喩えをもって方便品に説かれた一乗と三乗について、より詳細に説き明かした章である。すなわち、はじめに前章の方便品における仏の説法をうけた舎利弗の領解と仏の舎利弗への授記を説き、次に火宅の喩えで三乗方便一乗真実の義を明かすのである。今のこの段はそのうちの舎利弗の領解にあたる段である。

舎利弗は、これまで仏が菩薩にのみ成仏の予言をされるのを見て、自分たち声聞はそれにあずかることができないことを悲しみ、何故に世尊は自分たちに大乗の法ではなく、小乗の法をもって済度さ

れたのかと多年にわたって疑念を懐いていた。しかし、それが前章方便品において説かれた仏の説法を聞き、疑問が氷解して、自らもやはり真の仏子であるという自覚を持つことができ、喜びにたえず、自己の領解を世尊に申し述べたのである。

この段以下は、長行部分と同じ義趣をより一層詳しく説いた偈頌が続く。

爾時舍利弗。欲重宣此義。而說偈言。

我聞是法音　得所未曾有　心懷大歡喜　疑網皆已除
昔來蒙佛敎　不失於大乘　佛音甚稀有　能除衆生惱
我已得漏盡　聞亦除憂惱　我處於山谷　或在林樹下
若坐若經行　常思惟是事　嗚呼深自責　云何而自欺
我等亦佛子　同入無漏法　不能於未來　演說無上道
金色三十二　十力諸解脫　同共一法中　而不得此事
八十種妙好　十八不共法　如是等功德　而我皆已失
我獨經行時　見佛在大衆　名聞滿十方　廣饒益衆生
自惟失此利　我爲自欺誑　我常於日夜　每思惟是事
欲以問世尊　爲失爲不失　我常見世尊　稱讚諸菩薩
以是於日夜　籌量如此事　今聞佛音聲　隨宜而說法
無漏難思議　令衆至道場　我本著邪見　爲諸梵志師

世尊知我心　拔邪說涅槃　我悉除邪見　於空法得證
爾時心自謂　得至於滅度　而今乃自覺　非是實滅度
若得作佛時　具三十二相　天人夜叉衆　龍神等恭敬
是時乃可謂　永盡滅無餘　佛於大衆中　說我當作佛
聞如是法音　疑悔悉已除　初聞佛所說　心中大驚疑
將非魔作佛　惱亂我心耶　佛以種種緣　譬喩巧言說
其心安如海　我聞疑網斷　佛說過去世　無量滅度佛
安住方便中　亦皆說是法　現在未來佛　其數無有量
亦以諸方便　演說如是法　如今者世尊　從生及出家
得道轉法輪　亦以方便說　世尊說實道　波旬無此事
以是我定知　非是魔作佛　我墮疑網故　謂是魔所爲
聞佛柔軟(1)音　深遠甚微妙　演暢淸淨法　我心大歡喜
疑悔永已盡　安住實智中　我定當作佛　爲天人所敬
轉無上法輪　敎化諸菩薩

(1)軟＝輭

爾の時に舎利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、
「我、是の法音を聞いて　未曾有なる所を得て　心に大歓喜を懐き　疑網皆已に除こりぬ。
昔より来、仏教を蒙って　大乗を失わず　仏の音は甚だ希有にして　能く衆生の悩みを除きたもう。
我、已に漏尽を得れども　聞きて亦、憂悩を除く。

我、山谷に処し　或は林樹の下に在って　若しは坐し、若しは経行して　常に是の事を思惟し嗚呼して深く自ら責めき　『云何ぞ而も自ら欺けるや』と。

我等も亦、仏子にして　同じく無漏の法に入れども　未来に無上道を演説すること能わず。

金色、三十二　十力、諸の解脱　同じく共に一法の中にして　此の事を得ず。

八十種の妙好　十八不共の法　是の如き等の功徳　而も我、皆已に失えり。

我、独り経行せし時　仏、大衆に在まして　名聞十方に満ち　広く衆生を饒益したもうを見て　自ら惟わく『此の利を失えり　我、為れ自ら欺誑せり』と。

我、常に日夜に於いて　毎に是の事を思惟して　以て世尊に問いたてまつらんと欲す　『為めて失えりや、為めて失わずや』と。

我、常に世尊を見たてまつるに　諸の菩薩を称讃したもう　是を以て日夜に　此の如き事を籌量しき。

今、仏の音声を聞きたてまつるに　宜しきに随って法を説きたまえり。　無漏は思議し難し　衆をして道場に至らしむ。

我、本、邪見に著して　諸の梵志の師と為りき。　世尊、我が心を知しめして　邪を抜き涅槃を説きたまいしかば　我、悉く邪見を除いて　空法に於いて証を得たり。

爾の時に、心に自ら謂いき　『滅度に至ることを得たり』と。　而るに、今乃ち自ら覚りぬ　是れ実の滅度に非ずと。

若し作仏することを得ん時は　三十二相を具し　天・人・夜叉衆　龍神等恭敬せん。　是の時、乃ち謂うべし　永く尽滅して余無しと。

仏、大衆の中に於いて　我当に作仏すべしと説きたもう。

是の如きの法音を聞きたてまつりて　疑悔悉く已に除こりぬ。
初め仏の所説を聞いて　心中大いに驚疑しき。　『将に魔の仏と作って　我が心を悩乱するに非ずや』と。
仏、種種の縁　譬喩を以て巧みに言説したもうに　其の心安きこと海の如し　我聞きて疑網断じぬ。
仏説きたまわく『過去世の　無量の滅度の仏も　方便の中に安住して　亦、皆是の法を説きたまえり。
現在・未来の仏　其の数、量有ること無きも　亦、諸の方便を以て　是の如き法を演説したもう』と。
今者の世尊の如きも　生じたまいしより、及び出家し　得道し、法輪を転じたもうまで　亦、方便を以て説きたもう。
世尊は実道を説きたもう　波旬は此の事無し。　是を以て、我、定めて知りぬ　是れ魔の仏と作るには非ずと。　我、疑網に堕するが故に　是れ魔の所為と謂えり。
仏の柔軟の音　深遠に甚だ微妙にして　清浄の法を演暢したもうを聞きて　我が心大いに歓喜し　疑悔永く已に尽き　実智の中に安住す。
我定めて当に作仏して　天・人に敬わるることを為　無上の法輪を転じて　諸の菩薩を教化すべし。」

〔訳〕その時、舎利弗は重ねて以上の内容を宣べようとして詩頌を説いて言った。
「わたくしは、この説法の声を聞いて、いまだかつてない思いをし、心に大きな歓びが生じて、疑念がすっかり取り除かれました。
昔からずっと、仏の教えにあずかり、大きな教えの乗りものを失いませんでした。(1)
仏のお声は非常にまれなものであり、生きとし生けるものの悩みを除くことができます。　わた

くしはすでに煩悩の汚れを尽すことができてはおりましたが、(仏の声を)聞いてまた心の悩みが取り除かれました。(2)

わたくしは山林や谷間に居り、あるいは樹木の下にいて、坐禅をしたり、歩きまわったりしながら、常にこのようなことを考えておりました。(3)

なげいて、深く自分を責めました、『どうしてみずから(自分を)あざむいてしまったのであろうか』と。

わたくしたちもまた仏の子であり、同じように煩悩の汚れのない法(の世界)に入りはしましたが、未来においてこのうえない仏道を説くことができません。(4)

金色(に輝く身体)、三十二相、十力、多くの解脱、(これらを具える仏と)同じようにともに一つの法の中にありながら、(わたくしは)これらのものを得ることができません。(5)

八十種のすばらしい相と、仏にだけ具わっている十八のすぐれた特質、このような特徴は、すべてわたくしにはもう失なわれてしまっております。(6)

わたくしが一人で歩きまわっていた時に、仏が大勢の人々のなかにあって、その名声が十方に満ち、広く生きとし生けるものたちに利益を与えられるのを見て、わたくしは自省しました、『この利益を失ってしまった。わたくしはみずからを欺いてしまった』と。(7)

わたくしは昼も夜も、いつもこのことを思い続けております。それ故、世尊におたずねしたいのです、『(わたくしは、正しい道を)失ってしまったのでしょうか、それとも失ってはいないのでしょうか』と。(8)

わたくしがつねづね世尊を拝見しますに、多くの菩薩たちを称讃されております。それ故に日夜にわたって、このようなことを思いめぐらしたのです。(9)

今、仏の説法の声を拝聴いたしますと、仏はそれぞれにふさわしいように法をお説きになられました。（その法によって得られた）煩悩の汚れのない境地は、思いはかることも困難なものであります。それは人々を（悟りを得て仏となる）場所に到達させるものであります。(10)世尊はわたくしの心を知られて、誤りを取りはらい、涅槃をお説きになられましたので、(11)

わたくしはもと、誤った見方に執着していて、多くの外道の師となっていました。世尊はわたくしの心を知られて、誤りを取りはらい、涅槃をお説きになられましたので、(11)

わたくしは誤った見解をことごとく除いて、空の法において悟りを得ました。

その時、（わたくしは）心に思いました。『悟りの境地に到達することができたのだ』と。しかし、今はじめて覚りました、これは真実の悟りの境地ではなかったのだということを。(12)

もし仏になることができた時には、三十二の相を具え、天や人、夜叉たちや、龍神などが恭しく敬うことでしょう。この時にはじめて、永久にすべてを滅し尽して余すところがないと思うことでありましょう。(13)

仏は大勢の集りのなかで、わたくしが必ずや仏となるであろうとお説きになりました。

このような説法の声を聞き、疑いや後悔がことごとく除かれました。(14)

はじめ仏の説かれたことを聞いて、心中大いに驚き、疑いの念をもちました。すなわち、『悪魔が仏になりかわって、わたくしの心を惑乱しているのではないだろうか』と。(15)

仏は種々のいわれやたとえによって、巧みに説法なさいますが、その心は海のように安らかで

あり、わたくしはそれをお聞きして、疑念が断たれました。(16)

仏はこのように説かれました、『過去の世の、無量に多くの入滅された仏たちも　教えの巧みな手段のなかにおいて、また皆この法を説かれた。(17)　また多くの教化の手段を用いて、現在の、また未来の仏は、その数ははかりしれないけれども、このような法を説かれるであろう』と。(18)

いまの世尊も、出生されてから、出家し、成道して教えの輪を廻されましたが、（同じように）また教化の手段をもってお説きになっておられます。(19)

世尊は真実の道を説かれます。しかし波旬にはそのようなことはありません。このことから、わたくしは、これは悪魔が仏になりかわったのではないということをはっきりと知りました。わたくしが疑いにとらわれていたために、これは悪魔のしたことだと思ってしまったのです。(20)

仏の柔軟なお声は、奥深くて非常にすばらしく、（そのお声で）清浄な法を説かれるのをお聞きして、わたくしの心は大きな歓びにあふれ、疑いや後悔は永く尽き、真実の智慧のなかに安住しました。(21)

わたくしは必ず仏となって、天や人々に敬われ、このうえない法の輪を廻し、多くの菩薩たちを教化しようと思います。」(22)

《**疑網**》疑いの心によって心が束縛されるのを網にたとえたもの。原語は kāṅkṣā.　《**漏尽**》漏とは煩悩のこと。煩悩をすべて断じ尽くした状態を漏尽という。《**無漏法**》煩悩のけがれのない法。ここでは煩悩を断じ

尽くした清浄なさとりのことをさす。《三十二》仏が有する三十二種の特別な瑞相のこと。三十二相という。眉間白毫相（眉間にある白い巻き毛）や身金色相（肌がなめらかで黄金のようである相）、手足縵網相（手足の指の間に水鳥のようなみずかきがある）などはその例。《十力・諸解脱》第二章方便品の語注参照（一一一頁）。《八十種妙好》八十種好または八十随形好ともいい、仏の身体にそなわっている八十の吉相のこと。三十二相に対して副次的な身体的特徴を挙げる。《十八不共法》仏だけが有して他と共有しない十八種の特質のこと。その内容は、仏が自らの身口意の三業について過失がなく、衆生済度のために必要なあらゆる智慧と能力とをそなえているということを十八種に分って数えたものである。小乗仏教では、十力・四無畏・三念住・大悲の十八をいう。《梵志》元来、婆羅門（brāhmaṇa）の訳語で、梵（brahman）を志求する者の意であるが、外道の意味もある。梵本は tīrthika（外道）とあるので、ここでは外道（仏教以外の諸教）とする。舎利弗は目連と同じく仏教に転向する前には六師外道の一つである懐疑論者のサンジャヤの弟子であった。《波旬》pāpīyas の主格男性単数 pāpīyān の音写語。悪しき者の意で、悪魔、魔王のこと。

以上の偈文は先の長行部分と同一趣旨を述べたものであるが、その記述はより一層詳しい。本章の冒頭よりここまでが舎利弗の領解に相当し、以下は仏の舎利弗への述成となる。

爾時佛告。舎利弗。吾今於天。人。沙門。婆羅門等。大衆中說。我昔曾於。二萬億佛所。爲無上道故。常敎化汝。汝亦長夜。隨我受學。我以方便。引導汝故。生我法中。舎利弗。我昔敎

汝。志願佛道。汝今悉忘。而便自謂。已得滅度。我今還欲。令汝憶念。本願所行道故。爲諸聲聞。説是大乘經。名妙法蓮華。敎菩薩法。佛所護念。舍利弗。汝於未來世。過無量無邊。不可思議劫。供養若干。千萬億佛。奉持正法。具足菩薩。所行之道。當得作佛。號曰華光如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。國名離垢。其土平正。清淨嚴飾。安隱(1)豐樂。天人熾盛。琉(2)璃爲地。有八交道。黄金爲繩。以界其側。其傍各有。七寶行樹。常有華菓(3)。華光如來。亦以三乘。敎化衆生。舍利弗。彼佛出時。雖非惡世。以本願故。説三乘法。其劫名大寶莊嚴。何故名曰。大寶莊嚴。其國中。以菩薩。爲大寶故。彼諸菩薩。無量無邊。不可思議。算數譬喩。所不能及。非佛智力。無能知者。若欲行時。寶華承足。此諸菩薩。非初發意。皆久殖德本。於無量百千萬億佛所。淨修梵行。恒爲諸佛。之所稱歎。常修佛慧。具大神通。善知一切。諸法之門。質直無僞。志念堅固。如是菩薩。充滿其國。舍利弗。華光佛壽。十二小劫。除爲王子。未作佛時。其國人民。壽八小劫。華光如來。過十二小劫。授堅滿菩薩。阿耨多羅三藐三菩提記。告諸比丘。是堅滿菩薩。次當作佛。號曰華足安行。多陀阿伽度。阿羅訶。三藐三佛陀。其佛國土。亦復如是。舍利弗。是華光佛。滅度之後。正法住世。三十二小劫。像法住世。亦三十二小劫。

(1)隱＝穩　(2)琉＝瑠　(3)菓＝果

爾の時に仏、舎利弗に告げたまわく、

「吾れ今、天、人、沙門、婆羅門等の大衆の中に於いて説く。我、昔、曾て二万億の仏の所に於いて、無上道の為の故に、常に汝を教化す。汝亦、長夜に我に随って受学しき。

我、方便を以て、汝を引導せしが故に、我が法の中に生ぜり。
舎利弗よ、我、昔、汝をして仏道を志願せしめき。汝、今悉く忘れて、便ち自ら已に滅度を得たりと謂えり。我、今、還って、汝をして、本願所行の道を憶念せしめんと欲するが故に、諸の声聞の為に、是の大乗経の妙法蓮華、教菩薩法、仏所護念と名づくるを説く。
舎利弗よ、汝、未来世に於いて、無量無辺不可思議劫を過ぎて、若干千万億の仏を供養し、正法を奉持し、菩薩所行の道を具足して、当に作仏することを得べし。号を華光如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と曰い、国を離垢と名づけん。其の土、平正にして清浄厳飾に安隠豊楽にして、天人熾盛ならん。琉璃を地と為して、八つの交道有り。黄金を縄と為して、以て其の側を界い、其の傍に各七宝の行樹有って、常に華菓有らん。華光如来、亦三乗を以て衆生を教化せん。舎利弗よ、彼の仏出でたまわん時は、悪世に非ずと雖も、本願を以ての故に、三乗の法を説かん。其の劫を大宝荘厳と名づけん。何が故に、名づけて大宝荘厳と曰うや。其の国の中には、菩薩を以て大宝と為すが故なり。彼の諸の菩薩、無量無辺不可思議にして、算数・譬喩も及ぶこと能わざる所ならん。仏の智力に非ずんば、能く知る者無けん。若し行かんと欲する時は、宝華、足を承く。此の諸の菩薩は、初めて意を発せるに非ず。皆久しく徳本を殖えて、無量百千万億の仏の所に於いて、浄く梵行を修し、恒に諸仏に称歎せらるることを為、常に仏慧を修し、大神通を具し、善く一切諸法の門を知り、質直無偽にして、志念堅固ならん。是の如き菩薩、其の国に充満せん。舎利弗よ、華光仏は、寿十二小劫ならん。王子と為て、未だ作仏せざる時をば除く。其の国の人民は、寿八小劫ならん。華光如来、十二小劫を過ぎて、堅満菩薩に阿耨多羅三藐三菩提の記を授け、諸の比丘に告げん。『是の堅満菩薩、次に当に作仏すべし、号を華足安行、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三仏陀と曰わん。其の仏の国土も、亦復是の如くならん』と。

舎利弗よ、是の華光仏の滅度の後、正法世に住すること三十二小劫、像法世に住すること、亦三十二小劫ならん。」

〔訳〕その時、仏は舎利弗にお告げになった。
「わたしは今、天や人々、修行者、バラモンたちの大勢の集りのなかで、説こう。
わたしは昔、二万億もの仏のもとにおいて、このうえない仏道のために、常に汝を教化してきた。汝もまた、長い年月の間、わたしに随って習学してきた。わたしは教化の手だてをもって、汝を（仏道に）導き入れた。それ故に（汝は）わたしの説法の中に生まれたのである。
舎利弗よ、わたしは昔、汝を仏道に志願させた。それなのに、汝は今はすべて忘れ去り、自分ですでに悟りの境地を得たと思いこんでいる。私は今、再び、汝に昔たてた願によって修行してきた道を思い出させようとするために、多くの声聞たちに、この大乗経典の『妙法蓮華』、菩薩を訓誨する法、仏に護持せられるものと名づけられるものを説くのである。
舎利弗よ、汝は未来の世に、量り知れず、限りなく、思慮も及ばない劫という長時をすぎて、千万億の若干倍という多数の仏を供養し、正しい法を保って、菩薩が実践する道をそなえて、必ずや仏となることができるであろう。その号を華光如来、供養をうけるにふさわしい人、正しくあまねき智慧をそなえた人、智と実践とが完全にそなわった人、悟りに到達した人、世界のすべてに通じている人、最上の人、人間の調教師、諸天と人々との師、仏、世尊といい、その国土を離垢と名づけよう。その国土は平らかで、清くおごそかに飾られ、平穏で豊かであり、天人や人々で賑わいさかんである。そ

の地は瑠璃からなっており、八本の交差した道路がある。黄金づくりの縄でそれらの道側を区切り、そのそばには一本一本が七宝からなる街路樹があって、常に花や果実をつけているであろう。（そのような国土において）華光如来もまた、三つの教えの乗り物によって生きとし生けるものを教化するであろう。

舎利弗よ、その仏が世に出でられる時には、たとい悪世ではなくても、本来の誓願によって三つの教えの乗りものの法を説かれるであろう。そして（その時代の）劫を大宝荘厳と名づけよう。どういうわけで大宝荘厳と名づけられるのか。それは、その国の中では菩薩を大宝とするからである。その国の菩薩たちは、限りなく無数で思いも及ばないほど多く、数えることも譬えることもできないほどである。仏の智慧によって知る以外には誰も（その数を）知ることはできない。（その菩薩たちは）歩こうとする時には、宝の華を踏んでゆくのである。この多くの菩薩たちは、今初めて仏道を求める心をおこしたのではない。みな久しい間、功徳の本を殖えてきて、はかりしれない百千万億という多数の仏のもとで、清浄な修行をし、常に諸仏に称讃されて仏の智慧を求めつづけ、大神通力をそなえてすべての教えに通暁し、すなおでいつわりなく、志しの念が堅固である。そのような菩薩たちがその国に充ちあふれているのだ。

舎利弗よ、華光仏の寿命は十二小劫であろう。ただし、それは王子としてまだ仏となっていない時を除いてである。その国の人々の寿命は八小劫であろう。華光如来は、十二小劫をすぎた後、堅満菩薩に無上の正しい悟りを得るであろうという予言を授けて、多くの比丘たちにこう告げるであろう。

『この堅満菩薩は、次に必ずや仏となるであろう。その号を華足安行如来、供養をうけるにふさわ

しい人、正しく目覚めた人といおう。その仏の国土もまた、このようであろう』と。舍利弗よ、この華光仏が入滅した後、正しい教法がこの世にとどまる期間は三十二小劫であり、それに似た教えが世にとどまるのはまた三十二小劫であろう。」

《**沙門**》śramaṇa の音写。努める人の意。出家修行者のこと。《**長夜**》文字どおりには長い夜であるが、未だ悟らず煩悩の闇におおわれた長い年月をいう。《**華光如来**》Padma-prabha-tathāgata の訳。紅蓮の光明を有する如来の意。『正法華経』では蓮華光如来。《**離垢**》Viraja「塵のない」という意。《**八交道**》八つの交われる道。この語は仏国土を修飾する部分において用いられ、本経中にはこの箇処を含めて四回用例があり、単に「八道」とも訳されている。『正法華』では「八重交道」「八交道」「八交路道」「八種交道」など と訳されており、いずれも八重に交叉した道路の意味である。ところが梵本においては、これに対応するサンスクリットは aṣṭā-pada で、この語の意味は、「黄金」「格子模様の盤」の二義があって、チベット訳も mig maṅs（将棋盤）となっているところから、仏国土が格子市松模様のチェス盤のようになっていると解釈する説がある（ビュルヌフの仏訳、ケルンの英訳など）。一方、中村元博士は八つの道が中央にロータリーがあって交叉している状態と推定し（「インド社会より見たる法華経」金倉円照編『法華経の成立と展開』）、また岩本裕博士は、aṣṭāpada は aṣṭāpaṭṭa の誤りで、本来八葉の蓮弁の意味であるとする（『法華経』岩波文庫本上巻、訳注）。以上のように aṣṭāpada の語義には異説が多く、その意味するところは判然としないが、この羅什訳では上記の意味となる。

《**七宝**》前章の注参照（一七二頁）。《**大宝荘厳**》Mahā-ratnapratimaṇḍita「大きな宝によって飾られた」の意。《**十二小劫**》序品の語注「小劫」（九一頁）の項参照。《**堅満菩薩**》Dhṛtiparipūrṇa「堅固さに満ちた」

という名の菩薩。《華足安行》相当する原語は Padmavṛṣabhavikrāmin「紅蓮の上を牛王のように雄々しく歩むもの」の意。『正法華』では「度蓮華界如来」とある。《多陀阿伽度》tathāgata（如来）の音写。《阿羅訶》阿羅漢に同じ。arhat の単数主格 arhan の音写。《三藐三仏陀》序品の語注（九二頁）参照。《正法住世……像法住世》「正法」は saddharma（正しい教法）、「像法」は saddharma-pratirūpaka（正しい教法に似た教え）で、これに「末法」を加えて、正・像・末の三時とし、仏の教法が漸次衰微してゆく歴史的時代区分とする。各時代の長さについては、正法五百年、像法一千年とする説と正法一千年、像法一千年とする説の二説あり、末法はいずれも一万年である。正法の時代には、教法とそれを修行する者（行）、その修行の結果を得る者（証）の三つがそろっているが、像法の世では、「教」と「行」は存在するが「証」がなくなり、末法の世になると「教」のみあって「行」「証」がなくなるという。このような正像末の三時観は、おそらく中国に入って整備されたものとされ、本経では正法・像法・末法の語はみえるものの、このような歴史観はいまだ成立していなかったと考えられている。なお、「末法」の語は本経の第十四章安楽行品、第十七章分別功徳品に見られるが、正法・像法とのセットではなく単独にあらわれる。

以上の段は、仏の舎利弗に対する述成と授記の部分である。仏は舎利弗の心中の喜びの表明をうけて、舎利弗に語られる。舎利弗は今生にはじめて仏の教えを聞いたのではなく、二万億仏という多くの仏のもとで、常に教化をうけてきたのであるが、それをすっかり忘失していたのであり、それを思い出させるために今、法華経を説くのであるといわれた。舎利弗は仏から自らの本願所行の道のことを聞き、自分は本来、仏子であったという自覚をとりもどして、断念していた成仏への希望を持つに

至るのである。その舎利弗に対して、仏は成仏の予言を与えられ、ここではじめて声聞二乗の成仏が約束されるのである。

以上の長行部分に続き、これより以下は偈文によって仏の舎利弗への授記がくりかえして説かれることになる。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

舍利弗來世　成佛普智尊　號名曰華光　當度無量衆
供養無數佛　具足菩薩行　十力等功德　證於無上道
過無量劫已　劫名大寶嚴　世界名離垢　清淨無瑕穢
以琉(1)璃爲地　金繩界其道　七寶雜色樹　常有華菓(2)實
彼國諸菩薩　志念常堅固　神通波羅蜜　皆已悉具足
於無數佛所　善學菩薩道　如是等大士　華光佛所化
佛爲王子時　棄國捨世榮　於最末後身　出家成佛道
華光佛住世　壽十二小劫　其國人民衆　壽命八小劫
佛滅度之後　正法住於世　三十二小劫　廣度諸衆生
正法滅盡已　像法三十二　舍利廣流布　天人普供養
華光佛所爲　其事皆如是　其兩足聖尊　最勝無倫匹
彼即是汝身　宜應自欣慶

(1)琉＝瑠　(2)菓＝果

爾の時に、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「舎利弗は来世に　仏・普智尊と成って　号を名づけて華光と曰わん　当に無量の衆を度すべし。
無数の仏を供養し　菩薩の行　十力等の功徳を具足して　無上道を証せん。
無量劫を過ぎ已って　劫をば大宝厳と名づけ　世界を離垢と名づけん。　清浄にして瑕穢無く
琉璃を以て地と為し　金縄其の道を界い　七宝雑色の樹に　常に華・菓実有らん。
彼の国の諸の菩薩は　志念常に堅固にして　神通・波羅蜜　皆已に悉く具足し
無数の仏の所に於いて　善く菩薩の道を学せん。　是の如き等の大士　華光仏の所化ならん。
仏、王子為らん時　国を棄て世の栄を捨てて　最末後の身に於いて　出家して仏道を成ぜん。
華光仏、世に住すること　寿十二小劫　其の国の人民衆は　寿命八小劫ならん。
仏の滅度の後　正法世に住すること　三十二小劫　広く諸の衆生を度せん。
正法滅尽し已って　像法三十二ならん。　舎利広く流布して　天・人普く供養せん。
華光仏の所為　其の事皆是の如し。　其の両足聖尊　最勝にして倫匹無けん。
彼即ち是れ汝が身なり　宜しく応に自ら欣慶すべし。」

〔訳〕その時に、世尊は重ねて以上の意義を宣べようとして、詩頌を説いていわれた。

「舎利弗は、来世に仏・あまねく知見する尊きものとなり、その号を名づけて華光というであろう。そして、はかり知れない多くのものたちを救済するであろう。(23)

無数の仏を供養し、菩薩としての修行や　十力などの功徳を身にそなえて、このうえない仏道

（その仏のいます）世界を離垢と名づけよう。そこは清浄で、きずもけがれもなく、(25) 瑠璃を大地とし、黄金の縄で道を区分し、七宝でできたさまざまな色の樹木には、いつも花や果実がついているであろう。(26)

その国の多数の菩薩たちは、いつも志しの念が堅く、不思議な能力や（六種の）菩薩の修行をみなすでに身にそなえており、無数の仏のもとで、立派に菩薩の道を学修するであろう。そのようなすぐれた人々は、華光仏によって教化される人たちなのである。(27)

その仏は、王子である時に、国を棄て世の栄華を捨てて、（この世における）最後の身体において、出家して仏道を完成させるであろう。(28)

華光仏がこの世にとどまるその寿命は十二小劫であり、その国の人々の寿命は八小劫であろう。(29)

その仏が入滅された後、正しい教法が世にとどまる期間は、三十二小劫であり、広く生きとし生けるものたちを救済するであろう。(30)

正しい教法がほろび尽きた後、それに類似した教えが三十二小劫のあいだ続くであろう。その仏の遺骨は広く流布して、天や人々があまねく供養するであろう。(31)

華光仏のなされるその事がらは、すべて以上のごとくである。人中の最高者であるその尊い人は、最も勝れたものであって、ならぶものはいないであろう。その人こそ、汝（舎利弗）のこ

となのである。喜ぶがよい。」(32)

《普智尊》あまねく知見する尊きものの意。「普智」は梵本では samanta-cakṣu で、「普眼」のこと。《神通》不思議な超人的能力。天眼通（普通人の眼には見えないものを見ることができる能力）・天耳通（普通人の耳には聞こえないものを聞くことのできる能力）・他心通（他人の心を知ることができる能力）・宿命通（過去世のことを知ることができる能力）・神足通（どこにでも自由自在に行くことができる能力）の五つを五神通といい、これに漏神通（煩悩を滅し尽す智慧の能力）を加えて六（神）通といい、五神通は神仙なども得られるが、六神通は聖者の阿羅漢のみ得られるとする。《波羅蜜》六波羅蜜のこと。序品の注（九〇頁）参照。《最末後身》仏となった時には輪廻の生存から脱しているから、再び生をうけて凡夫の肉身をとることはない。従って現在ある身体がこの世における最後の身体となるのでこう呼ぶ。《両足聖尊》方便品の注（一二八頁）参照。《倫匹》「倫」も「匹」も同類、たぐい、対等のものの意。

爾時四部衆。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。天。龍。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽等大衆。見舍利弗。於佛前受。阿耨多羅三藐三菩提記。心大歡喜。踊躍無量。各各脱身。所著上衣。以供養佛。釋提桓因。梵天王等。與無數天子。亦以天妙衣。天曼陀羅華。摩訶曼陀羅華等。供養於佛。所散天衣。住虚空中。而自廻轉。諸天伎樂。百千萬種。於虚空中。一時倶作。雨衆天華。而作是言。佛昔於波羅㮈(1)。初轉法輪。今乃復轉。無上最大法輪。爾時諸天子。欲重宣此義。而説偈言。

昔於波羅㮈(2)　轉四諦法輪　分別説諸法　五衆之生滅

今復轉最妙　無上大法輪　是法甚深奥　少有能信者
我等從昔來　數聞世尊說　未曾聞如是　深妙之上法
世尊說是法　我等皆隨喜　大智舍利弗　今得受尊記
我等亦如是　必當得作佛　於一切世間　最尊無有上
佛道叵思議　方便隨宜說　我所有福業　今世若過世
及見佛功德　盡迴向佛道

(1)(2)棕＝柰

爾の時に、四部の衆、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷と、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽等の大衆、舎利弗の、仏前に於いて、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを見て、心大いに歓喜し、踊躍すること無量なり。各各に、身に著けたる所の上衣を脱ぎて、以て仏に供養す。釈提桓因、梵天王等、無数の天子と、亦、天の妙衣、天の曼陀羅華、摩訶曼陀羅華等を以て仏に供養す。所散の天衣、虚空の中に住して自ら廻転す。諸天の伎楽百千万種、虚空の中に於いて一時に倶に作し、衆の天華を雨して是の言を作さく、

「仏、昔、波羅棕に於いて、初めて法輪を転じ、今、乃ち復、無上最大の法輪を転じたもう」と。

爾の時に諸の天子、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

「昔、波羅棕に於いて　四諦の法輪を転じ　分別して諸法　五衆の生滅を説き
今復、最妙　無上の大法輪を転じたもう。　是の法は甚だ深奥にして　能く信ずる者有ること少し。
我等、昔より来　数 世尊の説を聞きたてまつるに　未だ曾て是の如き　深妙の上法を聞かず。
世尊是の法を説きたもうに　我等皆随喜す。　大智舎利弗　今、尊記を受くることを得たり。
我等、亦是の如く　必ず当に作仏して　一切世間に於いて　最尊にして上有ること無きことを得べし。

仏道は思議し叵し　方便して宜しきに随って説きたもう。
我が所有の福業　今世若しは過世　及び見仏の功徳　尽く仏道に回向す。」

〔訳〕その時に、比丘・比丘尼・信男・信女の四部の人々と、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽などの（八部衆の）大勢のものたちは、舎利弗が仏の前において、無上の正しい悟りを得るであろうという予言を仏から受けたのを見て、心に大きな歓喜を生じて、おどりあがって喜ぶことしきりであった。それぞれのものたちは、身につけていた上衣を脱いで、それを仏に供養した。帝釈天や梵天王たちは、無数の天子たちとともに、天上のすばらしい衣服、天上の曼陀羅華・摩訶曼陀羅華などを（仏の上に散じて）供養した。散らされた天上の衣服は空中にとどまって、ひとりでに翻った。大勢の天たちは、百千万種にものぼるさまざまな伎楽を、大空のなかで一時に奏し、さまざまな天上の花をふらして、このように言った。

「仏はその昔、ベナレスにおいて初めて教えの輪を転ぜられたが、また今こそは無上最大の教えの輪を転ぜられたのである」と。

その時、多くの天子たちは、重ねてその意味を宣べようとして、詩頌を説いて言った。

「（仏は）昔、ベナレスにおいて、四諦の教えの輪を転ぜられ、すべての存在を五つのあつまりに分けて、その生と滅とを説かれた。(33)

そして今また、最もすぐれたこのうえない偉大な教えの輪を転ぜられた。この法は非常に深遠で、信ずることのできるものは少い。(34)

私たちは昔からずっと、幾度となく世尊の説法をお聞きしてきたが、未だかつてこれほどの深遠なすぐれた説法を聞いたことはなかった。(35)

世尊がこの法を説かれた時、私たちはみな喜んだ。大智ある舎利弗は、今、世尊から、成仏の予言を受けることができた。(36)

私たちもまたそのように、必ず仏と成って、すべての世において、最も尊く、このうえないものとなることができよう。

仏道は思いはかることもむずかしく、そのために（仏は）教化の手段を設けて、それぞれにふさわしいように法を説かれた。(37)

私たちのあらゆる福徳のおこないの、今世におけるもの、あるいは過去世におけるものと、及び仏にまみえた功徳とを、ことごとく仏道にふり向けよう。」(38)

《天・龍……摩睺羅伽》 これを天龍八部衆という。序品の注（五二―五三頁）参照。**《釈提桓因》** 帝釈天のこと。序品の注（五一頁）参照。**《梵天王》** 序品の注（五二頁）参照。**《曼陀羅華・摩訶曼陀羅華》** 序品の注（六一頁）参照。**《波羅㮈》** Vārāṇasī 国。ベナレスのこと。**《四諦法輪》** 四諦の説法。序品の注（八九頁）参照。**《分別説諸法、五衆之生滅》** 諸法はこの現象界のすべての存在のこと。五衆は五蘊（うん）（五つのあつまり）といい、すべての存在を㈠色（しき）（物質）㈡受（感受作用）㈢想（表象作用）㈣行（形成力）㈤識（認識作用）の五種に分類したもの。㈠は物質、㈡から㈤までは精神作用で、つまり一切の現象界の存在を物質と精神とに分け、いずれのうちにも生滅変化をはなれた固定的な実体（アートマン、「我」）は存在せず（無我）一切

の存在は常に生滅変化してゆく無常なるものであると説く。

仏が舎利弗に授記を授けられると、それを見た大衆は大いに歓喜し、仏の説法を讃嘆する。それは、声聞の舎利弗が成仏を約束されたということは、舎利弗だけでなく、二乗すべてのものが成仏できることを仏から約束されたことであり、これまで成仏できないとされていた二乗の人々が成仏できるということは、そのほかの人々も、もちろん成仏できるということを保証されたことになるからである。それ故に、仏の説法の会座にいたものたちは大歓喜するわけである。長行に続いて偈文では、天子たちが仏の説法を讃嘆する。分科からいうと、以上が法説周で、以下に譬説周が始まる。

爾時舍利弗。白佛言。世尊。我今無復疑悔。親於佛前。得受阿耨多羅三藐三菩提記。是諸千二百。心自在者。昔住學地。佛常教化言。我法能離。生老病死。究竟涅槃。是學無學人。亦各自以離我見。及有無見等。謂得涅槃。而今於世尊前。聞所未聞。皆墮疑惑。善哉世尊。願爲四衆。説其因縁。令離疑悔。爾時佛告。舍利弗。我先不言。諸佛世尊。以種種因縁。譬喩言辭。方便説法。皆爲阿耨多羅三藐三菩提耶。是諸所説。皆爲化菩薩故。然舍利弗。今當復以譬喩。更明此義。諸有智者。以譬喩得解。舍利弗。若國邑聚落。有大長者。其年衰邁。財富無量。多有田宅。及諸僮僕。其家廣大。唯有一門。多諸人衆。一百二百。乃至五百人。止住其中。堂閣朽故。牆[1]壁隤[2]落。柱根腐敗。梁棟傾危。周匝[3]俱時。欻然火起。焚燒舍宅。長者諸子。若十。二十。或至三十。在此宅中。長者見是大火。從四面起。卽大驚怖。

而作是念。我雖能於。此所燒之門。安隱(4)得出。而諸子等。於火宅內。樂著嬉戲。不覺不知。不驚不怖。火來逼身。苦痛切己。心不厭患。無求出意。舍利弗。是長者。作是思惟。我身手有力。當以衣裓。若以机(5)案。從舍出之。復更思惟。是舍唯有一門。而復狹小。諸子幼稚。未有所識。戀著戲處。或當墮落。爲火所燒。我當爲說。怖畏之事。此舍已燒。宜時疾出。無令爲火。之所燒害。作是念已。如所思惟。具告諸子。汝等速出。父雖憐愍。善言誘喩。而諸子等。樂著嬉戲。不肯信受。不驚不畏。了無出心。亦復不知。何者是火。何者爲舍。云何爲失。但東西走戲。視父而已。爾時長者。卽作是念。此舍已爲。大火所燒。我及諸子。若不時出。必爲所焚。我今當設方便。令諸子等。得免斯害。父知諸子。先心各有所好。種種珍玩。奇異之物。情必樂著。而告之言。汝等所可玩好。希有難得。汝若不取。後必憂悔。如此種種。羊車。鹿車。牛車。今在門外。可以遊戲。汝等於此火宅。宜速出來。隨汝所欲。皆當與汝。爾時諸子。聞父所說。珍玩之物。適其願故。心各勇鋭。互相推排。競共馳走。爭出火宅。是時長者。見諸子等。安隱(6)得出。皆於四衢道中。露地而坐。無復障礙。其心泰然。歡喜踊躍。時諸子等。各白父言。父先所許。玩好之具。羊車。鹿車。牛車。願時賜與。

舍利弗。爾時長者。各賜諸子。等一大車。其車高廣。衆寶莊校。周匝(7)欄楯。四面懸鈴。又於其上。張設幰蓋。亦以珍奇雜寶。而嚴飾之。寶繩絞絡。垂諸華纓(8)。重敷綩綖。安置丹枕。駕以白牛。膚色充潔。形體姝好。有大筋力。行步平正。其疾如風。又多僕從。而侍衞之。所以者何。是大長者。財富無量。種種諸(9)藏。悉皆充溢。而作是念。我財物無極。不應以下劣小車。與諸子等。今此幼童。皆是吾子。愛無偏黨。我有如是。七寶大車。其數無量。應當等心。各各與之。不宜差別。所以者何。以我此物。周給一國。猶尙不匱。何況諸子。是時諸子。各

乘大車。得未曾有。非本所望。舍利弗。於汝意云何。是長者。等與諸子。珍寶大車。寧有虛妄不。舍利弗言。不也世尊。是長者。但令諸子。得免火難。全其軀命。非爲虛妄。何以故。若全身命。便爲已得。玩好之具。況復方便。於彼火宅。而拔濟之。世尊。若是長者。乃至不與。最小一車。猶不虛妄。何以故。是長者。先作是意。我以方便。令子得出。以是因緣。無虛妄也。何況長者。自知財富無量。欲饒益諸子。等與大車。佛告舍利弗。善哉善哉。如汝所言。

(1)牆＝墻　(2)隤＝頽　(3)(7)匝＝帀　(4)(6)隱＝穩　(5)机＝几　(8)纓＝瓔　(9)諸＝庫

爾の時に舍利弗、仏に白して言さく、

「世尊よ、我、今復、疑悔無し。親り仏前に於いて、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得たり。是の諸の千二百の心自在なる者、昔、学地に住せしに、仏常に教化して言わく、

『我が法は、能く生老病死を離れて、涅槃を究竟す』と。

是の学・無学の人、亦、各自ら我見、及び有無の見等を離れたるを以て、涅槃を得たりと謂えり。而るに今、世尊の前に於いて、未だ聞かざる所を聞いて、皆、疑惑に堕せり。善い哉、世尊よ、願わくは四衆の為に、其の因縁を説いて、疑悔を離れしめたまえ。」

爾の時に仏、舍利弗に告げたまわく、

「我、先に諸仏世尊の種種の因縁、譬喩、言辞を以て、方便して法を説きたもうは、皆、阿耨多羅三藐三菩提の為なりと言わずや。是の諸の所説は、皆、菩薩を化せんが為の故なり。然も舍利弗よ、今当に復、譬喩を以て、更に此の義を明かすべし。諸の智有らん者、譬喩を以て解することを得ん。

舍利弗よ、国邑聚落に大長者有るが若し。其の年衰邁して、財富無量なり。多く田宅及び諸の僮僕有り。其の

家広大にして、唯一門有り。諸の人衆多くして、一百二百、乃至五百人、其の中に止住せり。堂閣朽ち故り、牆壁隤れ落ち、柱根腐ち敗れ、梁棟傾き危し。周匝して倶時に、欻然に火起って舎宅を焚焼す。長者の諸子、若しは十、二十、或は三十に至るまで、此の宅の中に在り。長者、是の大火の四面より起こるを見て、即ち大いに驚怖して、是の念を作さく、

『我は能く此の所焼の門より、安隠に出ずることを得たりと雖も、而も諸子等、火宅の内に於いて嬉戯に楽著して、覚えず、知らず、驚かず、怖じず。火来って身を逼め、苦痛己れを切むれども、心厭患せず。出でんと求むる意無し。』

舎利弗よ、是の長者、是の思惟を作さく、

『我、身手に力有り、当に衣裓を以てや、若しは机案を以てや、舎より之を出すべき。』

復更に思惟すらく、

『是の舎は唯一門有り。而も復狭小なり。諸子幼稚にして未だ識る所有らず。戯処に恋著せり。或は当に堕落して火に焼かるべし。我、当に為に怖畏の事を説くべし。此の舎已に焼く。宜しく時に疾く出でて、火に焼害せられしむること無かるべし。』

是の念を作し已って、思惟する所の如く、具に諸子に告ぐ、

『汝等速かに出でよ』と。

父憐愍して、善言をもって誘喩すと雖も、而も諸子等、嬉戯に楽著し、肯て信受せず、驚かず、畏れず、了に出ずる心無し。亦復、何者か是れ火、何者か為れ舎、云何なるをか失うと為すを知らず。但東西に走り戯れて、父を視て已みぬ。爾の時に長者、即ち是の念を作さく、

『此の舎、已に大火に焼かる。我及び諸子、若し時に出でずんば必ず焚かれん。我、今当に方便を設けて、諸

子等をして、斯の害を免るることを得せしむべし。』

父、諸子の先心に、各好む所有る種種の珍玩、奇異の物は、情必ず楽著せんと知って、之に告げて言わく、

『汝等が玩好すべき所は希有にして得難し。汝、若し取らずんば、後に必ず憂悔せん。此の如き種種の羊車、鹿車、牛車、今門外に在り。以て遊戯すべし。汝等此の火宅より、宜しく速かに出で来るべし。汝が所欲に随って、皆当に汝に与うべし』と。

爾の時に諸子、父の所説の珍玩の物を聞くに、其の願いに適えるが故に、心各勇鋭して、互いに相推排し、競うて共に馳走し、争って火宅を出ず。

是の時に長者、諸子等の安隠に出ずることを得て、皆、四衢道の中の露地に於いて、坐して復障礙無きを見て、其の心泰然として歓喜踊躍せり。時に諸子等、各父に白して言さく、

『父よ、先に許す所の玩好の具の、羊車、鹿車、牛車、願わくば時に賜与したまえ』と。

舎利弗よ、爾の時に長者、各諸子に等一の大車を賜う。其の車、高広にして衆宝もて荘校し、周匝して欄楯あり。四面に鈴を懸け、又其の上に於いて幰蓋を張り設け、亦珍奇の雑宝を以て之を厳飾し、宝縄絞絡して、諸の華纓を垂れ、綩綖を重ね敷き、丹枕を安置して、駕するに白牛を以てす。膚色充潔に、形体姝好にして大筋力有り。行歩平正にして、其の疾きこと風の如し。又、僕従多く之を侍衛せり。所以は何ん。是の大長者、財富無量にして、種種の諸蔵悉く皆充溢せり。而も是の念を作さく、

『我が財物極り無し。応に下劣の小車を以て諸子等に与うべからず。今此の幼童は、皆是れ吾が子なり。愛するに偏党無し。我、是の如き七宝の大車有りて其の数無量なり。応当に等心にして、各各に之を与うべし。宜しく差別すべからず。所以は何ん。我が此の物を以て、周く一国に給うとも、猶尚、匱しからじ。何に況や諸子をや。』

是の時に諸子、各大車に乗って、未曾有なることを得るは、本の所望に非ざるなり。舎利弗よ、汝が意に於いて云何。是の長者、等しく諸子に珍宝の大車を与うること、寧ろ虚妄有りや、不や。」

舎利弗の言さく、

「不なり、世尊よ。是の長者、但諸子をして火難を免れ、其の軀命を全うすることを得せしむとも、為れ虚妄に非ず。何を以ての故に。若し身命を全うすれば、便ち為れ、已に玩好の具を得たるなり。況や復、方便して、彼の火宅より、而も之を抜済せるをや。世尊よ、若し是の長者、乃至最小の一車を与えざるも、猶虚妄ならじ。何を以ての故に。是の長者先に是の意を作さく、

『我、方便を以て、子をして出ずることを得せしめん』と。

是の因縁を以て虚妄無し。何に況や、長者、自ら財富無量なりと知って、諸子を饒益せんと欲して、等しく大車を与うるをや。」

仏、舎利弗に告げたまわく、

「善い哉、善い哉、汝が所言の如し。」

〔訳〕その時に、舎利弗は仏に申し上げた。

「世尊よ、わたくしは今また疑いも後悔もなく、親しく仏の面前で、このうえない正しい悟りを得るであろうという予言を受けることができました。ここにいる千二百人という大勢の、心が自由自在になった者たちが、その昔、学習の段階にあった時に、仏は常に教化して言われました。

『私の（説く）法は、生・老・病・死を離れさせ、涅槃を究め尽すものである』と。ここにいる学ぶべきものが残っている人、学ぶべきものがもはや何もない人も、各自に、「我あり」とする見解、「存

在は有である」あるいは「存在は無である」とする見解などを捨離したということによって、それで涅槃を得たのだと思いこんでおります。しかし今、世尊の前で、これまでに聞いたことのないことを聞き、みな疑惑におちいりました。ああ、どうか世尊よ、願わくは四衆のためにそのいわれを説き、（彼らの）疑いと後悔とを除きくださいますように。」

その時、仏は舎利弗に次のように告げられた。

「私は先に、多くの仏・世尊が種々のいわれ、喩え、言葉とをもって、教化の手段を設けて法を説いたのは、すべてこのうえない正しい悟りのためであると言ったではないか。その多くの説法は、みな菩薩を教化するためのものなのである。しかも舎利弗よ、今また、喩えをもって、更にこの意義を明かそう。智慧のあるものたちは、喩えによって理解することができるであろう。

舎利弗よ、国か、村か、聚落（しゅうらく）かに大長者がいたとしよう。彼は年をとって老い衰えながらも、財産や富ははかりしなれいほどあり、多くの田畑と屋敷があり、それに多数の下僕をかかえている。その家は広大で、門がただ一つだけある。さまざまな人たちが大勢いて、百人、二百人から五百人までもその中に住んでいる。建物は朽ち古（く）び、障壁もくずれ落ち、柱の根もとも腐り、梁（はり）や棟（むね）は傾いて危険である。（ある時）突然に、屋敷のまわり中に一時に火の手があがり、家が火事になってしまう。（ところが）その長者の子供たち、十人、二十人から三十人までもがこの家の中にいる。長者はこの大火が四方からおこるのを見るや、非常に驚きおそれて、このように考えた。

『私はこの燃えさかっている家の門から、無事逃げ出すことができるけれども、しかし子供たちは燃えさかる家の中にいて、嬉々として、遊びたわむれることに夢中で、（火事のおこったことに）気づ

かず、知りもせず、驚くこともなく、怖れもしない。火がまわってきて身にせまって、苦痛がわが身をせめさいなもうとしているのに、心にそれを厭いわずらう気持もなく、外に出ようとする気がない。』

舍利弗よ、(そこで)この長者は次のように考えた。

『私には力があるし、腕力も強い。(子供たちをひとまとめにして)衣の衿をつかんでか、あるいは机(の上にみんな乗せること)によって、家からつれ出そうか』と。

またさらに次のようにも考えた。

『この家には門はただ一つしかない。しかも狭くて小さい。子供たちはまだ幼くて、何もわからずに遊びに夢中になっている。ひょっとすると、(禍いに)おちこんで、火に焼かれてしまうかもしれない。(それならば)私は彼らにそのおそろしさを説いてやらねばならぬ。この家はもう焼けているのだ。ほどよい時にすばやく逃れ出て、火に焼かれないようにしてやらなければならぬ』と。

こう考えると、思案したとおりに、子供たちみんなに告げる。

『お前たち、早く出なさい』と。

父は(子供たちを)あわれんで、上手なことばで誘いさとすけれども、しかし子供たちは、遊びに熱中し、そのことばを信じ受けいれようとはせず、驚きもしないし、怖れもしないで、なんとしても、出ようとする心がおきない。また、一体火とは何なのか、家とは何なのか、焼けてしまうということはどういうことなのかということも知らずに、ただ東に西に走りたわむれていて、ただ父をみつめるばかりである。その時に、長者はこのように思った。

『この家はもう大火に焼かれている。私や子供たちも、適当な時に出なかったならば、きっと焼かれてしまうだろう。私は、今、手だてを設けて、子供たちをこの災難からのがれさせてやろう』と。
父は、子供たちがかねがね各自にほしがっていた種々のめずらしい玩具や、風変わりなものには、必ず心うばわれて執心するであろうと知って、彼らに告げて言うには、
『お前たちが好んでおもちゃあそびするものは、まれにしかなくて、手に入れることがむつかしいものだ。お前たちがもし取らなかったならば、後に必ずくやしい思いをするであろう。そんなようなさまざまな、羊の車、鹿の車、牛の車が今、門の外にある。それで遊ぶがよい。さあ、お前たちは、この燃えさかっている家から早く出てきなさい。お前たちがほしいと思うものは、すべてあげよう』と。
その時に、子供たちは父のいう珍しい玩具のことを聞いて、それが（自分たちの）ほしがっていたものとぴったりあったことから、それぞれ心勇んで、互いにおしあいへしあいして、競って走り出し、我れ先にと燃えている家からとび出した。
この時に長者は、子供たちが無事に外に出ることができて、みな四辻の露地に坐り、何の障害もないのを見て、心が安らかになり、喜びに心が踊った。
すると、子供たちはそれぞれ父にこう言った。
『お父上、先ほどおっしゃった玩具の、羊の車、鹿の車、牛の車をどうぞ、ここでお与え下さい』と。
舎利弗よ、その時に長者は、各々の子供たちにみな同じものの大きな車を与える。その車は高く広くて、多くの宝で飾り、まわりに手すりがついている。四面には鈴がついており、上部にほろがさを張

り、めずらしい色々な宝でそれを美しく飾っている。宝づくりの縄がまわりにかけられ、さまざまな花かざりが垂れ、（内部には）敷物がいく重にも敷かれ、赤い枕が置いてある。そして白い牛がその車を索く。（その白牛の）膚の色はとても清らかで、体つきは美しく、大変な力を有している。その歩行のさまは平らかにまっすぐで、その疾いことはまるで風のようである。そして、下僕たちが大勢この車についていて護衛している。（このように素晴らしい車を子供の一人一人に与えた）そのわけは、この大長者は財産、富ははかりしれないほどあり、種々のたくさんの蔵はすべてことごとくあふれるほど一杯だからであり、そして（また）次のように考えたからである

『私の財産は限りなくある。下劣な小さい車を子供たちに与えるべきではない。今、この幼い子供たちは、みな私の子供であるから、愛するのにわけへだてはしない。私にはこのような七宝づくりの大きな車がある。その車の数ははかりしれない。どの子供たちにもわけへだてなく同じ心で、その車を与えるべきであって、差別があってはならない。なぜなら、私がこの車を国中の人々に与えたとしても、まだ乏しくなるということはないからである。ましてや子供たちに与えるのに乏しいというようなことがあろうはずがない』と。

この時に、子供たちは各自、大きな車に乗って（その素晴らしさに）驚嘆した。しかし、そのことはもともと望んだことではなかった。

舎利弗よ、汝はどのように考えるか。この長者が、子供たちに一様に珍宝づくりの大きな車を与えたそのことは、いつわりではなかったかどうか。」

舎利弗が言った。

「いいえ、世尊よ。この長者は、ただ子供たちを火事の難からのがれさせ、その身命を全うすることができるようにしたのでありまして、そのことはいつわりではありません。なぜかと申しますと、(子供たちは)その身命を全うすればこそ、あそぶ玩具を手にすることができたのですから。ましてや手だてを設けて、あの火につつまれた家から彼らを救出したのですから、いつわりなどではありません。世尊よ。もし、この長者が、最小の車一つさえ与えなかったとしても、それでもいつわりではありません。なぜなら、この長者はあらかじめ、このように考えていたからであります。すなわち、『私は、手だてを講ずることによって、子供たちが外へ出ることができるようにしよう』と。このいわれからしても、いつわりではありません。ましてや長者は、自分が財産、富がはかりしれないほどあることを知っていて、子供たちに利益を与えようと思い、平等に大きな車を与えたのでありますから、なおのこと、いつわりなどではありません。」

仏は舎利弗に、次のようにお告げになった。「よろしい、よろしい。汝のいうとおりである。」

《**是諸千二百心自在者**》舎利弗をはじめとする千二百人の阿羅漢たち。序品との連絡からいうと、一万二千人の阿羅漢たちの一部。心自在とは、阿羅漢には智慧によって煩悩を断じたもの(慧解脱)と、さらにそれにいかなる禅定にも入りうる心の自在を得たもの(倶解脱)の二種があり、後者を指して心自在者という。阿羅漢は煩悩を断尽した者であるから、すべて慧解脱といいうるが、しかしいかなる禅定にも入りうるほどの心の自在を得るのは、さらに利根の阿羅漢でなければならない。《**住学地**》学地とは、修行においてまだ学習すべきことが残っている段階をいう、序品の注(四六頁)参照。《**是学無学人**》学・無学については前注

参照。これらの人々は、序品の学・無学の二千人の中の人々を指す。《我見》自己の中心に実体的な我（アートマン）があるとする誤った見解。我執ともいう。《有無見》有見と無見。有見とは、本来うつろいゆき、無常であるこの世の存在すべてを常住であるとする誤った見解。無見とは、一切存在は無であるとする誤った見解のこと。

《衣裓》花を盛る器。花皿とも、あるいは衣の衿（吉蔵『法華義疏』）、衣の襟（基『法華玄賛』）とも解されているが、詳細は不明。ここでは吉蔵に従って、衣の衿と解しておく。《羊車・鹿車・牛車》それぞれ声聞・縁覚・菩薩の三乗にたとえる。南条・ケルン本梵本では牛車・羊車・鹿車の順に菩薩・縁覚・声聞乗にたとえ、『正法華経』では羊車・馬車・象車を三乗にたとえており、諸本一致しない。なお、後の「大白牛車」の解説参照。《幰蓋》「幰」は車のほろ、とばりのこと。「蓋」はかさ。《綩綖》吉蔵の『義疏』によれば、外国の精絹のことで、富貴の者はこれを重ねて敷くという。

これより以下は、舎利弗の要請にこたえて、仏が長者火宅の喩をもって舎利弗の同輩の阿羅漢や、学・無学の者たちに対して、三乗方便一乗真実を説き明かすのである。分科でいえば、ここから譬喩周に入り、この品のおわりまでが譬喩周のうちの正説に相当する。

一　長者火宅の喩

前章の方便品において、声聞（しょうもん）・縁覚（えんがく）・菩薩（ぼさつ）の三乗の教えは、一乗に導くための教化の手段であって、決してそれらが究極の目的ではないということが明かされた。そして従来、永く成仏（じょうぶつ）すべからずとさ

れてきた声聞は、仏から「汝等千二百の羅漢、またまさに成仏すべし」との証明を得た。本章の冒頭に至ると、舎利弗はまず、「今、世尊よりこの法音を聞いて、心に勇躍を懐き、未曾有なることを得たり」と言って、喜びと驚きを世尊に表明する。それは、これまでに菩薩に対する仏の成仏の予言はしばしば見てきたが、われら二乗にあっては、それは預ることのできないものと断念していたからである。経典は、舎利弗の心中の驚きと不思議さを、悪魔が仏に姿を現じて悩ませるかと表現している。仏はそこで、舎利弗にむかって、仏は、二万億の仏のみもとで、常に汝を教化し、仏道に志願させてきた。しかし、今はそれを全く忘れて自らはすでに二乗の解脱涅槃を得たと思っている。仏はその昔の本願所行の道を憶念せしめようとしてこの法華経を説いているのだ、と告げられた。

舎利弗は、この法華経を聞いて、かつての志願を思い出し、仏は彼に対して未来世、離垢国に生れて華光如来という仏になるであろうと予言されたのである。これが二乗成仏の最初である。この仏の成仏の予言を授記という。授記とは記莂を授与することで、記莂とはあらかじめ記し与えることである。

舎利弗が、成仏の記莂を与えられたのを見て大衆は歓喜したが、だが他の千二百人の阿羅漢たちは、まだ自分たちは涅槃を得ていると信じており、いま世尊のみまえで未曾有の法華経の二乗作仏の説法を聞いて、みな疑惑をいだいた。舎利弗はこれを知って、仏に彼らの疑惑を解きたまえとお願いした。かくして仏が千二百人の阿羅漢たちのいだく疑網をはらすべく説かれたのが長者火宅の喩である。

その喩え話とは、ある国、町、村、どこでもよいが、一人の年老いた大長者がいた。その邸宅は大きく広いが、門はただ一つしかない。建物は古く朽ちかけており、壁もおち、柱もくされかかり、棟

や梁(はり)も傾きかけている。家の中には大勢の家人がおり、長者の子供たちが三十人もその中にいた。ある時、突然に火事がおこり、あっというまに炎が家全体を包んでしまう。その家の中には長者の子供たちが火事のおこったのも知らず、玩具で遊びに夢中になっており、外に逃れ出ようという気すらおこさない。長者は子供たちのことを思い、早く出なさいと言葉をつくして声をかけるのであるが、嬉嬉として遊びにたわむれる子供たちは、火事の恐さも知らずに一向に出る気配さえない。門が狭くて一度にかかえて外に出すこともできない長者は、ここで一計を案じ、方便を設けて子供たちを外に出そうとした。子供たちにはそれぞれ好みの玩具があったから、その玩具にはきっと心ひかれると思って、そこで門の外にいまお前たちのほしがっている羊車・鹿車・牛車があるから早く外に出てきて、それをとりなさい、と告げたのである。案の定、子供たちは車欲しさに外にとび出し、無事火に焼かれることなく火宅から脱出することができた。そして、早速に長者にそれぞれ望みの車を下さいと願うのである。長者はそこで子供たちに、みな同じすばらしい大きな車を与えた。その大車は七宝づくりの素晴しい車で、これを索(ひ)くのは形体もすぐれ、風のように快走する白牛であり、多くの従僕たちがつき随っている車であった。長者がこのような素晴しい車を子供たちに与えたのは、長者が財富無量であり、また子供たちに下劣の小車を与えたくないという親心であった。

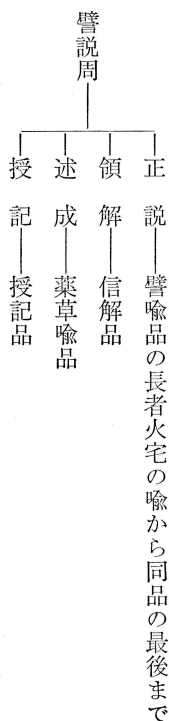
以上が長者火宅の喩である。これはまた三界火宅(さんがいかたく)の喩ともいう。火宅は三界にたとえ、子供たちは衆生に、そして長者は仏にたとえるのであり、そして、羊・鹿・牛の三車は、それぞれ、声聞乗、縁覚乗・菩薩乗の三乗にたとえ、大白牛車(だいびゃくごしゃ)は一仏乗にたとえる。

さて、経典は、この次の段で示されるように、この譬喩を以下のように結んでいる。

すなわち、仏は一切世間の父であり、大慈大悲をもって一切に利益をほどこす。衆生は火宅の三界に生まれて四苦八苦に苦しんでいながら、しかもその三界が火宅であることに気づかない。仏は、三界の火宅の中の衆生はことごとく、これ我が子なりとして、この子供たちの苦難を抜き、仏の智慧の安楽を与えようと考える。仏は神通力、智慧力を具えているが、しかし三界の火宅に遊び戯れる子供たちには、その仏の智慧はさとりがたい。そこで、かの長者が身力があってもそれを用いず、方便をもって火宅の難を救ったように、仏もまた方便をもって衆生たちを済度しようとして、そこで三乗の法を説いた。これが羊・鹿・牛の三乗である。如来はこの三乗の方便をもって衆生たちを誘導し、そしてこの三乗に乗じて衆生たちは安穏快楽をえた。

しかし、かの長者が、子供たちが安全な場所に逃れ出たのを見て、等しく大車を与えたように、そのように仏もまた、わが子である衆生たちが三界の苦から逃れ、涅槃の安楽に達したのを見て、等しく大乗を与えるのである。すなわち、仏は、はじめには三乗の教えを説いておき、後には無上の教えである大乗によって、衆生たちを仏の智慧に至らしめようとするのである。このようなわけで、諸仏は方便をもって、一仏乗を三乗として説くのであるといって、前章方便品において説いた三乗方便一乗真実の教えを詳細に説き示すのである。

法華経には法華七喩といって、有名な七つの喩え話があるが、この長者火宅の喩はその第一番目の喩え話である。先に触れたように、分科のうえでいうと本章譬喩品の長者火宅の喩から譬説周に入る。この譬説周も、先の法説周と同じように、正説、領解、述成、授記に分かれており、これを図示すると、

譬説周
- 正説――譬喩品の長者火宅の喩から同品の最後まで
- 領解――信解品
- 述成――薬草喩品
- 授記――授記品

となる。正説とは釈尊の本章における長者火宅以下の説法で、領解とは、次章の信解品(しんげほん)でこれを聞いた四大声聞が自分達の領解を述べ、述成とは、薬草喩品(やくそうゆ)で仏が迦葉(かしょう)をはじめとする大弟子たちの領解に印可を与え、授記では授記品において、迦葉・須菩提(しゅぼだい)・迦旃延(かせんねん)・目連(もくれん)の四大声聞に記莂が与えられる。以上のような構成になっている。

舍利弗。如來亦復如是。則爲一切。世間之父。於諸怖畏。衰惱憂患。無明闇(1)蔽。永盡無餘。而悉成就。無量知見。力。無所畏。有大神力。及智慧力。具足方便。智慧波羅蜜。大慈大悲。常無懈倦。恒求善事。利益一切。而生三界。朽故火宅。爲度衆生。生老病死。憂悲苦惱。愚癡闇(2)蔽。三毒之火。教化令得。阿耨多羅三藐三菩提。見諸衆生。爲生老病死。憂悲苦惱。之所燒煮。亦以五欲財利故。受種種苦。又以貪著追求故。現受衆苦。後受地獄。畜生餓鬼之苦。若生天上。及在人間。貧窮困苦。愛別離苦。怨憎會苦。如是等。種種諸苦。衆生沒在其中。歡喜遊戲。不覺不知。不驚不怖。亦不生厭。不求解脫。於此三界火宅。東西馳走。雖遭大苦。不以爲患。舍利弗。佛見此已。便作是念。我爲衆生之父。應拔其苦難。與無量

無邊。佛智慧樂。令其遊戲。

舍利弗。如來復作是念。若我但以神力。及智慧力。捨於方便。爲諸衆生。讚如來知見。力無所畏者。衆生不能。以是得度。所以者何。是諸衆生。未免生老病死。憂悲苦惱。而爲三界。火宅所燒。何由能解。佛之智慧。舍利弗。如彼長者。雖復身手有力。而不用之。但以慇(3)懃(4)方便。勉濟諸子。火宅之難。然後各與。珍寶大車。如來亦復如是。雖有力無所畏。而不用之。但以智慧方便。於三界火宅。拔濟衆生。爲說三乘。聲聞。辟支佛。佛乘。而作是言。汝等莫得。樂住三界火宅。勿貪麤弊。色聲香味觸也。若貪著生愛。則爲所燒。汝等(5)速出三界。當得三乘。聲聞。辟支佛。佛乘。我今爲汝。保任此事。終不虛也。汝等但當。勤修精進。如來以是方便。誘進衆生。復作是言。汝等當知。此三乘法。皆是聖所稱歎。自在無繫。無所依求。乘是三乘。以無漏根。力。覺。道。禪定。解脫。三昧等。而自娛樂。便得無量。安隱(6)快樂。舍利弗。若有衆生。內有智性。從佛世尊。聞法信受。慇懃精進。欲速出三界。自求涅槃。是名聲聞乘。如彼諸子。爲求羊車。出於火宅。若有衆生。從佛世尊。聞法信受。慇懃精進。求自然慧。樂獨善寂。深知諸法因緣。是名辟支佛乘。如彼諸子。爲求鹿車。出於火宅。若有衆生。從佛世尊。聞法信受。勤修精進。求一切智。佛智。自然智。無師智。如來知見。力。無所畏。愍念安樂。無量衆生。利益天人。度脫一切。是名大乘。菩薩求此乘故。名爲摩訶薩。如彼諸子。爲求牛車。出於火宅。舍利弗。如彼長者。見諸子等。安隱(7)得出火宅。到無畏處。自惟財富無量。等以大車。而賜諸子。如來亦復如是。爲一切衆生之父。若見無量。億千衆生。以佛敎門。出三界苦。怖畏險道。得涅槃樂。如來爾時。便作是念。我有無量無邊智慧。力。無畏等。諸佛法藏。是諸衆生。皆是我子。等與大乘。不令有人。獨得滅度。皆以如來滅度。

而滅度之。是諸衆生。脱三界者。悉與諸佛。禪定解脱等。娯樂之具。皆是一相一種。聖所稱歎。能生淨妙。第一之樂。舍利弗。如彼長者。初以三車。誘引諸子。然後但與大車。寶物莊嚴。安隱(8)第一。然彼長者。無虚妄之咎。如來亦復如是。無有虚妄。初説三乘。引導衆生。然後但以大乘。而度脱之。何以故。如來。有無量智慧。力。無所畏。諸法之藏。能與一切衆生。大乘之法。但不盡能受。舍利弗。以是因緣。當知諸佛。方便力故。於一佛乘。分別説三。

(1)(2)闇=暗　(3)底本は「殷」、高麗蔵、春日本とも「慇」。今改む。(4)底本は「勤」、高麗蔵、春日本とも「懃」。今改む。(5)「等」の一字、底本になし。春日本によって補う。(6)(7)(8)隱=穩

「舍利弗よ、如来も亦復是の如し。即ち為れ、一切世間の父なり。諸の怖畏、衰悩、憂患、無明、闇蔽に於いて、永く尽くして余無し。而も悉く無量の知見、力、無所畏を成就し、大神力及び智慧力有って、方便・智慧波羅蜜を具足す。大慈大悲ありて、常に解倦無く、恒に善事を求めて一切を利益す。而も三界の朽ち故りたる火宅に生ずること、衆生の生老病死、憂悲苦悩、愚癡闇蔽、三毒の火を度し、教化して阿耨多羅三藐三菩提を得せしめんが為なり。諸の衆生を見るに、生老病死、憂悲苦悩に焼煮せられ、亦、五欲・財利を以ての故に、種種の苦を受く。又、貪著し追求するを以ての故に、現には衆苦を受け、後には地獄、畜生、餓鬼の苦を受く。若し天上に生まれ、及び人間に在っては、貧窮困苦、愛別離苦、怨憎会苦、是の如き等の種種の諸苦あり。衆生其の中に没在して歓喜し遊戯して、覚えず、知らず、驚かず、怖じず、亦、厭うことを生さず、解脱を求めず。此の三界の火宅に於いて、東西に馳走して大苦に遭うと雖も、以て患と為さず。舎利弗よ、仏此れを見已って、便ち是の念を作さく、

『我は為れ衆生の父なり。応に其の苦難を抜き、無量無辺の仏智慧の楽を与え、其れをして遊戯せしむべし』

と。

舎利弗よ、如来は復是の念を作さく、

『若し我、但神力及び智慧力を以て、方便を捨てて諸の衆生の為に、如来の知見、力、無所畏を讃めば、衆生是れを以て得度すること能わじ。所以は何ん。是の諸の衆生、未だ生老病死、憂悲苦悩を免れずして、三界の火宅に焼かるればなり。何に由ってか能く仏の智慧を解せん』と。

舎利弗よ、彼の長者の復、身手に力有りと雖も、而も之を用いず。但慇懃の方便を以て、諸子の火宅の難を勉済して、然して後に、各 珍宝の大車を与うるが如く、如来も亦復是の如し。力、無所畏有りと雖も、而も之を用いず。但智慧・方便を以て、三界の火宅より、衆生を抜済せんとして、為に三乗の声聞、辟支仏、仏乗を説く。而も是の言を作さく、

『汝等楽って、三界の火宅に住することを得ること莫れ。麤弊の色・声・香・味・触を貪ること勿れ。若し貪著して愛を生ぜば、即ち為れ焼かれなん。汝等、速かに三界を出でて、当に三乗の声聞、辟支仏、仏乗を得べし。我、今、汝が為に此の事を保任す。終に虚しからじ。汝等、但当に勤修精進すべし』と。

如来、是の方便を以て衆生を誘進す。復、是の言を作さく、

『汝等よ、当に知るべし。此の三乗の法は、皆是れ聖の称歎したもう所なり。自在無繫にして、依求する所無し。是の三乗に乗じて、無漏の根、力、覚、道、禅定、解脱、三昧等を以て、自ら娯楽して、便ち無量の安隠快楽を得べし』と。

舎利弗よ、若し衆生有り、内に智性有って、仏・世尊より法を聞いて、信受し慇懃に精進して、速かに三界を出でんと欲して自ら涅槃を求むる、是れを声聞乗と名づく。彼の諸子の羊車を求むるを為て火宅を出づるが如し。若し衆生有り、仏・世尊より法を聞いて信受し、慇懃に精進して自然慧を求め、独り善寂を楽い、深

く諸法の因縁を知る、是れを辟支仏乗と名づく。彼の諸子の、鹿車を求むるを為て火宅を出づるが如し。若し衆生有り、仏・世尊より法を聞いて信受し、勤修精進して、一切智、仏智、自然智、無師智、如来の知見、力、無所畏を求め、無量の衆生を愍念安楽し、天人を利益し、一切を度脱する、是れを大乗と名づく。菩薩此の乗を求むるが故に、名づけて摩訶薩と為す。彼の諸子、牛車を求むるを為って火宅を出づるが如し。舎利弗よ、彼の長者の、諸子等の安隠に火宅を出ずることを得て、無畏の処に到るを見て、自ら財富無量なることを惟いて、等しく大車を以て諸子に賜えるが如く、如来も亦復是の如く、為れ、一切衆生の父なり。若し無量億千の衆生の、仏教の門を以て、三界の苦、怖畏の険道を出でて、涅槃の楽を得るを見ては、如来爾の時に、便ち是の念を作さく、『我、無量無辺の智慧、力、無畏等の諸仏の法蔵有り。是の諸の衆生は　皆是れ我が子なり。等しく大乗を与うべし。人として独り滅度を得ること有らしめじ。皆如来の滅度を以て之を滅度せん』と。

是の諸の衆生の三界を脱れたる者には、悉く諸仏の禅定、解脱等の娯楽の具を与う。皆是れ一相一種にして、聖の称歎したもう所なり。能く浄妙第一の楽を生ず。舎利弗よ、彼の長者の、初め三車を以て諸子を誘引し、然して後に、但大車の宝物をもって荘厳し、安隠第一なるを与うるに、然も彼の長者、虚妄の咎無きが如く、如来も亦復是の如し。虚妄有ること無し。初め三乗を説いて衆生を引導し、然して後に、但大乗を以て之を度脱す。何を以ての故に、如来は無量の智慧、力、無所畏、諸法の蔵有って能く一切衆生に大乗の法を与う。但尽くは受くること能わず。舎利弗よ、此の因縁を以て当に知るべし。諸仏、方便力の故に、一仏乗に於いて、分別して三と説きたもう。」

〔訳〕「舎利弗よ、如来もまたそのとおりである。すなわち、この世すべてのものの父なのである。さ

まざまな怖れ、苦悩、憂い、根源的無知、暗やみを余すところなく永く滅し尽している。しかも、本質をみきわめ覚る無量の智慧、（十種の）力、（四種の）おそれなき心を完成し、偉大な神通力及び智慧の力があって、教化の手段と完全な智慧とを身にそなえている。大きな慈悲の心があり、つねに倦み疲れることなく、いつも善い行いを求めてすべてのものに恵みを与えている。そして、（欲界・色界・無色界の）三界のなかの、朽ち古びた燃えさかる家の中に出現したのは、衆生たちの生・老・病・死・憂い・悲しみ・苦悩・愚かさ・（無知の）暗やみ、それと貪りと瞋りと愚かさの三つの煩悩の火とを救い、教化して無上の正しい悟りを得させようとしたためなのである。さまざまな衆生たちを見ると、彼らは生・老・病・死・憂い・悲しみ・苦悩に焼かれたり、煮られたりしている。また、五官の欲望や財を求めることのためにさまざまな苦しみを受けている。そして、むさぼり執着し、追い求めることのために、現世には多くの苦しみを受け、死後には畜生や餓鬼の苦しみを受ける。もし、天上界に生まれ、人間界に生まれても、貧困の苦しみ、愛する者と離れる苦しみ、怨み憎んでいる相手と会う苦しみなど、このようなさまざまな多くの苦しみがある。衆生たちはその中に埋没しながらも、喜び遊びたわむれていて、気づかず、知らず、驚きもせず、怖れもしない。また、それを厭う気持もおきず、そこから脱け出すことを求めようともしない。この三界の燃えさかる家の中で、東に西に走りまわって、大きな苦しみに遭ってもそれを苦しみともしない。舎利弗よ、仏は以上のことを見おわって、このように考えたのである。

『私は生きとし生けるものたちの父である。私は彼らの苦難を救い、はかりしれず限りない仏の智慧の楽を与えて、彼らを遊びたわむれるようにしてやらなければならない』と。

舎利弗よ、如来はまたこのようにも考えた。

『もし私が、ただ神通力と智慧の力のみによって、教化の手段を捨てて、多くの衆生たちのために、如来の知見と（十種の）力と（四種の）おそれなき心とを讃嘆したならば、衆生たちはそれによって救われることはできないであろう。なぜならば、この多くの衆生たちは、まだ生・老・病・死・憂い・悲しみ・苦悩からまぬがれることなく、三界の燃えさかる家の中で焼かれているからである。彼らは一体、何によって仏の智慧を理解することができようか』と。

舎利弗よ、かの長者は、身体や腕に力がありながら、しかもそれを用いなかった。ただねんごろに教化の手段をつくして、子供たちの、燃えさかる家のなかでの災難を救い、そしてその後に、各々に珍しい宝でできた大きな車を与えたように、如来もまたそのとおりなのである。（十種の）力、（四種の）おそれぬ心を有していても、しかしそれを用いることはしない。ただ智慧と教化の手段とによって、三界の燃えさかる家から衆生たちを救済しようとして、そのために三つの乗りもの、すなわち声聞の、辟支仏の、仏の乗りものを説くのであり、そしてこのように言うのである。

『汝たちは、好んで三界の燃えさかる家の中にとどまっていてはならない。下劣ないろ・かたち、音声、香り、味、感触を貪ってはならない。もし、それらを貪り、執着して、激しい欲望を生じたならば、火に焼かれてしまうであろう。汝たちは速かに三界から出て、三つの乗りものである声聞の、辟支仏の、仏の乗りものを得るべきである。私は今、汝たちにこのことを責任をもって保証しよう。決して何もないというようなことはないであろう。汝たちはただ修行し努力せよ』と。

如来は以上の教化の手段をもって、衆生たちを誘い導いたのであり、また次のように言われた。

『汝たちよ、知るがよい。この三つの乗りものの教えは、みな聖者のほめたたえるものである。自由自在で、独立の存在であり、他に依存したり求めたりすることがない。この三つの乗りものに乗って、煩悩の汚れのない（五種の）素質、（五種の）力、（七種の）悟りの智慧を助けるもの、（八種の正しい）実践道、（四種の）禅定、（八種の）解脱、（三）三昧などによって、みずから心楽しんで、無量の安らかな楽しみを得ることであろう』と。

舎利弗よ、もし衆生が、内面に智慧の性質があり、仏・世尊から法を聞いて、それを信じ受け入れ、ねんごろに精進して、速かに三界を出ようとしてみずから涅槃を求めるならば、これを声聞の乗りものと名づける。それは、ちょうど、あの子供たちが羊の車を求めて燃えている家から出たようなものである。

もし、衆生が、仏・世尊から法を聞き、それを信じ受け入れて、ねんごろに精進して、（十二因縁という）自然に存する法をさとる智慧を求め、独りで寂静の境地を望み、深く現象界の（十二）因縁の理法を知るならば、これを辟支仏の乗りものと名づけるのである。ちょうど、あの子供たちが、鹿の車を求めて燃えている家から出たようなものである。もし、衆生が、仏・世尊から法を聞き、それを信じ受け入れて、修行に精進し、一切を知る智慧、仏の智慧、師なくして得る知、如来の知見、（十種の）力、（四種の）おそれなき心を求め、無量の衆生たちを思いあわれんで安楽にし、天や人々を利益し、すべてのものたちを済度するならば、これを大きな乗りものと名づけるのであり、菩薩はこの乗りものを求める故に偉大な人と名づけるのである。それはちょうど、あの子供たちが、牛の車を求めて燃えている家から出たようなものである。舎利弗よ、あの長者が、子供たちが無事に燃えさ

かる家から出ることができて安全な場所に到ったのを見て、自分が財産や富がはかりしれないほどあることを思って、一様に大きな立派な車を子供たちに与えたように、如来もまたそのとおりなのである。（如来は）すべての衆生たちの父である。億の千倍の無量倍という多くの衆生たちが、仏の教えの門を通って、三界における苦しみやおそろしくて険しい道より出て、涅槃の安楽を得るのを見て、如来はその時にこのように考えた。

『私には、無量の限りない智慧、（十種の力）、（四種の）おそれない心などの多くの仏たちの（有する）法の蔵がある。この多くの衆生たちは、みな私の子どもたちである。平等に大きな乗りものを与えよう。人として、その人ただ一人が（自分一人の）涅槃を得るということではなく、みな如来の涅槃によって彼らに涅槃を得させよう』と。

この多くの、三界を逃れ出た衆生たちには、ことごとく多くの仏たちの禅定、解脱などの娯楽の道具を与える。それらはすべて同一の外見、同一の種類であって、聖者のほめたたえるものであり、最も浄らかですばらしい安楽を生じさせるものである。

舎利弗よ、かの長者が、はじめは三つの車によって子供たちを誘い導き、その後に、大きな車の、宝物によって飾り、安らかなことこのうえないものを与えたけれども、しかもその長者にはいつわりの咎がなかったように、如来もまたそのとおりであって、いつわりはないのである。初めに三種の教えの乗りものを説いて衆生たちを教え導き、そうした後に、ただ大きな教えの乗りもののみによって、彼らを救済するのである。なぜかといえば、如来には無量の智慧、（十種の）力、（四種の）何ものもおそれない心、さまざまな教法の蔵があって、すべての衆生たちに大きな教えの乗りものを与えるこ

とができるからである。しかしながら、それを受ける衆生たちが、全部が全部それを受けることができるとは限らない。

舎利弗よ、このようなわけで、多くの仏たちは教化の手だての力の故に、（本来）一つの仏の乗りものであるものを、ことわけして三と説かれたのだと知るべきである。」

《知見》 jñāna-darśana 物事を悟り見きわめる智慧。**《力》** 十力の略。方便品の注（一一一頁）参照。**《無所畏》** 四無所畏（しむしょい）の略。方便品の注（一一一頁）参照。**《智慧波羅蜜》** 原語は jñāna-parama-pāramitā.（最勝の智の究極）「波羅蜜」は pāramitā の音写で、「完全な、絶対の」の意。**《三毒》** 貪（とん）（むさぼり）・瞋（じん）（いかり）・癡（ち）（愚かさ）の三種の煩悩をいう。**《五欲》** 眼・耳・鼻・舌・身の五種類の感官のおこす欲望。またそれぞれの欲望の対象物（五境）をも五欲と呼ぶことがある。総じて人間の欲望一般を指す。**《如来知見》** tathā-gata-jñāna-darśana 仏知見に同じ。如来の悟りの智慧による見解の意であるが、その内容は本経中の全用例（特に前章方便品の用例）から考えると、一切衆生のうちに一乗の根拠としての如来蔵、仏性ありと知る如来の智慧と解される。衆生のうちに仏と同質のものがあるということは、現実に迷いの生存をくりかえしている衆生たち自身には知ることができず、それを如実に知ることのできるのは仏のみであるからである。第二章方便品の仏知見の注（一三七頁）参照。**《力・無所畏》** 十力・四無所畏の略。方便品の注（一一一頁）参照。**《無漏根・力・覚・道》** 三十七道品（悟りを得るための三十七種の実践徳目）のうちの、五根・五力・七覚支・八正道のこと。五根とは、悟りに至るための五種の能力で、㈠信根（信を生じさせ保つ能力）㈡精進根（努力する能力）㈢念根（精神集中の能力）㈣定根（禅定の能力）㈤慧根（智慧の能力）の五つをいう。五力とは、先の五根が機能し、すぐれたはたらきを示すその力をいう。信力・精

神力・念力・定力・慧力の五つ。七覚支とは、㈠択法覚支（教法の真偽を選びとること）㈡精進覚支（正法によって努力修行すること）㈢喜覚支（法の喜びに住すること）㈣軽安覚支（身心のかろやかさと快適さを得ること）㈤捨覚支（対象へのとらわれを捨て、平安になること）㈥定覚支（精神を統御して乱れないこと）㈦念覚支（智慧と禅定のバランスをとること）、の七種で、修行時の心の状態に応じて最も適切な方法を選んで行う。八正道とは、仏教における最も基本的な八種の修行法で、四諦の中の道諦の具体的内容である。㈠正見（正しい見方、見解）㈡正思惟（正しい意思、決意）㈢正語（正しい言語的行為）㈣正業（正しい行い）㈤正命（正しい生活）㈥正精進（正しい努力）㈦正念（正しい意識をもち忘れぬこと）㈧正定（正しい精神統一）の八種。**《禅定》**序品の語注（七九頁）参照。**《解脱》**方便品の語注（一一一頁）参照。**《三味》**方便品の語注（一一一—一一二頁）参照。**《自然慧》**十二因縁の理法を知る智慧。十二因縁の理法は、仏の出世不出世にかかわらず理法として自然に存在するので、これを知る智慧をこう呼ぶ。**《摩訶薩》**mahā-sattva の音写。大士と訳す。序品の語注（四七頁）参照。

二　大白牛車

前節の長者火宅の喩において、声聞は羊車を求めて三界の火宅を出で、縁覚は鹿車を求めて三界を出、菩薩は牛車を求めんとして三界を出た。三界を出おわって無畏安穏なところに至るを見て、仏は白牛に駕せられる大車をそれぞれに等しく与えられた。これが長者火宅の喩の骨子である。いまこの白牛に駕せられる大車を「大白牛車」といい、仏となるための教え、すなわち仏乗をたとえたものである。

古来、長者火宅の喩は開三顕一をあらわしたものであるといわれる。開三顕一とは、三乗を開会して一乗を顕わすということで、これまで説いた三乗の教えは方便で、衆生を誘引するための手だてであり、これから説かれる法華経の一仏乗が仏の本来の真実の教えであるということを顕わすものである。

天台家の解釈によれば、開三顕一は、まず方便品において、難解難入の仏智を端的に説いた諸法実相論よりはじめられたとする。これを略開三顕一といっている。このときは、大智の舎利弗のみ領解することができたが、他の声聞等は資質の及ぶところではなく、そのために仏は機根に応じて譬喩、因縁と説くに至るのである。すなわち、

上根──法　説──舎利弗──方便品、譬喩品
中根──譬　説──迦葉、目連等──譬喩品、信解品、薬草喩品、授記品
下根──因縁説──富楼那等──化城喩品、五百弟子品、人記品、

のようであり、この中根、下根のものたちに説かれる譬喩説、因縁説を広開三顕一といい、さまざまな素材を駆使して譬喩、因縁を説いて、広く三乗を開会して一乗を顕わすのでこう呼ばれるのである。

さて、前節の「長者火宅の喩」において、羊・鹿・牛車の三車をそれぞれ三乗の声聞・縁覚（辟支仏）・菩薩乗にたとえ、大白牛車を一仏乗にたとえるといった。そこでは三乗をそれぞれ声聞乗・縁覚乗・菩薩乗としたのであるが、実は三乗の名称は法華経では右の一種類だけなのではない。というのは、今われわれの依っている妙法華の中においても、またそれ以外の梵本、正法華経などの諸本のあいだでも、三乗の内容がそれぞれ異なっているからである。たとえば、妙法華では、この章の譬喩品では、「但だ智慧方便を以て、三界の火宅より、衆生を抜済せんとして、為に三乗の声聞・辟支仏

・仏乗を説く」とあって、ここでは声聞乗・辟支仏乗・仏乗の三乗を出している。そして、この部分の少し後のところでは、羊車を求めるのが声聞乗、鹿車を求めるのが辟支仏乗、牛車を求めるのが大乗であるとあって、ここでは三乗は、声聞乗・辟支仏乗・大乗である。しかし、さらに後の第七章の化城喩品では、「若し声聞、辟支仏、及び諸の菩薩、能く是の十六の菩薩の、所説の経法を信じ、受持して毀らざらん者、是の人は皆まさに阿耨多羅三藐三菩提の如来の慧を得べし」とあって、声聞・辟支仏・菩薩の三乗を並べている。また同じように、第十四章の安楽行品にも「声聞を求むる者、辟支仏を求むる者、菩薩道を求むる者あらば云云」というところがあり、ここでも三乗は声聞乗・辟支仏乗・菩薩乗である。このように妙法華の中でも、三乗は声聞乗・辟支仏乗・仏乗か、声聞乗・辟支仏乗・大乗、それに声聞乗・辟支仏乗・菩薩乗となっている。

妙法華以外の諸本はどうかというと、先に挙げた譬喩品の二例のうちの前者については、梵本では声聞乗（śrāvakayāna）・縁覚乗（pratyekabuddhayāna）・菩薩乗（bodhisattvayāna）となっており、正法華経では「声聞・縁覚・菩薩之道」とある。したがってこの箇処では妙法華だけが菩薩乗でなく仏乗となっている。そして、譬喩品の後者の例の部分では、まず梵本は、声聞乗は鹿車、辟支仏乗は羊車（妙法華と逆になっている）、大乗（mahāyāna）は牛車に相当するとあり、三乗を声聞乗・辟支仏乗・大乗としており、妙法華と一致している。正法華経では、声聞乗は羊車、縁覚乗は馬車、如来道は象車に相当するとあって、声聞乗・縁覚乗・如来道の三乗を出している。第七章化城喩品の例はどうかというと、梵本では、声聞乗の人（śrāvakayānika）、縁覚乗の人（pratyekabuddhayānika）、菩薩乗の人（bodhisattvayānika）となっており、声聞・縁覚・菩薩の三乗を出していて妙法華と一

致している。正法華経も、声聞・縁覚・菩薩の三乗を出している。第十四章の安楽行品の例も同様で、梵本、正法華経とも声聞・縁覚・菩薩の三乗で、妙法華と一致している。表にまとめてみると、次のようになる。

	『妙法華』	梵本（南条・ケルン本）	『正法華』
譬喩品	声聞乗・辟支仏乗・仏　乗	声聞乗・縁覚乗・菩薩乗	声聞・縁覚乗・菩薩之道
	声聞乗・辟支仏乗・大　乗	声聞乗・縁覚乗・大　乗	声聞・縁覚乗・如来道
化城喩品	声聞乗・辟支仏乗・菩薩乗	声聞乗・縁覚乗・菩薩乗	声聞・縁覚乗・菩薩乗
安楽行品	声聞乗・辟支仏乗・菩薩乗	声聞乗・縁覚乗・菩薩乗	声聞・縁覚乗・菩薩乗

このように、法華経のなかにおいては三乗の名称はまちまちであり、さらにテキストによっても少しずつ異なっている。妙法華に限っていうと、菩薩乗は大乗とも仏乗とも言いかえられている。このことは、じつは三乗中の菩薩乗の内容と、その菩薩乗の方便品で明かされた一乗との関係に深くかかわってくる問題なのである。つまり、三乗中の菩薩乗が一乗（一仏乗）であるのか、それとも三乗のほかに別に一乗があるのかという問題に関係しているのである。

それは、本章の「長者火宅の喩」でいうと、羊・鹿・牛の三車のうちの牛車と大白牛車とが同一のものなのか、あるいは別物なのかということで、もし同一のものとすると車の数は全部で三車となり、別物とみれば四車となる。三車と見る立場、すなわち三乗のうちの菩薩乗がそのまま一乗であるとするものを三車家（さんしゃけ）といい、四車と見る立場、三乗中の菩薩乗のほかに一乗があるとするのを四車家（ししゃけ）とい

う。この三車、四車の論議は中国において古来大きな問題となり、光宅寺法雲（四六七—五二九）や天台智顗（五三八—五九七）は四車家の立場をとり、三論宗の吉蔵（五四九—六二三）や法相宗の基（六三二—六八二）は三車家の立場をとった。

なぜこのように三車・四車両様に解釈が分かれるかというと、経にそのどちらにもとれることばがあるからである。方便品には、「如来は但一仏乗を以ての故に、衆生の為に法を説きたもう。余乗の若しは二、若しは三有ることなし」「十方仏土の中には、唯一乗法のみ有り。二無く亦三無し」とあり、ここで「二」「三」というのは、梵本では「第二」「第三」の序数になっていることは既に述べたが、そうすると第二乗、第三乗は存在しないという意味になり、三乗中の一乗のみが真実であるという意味になる。これらの文が三車の教証となっているものである。しかし、一方では同じ方便品の偈において、「仏、方便力を以て、示すに三乗の教を以てす」「我等も亦皆、最妙第一の法を得れども、諸の衆生類の為に、分別して三乗と説く」とか、また長行部分に「諸仏、方便力を以て、一仏乗に於いて分別して三と説きたもう」とかあるのは、三乗についてそれがすべて方便であると説いているように解釈される。これらが四車家の立論の根拠になっている。また事実、経の大白牛車についての言葉を尽した荘厳の様を見るかぎり、その大白牛車と三車のうちの牛車とが同一であるという感を懐かせないものがある。

ともあれ、この大白牛車をめぐる一乗と三乗の問題は、大乗である菩薩乗の内容と関連して種々の問題をはらみつつ、中国ばかりでなく最澄と徳一の論争*に見られるように、わが国にまで及んでいるものである。ここではそれには触れないで、いまは大白牛車について以上のような問題があることを

述べておく。

*法相宗の徳一は、五性格別説にもとづいて一乗を方便、三乗を真実として、最澄の天台一乗思想と真向から対立し、両者の間に三一権実論争がおこった。

佛欲重宣此義。而說偈言。

譬如長者　有一大宅　其宅久故　而復頓弊　堂舍高危　柱根摧朽
梁棟傾斜　基陛隤(1)毀　牆(2)壁圮坼　泥塗褫落　覆苫亂墜　椽梠差脫
周障屈曲　雜穢充遍　有五百人　止住其中　鵄梟雕(3)鷲　烏鵲鳩鴿
蚖蛇蝮蠍　蜈蚣蚰蜒　守宮百足　狖(4)貍鼷鼠　諸惡蟲輩　交橫馳走
屎尿臭處　不淨流溢　蜣蜋諸蟲　而集其上　狐狼野干　咀嚼踐蹋
嚌齧死屍　骨肉狼藉　由是群狗　競來搏撮　飢羸慞惶　處處求食
鬪諍齰(5)掣　啀喍嘷(6)吠　其舍恐怖　變狀如是　處處皆有　魑魅魍魎
夜叉惡鬼　食噉人肉　毒蟲之屬　諸惡禽獸　孚乳產生　各自藏護
夜叉競來　爭取食之　食之既飽　惡心轉熾　鬪諍之聲　甚可怖畏
鳩槃荼鬼　蹲踞土埵　或時離地　一尺二尺　往返遊行　縱逸嬉戲
捉狗兩足　撲令失聲　以脚加頸　怖狗自樂　復有諸鬼　其身長大
裸形黑瘦　常住其中　發大惡聲　叫呼求食　復有諸鬼　其咽如針
復有諸鬼　首如牛頭　或食人肉　或復噉狗　頭髮蓬亂　殘害兇險

飢渴所逼　叫喚馳走　夜叉餓鬼　諸惡鳥獸　飢急四向　窺看窓牖
如是諸難　恐畏無量　是朽故宅　屬于一人　其人近出　未久之間
於後舍宅[7]　忽然火起　四面一時　其炎[8]俱熾　棟梁椽柱　爆聲震裂
摧折墮落　牆[9]壁崩倒　諸鬼神等　揚聲大叫　雕[10]鷲諸鳥　鳩槃茶等
周章惶怖　不能自出　惡獸毒蟲　藏竄孔穴　毘[11]舍闍鬼　亦住其中
薄福德故　爲火所逼　共相殘害　飲血噉肉　野干之屬　並已前死
諸大惡獸　競來食噉　臭烟蓬㶿[12]　四面充塞　蜈蚣蚰蜒　毒蛇之類
爲火所燒　爭走出穴　鳩槃茶鬼　隨取而食　又諸餓鬼　頭上火燃
飢渴熱惱　周章悶走　其宅如是　甚可怖畏　毒害火災　衆難非一
是時宅主　在門外立　聞有人言　汝諸子等　先因遊戲　來入此宅
稚小無知　歡娛樂著　長者聞已　驚入火宅　方宜救濟　令無燒害
告喩諸子　說衆患難　惡鬼毒蟲　災火蔓莚　衆苦次第　相續不絕
毒蛇蚖蝮　及諸夜叉　鳩槃茶鬼　野干狐狗　雕[13]鷲鵄梟　百足之屬
飢渴惱急　甚可怖畏　此苦難處　況復大火　諸子無知　雖聞父誨
猶故樂著　嬉戲不已　是時長者　而作是念　諸子如此　益我愁惱
今此舍宅　無一可樂　而諸子等　耽[14]湎嬉戲　不受我教　將爲火害
卽便思惟　設諸方便　告諸子等　我有種種　珍玩之具　妙寶好車
羊車鹿車　大牛之車　今在門外　汝等出來　吾爲汝等　造作此車
隨意所樂　可以遊戲　諸子聞說　如此諸車　卽時奔競　馳走而出

到於空地　離諸苦難　長者見子　得出火宅　住於四衢　坐師子座
而自慶言　我今快樂　此諸子等　生育甚難　愚小無知　而入険宅
多諸毒蟲　魑魅可畏　大火猛炎(15)　四面俱起　而此諸子　貪樂嬉戲
我已救之　令得脱難　是故諸人　我今快樂　爾時諸子　知父安坐
皆詣父所　而白父言　願賜我等　三種寶車　如前所許　諸子出來
當以三車　隨汝所欲　今正是時　唯垂給與　長者大富　庫藏衆多
金銀琉(16)璃　車𤦲馬腦　以衆寶物　造諸大車　莊校嚴飾　周匝(17)欄楯
四面懸鈴　金繩交(18)絡　眞珠羅網　張施其上　金華諸瓔(19)　處處垂下
衆綵雜飾　周匝(20)圍繞　柔軟繒纊　以爲茵蓐　上妙細氎　價直千億
鮮白淨潔　以覆其上　有大白牛　肥壯多力　形體姝好　以駕寶車
多諸儐從　而侍衞之　以是妙車　等賜諸子　諸子是時　歡喜踊躍
乘是寶車　遊於四方　嬉戲快樂　自在無礙

(1)隤＝頽　(2)(9)牆＝墻　(3)(10)(13)雕＝鵰　(4)狖＝鼬　(5)齟＝摣　(6)嘊喍嘷＝啀龇嘷　(7)舍宅＝宅舍　(8)炎＝焰　(11)毘＝毗　(12)㛸＝孶　(14)耽＝妉　(15)炎＝焰　(16)琉＝瑠　(17)(20)匝＝帀　(18)交＝絞　(19)瓔＝纓

仏、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、
「譬えば長者　一の大宅有るが如し　其の宅久しく故りて　復、頓弊し、　堂舎高く危く　柱・根摧け朽ち

梁・棟傾き斜み　基陛隤れ毀れ、　牆・壁圮れ坼け　泥塗褫け落ち　覆苫乱れ墜ち　椽・梠差い脱け、
周障屈曲して　雑穢充遍せり。　五百人有って　其の中に止住す。
鵄・梟・雕・鷲・　烏・鵲・鳩・鴿　蚖・蛇・蝮・蠍・　蜈・蚣・蚰・蜒
守宮・百足・　狖・狸・鼷・鼠　諸の悪虫の輩　交横馳走す。
屎尿の臭き処　不浄流れ溢ち　蜣蜋の諸虫　而も其の上に集り、
狐・狼・野干　咀嚼践蹋し　死屍を嚌齧して　骨肉狼藉せり。
是れに由って群狗　競い来って搏撮し　飢羸慞惶して　処処に食を求む。
闘諍齟掣し　嘊喍嘷吠す　其の舎の恐怖　変ずる状是の如し。
処処に皆　魑魅・魍魎　夜叉・悪鬼有り　人肉・毒虫の属を食噉す
諸の悪禽獣　孚乳産生して　各自ら蔵し護るに　夜叉競い来り　争い取って之を食す。
之を食して既に飽きぬれば　悪心転た熾にして　闘諍の声　甚だ怖畏すべし。
鳩槃荼鬼　土埵に蹲踞し　或時は地を離るること　一尺二尺　往返遊行し　縦逸に嬉戯す。
狗の両足を捉って　撲って声を失わしめ　脚を以て頸に加えて　狗を怖して自ら楽しむ。
復、諸鬼有り　其の身長大に　裸形黒痩にして　常に其の中に住せり。　大悪声を発し　叫び呼んで食を求む。
復、諸鬼有り　其の咽針の如し。　復、諸鬼有り　首牛頭の如し。
或は人の肉を食い　或は復狗を噉う　頭髪蓬乱し　残害兇険なり。　飢渇に逼まられて　叫喚馳走す。
夜叉・餓鬼　諸の悪鳥獣　飢、急にして四に向かい　窓牖を窺い看る。
是の如き諸難　恐畏無量なり。　是の朽ち故りたる宅は　一人に属せり。

其の人近く出でて　未だ久しからざるの間　後に舎宅に　忽然に火起る。　四面一時に　其の炎俱に熾なり。
棟・梁・椽・柱　爆声　震裂し　摧折堕落し　牆・壁崩れ倒る。　諸の鬼神等　声を揚げて大いに叫ぶ。
雕・鷲諸鳥　鳩槃茶等　周章惶怖して　自ら出づること能わず。
悪獣毒虫　孔穴に蔵竄し　毘舎闍鬼　亦其の中に住せり。　福徳薄きが故に　火に逼まられ　共に相残害して　血を飲み肉を噉う。
野干の属　並びに已に前に死す。　諸の大悪獣　競い来って食噉す。　臭烟蓬㶿して　四面に充塞す。
蜈蚣・蚰蜒　毒蛇の類　火に焼かれ　争い走って穴を出づ。　鳩槃茶鬼　随い取って食う。
又諸の餓鬼　頭上に火燃え　飢渇熱悩して　周章し悶走す。
其の宅是の如く　甚だ怖畏すべし。　毒害火災　衆難一に非ず。
是の時に宅主　門外に在って立って　有る人の言うを聞く、『汝が諸子等　先に遊戯せしに因って
此の宅に来入し　稚小無知にして　歓娯楽著せり』と。
長者聞き已って　驚きて火宅に入る。　方に宜しく救済して　焼害無からしむべし。
諸子に告喩して　衆の患難を説く。『悪鬼・毒虫　災火蔓莚なり　衆苦次第に　相続して絶えず。
毒蛇・蚖・蝮　及び諸の夜叉　鳩槃茶鬼　野干・狐・狗　雕・鷲・鵄・梟　百足の属
飢渇の悩み急にして　甚だ怖畏すべし。　此の苦すら処し難し　況や復大火をや』
諸子知ること無ければ　父の誨を聞くと雖も　猶故、楽著して　嬉戯すること已まず。
是の時に長者　而も是の念を作さく　『諸子此の如く　我が愁悩を益す。
今、此の舎宅は　一の楽しむべき無し。　而るに諸子等　嬉戯に耽湎して　我が教を受けず　将に火に

害せられんとす』
即便ち思惟して　諸の方便を設けて　諸子等に告ぐ　『我に種種の　珍玩の具　妙宝の好車有り。
羊車鹿車　大牛の車なり。
今、門外に在り　汝等よ、出で来れ。　吾、汝等が為に　此の車を造作せり。　意の所楽に随って　以て遊戯すべし』と。
諸子　此の如き諸の車を説くを聞いて　即時に奔競し　馳走して出で　空地に到って　諸の苦難を離る。
長者、子の火宅を出づることを得て　四衢に住するを見て　師子の座に坐せり。　而して自ら慶んで言わく『我、今、快楽なり。　此の諸子等　生育すること甚だ難し。　愚小無知にして　険宅に入れり。
諸の毒虫　魑魅多くして畏るべし。
大火猛炎　四面より倶に起れり。　而るに此の諸子　嬉戯に貪楽せり。
我已に之を救いて　難を脱るることを得せしめつ。　是の故に、諸人よ　我、今、快楽なり』と。
爾の時に諸子　父の安坐せるを知って　皆父の所に詣で　父に白して言さく　『願わくは我等に三種の宝車を賜え。　前に許したもう所の如き　諸子出で来れ、　当に三車を以て　汝が所欲に随うべしと。　今正しく是れ時なり　唯、給与を垂れたまえ』と。
長者大いに富んで　庫蔵衆多なり。　金・銀・琉璃　車渠・馬脳あり　衆の宝物を以て　諸の大車を造れり。
荘校厳飾し　周匝して欄楯あり。　四面に鈴を懸け　金縄交絡して　真珠の羅網　其の上に張り施し　金華の諸瓔　処処に垂れ下せり。　衆綵雑飾し　周匝囲繞せり。　柔軟の繒纊　以て茵褥と為し

上妙の細氈　価直千億にして　鮮白浄潔なる　以て其の上を覆えり。
大白牛有り　肥壮多力にして　形体姝好なり　以て宝車を駕せり。　諸の儐従多くして　之を侍衛せり。
是の妙車を以て　等しく諸子に賜う。　諸子是の時　歓喜踊躍して
是の宝車に乗って　四方に遊び　嬉戯快楽して　自在無礙なり。

〔訳〕仏は以上の意義を重ねて宣べようとして、詩頌を説いて言われた。

「たとえば長者に一つの大邸宅があったとしよう。その家は年経て古び、荒れてこわれており、建物は高く危うく建っていて、柱の根元はくだけ朽ちている。(39)　梁や棟は傾いてゆがみ、基礎のきざはしはくずれこわれており、　垣や壁もやぶれ裂け、壁土ははがれ落ち、　屋根を覆うとまは乱れ落ちて、たるきやひさしもたがいちがいに抜けてしまっている。(40)　まわりにめぐらした垣は屈曲していて、家の中にはさまざまな汚物が満ちあふれている。　そのような家の中に五百人もの人たちが住んでいた。(41)

鵄・梟・鵰・鷲・烏・鵲・鳩・鴿（などの鳥たちがおり）、　蚖・蛇・蝮・蠍・蜈蚣・蚰蜒(42)守宮・百足（などの虫たち）・狖・貍・鼷・鼠（などの動物）、　多くの悪虫の類が、勝手気ままに（邸内を）とびまわっている。(42)・(43)

屎尿が臭くにおう所には、汚穢があふれ流れ、　蜣蜋などの虫たちがその上に集まっている。(44)

狐(きつね)・狼(おおかみ)・野干(こぎつね)は、噛んだり、ふみちらしたりして、　死体をかみ食い、骨や肉があたりに散らばっている。(45)

それにさそわれて犬の群れが争ってやってきて、とりあいをし、　飢え疲れて、あちこちに食物を求め、

互いに争いあってとりあいをし、かみ合い、はがみし、吠えしきっている。　その家の恐ろしいありさまは、このようなものである。(46)

そこかしこにさまざまなばけもの、夜叉(やしゃ)や悪鬼がいて、　人肉や　毒虫の類を食らう。(47)

さまざまな悪鳥悪獣は、卵をかえし、仔(こ)を産み育てて、それぞれかくし守っていると、　夜叉がわれ先にとやってきて、その仔(こ)らを争って取りあい食べてしまう。(48)

それを食べ飽きてしまうと、悪心はますます盛んになり、　闘(たたか)い争って、その声は非常に恐ろしい。(49)

鳩槃荼鬼(くはんだき)は盛土のそばにうずくまり、　ある時は地から一尺も二尺も飛びはね、　往ったり来たりして歩きまわり、勝手気ままに遊びたわむれている。(50)

犬の両足をつかんで、なぐりつけ声も出ないようにし、　その脚で首をしめつけ、犬をおどして楽しんでいる。(51)

またさまざまな鬼がおり、その身の丈は長大で、　裸で色黒く痩せており、いつもその家の中にいる。　彼らは大きな不快な声をはりあげ、叫びまわって食物を求めている。(52)

(それらのなかには)また、そののどが針のように細い(餓)鬼もいれば、　また、その首が牛の

頭の形をしているような（餓）鬼もいる。

あるものは人肉を食べ、またあるものは犬を食らう。　頭髪を蓬のようにふり乱し、残忍凶暴で、飢えと渇きにせまられて、わめき叫んで走りまわる。(53)

夜叉や餓鬼、さまざまな悪鳥悪獣は、　飢に逼迫して四方に（食物を）求め、窓や格子窓から（外を）うかがい見ている。(54)

以上のような多くのわざわいの、その恐ろしさは測りしれない。　この朽ち古びた家は、一人の人の所有であった。(55)

その人が近くに出かけて間もなく、　ほどなくして家の建物に突然に火がおこり、四面に一どきに火の手があがり、焔がもえさかる。(56)

棟や梁、椽や柱は音をたてて燃えあがり、震動破裂し、　くだけ折れて地に落ち、垣や壁はくずれ倒れて、　さまざまな鬼神たちは、大声をあげて喚き叫ぶ。(57)

鵰や鷲などのさまざまな鳥たちや、鳩槃荼鬼らは、　あわてうろたえ、驚きおそれて自力では脱出することができないでいる。(58)

悪獣や毒虫は穴にかくれのがれ、　毘舎闍鬼もまた、その中にとどまっている。（これまでの）福徳が薄いために、火にせまられ、　お互いに殺しあい、血を飲み、肉を喰らいあう。(59)

野干の類はすでに、先に死んでしまい、　さまざまな大きな悪獣が、競ってやってきてそれらを食らう。　臭い煙がわきおこって、あたり四面にたちこめる。(60)

蜈蚣や蚰蜒、毒蛇の類は、　火に焼かれ、争って穴から走り出る。　すると鳩槃荼鬼は、それら

を取っては食う。
また、さまざまな餓鬼は頭に火がつき、飢え渇き、熱さに悩(なやま)されて、うろたえて悶(もだ)え走る。(61)
その家は以上のように、きわめて恐ろしいところである。人を苦しめる災いや火の災難、それらは数多くある。(62)
この時、その家の主は門の外に立っていて、ある人がこう言うのを聞いた。『あなたの子供たちは、さっきから遊んでいて、この家の中に入っており、いとけなくて何も知らずに、喜んで遊びに熱中している』と。(63)
長者はそれを聞くや、驚いて燃えている家に入っていった。無事に救い出して、焼け死なないようにと。(64)
彼は子供たちに向って、多くのわずらいや災難を説いて告げる。『悪鬼や毒虫がいて、そのうえ火災が一面におこっている。多くの苦難が次々に続いておこって絶えることがない。(65)
毒蛇や蚖(とかげ)や蝮(まむし)、及び多くの夜叉、鳩槃荼鬼、野干(こぎつね)や狐や犬、鵰(くまたか)、鷲、鵄(とび)、梟(ふくろう)や、百足(おさむし)の類は、(66)
飢えと渇きに激しく悩まされて、非常におそろしい。これらの苦難すらいかんともしがたいのに、ましてや大火災にあってはどうしようもない』と。(67)
子供たちはそのようなことを知らないので、父のおしえを聞いても、なおも夢中になって、遊びたわむれることをやめない。(68)
この時に、長者はこのように考えた。『子供たちはこのようなありさまで、私の心痛を増すば

かりである。(69)

今、この家の中には一つとして楽しむべきことはない。しかるに子供たちは、遊びたわむれることにふけって、私の教えを受けつけないで、火に焼かれようとしている』と。(70)

そこでただちに思案して、さまざまな手段を設けて、子供たちに告げた。『私は種々の、めずらしいおもちゃの、すばらしい宝でできた立派な車をもっている。羊の車、鹿の車、大きな牛の車である。(71)

今、門の外においてある。おまえたちよ、出てきなさい。私は、おまえたちのためにこれらの車を造ったのだ。心のおもむくままに、それで遊びなさい』と。(72)

子供たちは、このようなさまざまな車の話を聞くと、すぐさま競いあって、走り出て、空き地にまで到って、多くの苦難を離れた。(73)

長者は、子供たちが燃えている家から脱出することができて、四辻にいるのを見て、獅子の座に坐った。そして、喜んで言った。『私は今、安楽になった。(74)

この子供たちは、育てあげるのは非常にむつかしい。愚かで小さくて何も知らずに、危険な家に入っていた。さまざまな毒虫や、ものの怪が多くいて、おそろしいところであった。(75)

大火が起こり猛焔が、四面に一時に燃えあがった。しかし、この子たちは遊びほうけていた。私はすでに彼らを救って、災難をのがれさせることができた。それだから、もろびとよ、私は今、安楽なのだ』と。(76)

その時に、子供たちは父がやすらかに坐ったのを知って、みんなで父のところにやってきて、

父に言った。『どうか私たちに、三種の宝の車を下さい。⑺⑺先に言われたように、父上は、子供たちよ、出てきなさい、三つの車をお前たちの欲するままにあげよう、とおっしゃいました。今がちょうどその時です。どうか、それを下さい』と。⑺⑻長者は大そう富裕であり、庫は多くあった。金・銀・瑠璃・おうぎ貝・碼碯があり、数多くの宝物によって、多くの大きな車を造った。⑺⑼おごそかに飾りたて、ぐるりには、たてよこにめぐらした欄干があり、四面には鈴をかけ、金でできた縄をはりめぐらし、真珠のついた網でその上をおおい、⑻⑽金でできた華のさまざまなかざりをところどころに垂らしている。色どり多くさまざまに飾りたて、それがぐるりをめぐっている。柔かい絹をしとねとし、⑻⑴すばらしい毛布の、その価が千億もするもので、白く清潔なものによって、そのしとねの上を覆っている。⑻⑵大きな白い牛がおり、よく肥えて勢いさかんで力が強く、形が立派である。その牛が宝の車を牽いている。多くのお供のものがついていて、その車を護衛している。⑻⑶このようなすばらしい車を子供たちに等しく与えると、子供たちは、この時喜び踊りあがって、この宝の車に乗って、四方を遊びまわり、喜び楽しんで、自由自在思いどおりになった。⑻⑷

《譬如》「たとえば……」という比況の意をあらわす複合語。《頓弊》「頓」も「弊」も、破れる、こわれる、くずれるの意。同義語を重ねた熟語。偈文には字数を整えるためにこの類の熟語が多く使用される。ま

た概して六朝訳経語には当時の口語表現を借りた同義反復の複合語が多くみられる。《基陛》「基」はもとい、「陛」はきざはし。《覆苫》おおいのとま。《椽梠》「椽」はたる木、「梠」はひさしのこと。《践蹋》ふみつけること。「蹋」は「踏」の本字。《搏撮》「搏」「撮」ともにとるの意。《齟掣》「齟」は「齰」の俗字で、咬むの意。「掣」はひっぱるの意。犬が食物を咬んでひっぱりあうさま。《嘊喍嘷吠》「嘊喍」は、犬が争いかみあうこと。「嘷吠」は、さけびほえること。「嘷」は「嗥」の俗字。《魑魅魍魎》「魑魅」は、山林の気から生ずる人面獣身の怪物、「魍魎」は、山川の精の怪物という。《餓鬼》preta の漢訳語。本来は死者を意味するが、仏教では、子孫に食物を供養されないために常に餓えて食物を渇望する死者の霊とされる。六道の中の一つ。《鳩槃荼鬼》kumbhāṇḍa の音写。鬼霊の一種で、瓶のような睾丸を持つ者の意。人間の精気を食らうとされる。《毘舎闍鬼》piśāca の音訳。屍肉を好んで食らう悪魔の一種。《毒害》「毒」も「害」も、人をそこなうこと。わざわいの意。

以下、長行の後、この章の終りまで長い偈頌（げじゅ）が続く。この偈頌は科文によると、長行を頌する部分と勧信流通を明かす部分とに大きく二分される。そして、長行を頌する部分をさらに二つに分科して、開譬（譬喩を説示する）と合譬（その譬喩に合せて法を説く）とに分ける。今ここまでの部分は開譬の部分に相当し、長者火宅の喩え話を説くのである。その内容は、長行部分と比較すると一見してより詳しくなっていることに気付かれる。長者の大邸宅のおそろしいありさまが筆を尽して描かれており、これを読むものを慄然とさせる。さまざまな怪物、悪魔、動物の類いが跳梁（ちょうりょう）する恐怖の宅舎、それが我々が身をおく三界（さんがい）であり、その家の恐ろしさに全く気がつかず、しかも大火が起って身に危険がさしせまっていることにも気づかずに遊び戯れる子供たち、それが我々自身に比定されている。この段

における長者の家の恐怖の描写は、長行部分よりもより一層、経の意図を尽している。

告舎利弗　我亦如是　衆聖中尊　世間之父　一切衆生　皆是吾子
深著世樂　無有慧心　三界無安　猶如火宅　衆苦充滿　甚可怖畏
常有生老　病死憂患　如是等火　熾然不息　如來已離　三界火宅
寂然閑居　安處林野　今此三界　皆是我有　其中衆生　悉是吾子
而今此處　多諸患難　唯我一人　能爲救護　雖復教詔　而不信受
於諸欲染　貪著深故　是[1]以方便　爲說三乘　令諸衆生　知三界苦
開示演說　出世間道　是諸子等　若心決定　具足三明　及六神通
有得緣覺　不退菩薩　汝舍利弗　我爲衆生　以此譬喩　說一佛乘
汝等若能　信受是語　一切皆當　得[2]成佛道　是乘微妙　清淨第一
於諸世間　爲無有上　佛所悅可　一切衆生　所應稱讚　供養禮拜
無量億千　諸力解脫　禪定智慧　及佛餘法　得如是乘　令諸子等
日夜劫數　常得遊戲　與諸菩薩　及聲聞衆　乘此寶乘　直至道場
以是因緣　十方諦求　更無餘乘　除佛方便　告舎利弗　汝諸人等
皆是吾子　我則是父　汝等累劫　衆苦所燒　我皆濟拔　令出三界
我雖先說　汝等滅度　但盡生死　而實不滅　今所應作　唯佛智慧
若有菩薩　於是衆中　能一心聽　諸佛實法　諸佛世尊　雖以方便

所化衆生　皆是菩薩　若人小智　深著愛欲　為此等故　説於苦諦
衆生心喜　得未曾有　佛説苦諦　眞實無異　若有衆生　不知苦本
深著苦因　不能暫捨　為是等故　方便説道　諸苦所因　貪欲為本
若滅貪欲　無所依止　滅盡諸苦　名第三諦　為滅諦故　修行於道
離諸苦縛　名得解脱　是人於何　而得解脱　但離虚妄　名為解脱
其實未得　一切解脱　佛説是人　未實滅度　斯人未得　無上道故
我意不欲　令至滅度　我為法王　於法自在　安隱(3)衆生　故現於世

(1)底本は「以是」。前句との関連から春日本の「是以」に改む。(2)底本は「成得」。高麗蔵、春日本とも「得成」。大正蔵の誤りか。今、改む。(3)隱＝穩

舎利弗に告ぐ　『我も亦、是の如し。　衆聖の中の尊　世間の父なり。　一切衆生は　皆是れ吾が子なり。
深く世楽に著して　慧心有ること無し。
三界は安きことなし　猶火宅の如し。　衆苦充満して　甚だ怖畏すべし。　常に生・老　病・死の憂患有り。　是の如き等の火　熾然として息まず。
如来は已に　三界の火宅を離れて　寂然として閑居し　林野に安処せり。　今此の三界は　皆是れ我が有なり。　其の中の衆生は　悉く是れ吾が子なり。
而も今、此の処は　諸の患難多し。　唯我れ一人のみ　能く救護を為す。　復、教詔すと雖も　而も信受せず。　諸の欲染に於いて　貪著深きが故に。
是を以て方便して　為に三乗を説き　諸の衆生をして　三界の苦を知らしめ　出世間の道を　開示演

説す。
是の諸子等　若し心、決定しぬれば　三明及び六神通を具足し　縁覚　不退の菩薩を得ること有り。
汝、舎利弗よ　我、衆生の為に　此の譬喩を以て　一仏乗を説く。　汝等、若し能く　是の語を信受せば　一切皆当に　仏道を成ずることを得べし。
是の乗は微妙にして　清浄第一なり。　諸の世間に於いて　為めて上有ること無し。　仏の悦可したもう所　一切衆生の　応に称讃し　供養し礼拝すべき所なり。
無量億千の　諸の力・解脱　禅定、智慧　及び仏の余の法あり。
是の如き乗を得せしめて　諸子等をして　日夜、劫数に　常に遊戯することを得
諸の菩薩　及び声聞衆と　此の宝乗に乗じて　直ちに道場に至らしむ。
是の因縁を以て　十方に諦かに求むるに　更に余乗無し　仏の方便をば除く。
舎利弗に告ぐ　『汝、諸人等は　皆是れ吾が子なり　我は則ち是れ父なり。　汝等、累劫に　衆苦に焼かる　我、皆済抜して　三界を出でしむ。
我、先に　汝等滅度すと説くと雖も　但、生死を尽くして　而も実には滅せず。　今、応に作すべき所は　唯仏の智慧なり。
若し菩薩有らば　是の衆の中に於いて　能く一心に　諸仏の実法を聴け。
諸仏世尊は　方便を以てしたもうと雖も　所化の衆生は　皆是れ菩薩なり。
若し人、小智にして　深く愛欲に著せる　此等を為ての故に　苦諦を説きたもう。
衆生、心に喜んで　未曾有なることを得　仏の説きたもう苦諦は　真実にして異なること無し。
若し衆生有って　苦の本を知らず　深く苦の因に著して、暫くも捨つること能わざる　是れ等を為て

の故に　方便して道を説きたもう。　諸苦の所因は　貪欲為れ本なり。
若し貪欲を滅すれば　依止する所無し。　諸苦を滅尽するを　第三の諦と名づく。　滅諦の為の故に　道を修行す。　諸の苦縛を離るるを　解脱を得と名づく。
是の人何に於いてか　而も解脱を得る。　但、虚妄を離るるを　名づけて解脱と為す。　其れ実には未だ
一切の解脱を得ず。　仏、是の人は未だ　実に滅度せずと説きたもう。
斯の人未だ　無上道を得ざるが故に　我が意にも　滅度に至らしめたりと欲わず。
我は為れ法王　法に於いて自在なり。　衆生を安隠ならしめんが故に　世に現ず。

〔訳〕舎利弗に告げる。『私もまた、そのとおりなのだ。　もろもろの聖者の中の尊きものであり、世間の父である。　すべての衆生は、みな私の子どもたちである。　（彼らは）この世の快楽に深く執着して、　智慧の心がない。(85)
（欲界・色界・無色界の）三界は安らかでなく、　燃えている家のようなものである。　多くの苦しみにみちみちており、とてもおそろしく、　常に生・老・病・死の憂いがある。　このような火が燃えさかっていて、やむことがない。(86)
如来はすでに、三界という燃えている家を離れて、　寂静として独居し、林野に心安らかに身をおいている。　今、この三界は、みなすべて私の所有である。　そして、その中の衆生たちは、ことごとく私の子供たちである。(87)
しかも、今このところにはさまざまなわずらいや災難が多く、　ただ私一人だけが、救い護るこ

とができるのに、

(彼らは) 私が教え導いても、 それを信じて受けとめようとはしない。 さまざまな欲望という
けがれのなかに、 深く貪り執着しているからである。 (88)
そのために私は教えの手段を講じて、 三つの教えの乗りものを説き、 多くの衆生たちに三界の
苦しみを知らしめ、 その世界から脱する道を明かして説示するのだ。 (89)
これらの子供たちは、 もし心が堅固に定まれば、 三明と六神通とをそなえて、 縁覚と退くこ
とのない菩薩とになることができるのである。 (90)
汝、 舎利弗よ、 私は衆生たちのために この喩えによって一つの仏の教えの乗りものを説くの
だ。 汝たちは、 もしこのことばを信じて受けいれることができるならば、 すべてみな、 仏道
を成就することができるであろう。 (91)
この教えの乗りものは奥深くすぐれており、 何にもまして清浄である。 さまざまな世間におい
て、 これにまさるものはない。 仏が悦んでよしとされたもの、 すべての衆が、 ほめ讃え、 供
養し礼拝すべきものなのである。 (92)
億千というはかりしれない、 多くの力と、 苦からの解放と、 禅定、 智慧、 及びそれ以外の仏の
法がある。 (93)
このような乗りものを得さしめて、 多くの子供達を、 日夜、 はかりしれない間にわたって、 常
に遊びたわむれることができるようにしてやり、 (94)
多くの菩薩と、 及び声聞の者たちとを、 この宝の乗りものに乗せて、 直ちに道場に至らしめ

る。(95)

このようないわれから、十方をいくら探しても、さらにほかの教えの乗りものはないのだ。ただ仏の教えの手段は例外である』と。(96)

舎利弗に告げる。『汝ら、もろ人たちは、みなすべて私の子供である。私は父親なのだ。汝たちは無限に永い年月にわたって、多くの苦しみに身を焼かれていた。私はそれをみな救いあげて、三界から出離させたのである。(97)

私は、先に汝たちは涅槃(ねはん)を得たと説いたけれども、それはただ生死(しょうじ)(輪廻(りんね))を越えただけであって、実際には涅槃に達してはいない。今、(汝たちの)なすべきことは、ただ仏の智慧だけを求めることである。(98)

もし菩薩がこの集まりの中にいるならば、心を一にして、多くの仏たちの真実の法を聴け。多くの仏・世尊は、教えの手段をもって(教化)されるけれども、教化される衆生は、みなすべて菩薩なのである。(99)

もしも人が智慧浅く、深く愛欲に執着しているならば、これらの者たちのために、苦という真理を説かれる。

衆生は心に喜びをおぼえ、いまだかつてない思いをする。仏の説かれる苦という真理は、真実であって、異なることはない。(100)

もしも衆生が、苦の根源を知らず、深く苦のもととなるものに執着して、ほんのしばらくの間も捨てることができないでいるならば、

これらの者たちのために、教えの手段を設けて（教えの）道を説かれる。（すなわち）さまざまな苦の原因は、貪欲がその本である、と。(101)

もしその貪欲を滅すれば、（執着する）よりどころはなくなってしまう。（こうして）多くの苦を滅し尽すことを、第三の真理と名づける。

（その苦の）滅という真理のためのゆえに、（苦からの解放に至る）道を修行するのだ。　さまざまな苦の束縛を離れるのを、解脱を得ると名づける。(102)

その場合、その人は何から解脱することができたのであるか。それは、ただ真実ならざるいつわりのものから離れたことのみを、名づけて解脱としたのである。

だから、実際にはまだすべての解脱を得たわけではない。（それ故）仏は、この人はまだ実際には涅槃していないと説かれるのである。(103)

この人はまだ、この上ない仏道を得ていないために　私の心においても、涅槃に至らしめたとは思わないのである。

私は法の王であり、法において自在である。　衆生を心安らかにさせようとするために世に出現したのである。(104)

《三明及六神通》修行によって得られる超人的能力。六神通（第三章、二一四頁の語注参照）のうちの宿命通・天眼通・漏尽通の三つを別出してそれぞれ宿命明・天眼明・漏尽明という。**《縁覚》**pratyeka-buddha の漢訳語。辟支仏に同じ（第一章の語注、七八―七九頁参照）。**《諸力解脱》**さまざまな力と解脱。解脱（vimokṣa）

は、修行によって苦しみの原因となる欲望を滅して、苦からの束縛を脱すること。《禅定》第一章の語注（七九頁）参照。《苦諦》四聖諦の一つ。第一章の語注（八九頁）参照。《貪欲》心の欲する対象を貪り求める煩悩。瞋（怒り）・癡（無明）の二つとともに三毒といわれる。《第三諦》四諦のうちの第三、滅諦のこと。

ここまでの部分は、科文からいうと、先に長行を頌する偈頌を開譬と合譬とに分けたが、その合譬に相当する段である。開譬とは、たとえ話を説き、合譬とはそのたとえ話に合わせて法を説くことである。この段の初めの方にある「三界は安きことなし、猶(なお)火宅の如し」に続く十八句は、釈尊の大慈悲をあらわす句として有名で、わが国日蓮宗の開祖日蓮は、この部分を釈尊の主・師・親の三徳をあらわすものとして讃している。

この段の要旨は、仏が三乗を説いたのは三界の火宅に居る衆生たちの苦を抜かんがための方便であり、仏の真意は一仏乗を説くことにある、三界の苦を脱した人々はそれが涅槃だと思いこんでいるが、それはただ三界の苦を脱しただけで真の涅槃を得ているのではない、ということである。三界の苦を脱した人々とは、直接的には二乗の果を得た阿羅漢と縁覚とを指すことはいうまでもない。これらの人々は、仏が方便として示した四諦(したい)の理(ことわり)を究めて三界の苦から解脱したのであって、無上の仏道をいまだ得ていないから真の涅槃に至っていないと経は説く。このように説く経の意図は、二乗の人々を含めたすべての人々にもれなく仏乗を得させようとするためであって、それがこの法華経の一乗思想である。

ところで、先に少し触れたように、これと同じ思想が『勝鬘経』にもある。『勝鬘経』もやはり、

阿羅漢と辟支仏、それに大力の菩薩とは有余の解脱、有余の清浄、有余の功徳を得たのみであり、彼らの究めた四諦は有作（まだなすべきことがある）の四諦であって、無作（なすべきことがない完全な）の四諦ではない、したがって彼らの得た涅槃は少分の涅槃であると説く。

しかし、法華経と異なるところは、『勝鬘経』は二乗の涅槃が不完全なものであるということの理論的根拠を、無明住持という煩悩を創出して説明しようとした点である。この無明住持という煩悩は、三界を超越した後にも存在する最も根源的煩悩であるとされ、これを断ずるか否かが仏と二乗の分れめとなっているものである。煩悩があれば、その結果として輪廻がある。三界を脱して後にもまだ無明住地という煩悩が残っているから、三界を出離した後でも輪廻をうける。この三界の外でうける輪廻を『勝鬘経』は不思議変易生死といい、三界内でうける輪廻を分段生死として二種類の輪廻を説いた。こうして、『勝鬘経』は二乗がまだ真の涅槃を得ていないということをはじめて理論的に説明したのである。いま、この法華経ではそうした理論的説明は一切みられない。このことから経典成立史の上では、『勝鬘経』が法華経よりも後来のものであるということができる。

汝舍利弗　我此法印　爲欲利益　世間故說　在所遊方　勿妄宣傳
若有聞者　隨喜頂受　當知是人　阿鞞跋致　若有信受　此經法者
是人已曾　見過去佛　恭敬供養　亦聞是法　若人有能　信汝所說
則爲見我　亦見於汝　及比丘僧　并諸菩薩　斯法華經　爲深智說

淺識聞之　迷惑不解　一切聲聞　及辟支佛　於此經中　力所不及
汝舍利弗　尚於此經　以信得入　況餘聲聞　其餘聲聞　信佛語故
隨順此經　非己智分　又舍利弗　憍慢懈怠　計我見者　莫說此經
凡夫淺識　深著五欲　聞不能解　亦勿爲說　若人不信　毀謗此經
則斷一切　世間佛種　或復顰①蹙　而懷疑惑　汝當聽說　此人罪報
若佛在世　若滅度後　其有誹謗　如斯經典　見有讀誦　書持經者
輕賤憎嫉　而懷結恨　此人罪報　汝今復聽　其人命終　入阿鼻獄
具足一劫　劫盡更生　如是展轉　至無數劫　從地獄出　當墮畜生
若狗野干　其形②頞瘦　黧③黮疥癩　人所觸嬈　又復爲人　之所惡賤
常困飢渴　骨肉枯竭　生受楚毒　死被瓦石　斷佛種故　受斯罪報
若作馲駝　或生驢中④　身常負重　加諸杖捶　但念水草　餘無所知
謗斯經故　獲罪如是　有作野干　來入聚落　身體疥癩　又無一目
爲諸童子　之所打擲　受諸苦痛　或時致死　於此死已　更受蟒身
其形長大　五百由旬　聾騃無足　宛⑤轉腹行　爲諸小蟲　之所唼食
晝夜受苦　無有休息　謗斯經故　獲罪如是　若得爲人　諸根闇⑥鈍
矬陋攣⑦躄　盲聾背傴　有所言說　人不信受　口氣常臭　鬼魅所著
貧窮下賤　爲人所使　多病痟瘦　無所依怙　雖親附人　人不在意
若有所得　尋復忘失　若修醫道　順方治病　更增他疾　或復致死
若自有病　無人救療　設服良藥　而復增劇　若他反逆　抄劫竊盜

如是等罪　横羅其殃　如斯罪人　永不見佛　衆聖之王　說法教化
如斯罪人　常生難處　狂聾心亂　永不聞法　於無數劫　如恒河沙
生輒聾瘂　諸根不具　常處地獄　如遊園觀　在餘惡道　如己舍宅
駝驢猪狗　是其行處　謗斯經故　獲罪如是　若得爲人　聾盲瘖瘂
貧窮諸衰　以自莊嚴　水腫乾痟　疥癩癰疽　如是等病　以爲衣服
身常臭處　垢穢不淨　深著我見　增益瞋恚　婬欲熾盛　不擇禽獸
謗斯經故　獲罪如是

(1)顰蹙＝嚬蹙　(2)底本は「影」。高麗蔵、春日本とも「形」。大正蔵の誤りか。今、改む。(3)棃＝梨　(4)底本では「中驢」。高麗蔵、春日本とも「驢中」。大正蔵の誤りか。今、改む。(5)宛＝蜿　(6)闇＝暗　(7)攣＝癴

汝、舎利弗よ　我が此の法印は　世間を利益せんと　欲するを為ての故に説く。所遊の方に在って　妄りに宣伝すること勿れ。
若し聞くこと有らん者　随喜し頂受せん。当に知るべし、是の人は　阿鞞跋致なり。
若し此の経法を　信受すること有らん者　是の人は已に曾て　過去の仏を見たてまつりて　恭敬供養し　亦、是の法を聞けるなり。
若し人能く　汝が所説を信ずること有らんは　則ち為れ我を見　亦、汝　及び比丘僧　並びに諸の菩薩を見るなり。
斯の法華経は　深智の為に説く。浅識は之を聞いて　迷惑して解せず。一切の声聞　及び辟支仏は　此の経の中に於いて　力及ばざる所なり。

汝、舎利弗すら　尚、此の経に於いては　信を以て入ることを得たり　況や余の声聞をや。　其の余の声聞も　仏語を信ずるが故に　此の経に随順す　己が智分に非ず。

又、舎利弗よ　憍慢・懈怠にして　我見を計する者には　此の経を説くこと莫れ。　凡夫の浅識　深く五欲に著せるは　聞くとも解すること能わじ　亦、為に説くこと勿れ。

若し人信ぜずして　此の経を毀謗せば　則ち一切　世間の仏種を断ぜん。　或は復、顰蹙して　疑惑を懐かば　汝、当に　此の人の罪報を説くを聴くべし。

若しは仏の在世　若しは滅度の後に　其れ、斯の如き経典を　誹謗すること有らん。　経を読誦し　書持すること有らん者を見て　軽賤憎嫉して　結恨を懐かん。　此の人の罪報を　汝、今、復聴け。

其の人命終して　阿鼻獄に入らん。　一劫を具足して　劫尽きなば更生まれん　是の如く展転して　無数劫に至らん。

地獄より出でては　当に畜生に堕つべし。　若し狗、野干とならば　其の形、頽痩

黧黮・疥癩にして　人に触嬈せられ　又復、人に　悪み賤しまれん。

常に飢渇に困しんで　骨肉枯竭せん　生きては楚毒を受け　死して瓦石を被らん。　仏種を断ずるが故に　斯の罪報を受けん。

若しは馲駝と作り　或は驢の中に生まれて　身に常に重きを負い　諸の杖捶を加えられん　但、水草を念いて　余は知る所無けん。　斯の経を謗ずるが故に　罪を獲ること是の如し。

有は野干と作って　聚落に来入せば　身体疥癩にして　又、一目無からんに　諸の童子に　打擲せられ　諸の苦痛を受けて　或時は死を致さん。

此に於いて死し已って　更に蟒身を受けん。　其の形、長大にして　五百由旬ならん。

聾騃・無足にして　宛転腹行し　諸の小虫に　唼食せられて　昼夜に苦を受くるに　休息有ること
無けん。　斯の経を謗ずるが故に　罪を獲ること是の如し。
若し人と為ることを得ては　諸根闇鈍にして　矬陋・攣躄　盲・聾・背傴ならん。
言説する所有らんに　人、信受せじ。　口の気、常に臭く　鬼魅に著せられん。
貧窮下賤にして　人に使われ　多病痟瘦にして　依怙する所無く
人に親附すと雖も　人意に在かじ。　若し所得有らば　尋いで復忘失せん。
若し医道を修して　方に順じて病を治せば　更に他の疾を増し　或は復死を致さん。　若し自ら病有ら
ば　人の救療すること無く　設い良薬を服すとも　而も復増劇せん。
若しは他の反逆し　抄劫し竊盗せん　是の如き等の罪　横まに其の殃に羅らん。
斯の如き罪人は　永く仏、　衆聖の王の　説法教化したもうを見たてまつらじ。
斯の如き罪人は　常に難処に生まれ　狂・聾・心乱にして　永く法を聞かじ。
無数劫の　恒河沙の如きに於いて　生まれては輒ち聾瘂にして　諸根不具ならん。
常に地獄に処すること　園観に遊ぶが如く　余の悪道に在ること　己が舎宅の如く　駝・驢・猪・狗
是れ其の行処ならん。　斯の経を謗ずるが故に　罪を獲ること是の如し。
若し人と為ることを得ては　聾・盲・瘖瘂にして　貧窮諸衰　以て自ら荘厳し
水腫・乾痟　疥・癩・癰疽　是の如き等の病　以て衣服と為ん。　身常に臭きに処して　垢穢不浄に
深く我見に著して　瞋恚を増益し　婬欲熾盛にして　禽獣を択ばじ。　斯の経を謗ずるが故に　罪を獲
ること是の如し。

〔訳〕汝、舎利弗よ、私のこの法の真理のしるしは、世間に恵みを与えようと思うから説くのである。気のむくままのところにおいて、みだりに宣伝してはならない。(105)

もしも、(この法を)聞く者がいて、喜び、それをおしいただくならば、その人は、もはや仏への道において退くことのない菩薩なのである。(106)

もしも、この経の教えを信じ受け入れるものがあるならば、その人は、すでにかつて、過去の仏にお会いして、恭しく敬い供養したものであり、またこの法を聞いたことのあるものなのだ。(107)

もしある人が、汝の説いたことを信じることができたならば、その人は、とりもなおさず私を見、また汝と、および比丘の僧団と、多くの菩薩たちとを見るのである。(108)

この法華経は、深い智慧を有するもののために説くのである。浅い智慧しかないものたちは、これを聞いても、迷い惑って理解することがない。すべての声聞と、および辟支仏とは、この経においては、その力の及ぶところではない。(109)

汝、舎利弗すら、なおこの経にあっては、信によって入ることができたのである。ましてほかの声聞たちはなおさらのことである。そのほかの声聞たちも、仏の語を信ずるから、この経にしたがうのであって、自分達の智慧の分際ではない。(110)

また、舎利弗よ、おごりたかぶり、怠けていて、固定的自我があると誤った見解をもつ者には、この経を説いてはならない。凡夫は智慧が浅く、五官の欲望に執着しており、たとえ聞いても理解することができない。だから彼らにも、また説いてはならない。(111)

もしも人が信ずることなく、この経を悪しざまにそしれば、　それは、とりもなおさず、すべてのこの世の中の仏となる種子を断つことになるであろう。　あるいはまた、眉をしかめて疑惑を懐くならば、　汝は、その人の罪の報いが説かれるのをきっと聞くことであろう。(112)

もしくは仏が世にいます時、もしくは入滅された後に、　このような経典を誹謗したり、　経を読誦し、書写し、たもつ者を見て、　賤(いや)しめ憎みねたんで、恨みを懐くようなことがあれば、その人の罪の報いを、汝は今また聴くがよい。(113)

そのような人は、命が終って、阿鼻地獄に入るであろう。　一劫という非常に長い期間をすぎ、その劫が尽きると、また新たに生まれかわり、　そのようにしてめぐりめぐって、無数の劫を経ることになるであろう。(114)

地獄からぬけ出しても、きっと畜生界に堕(お)ちるであろう。　もし、犬や野干(やかん)となったならば、その姿は、まだらに禿(は)げて痩せこけており、(115)

色は黒く、疥(ひぜん)や癩(らい)に冒され、人のなぐさみものとなり、　また人々に嫌悪され、賤(いや)しめられるであろう。(116)

いつも飢と渇きに苦しんで、骨と皮ばかりにやつれはてるであろう。　生きている間は苦痛を受け、死ねば瓦や石を投げつけられる。　仏となる種子を断っているから、このような罪の報いを受けるのである。(117)

もしは駱駝となり、あるいは驢馬の中に生まれては、　その身につねに重い荷を背負い、杖や鞭(むち)でさんざんに叩かれながらも、　ただ（食べ物の）水草のことをのみ思い、それ以外は何ら知る

ところがない。この経を誹謗するために、その罪を受けることは以上のとおりである。(118)
あるいはまた野干となって、聚落にやってくれば、身体は疥や癩ができていて、そのうえ片目しかなく、多くの子供達に、打たれなぐられ、さまざまな苦痛を受けて、ある時は死に至るであろう。(119)
そこで死んでも、更に（生まれ変って）大蛇の身体を受けるであろう。その形は長大で、五百ヨージャナの長さにもなろう。(120)
耳が聞こえず、愚かで足がなく、くねくね腹ばいし、さまざまな小虫たちにつつかれ、昼となく夜となく苦しみを受けて、休まることがないであろう。
この経を誹謗したために、その罪をうけることは以上のとおりである。(121)
もしも人間となることができても、さまざまな能力において鈍く劣っており、背は低く、容貌も醜く、手はひきつり、足はいざって、盲目で耳も聞こえず、せむしとなるであろう。(122)
何か言おうとすることがあっても、人はそれを信じて受けいれようとはしないであろう。口の息はつねに臭く、幽鬼妖怪にとりつかれるであろう。(123)
貧しく困窮し下賤の身となり、人に使われ、病い多く、苦痛にやせ衰え、たよる寄る辺もない。(124)
だれかに親しみなじんだとしても、その人は、彼のことなど意中にはない。もし何か得るものがあっても、すぐさまうかつにも失ってしまう。(125)
もし医術を身につけ、処方に順って病いを治そうとすれば、かえって新たに他の病いを増すこ

とになったり、あるいは死に致らしめてしまう。　もしも自分が病いを得れば、だれも治療してくれることなく、　たとい良薬を服したとしても、　また一層病いの激しさを増すだけであろう。(126)

もしも他の人が謀反(むほん)をおこしたり、　掠奪したり、　盗みをはたらいたりした場合にも　それらの罪が、　かってに自分のわざわいとなってふりかかってくる。(127)

そのような罪人は、　永久に　多くの聖人たちの王たる仏の、　説法し教化されるのにお目にかかることがないであろう。(128)

そのような罪人は、　つねに（仏の教えに触れるに）難しい境涯に生まれ、　気が狂い、　耳も聞こえず、　心乱れて、　永久に（仏の）法を聞かないであろう。(129)

無数という劫数の、　ガンジス河の砂の数ほど多い劫数の長い年月ものあいだ、　生まれると耳も聞えず、　口もきけぬ者となり、　身体の諸器官が不完全であろう。(130)

つねに地獄に住して、　さながら園林、　高楼に遊ぶがごとくであり、　その他の悪い境界にあることが、　自分の家に居るがごとくである。　そして、　駱駝(らくだ)・ロバ・猪(いのしし)・犬などのなかに、　彼は暮らすことになろう。

この経を誹謗するために、　その罪を受けることは以上のようである。(131)

たといもし、　人間に生まれることができたとしても、　耳は聞えず、　目は見えず、　口もきけなくなり、　貧困やもろもろの病衰などで、　われとわが身をかざることになる。(132)

水腫(すいしゅ)・かさぶた・疥(ひぜん)・癩(らい)・できもの　このような病気が、　その衣服となり、　身体はつねに悪

臭を放って、垢にまみれて不浄である。(133)

深く自我ありとの見解に執着していて、怒りをいや増し、　婬欲がさかんで、(その対象として)禽獣をも選ばない。

この経を誹謗するために、その罪を受けることは以上のとおりである。』(134)

《**法印**》法の標識となるもの。dharma-mudrā の訳。第二章の語注「実相印」(一五九―一六〇頁)を参照。《**勿妄宣伝**》この句は梵本においては、diśāsu vidiśāsu ca deśayasva.(四方八方に説き示せ)となっており(p.92. *l*. 14)、羅什訳と正反対である。この妙法華の原典が ca ではなく否定詞の na になっていたものか。《**阿鞞跋致**》avaivartika の音写。阿惟越致とも音写する。退かないという意味で不退転と訳す。菩薩が仏になることが決定していて、再び退かない位をいう。《**我見**》前注(二二九頁)参照。《**五欲**》前章注(一六四頁)参照。《**顰蹙**》顔をしかめること。《**阿鼻獄**》第一章の注「阿鼻地獄」(六二頁)参照。《**黧黮**》「黧」も「黮」も色が黒いという意。《**触嬈**》さわりなぶること。《**楚毒**》苦しみ、苦痛。《**蟒身**》「蟒」はおろち、大蛇のこと。大蛇の身体。《**五百由旬**》第一章の注「由旬」(七九頁)を参照。《**聾騃**》耳が聞こえず愚かなこと。「騃」は愚か、の意。《**矬陋**》背が低くてみにくいこと。《**攣躄**》「攣」は、手足がひきつること。「躄」は、いざりの意。《**若修医道　順方治病　更増他疾　或復致死**》この四句一偈は梵本に欠けている。《**抄劫**》「抄」「劫」とも、かすめとるの意。《**難処**》八難処の略。仏や仏の教えに遇う機会がえられない八種の場所境界のことで、(1)地獄、(2)餓鬼、(3)畜生、(4)鬱単越(楽しみのみあって苦のない場所の名)(5)長寿天(色界・無色界の長寿を楽しむことのできる処)(6)聾盲瘖瘂(感覚器官の欠陥)(7)世智弁聰(世俗智にたけている)(8)仏前仏後(仏が在世しない時期)の八種をいう。《**無数劫**》「阿僧祇劫」に同じ。「無数」は六

十桁の数の単位。前章の注（八八頁）参照。《恒河沙》第一章「恒沙」の注（七九頁）参照。

この段より以下最後までの偈は、科文からいうと、本章の偈頌を、長行を頌する部分と勧信流通を明かす部分とに大きく二分したうち、後半の勧信流通を明かす部分に相当する。科文はこの勧信流通の部分についても更に細かく分けているが、要はこの法華経を説いてはならない人々と、説くべき人人の二種類を挙げており、今のこの部分は聴衆として説くべきでない人々について明かしたのである。経は、機根の熟さないもの、不信懈怠（けたい）のものたちにはこの経を説いてはならない、もし説けば必ず誹謗するであろうと言い、この経を誹謗するものの罪の報いを言葉を極めて明かしている。それは裏を返せば、「信仏語」ということがいかに大事なことであるかということを説いているものである。

続いて以下の次の段より最後までは、この経を説き示すべき人を挙げ、そのような人々はこの経をよく信解（しんげ）することができるから説くべきであるとして、本章の譬喩品を終わる。

告舍利弗　謗斯經者　若説其罪　窮劫不盡　以是因緣　我故語汝
無智人中　莫説此經　若有利根　智慧明了　多聞強識　求佛道者
如是之人　乃可爲説　若人曾見　億百千佛　殖諸善本　深心堅固
如是之人　乃可爲説　若人精進　常修慈心　不惜身命　乃可爲説
若人恭敬　無有異心　離諸凡愚　獨處山澤　如是之人　乃可爲説
又舍利弗　若見有人　捨惡知識　親近善友　如是之人　乃可爲説

若見佛子　持戒清潔　如淨明珠　求大乘經　如是之人　乃可爲說
若人無瞋　質直柔軟(1)　常愍一切　恭敬諸佛　如是之人　乃可爲說
復有佛子　於大衆中　以清淨心　種種因緣　譬喩言辭　說法無礙
如是之人　乃可爲說　若有比丘　爲一切智　四方求法　合掌頂受
但樂受持　大乘經典　乃至不受　餘經一偈　如是之人　乃可爲說
如人至心　求佛舍利　如是求經　得已頂受　其人不復　志求餘經
亦未曾念　外道典籍　如是之人　乃可爲說　告舍利弗　我說是相
求佛道者　窮劫不盡　如是等人　則能信解　汝當爲說　妙法華經

(1)軟＝輭

舎利弗に告ぐ　『斯の経を謗ぜん者　若し其の罪を説かんに　劫を窮むとも尽きじ。
是の因縁を以て　我、故らに汝に語る　無智の人の中にして　此の経を説くこと莫れ。
若し利根にして　智慧明了に　多聞強識にして　仏道を求むる者有らん　是の如きの人に　乃ち為に説くべし。
若し人、曾て　億百千の仏を見たてまつりて　諸の善本を殖え　深心堅固ならん　是の如きの人に　乃ち為に説くべし。
若し人、精進して　常に慈心を修し　身命を惜しまざらんに　乃ち為に説くべし。
若し人、恭敬して　異心有ること無く　諸の凡愚を離れて　独り山沢に処せん　是の如きの人に　乃ち為に説くべし。

又、舎利弗よ　若し人有って　悪知識を捨て　善友に親近するを見ん　是の如きの人に　乃ち為に説くべし。
若し仏子の　持戒清潔なること　浄明珠の如くにして　大乗経を求むるを見ん　是の如きの人に乃ち為に説くべし。
若し人瞋無く　質直柔軟にして　常に一切を愍み　諸仏を恭敬せん　是の如きの人に乃ち為に説くべし。
復、仏子の　大衆の中に於いて　清浄の心を以て　種種の因縁、譬喩・言辞をもって　説法すること無礙なる有らん　是の如きの人に　乃ち為に説くべし。
若し比丘の　一切智の為に　四方に法を求めて　合掌し頂受し、但楽って　大乗経典を受持して乃至　余経の一偈をも受けざる有らん　是の如きの人に　乃ち為に説くべし。
人の、至心に　仏舎利を求むるが如く　是の如く経を求め　得已って頂受せん。　其の人、復　余経を志求せず　亦、未だ曾て　外道の典籍を念ぜじ　是の如きの人に　乃ち為に説くべし。』
舎利弗に告ぐ　『我、是の相にして　仏道を求むる者を説かんに　劫を窮むとも尽きじ。　是の如き等の人は　則ち能く信解せん　汝、当に為に　妙法華経を説くべし』　と。

〔訳〕

舎利弗に告げる、『この経を誹謗するものの、もしそのものの罪を説こうとすれば、劫という非常に長い時を満了しても、まだ説き尽せないであろう。(135)

このような理由から、私はことさらに汝に語るのである。　智慧のない人々のなかで、この経を

説いてはならないと。(136)

もしも素質がすぐれ、明らかな智慧を有し、多くを聞いて忘れず記憶力がすぐれ、仏道を求める者がいるならば、そのような人にこそ、説くべきである。(137)

もしもある人が、かつて百千億もの仏に見（まみ）えて、もろもろの善の種を植え、信心が堅固であったならば、そのような人にこそ、説くべきである。(138)

もしもある人が、精進して、つねに慈しみの心を実践し、自分の身体、生命をも惜しまないならば、そのような人にこそ説くべきである。(139)

もしもある人が、敬い尊ぶことを修して、二心（ふたごころ）あることなく、もろもろの凡夫愚輩から離れて、独り山林や渓谷に住んでいるならば、そのような人にこそ、説くべきである。(140)

また、舎利弗よ、もしも　悪友を捨てて、善友に近づくような人を見たならば、そのような人のためにこそ、説くべきである。(141)

もしも仏弟子で、戒を清浄に保つことが、浄らかな明珠のようであり、大乗経典を求めている、そのような人を見たならば、そのような人のためにこそ、説くべきである。(142)

もしもある人が、怒ることなく、その性直（なお）く心が柔軟で、つねにすべてのものにあわれみをかけ、多くの仏を尊び敬うならば、そのような人のためにこそ、説くべきである。(143)

また、仏弟子で、大ぜいの集まりの中において、清浄な心で、種々のいわれ、喩え話と言葉とをもって、法を説くことが自由自在であるならば、そのような人のためにこそ、説くべきである。(144)

もしも修行者が、完全な智慧（を有する人）のために　四方に（教えの）法を求めて、合掌し、おしいただいて、(145)

ただ大乗経典だけを、心によろこんで受けたもつばかりか、　他の経典からは一偈をも受けないならば、　そのような人のためにこそ、説くべきである。(146)

人が心の底から、仏の遺骨を求めるように、　そのように経を求めて、得た時にそれを頭におしいただき、(147)

その人がまた、他の経を求めようとせず、　また今までに、仏典以外の典籍をも心に思ったことがないならば、　そのような人のためにこそ、説くべきである』と。(148)

舎利弗に告げる、『私は以上のような様相で、　仏道を求める者たちについて説こうとするならば、一劫という非常に長い年月を満了しても、まだ説き尽くすことができないであろう。　そのような人々であれば、理解し信ずることができるであろうから、　汝はそのような人のためにこそ、『妙法蓮華経』を説くべきである』と。(149)

《**悪知識**》善知識の対。悪い友のこと。《**一切智**》一切を知る智慧、仏の智慧。具体的には完全な智慧を有する仏をさす。《**劫**》第一章の注「阿僧祇劫」を参照（八八頁）。

妙法蓮華經信解品第四

爾時。慧命須菩提。摩訶迦旃延。摩訶迦葉。摩訶目犍(1)連。從佛所聞。未曾有法。世尊。授舍利弗。阿耨多羅三藐三菩提記。發希有心。歡喜踊躍。卽從座起。整衣服。偏袒右肩。右膝著地。一心合掌。曲躬恭敬。瞻仰尊顏。而白佛言。我等居僧之首。年竝朽邁。自謂已得涅槃。無所堪任。不復進求。阿耨多羅三藐三菩提。世尊往昔。說法既久。我時在座。身體疲懈。但念空。無相。無作。於菩薩法。遊戲神通。淨佛國土。成就衆生。心不喜(2)樂。所以者何。世尊令我等。出於三界。得涅槃證。又今我等。年已朽邁。於佛敎化菩薩。阿耨多羅三藐三菩提。不生一念。好樂之心。我等今於佛前。聞授聲聞。阿耨多羅三藐三菩提記。心甚歡喜。得未曾有。不謂於今。忽然得聞。希有之法。深自慶幸。獲大善利。無量珍寶。不求自得。

(1)犍＝揵　(2)喜＝憙

爾の時に、慧命須菩提、摩訶迦旃延、摩訶迦葉、摩訶目犍連、仏より聞ける所の未曾有の法と、世尊の、舎利弗に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたもうとに、希有の心を発し、歓喜踊躍して、即ち座より起ちて衣服を整え、偏に右の肩を袒にし、右の膝を地に著け、一心に合掌し、曲躬恭敬し、尊顔を瞻仰して、仏に白して言さく、

「我等、僧の首に居し、年並びに朽邁せり。自ら已に涅槃を得て、堪任する所無しと謂いて、復、阿耨多羅三

藐三菩提を進求せず。世尊往昔の説法既に久し。我、時に座に在って、身体疲懈し、但、空、無相、無作を念じて、菩薩の法の遊戯神通し、仏国土を浄め、衆生を成就するに於いて、心喜楽せざりき。所以は何ん。世尊は、我等をして三界を出でて、涅槃の証を得せしめたまえばなり。又、今、我等、年已に朽邁して、仏の、菩薩を教化したもう阿耨多羅三藐三菩提に於いて、一念好楽の心を生ぜざりき。我等、今、仏前に於いて、声聞に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたもうを聞きて、心甚だ歓喜し、未曾有なることを得たり。謂わざりき、於今、忽然に希有の法を聞くことを得んとは。深く自ら慶幸す、大善利を獲たりと。無量の珍宝、求めざるに自ら得たり。

〔訳〕その時、長老の須菩提、摩訶迦旃延、摩訶迦葉、摩訶目犍連らは、仏からお聞きしたこれまでにない尊い教えと、世尊が舎利弗に無上の正しい悟りを得るあかしを授けられたことに、たぐいまれな心をおこして、歓びにこおどりすると、ただちに座から起って衣服を整え、右肩をはだぬぎし、右の膝を地につけ、一心に合掌して、身体を折りまげて礼拝し敬い、尊い仏の顔をあおぎみて仏に申しあげた。

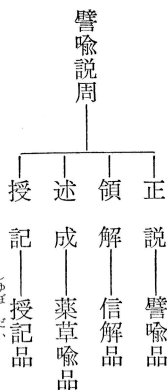
「わたくしたちは、僧団の上首となっておりますが、みな年をとり、老衰いたしました。自分ではすでに涅槃を得たのだと思い、その任に堪えるところではないと思って、無上の正しい悟りをすすんで求めることをしませんでした。世尊が昔より法を説かれてからすでに久しい時がたっています。わたくしは、その時（仏の説法の）座にありましたが、身体は疲れ倦んでおり、ただ（小乗の）空・無相・無作（の三三昧）のみを思い念じて、菩薩の法としての、自在に神通に遊んで自ら楽しみ、仏の国

土を浄め、衆生を成熟させるという、そのことを心よろこばず望みませんでした。そのわけは、世尊はわたくしたちを（欲界・色界・無色界の）三界から出離させ、涅槃のさとりを得させられたからであります。またいま、わたくしたちは年をとり、老いさらばえて、仏が菩薩に教えられた無上の正しい悟りに対しても、一念にもこれをよろこびねがうという心をおこしませんでした。（ところが）わたくしたちは、いま仏の前で、無上の正しい悟りを得るという予言を声聞にも与えられたことを聞き、心おおいに喜んで、これまでにない思いをいたしました。いまここで、突然に、類いまれな法を聞くことができようとは、思いもよりませんでした。これはまことに大きなよい利益を得たものだと、みずからそのさいわいをよろこんでおります。はかりしれないほどの珍しい宝が、求めないのに自然に得られたのであります。

《信解》「信解」は adhimukti の訳語。原語の意味は、強い傾向、意向、確信の意。この原語は、本経では多くみられ、「志意」「欲性」「信」「信力」などとも訳されている。漢語としての「信解」は、信じ理解することの意である。**《慧命》** 修行者の尊称。慧寿、具寿ともいう。āyuṣmat の訳で、「よわいを有する人」が原意。（中村元訳『ブッダ最後の旅』一八九—一九一頁参照・岩波文庫）**《須菩提・摩訶迦旃延・摩訶迦葉・摩訶目犍連》** 第一章序品の語注参照（本書四三—四頁）。本章では前章の譬喩品の説法を聞いて領解した須菩提以下の四大弟子たちが自らの領解を「長者窮子の譬え」によって語るという設定になっている。**《偏袒右肩》** 右肩をはだ脱ぎするインド古来の礼法で、僧が恭敬の意をあらわす時に行う。**《右膝著地》** 右膝を地につけて左膝を立てる立膝だちの礼法。**《遊戯神通》** 自在に神通力をふるって人々を教化し活動し、しかもそれが自らの遊楽であるような仏・菩薩のはたらきをいう。**《声聞》** 八九頁参照。**《空・無相・無作》** 三三昧のこ

と。方便品の「三昧」の語注（一一一―一一二頁）参照。

この第四章信解品は、先の科文でいうと（二三二―二三三頁）譬喩説周の中の第二領解段にあたる。譬喩説周は譬喩品の一部から授記品までであるが、これを図示してみると、

- 譬喩説周
  - 正説――譬喩品
  - 領解――信解品
  - 述成――薬草喩品
  - 授記――授記品

となる。領解というのは、中根の須菩提以下の四大声聞たちが、第三章譬喩品の説法によって一仏乗の仏の真意を領解したことをいう。それで、この章において須菩提以下の四大声聞たちが、自分たちのその理解を「長者窮子の喩え」によって仏の前に示したのが本章の内容である。まず、はじめに須菩提以下の四大声聞は、自分たち声聞は小乗の涅槃を得たことに安住して、すすんで大乗を求めることをしなかったことを告白する。しかし、今、仏が同じ声聞の舎利弗に成仏の予言をされるのをまのあたりにして、自分たちにも成仏の可能性があることを知って、驚きと喜びの気持を表わすのである。そして、思いもかけずに無量の宝が自然と得られたということを、以下に長者と窮子のたとえになぞらえて説いてゆく。

世尊。我等今者。樂說譬喻。以明斯義。譬若有人。年既幼稚。捨父逃逝。久住他國。或十二十。至五十歲。年既長大。加復窮困。馳騁四方。以求衣食。漸漸遊行。遇向本國。其父先來。求子不得。中止一城。其家大富。財寶無量。金銀。琉(1)璃。珊瑚。虎珀(2)。頗梨珠等。其諸倉庫。悉皆盈溢。多有僮僕。臣佐吏民。象馬車乘。牛羊無數。出入息利。乃遍他國。商估賈客。亦甚衆多。時貧窮子。遊諸聚落。經歷國邑。遂到其父所止之城。父每念子。與子離別。五十餘年。而未曾向人。說如此事。但事思惟。心懷悔恨。自念老朽。多有財物。金銀珍寶。倉庫盈溢。無有子息。一旦終沒。財物散失。無所委付。是以慇懃。每憶其子。復作是念。我若得子。委付財物。坦然快樂。無復憂慮。世尊。爾時窮子。傭賃展轉。遇到父舍。住立門側。遙見其父。踞師子牀。寶机承足。諸婆羅門。刹利居士。皆恭敬圍繞。以眞珠瓔珞。價直千萬。莊嚴其身。吏民僮僕。手執白拂。侍立左右。覆以寶帳。垂諸華幡(3)。香水灑地。散衆名華。羅列寶物。出內取與。有如是等。種種嚴飾。威德特尊。窮子見父。有大力勢。卽懷恐怖。悔來至此。竊作是念。此或是王。或是王等。非我傭力。得物之處。不如往至貧里。肆力有地。衣食易得。若久住此。或見逼迫。强使我作。作是念已。疾走而去。時富長者。於師子座。見子便識。心大歡喜。卽作是念。我財物庫藏。今有所付。我常思念此子。無由見之。而忽自來。甚適我願。我雖年朽。猶故貪惜。卽遣傍人。急追將還。爾時使者。疾走往捉。窮子驚愕。稱怨大喚。我不相犯。何爲見捉。使者執之愈急。强牽將還。于時窮子。自念無罪。而被囚執。此必定死。轉更惶怖。悶絕躄(4)地。父遙見之。而語使言。不須此人。勿强將來。以冷水灑面。令得醒悟。莫復與語。所以者何。父知其子。志意下劣。自知豪貴。爲子所難。審知是子。而以方便。不語他人。云是我子。使者語之。我今放汝。隨意所趣。窮子歡喜。得未曾有。從地而起。

往至貧里。以求衣食。爾時長者。將欲誘引其子。而設方便。密遣二人。形色憔悴。無威德者。汝可詣彼。徐語窮子。此有作處。倍與汝直。窮子若許。將來使作。若言欲何所作。便可語之。雇汝除糞。我等二人。亦共汝作。時二使人。卽求窮子。旣已得之。具陳上事。爾時窮子。先取其價。尋與除糞。其父見子。愍而怪之。又以他日。於窓牖中。遙見子身。羸瘦憔悴。糞土塵坌。汚[5]穢不淨。卽脫瓔珞。細軟[6]上服。嚴飾之具。更著麤弊。垢膩之衣。塵土坌身。右手執持。除糞之器。狀有所畏。語諸作人。汝等勤作。勿得懈息。以方便故。得近其子。後復告言。咄。男子。汝常此作。勿復餘去。當加汝價。諸有所須。瓫器米麪。鹽醋[7]之屬。莫自疑難。亦有老弊使人。須者相給。好自安意。我如汝父。勿復憂慮。所以者何。我年老大。而汝少[8]壯。汝常作時。無有欺怠。瞋恨怨言。都不見汝。有此諸惡。如餘作人。自今已後。如所生子。卽時長者。更與作字。名之爲兒。爾時窮子。雖欣此遇。猶故自謂。客作賤人。由是之故。於二十年中。常令除糞。過是已後。心相體信。入出無難。然其所止。猶在本處。世尊。爾時長者有疾。自知將死不久。語窮子言。我今多有。金銀珍寶。倉庫盈溢。其中多少。所應取與。汝悉知之。我心如是。當體此意。所以者何。今我與汝。便爲不異。宜加用心。無令漏失。爾時窮子。卽受敎勅。領知衆物。金銀珍寶。及諸庫藏。而無悕取。一飡之意。然其所止。故在本處。下劣之心。亦未能捨。復經少時。父知子意。漸已通泰。成就大志。自鄙先心。臨欲終時。而命其子。幷會親族。國王大臣。剎利居士。皆悉已集。卽自宣言。諸君當知。此是我子。我之所生。於某城中。捨吾逃走。伶俜[9]辛苦。五十餘年。其本字某。我名某甲。昔在本城。懷憂推覓。忽於此間。遇會得之。此實我子。我實其父。今我[10]所有。一切財物。皆是子有。先所出內。是子所知。世尊。是時窮子。聞父此言。卽大歡喜。得未曾有。而作是念。我本無心。有

所希⑾求。今此寶藏。自然而至。

(1)琉＝瑠　(2)珀＝魄　(3)幡＝旛　(4)躄＝躃　高麗蔵も同じ。(5)汚＝汙　高麗蔵も同じ。(6)軟＝輭　(7)醋＝酢　(8)少＝小　(9)傍＝傍　(10)我＝吾　(11)希＝悕

世尊よ、我等、今者、楽わくは、譬喩を説いて、以て斯の義を明かさん。譬えば人有るが若し。年既に幼稚にして、父を捨てて逃逝し、久しく他国に住して、或は十、二十より五十歳に至る。年既に長大して、加復窮困し、四方に馳騁して、以て衣食を求め、漸漸に遊行して、本国に遇い向かいぬ。其の父、先より来、子を求むるに得ずして、一城に中止す。其の家大いに富んで、財宝無量なり。金・銀・琉璃・珊瑚・虎珀・頗梨珠等、其の諸の倉庫に、悉く皆盈溢せり。多く僮僕、臣佐、吏民有って、象・馬・車乗・牛・羊無数なり。出入息利すること、乃ち他国に遍し。商估・賈客・亦甚だ衆多なり。時に貧窮の子、諸の聚落に遊び、国邑を経歴して、遂に其の父の所止の城に至りぬ。父毎に子を念う。子と離別して五十余年、而も未だ曾て、人に向って此の如き事を説かず。但自ら思惟して、心に悔恨を懐いて、自ら念わく、

『老朽して多く財物有り。金・銀・珍宝、倉庫に盈溢すれども、子息あること無し。一旦に終没しなば、財物散失して委付する所無けん』と。

是を以て、慇懃に毎に其の子を憶う。復、是の念を作さく、

『我、若し子を得て、財物を委付せば、坦然快楽にして、復、憂慮無けん』と。

世尊よ、爾の時に、窮子、傭賃展転して、父の舎に遇い到りぬ。門の側に住立して、遥かに其の父を見れば、師子の牀に踞して、宝机足を承け、諸の婆羅門・刹利・居士、皆、恭敬し囲繞せり。真珠瓔珞の、価直千万なるを以て其の身を荘厳し、吏民・僮僕手に白払を執って左右に侍立せり。覆うに宝帳を以てし、諸の華幡を垂

れ、香水を地に灑ぎ、衆の名華を散じ、宝物を羅列して、出内取与す。是の如き等の種種の厳飾有って威徳特尊なり。窮子、父の大力勢有るを見て、即ち恐怖を懐いて、此に来至せることを悔ゆ。竊かに是の念を作さく、

『此れ、或は是れ王か、或は是れ王と等しきか。我が傭力して物を得べき処に非ず。如かじ、貧里に往至して肆力地有って衣食得易からんには。若し久しく此に住せば、或は逼迫せられ、強いて我をして作さしめん』と。是の念を作し已って、疾く走って去りぬ。時に、富める長者、師子の座に於いて、子を見て便ち識りぬ。心大いに歓喜して、即ち是の念を作さく、

『我が財物・庫蔵、今付する所有り。我常に此の子を思念すれども、之を見るに由無し。而るを忽ちに自ら来れり。甚だ我が願に適えり。我、年朽ちたりと雖も、猶故、貪惜す』と。

則ち傍人を遣わして、急に追うて将いて還らしむ。爾の時に、使者、疾く走り往いて捉う。窮子、驚愕して、怨なりと称して大いに喚ばう。『我、相犯さず、何ぞ捉えらるることを為る。』使者之を執らうること、愈急にして、強いて牽将いて還る。時に窮子、自ら念わく、『罪無くして囚執えらる。此れ必定して死せん』と。転た更に惶怖し、悶絶して地に躄る。父遙かに之を見て、使に語って言わく、

『此の人を須いじ。強いて将いて来ること勿れ。冷水を以て面に灑いで、醒悟することを得せしめよ。復与し語ること莫れ』と。

所以は何ん。父、其の子の志意下劣なるを知り、自ら豪貴にして、子の為に難らるるを知って、審かに是れ子なりと知れども、方便を以て、他人に語りて、是れ我が子なりと云わず。使者、之に語らく、

『我、今汝を放す。意の所趣に随え』と。

窮子、歓喜して未曾有なることを得て、地より起きて貧里に往至して、以て衣食を求む。

爾の時に、長者、将に其の子を誘引せんと欲して、方便を設けて、密かに二人の形色憔悴して、威徳なき者

を遣わす。

『汝、彼に詣いて、徐く窮子に語るべし。此に作処有り、倍して汝に直を与えんと。窮子、若し許さば、将いて来り作さしめよ。若し何の所作をか欲すと言わば、便ち之に語るべし。汝を雇うことは、糞を除わしめんとなり。我等二人、亦汝と共に作さんと。』

時に二人の使人、即ち窮子を求むるに、既已に之を得て具さに上の事を陳ぶ。爾の時に、窮子、先ず其の価を取って、尋いで与に糞を除う。其の父、子を見て、愍しんで之を怪しむ。又、他日を以て、窓牖の中より遙かに子の身を見れば、羸痩憔悴し、糞土塵坌汚穢不浄なり。即ち、瓔珞、細軟の上服、厳飾の具を脱いで、更に麤弊垢膩の衣を著、塵土に身を坌し、右の手に除糞の器を執持して、畏るる所有るに状れり。諸の作人に語らく、『汝等、勤作して、懈息すること得ること勿れ』と。

方便を以ての故に、其の子に近づくことを得つ。後に復告げて言わく、

『咄、男子よ、汝常に此にして作せ、復余に去ること勿れ。当に汝に価を加うべし。諸有の所須の瓮器・米麪・塩醋の属あり。自ら疑い難ること莫れ。亦、老弊の使人有り、須いば相給わん。好く自ら意を安くせよ。我、汝が父の如し。復憂慮すること勿れ。所以は何ん。我、年老大にして、汝少壮なり。汝常に作す時、欺怠・瞋恨・怨言有ること無く、都べて汝に此の諸悪有らんこと、余の作人の如くに見じ。今より已後、所生の子の如くせん』と。

即時に長者、更に与に字を作って、之を名づけて児と為す。爾の時に、窮子、此の遇を欣ぶと雖も、猶故、自ら客作の賤人と謂えり。是れに由るが故に、二十年の中に於いて常に糞を除わしむ。是れを過ぎて已後、心相い体信して、入出に難り無し。然も其の所止は猶本処に在り。

世尊よ、爾の時に、長者疾有って、自ら将に死せんこと久しからじと知って、窮子に語って言わく、

『我、今、多く、金・銀・珍宝有って倉庫に盈溢せり。其の中の多少、取与すべき所、汝悉く之を知れ。我が心是の如し。当に此の意を体るべし。所以は何ん。今、我と汝と便ち為異らず。宜しく用心を加うべし。漏失せしむること無かれ』と。

爾の時に窮子、即ち教勅を受けて、衆物の金・銀・珍宝、及び諸の庫蔵を領知すれども、而も一飡を悕取するの意無し。然も其の所止は、故本処に在り。下劣の心、亦未だ捨つること能わず。復、少時を経て、父、子の意漸く已に通泰して、大志を成就し、自ら先の心を鄙しんずと知って、終らんと欲する時に臨んで、其の子に命じ、並に親族・国王・大臣・刹利・居士を会むるに、皆悉く已に集まりぬ。即ち自ら宣言すらく、『諸君、当に知るべし。此は是れ我が子なり。我の所生なり。某の城中に於いて、吾を捨てて逃走して、伶俜辛苦すること五十余年、其の本の字は某、我が名は某甲、昔本城に在って、憂を懐いて推ね覓めき。忽ちに此の間に於いて、遇い会うて之を得たり。此れ実に我が子なり。我、実に其の父なり。今、我が所有の一切の財物は、皆是れ子の有なり。先に出内する所は、是れ子の所知なり』と。

世尊よ、是の時、窮子、父の此の言を聞いて、即ち大いに歓喜して、未曾有なることを得て、是の念を作さく、『我、本心に希求する所有ること無かりき。今此の宝蔵、自然にして至りぬ』と。

〔訳〕世尊よ、わたくしたちは、いま、たとえを説いて、それによってこのことの意義を明らかにしようと思います。たとえば、このような人がいたとしましょう。年端もゆかぬうちに、父を捨てて逃げ、長い間他国に住んで、十年、二十年とたち、やがて五十年となりました。年をとるにつれ、ますます貧困の苦しみがつのり、四方に足をのばして衣服や食物を求め、次第にあちこちとへめぐって、偶然にも本の国の方へ向かいました。その父は、前からずっと子を探し求めていましたが、見つけること

ができずに、途中のある城市に止まりました。（父の）その家は、大いに富んで、財宝ははかりしれぬほどでした。金・銀・瑠璃（るり）・珊瑚（さんご）・琥珀（こはく）・水晶の珠などが、多くの倉庫にすべて満ちあふれておりました。多くの召使い、使用人、雇傭人たちがいて、象や馬、車、牛や羊などは数知れませんでした。くまなく他国においてまで金銭を貸して利息を得ており、物売りの商人や買物の客もとても大勢でした。ときに、貧困に窮した子は、多くの村々を旅し、国々をへめぐって、ついにその父のとどまっている城市にやってきました。父はつねづね子のことを思っていましたが、離別以来五十余年にもなるのに、まだこれまで一度も人にこのようなことを話したことはありませんでした。ただ自分一人で思って、胸のうちに悔恨を懐いておりました。その思うようは、『私は老いの身になったが、多くの財宝、宝物がある。金・銀や珍しい宝は倉庫に満ちあふれているが、しかし子供がいない。もしひとたび私が死んでしまったならば、この財物はゆだねるところもなく、散失してしまうだろう』と。

そういうわけで、くりかえしくりかえし、いつもその子のことを思い、またこのようにも考えました。

『私が、もしも子が得られて、財物をまかせ与えられれば、心たいらかに楽しくなり、何の心配もないだろうに』と。

世尊よ、その時に、貧窮した子は、あちらこちらと賃金でやとわれつつ、期せずして父の家にやってきました。門のかたわらに立って、はるかにその父を見やると、獅子の（毛皮を敷いた）腰かけにすわり、宝玉づくりの足台に足をのせて、大勢のバラモン、王侯貴族、富豪たちがみなうやうやしく、とりかこんでおりました。真珠の玉飾りの、その値いが千万もするものでその身をかざり、雇い人や

召使いたちが手に白毛の払子（はえはらい）をもって左右に立ちはべっておりました。宝玉をちりばめた帳でその上を覆い、さまざまな花でできた旗を垂らして、香水を地にそそぎ、たくさんの立派な花を散らし、宝物を並べて出し入れし、取引をしていました。このような種々のおごそかな飾りがあって、ことのほか威厳にみちておりました。貧窮の子は、父に大きな勢力があるのを見て、たちまちにおそれをいだいて、ここにやってきたことを後悔しました。そしてひそかにこのように思いました。
『この人は王様であろうか、あるいは王様と同じくらいの人であろうか。私が傭われ働いて、物を得ようとするようなところではないようだ。もっと貧しい村に行って、力を尽して働くところがあれば、衣食は得やすいであろうから、そうするにこしたことはない。もし長くここにとどまっていると、せめたてられ、強制されて働かされるかもしれない』と。
　こう考えると、すばやく走り去りました。その時、富裕の長者は、獅子の毛皮を敷いた腰かけに坐っていて、子を見るなりすぐに（わが子であることを）知って、心おおいに喜んで、このように思いました。
『私の財産、倉庫や蔵を、今、あたえるものができた。私は、いつもこの子のことを思い念じていたけれども、見つける手がかりがなかった。それをいま、突然にあの子の方からやってきた。私の願いに、ちょうどかなった。私は年老いたけれども、まだまだ（財物を）おしんで（わが子に与えるときを待って）いるのだ』と。
　そこで、ただちにそばにいた人をつかわして、急いで後を追いかけて、つれて帰らせようとしました。そこで、使いのものはすばやく走っていって、その子をつかまえました。すると貧窮の子はびっ

くりして、敵だ、と口走って、大声でこのように叫びました。『私は何も悪いことをしておりません、どうしてとらえられるのですか』と。すると使者は、ますますあわただしくその子を捉え、無理矢理ひっぱってつれて帰りました。その時、貧窮の子は、このように考えました。『何の罪もないのにとらえられた、これはきっと殺されるにちがいない』と。
こうしていよいよ恐怖はつのり、悶絶して地面に倒れてしまいました。父は、はるかにこの様子を見て、使いのものに言うには、『その者はもう必要ない。無理につれてくるようなことはしてはいけない。冷水を顔にかけて、目を覚まさせなさい。再び話したりしてはいけない』と。
そのわけは、父はその子のこころねが劣っていることを知り、自分が強く貴いのが、それが子にとって、はばかるところとなることを知ったからなのです。これはわが子だとあきらかに知っていても、教えの手だてとして、他人にこれはわが子であるとは言わなかったのです。使者は彼に、『いま、おまえを放してやろう。すきにするがよい』と言いました。貧窮の子は喜びおどろいて、地面からたち上がって、貧しい村に行き、そこで衣食を求めました。その時に、長者は、その子を誘い引きよせようと思って、手だてを講じて、ひそかに二人の顔かたちのやつれおとろえ、威厳もない者をさしむけて、このように言いました。『おまえたちは、彼のところに行って、おもむろに貧窮の子にこう言いなさい。ここに働き場所がある、二倍の給料を与えよう、と。貧窮の子がもし承諾したなら、つれてきて働かせなさい。もし、どんな仕事をお望みかと言ったならば、彼にこう言いなさい。お前を雇うのは、汚物の掃除のためだ。

われら二人も、おまえと一緒に仕事をしよう、と。』
　そこで、二人の使いのものは、すぐさま貧窮の子を求めて、探しだし、くわしく以上のことをのべました。その時に、貧窮の子は、まずその給金をとって、それから二人と一緒に汚物の掃除をしました。その父は、子を見てかなしみ、奇特な思いに打たれました。また、他日、窓の中からはるかにわが子の身体をみれば、疲れ、やせ、やつれて、糞や塵土で汚れて、きたなく不浄でありました。そこで父は玉かざり、軟らかい上等な衣服、立派な装身具をとって、あらためて粗末なやぶれて垢のついた衣を身につけ、塵土で身体を汚して、右の手に汲取りの器をしっかりともち、おどおどしたさまをよそおいました。そして、多くの働いている人々にこう言いました。
『おまえたち、精だして働いて、なまけるようなことがあってはならないぞ』と。
（父はこのようにして）手だてを講ずることによって、その子に近づくことができました。そして後からまた、こう言いました。
『おい、おまえさん、おまえはいつもここで働きなさい。よそに行ってはならないよ。おまえに給金を増してやろう。いろいろ必要な鉢やうつわ、米や麦粉、塩や酢などの類いは、心配しないで遠慮することはない。また、年老いた使用人がいる。必要ならば与えよう。安心するがよい。わしはおまえの父のようなものだ。心配することはない。なぜなら、わしは年老いているが、おまえは若い。おまえは働く時はつねづね、あざむいたり、怠けたり、怒ったり恨んだり、うらみ言をいったりしたことはない。すべておまえについては、他の働く人たちと同じように、このような悪いことをするとは、わしは見ない。今から後は、実の子のようにしよう。』

ただちに長者は、あらためてその子のために名前をつくり、「息子」と名づけました。その時、貧窮の子は、この処遇を喜びはしましたが、まだ自分はよそからやってきた身分の低い使用人だと思っておりました。このような事情から、(長者は)二十年の間、つねに汚物を掃除させました。その後は、(父子は)心がお互いに通じ、信じあって、出入りをはばかることはなくなりましたが、しかしその子のとどまっているところは、まだもとのところのままでありました。

世尊よ、ときに長者は病気となり、自分で死期がそう遠くないことを知って、貧窮の子にこう言いました。

『わしには、今たくさんの金や銀、珍しい宝があって、倉庫に満ちあふれている。それらのうちで多いとか少ないとか、取るべきところとか、与えるべきところとか、おまえはそれらについてすべてを知りなさい。わしの心はこのようなものだ。おまえは、わしのこのような心をわかってほしい。なぜなら、今、わしとおまえとは、異なるものではないからだ。気をくばり用心して、(財産を)失うことがないようにしなさい』と。

そこで、貧窮の子は、その命令をうけて、多くの物、金や銀、珍しい宝や、多くの倉庫や蔵をおさめ知りつくしましたが、それでもなお一度の食事さえ、願って取ろうとする心はありませんでした。しかも彼のとどまっている場所は、まだもとのところのままで、自分は下劣のものであるという思いを、まだぬぐいすてることができませんでした。それからまた、しばらくの時がたって、父は、子の心が次第に通じて安らかになってきて、大きな志しができあがり、自分からこれまでの心を賤(いや)しいと思うようになったのを知って、臨終の時に臨んで、その子に命じて親族や国王、大臣、王侯貴族、富

豪たちを集めさせたところ、みなすべて集まりました。そこで、父は自分からこう宣(の)べました。
『みなさん。お知りおき下さい。このものは私の子供です。私の実子です。何某という城から、私を捨てて逃げ、さすらい苦労して五十余年たちました。そのもとの名前は何某で、私の名前も何某です。昔、もとの城中で、心配しつつたずね求めておりました。ところが、ある時突然に、予期せずしてここで出会って、この子を得ました。このものは本当にわが子であります。私は本当にその父です。今、私が所有するすべての財物は、すべて私の子のものです。これまで出し入れしてきたものについては、子が知っております』と。
世尊よ、この時、貧窮の子は、父のこのことばを聞くと大いに喜んで、めったにない思いをして、このように考えました。
『私は、もともと心に願い求めるということがなかったのに、今、この宝の蔵は自然に私のところへやってきた』と。

《**遇向本国**》「遇」を「たまたま」と訓ずるよみ方があるが、心性院日遠は、仏の大悲にかかわるという意をもたせて「値遇」の義に解して、「あふ」とよむ。今は従来のこのよみに従って「あひ向ひぬ」とする。
《**出入息利**》金銭を出し入れして利息をもうけること。「息」は「ふやす」の意。《**婆羅門**》九一頁参照。
《**刹利**》刹帝利(せっていり)の略でインドの四姓のうちの第二階級、王侯、武士階級のこと。刹帝利は kṣatriya の音写。
《**居士**》在家の男子の意であるが、インド社会では商工業に従事する資産家階級(vaiśya)を指す。《**肆力**》「肆」は「尽くす」の意で、力をつくすこと。《**瓔珞**》貴人が用いる珠玉や貴金属をつらねた首や胸などにつける装身具をいう。《**咄、男子**》「咄」は「やあ」「おい」ほどの呼びかけの声。やあ、おまえさん、の

意。《伶俜辛苦》「伶俜」は、さまよい、おちぶれるさま。「辛苦」は苦しむの意。

世尊。大富長者。則是如來。我等皆似佛子。如來常說。我等爲子。世尊我等。以三苦故。於生死中。受諸熱惱。迷惑無知。樂著小法。今日世尊。令我等思惟。蠲除諸法。戲論之糞。我等於中。勤加精進。得至涅槃。一日之價。既得此已。心大歡喜。自以爲足。而(1)便自謂(1)。於佛法中。勤精進故。所得弘多。然世尊。先知我等。心著弊欲。樂於小法。便見縱捨。不爲分別。汝等當有。如來知見。寶藏之分。世尊以方便力。說如來智慧。我等從佛。得涅槃。一日之價。以爲大得。於此大乘。無有志求。我等又因。如來智慧。爲諸菩薩。開示演說。而自於此。無有志願。所以者何。佛知我等。心樂小法。以方便力。隨我等說。而我等不知。眞是佛子。今我等。方知。世尊。於佛智慧。無所悋惜。所以者何。我等昔來。眞是佛子。而但樂小法。若我等有。樂大之心。佛則爲我。說大乘法。(2)於此經中。唯說一乘。而昔於菩薩前。毀呰聲聞。樂小法者。然佛實以。大乘敎化。是故我等。說本無心。有所悕求。今法王大寶。自然而至。如佛子。所應得者。皆已得之。

(1)……(1)而便自謂＝便自謂言　(2)於＝今

世尊よ、大富長者は則ち是れ如来なり。我等は皆仏子に似たり。如来、常に、我等は為れ子なりと説きたまえり。世尊よ、我等三苦を以ての故に、生死の中に於いて諸の熱悩を受け、迷惑無知にして小法に楽著せり。今日、世尊は我等をして、思惟して、諸法戯論の糞を蠲除せしめたもう。我等、中に於いて、勤加精進して涅槃に至る一日の価を得たり。既に此れを得已って、心大いに歓喜して、自ら以て足れりと為して、便ち自ら

謂わく、

『仏法の中に於いて、勤めて精進するが故に、所得弘多なり』と。

然も世尊、先に我等が心、弊欲に著し、小法を楽うを知しめして、便ち縦し捨てられて、為に汝等、当に如来の知見、宝蔵の分有るべしと分別したまわず。世尊、方便力を以て、如来の智慧を説きたもうに、我等仏より涅槃一日の価を得て、以て大いに得たりと為して、此の大乗に於いて、志求有ること無かりき。我等、又如来の智慧に因って、諸の菩薩の為に開示演説せしかども、而も自ら此に於いて志願有ること無し。所以は何ん。仏、我等が心に小法を楽うを知しめして、方便力を以て我等に随って説きたもう。而も我等、真に是れ仏子なりと知らず。今、我等方に知んぬ。世尊は仏の智慧に於いて、悋惜したもう所無しと。所以は何ん。我等、昔より来、真に是れ仏子なれども、而も但小法を楽う。若し我等、大を楽うの心有らば、仏即ち我が為に大乗の法を説きたまわん。此の経の中に於いて、唯一乗を説きたもう。而も昔、菩薩の前に於いて、声聞の小法を楽う者を毀呰したまえども、然も仏、実には大乗を以て教化したまえり。是の故に、我等説く、『本心に悕求する所有ること無かりしかども、今、法王の大宝、自然にして至れり、仏子の応に得べき所の如き者は、皆已に之を得たり』」と。

〔訳〕世尊よ、大いに富める長者とは、とりもなおさず如来のことであります。わたくしたちはすべて仏の子のようなものであります。世尊よ、如来は、つねに、わたくしたちは（如来の）子であると説いてこられました。世尊よ、わたくしたちは、三種の苦のために、生死輪廻のなかにおいて、さまざまな熱い苦悩をうけ、迷い惑って智慧がなく、つまらない法をねがい執着しておりました。そこで、世尊は、わたくしたちによく考えさせ、世のすべての事象についての誤った考えという汚物を除き去

らせました。わたくしたちは、そのような中にあって、つとめはげんで涅槃に到達するという一日分の給金（にあたるもの）を得ました。これを得たのちは大いに喜んで、自分でこれで充分と満足して、『仏の教えの法の中に身をおき、つとめはげんだので、その得たものは広く多い』と、こう考えました。しかも、世尊は、わたくしたちの心が、つまらぬ欲望に執着し、劣った法を願うことをつとにご承知になっていて、そのまま捨ておかれて、『汝たちには、如来の真理をみきわめさとる智慧と宝の蔵とのもちまえが必ずあるであろう』というはからいを示されなかったのです。世尊は、教えの手だての力によって、如来の智慧を説かれましたのに、わたくしたちは、仏から涅槃という一日分の給金を手にして、そのことによって大いに得たと思いこんで、この大乗に対して、それを希求するということがありませんでした。また、わたくしたちは、如来の智慧にもとづいて、多くの菩薩たちのために教え示し説き述べはしましたが、しかしみずからは如来の智慧を望み願うということをしませんでした。それはなぜかといいますと、仏は、わたくしたちが劣った法を心に願うのをおわかりになっていて、教えの手だての力によって、そのわたくしたちに応じて（小乗を）お説きになったのに、それでもわたくしたちは、真に仏の子であるということを知らなかったからなのでありますす。今こそわたくしたちは知りました。世尊は、仏の智慧においては、ものおしみされることはないということを。そのわけは、わたくしたちは、昔からずっと、真実、仏の子であったのですが、しかし、ただ劣った法のみを願っておりました。もし、わたくしたちがすぐれた法を願う心があったならば、仏はわたくしたちのために、大乗の法をお説きになっていたのでしょうから。

（しかるに今や、世尊は）この経の中には、ただ一つの教えの乗りもののみを説かれました。そして

昔は、菩薩の前で、劣った法を願う声聞のものをそしられましたが、それでも実際には、大乗によって教化されたのです。それゆえ、わたくしたちはこのように説くのです。『もともとは、心に希求するということがありませんでしたけれども、今、法王の大きな宝が、ひとりでに手に入りました。仏の子が当然得るべきものは、すでにすべて手に入れました』と。

《三苦》 (1)苦苦（くく）（好ましくない条件によって受ける苦しみ）(2)壊苦（えく）（好ましいものが壊れることによって感ずる苦しみ）(3)行苦（ぎょうく）（世の有為転変を見て感じる苦しみ）の三種類の苦しみをいう。**《生死》** 生まれかわり死にかわりすること、すなわち輪廻の生存のこと。**《諸法戯論》** 諸法とは、この現象界の一切の事物をいう。戯論は、道理分別を欠いた無益な論のこと。**《蠲除》** 除き去ること。「蠲」も「除」も同義の語。**《勤加精進》** 一層勤めて、精進すること。**《一日之価》** 二乗の人が二乗の修行をし、小乗の涅槃を得たのを、傭人が一日の労役の報酬として一日分の給料を得るのにたとえた。**《如来知見》** 仏知見に同じ。（一三七頁、二四二頁参照）**《宝蔵之分》** 宝の庫のもち分、わけまえ。宝の庫とは、仏のもつすべての徳性をたとえたもので、このわけまえにあずかるということは、仏になる可能性を有するということであって、「宝蔵の分」とはより具体的に、仏性を指すものと考えられる。『涅槃経』にいう「貧女の宝蔵」に同じ。**《毀呰》** 「毀」も「呰」もそしる、けなすの意。「呰」は普通「訾」に作る。

前段で譬え話を語りおえ（開譬）、この段では、その譬え話の内容の一々がそれぞれ何を譬えたものであるかということを示す（合譬）。譬え話の意図するところは、本章の中心テーマであるので、別に節をもうけて解説しよう。

長者窮子の喩

前章の譬喩品で、舎利弗に対する成仏の授記がなされたのをまのあたりにして、同じ声聞である摩訶迦葉をはじめとする四大声聞たちは大いに驚き喜んで、「無量の珍宝、求めざるに自から得たり」とその喜びを表明した。そして、自分たちが領解したその内容を、世尊に譬え話をもって申し上げたのが本章の内容である。この譬え話を「長者窮子の喩」といい、本経のなかに説かれる譬え話のなかでも、とくに有名なものである。以下にこの譬え話について考えてみよう。

話の骨子は、こうである。幼ない子供が父のもとから失踪し、諸国を流浪して五十余年、いまはすっかりおちぶれて、衣食を求めてたまたまある城市へやってきた。一方、その父はあちこち子供を探し求めているうちに、偶然に子供がやってくることになったその城市に住居をかまえ、財産をふやして今は大富豪となって住んでいた。その子が期せずして父である長者の邸宅のところへやって来た時、長者はこれを見て一目で、わが子だと気づいて、急いで使いの者につれてこさせようとした。しかし、子供は不意のことに驚き、捕えられて殺されてしまうと早合点して気絶してしまう。長者は、わが子が自分の父にも気づかず、心根もすっかりおちぶれたことを慮って、一旦わが子を放して、一計を案じ、ひそかに二人の者をつかわして、その子に近づかせ、自分の邸宅に連れてきてそこで働かせることにした。そうしておいて長者は、あれこれと方便をもうけてわが子に近づき、だんだんと慣れさせせることにした。そうして二十年がすぎ、子供は父である長者と心が通じあい、財産管理もまかされる

長者のもつ財産と自分とは無関係のものだと思っていたのである。またしばらくして、子供の心がようやくこれまでの自分の卑小さに気づいてそれを恥じ、広大な心を求めるようになったことを長者は知ると、自分の臨終の時にあたって、まわりのものすべてに、この者は自分の実の息子であると明かし、すべての財産を彼に付与すると宣言した。その子は驚きながらも、望んでいなかったものが突然に得られて、「今この宝蔵、自然にして至りぬ」と、大いに喜んだというのである。

以上、概略を述べたが、この話は父と息子という親子関係を下じきに、しかも財産を付与し、後をまかせるべき後継者としての息子が失踪したという状況設定で、男子の後継者を得るということがインド社会においては特に重要視されてきただけに、この譬え話が、一層卑近で身近なものとしてうけいれられたということがいえるであろう。

この話の要点は、次の三点にまとめられよう。それは、

(一)長者と窮子とが、もともと父と子の親子関係にあったこと。
(二)長者が方便をもって窮子を雇いいれて働かせ、そして徐々に回小向大せしめたこと。
(三)時機が熟した時に、実子であることを明かし、長者の全財産をその子に付与したこと。

という三点である。いまこれに沿ってみてみると、第一番目の、長者とその子がもともと親子であったということは、どういうことであろうか。長者である父は仏に、そしてその父を捨てて逃げた幼児は、直接的にはこの喩え話を述べている摩訶迦葉をはじめとする声聞達に擬せられていることはいうまでもない。しかし、もう少し考えてみると、父を捨て、諸国をへめぐって流浪する窮子は、いまだ

仏の誘引にも触れられず、したがって声聞にもなれない迷える凡夫である。とすれば、この窮子は、生死の世界に沈淪する迷える衆生としてのわれわれ自身の姿でもある。それ故、声聞も含めたわれわれすべての衆生が、もともと仏と親子関係にあるということになる。すなわち、われわれすべてが本来的に仏の子、仏子〈buddha-putra〉なのであるということ、これが経の言いたい点である。

このわれわれ衆生が仏子であるということ、このことは本章においてはじめて説かれたものではない。すでに先の方便品、譬喩品においてたびたび説かれてきた。方便品では、舎利弗はみずからを「仏口所生の子」と呼び、また偈頌において「仏子」のさまざまな修行が説かれ、仏をめざすものはすべてひとしく「仏子」であった。譬喩品では、冒頭に、やはり舎利弗がみずから「真にこれ仏子なり、仏の口より生じ、法化より生じて仏法の分を得たり」と述べ、仏は「長者火宅の喩」を説いて、「今この三界は皆これわが有なり。その中の衆生は悉くこれわが子なり」と説かれている。

このように、舎利弗や摩訶迦葉などの声聞も、菩薩たちも、そして迷える衆生も、すべてこれ仏子であると経は説く。仏子とは、将来仏となって、仏の財産である仏の智慧を継承するものである。それ故、すべての衆生が仏の子であるがゆえに、将来において仏となりうるというのである。そして、この仏と衆生との父子関係を強固に支えているものが、一仏乗、すなわち仏になるための一つの教えなのである。この教えのもとに、万人が仏をめざすのであって、声聞、縁覚の教え、菩薩の教えというような三乗は、衆生の機根に応じた仏の衆生教化の手だて、すなわち方便である。

声聞も含めたすべての衆生は、自分たちが本来、仏子であって仏になるものであるということに気付かない。それ故、仏は方便をもって教化にあたるのである。これが第二番目の「方便をもって近づ

き、徐々に回小向大せしめたこと」に相当する。
長者は、わが子を一計をもって雇い入れ、二十年間汚物の掃除をさせた。これが声聞の修行に相当する。声聞はこの修行によって声聞のさとりを得て阿羅漢となり、そのさとりの境地に安住して、「涅槃一日の価を得て、もって大いに得たりと為し」たのである。
そこで長者である仏は、さらに大乗に誘引しようとして、窮子（ぐうじ）と語らい相互に信頼を生じさせ、長者の財産をすべて宰領させるまでになったが、しかし窮子はすべてを任されながらもなおその心根は依然として「一飡（さん）をも悕取（けしゅ）せず」であった。このことは、声聞たちが、仏にかわって菩薩たちに大乗の教えを説きながら（これを二乗の転教という）、なお自らはそれを望もうとしなかったことに相当する。このように窮子は長者にかわって一切をとりしきるようになり、声聞たちは仏にかわって菩薩に仏の秘蔵の智慧を説くようになった。これはすべて仏の広大な慈悲にもとづく方便の力である。この段階に至った時、長者である仏は、いよいよ、窮子が実子であることを明かすのである。これが最後の、「実子であることを明かし、それによって長者のもつ一切の財産を付与したこと」である。
長者のもとで、徐々に広大なものをめざすようになった窮子は、長者の実子宣言に驚き喜ぶ。これは声聞が、仏の説法により、自分たちも本来仏子であったという自覚にめざめたことを喩えている。仏子であるという自覚は、みずからが仏の後継者であり、将来仏となるという自覚である。仏はこのような自覚をもつにいたった声聞に対して、成仏の予言を与えた。喜んだ声聞たちは、後の偈頌にあるように、「我ら、今、真にこれ声聞なり」「我ら、今、真に阿羅漢なり」と高らかに宣言する。ここで「声聞」「阿羅漢」というのは、従来貶（おと）しめられて使用されている意味でいっているのではない。

声聞」とは、本来、仏の声を聞く者、すなわち仏弟子の意味であった。阿羅漢も、自己の修行を完成し、世の供養をうけるのにふさわしい人（応供）という意味である。ここでは、その本来の意義において用いられたことばで、自分たちは真の仏弟子であり、真に供養をうけるにふさわしいものであるという、声聞たちの自負の心を表明しているものである。もともと自分たちが仏子であり、仏弟子であるということに覚醒すれば、その時もはや、二乗というものは存在しない。二乗も三乗も、おしなべて仏への道を歩むものたちだけが存在する。そして、仏の財産である仏の智慧をすべてのものが継承することになるのである。

以上が本章信解品の趣旨であり、そのいわんとすることは、第二章方便品より、第三章譬喩品、そして本章と、一貫して説かれてきたものであった。一乗真実三乗方便、二乗作仏といったこの経の中心テーマは、そのいずれもが、仏の衆生に対する広大な慈悲の心にもとづいて説かれているということに注意すべきであろう。すべての衆生が仏になるという教えは、一人をもすくい洩らさないという大乗仏教の真骨頂を示しているものであり、その原動力が、衆生はすべてわが子であると見る仏の慈悲の力なのである。

なお、中国天台は、本章のたとえを根拠とし、華厳時（使いを派遣して窮子を追わしめる）、阿含時（ひそかに二人の使者をつかわす）、方等時（相互に体信する）、般若時（窮子が長者の家事一切を領知する）、法華涅槃時（実子であることを明かしてすべてを付与する）、の五時判教を立てたことは有名である。ちなみに、本章の章名、「信解」は adhimukti の訳であり、もともと心のあり方、意向などの意である。教えを信じ了解してさらに向上しようとする心をあらわすことばである。

爾時摩訶迦葉。欲重宣此義。而說偈言。

我等今日　聞佛音教　歡喜踊躍　得未曾有　佛說聲聞　當得作佛
無上寶聚　不求自得　譬如童子　幼稚無識　捨父逃逝　遠到他土
周流諸國　五十餘年　其父憂念　四方推求　求之既疲　頓止一城
造立舍宅　五欲自娛　其家巨富　多諸金銀　車渠馬腦　眞珠琉[1]璃
象馬牛羊　輦輿車乘　田業僮僕　人民衆多　出入息利　乃遍他國
商估賈人　無處不有　千萬億衆　圍繞恭敬　常爲王者　之所愛念
群臣豪族　皆共宗重　以諸緣故　往來者衆　豪富如是　有大力勢
而年朽邁　益憂念子　夙夜惟念　死時將至　癡子捨我　五十餘年
庫藏諸物　當如之何　爾時窮子　求索衣食　從邑至邑　從國至國
或有所得　或無所得　飢餓羸瘦　體生瘡癬　漸次經歷　到父住城
傭賃展轉　遂至父舍　爾時長者　於其門內　施大寶帳　處師子座
眷屬圍繞　諸人侍衞　或有計算　金銀寶物　出內財產　注記券疏
窮子見父　豪貴尊嚴　謂是國王　若是王等　驚怖自怪　何故至此
覆自念言　我若久住　或見逼迫　強驅使作　思惟是已　馳走而去
借問貧里　欲往傭作　長者是時　在師子座　遙見其子　默而識之
卽勅使者　追捉將來　窮子驚喚　迷悶躄[2]地　是人執我　必當見殺

何用衣食　使我至此　長者知子　愚癡狹劣　不信我言　不信是父
即以方便　更遣餘人　眇目矬(3)陋　無威德者　汝可語之　云當相雇
除諸糞穢　倍與汝價　窮子聞之　歡喜隨來　爲除糞穢　淨諸房舍
長者於牖　常見其子　念子愚劣　樂爲鄙事　於是長者　著弊垢衣
執除糞器　往到子所　方便附近　語令勤作　既益汝價　并塗足油
飲食充足　薦席厚煖(4)　如是苦言　汝當勤作　又以軟(5)語　若如我子
長者有智　漸令入出　經二十年　執作家事　示其金銀　眞珠頗梨
諸物出入　皆使令知　猶處門外　止宿草庵　自念貧事　我無此物
父知子心　漸已廣(6)大　欲與財物　即聚親族　國王大臣　剎利居士
於此大衆　說是我子　捨我他行　經五十歲　自見子來　已二十年
昔於某城　而失是子　周行求索　遂來至此　凡我所有　舍宅人民
悉以付之　恣其所用　子念昔貧　志意下劣　今於父所　大獲珍寶
并及舍宅　一切財物　甚大歡喜　得未曾有

(1)琉＝瑠　(2)躄＝躃　高麗蔵も同じ。(3)矬＝痤　(4)煖＝暖　(5)軟＝輭　(6)廣＝曠

爾の時に摩訶迦葉、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

「我等、今日　仏の音教を聞いて　歓喜踊躍して　未曾有なることを得たり。
仏、声聞　当に作仏することを得べしと説きたまえば　無上の宝聚　求めざるに自ら得たり。
譬えば、童子あるがごとし　幼稚無識にして　父を捨てて逃逝して　遠く他土に到りぬ。

諸国に周流すること　五十余年　其の父、憂念して　四方に推ね求む。
之を求むるに既に疲れて　一城に頓止す。舎宅を造立して　五欲に自ら娯しむ。
其の家巨いに富みて　諸の金銀　車𤥭馬脳　真珠琉璃多く　象・馬・牛・羊　輦輿・車乗
田業僮僕　人民衆多なり。出入息利すること　乃ち他国に遍し。商估、賈人　処として有らざること
無し。

千万億の衆　囲繞し恭敬し　常に王者に　愛念せらるることを為
群臣豪族　皆共に宗重し　諸の縁を以ての故に　往来する者衆し。
豪富なること是の如くにして　大力勢有り。而も年朽邁して　益 子を憂念す。
夙夜に惟念すらく『死の時将に至らんとす　癡子、我を捨てて　五十余年　庫蔵の諸物　当に之を
如何すべき』と。
爾の時に、窮子　衣食を求索して　邑より邑に至り　国より国に至る。
或は得る所有り　或は得る所無し。飢餓羸痩して　体に瘡癬を生ぜり。
漸次に経歴して　父の住せる城に到りぬ。傭賃展転して　遂に父の舎に至る。
爾の時に、長者　其の門内に於いて　大宝帳を施して　師子の座に処し　眷属囲繞し　諸人侍衛せり。
或は金銀宝物を　計算し　財産を出内し　注記券疏する有り。
窮子、父の　豪貴尊厳なるを見て　謂わく『是れ国王か　若しくは是れ王と等しきか』と。
驚怖して自ら怪む　何が故ぞ此に至れる。覆かに自ら念言すらく『我若し久しく住せば　或は逼迫
せられ　強いて駆って作さしめん』と。
是れを思惟し已って　馳走して去りぬ。貧里に借問して　往いて傭作せんと欲す。

長者、是の時　師子の座に在って　遙かに其の子を見て　黙して之を識る。　即ち使者に勅して　追い捉え将いて来らしむ。
窮子、驚き喚い　迷悶して地に躄る。『是の人、我を執う　必ず当に殺さるべし　何ぞ衣食を用って我をして此に至らしむる』と。
長者、子の　愚癡狭劣にして　我が言を信ぜず　是れ父なりと信ぜざるを知って
即ち方便を以て　更に余人の　眇目矬陋にして　威徳なき者を遣わす。
『汝、之に語って云うべし　当に相雇うべし。　諸の糞穢を除え　倍して汝に価を与えん』と。
窮子、之を聞いて　歓喜し随い来りて　為に糞穢を除い　諸の房舎を浄む。
長者、牖より　常に其の子を見て　子の愚劣にして　楽って鄙事を為すを念う。
於是に長者　弊垢の衣を著　除糞の器を執って　子の所に往到し　方便して附近き　語って勤作せしむ。
『既に汝が価と　並びに塗足の油とを益し、　飲食充足し　薦席厚煖ならしめん』と。
是の如く苦言すらく　『汝当に勤作すべし』と。　又以て軟語すらく　『若、我が子の如くせん』と。
長者、智有って　漸く入出せしむ。　二十年を経て、家事を執作せしめ
其に金・銀　真珠・頗梨　諸物の出入を示して　皆知らしむれども
猶、門外に処し　草庵に止宿して　自ら貧事を念う　『我に此の物無し』と。
父、子の心　漸く已に広大なるを知って　財物を与えんと欲して　即ち親族
国王・大臣　刹利・居士を聚めて　此の大衆に於いて　説く『是れ我が子なり。
我を捨てて他行して　五十歳を経たり。　子を見てより来　已に二十年

昔、某の城に於いて　是の子を失いき。　周行し求索して　遂に此に来至せり。
凡そ我が所有の　舎宅人民　悉く以て之に付す　其の所用を　恣にすべし』と。
子の念わく『昔は貧しくして　志意下劣なりき。　今は父の所に於いて　大いに珍宝　並及に舎宅　一切の財物を獲たり』と。
甚だ大いに歓喜して　未曾有なることを得たり。

〔訳〕その時、摩訶迦葉は、重ねて以上の意義を宣べようとして、詩を説いて言った。

「わたくしたちは、今日、仏の教えの声を聞き、　喜び、こおどりして、今までにないものを得た。(1)

仏は、声聞も必ず仏になることができると説かれた、それによって、　このうえない宝のあつまりが、求めないのに自然と手に入った。(2)

たとえば、ここに子供がいたとしよう。幼くて物事を知りわけられずに、　父をすてて逃げ去り、遠く他国に行ってしまった。(3)

諸国をさすらいめぐること、五十余年、　その父は、かなしみ心にかけて、四方にたずね求めた。(4)

彼を求めるのに疲れてしまい、ある城にとどまった。　そこで邸宅を建てて、五官の欲するままにたのしんだ。(5)

その家は、大いに富んで、多くの金や銀、　硨磲・碼碯・真珠・琉璃が多くあり、　象・馬・牛

・羊・輿・車、(6)田作り衆、下男たちの人々が多くおり、金銭を貸して利息をもうけることが、他国にまであまねく、商人や買物客たちが、いたるところにいた。千万億のおおくの人々が、とり囲み、うやまって、つねに王の寵愛を得ていた。(7)さまざまな縁で、やってくる人々が多くいた。(8)なみいる臣下や豪族たちも、みなともに尊敬し、このように富豪であって、大きな勢力を有していた。しかし、年老い衰えるにつれ、ますます子を案じ気にかけていた。(9)朝早くから夜おそくまで、次のように思った、『私の死期も近づいた。おろかなわが子は、私を捨ててから五十余年になる。倉庫や庫のさまざまなものを、一体これをどうしたらよかろうか』と。(10)
その時、貧窮の子は、衣服、食べ物を求めて、村から村へ、国から国へと放浪していた。(11)あるときは得るものがあり、またあるときは何も得られないこともあった。飢えて痩せつかれ、身体にできものや、たむしができていた。(12)次から次へと経めぐって、父の住んでいる城に到った。賃稼ぎをしながら転々として、ついに父の屋敷にやってきた。(13)
その時、長者は、その門の内にあって、大きな宝玉を散りばめた帳をめぐらして、獅子皮を敷いた座に坐り、とりまきの者たちがとりかこみ、多くの人がそばを守っていた。(14)

ある人は金や銀、宝物を勘定し、財産を出し入れし、書付を書いている者もいた。(15)貧窮の子は、父の富貴でおごそかなさまを見て、『あの人は国王か、あるいは国王と同等のものか』と思った。

驚きおそれて、どうしてこんな所に来てしまったのだろうと、自分でも不思議に思った。(16)心ひそかに思っていうには、『もし、自分がここに長くとどまっていれば、あるいはおどされて、無理矢理はたらかされるかもしれない』と。こう考えると、かけ足で走り去った。貧巷(ひんこう)をおとずれてみて、そこで傭(やと)われてはたらこうと思った。(17)

長者はこの時、獅子の皮を敷いた座の上で、はるかにその子を見て、黙したままで、わが子であることをさとり、すぐさま使いに命じて、追いかけてとらえ、つれて来させた。(18)

貧窮の子は、驚いて叫び、気を失って地面に倒れた。『この人が自分をつかまえた。殺されるにちがいない。衣服や食物につられて、どうしてこんなところにやってきてしまったのだろう』と。(19)

長者は、子がおろかで心がせまく劣っていて、自分のいうことを信じず、父であるということも信じないのを知って、(20)

そこで、手だてを講じて、あらためて他の人の、すがめで背が低くみにくくて、威厳のないものを遣わして、(命じた。)(21)

『お前は彼に、こう言いなさい、〈お前を雇おう。さまざまな汚物を掃除しなさい。そうすればお前に二倍の給料を与えよう〉と。』(22)

貧窮の子は、これを聞いて、喜んでついて来て、　汚物を掃除し、多くの部屋建物をきれいにした。(23)

長者は窓から、いつもその子を見て、　子が愚かで劣っていて、このんで卑しい仕事をするのを心にかけていた。(24)

そこで、長者は、みすぼらしい汚れた着物をきて、　汚物を取り除く器を手にもって、子の所へ行き、　手だてを講じて近づき、次のように語らって精出してはたらかせた。(25)

『お前の給料と、足に塗る油とを増して、　飲みもの・食べものを充分にし、こも・むしろも厚く暖かくしてやろう』と。(26)

そして、このように苦言を述べた、『お前は精出してはたらけ』と。　また、一方ではやわらかくこう言った、『お前をわが子のようにしよう』と。(27)

長者は、智慧をはたらかせて、徐々に家に出入りさせた。　(そうして)二十年を経て、家の仕事をとりしきらせて、(28)

彼に金や銀、真珠や水晶などの　さまざまなものの出入りを示して、そのすべてを知らしめた。(29)

しかし、なお、門の外に住み、草ぶきの小屋に寝泊りして、　自分では貧しいと思っていた、『自分にこのようなものがあるのではない』と。(30)

父は、子の心がだんだんと広大になってきたのを知って、　財産を与えようと思い、(31)

そこで親族、国王、大臣、王侯貴族、資産家を集めて、　その大勢の集まりの中で、こう言った。

『これはわたしの子です。(32) さらに子を見つけてからこれまで、すでにわたしを捨てて、他国へ行き、五十年を経ました。この子を見失いました。めぐりあるいて、探二十年がたちました。昔、何某という城市で、し求めて、とうとうここにやって来たのです。(33) ことごとくこの子に与えます。彼がどのようにわたしの有するすべての、家屋敷や使用人を用いようと、すきなようにしてよろしい』と。(34) 今は父のところにあって、た子は思った、『昔は貧しく、こころのもちかたも下劣であった。くさんに、珍しい宝、それに家屋敷、すべての財物を得た』と。そして、とても喜び、いまだかつてない思いをした。(35)

《譬如……》「譬えば……の如し」と訓むように比況の意をあらわす複合語であるが、従来の訓読は、「如し」を譬え話の終りから返って訓むものと(平楽寺本など)、一句、二句など短い句で返って訓んでいるもの(心空本など。岩波本も)とがある。譬え話の文中に、「世尊よ」という呼びかけの語があったりするから、長々と譬えの終りから返るよりも短い句で返る方が適切であろう。前章の譬喩品の偈頌の「譬如長者……」、本章の長行の「譬若有人」も同様である。《音教》仏の音声によって説かれた教え。具体的には、前章の譬喩品の説法をさす。《夙夜(しゅくや)》朝早くから夜おそくまで。「夙」は「早朝」の意。《羸瘦(るいしゅ)》つかれやせる。「羸」は、「つかれる」の意。《注記券疏》証文などの書状に書き入れること。「券」は証拠書類、契約書、証文などの意。「疏」は「疏」の異体字で、箇条書きの書状の意。《眇目甤陋》「眇目」は斜視、すがめ、「甤」は、背が低い、「陋」は、賤しい、容貌がみにくい、などの意。《塗足油》裸足で歩くことの多い下層の人達が、

足の亀裂を防いだり、治療したりするために塗る油。

この段以下は、これまでの長行部分を再び偈頌によって説く（重頌という）部分で、いまこの段は長行の開譬の部分に相当する。その内容はほぼ長行と等しい。

佛亦如是　知我樂小　未曾說言　汝等作佛　而說我等　得諸無漏
成就小乘　聲聞弟子　佛勅我等　說最上道　修習此者　當得成佛
我承佛教　爲大菩薩　以諸因緣　種種譬喩　若干言辭　說無上道
諸佛子等　從我聞法　日夜思惟　精勤修習　是時諸佛　即授其記
汝於來世　當得作佛　一切諸佛　祕藏之法　但爲菩薩　演其實事
而不爲我　說斯眞要　如彼窮子　得近其父　雖知諸物　心不悕取
我等雖說　佛法寶藏　自無志願　亦復如是　我等內滅　自謂爲足
唯了此事　更無餘事　我等若聞　淨佛國土　教化衆生　都無欣樂
所以者何　一切諸法　皆悉空寂　無生無滅　無大無小　無漏無爲
如是思惟　不生喜樂　我等長夜　於佛智慧　無貪無著　無復志願
而自於法　謂是究竟　我等長夜　修習空法　得脫三界　苦惱之患
住最後身　有餘涅槃　佛所教化　得道不虛　則爲已得　報佛之恩
我等雖爲　諸佛子等　說菩薩法　以求佛道　而於是法　永無願樂

導師見捨　觀我心故　初不勸進　說有實利　如富長者　知子志劣
以方便力　柔伏其心　然後乃付　一切財物(1)　佛亦如是　現希有事
知樂小者　以方便力　調伏其心　乃敎大智　我等今日　得未曾有
非先所望　而今自得　如彼窮子　得無量寶　世尊我今　得道得果
於無漏法　得清淨眼　我等長夜　持佛淨戒　始於今日　得其果報
法王法中　久修梵行　今得無漏　無上大果　我等今者　眞是聲聞
以佛道聲　令一切聞　我等今者　眞阿羅漢　於諸世間　天人魔梵
普於其中　應受供養　世尊大恩　以希有事　憐愍敎化　利益我等
無量億劫　誰能報者　手足供給　頭頂禮敬　一切供養　皆不能報
若以頂戴　兩肩荷負　於恒沙劫　盡心恭敬　又以美饍　無量寶衣
及諸臥具　種種湯藥　牛頭栴檀　及諸珍寶　以起塔廟　寶衣布地
如斯等事　以用供養　於恒沙劫　亦不能報　諸佛希有　無量無邊
不可思議　大神通力　無漏無爲　諸法之王　能爲下劣　忍于斯事
取相凡夫　隨宜爲說　諸佛於法　得最自在　知諸衆生　種種欲樂
及其志力　隨所堪任　以無量喩　而爲說法　隨諸衆生　宿世善根
又知成熟　未成熟者　種種籌量　分別知已　於一乘道　隨宜說三

(1)物＝宝、ただし日相本は「物」

仏も亦是の如し　我が小を楽うを知しめして　未だ曾て説いて　汝等作仏すべしと言わず。
而も我等　諸の無漏を得て　小乗を成就する　声聞の弟子なりと説きたもう。
仏、我等に勅したまわく　『最上の道　此を修習する者は　当に成仏することを得べしと説け』と。
我、仏の教を承けて　大菩薩の為に　諸の因縁　種種の譬喩　若干の言辞を以て　無上道を説く。
諸の仏子等　我に従って法を聞き　日夜に思惟し　精勤修習す。　是の時に、諸仏　即ち其れに記を授けたもう　『汝、来世に於いて　当に作仏することを得べし』と。
一切の諸仏の　秘蔵の法をば　但菩薩の為に　其の実事を演べて　我が為に　斯の真要を説かざりき。
彼の窮子の　其の父に近づくことを得て　諸物を知ると雖も　心に悕取せざるが如く
我等、仏法の　宝蔵を説くと雖も　自ら志願無きこと　亦復、是の如し。
我等、内の滅を　自ら足ることを為たりと謂って　唯此の事を了って　更に余事無し。　我等、若し仏の国土を浄め　衆生を教化するを聞いては　都べて欣楽無かりき。
所以は何ん　一切の諸法は　皆悉く空寂にして　無生無滅　無大無小　無漏無為なり。　是の如く思惟して　喜楽を生ぜず。
我等、長夜に　仏の智慧に於いて　貪無く著無く　復、志願無し。　而も自ら法に於いて、是れ究竟なりと謂いき。
我等、長夜に　空法を修習して　三界の　苦悩の患を脱るることを得て　最後身　有余涅槃に住せり。
仏の教化したもう所は　得道虚しからず　則ち已に　仏の恩を報ずることを得たりと為す。
我等　諸の仏子等の為に　菩薩の法を説いて　以て仏道を求めしむと雖も　而も是の法に於いて永く願楽無かりき。

導師、捨てられたることは　我が心を観じたもうが故に　初め勧進して　実の利有りと説きたまわず。
富める長者の子の　志劣なるを知って　方便力を以て　其の心を柔伏して　然して後に乃し　一切の財物を付するが如く
仏も亦是の如し　希有の事を現じたもう　小を楽う者なりと知しめて　方便力を以て　其の心を調伏して　乃し大智を教えたもう。
我等、今日　未曾有なることを得たり。　先の所望に非ざるを　而も今　自ら得ること　彼の窮子の無量の宝を得るが如し。
世尊よ、我、今　道を得、果を得　無漏の法に於いて　清浄の眼を得たり。
我等、長夜に　仏の浄戒を持って　始めて今日に於いて　其の果報を得。
法王の法の中に　久しく梵行を修して　今、無漏　無上の大果を得。
我等、今者　真に是れ声聞なり。　仏道の声を以て　一切をして聞かしむべし。
我等、今者　真に阿羅漢なり。　諸の世間　天・人・魔・梵に於いて　普く其の中に於いて　応に供養を受くべし。
世尊は大恩まします　希有の事を以て　憐愍教化して　我等を利益したもう。　無量億劫にも　誰か能く報ずる者あらん。
手足をもって供給し　頭頂をもって礼敬し　一切をもって供養すとも　皆報ずること能わじ。　若しは以て頂戴し、両肩に荷負して　恒沙劫に於いて　心を尽くして恭敬し
又、美饍　無量の宝衣　及び諸の臥具　種種の湯薬を以てし　牛頭栴檀　及び諸の珍宝　以て塔廟を起て　宝衣を地に布き

斯の如き等の事を　以用て供養すること　恒沙劫に於いてすとも　亦報ずること能わじ。
諸仏は希有にして　無量無辺　不可思議の　大神通力まします。　無漏無為にして　諸法の王なり。
能く下劣の為に　斯の事を忍びたもう。
取相の凡夫に　宜しきに随って為に説きたもう。　諸仏は法に於いて　最自在を得たまえり。
諸の衆生の　種種の欲楽　及び其の志力を知しめして　堪任する所に随って　無量の喩を以て　而も為に法を説きたもう。
諸の衆生の　宿世の善根に随い　又、成熟　未成熟の者を知しめし　種種に籌量し　分別し知しめし已って　一乗の道に於いて　宜しきに随って三と説きたもう。

妙法蓮華経巻第二

〔訳〕

仏もまたこのとおりである。わたくしが卑小なものを望んでいることを存知せられて、これまでに、汝たちは仏となるであろうと説いて言われたことはなかった。そして、わたくしたちは、多くの煩悩の汚れをなくすことによって　小乗を完成する声聞という弟子であると説かれた。(36)

仏はわたくしたちに言われた、『最上の道、　これを修習するものは、必ず仏になることができるであろうと説け』と。(37)

わたくしは、その仏の仰せ（おお）をうけて、偉大な菩薩のために、さまざまないわれ、種々のたとえ、若干のことばでもって、この上ない道を説いた。(38)

多くの仏の子たちは、わたくしに従って法を聞き、昼も夜もこれを考え、つとめはげんで修習した。

この時に、多くの仏たちは、すぐさま彼らに次のように成仏の予言を授けられた。『汝は、来世において、必ず仏となることができるであろう』と。(39)

すべての仏たちの、秘密の教えの蔵の法を、ただ菩薩のためにだけ、その真実のことがらをのべて、自分自身のためには、この真実精要の理を説かなかった。

それはあたかも、あの貧窮の子が、その父に近づくことができ、多くの物を知ったにもかかわらず、心にそれらを望もうとしなかったようなものであり、(40)

わたくしたちも、また、そのように仏の法の、宝の蔵を説きながらも自分みずからはそれを望み願うということがなかった。(41)

わたくしたちは、（心の）内の煩悩を滅することができたことで、これで満足できたと思い、ただこのことのみをさとって、さらにそれ以上のことはなかった。わたくしたちは、仏の国土を浄め、衆生を教化するということを聞いても、全く喜ぶことはなかった。(42)

それはなぜか、すべての存在は、みな実体がなくて空であり、生ずることも滅することもない、大きいということもなく、小さいということもなく、煩悩の汚れもなく、現象を超えている。

このように考えていたので、喜びねがう心を生じるということがなかったのである。(43)

わたくしたちは、長いあいだ、仏の智慧を、貪るように求めることなく、執着することなく、

またそれを願うこともなかった。しかも、自分で、この法が究極のものであると思っていた。(44)
わたくしたちは、長いあいだ、「空（くう）」の教えを修習して、三界の苦悩からのがれることができ、この身体のみを残す涅槃（ねはん）にとどまっていた。仏のわたくしたちに対する教化はむなしくおわらず、（わたくしたちは）さとりを得て、それでもって、わたくしたちはすでに仏の恩に報いることができたと思っていた。(45)
わたくしたちは、多くの仏の子たちに、菩薩の教えを説き、仏道を求めさせたけれども、しかも（自分たちでは）、この教えを、永く願い望むということがなかった。(46)
導師が、わたくしたちを捨ておかれたのは、わたくしの心を観察されたからであり、はじめに勧めて、本当の利益があるとは説かれなかった。(47)
それは、富裕な長者が、子の志しの下劣であることを知って、教えの手だての力によって、その心を柔軟にして、そうした後にはじめて、すべての財物を付与したごとくであり、(48)
仏もまたそのように、きわめてまれなことを現わされた。卑小な法を願う者であると察知されて、教化の手段の力によって、その心を調（ととの）えて、そこではじめて偉大な智慧を教えられたのである。(49)
わたくしたちは今日、いまだかつてないことを得た。これまで望みもしなかったものを、今、自然に得たことは、ちょうど、あの貧窮の子が、無量の宝を得たようなものである。
世尊よ、わたくしは今、仏の道を体得し、その果報を得た、煩悩の汚れのない存在を見る、清浄な眼を得た。(50)

わたくしたちは長きにわたり、仏の浄らかな戒を守ってきて、はじめて、今日、その果報を得た。(51)

法の王である仏の教えの中で、長いあいだ清浄な戒行を修してきたが、今、煩悩の汚れのない、この上ない大きな果報を得たのである。(52)

わたくしたちは、今、真の声聞である。仏の道を説く音声を、すべてのものに聞かせよう。(53)

わたくしたちは、今、本当の阿羅漢である。多くの世間の、神々や、人間や、悪魔、ブラフマンなどの、広くそれらの中にあって、彼らから供養をうけるはずである。(54)

世尊には大きな恩があられて、きわめてまれなことを手だてとして、わたくしたちをあわれみ教化し、利益を与えられた。無量の億劫という長い間をもってしても、一体だれがこの恩に報いることができようか。(55)

手足をつかってそなえものをささげ、頭の頂きを地につけて礼拝し、すべてのものを供養したとしても、それでもすべてその恩に報いることはできない。あるいはおしいただいて、両肩にお乗せして、ガンジス河の砂の数にも等しい劫の長きにわたって、心をつくして敬い、(56)

また、美味な食膳、無量の立派な衣服、それにさまざまな寝具、種々の薬を供養し、牛頭山（ごずさん）産の栴檀（せんだん）、いろいろな珍しい宝、それらによって塔廟を建て、立派な布地を地に布（し）いたりして、(57)

そのようなことによって供養すること、ガンジス河の砂の数ほど多い劫のあいだであったとしても、それでもなお報いることができない。(58)

多くの仏は、きわめてまれであり、はかりしれず、無辺際であり、思いも及ばない、偉大な神通力がある。煩悩の汚れがなく、現象を超えた存在であって、多くの法の王である。そしてひくく劣ったもののために、（導く）ことをよく忍耐されるのである。(59)この世の事象にとらわれている凡夫に、それぞれに応じて教えを説かれる。多くの仏は、その教えにおいて、最も自由自在であられる。(60)多くの衆生の、種々さまざまな意欲願望と、およびその意力とを察知されて、それぞれの耐えうるところに応じて、数限りない喩えによって、法をお説きになる。(61)また（教えをうける能力が）完成しているもの、未完成であるものを知り分けられ、種々に思いはかり、分別し、存知せられて、一つの教えの乗りものを、それぞれに応じて三つの乗りものとして説かれたのである。(62)

《無漏》漏（煩悩の汚れ）のない状態。四三頁の語注「諸漏」を参照。**《仏子》**第二章方便品の語注（一五九頁）参照。**《内滅》**心の内にある煩悩を滅すること。**《一切諸法　皆悉空寂　無生無滅　無大無小　無漏無為》**この五句は、煩悩を断尽して解脱し、現象界を超越した悟りの世界をあらわす。いまの場合は、声聞の悟りの世界を示す。すべての現象界の存在は、その実体は空であり、本来生滅変化を超えて静まりかえっていて、大小長短といった相対差別もなく、すべて平等であり、煩悩の汚れがなく、この世の有為転変を離れた状態であるという意。「無為」（asaṃskṛta）は、因果関係によってつくられたものでないもの、すなわち、生滅変化をはなれた絶対的なものをさす。「有為」の対語。**《長夜》**「じょうや」とも読む。本来長いあいだという意で、凡夫が無明に迷わされてめざめない長い眠りを夜にたとえていう。**《空法》**「空」の教え。現

象界の存在には固定的実体というものは存在せず、その本性は空であると観ずるおしえ。**《最後身》**この世における最後の身体という意味。煩悩を断じ尽せば、解脱涅槃に至り、生死輪廻から脱出することができる。したがって現在ある身体が滅した後には再びこの世に生まれるということがない。それ故、この現在の身体がこの世における最後の肉体ということになる。**《有余涅槃》**「無余涅槃」の対。心はあらゆる束縛から脱して解脱しているが、まだ肉体を残している涅槃のこと。「無余涅槃」(九二頁、一七二頁)を参照。**《梵行》**brahma-carya「梵」は清らかなという意。戒律をたもち、婬欲を断ずる修行。**《天人魔梵》**天界の神々、人間、悪魔、ブラフマン、の意。「天」という漢訳語は、天界という物理的な場所か、あるいはそこに住む神々という二様の意味をあらわすので注意を要する。「梵」(brahman)は、本来宇宙の最高原理を意味したが、後に梵天として人格神となり、仏教にとり入れられて仏教の守護神となった。**《牛頭栴檀》**その香りが麝香に似た香木。山の峰の形状が牛の頭に似たところに産する香木。gośīrṣa-candana.

この段は、長行の合譬に相当する部分である。内容は前段と同じく、長行部分とほぼ等しいが、偈頌の方がやや詳しく説かれている。ことに最後部分の「世尊は大恩まします」以下の仏の大恩を讃嘆する部分は長行にはなくて、偈頌だけのものである。その内容は、仏の恩は極めて広大であり、無量億劫の長きにわたって身心ともにささげ供養しても、いまだなおその恩に報いることはできないと説き、仏の説法によって、真に仏子であるとめざめた声聞たちの喜びの大きさと、仏の徳の広大さとを讃嘆している。本章の最後を飾る偈頌として、まことにふさわしいものである。以上で、本章をおわり、科文でいえば、譬説周の中の領解段をおわる。

妙法蓮華經卷第三*

後秦龜茲國三藏法師*
鳩摩羅什奉　詔訳

藥草喩品第五*

爾時世尊。告摩訶迦葉。及諸大弟子。善哉善哉。迦葉。善說如來。眞實功德。誠如所言。如來復有。無量無邊。阿僧祇功德。汝等若於。無量億劫。說不能盡。迦葉當知。如來是諸法之王。若有所說。皆不虛也。於一切法。以智方便。而演說之。其所說法。皆悉到於。一切智地。如來觀知。一切諸法。之所歸趣。亦知一切衆生。深心所行。通達無礙。又於諸法。究盡明了。示諸衆生。一切智慧。迦葉。譬如三千大千世界。山川谿谷土地。所生卉木叢林。及諸藥草。種類若干。名色各異。密雲彌布。遍覆三千大千世界。一時等澍。其澤普洽。卉木叢林。及諸藥草。小根小莖。小枝小葉。中根中莖。中枝中葉。大根大莖。大枝大葉。諸樹大小。隨上中下。各有所受。一雲所雨。稱其種性。而得生長。華菓(1)敷實。雖一地所生。一雨所潤。而諸草木。各有差別。迦葉當知。如來亦復如是。出現於世。如大雲起。以大音聲。普遍世界。天。人。阿修羅。如彼大雲。遍覆三千大千國土。於大衆中。而唱是言。我是如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。未度者令度。未解者令

解。未安者令安。未涅槃者。令得涅槃。今世後世。如實知之。我是一切知者。一切見者。知道者。開道者。說道者。汝等天人。阿修羅衆。皆應到此。爲聽法故。爾時無數。千萬億種衆生。來至佛所。而聽法。如來于時。觀是衆生。諸根利鈍。精進懈怠。隨其所堪。而爲說法。種種無量。皆令歡喜。快得善利。是諸衆生。聞是法已。現世安隱(2)。後生善處。以道受樂。亦得聞法。既聞法已。離諸障礙。於諸法中。任力所能。漸得入道。如彼大雲。雨於一切。卉木叢林。及諸藥草。如其種性。具足蒙潤。各得生長。如來說法。一相一味。所謂解脫相。離相滅相。究竟至於。一切種智。其有衆生。聞如來法。若持讀誦。如說修行。所得功德。不自覺知。所以者何。唯有如來。知此衆生。種相體性。念何事。思何事。修何事。云何念。云何思。云何修。以何法念。以何法思。以何法修。以何法。得何法。衆生住於。種種之地。唯有如來。如實見之。明了無礙。如彼卉木叢林。諸藥草等。而不自知。上中下性。如來知是。一相一味之法。所謂解脫相。離相滅相。究竟涅槃。常寂滅相。終歸於空。佛知是已。觀衆生心欲。而將護之。是故不卽。爲說一切種智。汝等迦葉。甚爲希有。能知如來。隨宜說法。能信能受。所以者何。諸佛世尊。隨宜說法。難解難知。

(1)菓＝果　(2)隱＝穩

爾の時に世尊、摩訶迦葉、及び諸の大弟子に告げたまわく、

「善い哉、善い哉、迦葉よ、善く如来真実の功徳を説けり。誠に所言の如し。如来、復、無量無辺阿僧祇の功徳有り。汝等、若し無量億劫に於いて説くとも、尽くすこと能わじ。

迦葉よ、当に知るべし。如来は是れ、諸法の王なり。若し所説有るは、皆虚しからず。一切の法に於いて、智の方便を以て之を演説す。其の所説の法は、皆悉く一切智地に到らしむ。如来は、一切諸法の帰趣する所を

観知し、亦、一切衆生の深心の所行を知って、通達無礙なり。又、諸法に於いて、究尽明了にして、諸の衆生に、一切の智慧を示す。

迦葉よ、譬えば、三千大千世界の山川、谿谷、土地に生いたる所の卉木、叢林及び諸の薬草、種類若干にして、名色各異なり、密雲弥布して、遍く三千大千世界に覆い、一時に等しく澍ぐ。其の沢、普く卉木、叢林、及び諸の薬草の小根、小茎、小枝、小葉、中根、中茎、中枝、中葉、大根、大茎、大枝、大葉に洽う。諸樹の大小、上中下に随って、各受くる所有り。一雲の雨らす所、其の種性に称うて、而も生長することを得て、華菓敷け実なる。一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木、各差別有るが如し。

迦葉よ、当に知るべし。如来も、亦復、是の如し。世に出現すること、大雲の起こるが如く、大音声を以て、普く世界の天、人、阿修羅に遍せること、彼の大雲の、遍く三千大千国土に覆うが如し。大衆の中に於いて、是の言を唱う、

『我は是れ如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊なり。未だ度せざる者は度せしめ、未だ解せざる者は解せしめ、未だ安ぜざる者は安ぜしめ、未だ涅槃せざる者は涅槃を得せしむ。今世・後世、実の如く之を知る。我は是れ一切知者、一切見者、知道者、開道者、説道者なり。汝等天・人・阿修羅衆よ、皆応に此に到るべし。法を聴かんが為の故に。』

爾の時に、無数千万億種の衆生、仏所に来至して法を聴く。

如来、時に是の衆生の諸根の利鈍、精進、懈怠を観じて、其の堪うる所に随って、為に法を説くこと種種無量にして、皆歓喜し、快く善利を得せしむ。是の諸の衆生、是の法を聞き已って、現世安隠にして、後に善処に生じ、道を以て楽を受け、亦、法を聞くことを得。既に法を聞き已って、諸の障礙を離れ、諸法の中に於いて、力の能うる所に任せて、漸く道に入ることを得。彼の大雲の、一切の卉木叢林、及び諸の薬草に雨るに、

其の種性の如く具足して潤を蒙り、各生長することを得るが如し。如来の説法は一相一味なり。所謂、解脱相、離相、滅相なり。究竟して、一切種智に至る。其れ衆生有って、如来の法を聞いて、若しは持ち、読誦し、説の如く修行するに、得る所の功徳、自ら覚知せず。所以は何ん。唯如来のみ有って、此の衆生の種、相、体、性、何の事を念じ、何の事を思し、何の事を修し、云何に念じ、云何に思し、云何に修し、何の法を以て念じ、何の法を以て思し、何の法を以て修し、何の法を以て何の法を得ということを知れり。衆生の種種の地に住せるを、唯如来のみ有って、実の如く之を見て明了無礙なり。彼の卉木叢林、諸の薬草等の、而も自ら上中下の性を知らざるが如し。如来は、是れ一相一味の法なりと知れり。所謂、解脱相、離相、滅相、究竟涅槃、常寂滅相にして、終に空に帰す。仏、是れを知り已れども、衆生の心欲を観じて之を将護す。是の故に、即ち為に一切種智を説かず。

汝等迦葉よ、甚だ為れ希有なり。能く如来の随宜の説法を知って、能く信じ能く受く。所以は何ん。諸仏世尊の随宜の説法は、解り難く知り難ければなり。」

〔訳〕その時に、世尊は、摩訶迦葉と多くの上座の弟子たちに告げられた。

「よろしい、よろしい。迦葉よ、よく如来の真実の功徳を説いた。汝のいうとおりである。しかし、如来には、はかりしれず無辺際の数えきれぬほどの功徳がある。汝たちが、たとい、はかりしれないほどの劫の長い間にわたって（その功徳を）説いたとしても、なお説き尽くすことはできないであろう。

迦葉よ、知るがよい。如来は、あらゆる教えの王であり、その説いたものはすべて真実である。すべての教えの法を、智慧にもとづいた教化の手だてによって説法するのである。その説かれた法は、

みなすべて、一切を知る智慧の基礎に到達させるものである。如来は、あらゆる教法が帰着するところを観察して知り、また、あらゆる衆生の奥深い心のはたらきを知って、それらに自由自在に精通している。また、多くの教法を究め尽して明らかにし、多くの衆生に、すべての智慧を示すのである。

迦葉よ、たとえば、三千大千世界の山や川、谿谷や地面に生えている草木、叢林や、さまざまな薬草の、その種類は幾種類もあり、名前や形もそれぞれ異なっている。そこへ厚い雲が空にみちわたり、三千大千世界をくまなく覆って、一時に一様に雨をふらす。そのしめり気は、ひろく草木、叢林やさまざまな薬草の小さな根・小さな茎・小さな枝・小さな葉、中ほどの根・中ほどの茎・中ほどの枝・中ほどの葉、大きな根・大きな茎・大きな枝・大きな葉をうるおす。さまざまな樹木の、その大きいのや、小さいのは、(性質の)上・中・下に応じて、それぞれそのしめり気を受けとるが、同一の雲がふらした雨によってでも、それぞれがその種類性質に応じて、生長し、花をひらかせ、実をつける。このように、同一の地に生えたもの、同一の雨が潤したものではあっても、さまざまな草木にはそれぞれに差異がある。このようなものである。

迦葉よ、知るがよい。如来もまた、これと同様である。(如来が)この世に出現することは、大きな雲が起こるようなものであり、大音声を、この世界の神々、人間、阿修羅の世界にまでくまなくゆきわたらせるのは、ちょうど、その大きな雲が三千大千世界の国土を覆うようなものであって、大勢の集まりの中で、次のようなことばを発するのである。すなわち、

『私は、如来であり、供養をうけるにふさわしい人、正しくあまねき智慧を具えた人、智と実践とが完全にそなわった人、悟りに到達した人、世間のすべてを知った人、最上の人、人々の調御者、神

神と人間との師、仏、世尊である。まだ（悟りの世界へ）渡らない者を渡らせ、まだ解脱していない者を解脱させ、まだ心の安らかでない者を安らかにさせ、まだ涅槃に至らない者に涅槃を得さしめる。この世についても未来の世についても、ありのままに知るのだ。私は、一切を知る者であり、一切を見る者である。（さとりへの）道を知る者であり、その道を開く者であり、その道を説く者である。汝たち、神々や人々、阿修羅たちよ、法を聞くために、みなここにやってくるがよい』と。

その時、無数千万億の種類の衆生たちは、仏のところにやってきて教えを聴聞する。

如来は、そこで、この衆生たちの能力の優劣、努力や怠りを観察して、そのたえることのできる段階に応じて、はかりしれないほど種々さまざまに法を説いて、すべてのものを歓喜させ、心安らかにすぐれた恩恵を獲得できるようにする。この多くの衆生たちは、この法を聞いた後は、この世において心安らかとなり、死後にはよい世界に生まれ、その境界によって楽を享受し、また法を聞くことができる。その法を聞きおわれば、多くの障げを離れて、さまざまな教法の中において、その能力に応じて、次第次第に仏道に入ることができるのだ。それはちょうど、大きな雲が、すべての草木、叢林、さまざまな薬草のうえに雨をふらす時、それらの種類性質に応じてそれぞれがその潤いをうけ、それぞれ生長することができるようなものである。

如来の説法は、一つのありよう、一つの味わいをもつものである。それは、（煩悩からの）解脱というありよう、（業の繋縛からの）離というありよう、（苦の）滅というありようであり、究極的には、すべてを知り尽くす仏の智慧に至るものである。

衆生が、如来の法を聞いて、それを保持し、読誦し、その説法のとおりに修行する場合でも、それ

によって得られた功徳は自分で自覚し知ることはできない。それはなぜであるかといえば、ただ如来だけが、この衆生の種類、ありよう、本質、本性を知っており、また、どのようなことを心に思い、どのようなことを考え、どのようなことを修行するかということ、どのように心に思い、どのように考え、どのように修行するかということ、どのような手だてによって心に思い、どのような手だてによって考え、どのような手だてによって修行し、どのような手だてによってどのような法を得るか、ということを知っているからである。衆生が、さまざまな場にとどまっているのを、ただ如来のみが、ありのままに見て、明らかに自在に知り尽しているのだ。それはちょうど、草木、叢林やさまざまな薬草が、みずからはおのれの上・中・下といった性質を知らないようなものであり、如来はそれが一つのありよう、一つの味であると知っているのである。それは、（煩悩からの）解脱というありよう、（業の繋縛からの）離というありよう、（苦の）滅というありよう、究極の涅槃、常に静まりかえっているありようであり、最終的には空に帰着するものである。仏はこれを知りおおせているが、衆生の心の意向を観察して、それを大事にするからこそ、すべてを知り尽す仏の智慧を説くことをしないのだ。

汝たち、迦葉よ、これは非常にまれなことなのだ。如来の、それぞれにふさわしく説かれた法を知って、それを信ずることができ、受けとることができるということは。なぜならば、多くの仏世尊の、それぞれにふさわしく説かれた法は、理解しがたく、知ることのむつかしいものだからである。」

《諸大弟子》摩訶迦葉などの四大声聞たちや、上座の声聞の弟子たちをいう。《諸法之王》多くの教法の王、

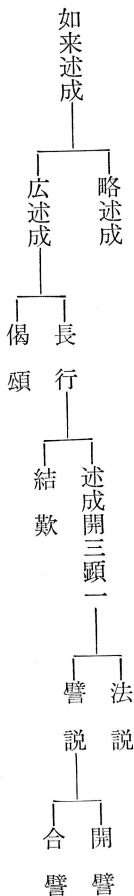
すなわち仏のこと。《**一切智地**》すべてのものを知りつくす智慧の基盤。一切智は仏の智慧のことで、地(bhūmi)は、そこから生ずる基盤のこと。すなわち、仏の智慧が生ずる基のことを指す。sarvajñabhūmiの訳。《**一切法**》すべての教法。天台の解釈によれば、一切法とは、人乗・天乗・声聞乗・縁覚乗・蔵教の菩薩乗・通教の菩薩乗・別教の菩薩乗の七方便であるとし、それぞれ順に、五戒・十善・四諦・十二因縁・事の六度・無生・如来蔵、の七種の教えをいうとする(『文句』巻七上)。《**一切諸法之所帰趣**》普通に一切諸法といえば、この現象界のあらゆる存在を意味する場合が多いが、ここではあらゆる教法の意。あらゆるすべての教法が、それぞれに有している意義にしたがって、その教法を修するものをそれぞれ異なった結果にみちびくこと。《**三千大千世界**》われわれの全宇宙ほどに相当する、広大な仏教の世界観を示すことば。『倶舎論』によれば、一世界とは、世界の果てを区切っている鉄囲山にかこまれた、須弥山を中心にして四大州や大海などを含んだ広大な空間と、太陽と月、それに色界の初禅までを上限とする天界とをあわせたものをいう。この一世界の千倍を小千世界、その小千世界の千倍を中千世界といい、さらにその中千世界を千倍したものを大千世界という。だから大千世界は一世界を十億集めたものということになる。この大千世界の大千のことを三千(千の三乗)ともいい、三千大千世界は、大千世界、すなわち一世界を十億あつめた世界を意味する。この三千大千世界が一仏の教化の及ぶ範囲とされる。trisāhasramahāsāhasra-lokadhātuの訳。《**名色**》名称と形態。《**天・人・阿修羅**》第一章の語注「六道」の項参照(七八頁)。《**如来……仏・世尊**》仏の十号。第二章の語注(八八—八九頁)参照。《**一切知者**》すべてのものを知る者の意で、仏をさす。《**一切見者**》すべてのものを見る者。仏のこと。《**知道者**》悟りの道を知る者。《**善処**》輪廻の六種の境界のうち、人界と天界とをいう。《**一相一味**》ただ一つの同じあり方、ただ一つの同じ味わい、ということで、仏の説法は本来、ただ一種のあり方で、その説く真理もただ一つであるということ。すなわち、二乗

の教え、三乗の教えといった差別的あり方は、教えを受ける側の機根の相違によったものであり、本来は仏になるためのただ一つの教え、一仏乗であるということであり、その説かれる真理もただ一つであるということ。また、一相は譬えの中の一地に、一味は一雨にそれぞれ対応し、教えを受ける側も本来は同一の地に生じたものであって、もともとみな仏子であり、そこへただ一つの教えの雨がふりそそぐのである。**《解脱相・離相・滅相》** 吉蔵はこの三つをそれぞれ惑・業・苦の三にあてはめて解釈し（『法華義疏』巻八）、天台は一実相によって解釈して、解脱相とは生死の相がなく、離相とは涅槃の相がなく、滅相とは相がないということもまたないということであって、ただ一実相のみあるから一相というとしている（『文句』巻七上）。**《一切種智》** 第二章の語注参照（一四八頁）。**《種・相・体・性》** 種類・様相・本質・性質のこと。ここでは上中下のそれぞれの草木にたとえられる三乗についていう。**《以何法得何法》** 境遇を異にしている三乗のそれぞれが、どのような手がかりによって、どのような法を体得するかということ。**《究竟涅槃、常寂滅相、終帰於空》** 仏の教法は、一相一味であり、究極的な涅槃をめざすものであって、常にさとりの静まりかえったあり方を示すものであり、最終的に空という現象界の差別対立を離れた状態に帰着するものであるということ。「空」は、現象界の存在はすべて縁起によって成り立っていて、固定的実体がないと達観するときにあらわになる世界で、この世の相対差別や固定的見解、あらゆるとらわれが除かれた状態で、大乗仏教がめざす境地である。原語は普通 śūnya であるが、梵本のこの部分の相当箇処は akāśa（虚空）となっており（p.125, 11*l*～p.126, 1*l*）、この羅什訳と意味あいが少し異っている。**《随宜説法》** 教えを受ける側にそれぞれふさわしいようになされる説法。すなわち、仏のたくみな方便によって、教えを受ける者に応じて説かれた法のことである。梵本では、saṃdhābhāṣita（ほのめかして語られたことば）、すなわち密意をこめたことばとなっており（p.125, *l*3.）、ことばの言外の意（＝秘説）という意味あいが強い。前注（一一〇、一九五―一九六

頁）参照。

釈尊は、前章信解品において、須菩提、摩訶迦葉、摩訶迦旃延、摩訶目犍連たちの四大声聞の領解（長者窮子の喩え）を聞かれた。そこで、本章の薬草喩品では、まず先の摩訶迦葉たちの領解に誤りがないことを印可して、さらに彼らの意を補うために薬草の喩えをもって説法された。その内容は、第二章方便品で明かされた三乗方便一乗真実の教えにほかならないが、本章では、方便と真実のこの二つの教えの関係について敷衍がなされている。この点については後にふれよう。

分科からいうと、本章は譬説周のなかの第三、述成にあたる。この述成は広略の二つに分けられ、略述成は本章の初めから五七字めまでの「汝等、若し無量億劫に於て説くとも尽すこと能わじ」までである。それ以下、本章のおわりまでが広述成である。広述成は長行と偈頌にわたるが、今ここで挙げた長行部分は、左図のように分けられる。

- 如来述成
  - 略述成
  - 広述成
    - 長行
      - 述成開三顕一
        - 法説
        - 譬説
          - 開譬
          - 合譬
      - 結歎
    - 偈頌

この図のうち、結歎というのは仏の讃歎の結びの文で、長行の最後の部分、「汝等迦葉よ、甚だ為れ希有なり。能く如来の随宜の説法を知りて、能く信じ能く受く。所以は何ん。諸仏世尊の随宜の説法は、解り難く知り難ければなり」をいう。開三顕一の旨を述成する部分を法説と譬説とに分ける。

このうち譬説が本章の章名となっている薬草の喩えを説いた部分である。
今は長行部分を一度に挙げたので、分科について少し詳しく触れたが、本章の内容については項をもうけて述べることにしよう。

三草二木　一雨普潤

本章は、摩訶迦葉らの四大声聞たちに対する釈尊の、譬喩を用いた説法である。この喩え話は薬草喩といわれるが、種々さまざまな地上の植物と、そのうえにふりそそぐ恵みの雨という自然現象を素材にしたもので、とくに薬草というのは、人々の生活にかかわることが多い薬草をもって全植物を代表せしめたものである。
その喩えはこうである。三千大千世界のいたるところ、山や川、谷や平地にはさまざまな草、木、薬草がはえている。そこに大雲がたれこめ一時に雨をふらせると、草木は大といわず小といわず、みな一様にその雨にうるおい、しかもおのおの持前の種類性質にしたがって生長し、花をつけ実を結ぶ。
さて、仏がこの世に出現するのも、この大雲がおこるようなものであり、大音声を出してあまねく全世界の衆生に仏の教えを布くこと、かの大雲が三千大千世界の国土をおおって雨をふらすようなものである。仏が法を説く時、仏は衆生の素質や能力をすべて知ろしめして、それぞれの衆生に最もふさわしい法を説く。それを聞いた衆生たちは、それぞれの素質や能力の分に応じて、おのおの異った領解を得て仏道に入るのである。それはちょうど、さまざまな植物が、大雲のふらした一様の雨に潤

って、その種類性質に応じてさまざまに生長するようなものである。仏の説法は、本来、一相一味である。それは、同一の解脱、同一の離欲、同一の涅槃であって、ついには仏智に至るものである。しかしながら、その説法をうける衆生たちはそのことを知らない。そして、自分達が何者であるかも、どのようなことをどのように思い、考え、修行するのかということをも知らない。それを知るのはただ仏のみなのだ。ちょうど、さまざまな植物が、自分たちの上中下といった性質を知らないでいるように。ただ仏だけが衆生たちのすべてを知りつくしており、彼らの意向を察して、むやみに仏智を説くことをしなかったのである、という。

以上の喩え話の意趣は、方便品、譬喩品、信解品と次第してくれば、ただちに明らかとなろう。第二章の方便品以来説かれてきた方便と真実というテーマが、ここでも新たな喩えによってくりかえされている。

しかし、同じ三乗方便一乗真実の趣旨を説くといっても、本章ではこれまでと少し視点が異って、方便の教えと真実の教えとの関係において、特に方便の教えについて視点が据えられて説かれていることに注意さるべきである。一雨に喩えられる仏の説法は、等しく一様に、あらゆる衆生にふりそそぐ。それは一相一味であり、本来的にすべてのものを仏智にむかわせるものである。しかし、その説法の受け手の側である衆生に、種々さまざまな差異がある。大きな樹は大量の雨を吸うが小さなものは少量しか吸収できないように、衆生の側の差異によって本来一相一味の教えも、種々さまざまなものにならざるを得ないのだ。仏が説法にあたって衆生の現実態を認識するとき、真実の教えは、どうしても方便の教えという形をとらざるを得ないのである。つまり、仏の、すべてのものを仏智にむか

わせようとする大慈悲が、随宜説法という、巧妙で、かつ現実的な方便という形をとってあらわされるわけである。これが二乗や三乗といったそれぞれに適する教えである。だから、方便の教えというものは、仏の慈悲のはたらきによって示されたものであると同時に、衆生にとっては、それはなくてはならない仏智への足がかりなのである。方便と真実という対比からすれば、方便はあくまで方便でしかないが、しかし、衆生にとっては、それは高みに登るために、実際に足をかけることのできる梯子なのである。これが方便の存在意義である。

これを衆生の側の現実という点からおしすすめてゆくと、経の一乗真実という意趣とは逆に、三乗真実という見方も可能になってくる。われわれ衆生からすると、実際にその足をかけることのできる、方便としての三乗の教えこそが、真実なのだということである。事実、われわれ衆生の側の現実認識から出発した唯識仏教はこの立場をとっている。

しかし、この法華経は、すべてのものを仏にするという大乗の高い理想を掲げつつ、その理想実現のために、方便の教えを足がかりとして、究極的に仏智にむかわせる努力をなす。そのあらわれが、真実教の開顕であり、方便品より説き来った三乗方便一乗真実の説法の真意なのである。

ところで、この薬草喩で、衆生にたとえられているさまざまな植物は、上草、中草、小草の三草と、大樹、小樹の二木という五種類に分けられている。この三草二木は衆生の資質による分類として、人・天・声聞・縁覚・菩薩の五乗を喩えたものとされるが、どれがどれに相当するかは古来異説がさまざまに分かれて一定していない。たとえば天台の解釈では、小草は人と天の両乗を、中草は声聞と縁覚の二乗を、そして上草以上を菩薩乗にあて、上草は六度の菩薩、小樹は通教の菩薩、大樹を別教の

菩薩としている（『文句』巻七上）。それに対し、三論の吉蔵（きちぞう）は、小草、中草は天台と同じであるが、上草以上の菩薩乗について、上草を地前の四十心、小樹を初地、大樹を七地の菩薩にあてているがごとくである。しかし、これらの五乗に分類された衆生たちのいずれもが、同一の地に生えた植物と同じように、本来みなすべてひとしく仏子であり、仏にむかうものであるというのが、この経の趣旨である。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

破有法王　出現世間　隨衆生欲　種種說法　如來尊重　智慧深遠
久默斯要　不務速說　有智若聞　則能信解　無智疑悔　則爲永失
是故迦葉　隨力爲說　以種種緣　令得正見　迦葉當知　譬如大雲
起於世間　遍覆一切　慧雲含潤　電光晃曜　雷聲遠震　令衆悅豫
日光掩蔽　地上清涼　靉靆垂布　如可承攬　其雨普等　四方俱下
流澍無量　率土充洽　山川險谷　幽邃所生　卉木藥草　大小諸樹
百穀苗稼　甘蔗蒲萄　雨之所潤　無不豐足　乾地普洽　藥木並茂
其雲所出　一味之水　草木叢林　隨分受潤　一切諸樹　上中下等
稱其大小　各得生長　根莖枝葉　華菓光色　一雨所及　皆得鮮澤
如其體相　性分大小　所潤是一　而各滋茂　佛亦如是　出現於世
譬如大雲　普覆一切　既出于世　爲諸衆生　分別演說　諸法之實

大聖世尊　於諸天人　一切衆中　而宣是言　我爲如來　兩足之尊
出于世間　猶如大雲　充潤一切　枯槁衆生　皆令離苦　得安隱①樂
世間之樂　及涅槃樂　諸天人衆　一心善聽　皆應到此　覲無上尊
我爲世尊　無能及者　安隱②衆生　故現於世　爲大衆說　甘露淨法
其法一味　解脫涅槃　以一妙音　演暢斯義　常爲大乘　而作因緣
我觀一切　普皆平等　無有彼此　愛憎之心　我無貪著　亦無限礙
恒爲一切　平等說法　如爲一人　衆多亦然　常演說法　曾無他事
去來坐立　終不疲厭　充足世間　如雨普潤　貴賤上下　持戒毀戒
威儀具足　及不具足　正見邪見　利根鈍根　等雨法雨　而無懈倦
一切衆生　聞我法者　隨力所受　住於諸地　或處人天　轉輪聖王
釋梵諸王　是小藥草　知無漏法　能得涅槃　起六神通　及得三明
獨處山林　常行禪定　得緣覺證　是中藥草　求世尊處　我當作佛
行精進定　是上藥草　又諸佛子　專心佛道　常行慈悲　自知作佛
決定無疑　是名小樹　安住神通　轉不退輪　度無量億　百千衆生
如是菩薩　名爲大樹　佛平等說　如一味雨　隨衆生性　所受不同
如彼草木　所稟各異　佛以此喩　方便開示　種種言辭　演說一法
於佛智慧　如海一渧③　我雨法雨　充滿世間　一味之法　隨力修行
如彼叢林　藥草諸樹　隨其大小　漸增茂好　諸佛之法　常以一味
令諸世間　普得具足　漸次修行　皆得道果　聲聞緣覺　處於山林

住最後身　聞法得果　是名藥草　各得增長　若諸菩薩　智慧堅固
了達三界　求最上乘　是名小樹　而得增長　復有住禪　得神通力
聞諸法空　心大歡喜　放無數光　度諸衆生　是名大樹　而得增長
如是迦葉　佛所説法　譬如大雲　以一味雨　潤於人華　各得成實
迦葉當知　以諸因緣　種種譬喩　開示佛道　是我方便　諸佛亦然
今爲汝等　説最實事　諸聲聞衆　皆非滅度　汝等所行　是菩薩道
漸漸修學　悉當成佛

(1)(2)隱＝穩　(3)渧＝滴

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「有を破する法王　世間に出現して　衆生の欲に随って　種種に法を説く。
如来は尊重にして　智慧深遠なり。　久しく斯の要を黙して　務いで速かに説かず。
智有るは若し聞いては　則ち能く信解し　智無きは疑悔して　則ち永く失う為し。
是の故に、迦葉よ　力に随って為に説いて　種種の縁を以て　正見を得せしむ。
迦葉よ、当に知るべし　譬えば、大雲の　世間に起こりて　遍く一切を覆うに
慧雲潤を含み　電光晃り曜き　雷声遠く震いて　衆をして悦予せしめ
日光掩い蔽して　地の上清涼に　靉靆垂布して　承攬すべきが如し。
其の雨、普等にして　四方倶に下り　流澍すること無量にして　率土充ち洽う。
山川・険谷の　幽邃に生いたる所の　卉木・薬草　大小の諸樹　百穀・苗稼　甘蔗・蒲萄
雨の潤す所　豊に足らざること無く　乾地普く洽い　薬木並びに茂り

其の雲より出ずる所の　一味の水に　草木・叢林　分に随って潤を受く。
一切の諸樹　上中下等しく　其の大小に称うて　各生長することを得、
根・茎・枝・葉　華・菓・光・色　一雨の及ぼす所　皆鮮沢することを得。
其の体相　性の大小に分れたるが如く　潤す所、是れ一なれども　而も各滋茂るが如し。
仏も亦是の如し　世に出現すること　譬えば大雲の　普く一切に覆うが如し。　既に世に出でぬれば
諸の衆生の為に　諸法の実を　分別し演説す。
大聖世尊は　諸の天・人　一切衆の中に於いて　而も是の言を宣ぶ。『我は為れ如来　両足の尊なり。
世間に出づること　猶大雲の如し』と。
一切の枯槁の　衆生を充潤して　皆苦を離れて　安隠の楽　世間の楽　及び涅槃の楽を得せしむ。
諸の天・人衆よ　一心に善く聴け。　皆、応に此に到って　無上尊を覲るべし。　我は為れ世尊なり
能く及ぶ者無し。　衆生を安隠ならしめんが故に　世に現ぜり。
大衆の為に　甘露の浄法を説く。　其の法一味にして　解脱・涅槃なり。
一の妙音を以て　斯の義を演暢す。　常に大乗の為に　而も因縁を作す。　我、一切を観ること　普く
皆平等にして　彼此　愛憎の心有ること無し。
我、貪著無く　亦、限礙無し。　恒に一切の為に　平等に法を説く。　一人の為にするが如く　衆多も亦
然なり。　常に法を演説して　曾て他事無し。　去・来・坐・立　終に疲厭せず。
世間に充足すること　雨の普く潤すが如し。　貴賤・上下　持戒・毀戒
威儀具足せる　及び具足せざる　正見・邪見　利根・鈍根に　等しく法雨を雨して　而も懈倦無し。
一切衆生の　我が法を聞く者は　力の受くる所に随って　諸の地に住す。　或は人・天　転輪聖王

釈・梵・諸王に処する　是れ小の薬草なり。

無漏の法を知って　能く涅槃を得　六神通を起こし　及び三明を得、

独り山林に処し　常に禅定を行じて　縁覚の証を得る　是れ中の薬草なり。

世尊の処を求めて　我、当に作仏すべしと　精進・定を行ずる　是れ上の薬草なり。

又、諸の仏子　心を仏道に専らにして　常に慈悲を行じ　自ら作仏せんこと　決定して疑い無しと知る　是れを小樹と名づく。

神通に安住して　不退の輪を転じ　無量億　百千の衆生を度する　是の如きの菩薩を　名づけて大樹と為す。

仏の平等の説は　一味の雨の如し。　衆生の性に随って　受くる所不同なること　彼の草木の　稟くる所各　異なるが如し。

仏、此の喩を以て　方便して開示し　種種の言辞をもって　一法を演説すれども　仏の智慧に於いては　海の一渧の如し。

我、法雨を雨して　世間に充満す。　一味の法を　力に随って修行すること

彼の叢林　薬草諸樹の　其の大小に随って　漸く増茂して好きが如し。

諸仏の法は　常に一味を以て　諸の世間をして　普く具足することを得せしめたもう。　漸次に修行して　皆、道果を得。

声聞・縁覚の　山林に処し　最後身に住して　法を聞いて果を得る　是れを薬草の　各増長することを得と名づく。

若し諸の菩薩　智慧堅固にして　三界を了達し　最上乗を求むる　これを小樹の　而も増長すること

を得と名づく。
復、禅に住して　神通力を得　諸法の空を聞いて　心大いに歓喜し　無数の光を放って　諸の衆生を
度すること有る　是れを大樹の　而も増長することを得と名づく。
是の如く、迦葉よ　仏の所説の法は　譬えば大雲の　一味の雨を以て　人華を潤して　各実成ること
を得せしむるが如し。
迦葉よ、当に知るべし　諸の因縁　種種の譬喩を以て　仏道を開示す。　是れ我が方便なり　諸仏も亦
然なり。
今、汝等が為に　最実事を説く。　『諸の声聞衆は　皆滅度せるに非ず　汝等が所行は　是れ菩薩の道
なり　漸漸に修学して　悉く当に成仏すべし』と。」

〔訳〕その時に、世尊は重ねて以上の意義を宣べられようとして、詩頌を説いていわれた。
「迷いの生存を打ち破る法王が、この世に出現して　衆生の意欲にしたがって、種々に法を説く。(1)
如来は尊く偉大であり、その智慧は奥深い。　長いあいだこの教えの肝要について沈黙を守り、急いで説くことをしない。(2)
（なぜなら）智慧のある者がその教えを聞けば、信じ理解することができるのに対し、　智慧のない者はそれを疑い悔んで、永く失うことになるであろうから。(3)
それゆえ、迦葉よ、（如来は衆生の）能力にしたがって説いて、　種々の機縁によって、正しい見解を得させるのだ。(4)

迦葉よ、知らねばならない、それは、たとえば、大きな雲が、世界にわき起って、すべてのものをくまなく覆いつくし、(5)

めぐみの雲はしめり気をおび、稲妻が光り輝き、雷鳴は遠くとどろいて、多くのものたちを喜ばす、(6)

日の光りは覆いかくされて、地上はすがすがしくさわやかになり、雲は低くたれこめて、手でうけとれるかのようである。(7)

その雨は一様に、四方一面に降り、無量にふりそそいで、地面のいたるところがみちうるおう。(8)

山や川、けわしい谷の、ひっそりとした奥深い地にはえた、草木、薬草や、大小の樹木、さまざまな穀物、稲の苗、甘蔗(さとうきび)やぶどう、(9)・(10)

それらは雨によってうるおい、豊饒(ほうじょう)となり、乾いた大地はすみずみまでうるおって、薬草や樹木がおい茂る。(11)

その雲から生じた、同一の味の水によって、草木や叢林(そうりん)は、それぞれのもちまえにしたがってそのうるおいを受ける。(12)

あらゆるさまざまな樹木が、上も中も下もそれぞれ一様に、その大小にしたがって、各々生長することができる。(13)

根や茎、枝や葉、花や果実のつややかな色は、その一雨(ひとあめ)のおかげによって、すべてが色鮮やかにうるおうことができる。(14)

その本体と姿なりと性質とが、大小に分かれているように、　同一のうるおいを受けても、それぞれがそれぞれなりに繁茂してゆく。(15)

仏もまたそのようである。この世に出現するのも、　たとえていえば、大雲が、くまなくすべてのものを覆いつくすかのようである。　世に出現してからは、多くの衆生たちのために、　多くの教法の真実をことわけして演べ説く。(16)

大聖者である世尊は、さまざまな神々や人間の、　すべてのあつまりのなかで、次のようなことばを宣べる。　『私は如来であり、人間の最高者である。　この世に出現することは、あたかも大雲のごとくである』と。(17)

（私は）乾いて枯れているような、　あらゆる衆生たちをみちうるおわせ、　すべてが苦を離れ、やすらかな楽を、　この世の楽を、そして涅槃の楽を得させるのだ。(18)

多くの神々と人々との集まりよ、一心によく聴け。　みなここにやってきて、この上ない尊者を見よ。　私は世尊であり、私に勝る者はない。　衆生を安らかにさせるために、この世に出現したのだ。(19)

大勢の集まりのために、私は不死の妙薬である清浄な法を説く。　その法はただ一つの味わいを有する。すなわち、解脱（げだつ）と涅槃とである。(20)

ただ一つのすぐれた音声をもって、この意義をのべ、　そして、常に大乗のために、それへの手がかりを設けるのだ。　私がすべてのものを観る場合、　みな平等であって、　あれこれとかの区別や、愛着や憎悪の心があることはない。(21)

私には貪りや執着というものはなく、また限りや障りというものもない。つねにすべてのものたちのために、平等に法を説く。ある一人のためにするように、そのように大勢のものたちに対してもするのである。(22)

（私は）つねに法を説くこと以外に、かつて他のことをしたことがない。ゆく時も、来る時も、坐している時も、立っている時も、（つねに法を説いて）決して疲れて倦むことはない。(23)

私はこの世を充ちたりたものにする。雨がくまなく（大地を）うるおすかのように。貴い人にも賤しい人にも、上の人にも下の人にも、持戒の人にも破戒の人にも、(24)立派な態度のそなわっている人にも、そなわっていない人にも、正しい見解をもっている人にも、よこしまな見解をもっている人にも、(25)素質のすぐれた人にも、劣っている人にも、一様に等しく法の雨をふらして、しかも倦み疲れることがない。(26)

すべての衆生たちのうち、私の法を聞く者は、その法を受けとる力量に応じて、さまざまな位置にとどまるのだ。人間や神々の、転輪聖王や、帝釈天、梵天、さまざまな王たちの住処にとどまる、これは小の薬草である。(27)（(28)は欠）

煩悩の汚れのない法を知り、涅槃を体得し、六種の神通をおこし、なかでも三種の神通を獲得し、(29)

独りで山林に身をおいて、つねに禅定を修して、縁覚のさとりを得る、これは中の薬草である。(30)

世尊の境位を求めて、自分は必ずや仏になろうと、努力をし、禅定を修行する、これは上の薬

草である。(31)

また、多くの仏の子らが、仏道に専心して、つねに慈悲の修行をし、みずからが仏になることが、決定していて疑念の余地がないと知る、これを小樹と名づける。(32)

神通の力を発揮しつつ、退くことのない教えの輪を廻し、はかりしれない億百千の衆生を救済する、このような菩薩を、大樹と名づけるのである。(33)

仏の平等の説法は、一味の雨のようであるが、衆生はその性質に応じて、受けとり方がそれぞれ異なっており、それは、ちょうど、あの草木が、雨をそれぞれ異なって受けとるようなものである。(34)

仏はこの喩えによって、教化の手だてを講じて、教えを開き示し、種々さまざまなことばによって、ただ一つの教法を演べ説くけれども、それは仏の智慧にあっては、海水の一滴のようなものである。(35)

私は法の雨をふらせて、この世を満ち足りたものにする。(衆生たちは)その一味の法を、おのが力量に応じて修行するが、(36)

そのことは、ちょうど、かの叢林、薬草、さまざまな樹木が、その大小に応じて、だんだんと繁茂して成長してゆくかのようである。(37)

多くの仏たちの教法は、つねに同一の味によって、世界すべてのものが、一様にそれをそなえることができるようにする。それをだんだんと修行していって、すべてがさとりの結果を得るのである。(38)

声聞・縁覚が山林に住し、（この世における）最後の身体をとどめつつ、法を聞いてその果報を得る、これを薬草の、それぞれが成長を増すことができる、と名づける。(39)

多くの菩薩たちが、智慧がしっかりと確立していて、（欲界・色界・無色界の）三界をあきらめつくし、最上の（教えの）乗り物を求める場合、これを、小樹が成長を増すことができる、と名づける。(40)

また、禅定を行ない、神通力を得、あらゆる存在が空であると聞いて、心に大いに喜び、無数の光明を放って、多くの衆生を救済する、これを、大樹が成長を増すことができる、と名づけるのである。(41)

このように、迦葉よ、仏の説かれた法は、たとえていえば、大きな雲が、同一の味の雨によって、人という花をうるおして、それぞれ実をつけることができるようにするようなものである。(42)

迦葉よ、知るがよい、さまざまないわれ、種々の喩えによって、仏の道を開き示すが、それが私の教化の手だてであり、また多くの仏たちについても同様である。(43)

今、汝たちのために、最上の真実を説こう。

『多くの声聞たちは、みな悟りに入ってしまったのではない。汝たちの行なっている修行は、実は菩薩の道なのである。だんだんに学んでゆき、誰もが必ずや仏になるであろう』と。」(44)

《破有》「有」とは(bhava)、輪廻の生存のこと。十二因縁の第十支の「有」と同じ。三界における迷いの

生存。有を破するとは、この迷いの生存を打ち破ること。《久黙斯要》初転法輪からこれまで四十余年の間、真実の教えである法華経を説かなかったことをいう。《靉靆垂布》「靉靆」は、雲のたなびくさま。雲が低く垂れこめて、空一面にひろがること。《諸法之実》諸法実相のこと。第二章方便品の語注（一一二頁）参照。《両足之尊》両足とは人間のこと。人中の尊者の意。《甘露浄法》甘露とは、味香きわめてすぐれた天の神神の不死の飲料で、仏の教法を喩える。原語は amṛta。飲むと不死を得られる甘露のような浄らかな教え、の意。《転輪聖王》第一章序品の語注（六二頁）参照。《釈梵諸王》帝釈天や梵天界の諸王のこと。《六神通》第三章の注（二一四頁）参照。《三明》第三章譬喩品の注参照（二六七頁）。《道果》道は菩提（bodhi 覚り）の旧訳語。老荘哲学の中心概念である「道」という語を訳語にあてたもの。道果は、菩提の果としての涅槃の意で、ここでは三乗の涅槃をさす。《最後身》第二章方便品の注参照（一二三頁）。《人華》人間を華に喩えたもの。《汝等所行、是菩薩道》声聞たちの得たさとりは、まだ真のさとりではなく、仏になることをめざして更に修行をしなければならない。その修行は、成仏の道、すなわち菩薩道である。このように、声聞二乗のさとりがいまだ不完全であることを示し、仏のさとりに向かわしめる説法は、方便品の二乗作仏の説法以来、各所でくりかえされており、二乗も菩薩にほかならず、仏弟子はただ菩薩のみであるとして、一乗の思想が強調されている。

本経の第五章は以上で終るが、本経以前の竺法護訳『正法華経』や、本経以後の『添品妙法蓮華経』の漢訳二種、すべてのサンスクリット諸本とチベット訳には、この後にかなりの長文の長行と偈頌とが存する。天台六祖の妙楽湛然は、羅什が内容の重複を避けて、あえて訳出しなかったものとするが（『法華文句記』巻十九）、あるいは羅什訳の原本にその部分が欠けていたのであろうか。その欠

如部分の趣旨は、同一の土を材料としてさまざまな土器があるのは、その用途によるものだとして種種の土器を三乗に喩えて、三乗方便一乗一真を説き、さらに生来の盲人が医師によって目が見えるようになり、また仙人に教えられてついに神通力を得るという譬喩を用いて、凡夫から二乗へ、二乗から仏のさとりへと発展的に一仏乗への道を説き示しているものである。したがって、内容的にはこれまでの前半部分と異なるものが説かれているわけではなく、羅什訳でその意趣は尽くされているといってよい。

妙法蓮華經授記品第六

爾時世尊說是偈已。告諸大衆。唱如是言。我此弟子。摩訶迦葉。於未來世。當得奉覲。三百萬億。諸佛世尊。供養恭敬。尊重讚歎。廣宣諸佛。無量大法。於最後身。得成爲佛。名曰光明如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。國名光德。劫名大莊嚴。佛壽十二小劫。正法住世。二十小劫。像法亦住。二十小劫。國界嚴飾。無諸穢惡。瓦礫荊棘。便利不淨。其土平正。無有高下。坑坎堆阜。琉[1]璃爲地。寶樹行列。黃金爲繩。以界道側。散諸寶華。周遍淸淨。其國菩薩。無量千億。諸聲聞衆。亦復無數。無有魔事。雖有魔及魔民。皆護佛法。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

告諸比丘　我以佛眼　見是迦葉　於未來世　過無數劫　當得作佛
而於來世　供養奉覲　三百萬億　諸佛世尊　爲佛知慧　淨修梵行
供養最上　二足尊已　修習一切　無上之慧　於最後身　得成爲佛
其土淸淨　琉[2]璃爲地　多諸寶樹　行列道側　金繩界道　見者歡喜
常出好香　散衆名華　種種奇妙　以爲莊嚴　其地平正　無有丘坑
諸菩薩衆　不可稱計　其心調柔　逮大神通　奉持諸佛　大乘經典
諸聲聞衆　無漏後身　法王之子　亦不可計　乃以天眼　不能數知
其佛當壽　十二小劫　正法住世　二十小劫　像法亦住　二十小劫

光明世尊　其事如是

（1）（2）琉＝瑠

爾の時に、世尊、是の偈を説き已って、諸の大衆に告げて、是の如き言を唱えたまわく、

「我が此の弟子、摩訶迦葉は、未来世に於いて、当に三百万億の諸仏世尊を奉覲して、供養恭敬し、尊重讃歎し、広く諸仏の無量の大法を宣ぶることを得べし。最後身に於いて、仏に成為ることを得ん。名を光明如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と曰わん。国を光徳と名づけ、劫を大荘厳と名づけん。仏の寿は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。国界厳飾して、諸の穢悪、瓦礫、荊棘、便利の不浄無く、其の土平正にして、高下、坑坎、堆阜有ること無けん。琉璃を地と為して、宝樹行列し、黄金を縄と為して、以て道の側を界い、諸の宝華を散じ、周遍して清浄ならん。其の国の菩薩、無量千億にして、諸の声聞衆、亦復無数ならん。魔事有ること無けん。魔及び魔民有りと雖も、皆仏法を護らん。」

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「諸の比丘に告ぐ　我、仏眼を以て　是の迦葉を見るに　未来世に於いて　無数劫を過ぎて　当に作仏することを得べし。

而も来世に於いて　三百万億の　諸仏世尊を　供養し奉覲して　仏の智慧の為に　浄く梵行を修せん。

最上の　二足尊を供養し已って　一切の　無上の慧を修習し　最後身に於いて　仏に成為ることを得ん。

其の土、清浄にして　琉璃を地と為し　諸の宝樹多くして　道の側に行列し　金縄道を界いて　見る者歓喜せん。

常に好香を出し　衆の名華を散じて　種種の奇妙なる　以て荘厳と為し　其の地、平正にして　丘坑有ること無けん。
諸の菩薩衆　称計すべからず　其の心　調柔にして　大神通に逮び　諸仏の　大乗経典を奉持せん。
諸の声聞衆の　無漏の後身　法王の子なる　亦、計るべからず。　乃ち天眼を以ても　数え知ること能わじ。
其の仏は当に寿　十二小劫なるべし　正法世に住すること　二十小劫　像法亦住すること　二十小劫ならん　光明世尊　其の事是の如し。」

〔訳〕その時世尊は、以上の詩頌を説きおえると、大勢の会衆に次のように告げられた。
「私のこの弟子の摩訶迦葉は、未来の世において、必ずや三百万億もの多くの仏・世尊に見えたてまつり、供養して敬い、尊重し、讃仰して、多くの仏たちの無量の偉大な法を広く宣説することができるであろう。（そして彼は自身の）最後の身体で、仏となることができよう。その名を、光明如来、供養をうけるにふさわしい人、正しくあまねき智慧を具えた人、智と実践とが完全に具わった人、悟りに到達した人、世界のすべてに通じている人、最上の人、人間の調教師、諸天と人々との師、仏、世尊というであろう。その国を光徳と名づけ、（その仏の世に住する）長い期間を大荘厳というであろう。
　その仏の寿命は十二小劫であり、正しい法が世に存続するのが二十小劫、またその後、正しい法に似た教えが世に存続するのも二十小劫の間であろう。その国土はおごそかに飾られ、さまざまなけがれ、瓦や礫、いばらやとげ、糞尿の汚物もなく、その土地は平らかで、高低や、窪み、丘もないであ

ろう。大地は瑠璃からできており、宝の樹が並び、黄金を縄にして道のほとりを境いとし、あたりにはさまざまな宝の花が散りまかれて、浄らかになっているであろう。その国には、千億の無量倍もの菩薩がおり、また無数の声聞の人々がいるであろう。魔のしわざもなく、たとい魔王や魔の一族がいたとしても、そこではみな、仏法を守護するであろう。」

そこで、世尊は再び以上のことを宣べようとして、次のような詩頌を説かれた。

「多くの比丘たちに告げよう。私は仏の眼で、この迦葉を見ると、彼は未来の世において、はかりしれぬほどの永い年月を経た後に、必ず仏となることができるであろう。(1)

そして、来世にあって、三百万億という、多くの仏・世尊を、供養し見えたてまつって、仏の智慧を求めるために、浄らかに純潔の行を修行するであろう。(2)

最上の、人中の最高者を供養した後、すべての、この上ない智慧を修習し、その最後の身体で、仏となることができるであろう。(3)

その国土は浄らかで、大地は瑠璃でできており、さまざまな宝の樹が多くあって、道のほとりに並び、黄金の縄が道を境い、見る者を喜ばせるであろう。(4)

つねによい香りをただよわせ、多くの美しい花を散らせて、種々なめずらしいものによって、おごそかに飾り、その大地は平らかで、丘やくぼみはないであろう。(5)・(6)

多くの菩薩たちが数えきれないほどいて、彼らの心は柔軟でよく調えられていて、偉大な神通力を得ており、仏たちの、大乗の経典を受持しているであろう。(7)

多くの声聞たちは、煩悩の汚れのない最後の身体を有しており、法の王(である仏)の子であ

って、その数は数えることもできないほどであり、それは神通力を得た眼によっても、数えることは不可能なほどであろう。(8)
その仏の寿命は、十二小劫であろう。正しい法が世に存続するのは、二十小劫の間であり、正しい法に似た教えが存続するのは、やはり二十小劫の間であろう。光明世尊に関することは、以上のとおりである。」(9)

《**摩訶迦葉**》第一章序品の注参照（四三頁）。《**最後身**》第二章及び前章の注参照（一二三、三五三頁）。《**光明如来**》梵本では Raśmiprabhāsa（光の輝き）という。《**光徳**》梵本では、Avabhāsaprāptā（光明を得た）という。《**劫**》極めて長い時間の単位（第一章序品の「阿僧祇劫」の注八八頁参照）であるが、ここでは光明如来が世にあらわれる時期を指す。《**大荘厳**》梵本では Mahāvyūha（大いなる光輝）という。《**十二小劫**》小劫は極めて長期間にわたる時間をあらわす単位。その長さは経論によって異なりがある。第一章序品の語注「六十小劫」の項参照（九一頁）。《**便利不浄**》便利とは排泄物のこと。糞尿のけがれ。《**正法・像法**》第三章譬喩品の語注（二一〇頁）参照。

本章の由来

本章は、まず摩訶迦葉（まかかしょう）に対する仏の授記（じゅき）、すなわち成仏（じょうぶつ）の予言から始まる。それは、先に、上根（じょうこん）の二乗である舎利弗（しゃりほつ）に対して、第三章の前半において仏がすでに成仏の記を与えられ、将来、舎利弗は華光（けこう）如来という名の仏になるであろうと予言されていた。なぜなら、舎利弗は第二章方便品の説法を

聞いて、仏の真実の教えに目覚め、自分は真に仏子であるという自覚をもつに至ったからである。それに対し、舎利弗は仏にむかって自分以外のいまだ領解していない声聞達にも法を説かれんことを請うたので、そこで仏は長者火宅の喩えを説かれることになった。

この仏の説法によって中根の四大声聞、須菩薩・摩訶迦旃延、摩訶迦葉・摩訶目犍連たちは仏の真の教えを領解し、その領解を自ら長者窮子の喩えによって仏にもうしのべた。これが第四章信解品であった。この四大声聞の領解に対して、仏は次の第五章薬草喩品において、冒頭、「善いかな、善いかな、迦葉よ、善く如来真実の功徳を説けり。誠に所言の如し」と述べて、彼らの領解が正しいものであることをみとめられ、その印可の旨を三草二木の喩えで説かれたのである。そして、この本章に至って仏はその領解の正当性を認めた四大声聞たちに成仏の記を与えられることになるのであり、その最初が摩訶迦葉というわけである。この摩訶迦葉に対して記莂が与えられるのをまのあたり見た目連・須菩提・迦旃延は、三人そろってわれらにも記莂を与えたまえと願い、そこで仏は順次に彼ら三人に対して記を授けられるのである。

このように、本章は四大声聞たちに対する仏の授記がその内容となっている。今の一段は、摩訶迦葉に対する授記であり、以下の各段で順次、須菩提・迦旃延・大目犍連と次第して各々に対する仏の授記が説かれてゆくことになる。

爾時大目犍(1)連。須菩提。摩訶迦栴(2)延等。皆悉悚慄。一心合掌。瞻仰尊(3)顔。目不暫捨。卽共

同聲。而說偈言。

大雄猛世尊　諸釋之法王　哀愍我等故　而賜佛音聲
若知我深心　見爲授記者　如以甘露灑　除熱得清涼
如從饑(4)國來　忽遇大王饍　心猶懷疑懼　未敢卽便食
若復得王敎　然後乃敢食　我等亦如是　每惟小乘過
不知當云何　得佛無上慧　雖聞佛音聲　言我等作佛
心尚懷憂懼　如未敢便食　若蒙佛授記　爾乃快安樂
大雄猛世尊　常欲安世間　願賜我等記　如飢須敎食

(1)犍＝揵　(2)栴＝旃　(3)尊顔＝世尊　(4)饑＝飢　高麗蔵も同じ。

爾の時に大目犍連、須菩提、摩訶迦栴延等、皆悉く悚慄して、一心に合掌し、尊顔を瞻仰して、目暫くも捨てず。即ち共に声を同じうして、偈を説いて言さく、

「大雄猛世尊よ　諸釈の法王よ　我等を哀愍したもうが故に　而も仏の音声を賜え。
若し我が深心を知しめして　授記為らるれば　甘露を以て灑ぐに　熱を除いて清涼を得るが如くならん。
饑えたる国より来って　忽ちに大王の饍に遇わんに　心、猶疑懼を懐いて　未だ敢えて即便ち食せず。
若し復、王の教を得ば　然して後に乃ち敢えて食せんが如く
我等も、亦、是の如し。毎に小乗の過を惟いて　当に云何にして　仏の無上慧を得べきかを知らず。
仏の音声の　我等作仏せんと言うを聞くと雖も　心、尚憂懼を懐くこと　未だ敢えて便ち食せざるが如

し。
若し仏の授記を蒙りなば　爾して乃ち快く安楽ならん。
大雄猛世尊　常に世間を安んぜんと欲す　願わくは我等に記を賜え　飢て教を須って食するが如くならん。」

〔訳〕そのとき、大目犍連、須菩提、摩訶迦旃延たちは、みな身体をふるわせながら、一心に合掌して、世尊の尊いお顔をじっとまばたきもせずに仰ぎ見た。そして、異口同音に声をそろえて、次のような詩頌を唱えた。

「偉大な勇者である世尊よ、釈迦族の法の王よ。私たちをあわれんで、仏の音声をお聞かせ下さいますように。(10)

もしも、私たちの心の奥をお知りになって、成仏の予言を授けられますならば、それは甘露をふりそそぐと、熱が除かれてすがすがしい涼しさが得られるかのようでありましょう。(11)

飢饉の国からやってきて、たちまちに大王の食膳に出会ったとしても、心に疑いとおそれを懐いていて、まだあえてすぐにそれを食べようとせず、王のおおせを受けた後に、やっと食べるような、そのような場合があるとしますと、(12)

私たちもそれと同じです。いつも小乗の過誤に思いをめぐらしていて、どのようにすれば、仏のこの上ない智慧を得ることができるのかということを知りません。(13)

仏の音声が、私たちも仏となるであろう、と言われるのを聞いても、心にまだ不安を懐いてい

て、いまだすぐには食べようとはしないようなものであります。(14)もし、仏の成仏の予言が与えられたならば、そこではじめて心がすっきりと安らかになるでありましょう。(15)偉大な勇者である世尊は、つねに世間を安らかにしようとなさいます。どうか私たちに成仏の予言をお与え下さい。飢えつつも、おおせを待って、はじめて食べられるようなものでありますから。」(16)

《**大目犍連・須菩提・摩訶迦旃延**》第一章序品の語注参照（それぞれ四三、四四頁）。《**諸釈之法王**》釈とは釈迦族（釈尊の出身の部族）の略で、釈迦族の中から出た法の王の意。《**授記**》仏が成仏の予言、約束を授けることをいう。記とは記莂（vyākaraṇa）のことで、成仏についての証言、予言を意味する。《**甘露**》amṛta（不死）の訳。天上の神々が飲む不老不死の霊妙な飲料。その味が甘く極めて美味であることから甘露というとする。《**王教**》王の命令、おおせ。「教」は命令の意。

爾時世尊。知諸大弟子。心之所念。告諸比丘。是須菩提。於當來世。奉覲三百萬億。那由他佛。供養恭敬。尊重讃歎。常修梵行。具菩薩道。於最後身。得成爲佛。號曰名相如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。劫名有寶。國名寶生。其土平正。頗梨爲地。寶樹莊嚴。無諸丘坑。沙礫荊棘。便利之穢。寶華覆地。周遍清淨。其土人民。皆處寶臺。珍妙樓閣。聲聞弟子。無量無邊。算數譬喩。所不能知。諸菩薩衆。無數

千萬億。那由他。佛壽十二小劫。正法住世。二十小劫。像法亦住。二十小劫。其佛常處虛空。爲衆說法。度脱無量菩薩。及聲聞衆。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

諸比丘衆　今告汝等　皆當一心　聽我所說　我大弟子　須菩提者
當得作佛　號曰名相　當供無數　萬億諸佛　隨佛所行　漸具大道
最後身得　三十二相　端正姝妙　猶如寶山　其佛國土　嚴淨第一
衆生見者　無不愛樂　佛於其中　度無量衆　其佛法中　多諸菩薩
皆悉利根　轉不退輪　彼國常以　菩薩莊嚴　諸聲聞衆　不可稱數
皆得三明　具六神通　住八解脱　有大威德　其佛說法　現於無量
神通變化　不可思議　諸天人民　數如恒沙　皆共合掌　聽受佛語
其佛當壽　十二小劫　正法住世　二十小劫　像法亦住　二十小劫

爾の時に世尊、諸の大弟子の、心の所念を知しめして、諸の比丘に告げたまわく、

「是の須菩提は、当来世に於いて、三百万億那由他の仏を奉覲して、供養恭敬し、尊重讃歎し、常に梵行を修し、菩薩の道を具して、最後身に於いて、仏と成為ることを得ん。号を名相如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と曰わん。劫を有宝と名づけ、国を宝生と名づけん。其の土、平正にして、頗梨を地と為し、宝樹荘厳して、諸の丘坑、沙礫、荊棘、便利の穢無く、宝華、地に覆い、周遍して清浄ならん。其の土の人民、皆、宝台、珍妙の楼閣に処せん。声聞の弟子、無量無辺にして、算数譬喩の知ること能わざる所ならん。諸の菩薩衆、無数千万億那由他ならん。仏の寿は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法亦住すること二十小劫ならん。其の仏常に虚空に処して、衆の為に法を説いて、無量の菩

薩、及び声聞衆を度脱せん。」

爾の時に、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「諸の比丘衆よ　今、汝等に告ぐ　皆、当に一心に　我が所説を聴くべし。　我が大弟子　須菩提は
当に作仏することを得べし　号を名相と曰わん。
当に無数　万億の諸仏を供し　仏の所行に随って　漸く大道を具すべし。
最後身に　三十二相を得て　端正姝妙なること　猶宝山の如くならん。
其の仏の国土　厳浄第一にして　衆生の見る者　愛楽せざること無けん。　仏、其の中に於いて　無量の衆を度せん。
其の仏の法の中には　諸の菩薩多く　皆悉く利根にして　不退の輪を転ぜん。　彼の国は常に　菩薩を以て荘厳せん
諸の声聞衆も　称数すべからず。　皆、三明を得　六神通を具し　八解脱に住し　大威徳有らん。
其の仏の説法には　無量の神通　変化を現ずること　不可思議ならん。　諸天・人民　数恒沙の如くにして　皆共に合掌し　仏語を聴受せん。
其の仏は当に寿　十二小劫なるべし　正法世に住すること　二十小劫　像法、亦住すること　二十小劫ならん。」

〔訳〕そのとき、世尊は、大弟子たちの心の思いを知られて、多くの比丘たちに告げられた。
「この須菩提は、未来世において、三百万億ナユタもの多くの仏に見えたてまつり、供養し尊敬し、尊重し讃仰して、つねに純潔の行を修め、菩薩の道を体得して、その最後の身体で、仏となることがで

きるであろう。その名を、名相（みょうそう）如来、供養をうけるにふさわしい人、正しくあまねき智慧をそなえた人、智と実践とが完全にそなわった人、悟りに到達した人、世界のすべてに通じている人、最上の人、人間の調教師、諸天と人々との師、仏、世尊というであろう。（その仏が世に住する）長い時代を有宝と名づけ、その国土を宝生と名づけるであろう。その大地は平らかで、頗梨（はり）でできており、宝の樹によっておごそかに飾られ、さまざまな丘やくぼ地、砂や小石、いばらやとげ、糞尿の汚物もなく、宝でできた花があたり一面に地を覆い清らかであろう。その国土の人民は、みな宝づくりの高殿、めずらしく立派な楼閣に住んでいるであろう。弟子の声聞たちの数は、はかりしれず、計算やたとえをもってしても知ることもできないほどであろう。多くの菩薩たちの数は、千万億ナユタの無数倍であろう。その仏の寿命は十二小劫であり、正しい法が世に存続する期間は二十小劫、そして正しい法に似た教えが世に存続するのも二十小劫であろう。その仏は常に虚空（こくう）の中におり、会衆（えしゅ）のために法を説いて、はかりしれないほどの数の菩薩や声聞たちを解脱させるであろう。」

そこで、世尊は、再び以上の意義を宣べようとして、詩頌を説いて言われた。

「多くの比丘たちよ、今、汝たちに告げよう。みな、一心に私の説法を聴け。私の大弟子の須菩提は、必ず仏となることができるであろう。そしてその名を名相というであろう。(17)

必ず万億の無数倍という多くの仏たちにつかえ、仏の行いにしたがって、次第に偉大な道を体得するであろう。(18)

（転生の）最後の身体に、（仏のみがそなえる）三十二の特徴をそなえることができ、（その姿は）端正ですぐれていることこのうえなく、宝でできている山のようであろう。(19)

その仏の国土は、おごそかで浄らかなことは比類なく、それを見る衆生たちは、好ましく思い楽しまない者はいないであろう。仏はその国土の中で、はかりしれない数の人々を救済するであろう。(20)

その仏の教えをうける者たちの中には、多くの菩薩たちがおり、彼らはすべてすぐれた能力をもち、退くことのない教えの輪を廻すであろう。その国は、つねに菩薩たちによっておごそかに飾られているであろう。(21)

多くの声聞たちも、その数を数えあげることができないほど多く、みな三種の神通力を得て、六種の神通力をそなえており、八種の解脱を体得していて、大きな威徳を有しているであろう。(22)

その仏の説法が、はかりしれない神通と、変化を現わし出すことは、考えも及ばないほどである。多くの神々や人々のその数は、ガンジス河の砂の数ほども多く、みな一緒に合掌して、仏のことばを聴いて身に受けるであろう。(23)

その仏の寿命は、十二小劫であろう。正しい法が世に存続するのは、二十小劫の間であろう。正しい法に似た教えが世に存続するのも、二十小劫であろう」と。(24)

《三百万億那由他》「那由他」は nayuta の音写語で、大きな数の単位である。経論によって異同があるが、いま『倶舎論』(巻十二、分別世品)の出す数の単位を挙げると、一万の十倍を洛叉(lakṣa)、洛叉の十倍(すなわち百万)を度洛叉(真諦訳は阿底洛叉 atilakṣa)、度洛叉の十倍(千万)を倶胝(koṭi)、倶胝の十倍

（億）を末陀（madhya）、末陀の十倍（十億）を阿庾多（ayuta）、阿庾多の十倍（百億）を大阿庾多、大阿庾多の十倍（すなわち千億）を那庾多（nayuta）とする、とあるから、『倶舎論』によればナユタは千億ということになる。また「三百万億那由他」という場合の「億」はしばしば、倶胝（koṭi）の訳語として用いられる語で実際の「億」という数ではない。この「億」は、千万の数に相当する。したがって、「三百万億那由他」の数は、三百万×一千万×一千億＝3×10^{24}ということになろう。このような巨大な数量は本経において随所に見られ、本経の特徴の一つとなっている。このすぐ後にも「無数千万億那由他」という数がみえるが、これは通常の計算では表わしがたい巨大な数である。しかし同じ巨大な数にしても、梵本の方が幾分控え目で、これに対応する梵本では、「幾百・千・コーティ・ナユタ」（bahūni cātra bodhisattva koṭi-nayuta-śata-sahasrāṇi——p.148. 14*l*）とあって、コーティ・ナユタは漢訳の億・那由他に相当するから、百・千の部分は漢訳の千・万にくらべて桁数がそれぞれ十分の一ずつ少ない。

このように梵本の場合は本経にくらべて桁数が少なく数の表現の上でより控え目であることが多い。そのことは巨大な数についてでなくても見られることで、たとえば、一章序品の冒頭で、本経では会衆の数が一万二千、とされているのに対し、『正法華』と梵本ではともに千二百人となっていて、本経の十分の一の数になっている。このような数量の相違は、原本の相違によるものと考えるよりも、むしろ漢訳の際に意図的に数を拡大したと考えるほうが自然であろう。

《**名相如来**》梵本では、Śaśiketu（月光）という。《**三十二相**》第三章譬喩品の語注（二〇四頁）参照。《**三明・六神通**》同章の語注（二一四頁及び二六七頁）参照。《**八解脱**》八背捨ともいう。阿羅漢のさとりを得るために修める八種類の禅定。これによって煩悩を捨ててその繋縛から解脱する。

爾時世尊。復告諸比丘衆。我今語汝。是大迦旃延。於當來世。以諸供具。供養奉事。八千億佛。恭敬尊重。諸佛滅後。各起塔廟。高千由旬。縦廣正等。五百由旬。皆(1)以金銀。琉(2)璃。車渠。馬腦(3)眞珠。玫瑰。七寶合成。衆華瓔珞。塗香。末(4)香。燒香。繒蓋。幢幡。供養塔廟。過是已後。當復供養。二萬億佛。亦復如是。供養是諸佛已。具菩薩道。當得作佛。號曰閻浮那提金光如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。其土平正。頗梨爲地。寶樹莊嚴。黃金爲繩。以界道側。妙華覆地。周遍清淨。見者歡喜。無四惡道。地獄。餓鬼。畜生。阿修羅道。多有天人。諸聲聞衆。及諸菩薩。無量萬億。莊嚴其國。佛壽十二小劫。正法住世。二十小劫。像法亦住。二十小劫。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

諸比丘衆　皆一心聽　如我所說　眞實無異　是迦栴(5)延　當以種種
妙好供具　供養諸佛　諸佛滅後　起七寶塔　亦以華香　供養舍利
其最後身　得佛智慧　成等正覺　國土清淨　度脱無量　萬億衆生
皆爲十方　之所供養　佛之光明　無能勝者　其佛號曰　閻浮金光
菩薩聲聞　斷一切有　無量無數　莊嚴其國

(1)皆＝春日本になし　(2)琉＝瑠　(3)腦＝瑙　(4)末＝抹　(5)栴＝旃

爾の時に世尊、復、諸の比丘衆に告げたまわく、「我、今、汝に語る。是の大迦旃延は、当来世に於いて、諸の供具を以て八千億の仏に供養し奉事して、恭敬尊重せん。諸仏の滅後に、各塔廟を起てて、高さ千由旬、

縦広正等にして、五百由旬ならん。皆、金、銀、琉璃、車渠、馬脳、真珠、玫瑰の七宝を以て合成し、衆華、瓔珞、塗香、末香、焼香、繒蓋、幢幡を塔廟に供養せん。是れを過ぎて已後、当に、復、二万億の仏を供養するも、亦復、是の如くすべし。是の諸仏を供養し已って、菩薩の道を具して、当に作仏することを得べし。号を、閻浮那提金光如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と曰わん。其の土、平正にして、頗梨を地と為し、宝樹荘厳し、黄金を縄と為し、以て道の側を界い、妙華、地に覆い、周遍清浄にして、見る者歓喜せん。四悪道の地獄、餓鬼、畜生、阿修羅道無く、多く天・人有らん。諸の声聞衆、及び諸の菩薩、無量万億にして、其の国を荘厳せん。仏の寿は十二小劫、正法世に住すること二十小劫、像法、亦、住すること二十小劫ならん。」

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「諸の比丘衆よ　皆一心に聴け。　我が所説の如きは　真実にして異なること無し。　是の迦栴延は　当に種種の　妙好の供具を以て　諸仏を供養すべし。

諸仏の滅後に　七宝の塔を起て　亦、華香を以て　舎利を供養し

其の最後身に　仏の智慧を得て　等正覚を成じ　国土清浄にして　無量万億の衆生を度脱し

皆、十方に　供養せらるることを為ん。

仏の光明は　能く勝れる者無けん。　其の仏の号を　閻浮金光と曰わん。

菩薩声聞の　一切の有を断ぜる　無量無数にして　其の国を荘厳せん。」

〔訳〕その時、世尊はまた多くの比丘たちの会衆に告げられた。

「私は、今、汝たちに語ろう。この大迦旃延は、次の世において、さまざまな供物によって八千億の

仏に供養し、お仕えして、うやまい尊崇するであろう。そして多くの仏たちが滅度された後に、それぞれに塔廟を建てるであろう。その高さ千ヨージャナ、たてよこが等しく、五百ヨージャナであろう。すべて、金、銀、瑠璃、おうぎ貝、碼碯、真珠、赤色の玉、の七宝をとりあわせて造り、多くの花、装身具、塗り香、粉末の香、焼いた香、絹づくりの傘、のぼりや旗を塔廟に供養するであろう。そののち、また二万億の仏をまさしく同じように供養するにちがいない。これらの仏たちを供養しおえて、菩薩の道を身につけ、必ず仏となることができるであろう。その名を、閻浮那提金光如来、供養をうけるにふさわしい人、正しくあまねき智慧をそなえた人、智と実践とが完全にそなわった人、悟りに到達した人、世界のすべてに通じている人、最上の人、人間の調教師、神々と人々との師、仏、世尊というであろう。その大地は平らかで、地面は頗梨でできており、宝の樹でおごそかに飾られ、黄金を縄にして道のほとりを境い、美しい花が地面をおおって、周囲は清らかで、それを見る者は歓喜するであろう。四種の悪しき境界である地獄、餓鬼、畜生、アシュラの世界の者たちは存在せず、天の神々や人々が多くいるであろう。多くの声聞たち、また多くの菩薩たちの数は無量万億にのぼり、その国をおごそかに飾るであろう。仏の寿命は十二小劫であり、正しい法が世に存続する期間は二十小劫、そして正しい法に似た教えが存続するのもまた二十小劫であろう。」

そこで、世尊は、重ねて以上の意義を宣べようとして、詩頌を説いて言われた。

「多くの比丘たちよ、みな一心に聴け。私が説くことは、真実であり異なりはない。この迦旃延は、必ずや種々さまざまな　すばらしい供物によって、多くの仏たちを供養するにちがいない。(25)

多くの仏たちの滅度された後には、七宝造りの塔を建立し、また花や香によって、仏の遺骨を
供養し、(26)　正しいさとりを完成し、その国土は清浄で、
（転生の）その最後の身体に、仏の智慧を得て、
万億の無量倍の数の衆生を救済して、(27)　その仏の光明は、他に勝るものがないであろう。そ
十方（の世界の者たち）に供養せられ、
してその仏の名を閻浮金光というであろう。(28)
菩薩と声聞との、すべての（生死の）生存を断ちきっているものたちが、はかりしれず、無数
に多くいて、その国をおごそかに飾るであろう。」(29)

《由旬》長さの単位。第一章の注（七九頁）参照。**《車𤦲》**七宝の一つ。おうぎ貝。**《玫瑰》**七宝の一つ。赤色の美しい石。**《塗香》**粉末の香で、身体に塗って使用する。**《末香》**粉末の香。**《幢幡》**のぼりと旗。**《閻浮那提金光》**閻浮那提（Jāmbūnada）産出の黄金の輝きの意。閻浮（Jāmbū）は樹木の名で、この樹木の下を流れる河を閻浮那提といい、この河から採れる金を閻浮檀金あるいは閻浮那提金といって、金のうち最上質のものであるとされた。この金の輝きを如来の名としたもの。梵本では Jāmbūnadaprabhāsa という。**《四悪道》**六種の輪廻の境界のうちの四種の悪趣。すなわち、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅の四種の悪しき境界をいう。このうちから阿修羅を除いたものを三悪道という。**《等正覚》**正しいさとり。samyak-saṃbodhi **《断一切有》**「有」は現実の生存の意。生死の世界におけるあらゆる生存を断つということで、生死輪廻の世界から脱して再びこの世に生まれることがないという意味。

爾時世尊。復告大衆。我今語汝。是大目犍(1)連。當以種種供具。供養八千諸佛。恭敬尊重。諸佛滅後。各起塔廟。高千由旬。縱廣正等。五百由旬。皆(2)以金銀。琉(3)璃。車璖。馬腦(4)。眞珠。玫瑰。七寶合成。衆華瓔珞。塗香。末(5)香。燒香。繒蓋。幢幡。以用供養。過是已後。當復供養。二百萬億諸佛。亦復如是。當得成佛。號曰多摩羅跋栴(6)檀香如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。劫名喜滿。國名意樂。其土平正。頗梨爲地。寶樹莊嚴。散眞珠華。周遍清淨。見者歡喜。多諸天人。菩薩聲聞。其數無量。佛壽二十四小劫。正法住世。四十小劫。像法亦住。四十小劫。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

我此弟子　大目犍(7)連　捨是身已　得見八千　二百萬億　諸佛世尊
爲佛道故　供養恭敬　於諸佛所　常修梵行　於無量劫　奉持佛法
諸佛滅後　起七寶塔　長表金刹　華香伎樂　而以供養　諸佛塔廟
漸漸具足　菩薩道已　於意樂國　而得作佛　號多摩羅　栴(8)檀之香
其佛壽命　二十四劫　常爲天人　演說佛道　聲聞無量　如恒河沙
三明六通　有大威德　菩薩無數　志固精進　於佛智慧　皆不退轉
佛滅度後　正法當住　四十小劫　像法亦爾　我諸弟子　威德具足
其數五百　皆當授記　於未來世　咸得成佛　我及汝等　宿世因緣
吾今當說　汝等善聽

(1)(7)犍＝揵　(2)皆＝春日本になし　(3)琉＝瑠　(4)腦＝瑙　(5)末＝抹　(6)(8)栴＝旃

爾の時に世尊、復、大衆に告げたまわく、
「我、今、汝に語る。是の大目犍連は、当に種種の供具を以て、八千の諸仏に供養し、恭敬尊重したてまつるべし。諸仏の滅後に各 塔廟を起てて、高さ千由旬、縦広正等にして、五百由旬ならん。皆、金、銀、琉璃、車渠、馬脳、真珠、玫瑰の七宝を以て合成し、衆華、瓔珞、塗香、末香、焼香、繒蓋、幢幡を以て用って供養せん。是れを過ぎて已後、当に復、二百万億の諸仏を供養するも、亦復、是の如くすべし。当に成仏することを得べし。号を多摩羅跋栴檀香如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と曰わん。劫を喜満と名づけ、国を意楽と名づけん。其の土、平正にして、頗梨を地と為し、宝樹荘厳し、真珠華を散じ、周遍清浄にして、見る者歓喜せん。諸の天・人多く、菩薩、声聞、其の数無量ならん。仏の寿は二十四小劫、正法世に住すること四十小劫、像法亦、住すること四十小劫ならん。」
爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「我が此の弟子　大目犍連は　是の身を捨て已って　八千　二百万億の　諸仏世尊を見たてまつることを得
仏道の為の故に　供養恭敬し　諸仏の所に於いて　常に梵行を修し　無量劫に於いて　仏法を奉持せん。
諸仏の滅後に　七宝の塔を起てて　長く金刹を表わし　華香伎楽をもって　以て　諸仏の塔廟に供養し
漸漸に　菩薩の道を具足し已って　意楽国に於いて　作仏することを得　多摩羅　栴檀の香と号づけん。
其の仏の寿命は二十四劫ならん。　常に天、人の為に仏道を演説せん。

声聞無量にして　恒河沙の如く　三明六通あって　大威徳有らん。
菩薩無数にして　志固く精進し　仏の智慧に於いて　皆退転せじ。
仏の滅度の後　正法当に住すること　四十小劫なるべし　像法亦、爾なり。
我が諸の弟子の　威徳具足せる　其の数五百なるも　皆当に授記すべし。　未来世に於いて　咸く成仏することを得ん。　我及び汝等が　宿世の因縁　吾今当に説くべし　汝等よ、善く聴け。」

〔訳〕その時、世尊は再び大勢の会衆に告げられた。
「私は今、汝たちに語ろう。この大目犍連は、必ずや種々さまざまの供物によって、八千の多くの仏たちを供養し、敬い尊崇するにちがいない。仏たちの滅度した後には、それぞれに塔廟を建立し、その高さは千ヨージャナ、たて横は等しくて五百ヨージャナであろう。金、銀、瑠璃、おうぎ貝、碼碯、真珠、赤色の玉、という七宝をとりあわせて造り、多くの花々、装身具、塗り香、粉末の香、焼いた香、絹づくりの傘、のぼりや旗を供えて供養するであろう。そののち、また二百万億の仏たちを供養する場合も、今と同様にするにちがいない。彼は必ず仏となることができるであろう。その名を多摩羅跋栴檀香如来、供養をうけるにふさわしい人、正しくあまねき智慧をそなえた人、智と実践とが完全にそなわった人、悟りに到達した人、世界のすべてに通じている人、最上の人、人間の調教師、神神と人間との師、仏、世尊というであろう。その時代を喜満と名づけ、国を意楽と名づけるであろう。その国土は平らかで、地面は頗梨でできており、宝の樹によっておごそかに飾られ、真珠づくりの華を散らして、あたりは清浄であり、それを見るものは歓喜するであろう。神々や人々が多くおり、菩

薩、声聞たちのその数ははかりしれないであろう。仏の寿命は二十四小劫であり、正しい法が世に存続する期間は四十小劫、正しい教えに似た教えが存続する期間もやはり四十小劫であろう。」

そこで、世尊は重ねて以上の意義を宣べようとして、詩頌を説いていわれた。

「私のこの弟子、大目犍連は、　この身体を捨てた後に、八千　二百万億の、多くの仏、世尊にお会いすることができるであろう。(30)

仏の道を求めて、供養し敬い、　仏たちのもとで、つねに純潔の修行をなし、(31)

はかり知ることもできない永い期間にわたって、仏の法を保ち続けるであろう。　仏たちの滅度の後には、七宝造りの塔を建立し、(32)

黄金の幡を高く揚げて、花や香、音楽によって、　仏たちの塔廟を供養するであろう。(33)

だんだんと菩薩の道を体得していって、　意楽国（いらく）において仏となることができ、　その名を多摩羅栴檀香と名づけるであろう。(34)

その仏の寿命は二十四劫であろう。　つねに神々や人々のために、仏の道を説くであろう。(35)

声聞たちの数ははかり知れず、ガンジス河の砂の数ほどであり、　三明・六通という神通力を有しており、　偉大な徳があるであろう。(36)

菩薩たちも数えきれないほどいて、その志が堅固で精進努力をなし、　仏の智慧を求めて、みな退転することはないであろう。(37)

仏の滅度された後に、正しい法が世に続く期間は、　四十小劫であり、正しい法に似た教えもまた同様であろう。(38)

私の多くの弟子たちの、威徳を有している、五百人の者たちに、すべて必ず仏になれるという予言を授けよう。『未来の世において、ことごとく仏となることができるであろう』と。私と汝たちの、前世からのいわれを、私は今ここで説き明かそう。汝たちよ、よく聴くがよい。」(39)

《多摩羅跋栴檀香如来》「多摩羅跋」は tamāla-pattra の音写語で、タマーラ樹の葉という意味。「栴檀」は香木の名で、原語は candana である。「タマーラ樹の葉と栴檀の香りを有する」という名の如来の意。サンスクリットは Tamālapattracandanagandha. **《喜満》** 喜びに満ちたという意。原語は Ratiparipūrṇa. **《意楽》** 心の楽しい、という意。原語は Manobhirāma. **《長表金刹》**「金刹」とは金でできた刹竿。塔上の覆鉢（九輪）のこと。塔の上の金づくりの九輪を高く揚げるという意。**《其数五百》** 梵本では五人といい、舎利弗と四大声聞たちを指している。

授　記

さて、以上の各段で、摩訶迦葉から大目犍連までの四大声聞たちに対して仏の授記が順になされてきた。ここで本章の章題である「授記(じゅき)」について触れておこう。「授記」とはサンスクリットで vyākaraṇa パーリ語で veyyākaraṇa チベット語で luṅ-bstan-pa といい、「受記」「記莂(きべつ)」「記説」などとも訳されている。「授記」は授ける側からいったもの、「受記」は受ける側からいったものである。仏典においては本来、九分、十二分経の一支としてたてられているものである。仏典中に説かれてい

る授記の語の意義内容はさまざまであるが、大別すると、㈠弟子などの、死後に生まれるところをあきらかにするもの、㈡仏が、衆生に菩提心をおこさしめ、また菩提心をおこしたものの心を堅固ならしめるために授ける證果の予言約束、㈢未来に成仏することの予言、この三義にまとめられよう。このうち、大乗経典のなかで用いられている授記の語は、第三番目の未来成仏の予言の意で用いられているものが圧倒的に多い。本経もそうである。

未来成仏授記には、かならず成仏する国の名、成仏する時代の名、仏の寿命、正法と像法の存続する期間が挙げられるのが常である。これを六つの項目に挙げて六事と称する。六事とは、

一、行因――未来世において諸仏世尊を供養し讃歎する様子。
二、得果――最後身において仏となった仏の名。
三、劫国――成仏するところの国と時代の名。
四、仏寿――成仏した仏の寿命。
五、正像――正法と像法が世に住する期間。
六、国浄――成仏した国の荘厳された清浄なありさま。

以上の六つであるが、これは経論によって多少出入がある。たとえば、『大乗荘厳経論』では、

一には刹土（kṣetra）、
二には名号（nāman）、
三には時節（kāla）、
四には劫（kalpa）、

五には眷属（parivāra）、

六には正法の世に住すること（saddharmānuvṛtti）、

の六項目を挙げており、また経典によってはその記述に詳細を極めているものもある。

いま、本章に説かれた四大声聞の授記のうち、一例として、摩訶迦葉の六事を挙げてみれば、次のようである。

一、未来世において三百万億の諸仏につかえる。

二、仏となり、光明如来（こうみょうにょらい）という。

三、その仏国土の名を光徳（こうとく）といい、時代を大荘厳（しょうごん）という。

四、仏の寿命は十二小劫。

五、正法の世に住すること二十小劫、像法もまた二十小劫。

六、国界厳飾（ごんじき）して清浄であり、瑠璃を地となし、平坦である云云。

四大声聞それぞれの六事はそれぞれ異っているが、仏国土の荘厳のさまは共通した表現がみられる。それはともかく、本経において「授記」という一章が設けられ、四大声聞たちの授記のさまが詳しく説かれている。その理由は何であろうか。本経における授記は、未来成仏の予言約束である。本経の第二章方便品において、これまでは絶対に成仏することはできないとされていた声聞二乗の成仏がはじめて明かされた。真実の教えは、ただ一種の仏になるための教えであり、二乗、三乗という教えは方便である、それ故、仏弟子たちは声聞も菩薩もすべて本来、仏子であって、二乗も必ず将来仏になるということ、すなわち二乗作仏が説かれたわけである。したがって二乗に対して仏が成仏の予言を

されるという授記は、その二乗作仏ということを、より確実にし、保証するという意味で説かれているものと考えることができるであろう。

第三章譬喩品において舎利弗への授記がなされ、そして本章では四大声聞たちへの授記、後章の第八章五百弟子受記品では富楼那をはじめとする五百人の阿羅漢たちに対する授記、そして次の第九章授学無学人記品においては二千人の声聞たちへの授記がなされる、というように、声聞二乗に対する成仏の予言約束が続いてなされているということ、これは、仏が直接に声聞たちに成仏の予言を与えるというかたちをとって、二乗作仏という教説をより確実なものとし、徹底させるという意図から出たものと考えられる。いいかえれば、二乗作仏によって打ちたてた本経の一乗思想のより徹底化であるということができよう。

本章の最後の文は、

わが諸の弟子の威徳具足せる、その数五百なるも、みなまさに授記すべし。未来世において、ことごとく成仏することを得ん。われ及び汝等が宿世の因縁、われ今、まさに説くべし。汝等よ、よく聴け。

と結ばれている。「その数五百」というのは、梵本、及びチベット訳では「五人」とあり、舎利弗と四大声聞を指すことになるが、本経では、五百人といって後の五百弟子受記品を予想せしめ、これより、譬喩によって説いても解了し信ずることができなかった未領解の弟子五百人、千二百人、二千人のために次章の化城喩品で、いよいよ因縁を説き明かそうといって、次章へ連絡をつけているのである。

妙法蓮華經化城喩品第七

佛告諸比丘。乃往過去。無量無邊。不可思議。阿僧祇劫。爾時有佛。名大通智勝如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。其國名好成。劫名大相。諸比丘。彼佛滅度已來。甚大久遠。譬如三千大千世界。所有地種。假使有人。磨以爲墨。過於東方千國土。乃下一點。大如微塵。又過千國土。復下一點。如是展轉。盡地種墨。於汝等意云何。是諸國土。若算師。若算師弟子。能得邊際。知其數不。不也世尊。諸比丘。是人所經國土。若點不點。盡末(1)爲塵。一塵一劫。彼佛滅度已來。復過是數。無量無邊。百千萬億。阿僧祇劫。我以如來知見力故。觀彼久遠。猶若(2)今日。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

我念過去世　無量無邊劫　有佛兩足尊　名大通智勝
如人以力磨　三千大千土　盡此諸地種　皆悉以爲墨
過於千國土　乃下一塵點　如是展轉點　盡此諸塵墨
如是諸國土　點與不點等　復盡末(3)爲塵　一塵爲一劫
此諸微塵數　其劫復過是　彼佛滅度來　如是無量劫
如來無礙智　知彼佛滅度　及聲聞菩薩　如見今滅度
諸比丘當知　佛智淨微妙　無漏無所礙　通達無量劫

(1)(3)末＝抹　(2)若＝如

仏、諸の比丘に告げたまわく、

「乃往過去、無量無辺不可思議阿僧祇劫、爾の時に仏有しき。大通智勝如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と名づく。其の国を好成と名づけ、劫を大相と名づく。諸の比丘よ、彼の仏の滅度より已来、甚だ大いに久遠なり。譬えば、三千大千世界の所有の地種を、仮使人有りて、磨りて以て墨と為し、東方千の国土を過ぎて、乃ち一点を下さん。大いさ微塵の如し。又、千の国土を過ぎて、復一点を下さん。是の如く展転して地種の墨を尽くさんが如き、汝等が意に於いて云何。是の諸の国土を若しは算師、若しは算師の弟子、能く辺際を得て、其の数を知らんや不や。」

「不なり、世尊よ。」

「諸の比丘よ、是の人の経る所の国土の、若しは点せると点せざるとを、尽く末して塵と為して、一塵を一劫とせん。彼の仏の滅度より已来、復、是の数に過ぎたること、無量無辺百千万億阿僧祇劫なり。我、如来の知見力を以ての故に、彼の久遠を観ること猶今日の若し。」

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「我、過去世の　無量無辺劫を念うに　仏・両足尊有しき　大通智勝と名づく。
人あって力を以て　三千大千の土を磨って　此の諸の地種を尽くして　皆悉く以て墨と為し
千の国土を過ぎて　乃ち一の塵点を下さん。
是の如く展転し点して　此の諸の塵墨を尽くさんが如し。
是の如き諸の国土の　点せると点せざると等を　復尽く末して塵と為し　一塵を一劫と為ん。

此の諸の微塵の数に　其の劫、復是れに過ぎたり。
彼の仏の滅度より来　是の如く無量劫なり。　如来の無礙智　彼の仏の滅度　及び声聞・菩薩を知ること　今の滅度を見るが如し。
諸の比丘よ、当に知るべし　仏智は浄くして微妙に　無漏無所礙にして　無量劫を通達す。」

〔訳〕仏は多くの比丘たちに告げられた。

「むかしむかし、はかりしれず思いもよらない遠い劫のその昔に、仏がおられた。その仏は、大通智勝如来、供養を受けるにふさわしい人、正しくあまねき智を有する人、智と実践とをかねそなえた人、さとりに到達した人、最もよく世間を知る人、このうえない最上の人、人間の調教師、諸天と人々との師、仏・世尊という名であった。その住する国の名を好成と名づけ、その時代を大相といった。比丘たちよ、その仏が入滅したのは、はるか遠い昔のことであった。（それはどのくらい昔のことであったかというと）たとえば、大宇宙にある、あらゆる物質の要素をすりつぶして墨にして、東方に向って千の国土を過ぎて一つの点をつけるとしよう。その一点の大きさは微塵ほどである。また千の国土を過ぎてまた一点をつけるとしよう。このようにしてくりかえしおこなって、ついに物質要素からなる墨を使い尽くしたとした場合、汝たちは、どのように考えるか。この多くの国土について、数学者、もしくは数学者の弟子は、その国土のはてを知り得て、そしてその数を知りうるであろうか。」

「それはできません、世尊よ。」

「比丘たちよ、この人が通りすぎた国土の、一点を置いた国と、置かなかった国とをすべてすりつぶ

して塵にして、一塵を一劫としたとしよう。かの仏が入滅してからの劫の数は、その塵の数をすぎること、無量、無辺の阿僧祇の百千万億倍の劫数である。私は如来の知見の力によって、その遠い昔を今日のように観ることができるのだ。」

そのとき、世尊は重ねて以上の意義を宣べられんとして、詩頌を説かれた。

「私が、過去世の、無量、無辺の劫の昔を思い起こしてみると、　仏、人中の最高者がおられた。

その仏は大通知勝という名であった。(1)

ある人が、力によって、大宇宙をすりつぶして、　この多くの物質を、すべて墨にして、　千の国土を過ぎて、一点を置くとしよう。(2)

このようにくりかえし置いてゆき、この多くの微塵の墨をすべて使い果したとする。(3)

そのような多くの国土の、(一微塵を)置いた国と置かなかった国とを、　再びことごとくすりつぶして塵にして、その一塵を一劫としよう。(4)

この多くの微塵の数の劫数よりも、(仏の住した)その時代はなお遠い。(5)

かの仏が入滅してから、そのようにはかりしれないほどの劫数がたっている。　如来の自由自在の智慧によって、かの仏の入滅と、　声聞や菩薩たちとを知ることは、ちょうど目前の入滅を見るかのようである。(6)

比丘たちよ、知るがよい、仏の智慧は浄らかですぐれており、　煩悩の汚れやさまたげがなく、無量の劫の長時を観とおすことができるのだ。」(7)

《諸比丘》ここでは、五百羅漢等をさす。**《乃往過去》**「乃往」は漢訳仏典特有の語。「そのむかし」ほどの意。普通「過去」「古昔」「古世」などの語と連語で用いられる。**《大通智勝如来》**梵語では Mahābhijñā-nābhibhu（偉大な通慧によって勝れた）という。**《好成》**梵本では Saṃbhavā（saṃbhava の女性形。「産み出すこと」「起源」などの意）という。本経のこの化城喩品のみにあらわれる仏で、他経典にその所出をみない。**《大相》**梵本では Mahārūpa（偉大な姿を有する、の意）という。**《三千大千世界》**第五章の語注参照。(三三六頁)。三千大千国土というも同じ。**《地種》**物質を構成する四元素の四大種（地・水・火・風）の一である「地大種」をいう。当時の仏教においては、あらゆる物質はこの四元素からなっていると考えられていた。なお、この三千大千世界の地種をすりつぶして墨にして云々、によって表わす時の長さを三千塵点劫といい、後の第十六章如来寿量品にも同様の数え方が説かれている（五百塵点劫）。**《無礙智》**何の障害もない自由自在の仏の智慧。

この段から第七章化城喩品である。章名は本章中に説かれる化城の喩えからとったものである。分科からいうと、本章から第九章の授学無学人記品までが因縁説に相当する。そして、因縁説は正説、すなわち因縁を説く部分と、授記を説く部分とに二分され、正説が本章に相当し、授記が五百弟子品と人記品とに相当する。先述のごとく（二四四—五頁）、因縁説は上根の舎利弗に（法説）、中根の四大声聞に（譬喩説）と説き来って、第三に下根の富楼那などのために過去世の因縁を説いて、法華経がこの現世のみでなく久遠の昔から諸仏によって説かれ続けてきたこと、そしてその法を聞く弟子たちも今世だけのつながりでなく、過去世からの遠いつながりであることを明かして、一乗に帰せしめるのである。それ故、梵本の章名は pūrvayoga（前世のつながり）となっている。

本章は、仏の知見が久遠であるということを明かす、いわば導入部分と、それ以後の宿世の結縁を明かす部分とに大別され、本段は、大通知勝仏という仏が久遠の昔に出現したことを先ず出だし、その時のありさまを思いおこすこと今日のごとくであるとする、本章の導入部分である。

佛告諸比丘。大通智勝佛。壽五百四十萬億。那由他劫。其佛本坐道場。破魔軍已。垂得阿耨多羅三藐三菩提。而諸佛法。不現在前。如是一小劫。乃至十小劫。結加趺坐。身心不動。而諸佛法。猶不在前。爾時忉利諸天。先爲彼佛。於菩提樹下。敷師子座。高一由旬。佛於此座。當得阿耨多羅三藐三菩提。適坐此座。時諸梵天王。雨衆天華。面百由旬。香風時來。吹去萎華。更雨新者。如是不絕。滿十小劫。供養於佛。乃至滅度。常雨此華。四王諸天。爲供養佛。常擊天鼓。其餘諸天。作天伎樂。滿十小劫。至于滅度。亦復如是。諸比丘。大通智勝佛。過十小劫。諸佛之法。乃現在前。成阿耨多羅三藐三菩提。其佛未出家時。有十六子。其第一者。名曰智積。諸子各有。種種珍異。玩好之具。聞父得成。阿耨多羅三藐三菩提。皆捨所珍。往詣佛所。諸母涕泣。而隨送之。其祖轉輪聖王。與一百大臣。及餘百千萬億人民。皆共圍繞。隨至道場。咸欲親近。大通智勝如來。供養恭敬。尊重讚歎。到已頭面禮足。繞佛畢已。一心合掌。瞻仰世尊。以偈頌曰。

大威德世尊　爲度衆生故　於無量億劫(1)　爾乃得成佛
諸願已具足　善哉吉無上　世尊甚希有　一坐十小劫
身體及手足　靜然安不動　其心常惔(2)怕　未曾有散亂

究竟永寂滅　安住無漏法　今者見世尊　安隱(3)成佛道
我等得善利　稱慶大歡喜　衆生常苦惱　盲瞑(4)無導師
不識苦盡道　不知求解脫　長夜增惡趣　減損諸天衆
從冥入於冥　永不聞佛名　今佛得最上　安隱(5)無漏道(6)
我等及天人　爲得最大利　是故咸稽首　歸命無上尊

爾時十六王子。偈讃佛已。勸請世尊。轉於法輪。咸作是言。世尊說法。多所安隱(7)。憐愍饒益。諸天人民。重說偈言。

世雄無等倫　百福自莊嚴　得無上智慧　願爲世間說
度脫於我等　及諸衆生類　爲分別顯示　令得是智慧
若我等得佛　衆生亦復然　世尊知衆生　深心之所念
亦知所行道　又知智慧力　欲樂及修福　宿命所行業
世尊悉知已　當轉無上輪

(1)劫＝歳　(2)惔＝憺　(3)(5)(7)隱＝穩　(4)瞑＝冥　(6)道＝法

仏、諸の比丘に告げたまわく、
「大通智勝仏は、寿五百四十万億那由他劫なり。其の仏、本、道場に坐して、魔軍を破し已って、阿耨多羅三藐三菩提を得たもうに垂んとするに、而も諸仏の法、現在前せず。是の如く、一小劫、乃至十小劫、結加趺坐して身心動じたまわず。而も諸仏の法、猶在前せざりき。爾の時に、忉利の諸天、先より彼の仏の為に、菩提樹下に於いて、師子の座を敷けり。高さ一由旬。仏、此の座に於いて、当に阿耨多羅三藐三菩提を得たもうべし

と。適めて此の座に坐したもうや、時に諸の梵天王、衆の天華を雨すこと、面ごとに百由旬なり。香風、時に来って萎める華を吹き去りて、更に新しき者を雨す。是の如く絶えず、十小劫を満てて仏を供養す。乃至、滅度まで、常に此の華を雨しき。四王の諸天、仏を供養せんが為に常に天鼓を撃つ。其の余の諸天、天の伎楽を作すこと、十小劫を満つ。滅度に至るまで、亦復、是の如し。

諸の比丘よ、大通智勝仏、十小劫を過ぎて、諸仏の法乃し現在前して、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまいき。其の仏、未だ出家したまわざりし時に、十六の子有り、其の第一をば名を智積と曰う。諸子、各 種種 の珍異玩好の具有り。父、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たもうと聞いて、皆所珍を捨てて仏所に往詣す。諸母、涕泣して、随いて之を送る。其の祖、転輪聖王、一百の大臣、及び余の百千万億の人民と、皆共に囲繞して、随いて道場に至り、咸く大通智勝如来に親近して、供養、恭敬、尊重、讃歎したてまつらんと欲し、到り已って、頭面に足を礼し、仏を繞り畢已って、一心に合掌し、世尊を瞻仰して、偈を以て頌して曰さく。

『大威徳世尊は　衆生を度せんが為の故に　無量億劫に於いて　爾して乃し成仏することを得
諸願已に具足したまえり　善い哉、吉無上なり。
世尊は甚だ希有なり　一たび坐して十小劫。　身体及び手足　静然として安んじて動ぜず。
其の心常に惔怕にして　未だ曾て散乱有らず　究竟して永く寂滅し　無漏の法に安住したまえり。
今者、世尊の　安隠に仏道を成じたもうを見て　我等善利を得　称慶して大いに歓喜す。
衆生は常に苦悩し　盲瞑にして導師無し。　苦尽の道を識らず　解脱を求むることを知らずして
長夜に悪趣を増し　諸天衆を減損す。　冥きより冥きに入り　永く仏の名を聞かず。
今、仏、最上　安隠無漏の道を得たまえり。　我等及び天人　為れ最大利を得たり。
是の故に咸く稽首して　無上尊に帰命したてまつる』と。

爾の時に十六の王子、偈をもって仏を讃め已って、世尊に法輪を転じたまえと勧請し、咸く是の言を作さく、
『世尊よ、法を説きたまえ。安隠ならしむる所多からん。諸天人民を憐愍し饒益したまえ』と。
重ねて偈を説いて言さく、

『世雄は等倫無し　百福をもって自ら荘厳し　無上の智慧を得たまえり　願わくは世間の為に説いて
我等及び　諸の衆生の類を度脱し　為に分別し顕示して　是の智慧を得せしめたまえ。　若し我等、
仏を得ば　衆生も亦復然ならん。
世尊は衆生の　深心の所念を知り　亦、所行の道を知り　又、智慧力を知しめせり。
欲楽及び修福　宿命所行の業　世尊は悉く知しめ已れり　当に無上輪を転じたもうべし』と。

〔訳〕仏は大勢の比丘たちに告げられた。
「大通智勝仏の寿命は、五百四十万・億・ナユタの劫（というながいながい年月）である。その仏は、もと、さとりの座に坐って、悪魔の軍勢を打ち破りおえ、無上の正しいさとりが得られそうになったのであるが、しかしその目前において諸仏の法が現前しない。そうして、一小劫から十小劫の間、結跏趺坐したまま、身も心も不動を保ったのであるが、しかもなお、諸仏の法は（その身に）現前しなかった。ところで、三十三天の神々は、先よりかの仏のために、菩提樹のもとに、獅子座を設けておいた。その高さは一ヨージャナもあり、仏がこの座に坐して無上の正しいさとりを獲得されるようにと（の願いであった）。仏が、はじめてこの座に坐られた、その時、多くの梵天王たちは、その座の周辺百ヨージャナにわたって、たくさんの天上の華を降りそそいだ。香りのよい風が、ときに吹いてきて、しぼんだ華を吹き去って、あらためて新しい華を降らせた。このようにして、たえることなく

十小劫の間、仏を供養しつづけて、ずっとその仏の入滅の時まで、つねにこの華を降らせつづけた。四天王たちは、仏を供養するために、天上の鼓を撃ちつづけた。そのほかの天の神々は、天上の音楽を奏して、十小劫をすぎ、その仏の入滅の時まで、奏しつづけたのである。

比丘たちよ、大通智勝仏は、十小劫を経過してから、諸仏の法が現前し、無上の正しいさとりを完成されたのである。この大通智勝仏は、まだ出家されないときに、十六人の子どもがあった。その第一の子どもを智積（ちしゃく）といった。子どもたちは、それぞれ種々さまざまな珍らしい玩具をもっていた。父が無上の正しいさとりを獲得したということを聞いた子どもたちは、みな大事にしていた玩具をうち捨てて、（父である）仏のところへでかけていった。母たちは、涙を流して泣きながらもその子についてゆき、見送った。祖父の転輪聖王（てんりんじょうおう）と、百人の大臣たち、そのほか百千万億の人々とが、みな一緒に（子どもたちを）とり囲んでついてゆき、さとりの座に至った。そこでみな大通智勝仏に近づき、供養し、心から敬い、尊重し、讃嘆しようとした。そこで仏の所へ到着すると、ひざまずき、頭に仏のみあしをいただいて礼拝（らいはい）し、仏のまわりを（右まわりに三度）まわりおえて、一心に合掌し、世尊を仰ぎ見て、詩頌によって讃嘆した。

『大威徳ある世尊は、衆生を救済されようとして、　無量億の劫の長時をかけて、そうして今ここに仏となられた。　多くの誓願はみたされた。すばらしく、めでたいことこのうえもないことだ。(8)

世尊が世に出現されることは非常にまれなことである。ひとたび坐るや、十小劫のあいだ、　身体や手足も、静かに安らかに、（一度たりとも）動かされなかった。(9)

その心はつねに静かに安らかで、散り乱れることはなかった。それが究極に達して、永く寂静となり、煩悩の汚れのない法のうちに安らかに身をおいておられる。(10)

いま、世尊が、安らかに仏の道を完成されたのを見て、私達はすばらしい利益を得られて、ともども称(たた)えよろこんで、大いにうれしく思ったのだ。(11)

衆生はつねに苦悩をいだき、盲目のようにくらく、導いてくれる師もいない。苦を滅する道も知らず、(したがって苦よりまぬがれる)解脱を求めることも知らない。(12)

長いあいだにわたって、悪しき境界を増し、多くの天上の神々を減少させてきた。闇処から闇処へと入って、永く仏の名を聞くことがなかった。(13)

いま、仏は、最上で、安らかな煩悩の汚れのない道を獲得された。私達と天の神々や人々たちは、最も大きな利益をそれによって得たのである。それゆえに、私達はみな、頭に仏のみあしをいただいて礼拝し、この上なく尊い人に帰依するのである』と。(14)

そのとき、十六人の王子たちは、詩頌によって仏を讃えおえると、世尊に法をお説き下さいとお願いし、みなつぎのように申しあげた。

『世尊よ、法をお説き下さい。(それによって)安らかになるものが多いことでしょう。多くの天の神々や人々をあわれみ、利益にあずからせたまえ』と。

そして、重ねて次の詩頌を唱えた。

『この世の雄者(である世尊)には、他にならぶものがおりません。百種の福徳によって、自らをおごそかに飾り、無上の智慧を獲得されました。どうか、世間のものたちのために説き、(15)

私達と、多くの衆生たちを救済し、そのために（仏の法を）ことわけし、あきらかに示して、その仏の智慧を得させたまえ。もし私達が仏となることができれば、衆生たちもまた、仏となることができましょう。(16)
世尊は、衆生たちの心の奥底の思いを知り、またその行いのさまを知り、さらにその智慧の力をも知っておられます。その心のねがい、及び修めた福徳、これまでの前世の行いの業、これらについて、世尊はすべてすでに御存知になっています。どうか、この上ない教えの法をお説き下さるように』」と。(17)

《五百四十万億那由他》 前章の注（三六七―三六八頁）参照。五四〇万×一千万×一千億という数になる。**《道場》** さとりを開いた場所、さとりの座。bodhi-maṇḍa. **《破魔軍已》** 魔軍とは、さとりの障礙となる菩薩の心中の煩悩を実体的にみたてたもの。仏伝の降魔成道に依っている。**《諸仏法不現在前》** 諸仏の法とは、諸仏がみなそれを證して仏になった阿耨多羅三藐三菩提のことをさす。したがって、悟りが得られないという意。**《一小劫》** 序品の語注（八八、九一頁）参照。**《結加趺坐》** 序品の語注（六一頁）参照。**《忉利諸天》** 仏教の世界観では、三界（欲界、色界、無色界）のうちの欲界に住む天（神のこと）に六種を数えて六欲天という。それらは、天空に住む、夜摩天から欲界の最高所の他化自在天までの四種の天と、地上の最高処、須弥山の頂上に住む帝釈天を主とする三十三天、及び須弥山の中腹に住む四天王とその眷属たち、の六種の天である。「忉利諸天」は、このうちの帝釈天を主とする三十三天のことをさす（「忉利」は Trāyastriṃśāḥ の音写の省略形）。『倶舎論』巻十一、分別世品によれば、須弥山の頂上は平坦で、一辺八万由旬の正方形になっており、この中央に善見城という城郭がある。この四周は一万由旬、すなわち一辺二千五百由旬で、高さ

一・五由旬、その城内に殊勝殿という宮殿があり、その四周は千由旬、一辺二百五十由旬である。この殊勝殿が帝釈天のすみかで、他の眷属の三十二天は善見城という城郭の内にそれぞれ住んでいるとする。《**師子座**》仏を獣類の王である獅子にたとえて、仏のすわる場所をこのようにいう。同様に仏の説法を獅子の咆哮にたとえて獅子吼という。《**梵天王**》『倶舎論』巻八及び十一分別世品によれば、三界のうちの色界は、初禅から四禅までの四種に区別されるが、このうちの初禅に三種の天界があるとする。下から順に梵衆天、梵輔天、大梵天といい、大梵天王を主として、その眷属たちが住むとされる。《**雨衆天華、面百由旬**》一々の方面に百由旬にわたって多くの天上の花をふらす、の意。《**四王諸天**》四王天は、先の六欲天のうち、最下位のもので、須弥山の中腹に住む天。北方に多聞天（毘沙門天のこと）、南に増長天、東に持国天、西に広目天が住んでいる。《**智積**》Jñānākara（「智慧の鉱脈を有する」の意）本経の提婆品では菩薩の名として出る。《**転輪聖王**》古代インドで考えられた全世界の統一者たる理想の帝王。三十二相をそなえ、武力によらず正法によって統治し、天より感得した宝輪を転がして四方を征服するとされる。『倶舎論』巻十二によれば、転輪王に金輪、銀輪、銅輪、鉄輪の四種の別があり、それぞれの統治範囲が決まっているという。

《**頭面礼足**》「稽首」「頭面接足」などともいう。インドにおける礼法の一つで、目上の者に対する最高の礼。地面にひざまずいて、両手によって相手の足をうけておしいただき、自分の頭につける礼。

《**繞仏畢已**》「繞（にょう）」とは、インドの礼法の一つ。詳しくは「右繞（うにょう）」といい、右肩をつねに真中に向けて右まわりに三度まわること。これを「右繞三匝（さんそう）」という。《**惔怕**》「惔」は「憺」。「憺」も「怕」も安らか、の意。

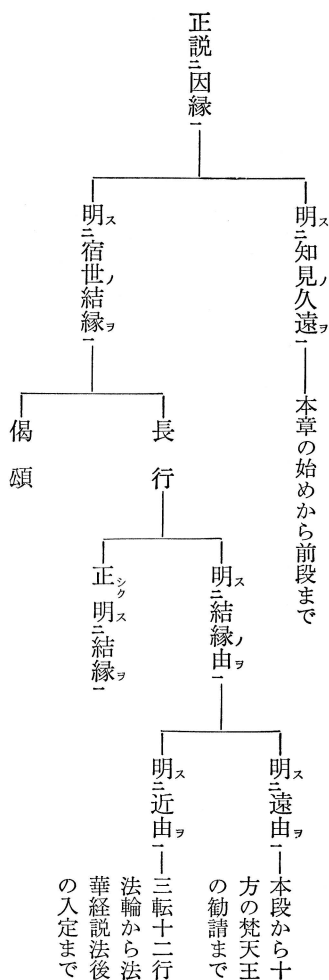
《**今者**》「者」は助字。いま、の意。《**長夜**》凡夫が無明のために長く生死輪廻をくりかえしているのを闇夜にたとえていうことば。《**悪趣**》六種の輪廻の生存の境界のうち、地獄・餓鬼・畜生を三悪趣（＝道）といい、これに阿修羅を加えて四悪趣ともいう。《**帰命**》心から仏に帰依すること。《**転於法輪**》教えの輪をま

わす、すなわち仏が法を説くことをいう。仏の教えが世の人々の心の煩悩を打ち砕くのを、転輪聖王が宝輪をまわして世界を征服するのに喩えることによって用いられる表現。**《世雄》**世界の雄者の意で、仏の美称。**《百福自荘厳》**百の福徳によって自らをおごそかに飾るという意。菩薩は、その修行期間である三阿僧祇劫が終ると、つぎにいよいよ仏としての三十二相・八十種好の相好を荘厳するために、百福の荘厳がなされる。それは、三十二相のうちの一相ずつについてそれぞれ百福を修してゆくことによって得られる。つまり、百福を修するごとに一相が荘厳される。この百福荘厳の期間が百劫のあいだとされる。釈尊は片足を揚げて七昼夜、仏を讃歎した功徳によって、百劫のうち九劫が減じて、九十一劫において仏になったという。**《宿命所行業》**衆生の過去世における宿命と、そのなしてきた善悪の業。

本段では、大通智勝仏の成道の様子を明かしている。まず仏の寿命の長遠なることを示し、その仏が成道に至るまでの過程と、諸天の供養のあり様を説き、次に成道後の眷属の供養、すなわち十六王子たちを中心とする眷属の様子を述べて、彼らが大通智勝仏に転法輪を請うことを説いている。そこで、次段からは十方の梵天王の説法勧請が説かれることになる。分科からいうと、本段以降は宿世の結縁を明かす部分で、これを結縁のいわれを明かす部分と結縁そのものを明かす部分との二つに分ける。そして、さらに結縁のいわれを明かす部分を「遠由」と「近由」とに二分する。

本段から十方の梵天王の勧請の段までが遠由に相当し、近由というのは、大通智勝仏の三転十二行法輪の説法から、十六王子の出家、大通智勝仏の法華経説法後の入定までに相当する。今、これを簡略に図示しておく。

佛告諸比丘。大通智勝佛。得阿耨多羅三藐三菩提時。十方各五百萬億。諸佛世界。六種震動。其國中間。幽冥之處。日月威光。所不能照。而皆大明。其中衆生。各得相見。咸作是言。此中云何。忽生衆生。又其國界。諸天宮殿。乃至梵宮。六種震動。大光普照。遍滿世界。勝諸天光。爾時東方。五百萬億。諸國土中。梵天宮殿。光明照曜。倍於常明。諸梵天王。各作是念。今者宮殿光明。昔所未有。以何因緣。而現此相。是時諸梵天王。卽各相詣。共議此事。時(1)彼衆中。有一大梵天王。名救一切。爲諸梵衆。而説偈言。

我等諸宮殿　光明昔未有　此是何因緣　宜各共求之

爲大德天生　爲佛出世間　而此大光明　遍照於十方

爾時。五百萬億國土。諸梵天王。與宮殿倶。各以衣裓。盛諸天華。共詣西方。推尋是相。見大通智勝如來。處于道場。菩提樹下。坐師子座。諸天。龍王。乾闥婆。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。恭敬圍繞。及見十六王子。請佛轉法輪。卽時諸梵天王。頭面禮佛。繞百千匝(2)。卽以天華。而散佛上。其所散華。如須彌山。幷以供養。佛菩提樹。其菩提樹。高十由旬。華供養已。各以宮殿。奉上彼佛。而作是言。唯見哀愍。饒益我等。所獻宮殿。願垂納受(3)。時諸梵天王。卽於佛前。一心同聲。以偈頌曰。

世尊甚希有　難可得値遇　具無量功德　能救護一切
天人之大師　哀愍於世間　十方諸衆生　普皆蒙饒益
我等所從來　五百萬億國　捨深禪定樂　爲供養佛故
我等先世福　宮殿甚嚴飾　今以奉世尊　唯願哀納受

爾時。諸梵天王。偈讃佛已。各作是言。唯願世尊。轉於法輪。度脱衆生。開涅槃道。時諸梵天王。一心同聲。而説偈言。

世雄兩足尊　唯願演説法　以大慈悲力　度苦惱衆生

爾時大通智勝如來。默然許之。

(1)時＝而　(2)匝＝帀　(3)受＝處

仏、諸の比丘に告げたまわく、

「大通智勝仏、阿耨多羅三藐三菩提を得たまいし時、十方の各五百万億の諸仏世界、六種に震動し、其の国の中間幽冥の処、日月の威光も照らすこと能わざる所、而も皆、大いに明かなり、其の中の衆生、各相見る

ことを得て、咸く是の言を作さく、
『此の中に云何ぞ、忽ちに衆生を生ぜる』と。又、其の国界の諸天の、宮殿、乃至梵宮まで六種に震動し、大光普く照らして世界に遍満し、諸天の光に勝れり。爾の時に、東方五百万億の、諸の国土の中の梵天の宮殿、光明照曜して、常の明に倍れり。諸の梵天王、各是の念を作さく、
『今者、宮殿の光明、昔より未だ有らざる所なり。何の因縁を以て、此の相を現ずる』と。
是の時に諸の梵天王、即ち各相詣って、共に此の事を議す。時に彼の衆の中に、一りの大梵天王有り。救一切と名づく。諸の梵衆の為に、偈を説いて言わく、

『我等が諸の宮殿　光明昔より未だ有らず。　此は是何の因縁ぞ　宜しく各共に之を求むべし。
大徳の天の生ぜるとや為ん　仏の世間に出でたまえるとや為ん　而も此の大光明　遍く十方を照らす』
と。

爾の時に、五百万億の国土の諸の梵天王、宮殿と倶に、各、衣裓を以て、諸の天華を盛って、共に西方に詣いて、是の相を推尋するに、大通智勝如来の、道場菩提樹下に処し、師子座に坐して、諸天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の、恭敬し囲繞せるを見、及び十六王子の、仏に転法輪を請ずるを見る。即時に諸の梵天王、頭面に仏を礼し、繞ること百千匝して、即ち天華を以て、仏の上に散ず。其の所散の華、須弥山の如し。並びに以て、仏の菩提樹に供養す。其の菩提樹、高さ十由旬なり。華の供養已って、各宮殿を以て、彼の仏に奉上して、是の言を作さく、
『唯、我等を哀愍し饒益せられて、所献の宮殿、願わくは納受を垂れたまえ』と。
時に諸の梵天王、即ち仏前に於いて、一心に声を同じうして、偈を以て頌して曰さく、

『世尊は甚だ希有にして　値遇すること得べきこと難し。　無量の功徳を具して　能く一切を救護し

天・人の大師として　世間を哀愍したもう。
十方の諸の衆生　普く皆、饒益を蒙る。
我等が従り来る所は　五百万億の国なり。
深禅定の楽を捨てたることは　仏を供養せんが為の故なり。
我等、先世の福あって　宮殿甚だ厳飾せり。
今以て世尊に奉る　唯願わくは哀んで納受したまえ』と。

爾の時に諸の梵天王、偈をもって仏を讃め已って、各是の言を作さく、
『唯、願わくは世尊よ、法輪を転じて衆生を度脱し、涅槃の道を開きたまえ』と。
時に諸の梵天王、一心に声を同じうして、偈を説いて言さく、

『世雄両足尊よ　唯、願わくは法を演説し
大慈悲の力を以て　苦悩の衆生を度したまえ』と。

爾の時に、大通智勝如来、黙然として之を許したもう。

〔訳〕仏は大勢の比丘たちに告げられた。
「大通智勝仏が、無上の正しいさとりを獲得された時、十方の、おのおの五百万億の諸仏の世界は、六種に震動し、それぞれの国の中間にある深くて暗い処、そこは太陽や月の威力ある光も照らすことができない場所であるが、（その暗黒の世界までも）大いに明るくなった。その（暗黒の世界の）なかに住む衆生たちは、（その光によってはじめて）たがいに相手を見ることができて、みな次のように言った。
『このなかに、一体どうして、たちまちのうちに多くの衆生たちが生じたのであろうか』と。
また、これら（すべての）国土世界において、（欲界の）多くの天の神々たちの宮殿から、（色界の）梵天たちの宮殿にいたるまで、六種に震動し、大光明がくまなく世界を照らしてみちあふれ、その光明は天の神々の光よりも勝っていた。

ところで、その時、東方にある五百万億の多くの国土の中の梵天の宮殿に、光明が照り輝いて、それがいつもの光明の二倍の明るさとなった。梵天王たちは、それぞれこのように考えた。『いま、われらの宮殿の光明は、今までになく輝いている。これは一体どういういわれがあって、このような瑞相（ずいそう）があらわれたのであろうか』と。

このとき、多くの梵天王たちは、すぐにそれぞれ訪れあって、ともにこのことを論じあった。ところで、その集まりのなかに、一人の大梵天王がいて、その名を救一切（くいっさい）といった。彼は大勢の梵天たちのために詩頌を説いて、次のように言った。

『われわれの多くの宮殿に輝いている光明は、今までにない輝きである。これは一体どういうわけであろう。(18)

それぞれ皆で、そのいわれをたずねなければならない。偉大な徳を有する天子が生まれたのであろうか。(19)

それとも仏が世に出現されたのであろうか。この大光明は、くまなく十方を照らしている』と。(20)

そのとき、五百万億の国土の梵天王たちは、宮殿と一緒に（飛翔し）、それぞれが花皿に多くの天上の花を盛って、一緒に西方にゆき、この瑞相（ずいそう）のいわれをたずねてみた。すると、そこに、大通智勝如来が、さとりの座である菩提樹の下で、獅子座に坐って、それを多くの天の神々や、龍王、乾闥婆（けんだつば）、緊那羅（きんなら）、摩睺羅伽（まごらか）、人間と人間以外のものたちが恭しく（うやうやしく）敬い、とり囲んでいるのが見え、それに十六人の王子たちが、仏に法を説かれるようにと請う（こう）ているのが見られた。

そこですぐさま、大勢の梵天王たちは、仏のみあしを頭にいただいて礼拝をなし、仏を右まわりに百千回もめぐって、天上の花を仏の上に散らした。その撒かれた花は、須弥山のように高くつもった。同時に仏の菩提樹にも（その花を散らして）供養した。その菩提樹は、高さ十ヨージャナであった。花による供養がおわると、それぞれが、自分たちの宮殿をその仏にたてまつって、次のように申し上げた。

『なにとぞ、私どもにあわれみをかけ、利益をこうむらせ下さいまして、献上致しました宮殿を、どうかお納め下さい』と。

そこで、大勢の梵天王たちは、仏のみまえで、一心に、異口同音に次のような詩頌をとなえた。

『世尊は、（世に出現されることは）はなはだまれであります。（それ故）お会いすることができるのはむつかしいことです。（世尊は）無量の功徳をそなえ、すべてのものを救いあげ保護し、天上の神々と人間たちの偉大な師として、世界のものたちをあわれみ下さいます。十方の多くの衆生たちは、それであますところなくすべてが利益をこうむります。(21)

私達は、五百万億の国々からやってまいりました。深い瞑想の楽しみを捨てて（までしてやってきたのは）、仏に供養するためであります。(22)

私達は、先の世になした福徳によって、私達の宮殿は極めておごそかに飾られております。今、それを世尊にたてまつります。何とぞあわれみを垂れられて、お納め下さい』と。(23)

そのときに、大勢の梵天王たちは、詩頌によって仏を讃えおえてから、それぞれ次のように申し上げた。

『どうか、世尊よ、法をお説きになって、衆生を済度し、涅槃（ねはん）の道をお開き下さい』と。
そこで、大勢の梵天王たちは、一心に、異口同音に詩頌をとなえた。
『世界の雄者、人中の最高者よ、何とぞ法を説かれ、大きな慈悲の力によって、苦悩する衆生たちを救いたまえ』と。(24)　第(25)偈は本経羅什訳にこれを闕く。
そのときに、大通智勝如来は、無言のままでそれを承諾された。

《六種震動》第一章序品の語注（六一頁）参照。**《其国中間幽冥之処》**世界と世界のはざまにある暗黒の世界。ここに生存する衆生たちは、暗黒なので他の衆生たちを見ることができず、したがって自分以外の者が存在することすら知らない。**《諸天宮殿》**諸天、すなわち天の神々が住む宮殿。神々とともに天空を自由自在に飛行できるとされる。ここにいう諸天とは、色界に存する梵天に対して、欲界における諸天をいう。前注「忉利諸天」（三九二頁）の項参照。**《梵宮》**梵天の宮殿のこと。前注「梵天王」の項（三九三頁）参照。**《救一切》**すべてのものを救済する、の意。梵語 Sarvasattvatrātar（一切の衆生を救済する）の訳。**《諸梵天王与宮殿倶》**諸の梵天王のゆくところ、宮殿も同時にそれに随う。すなわち、宮殿が梵天と一緒に飛翔し移動すること。**《衣裓》**花を盛るかご、花皿。そのほか、肩にかけて手をふいたり、物を盛るのに使用する長方形の布片のこともいう。**《龍王・乾闥婆・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等》**第一章序品の語注参照（五二ー五三、及び六二頁）。なお「人非人」とはここでは人間と人間以外のもの（天龍などの八部衆）の意。**《即時》**六朝訳経期以後、仏典に多くみられる口語表現による複合語。すぐさま、の意。本経の他の箇所にも前後十五回の用例がある。本経にはほかにも「倶時」などの同様の表現がみられる。
《須弥山》Sumeru の音写語。妙高山とも意訳する。当時のインドの世界観によれば、世界の根底は風輪か

らなり、その上層は水輪、最上層は金輪から成っている。この金輪の表層に世界が載っている。円形の金輪上の円周に沿って鉄囲山という山脈があり、世界はこの山脈によって囲まれている。この世界の中心に高く（地上八万ヨージャナ、海中に没している部分八万ヨージャナ）そびえているのが須弥山である。この須弥山を中心にして七山八海がとりまいており、その最も外側が鉄囲山によって囲まれていること上述のごとくである。七山の外側の海上の四方に四州がある。そのうちの南方にある贍部州（Jambudvipa）が人間の住するところとなっている。須弥山の形状は、山というよりも、地上部分が一辺八万ヨージャナの立方体である。その頂上部分に三十三天の住処があり、その中腹地上より四万ヨージャナのところに四天王たちの住処がある（以上『倶舎論』巻十一、分別世品による）。

《黙然許之》仏が承諾の意を示される時、身をもって承諾の意を表わされる身許、口によって表わされる口許、心によって表わされる心許とがある。今は、うなずかれたのでもなく、口でよろしいと言って許されたのでもなく、黙したままで心に許されたことを示す。

この段から以降は、十方の梵天王たちの説法勧請である。本段は十方のうちの、東方の梵天王の説法勧請を述べる段で、次段から東南方、南方と続き、西南方、下方は同様として略し、最後に上方について述べて、十方の梵天勧請を説いている。十方のうち、東方、東南方、南方、上方の四方についてほぼ同様の表現をくりかえし用いて十方勧請を説くが、本経のなかでこのように似た表現を用いてのくりかえしが多いのは本章だけである。

以下、各段に分けて見てゆくことにする。

又諸比丘。東南方。五百萬億國土。諸大梵王。各自見宮殿。光明照曜。昔所未有。歡喜踊躍。生希有心。卽各相詣。共議此事。時彼衆中。有一大梵天王。名曰大悲。爲諸梵衆。而說偈言。

是事何因緣　而現如此相　我等諸宮殿　光明昔未有
爲大德天生　爲佛出世間　未曾見此相　當共一心求
過千萬億土　尋光共推之　多是佛出世　度脫苦衆生

爾時。五百萬億。諸梵天王。與宮殿俱。各以衣裓。盛諸天華。共詣西北方。推尋是相。見大通智勝如來。處于道場。菩提樹下。坐師子座。諸天。龍王。乾闥婆。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。恭敬圍繞。及見十六王子。請佛轉法輪。時諸梵天王。頭面禮佛。繞百千匝[1]。卽以天華。而散佛上。所散之華。如須彌山。幷以供養。佛菩提樹。華供養已。各以宮殿。奉上彼佛。而作是言。唯見哀愍。饒益我等。所獻宮殿。願垂納受[2]。爾時諸梵天王。卽於佛前。一心同聲。以偈頌曰。

聖主天中王[3]　迦陵頻伽聲　哀愍衆生者　我等今敬禮
世尊甚希有　久遠乃一現　一百八十劫　空過無有佛
三惡道充滿　諸天衆減少　今佛出於世　爲衆生作眼
世間所歸趣　救護於一切　爲衆生之父　哀愍饒益者
我等宿福慶　今得値世尊

爾時。諸梵天王。偈讚佛已。各作是言。唯願世尊。哀愍一切。轉於法輪。度脫衆生。時諸梵天王。一心同聲。而說偈言。

大聖轉法輪　顯示諸法相　度苦惱衆生　令得大歡喜
衆生聞此法　得道若生天　諸惡道減少　忍善者增益
爾時。大通智勝如來。默然許之。

(1)匝＝帀　(2)受＝處　(3)王＝天

又、諸の比丘よ、東南方五百万億の国土の、諸の大梵王、各自ら、宮殿の光明照曜して、昔より未だ有らざる所なるを見て、歓喜踊躍し、希有の心を生じて、即ち各相詣って、共に此の事を議す。時に、彼の衆の中に、一りの大梵天王有り、名づけて大悲と曰う。諸の梵衆の為に、偈を説いて言わく、

『是の事何の因縁あって　此の如き相を現ずる。　我等が諸の宮殿の　光明昔より未だ有らず。
大徳の天の生ぜるとや為ん　仏の世間に出でたまえるとや為ん。　未だ曾て此の相を見ず　当に共に一心に求むべし。
千万億の土を過ぐとも　光を尋ねて共に之を推せん。　多くは是れ仏の世に出でて　苦の衆生を度脱したもうならん』と。

爾の時に、五百万億の諸の梵天王、宮殿と倶に、各衣裓を以て、諸の天華を盛って、共に西北方に詣いて、是の相を推尋するに、大通智勝如来の、道場菩提樹下に処し、師子座に坐して、諸天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の、恭敬、囲繞せるを見、及び十六王子の、仏に転法輪を請ずるを見る。時に、諸の梵天王、頭面に仏を礼し、繞ること百千匝して、即ち天華を以て、仏の上に散ず。所散の華、須弥山の如し。並びに以て、仏の菩提樹に供養す。華の供養已って、各宮殿を以て、彼の仏に奉上して是の言を作さく、

『唯、我等を哀愍し饒益せられて、所献の宮殿、願わくは納受を垂れたまえ』と。

爾の時に、諸の梵天王、即ち仏前に於いて、一心に声を同じうして、偈を以て頌して曰さく、

『聖主・天中王　迦陵頻伽の声をもって　衆生を哀愍したもう者を　我等、今敬礼す。
世尊は甚だ希有にして　久遠に乃し一たび現じたもう。　一百八十劫　空しく過ぎて仏有すこと無し。
三悪道充満し　諸天衆減少せり。
今仏世に出でて　衆生の為に眼と作り　世間の帰趣する所として　一切を救護し　衆生の父と為って
哀愍し饒益したもう者なり。　我等宿福の慶あって　今世尊に値いたてまつることを得たり』と。

爾の時に、諸の梵天王、偈をもって仏を讃め已って、各是の言を作さく、『唯、願わくは世尊よ、一切を哀愍して、法輪を転じ、衆生を度脱したまえ』と。

時に諸の梵天王、一心に声を同じうして、偈を説いて言さく。

『大聖よ、法輪を転じて　諸法の相を顕示し　苦悩の衆生を度して　大歓喜を得せしめたまえ。
衆生、此の法を聞かば　道を得、若しは天に生じ　諸の悪道減少し　忍善の者増益せん』と。

爾の時に、大通智勝如来、黙然として之を許したもう。

〔訳〕大勢の比丘たちよ、また東南方の五百万億の国々の、数多くの梵天王たちは、それぞれ宮殿の光明がこれまでになく照り輝いているのを見て、歓び躍り上って、いつにない思いを生じ、即座にそれぞれ訪れあって、ともにこのことを論じあった。

その時に、その集まりのなかに一人の大梵天王がいて、その名を大悲といった。彼は大勢の梵天たちに詩頌を説いて、次のように言った。

『これは一体、どういうわけがあって、このような様があらわれたのであろうか。　われわれの多くの宮殿に輝いている光明は、いままでにない輝きである。(26)

偉大な徳を有した天子が生まれたのであろうか。(27)
それとも仏が世に出現されたのであろうか。(28)
いまだかつてこのようなありさまは見たことがない。ともども一心に（その原因を）探そう。(29)
一千万億の国土を過ぎても、光をたずねて一緒に追求してみよう。 大方、仏が世に出現して、
苦しんでいる衆生たちを救済されるのであろう。』(30)
その時に、五百万億の（国々の）大勢の梵天王たちは、宮殿と一緒に（飛翔し）、それぞれ花皿に
たくさんの天上の華を盛って、そろって西北方にゆき、この瑞相のいわれをたずねてみると、大通智
勝如来が、さとりの座である菩提樹の下で、獅子座に坐っており、それを大勢の天の神々や、龍王、
乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人間と人間以外のものたちが、恭しく敬いつつ、とり囲んでいるのが見
え、それに十六人の王子たちが、仏に教えの法を説かれるようにと請うているのが見えた。
そこで、大勢の梵天王たちは、仏のみあしを頭にいただいて礼拝をなし、仏を右まわりに百千回も
めぐって、そして天上の華を仏の上に散らした。その撒かれた華は、須弥山のように高くつもった。
そして、やはり仏の菩提樹にも華の供養をなした。その華の供養がおわると、それぞれが、自分たち
の宮殿を仏にたてまつって、次のように言った。
『なにとぞ、私どもにあわれみをかけ、利益をお与え下さって、献上致しました宮殿を、どうかお納
め下さいますように』と。
そこで、大勢の梵天王たちは、仏のみまえで、一心に声をそろえて、詩頌によって次のように言っ
た。

『聖なる主、神々のなかの最高者よ、カラヴィンカ鳥のような美しい声によって、衆生をあわれみたもう方を、われわれは、今、敬礼致します。(31)

世尊は（世に出現されることは）、非常にまれなことであり、はるかな時をすぎて、今やっと出現されました。百八十劫という長時が、仏がこの世に存在しないままに空しく過ぎました。(32)

（そのあいだに）三種の悪しき生存の境界は充満し、天の神々が減少致しました。(33)

今、仏は、世に出現されて、衆生のためにその眼となり、この世のものたちが帰依し趣く所として、すべてのものを救済保護し、衆生の父となって、あわれみ、利益を与えて下さいます。

われわれは、前の世からの福徳のおかげで、今、世尊にお会いすることができました。』(34)

その時、大勢の梵天王たちは、詩頌によって仏を讃嘆しおわって、それぞれ次のように言った。

『どうか世尊よ、すべてのものをあわれみ下さり、法をお説きになって、衆生を済度されますように』と。

そこで大勢の梵天王たちは、一心に声をそろえて、詩頌を唱えて言った。

『偉大な聖者よ、法をお説きになって、この世界の真のあり方を明らかに示し、苦悩する衆生を救済して、大きな歓びを得させて下さいますように。(35)

衆生たちがこの教えを聞けば、さとりを得、あるいは天界に生まれ、さまざまな悪しき境界が減少し、忍んで善をなす者が増えることでしょう。』(36)

その時、大通智勝如来は、無言のままにそれを承諾された。

《大悲》 梵本では Adhimātrakāruṇika（非常にあわれみの深い者）という。**《聖主・天中王》** いずれも仏陀の尊称。「聖主」は聖者の上首の意。「天中王」は天（＝神）の中の王の意で、神々のなかの最高の神ということ（梵語 devatideva）。**《迦陵頻伽》** 梵語 kalaviṅka の音写。インドで産する雀の一種。鳴き声が美しいことで知られる。好声、美音、妙音鳥などと訳される。仏典では極楽浄土にすむ鳥ともされ、浄土曼荼羅には人頭鳥身の姿によって描かれている。**《為衆生作眼》** 善悪をわきまえない無目に等しい衆生を、仏が世に出でて教化し導くこと。第十一章見宝塔品の偈にも「世間の眼」という表現がある。**《顕示諸法相》** 世の存在の真のあり方を明らかにすること。**《得道》** 道とは、ここではさとりの意味。初期漢訳仏典では bodhi（さとり）の訳語として、老荘道家哲学の中心概念の「道」という語が用いられた。後には本経におけるように「菩提」と音訳されるようになるが、その使用例は七世紀ころまで残存する。**《忍善》** 忍耐してよく善事を修すること。

又諸比丘。南方五百萬億國土。諸大梵王。各自見宮殿。光明照曜。昔所未有。歡喜踊躍。生希有心。卽各相詣。共議此事。以何因緣。我等宮殿。有此光曜。時[1]彼衆中。有一大梵天王。名曰妙法。爲諸梵衆。而說偈言。

我等諸宮殿　光明甚威曜　此非無因緣　是相宜求之
過於百千劫　未曾見是相　爲大德天生　爲佛出世間

爾時。五百萬億諸梵天王。與宮殿俱。各以衣裓。盛諸天華。共詣北方。推尋是相。見大通智勝如來。處于道場。菩提樹下。坐師子座。諸天。龍王。乾闥婆。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。恭敬圍繞。及見十六王子。請佛轉法輪。時諸梵天王。頭面禮佛。繞百千匝(2)。即以天華。而散佛上。所散之華。如須彌山。并以供養。佛菩提樹。華供養已。各以宮殿。奉上彼佛。而作是言。唯見哀愍。饒益我等。所獻宮殿。願垂納受(3)。爾時諸梵天王。即於佛前。一心同聲。以偈頌曰。

世尊甚難見　破諸煩惱者　過百三十劫　今乃得一見
諸飢渴衆生　以法雨充滿　昔所未曾見(4)　無量智慧者
如優曇鉢花(5)　今日乃値遇　我等諸宮殿　蒙光故嚴飾
世尊大慈悲　唯願垂納受

爾時。諸梵天王。偈讃佛已。各作是言。唯願世尊。轉於法輪。令一切世間。諸天。魔梵。沙門。婆羅門。皆獲安隱(6)。而得度脫。時諸梵天王。一心同聲。以偈頌曰。

唯願天人尊　轉無上法輪　擊于大法鼓　而吹大法螺
普雨大法雨　度無量衆生　我等咸歸請　當演深遠音

爾時。大通智勝如來。默然許之。西南方。乃至下方。亦復如是。

(1)時＝而　(2)匝＝帀　(3)受＝処　(4)見＝覩　(5)鉢花＝波羅　(6)隱＝穩

又、諸の比丘よ、南方五百万億の国土の諸の大梵王、各自ら宮殿の光明照曜して、昔より未だ有らざる所なるを見て、歓喜踊躍し、希有の心を生じて、即ち各相詣って、共に此の事を議す。

『何の因縁を以て、我等が宮殿、此の光曜有る』と。

時に、彼の衆の中に、一りの大梵天王有り、名を妙法と曰う。諸の梵衆の為に、偈を説いて言わく、

『我等が諸の宮殿　光明甚だ威曜せり。　此れ因縁無きに非じ　是の相宜しく之を求むべし。
百千劫を過ぐれども　未だ曾て是の相を見ず。　大徳の天の生ぜるとや為ん　仏の世間に出でたまえるとや為ん』と。

爾の時に、五百万億の諸の梵天王、宮殿と倶に、各衣裓を以て、諸の天華を盛って、共に北方に詣いて、是の相を推尋するに、大通智勝如来の、道場菩提樹下に処し、師子の座に坐して、諸天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の、恭敬囲繞せるを見、及び十六王子の、仏に転法輪を請ずるを見る。時に、諸の梵天王、頭面に仏を礼し、繞ること百千匝して、即ち天華を以て、仏の上に散ず。所散の華、須弥山の如し。並びに以て、仏の菩提樹に供養す。華の供養已って、各宮殿を以て、彼の仏に奉上して、是の言を作さく、

『唯、我等を哀愍し饒益せられて、所献の宮殿、願わくは納受を垂れたまえ』と。

爾の時に、諸の梵天王、即ち仏前に於いて、一心に声を同じうして、偈を以て頌して曰さく、

『世尊は甚だ見たてまつり難し　諸の煩悩を破したまえる者なり。　百三十劫を過ぎて　今、乃ち一たび見たてまつることを得。
諸の飢渇の衆生に　法雨を以て充満したもう。　昔より未だ曾て見ざる所の　無量の智慧者なり。
優曇鉢花の如くにして　今日乃ち値遇したてまつる。
我等が諸の宮殿　光を蒙るが故に厳飾せり。　世尊よ、大慈悲をもって　唯願わくは納受を垂れたまえ』と。

爾の時に、諸の梵天王、偈をもって仏を讃め已って、各是の言を作さく、

『唯、願わくは世尊よ、法輪を転じて一切世間の諸天、魔、梵、沙門、婆羅門をして、皆安隠なることを獲、而も度脱することを得せしめたまえ』と。

時に、諸の梵天王、一心に声を同じうして、偈を以て頌して曰さく、

『唯、願わくは天人尊よ　無上の法輪を転じ　大法の鼓を撃ち　大法の螺を吹き　普く大法の雨を雨して　無量の衆生を度したまえ。

我等、咸く帰請したてまつる　当に深遠の音を演べたもうべし』と。

爾の時に、大通智勝如来、黙然として、之を許したもう。

西南方、乃至、下方も亦復是の如し。

〔訳〕また、大勢の比丘たちよ、南方の五百万億の国々の、数多くの大梵天王たちは、それぞれ、宮殿の光明が、これまでになく照り輝いているのを見て、歓び躍り上って、いつにない思いを生じ、すぐさまそれぞれ訪れあって、ともにこのことを論じあった。

『一体どういうわけで、われわれの宮殿がこのように光り輝くのであろうか』と。

その時に、その集まりのなかに、一人の大梵天王がいて、その名を妙法といった。彼は大勢の梵天たちの集まりに、詩頌を唱えて言った。

『われわれの宮殿に、光明がとても明るく輝いている。　これにはいわれがないはずがない。この（瑞）相（のわけ）をたずねてみよう。(37)

百千の劫という長時が過ぎ去ったけれども、いまだかつてこのようなありさまは見たことがない。

大きな徳を有する天子が生まれたのであろうか。それとも仏がこの世に出現されたのであろう

か。』(38)

その時に、五百万億の（国々の）大勢の梵天王たちは、宮殿と一緒に（飛翔し）、それぞれ花皿にたくさんの天上の華を盛って、ともども北方にゆき、この瑞相のいわれをたずねてみると、大通智勝如来が、さとりの座の菩提樹の下に居られ、獅子座に坐っており、それを大勢の天の神々や龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人間と人間以外のものたちが、恭しく敬いつつ、とり囲んでいるのが見えた。それに、十六人の王子たちが、仏に法を説かれるようにと請うているのが見えた。

そこで、大勢の梵天王たちは、仏のみあしを頭にいただいて礼拝をなし、仏を右まわりに百千回もめぐって、そして天上の華を仏の上に散らした。その撒かれた華は、須弥山のように高くつもった。そしてやはり、仏の菩提樹にも華の供養をなした。その華の供養がおわると、それぞれが、自分たちの宮殿を仏にたてまつって、次のように言った。

『なにとぞ、私どもにあわれみをかけ、利益を与え下さって、献上致しました宮殿を、どうかお納め下さいますように』と。

その時に、大勢の梵天王たちは、そこで仏のみまえで、一心に声をそろえて、詩頌によって次のように申し上げた。

『世尊に見えることは非常にむつかしい。（世尊は）多くの煩悩をうち破られた方であります。

百三十劫という長時をすぎて、今やっとお会いすることができました。(39)

（世尊は）多くの飢え渇いている衆生たちに、教えの雨をふらして、充たして下さいます。昔からいまだかつて見たことのない、はかりしれない智慧をおもちの方であります。ウドンバラ

の花のように（見ることのむつかしいあなたに）、今日、やっとお会いすることができました。(40)われわれの、多くの宮殿は、光を（世尊より）蒙って、おごそかに飾られました。世尊よ、大きな慈悲によって、何とぞお納め下さいますように』と。(41)

その時に、梵天王たちは、詩頌によって仏を讃歎しおわると、それぞれ次のように言った。

『何とぞ、世尊よ、法をお説きになって、それによってこの世すべての神々、悪魔、梵天、修行者、バラモンたちが、みな心安らかとなり、そして救済されることができますように』と。

そこで、大勢の梵天王たちは、一心に声をそろえて、詩頌によって申し上げた。

『天上と人間のなかの尊者よ、何とぞ、無上の法の教えを説き、偉大な法の鼓を打ちならし、偉大な法の螺貝を吹き鳴らして下さいますように。(42)くまなく偉大な法の雨をふらして、無量の衆生たちを救済して下さい。われわれは、みな（世尊に）帰依し、お願いもうします。どうか、深遠な音声の説法をおのべ下さいますように』と。(43)

その時に、大通智勝如来は、無言のままにそれを承諾された。

西南方から下方にいたるまで、またこれと同じようであった。

《妙法》すぐれた法の意。梵本では Sudharma（善法）という。《優曇鉢花》優曇婆羅、あるいは優曇華とも。udumbara の音写。インド産のイチジク属の常緑樹で大木になり、イチジクと同じく花托そのものが果実を形成してその中に花を包みこんで外からは見えない。果実は甘く食用になるという（満久崇麿『仏典の

植物』八坂書房)。仏教では三千年に一度花を咲かせる木として、非常にまれなことの比喩に用いる。また、この花が咲く時には仏、あるいは転輪聖王が世に出現するという伝説がある。《**沙門**》śramaṇa(つとめる人)。出家の修行者のことをいう。《**天人尊**》天と人、すなわち神々と人間のなかの尊き者の意で、仏の尊称。《**西南方乃至下方**》十方のうち、すでに東方、東南方、南方を述べ、次に上方がこれから説かれるので、その間の西南方から、西方・西北方・北方・東北方と下方までを略して西南方から下方までといったもの。

爾時上方。五百萬億國土。諸大梵王。皆悉自覩。所止宮殿。光明威曜。昔所未有。歡喜踊躍。生希有心。卽各相詣。共議此事。以何因緣。我等宮殿。有斯光明。時(1)彼衆中。有一大梵天王。名曰尸棄。爲諸梵衆。而說偈言。

今以何因緣　我等諸宮殿　威德光明曜　嚴飾未曾有
如是之妙相　昔所未聞見　爲大德天生　爲佛出世間

爾時。五百萬億。諸梵天王。與宮殿俱。各以衣裓。盛諸天華。共詣下方。推尋是相。見大通智勝如來。處于道場。菩提樹下。坐師子座。諸天。龍王。乾闥婆。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。恭敬圍繞。及見十六王子。請佛轉法輪。時諸梵天王。頭面禮佛。繞百千匝(2)。卽以天華。而散佛上。所散之花(3)。如須彌山。幷以供養。佛菩提樹(4)。花供養已。各以宮殿。奉上彼佛。而作是言。唯見哀愍。饒益我等。所獻宮殿。願垂納受(5)。時諸梵天王。卽於佛前。一心同聲。以偈頌曰。

善哉見諸佛　救世之聖尊　能於三界獄　勉出諸衆生
普智天人尊　哀愍(6)群萌類　能開甘露門　廣度於一切

於昔無量劫　空過無有佛　世尊未出時　十方常暗冥(7)
三惡道增長　阿修羅亦盛　諸天衆轉減　死多墮惡道
不從佛聞法　常行不善事　色力及智慧　斯等皆減少
罪業因緣故　失樂及樂想　住於邪見法　不識善儀則
不蒙佛所化　常墮於惡道　佛爲世間眼　久遠時乃出
哀愍諸衆生　故現於世間　超出成正覺　我等甚欣慶
及餘一切衆　喜歎未曾有　我等諸宮殿　蒙光故嚴飾
今以奉世尊　唯垂哀納受　願以此功德　普及於一切
我等與衆生　皆共成佛道

爾時五百萬億。諸梵天王。偈讚佛已。各白佛言。唯願世尊。轉於法輪。多所安隱(8)。多所度脫。時諸梵天王。而說偈言。

世尊轉法輪　擊甘露法鼓　度苦惱衆生　開示涅槃道
唯願受我請　以大微妙音　哀愍而敷演　無量劫習法

(1)時＝而　(2)匝＝市　(3)(4)花＝華　(5)受＝處　(6)哀愍＝愍哀　(7)冥＝瞑　(8)隱＝穩

爾の時に、上方、五百万億の国土の、諸の大梵王、皆悉く、自ら所止の宮殿の、光明威曜して、昔より未だ有らざる所なるを観て、歓喜踊躍し、希有の心を生じて、即ち各相詣って、共に此の事を議す。『何の因縁を以て、我等が宮殿、斯の光明有る』と。
時に彼の衆の中に、一りの大梵天王有り、名を尸棄と曰う。諸の梵衆の為に、偈を説いて言わく、

『今何の因縁を以て　我等が諸の宮殿　威徳の光明曜き　厳飾せること未曾有なる。
是の如きの妙相は　昔より未だ聞き見ざる所なり。
大徳の天の生ぜるとや為ん　仏の世間に出でたまえるとや為ん』と。

爾の時に、五百万億の諸の梵天王、宮殿と倶に、各衣裓を以て、諸の天華を盛って、共に下方に詣いて是の相を推尋するに、大通智勝如来の道場、菩提樹下に処し、師子の座に坐して、諸天、龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人等の、恭敬囲繞せるを見、及び十六王子の、仏に転法輪を請ずるを見る。時に、諸の梵天王、頭面に仏を礼し、繞ること百千匝して、即ち天華を以て、仏の上に散ず。所散の花、須弥山の如し。並びに以て、仏の菩提樹に供養す。花の供養已って、各宮殿を以て、彼の仏に奉上して、是の言を作さく、

『唯、我等を哀愍し饒益せられて、所献の宮殿、願わくは納受を垂れたまえ』と。

時に、諸の梵天王、即ち仏前に於いて、一心に声を同じうして、偈を以て頌して曰さく、

『善い哉、諸仏　救世の聖尊を見たてまつるに　能く三界の獄より　諸の衆生を勉出したもう。
普智なる天人尊　群萌類を哀愍し　能く甘露の門を開いて　広く一切を度したもう。
昔の無量劫に於いて　空しく過ぎて仏有すこと無し。　世尊の未だ出でたまわざりし時は　十方常に暗冥にして　三悪道増長し　阿修羅亦盛んなり。
諸天衆は転減じ　死して多く悪道に堕つ。　仏より法を聞かずして　常に不善の事を行じ　色力及び智慧　斯等皆減少す。
罪業の因縁の故に　楽及び楽の想を失い　邪見の法に住して　善の儀則を識らず。　仏の所化を蒙らずして　常に悪道に堕つ。

仏は世間の眼と為って　久遠に時に乃し出でたまえり。　諸の衆生を哀愍したもうが故に　世間に現じ
超出して正覚を成じたまえり　我等甚だ欣慶す。　及び余の一切の衆も　喜びて未曾有なりと歎ず。
我等が諸の宮殿　光を蒙るが故に厳飾せり。　今以て世尊に奉る　唯、哀みを垂れて納受したまえ。
願わくは此の功徳を以て　普く一切に及ぼし　我等と衆生と　皆共に仏道を成ぜん』と。

爾の時に、五百万億の諸の梵天王、偈をもって仏を讃め已って、各仏に白して言さく、
『唯、願わくは世尊よ、法輪を転じたまえ。安隠ならしむる所多く、度脱したもう所多からん』と。
時に諸の梵天王、而も偈を説いて言さく、

『世尊よ、法輪を転じ　甘露の法鼓を撃って　苦悩の衆生を度し　涅槃の道を開示したまえ。
唯願わくは、我が請を受けて　大微妙の音を以て　哀愍して　無量劫に習える法を敷演したまえ』と。

〔訳〕その時に、上方の五百万億の国々の、大勢の大梵天王たちは、みなすべて、自分たちが住んでいる宮殿の、その光明がひときわ強く輝いて、昔からこれまでになかったほどであるのを見て、歓び躍りあがって、いつにない思いを生じ、それぞれおとずれあってともにこのことを論じあった。
『どういうわけで、われわれの宮殿に、このような光明があるのであろうか』と。
その時、その集まりのなかに、一人の大梵天王がいて、その名を尸棄といった。大勢の梵天たちの集まりに、詩頌を唱えて言った。

『今、どういういわれによって、われわれの宮殿が、　威徳ある光明に輝き、いまだかつてないほどにおごそかに飾られているのであろうか。(44)
このようなすばらしいありさまは、昔からこれまで聞いたり見たりしたことがない。(45)

偉大な徳を有する天子が生まれたのであろうか。それとも仏が世に出現されたのであろうか』
と。(46)

その時に、五百万億の（国々の）大勢の梵天王たちは、宮殿とともに（飛翔して）、それぞれ花皿に、たくさんの天上の華を盛って、ともに下方にゆき、この瑞相（のいわれ）をたずね求めた。すると、大通智勝如来が、さとりの座である菩提樹の下に居られて、獅子座に坐り、それを大勢の天の神神や龍王、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、人間と人間以外のものたちが、恭しく敬いつつ、そのまわりをとり囲んでいるのが見え、それに十六人の王子たちが仏に教えの法を説かれるようにと請うているのが見えた。

そこで、大勢の梵天王たちは、仏のみあしを頭にいただいて礼拝をなし、右回りに仏を百千回めぐって、そして天上の華を仏の上に散らした。その撒かれた華は、須弥山のように高くつもった。そして、また仏の菩提樹にも華を供養した。その華の供養がおわると、それぞれが自分たちの宮殿をその仏にたてまつって、次のように言った。

『なにとぞ、私どもにあわれみをかけ、利益をお与え下さって、献上致しました宮殿を、どうかお納め下さいますように』と。

そこで、大勢の梵天王たちは、仏のみまえで、一心に声をそろえて、詩頌によって次のように申し上げた。

『すばらしいことよ、多くの仏たち、この世を救う尊い聖者にお会いすることは。（仏たちは、欲界・色界・無色界の）三界の牢獄からつとめて多くの衆生たちを救済されます。(47)

あまねくゆきわたる智慧をもった、神々と人間の中の尊い方は、多くの衆生の類をあわれみ、不死への門を開いて、広くすべてのものを済度されます。(48)

昔よりはかりしれないほどの劫が空しく過ぎて、仏が世におられることがありませんでした。世尊が、まだ世に出現されなかった時は、十方（の世界）はつねにくらい闇であり、(49)

三種の悪境界が増大し、また阿修羅も盛んでありました。(50)

天の神々たちの集まりは次第に減少し、彼らは死んで、多く悪しき境界に堕ちました。仏から法を聞くことがなく、つねに不善の事を行ない、(51)

身体の力も智慧も、これらはみな減少いたしました。罪をおかした悪業の因縁によって、安楽（そのもの）と安楽の想いとを失い、(52)

よこしまな見解にとどまって、善行のおさめかたを知らない。仏の教化を蒙ることなく、つねに悪しき境界に堕ちるのです。(53)

仏はこの世の眼となって、久遠の年月を経て、やっと今、ここに出現されました。多くの衆生たちをあわれんで、この世に出現されました。(54)

（すべてを）超えて出て、正しいさとりを成就せられました。われわれは、そのことをおおいによろこび慶賀し、またそのほかのすべてのものも、喜び驚いて感嘆いたしました。(55)

われわれの宮殿は、光をうけておごそかに飾られました。（その宮殿を）今、世尊に献上いたします。ひたすらあわれみを垂れて、納めお受けとり下さい。(56)

願わくは、この功徳が、あまねくすべてのものにゆきわたり、私どもと衆生とが、ともに仏道

を成就することができますように』と。(57)
その時、五百万億の（国土の）大勢の梵天王たちは、詩頌によって仏を讃歎しおわると、それぞれ仏に申し上げて言った。
『何とぞ、世尊よ、教えの法をお説き下さいますように。（それによって一切衆生を）安穏ならしめること多く、済度せしめることが多いでありましょう』と。
その時、大勢の梵天王たちは、詩頌を唱えて申し上げた。
『世尊よ、教えの法を説いて、不死の法の太鼓をうって、苦しみ悩む衆生を救済し、涅槃に至る道を開きお示し下さい。(58)
なにとぞ、私どもの懇請を容れて、すぐれた美しい音声で、（私どもを）あわれんで、無量の劫という永いあいだに修められた教えの法をお説き下さいますように』と。(59)

《**尸棄**》大梵天の名。第一章の序品では対告衆を列挙するなかにみられる（五二頁の注参照）。Śikhin の音写。
《**三界獄**》三界とは欲界・色界・無色界の三界をいい、煩悩の存する生死の迷いの世界であるから牢獄にたとえた。《**普智天人尊**》すべてにくまなく通ずる智慧を有し、天上、人間界の最尊の者の意。仏の尊称。
《**群萌類**》群萌とは衆生のこと。《**開甘露門**》「甘露」はもと不死の飲料のことで、ここでは「不死」の意で、具体的には生死輪廻を脱した涅槃の境地をさす。したがって、涅槃へ至る門を開き示す、の意。《**阿修羅**》第一章序品の「四阿修羅王」の項（五三頁）参照。《**色力**》「色」は形体、肉体の意。身体的な力。《**願以此功徳　普及於一切　我等与衆生　皆共成仏道**》この句は廻向文（えこうもん）として広く知られ、現在でも諸宗派で用いられている。

以上、この段までが十方の梵天勧請(ぼんてんかんじょう)を説く部分である。この梵天勧請は、釈尊が成道後に、梵天の勧請によって初転法輪を行なったという仏伝中のエピソードに基づいていることはいうまでもない。また、すでに第二章方便品の偈文中にも、梵天や帝釈(たいしゃく)、護世四天王などが転法輪を懇請したことがみえている。

本章では、以上説かれてきたように、十方の梵天と十六王子の大通智勝仏に対する転法輪の懇請があり、それによって以下の段では、大通智勝仏が三転十二行法輪の説法を行なうことになる。分科からいうと（三九四―五頁参照）、結縁(けちえん)のいわれを明かすうちの、遠由を明かす段が以上でおわり、次には近由を明かす段に入る。

爾時。大通智勝如來。受十方諸梵天王。及十六王子請。卽時三轉。十二行法輪。若沙門。婆羅門。若天。魔。梵。及餘世間。所不能轉。謂是苦。是苦集。是苦滅。是苦滅道。及廣說。十二因緣法。無明緣行。行緣識。識緣名色。名色緣六入。六入緣觸。觸緣受。受緣愛。愛緣取。取緣有。有緣生。生緣老死。憂悲苦惱。無明滅則行滅。行滅則識滅。識滅則名色滅。名色滅則六入滅。六入滅則觸滅。觸滅則受滅。受滅則愛滅。愛滅則取滅。取滅則有滅。有滅則生滅。生滅則老死憂悲苦惱滅。佛於天人。大衆之中。說是法時。六百萬億那由他人。以不受。一切法故。而於諸漏。心得解脫。皆得深妙禪定。三明六通。具八解脫。第二。第三。第四。說法時。千萬億恒河沙。那由他等衆生。亦以不受。一切法故。而於諸漏。心得解脫。從

是已後。諸聲聞衆。無量無邊。不可稱數。爾時十六王子。皆以童子出家。而爲沙彌。諸根通利。智慧明了。已曾供養。百千萬億諸佛。淨修梵行。求阿耨多羅三藐三菩提。倶白佛言。世尊。是諸無量千萬億。大德聲聞。皆已成就。世尊。亦當爲我等。説阿耨多羅三藐三菩提法。我等聞已。皆共修學。世尊。我等志願。如來知見。深心所念。佛自證知。爾時轉輪聖王。所將衆中。八萬億人。見十六王子出家。亦求出家。王卽聽許。爾時彼佛。受沙彌請。過二萬劫已。乃於四衆之中。説是大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。説是經已。十六沙彌。爲阿耨多羅三藐三菩提故。皆共受持。諷誦通利。説是經時。十六菩薩沙彌。皆悉信受。聲聞衆中。亦有信解。其餘衆生。千萬億種。皆生疑惑。佛説是經。於八千劫。未曾休廢。説此經已。卽入靜室。住於禪定。八萬四千劫。

爾の時に、大通智勝如来、十方の諸の梵天王、及び十六王子の請を受けて、即時に三たびに十二行の法輪を転じたもう。若しは沙門、婆羅門、若しは天、魔、梵、及び余の世間の転ずること能わざる所なり。謂わく、
『是れ苦、是れ苦の集、是れ苦の滅、是れ苦滅の道なり』と。
及び広く十二因縁の法を説きたもう。
『無明は行に縁たり。行は識に縁たり。識は名色に縁たり。名色は六入に縁たり。六入は触に縁たり。触は受に縁たり。受は愛に縁たり。愛は取に縁たり。取は有に縁たり。有は生に縁たり。生は老死、憂悲、苦悩に縁たり。無明滅すれば、則ち行滅す。行滅すれば、則ち識滅す。識滅すれば、則ち名色滅す。名色滅すれば、則ち六入滅す。六入滅すれば、則ち触滅す。触滅すれば、則ち受滅す。受滅すれば、則ち愛滅す。愛滅すれば、則ち取滅す。取滅すれば、則ち有滅す。有滅すれば、則ち生滅す。生滅すれば、則ち老死、憂悲、苦悩滅す』

と。

仏、天・人の大衆の中に於いて、是の法を説きたまいし時、六百万億那由他の人、一切の法を受けざるを以ての故に、而も諸漏に於いて、心解脱を得、皆、深妙の禅定、三明、六通を得、八解脱を具しぬ。第二、第三、第四の説法の時も、千万億恒河沙那由他等の衆生、亦一切の法を受けざるを以ての故に、而も諸漏に於いて、心、解脱を得。是れより已後、諸の声聞衆、無量無辺にして、称数すべからず。

爾の時に、十六王子、皆童子なるを以て、出家して沙弥と為りぬ。諸根通利にして、智慧明了なり。已に曾て、百千万億の諸仏を供養し、浄く梵行を修して、阿耨多羅三藐三菩提を求む。倶に仏に白して言さく、『世尊よ、是の諸の無量千万億の大徳の声聞は、皆已に成就しぬ。世尊よ、亦、当に我等が為に、阿耨多羅三藐三菩提の法を説きたもうべし。我等聞き已って皆共に修学せん。世尊よ、我等如来の知見を志願す。深心の所念は、仏自ら証知したまわん』と。

爾の時に、転輪聖王の所将の衆中の八万億の人、十六王子の出家を見て、亦、出家を求む。王即ち聴許しき。

爾の時に、彼の仏、沙弥の請を受けて、二万劫を過ぎ已って乃ち四衆の中に於いて、是の大乗経の妙法蓮華、教菩薩法、仏所護念と名づくるを説きたもう。是の経を説き已って、十六の沙弥、阿耨多羅三藐三菩提の為の故に、皆共に受持し、諷誦、通利しき。是の経を説きたまいし時、十六の菩薩沙弥、皆悉く信受す。声聞衆の中にも、亦信解する有り。其の余の衆生の千万億種なるは、皆疑惑を生じき。仏、是の経を説きたもうこと、八千劫に於いて、未だ曾て休廃したまわず。此の経を説き已って、即ち静室に入って、禅定に住したもうこと八万四千劫なり。

〔訳〕その時に、大通智勝如来は、十方の大勢の梵天王、及び十六王子の懇請を容れて、ただちに、

（四諦について）三段階、計十二の形の教えを説かれた。それは出家の修行者や、天上の神、悪魔、梵天、それにそのほかの世界の何者にも説くことのできないものである。それは、『これが苦であり、これが苦の原因であり、これが苦の滅であり、これが苦の滅に至る道である』というものであった。

そして（この教えにつづいて）、広く十二因縁の法を次のように説かれた。

『無明（根源的無知）は行（形成のはたらき）の存在条件である。行は識（対象の認識作用）の存在条件である。識は名色（名称と形態）の存在条件である。名色は六入（眼・耳・鼻・舌・身・意の六種の認識の場）の存在条件である。六入は触（対象との接触）の存在条件である。触は受（感受作用）の存在条件である。受は愛（欲望）の存在条件である。愛は取（執着）の存在条件である。取は有（生存）の存在条件である。有は生（生まれること）の存在条件である。生は老・死、憂い悲しみ、苦悩の存在条件である。したがって、無明が滅すれば、行が滅する。行が滅すれば、識が滅する。識が滅すれば、名色が滅する。名色が滅すれば、六入が滅する。六入が滅すれば、触が滅する。触が滅すれば、受が滅する。受が滅すれば、愛が滅する。愛が滅すれば、取が滅する。取が滅すれば、有が滅する。有が滅すれば、生が滅する。生が滅すれば、老・死、憂い悲しみ、苦悩が滅するということになる』と。

仏は、天の神々や人々の大勢の集まりのなかで、この教えの法を説かれた時、六百万億ナユタの人人は、すべてのものにとらわれることがなかったので、さまざまな煩悩の汚れから、その心が解放され、みな深くてすぐれた禅定と、三種及び六種の神通力とを得て、八種の解脱をそなえるにいたった。

第二、第三、第四の説法の時も、千万億のガンジス河の砂の数ほど多いナユタ倍の数の衆生たちが、やはりすべてのものにとらわれることがなかったために、多くの煩悩の汚れから、その心が解放された。これより後の、多くの声聞たちの数は、無量無辺であって数えあげることもできないほどである。

その時に、十六人の王子たちは、みなまだ童子だったので、出家して沙弥(しゃみ)となった。さまざまな能力においてすぐれ、智慧は明らかであった。かつてすでに、百千万億の多くの仏たちに供養し、浄らかに戒律の行を修習して、無上の正しいさとりの智慧を求めたのであった。彼らはともども、仏に次のように申し上げた。

『世尊よ、この無量千万億という大勢の徳ある声聞たちは、みなすでに（声聞の道を）完成しています。世尊よ、是非とも今度は、私たちのために、無上の正しいさとりの法をお説き下さい。私たちは、それを聞いた後は、一緒に学び修行いたします。世尊よ、私たちは、如来の智慧の見解を得ることを望んでおります。その（私たちの）深い志願の念は、仏がみずから、おわかりになり、ごぞんじでありましょう』と。

その時に、転輪聖王(じょうおう)がひきいるものたちの中の、八万億の人々が、十六人の王子たちの出家するのを見て、また出家を求めた。王はそれを許した。

その時に、かの仏は沙弥たちの懇請を容れて、二万劫という長い年月を過ぎた後に、出家在家の男女の信者の前で、この大乗経典の、妙法蓮華、菩薩を訓誨する法、仏に護持せられ、祈念せられるもの、と名づける経典を説かれたのである。この経を説きおえられた後、十六人の沙弥は、無上の正しいさとりを得るために、みな一緒に（その経を）受けたもち、うたいとなえ（その内容を）よくきわ

めた。この経を（大通智勝仏が）説かれた時、十六人の菩薩である沙弥たちは、すべてがそれを信じ受け入れた。声聞たちの中にも、また信じ理解するものがいた。しかし、そのほかの千万億の衆生たちは、すべて疑惑をいだいたのである。
仏は、この経を説かれ続けて、八千劫ものあいだ、休んだりやめられたりしたことはなかった。この経を説きおえられた後に、ただちに静かな部屋に入室され、八万四千劫という長時にわたって禅定に入られたのである。

《即時》ただちに、の意（四〇一頁の注参照）。《三転十二行法輪》四諦の法（第一章の注、八九頁参照）を、示転、勧転、証転という三転（三段階の展開）によって考察する教え。**苦**・集・滅・道の四諦の一々について三転があるので、合計十二の形によって考察する。これを十二行という。示転とは、これが苦である。これが苦の集である。これが苦の滅である、これが苦滅への道である、として四諦を示し、次に勧転で、苦は知らるべきである、苦の集は断ずべきである、苦の滅は証さるべきである、苦滅道は修さるべきである、として四諦の実践修行を勧め、証転で、苦はすでに知られた、苦の集はすでに断ぜられた、苦滅はすでに証された、苦滅道はすでに修された、として仏がすでに四諦を証したことをいう。すなわち、四諦の法について、まずその法を示し、その法は修学すべきものであることを示し、そして仏はそれをすでに修したものであるということを示すのが三転である。なお、この箇処の経の本文は、本来「転三転十二行法輪（三転十二行法輪を転ず）」が正しく、伝承の過程で「転」の字が誤って落されたものとする説（渡辺照宏『法華経物語』七八―七九頁）があるが、その方が梵文とも一致し、説得力がある意見である。
《十二因縁》無明―行―識―名色―六入―触―受―愛―取―有―生―老死の十二支からなる縁起説。以下、

各支について略説する。「無明」(avidyā)——四諦や縁起の道理に暗いこと。現実の苦の生存の根本原因となる無知をいう。「行」(saṃskāra)——形成力あるいは生成するはたらきのこと。無明が条件となって誤った身、口、意の三業が生ずるそのはたらきをいう。「識」(vijñāna)——了別作用、対象の認識を行なう認識作用、あるいは認識主観そのものをさす。「名色」(nāma-rūpa)——名称と形態の意であるが、ここでは具体的に識の対象としての六境(色・声・香・味・触・法)をさす。すなわち、物的ならびに心的存在。「六入」(ṣaḍ-āyatana)——六処ともいう。眼根(げんこん)・耳根(にこん)・鼻根・舌根・身根・意根の六根のこと。感覚・知覚の能力とそのよりどころをいう。「触」(sparśa)——対象(六境)と感覚知覚器官(六入)及び認識主観(六識)の三者和合。認識が成立するには対象と認識主観が感覚器官を通して接触することが必要である。その主観と客観との接触をいう。「受」(vedanā)——苦や楽の感受作用。苦・楽・不苦不楽の三種がある。認識作用の結果としての感受。「愛」(tṛṣṇā)——渇愛ともいう。渇いた者が水を求めるような激しい欲求をいう。苦楽などの感受によって対象を憎んだり熱望したりする強い欲求。「取」(upādāna)——執着すること。生じた欲求によって、対象を求めたり忌避したりする行為。「有」(bhava)——輪廻の存在のこと。行為の結果として業が形成され、それによって輪廻の生存がある。「生」(jāti)——輪廻に流転することによって生まれるということがある。それ故、生まれることの条件として輪廻の生存=有がある。「老死」(jarā-maraṇa)や「憂」(うれい)、「悲」(かなしみ)、「苦」、「悩」は、生まれることによって生じる現実の苦の生存である。十二支の各項は以上のようであるが、これを無明から順に行、識、……生、老死、憂悲、苦悩というように追っていって、いかにして現実の苦の生存が成立するかということを観察するのを、縁起の順観、あるいは流転縁起という。それに対し、無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅す……生滅すれば則ち老死・憂悲、苦悩滅す、というように、無明から順に滅していって、最後の苦の生存の滅に至る観察を縁起の逆観、

あるいは還滅縁起と呼ぶ。**《不受一切法》**ここで法というのは教法の意味ではなく、外界の存在物の意。一切の煩悩は、対象を受け入れることによって生じる。対象を受け入れることがなければ、執着がなく、心が自在となる。**《於諸漏心得解脱》**諸漏とは、多くの煩悩のこと。煩悩の束縛からのがれ、心が解放されること。**《深妙禅定》**凡夫の修する禅定は、煩悩を伏することはできても、断除することはできない。聖者の禅定は見思の惑（道理見解上の惑いと世事に対する思い惑い）を断じて真理をみることができるから、これを深妙の禅定という。**《三明六通》**第二章第三章の語注（二一四頁、及び二六七頁）参照。**《八解脱》**三界の煩悩をはなれる八種の禅定をいう。**《沙弥》**śrāmaṇera 十戒を受けてもいまだ具足戒を受ける年齢に達しない出家の男子、すなわち七歳以上二十歳未満の、比丘になる前の徒弟僧をいう。**《諸根通利》**第二章の語注（一三三頁）参照。**《如来知見》**第二章の語注（一三七頁）参照。**《転輪聖王》**第一章の語注（六二頁）参照。ここでは大通智勝仏の父親、十六王子の祖父である王を指す。**《信解》**adhimukti の訳。確かにそうであると確認して信ずること。第二章の注「欲性」、「性欲」（一七七、一八二頁）および第四章の注（二八七頁）参照。

この段は、大通智勝仏が十方の梵天王たち、及び十六王子の懇請を受けて、ただちに四諦と十二因縁の教えとを多くの人々に説いた段である。そして続いて大通智勝仏がこの教えを説いた時、十六人の王子たちはみな出家して沙弥となり、仏道を求めた。それ故、今度は、十六人の沙弥たちが、自分たちのために無上の正しい悟りを説きたまえと、再び重ねて仏に懇請し、仏は二万劫の後に、八千劫の間にわたって、大乗経の法華経を説かれたというのである。先の四諦十二因縁の教法は声聞・縁覚のための教えで、これを半字の法輪といい、後の大乗無上の妙法を満字法輪という。仏がこの満字法輪である法華経を説かれた時、十六菩薩沙弥はもちろん、声聞衆の中にもこの法を信解するものはい

たが、千万億種のものたちは皆疑惑を懐いたという。仏はこの法華経を八千劫にわたって説き続けた後に、八万四千劫という長時の間、禅定に入られた。そこで、以下の段に、この八万四千劫の間に十六人の菩薩沙弥たちが、仏にかわって法華経を説くことになるのである。

科段でいえば、本段は十六王子結縁の近由を明かす段であり、先に遠由を明かし（十方の梵天勧請まで）、ここに近由を明かして、「結縁の由」を明かす段がおわるのである（四三七―八及び、四五九頁参照）。そして、次段からは、宿世の結縁そのものを明かす部分に入る。

是時十六菩薩沙彌。知佛入室。寂然禪定。各昇法座。亦於八萬四千劫。爲四部衆。廣說分別。妙法華經。一一皆度。六百萬億。那由他。恒河沙等衆生。示敎利喜。令發阿耨多羅三藐三菩提心。大通智勝佛。過八萬四千劫已。從三昧起。往詣法座。安詳而坐。普告大衆。是十六菩薩沙彌。甚爲希有。諸根通利。智慧明了。已曾供養。無量千萬億數諸佛。於諸佛所。常修梵行。受持佛智。開示衆生。令入其中。汝等皆當。數數親近。而供養之。所以者何。若聲聞。辟支佛。及諸菩薩。能信是十六菩薩。所說經法。受持不毀者。是人皆當得。阿耨多羅三藐三菩提。如來之慧。佛告諸比丘。是十六菩薩。常樂說是。妙法蓮華經。一一菩薩。所化六百萬億。那由他。恒河沙等衆生。世世所生。與菩薩俱。從其聞法。悉皆信解。以此因緣。得値四百萬億[1]。諸佛世尊。于今不盡。諸比丘。我今語汝。彼佛弟子。十六沙彌。今皆得阿耨多羅三藐三菩提。於十方國土。現在說法。有無量百千萬億。菩薩聲聞。以爲眷屬。其二沙彌。東方作佛。一名阿閦。在歡喜國。二名須彌頂。東南方二佛。一名師

子音。二名師子相。南方二佛。一名虛空住。二名常滅。西南方二佛。一名帝相。二名梵相。西方二佛。一名阿彌陀。二名度一切世間苦惱。西北方二佛。一名多摩羅跋栴檀香神通。二名須彌相。北方二佛。一名雲自在。二名雲自在王。東北方佛。名壞一切世間怖畏。第十六我釋迦牟尼佛。於娑婆國土。成阿耨多羅三藐三菩提。諸比丘。我等爲沙彌時。各各教化。無量百千萬億。恒河沙等衆生。從我聞法。爲阿耨多羅三藐三菩提。此諸衆生。于今有住。聲聞地者。我常教化。阿耨多羅三藐三菩提。是諸人等。應以是法。漸入佛道。所以者何。如來智慧。難信難解。爾時所化。無量恒河沙等。衆生者。汝等諸比丘。及我滅度後。未來世中。聲聞弟子是也。我滅度後。復有弟子。不聞是經。不知不覺。菩薩所行。自於所得功德。生滅度想。當入涅槃。我於餘國作佛。更有異名。是人雖生。滅度之想。入於涅槃。而於彼土。求佛智慧。得聞是經。唯以佛乘。而得滅度。更無餘乘。除諸如來。方便說法。諸比丘。若如來自知。涅槃時到。衆又清淨。信解堅固。了達空法。深入禪定。便集諸菩薩。及聲聞衆。爲說是經。世間無有二乘。而得滅度。唯一佛乘。得滅度耳。比丘當知。如來方便。深入衆生之性。知(2)其志樂小法。深著五欲。爲是等故。說於涅槃。是人若聞。則便信受。

(1)四百万億＝四万億　(2)底本は「如」。高麗蔵及び春日本は「知」。大正蔵の誤りか。今、改む。

この時に、十六の菩薩沙弥、仏の、室に入りて寂然として禅定したもうを知って、各法座に昇りて、亦、八万四千劫に於いて、四部の衆の為に、広く妙法華経を説き分別す。一一に皆、六百万億那由他恒河沙等の衆生を度し、示教利喜して、阿耨多羅三藐三菩提の心を発さしむ。大通智勝仏、八万四千劫を過ぎ已って、三昧より起ちて法座に往詣し、安詳として坐して、普く大衆に告げたまわく、

『是の十六の菩薩沙弥は、甚だ為れ希有なり。諸根通利にして智慧明了なり。已に曾て、無量千万億数の諸仏を供養し、諸仏の所に於いて、常に梵行を修し、仏智を受持し、衆生に開示して、其の中に入らしむ。汝等よ、皆、当に数数親近して、之を供養すべし。所以は何ん。若し声聞・辟支仏、及び諸の菩薩、能く是の十六の菩薩の、所説の経法を信じ、受持して毀らざらん者、是の人は皆、当に阿耨多羅三藐三菩提の如来の慧を得べし』」と。

仏、諸の比丘に告げたまわく、

「是の十六の菩薩は、常に楽って、是の妙法蓮華経を説く。一一の菩薩の所化の、六百万億那由他恒河沙等の衆生は、世世に生まるる所、菩薩と倶にして、其れに従い法を聞いて、悉く皆信解せり。此の因縁を以て、四百万億の諸仏、世尊に値いたてまつることを得、今に尽きず。諸の比丘よ、我、今、汝に語る。彼の仏の弟子の十六の沙弥は、今、皆、阿耨多羅三藐三菩提を得て、十方の国土に於いて、現在に法を説きたもう。無量百千万億の菩薩・声聞有って、以て眷属と為り。其の二りの沙弥は、東方にして作仏す。一を阿閦と名づけ、歓喜国に在す。二を須弥頂と名づく。東南方に二仏、一を師子音と名づけ、二を師子相と名づく。南方に二仏、一を虚空住と名づけ、二を常滅と名づく。西南方に二仏、一を帝相と名づけ、二を梵相と名づく。西方に二仏、一を阿弥陀と名づけ、二を度一切世間苦悩と名づく。西北方に二仏、一を多摩羅跋栴檀香神通と名づけ、二を須弥相と名づく。北方に二仏、一を雲自在と名づけ、二を雲自在王と名づく。東北方の仏を、壊一切世間怖畏と名づく。第十六は我、釈迦牟尼仏なり。娑婆国土に於いて、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり。諸の比丘よ、我等、沙弥為りし時、各各に、無量百千万億恒河沙等の衆生を教化せり。我に従いて法を聞きしは、阿耨多羅三藐三菩提の為なりき。此の諸の衆生、今に声聞地に住せる者有り。我、常に阿耨多羅三藐三菩提に教化す。是の諸人等、応に是の法を以て、漸く仏道に入るべし。所以は何ん。如来の智慧は、信じ難く解し難ければなり。

爾の時の所化の、無量恒河沙等の衆生は、汝等諸の比丘、及び我が滅度の後の、未来世の中の声聞の弟子是れなり。我が滅度の後、復、弟子有って、是の経を聞かず。菩薩の所行を知らず、覚らず、自ら所得の功徳に於いて、滅度の想を生じて、当に涅槃に入るべし。我、余国に於いて、作仏して更に異名有らん。是の人、滅度の想を生じ、涅槃に入ると雖も、而も彼の土に於いて、仏の智慧を求め、是の経を聞くことを得ん。唯仏乗を以て滅度を得。更に余乗無し。諸の如来の方便の説法をば除く。諸の比丘よ、若し如来、自ら涅槃の時到り、衆又清浄に、信解堅固にして空法を了達し、深く禅定に入れりと知りぬれば、便ち諸の菩薩、及び声聞衆を集めて、為に是の経を説く。世間に二乗として、滅度を得ること有ること無し。唯一仏乗をもって滅度を得るのみ。比丘よ、当に知るべし。如来の方便は、深く衆生の性に入れり。其の小法を志楽し、深く五欲に著するを知って、是等が為の故に涅槃を説く。是の人、若し聞かば則便ち信受す。

〔訳〕そのとき、十六人の菩薩の沙弥たちは、仏が、室に入って、静かに禅定されているのを知って、それぞれが説法の座にのぼって、八万四千劫という長時にわたって、四衆の人たちに、広く『妙法蓮華経』を詳細に説き明かした。一人一人がみな、六百万億ナユタというガンジス河の砂の数に等しい衆生を救済し、法を示し、教導して利益を与え喜ばせて、無上の正しい悟りへ向かう心をおこさせた。

大通智勝仏は、八万四千劫の長時をすぎて後、瞑想から立ち上って、説法の座のところに到って、安らかにその座に坐して、広く大勢の集りに告げられた。

『この十六人の菩薩の沙弥たちは、まことに稀有なものたちである。さまざまな素質能力においてすぐれ、その智慧は明瞭である。彼らは、これまでに無量の百千万億という多くの仏たちに供養し、仏

たちのもとでつねに清らかな修行をなし、仏の智慧を受けたもち、衆生にそれを開き示して、その中に入らしめたのだ。汝たちよ、みなしばしば親しく近づいて、彼らを供養せよ。なぜならば、もし声聞、辟支仏、それに多くの菩薩たちにせよ、この十六人の菩薩たちの説く経の教えを信じ、受けたもって、誹謗しないものは誰でも、必ず無上の正しい悟りである如来の智慧を得ることができるからである』」と。

仏は多くの比丘たちに告げられた。

「この十六人の菩薩たちは、つねに喜んでこの『妙法蓮華経』を説くのだ。一人一人の菩薩が教化した、六百万億ナユタのガンジス河の砂の数に等しいほど多数の衆生たちは、生まれかわるたびに菩薩とともにあり、菩薩に従って法を聞き、それらをすべて確信したのだ。このいわれによって、四百万億の多数の仏、世尊にお会いすることができ、それが今も続いているのである。

比丘たちよ、私は今、汝たちに語ろう。かの仏の弟子の十六人の沙弥たちは、今、みな無上の正しい悟りを獲得して、十方の国土にあって、現に法を説いており、無量百千万億という数の菩薩や声聞たちがそのおつきとなっている。そのうちの二人の沙弥は東方において仏となった。一人を阿閦といい、もう一人を須弥頂といって、歓喜国におられる。東南方には二人の仏がおられ、一人を師子音といい、もう一人を師子相という。南方には二人の仏がおられ、一人を虚空住、もう一人を常滅という。西南方には二人の仏がおられ、一人を帝相、もう一人を梵相という。西方に二人の仏がおられ、一人を阿弥陀といい、もう一人を度一切世間苦悩という。西北方に二人の仏がおられ、一人を多摩羅跋栴檀香神通といい、もう一人を須弥相という。北方に二人の仏がおられ、一人を雲自在といい、もう一

人を雲自在王という。東北方の仏を壊一切世間怖畏という。そして、十六番目は、私、釈迦牟尼仏であり、この娑婆国土において、無上の正しい悟りを完成したのだ。
比丘たちよ、私たちが沙弥であったころ、それぞれが、無量百千万億というガンジス河の砂の数に等しい衆生たちを教化した。私に従って法を聞いたのは、無上の正しい悟りのためであった。この多くの衆生たちのなかで、現在も声聞の位にとどまっている者たちがいる。（しかし）私は、常に無上の正しい悟りに向かわせるように教化してきた。このものたちは、必ずやこの教えの法によって次第に仏道に入ってゆくであろう。なぜならば、如来の智慧は信じがたく、理解しがたいものだからである。その時に教化された、無量のガンジス河の砂の数に等しい衆生たちとは、汝たち大勢の比丘たちと、私が滅度した後の未来の世の声聞の弟子たちのことなのだ。私が滅度した後にも、やはり弟子がいて、この経を聞かず、菩薩の行ないを知らず、覚ることもなく、自分で得た功徳に対して、これが完全で円満な涅槃であるという想いを生じて涅槃に入ることがあるであろう。（その場合でも）私は他の国において仏となり、新たに異なった名をもつであろう。（そうすれば）その人は、完全で円満な涅槃という想いを生じ、涅槃にたとえ入ったとしても、その国において、仏の智慧を求め、この経を聞くことができるであろう。完全で円満な涅槃は、ただ仏の教えの乗りものによってのみ得られるのだ。そのほかに他の教えの乗りものは存在しないのである。ただし、如来たちの教化の手段としての説法は別である。

　比丘たちよ、如来は、もし、みずから入滅の時が近づいて、会衆は心清らかで、信順の心が堅く、空の教えを会得し、深い禅定に入ったと知ったならば、多くの菩薩や声聞の人々を集めてこの経を説

くのだ。この世には、それによって完全で円満な涅槃を獲得できるような二つの教えの乗りものは存在しない。ただ一つの仏の教えの乗りものによってのみ、完全で円満な涅槃を得ることができるのだ。比丘たちよ、知らねばならない。如来の教化の手だては、衆生たちの本性の深くにまでとどいているものであって、彼らが劣等な教えを喜び、五官の欲望に深く執着しているのを知って、彼らのために（彼らに応じた）涅槃を説くのだ。（それ故）彼らがもし、その法を聞いたならば、ただちに信じ受け入れるであろう。

《四部衆》第一章序品の注参照（七八頁）。**《示教利喜》**法を「示」し、「教」え、「利」益せしめ、「喜」ばせること。説法の四事といい、『大智度論』（巻五四）にも出る。**《往詣》**「往」も「詣」も、ゆき、至るの意。ほぼ同じ意味の語を重ねて造られた複合語。六朝訳経語に多くみられる。「往趣」「往至」「往到」などもその例。**《諸根通利》**眼、耳、鼻などの感覚器官の素質・はたらきがすぐれていること。**《梵行》**第三章の語注（三二八頁）参照。**《阿閦》**原語は Akṣobhya（ゆり動かされない、の意）。その仏国土を Abhirati（歓喜、の意）といい、本経では歓喜国と訳されている。本経のほか『小品般若』『道行般若』などの般若経典や『維摩経』などの大乗仏典に広く説かれており、阿閦仏の名の由来などは『阿閦仏国経』に詳しい。古来、阿閦仏を崇拝し、その仏国土に生まれることを願う阿閦仏信仰があった。**《須弥頂》**原語は Merukūṭa（スメール＝須弥山の山頂、の意）。**《師子音》**原語は Siṃhaghoṣa（獅子の咆哮、の意）。**《師子相》**原語は Siṃhadhvaja（獅子の旗、の意）。dhvaja は、旗、標識、象徴などの意。**《虚空住》**原語は Ākāśapratiṣṭhita（虚空に安住した、の意）。**《常滅》**原語は Nityaparinirvṛta（常に完全円満な涅槃に入っている、の意）。**《帝相》**原語は Indradhvaja

（インドラ神の旗じるし、の意）。《**梵相**》原語は Brahmadhvaja（ブラフマン＝梵天の旗じるし、の意）。《**阿弥陀**》原語は、本経では Amitāyus（無量寿）であるが、Amitābha（無量光）ともいい、両者とも漢訳では「阿弥陀」と訳される。『無量寿経』『阿弥陀経』『観無量寿経』に説かれる西方極楽世界にいる仏。浄土信仰の中心となる仏。本経では、後の第二十三章薬王菩薩本事品にも出る。《**度一切世間苦悩**》原語は Sarvalokadhātūpadravaudvegapratyuttīrṇa（一切世間界の災禍と恐怖から脱れた、の意）。《**多摩羅跋栴檀香神通**》原語は Tamālapattracandanagandhābhijña（タマーラ樹の葉と栴檀の香りを有する神通、の意）。多摩羅樹（Tamāla）は、クスノキ科のタマラニッケイ、あるいはセイロンニッケイとされ、葉をもむと、特有の芳香を発し、香料、薬用にされている。その葉の香料を多摩羅跋香という。《**須弥相**》原語は Meru-kalpa（須弥山に等しい、の意）。《**雲自在**》原語は Meghasvaradīpa（雲のひびきの灯明、の意）。《**雲自在王**》原語は Meghasvararāja（雲のひびきの王、の意）。《**壊一切世間怖畏**》原語は Sarvalokabhayaccha-mbhitatvavidhvaṃsanakara（一切世間の恐怖やおびえを滅ぼすもの、の意）。

本段の要旨は、以下のとおりである。大通智勝仏は、前段で八千劫にわたって法華経を説かれた後、八万四千劫の間、禅定に入られた。その間に十六人の菩薩沙弥の一人一人が、かわるがわるに四衆に対して、法華経を説き、それぞれ六百万億那由他恒河沙の衆生を教化した（これを十六王子の覆講という）。大通智勝仏が禅定より起って、この十六菩薩沙弥は、今はじめて発心して大乗を求めたのではなく、すでに過去において幾多の諸仏に供養して衆生教化につとめてきたのであるといい、さらに、次のように説く。

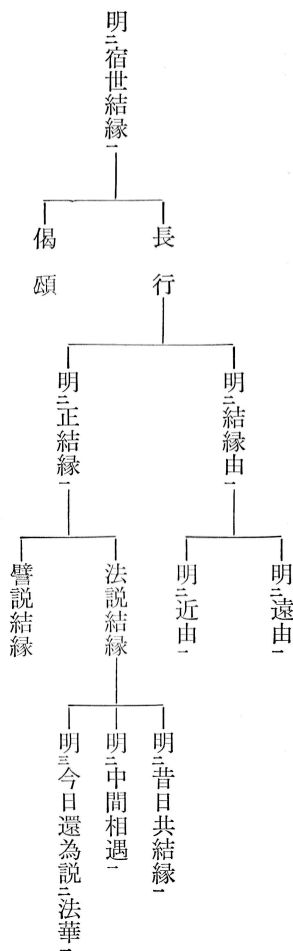
この十六菩薩沙弥は、つねに法華経を説きつづけており、その教化を蒙った六百万億那由他の衆生

は世々生まれかわるごとに、常にその説法を聞き、信解してきたと説くのである。そして、その十六菩薩の現在はどうかというと、それぞれ仏となって十方のそれぞれの国土において法を説いており、その第十六番目の仏が、今の私である釈迦牟尼仏であると明かす。そして、私の説法を聞いている汝たち比丘は、昔、私が沙弥の時に教化した者たちであり、昔も今も、私によって教化されているのだ、私の滅後における弟子たちも、私がまた他の仏国土に生まれて仏となり、その国土において私に教化されるのだ、と説くのである。

科段でいうと、本段以降は「正しく結縁を明かす」という部分である。前段で、「結縁の由」を明かしたので、この段以後において、結縁そのものを明かす。これを法説と譬説とに分けるが、本段は法説部分に相当する。この法説部分を三つに分け、㈠昔日共に結縁せるを明かす、㈡中間に相遇うことを明かす、㈢今日還って、ために法華を説くを明かす、の三つとする。㈠の昔日については、十六菩薩沙弥の法華覆講の時の結縁のことをいい、次の㈡の中間とは、昔と今現在の法華説法の会座の中間のことをいい、十六菩薩沙弥が、覆講以来今日に至るまで、つねに法華経を説き続け、それを聞く者たちも、世々生まれかわり、つねにその法を聞いた、ということを指す。そして第三の今日についでは、十六菩薩が十方の国土で現に法を説いている、その十六番目の仏が現在の私であると明かす部分である。

このように、過去の昔も、中間も、そして現在もつねに法華経を説き続け、そして、その説法を聞く者たちも、昔、中間、今日、そして未来においても、つねに法華経による教化をうけていることを明かすのである。以上を簡単に図示すると、次のようになる。

- 明㆓宿世結縁㆒
  - 長行
    - 明㆓結縁由㆒
      - 明㆓遠由㆒
      - 明㆓近由㆒
    - 明㆓正結縁㆒
      - 法説結縁
        - 明㆓昔日共結縁㆒
        - 明㆓中間相遇㆒
        - 明㆔今日還為説㆓法華㆒
      - 譬説結縁
  - 偈頌

因縁

本章は、はるか大昔における大通智勝仏という仏と、その十六人の王子たちの物語が説かれ、その王子のうちの一人と現在の釈尊とが結びつけられて説かれている。大通智勝仏と十六王子、そして現在の法華説法の会座（えざ）にいる釈迦牟尼仏とのはるか昔からのつながり、すなわち宿世（しゅくせ）の因縁（いんねん）が、本章のメイン・テーマである。

それでは、その因縁とはなにか。

釈尊が比丘たちに語られたところによると、三千塵点劫（じんでんごう）というはかりしれない大昔に、大通智勝仏

という仏がおられた。この仏が出家して仏道を求めた時、仏には十六人の王子があった。大通智勝仏は転輪聖王の子であり、かつては王子であった。

大通智勝仏が、仏の悟りを得たことを知ると、十六王子たちはその眷属らとともにただちに菩提道場の仏のもとに到り、仏を讃歎して、諸天人民のために法を説きたまえと仏に懇請したのである。また、仏が悟りを得られたその時、十方の五百万億の世界が六種に震動し、大光があまねく世界を照らしだした。その光は諸天の宮殿、ついには梵天の宮殿にまで及んだ。この奇瑞に驚いた十方の梵天王たちは、まず始めに東方の梵天王たちがその宮殿とともに西方に飛来してその様子をたずねた。すると、そこには大通智勝仏が菩提道場に坐して、諸天をはじめ、多くの大衆が仏をとりかこみ、そこに十六王子が仏に法を説かれるよう請うているさまが見えた。これをみた梵天たちは、すぐさま仏を礼拝し、自らの宮殿を献上して仏の説法を懇請した。それに対して仏は黙然としてこれを許された。

次には東南方の梵天王たちが同じように飛来して、仏に宮段を献上して説法を請い、また次には、南方の梵天たちが、また西南方ないし下方の梵天たちも同様であった。最後に、上方の梵天たちも尸棄という大梵天王を上首として、同じように宮殿を献上し、

願わくはこの功徳をもって、あまねく一切に及ぼし、
我等と衆生と、みなともに仏道を成ぜん。

と、仏の説法を懇請したのである。すなわち、十方の梵天たちによる説法の勧請である。この十方の梵天勧請と、十六王子の懇請をうけて、大通智勝仏は三転十二行相によって四諦を説き、また広く十二因縁の法を説かれた。この説法によって多くの衆生は解脱を得、第二、第三、第四の説法の時にお

いても、やはり多くの衆生たちが解脱して、以後、無数の声聞衆ができた。

十六王子はその時まだ少年であったが、みな出家して沙弥となった。彼らはかつて百千万億の仏に供養して修行したことがあったので、仏の智慧を求めて大通智勝仏に仏の無上のさとりの法を説きたまえと願った。この請により、仏は二万劫をすぎた後に大乗経の法華経を説かれたのである。十六人の菩薩沙弥はみなこの法を受持し、信受した。しかし、声聞衆のなかには信受するものもあり、信受しないものもいた。大通智勝仏は、この法華経を八千劫の長時にわたって説き続けると、静室に入って八万四千劫の間、禅定に入られた。そこで、十六人の菩薩沙弥たちは、仏が禅定に入られている間、おのおの法座に昇って、多くの衆生に法華経を説き、それぞれ六百万億那由陀恒河沙の数にのぼる衆生たちを教化した。これを十六王子の法華覆講という。

さて、大通智勝仏は禅定より出ると、十六菩薩沙弥の法華経説法をよしとせられ、大衆にむかって十六菩薩沙弥の説いた経法を信受するものは仏智を成就するであろう、といって讃歎せられた。十六菩薩沙弥たちは、このようにつねに法華経を説き、大通智勝仏の滅後にも説き続けて多くの衆生を教化したので、その一人一人の菩薩沙弥が教化した多くの衆生たちは、世々生まれかわるたびにつねにその菩薩沙弥と一緒であって、その菩薩沙弥に法を聞き、信解したのである。

釈尊は以上の過去の物語を比丘たちに語り、さらにこの物語と現在との連絡をつけて、次のようにいわれた。

この十六人の菩薩沙弥は、みな成仏して、現在十方の国土において法華経を説いている。精しくは四方四維の国土にそれぞれ二仏ずつがおり、東北方の二仏のうちの第十六番目の仏が娑婆世界にいる

この私、釈迦牟尼仏なのだ、と。そして、私は菩薩沙弥であった時に、無数の衆生を教化してきたが、その教化した無数の声聞の弟子たちとは、一体誰あらん、実に現在ここにいるお前たちなのだ。そして、また私が滅度した後の、未来の世における声聞の弟子たちなのだ、と。

以上が、釈尊が比丘たちに語った宿世の因縁である。釈尊は、またこれに続けて、仏は衆生の心性を深く観察して知り、仏道を成就するのに堪えられず中途で退転してしまわぬように、かりに二乗の涅槃を設けたが、二乗の声聞の涅槃は真実のものではない。ただ一仏乗によってのみ真の涅槃滅度が得られるのであると説き、これを解説するために、次に化城の喩えを説かれるのである。

さて、以上に明かされた宿世の因縁はどのような意味をもつものであろうか。

法華経の説相からいえば、上来、方便品から前章の授記品に至るまでに、上根の舎利弗、中根の大迦葉等の四大声聞たちに説き来り、そして次に下根の富楼那等のために説くのが本章である。舎利弗や四大声聞と違って下根下智とされる富楼那等の比丘たちに説くには、より具体的な事実をもって示さねばならない。そこで、現在説かれるこの法華経が、この現世のみでなく久遠の昔から諸仏によって説かれ続けてきていること、そして、その法を聞くここにいる弟子たちも、この現世だけではなく、久遠の昔の過去世からのつながりであるということ、この過去世の因縁を説くことによって、それによって法華経を信受せしめ、一仏乗に帰さしめようという意義を有しているということができる。これは、法華経の説相からみた伝統的な解釈であるが、ここでもう少し詳しくこの過去世の因縁についてみてみよう。

この過去世の因縁では大きく二つのことが説かれている。それは一つには「法」と、第二には「人」

である。「法」とは法華経のことで、この法華経が過去から現在に至るまで説かれ続けてきており、しかも諸仏がひとしく説いてきていること、この二点が「法」について説かれている。「人」については、これは能化の仏と所化の衆生との、師と弟子の両方について過去世から現在の世までのつながりが説かれている。この「法」と「人」とについて、それぞれの意義を考えてみよう。

最初の「法」について、法華経が久遠の昔から現在に至るまで説かれ続けてきているということは、どういう意義があるのだろうか。それは、この法が、極めて古くからの伝統を有する由緒正しいものであることを意味し、さらにすすんで、この法が時間を超越したものであるということを示すものである。はかりしれない過去から現在へ、そして未来へと説き続けられてゆくということは、この法がいついかなる時においても普遍性を有しているということであり、それは時間を超えたものであるということである。それはとりもなおさず、その法が絶対の真理であるということも示している。なぜなら、時間のうちに色褪せてゆくものは、真理の名に値しないからである。次に、諸仏がみなひとしく法華経を説くということは何を意味するか。十六菩薩沙弥成道後の十方の仏たちがみなすべて法華経を説く。このことは法華経があらゆる仏国土、すなわちあらゆる場所においても普遍性を有する真理であるということを示している。すなわち空間を超えた真理であるということである。法華経の作者は、「法」について、この二点を語ることによって、法華経が時空を超えた唯一絶対の普遍的真理であることを強調しようとしたのであろう。

それでは「人」についてはどうか。はじめに教化の主である仏についていえば、昔の大通智勝仏の王子である十六菩薩沙弥の一人が現在の釈迦牟尼仏であるということ。これは、大通智勝仏と父子関

係にあることを示すことによって、現在の釈迦牟尼仏が、仏として正統な仏であり、また大通智勝仏の説いた法華経の教えの正統な継承者であることを表わすものである。父子であるということは、父系制社会であるインドにおいては極めて重要な意味をもっている。第四章の長者窮子(ぐうじ)の喩えも父と子の間の継承がそのモチーフになっているのはすでに見たとおりである。

次に、教化される衆生についてみると、過去に教化された衆生と現在の弟子が同一であるということ。すなわち、過去十六菩薩沙弥の一人一人にそれぞれ教化された衆生が、世々生まれかわり、つねに十六菩薩沙弥とともにあってその法を聞き、そして現在もまた釈迦牟尼仏の教化をうけている。しかも、昔の十六菩薩沙弥から現在に至る釈迦牟尼仏は、つねに仏の無上の悟りに人々を向かわしめるように教化してきたという。このことは、教化を蒙る側にとって、成仏の根拠を与えられているという点で重要な意味をもつ。つねに仏は衆生に対して成仏の道を説いてきたのであるから、たといその教えを聞く者が成仏の教えを忘れ、あるいは信ぜずして現在二乗の地位にいたとしても、後に必ずその成仏の教えを思い出し、自覚して成仏することができるというわけである。これは現在だけでなく、未来においても、仏はつねに法華経という成仏の教えを彼らのために説くのであるから、この法を聞く者すべては「仏子」として、釈迦牟尼仏滅後の未来においても、成仏の可能性が与えられているのである。これは本章中だけでなく、第三章の劈頭の舎利弗(しゃりほつ)への記莂(きべつ)にすでに見えているものである。

このようにみてくると、本章でとかれた過去世の因縁の意味するところは、本経全体を通じても重要な意義を有しているといってよい。しかし、この因縁のなかでいわれた個々のものは、本章に至ってはじめて説かれたものではない。たとえば、大通智勝仏と十六王子の父子関係は、第一章序品の日(にち)

月燈明如来と八王子のそれに近似しているし、法華経がはるか昔の過去から説かれてきていることは、先の日月燈明如来が法華経を説いたということによって示されている。さらに諸仏がひとしく法華経を説いたということは、方便品で、法華経という一仏乗を説いて仏知見を得せしめることが諸仏出世の本懐であり、過去、現在、未来の諸仏もまたしかり、としているところにあらわれているのである。けれども、本章では過去の因縁の物語のなかに各章で説かれていたそれらの思想が総合的に盛りこまれているという点が重要で、この点から本章が単経として行なわれていたとする説が出されている。

古来、中国の天台では、この本章の説く過去世の因縁について「化導の始終」を示すもの、また「種・熟・脱の三益」を示すものとして重視した。それは、化導すなわち、釈尊が衆生を教化し導くその始まりは、十六菩薩沙弥の法華覆講であり、その終わりは、四十余年未顕真実の後、この法華経を説くことであって、その化導が始終一貫しているとして、法華経が余経にすぐれている特長の一つに挙げている。また三益とは、はじめの「種」とは「下種」のことで、衆生に仏種を植えることを意味する。この下種は、十六王子の法華覆講である。次に「熟」とは「調熟」のことで、下種した仏種を養い成熟させること。これは十六王子の覆講以後、世々に法華経を説き続け、現在の釈尊に至り、四十余年の間、爾前の諸経を説くまでをいう。最後の「脱」とは「成仏解脱」のことで、方便の諸経の後に、一乗真実の法華経を説くことであるとする。この三益が本章の過去世の因縁によって説かれているとして重視するのである。

譬如五百由旬。險難惡道。曠絕無人。怖畏之處。若有多衆。欲過此道。至珍寶處。有一導師。聰慧明達。善知險道。通塞之相。將導衆人。欲過此難。所將人衆。中路懈退。白導師言。我等疲極。而復怖畏。不能復進。前路猶遠。今欲退還。導師多諸方便。而作是念。此等可愍。云何捨大珍寶。而欲退還。作是念已。以方便力。於險道中。過三百由旬。化作一城。告衆人言。汝等勿怖。莫得退還。今此大城。可於中止。隨意所作。若入是城。快得安隱(1)。若能前至寶所。亦可得去。是時疲極之衆。心大歡喜。歎未曾有。我等今者。免斯惡道。快得安隱(2)。於是衆人。前入化城。生已度想。生安隱(3)想。爾時導師。知此人衆。既得止息。無復疲惓。即滅化城。語衆人言。汝等去來。寶處在近。向者大城。我所化作。爲止息耳。諸比丘。如來亦復如是。今爲汝等。作大導師。知諸生死。煩惱惡道。險難長遠。應去應度。若衆生。但聞一佛乘者。則不欲見佛。不欲親近。便作是念。佛道長遠。久受懃(4)苦。乃可得成。佛知是心。怯弱下劣。以方便力。而於中道。爲止息故。說二涅槃。若衆生。住於二地。如來爾時。即便爲說。汝等所作未辦(5)。汝所住地。近於佛慧。當觀察籌量。所得涅槃。非眞實也。但是如來。方便之力。於一佛乘。分別說三。如彼導師。爲止息故。化作大城。既知息已。而告之言。寶處在近。此城非實。我化作耳。

(1)(2)(3)隱＝穩　(4)懃＝勤　(5)辦＝辯

譬えば、五百由旬の険難悪道の、曠かに絶えて、人無き怖畏の処あらん。若し多くの衆有って、此の道を過ぎて、珍宝の処に至らんと欲せんに、一りの導師有り。聰慧明達にして、善く険道の通塞の相を知れり。衆人を将導して、此の難を過ぎんと欲す。所将の人衆、中路に懈退して、導師に白して言さく、『我等疲極して、復怖畏す。復、進むこと能わじ。前路猶遠し、今、退き還らんと欲す』と。

導師、諸の方便多くして、是の念を作さく、

『此等愍むべし。云何ぞ大珍宝を捨てて、退き還らんと欲する』と。

是の念を作し已って、方便力を以て、険道の中に於いて三百由旬を過ぎ、一城を化作し、衆人に告げて言わく、

『汝等よ、怖るること勿れ。退き還ること得ること莫れ。今、此の大城、中に於いて止って、意の所作に随うべし。若し是の城に入りなば、快く安隠なることを得ん。若し能く前んで宝所に至らば、亦去ることを得べし』と。

是の時に、疲極の衆、心大いに歓喜して、未曾有なりと歎ず。

『我等、今者、斯の悪道を免れて、快く安隠なることを得つ』と。

是に於いて、衆人、前んで化城に入って、已度の想を生じ、安隠の想を生ず。

爾の時に、導師、此の人衆の、既に止息することを得て、復疲惓無きを知って、即ち、化城を滅して、衆人に語って言わく、

『汝等よ、去来、宝処は近きに在り。向の大城は我が化作する所なり。止息せんが為のみ』と。

諸の比丘よ、如来も亦復是の如し。今、汝等が為に、大導師と作って、諸の生死、煩悩の悪道、険難長遠にして、応に去るべく、応に度すべきを知れり。若し衆生、但一仏乗を聞かば、則ち、仏を見んと欲せず、親近せんと欲せじ。便ち、是の念を作さく、

『仏道は長遠なり。久しく懃苦を受けて、乃し成ずることを得べし』と。

仏、是の心の、怯弱下劣なるを知しめして、方便力を以て、中道に於いて止息せんが為の故に、二涅槃を説く。

若し衆生、二地に住すれば、如来、爾の時に、即便ち為に説く。

『汝等は所作未だ辦ぜず。汝が所住の地は仏慧に近し。当に観察し籌量すべし。所得の涅槃は、真実に非ず。但是れ如来、方便の力をもって、一仏乗に於いて、分別して三と説く』と。彼の導師の、止息せんが為の故に、大城を化作し、既に息み已んぬと知って、之に告げて、『宝処は近きに在り。此の城は実に非ず。我が化作ならくのみ』と言わんが如し。」

〔訳〕たとえば、五百ヨージャナの距離の、険しくて困難な悪道で、はるかに人跡とだえて、おそろしい所があったとしよう。大勢の一団が、この道を通過して、珍しい宝物のある場所に到達しようとする場合に、一人の指導者がいて、賢明で才知にすぐれ、この険しい道の通れるか通れないかのありさまを知っていて、多くの人々をひきいてこの難所を通過しようとしたとしよう。彼にひきいられた人人は、途中でうみ疲れていやになり、指導者にこのように言った。『私たちは疲労困憊してしまい、そのうえ、おそろしくてたまりません。この先の道はまだまだ遠いことであるし、今はもう引き返したい』と。

その指導者は、さまざまな巧みな手段を有していて、このように考えた。

『彼らは、かわいそうなことだ。一体どうして、立派な珍しい宝を捨てて、引返そうとするのだろう』と。

こう考えると、巧みな手だての力によって、けわしい道を三百ヨージャナ過ぎたところに、一都城を変化によって作りだし、多くの人々に告げて言った。

『諸君、おそれてはならない。しりごみしてひきかえすようなことをしてはいけない。今、この大き

な城市は、その中にとどまって、意のなすままにできるところである。もし、この城中に入ったならば、快適で安らかになることができよう。そのうえで、もし、前進して宝のある場所に到ることができるのならば、そこは去ってもよい』と。

この時、疲れきった人々は、大喜びし、驚きの念にうたれて感歎の声をあげて、『私たちは、今やっと、この悪路からぬけだして、快適で安らかになることができた』と言った。そうして人々は、幻化（げんけ）の城に入って、やっとすくわれたという想いをいだき、安らかになったという想いをいだいた。

その時に、その指導者は、この人々が休息することができて、疲労も回復したことを知って、すぐに幻化の城を消滅させて、人々に語って、『諸君、さあ、行こう。宝の場所は近くにある。さっきの大きな城市は、私が変化（へんげ）によって作ったもので、ただ休息するためだけのものだったのだ』と。

比丘たちよ、如来もまたそのようである。今、汝たちのために偉大な指導者となって、さまざまな生死輪廻（しょうじりんね）、煩悩の悪道は、険しく困難で、はるか長い道のりであるが、そこからは過ぎねばならず、こえてゆかねばならぬということを知っている。もし、衆生たちが、ただ一つの仏の教えの乗り物を聞いたならば、（その難解さの故に）仏を見ようともせず、仏に親しく近づこうともしないで、次のように考えることであろう。

『仏の道は、はるかに遠い。長いあいだほねおりつとめて、それでやっと完成できるのであろう』と。

仏は、この心が、気おくれして劣っているものであることを知り、教化の手だての力によって、道の中途で（彼らを）とどめ休ませるために、二種の涅槃（ねはん）を説くのだ。もし、衆生が、二種の（涅槃の）境地にとどまるならば、如来はその時、彼らにこのように説く。

『お前たちは、為すべきことがまだなしおわっていない。お前たちの達している境地は仏の智慧に近い。だが、よく観察し、よく考えなさい。お前たちの到達した涅槃は、真実のものではない。ただ、如来が教化の手だての力によって、本来ただ一つの仏の教えの乗り物を説くところを、これを分けて三種（の教えの乗り物）を説いたのである』と。

このことは、ちょうど、次のようである。すなわち、あの指導者が、（人々を）とどめ休めようとして、大きな城を変化によって作り出し、（そこで）彼らがすでに休息しおわったと知って、彼らに『宝のありかは近い。この城は本当のものではない。私が変化によって作り出したものにすぎないのだ。』と告げるのと同様である。」

《通塞之相》「通」は通じる、「塞」はふさがる、の意。その道が通れるか、通れないかのありさま。**《化作一城》**「化」は、変化、幻化の意。方便力の一つのあらわれとして、幻術のようなもので一城市を現出せしめること。**《生已度想》**「已度」とは、ここでは、すでに悪道をわたりまぬがれたという意味で、すでに生死の世界を度脱し、三界を出でて涅槃に到ったと思うことを譬える。**《去来》**「去」は、行く、去るの意で、「来」は、さあ……しよう、という誘いかけの意をあらわす語。「去来」で、さあ行こうというほどの意。わが国では従来、この二語で「いざ」と誘いかけの語として訓んでいるが、これは本来誤用。**《懃苦》**「懃」は「勤」。ほねおりつとめること。**《説二涅槃》**有余依涅槃（うよえねはん）（身体がまだ存続している間の涅槃）と無余依涅槃（むよえ）（死んで身体・智慧ともに滅した状態の涅槃）の二種の涅槃で、声聞・縁覚の二乗の涅槃をいう。**《住於二地》**二地とは、二乗の有余依涅槃と無余依涅槃の二種の悟り、涅槃の境地のこと。**《所作未弁》**なすべきことをいまだなしおえていないという意で、原始仏教以来の仏の悟りの表明の定型句、「所作已弁」（katam

karaṇiyam）を踏まえての表現。

ここの段が本章の章名の由来である。化城の譬喩を説く段である。喩えの意趣は明瞭で、第二章の方便品以来説かれてきた三乗方便・一乗真実の教えを喩えている。五百ヨージャナの遠きにある宝処は、仏の悟り、涅槃の境地を指し、そこに至る中途、三百ヨージャナのところに幻化によって設けられた城は二乗の悟り・涅槃を指している。仏は衆生の心性を深く理解して、仏道の中途でくじけないように方便力によって、かりの安息所である二乗の涅槃の境地を施設したのであり、それは真実の悟り・涅槃の境地ではない、と説くのである。

科段からいうと、「正しく結縁を明かす」のなかに、法説結縁と譬説結縁があるうち、先の段まで法説結縁をおわり（四三七―八頁参照）、この段は譬説結縁の部分に相当する。すなわち、譬喩によって結縁を明かすのである。

宝処近きに在り

ここに五百ヨージャナも続く荒野があり、絶えて人なく、その道は険難悪路、しかも野獣がいて、水も草もないおそろしいところがあった。ところが、そこを過ぎたところには珍しい宝があり、人々は隊商を組んで宝のありかに到ろうとしていた。かれらの中に一人のすぐれた指導者がいた。彼は悪路を知悉しており、人々を率いてこの難所を通りぬけようとしていた。ところが、一行の人々は中途

で疲れ果て、おじ気づいてこれ以上一歩も進めなくなって、「これから先の道はまだはるか遠い。もう疲れ果てた。引き返そうではないか」と言った。かの指導者は、彼らを見てあわれに思い、珍宝を求めることをしないで途中で引き返すようなことをしてはならないと考え、手だて（方便）を講じて、その神通力によって、広野のなか三百ヨージャナのところに一つの城市を出現させた。そこで彼はこう言った。「諸君、おそれることはない。引き返すことはない。あそこに城がある。城の中に入れば休息もできる。もし、そのうえ、行きたいものは宝のありかにも行くことができる」と。

この時、疲れきった人々は大いに喜び、すすんでこの城中に入り、難所をきりぬけることができたと安心した。そこで指導者は、彼らが城で休息して疲れもとれ、元気になったのをみて、神通力で出現させた変化の城を消して、「さあ、諸君。出発しよう。宝のありかは近いのだ。あの城は、みんなを休ませるために、私がかりに設けたものなのだ」と言ったというのである。

この化城の譬喩譚は、二乗の涅槃が真実のものではなくて、仏がかりに方便によって施設したもの、一仏乗による仏の涅槃こそが真実の涅槃であるという二乗方便一乗真実を喩えたものである。たとえ話の指導者とは仏であり、すべてのものの大導師となり、彼らを生死煩悩（しょうじぼんのう）の悪道から救おうとする。そのために、もし一仏乗のみを説いたならば、宝所の長遠（じょうおん）なることに疲れ果てて退こうとするように、仏道を避けてしまうであろう。そこで、仏は中途にかりの安息所を設けた。これが有余（うよ）と無余（むよ）の二種の涅槃である。この二つの涅槃は声聞（しょうもん）と縁覚（えんがく）の休息所にすぎない。この休息所、すなわち神通力で出現させた城から宝所はすぐ近くにある。仏の智慧という宝はすぐ近くにあるのだ。二乗の得た涅槃は真実ではない。ただ如来の方便力をもって、かりに施設したにすぎない、といい、

「宝所は近きに在り。この城は実にあらず。わが化作ならくのみ」と説いて化城の譬えを結ぶのである。

ところで、先にこの譬喩譚は「二乗方便、一乗真実」を明かすものといったが、本章では声聞・縁覚の二乗をいい、菩薩乗を加えた三乗を説いていない（化城喩の結びに「如来、方便の力をもって、一仏乗に於いて、分別して三と説く」とはあるが）。このことから、譬喩品、信解品、薬草喩品に説かれる三乗方便、一乗真実と、本章の二乗方便、一乗真実とでは、その一仏乗の立場において両者異なるものとなってくるが、この問題についてはまた先学の論究があるので詳細はそちらに譲ることとし、[①]今は問題提起にとどめておく。

先にふれたように、この第七章化城喩品を別行した一経典とみる学者もいる。[②]この説は首肯するに難くない。本章を抜いて章を追うと、授記品、五百弟子受記品、授学無学人記品と続いて、授記段がすんなりと連絡づけられるのである。

しかし、本章をここに挿入することによって、これまで譬喩品の三界火宅の喩から薬草喩品の三草二木の喩までの一連の譬喩によって三乗の方便施設、一乗の真実を説き明かし、さらに二乗の授記をくりひろげようとするとき、本章で現在の法華経の説相を過去の昔に遡源せしめて久遠の昔に根拠あらしめたことは、（本章の一乗説に質的相違が認められるにせよ）法華経の一乗真実を永遠の時間の中に組み入れたという点において意義があると思われる。

①苅谷定彦「法華化城喩について——一乗と三乗とをめぐって——」（『印度学仏教学研究』第十八巻第一号。昭和四四年十二月）

②渡辺照宏『法華経物語』七〇頁以下。（大法輪閣、昭和五二年）

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

大通智勝佛　十劫坐道場　佛法不現前　不得成佛道
諸天神龍王　阿修羅衆等　常雨於天華　以供養彼佛
諸天擊天鼓　幷作衆伎樂　香風吹萎華　更雨新好者
過十小劫已　乃得成佛道　諸天及世人　心皆懷踊躍
彼佛十六子　皆與其眷屬　千萬億圍繞　俱行至佛所
頭面禮佛足　而請轉法輪　聖師子法雨　充我及一切
世尊甚難值　久遠時一現　爲覺悟群生　震動於一切
東方諸世界　五百萬億國　梵宮殿光曜　昔所未曾有
諸梵見此相　尋來至佛所　散花①以供養　幷奉上宮殿
請佛轉法輪　以偈而讚歎　佛知時未至　受請默然坐
三方及四維　上下亦復爾　散花②奉宮殿　請佛轉法輪
世尊甚難值　願以大慈悲　廣開甘露門　轉無上法輪
無量慧世尊　受彼衆人請　爲宣種種法　四諦十二緣
無明至老死　皆從生緣有　如是衆過患　汝等應當知
宣暢是法時　六百萬億姟　得盡諸苦際　皆成阿羅漢

第二說法時　千萬恒沙衆　於諸法不受　亦得阿羅漢
從是後得道　其數無有量　萬億劫算數　不能得其邊
時十六王子　出家作沙彌　皆共請彼佛　演說大乘法
我等及營從　皆當成佛道　願得如世尊　慧眼第一淨
佛知童子心　宿世之所行　以無量因緣　種種諸譬喩
說六波羅蜜　及諸神通事　分別眞實法　菩薩所行道
說是法華經　如恒河沙偈　彼佛說經已　靜室入禪定
一心一處坐　八萬四千劫

爾の時に、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、
「大通智勝仏　十劫道場に坐したまえども　仏法現前せず　仏道を成ずることを得たまわず。
諸の天神、龍王　阿修羅衆等　常に天華を雨して　以て彼の仏に供養す。
諸天天鼓を撃ち　並びに衆の伎楽を作す。　香風萎める華を吹いて　更に新しき好き者を雨す。
十小劫を過ぎ已って　乃ち仏道を成ずることを得たまえり。　諸天及び世人　心に皆踊躍を懐く。
彼の仏の十六の子　皆其の眷属　千万億の囲繞せると　倶に仏所に行き至って　頭面に仏足を礼して
転法輪を請ず。『聖師子よ、法雨をもって　我及び一切に充てたまえ』と。
世尊は甚だ値いたてまつり難し　久遠に時に一たび現じ　群生を覚悟せんが為に　一切を震動したもう。
東方の諸の世界　五百万億国の　梵の宮殿光曜して　昔より未だ曾て有らざる所なり
諸梵此の相を見て　尋ねて仏所に来至し　花を散じて以て供養し　並びに宮殿を奉上し　仏に転法輪

(1)(2)花＝華

を請じ　偈を以て讃歎す。

仏、時未だ至らずと知しめして　請を受けて黙然として坐したまえり。　三方及び四維　上下、亦復爾なり。　花を散じ宮殿を奉り　仏に転法輪を請ず。

『世尊は甚だ値いたてまつり難し　願わくは大慈悲を以て　広く甘露の門を開き　無上の法輪を転じたまえ』と。

無量慧の世尊　彼の衆人の請を受けて　為に種種の法　四諦十二縁を宣べたもう。

『無明より老死に至るまで　皆生縁に従って有り　是の如きの衆の過患　汝等応当に知るべし』と。

是の法を宣暢したもう時　六百万億姟　諸苦の際を尽くすことを得て　皆阿羅漢と成る。

第二の説法の時　千万恒沙の衆　諸法に於いて受けずして　亦、阿羅漢を得。

是れより後の得道　其の数量有ること無し。　万億劫に算数すとも　其の辺を得ること能わじ。

時に十六王子　出家し沙弥と作って　皆共に彼の仏に　大乗の法を演説したまえと請ず。

『我等及び営従　皆当に仏道を成ずべし　願わくは世尊の如く　慧眼第一浄なることを得ん』と。

仏、童子の心　宿世の所行を知しめして　無量の因縁　種種の諸の譬喩を以て　六波羅蜜　及び諸の神通の事を説き　真実の法　菩薩所行の道を分別して　是の法華経の　恒河沙の如き偈を説きたまいき。

彼の仏、経を説き已って　静室にして禅定に入り　一心にして一処に坐したもうこと　八万四千劫なり。

〔訳〕その時、世尊は、重ねて以上の意義を宣べようとして、詩頌によって次のように言われた。

「大通智勝仏は、十劫という長時にわたって道場に坐っておられたけれども、仏の法が顕わに

ならず、仏道を完成することができずにおられた。(60)

多くの天神、龍王、阿修羅たちは、　つねに天の華をふらして、その仏に供養した。(61)

天人たちは天上の太鼓をうちならし、多くの音楽を奏した。　香りのよい風が、しぼんだ華を吹き去って、あらためて新しくて美しい華をふらせた。(62)

十小劫が過ぎ去って、そこではじめて仏道を完成することができた。　天人たちや世の人々は、みな心におどりあがるような喜びをおぼえた。(63)

その仏の、十六人の王子たちは、みなおつきの者たち、　千万億の人々にかこまれて、かれらとともに仏のみもとにおもむき、(64)

仏のみ足を頭につけて礼拝して、仏の説法を懇請した。　『聖なる獅子である世尊よ、どうか法の雨によって、私とすべての者たちとを充たしたまえ』と。(65)

世尊にお会いすることは、極めてむずかしい。久しい長時の間に、ひとたびだけ現われ、　生あるものたちをめざめ悟らせるために、すべてのものを震動させられる。(66)

東方の多くの世界の、五百万億の国々の、　梵天の宮殿が光り輝き、そのさまは、これまでにあったことのないようなものであった。(67)

梵天たちは、この様子を見て、たずねて仏のところへやって来て、　華を散らして供養し、また宮殿を献上した。(68)

仏に法を説かれるように請い、詩によって仏をほめたたえた。　仏は、その時がまだ至っていないとおぼしめして、要請を受けながらも、沈黙したまま坐っておられた。(69)

（東方以外の）三方と四方の中間と、上方・下方の方角においても、またそれぞれ同様であった。(70)

華を散らし、宮殿を献上し、仏に法を説かれるように要請したのだ。(71)

『世尊にお会いすることは極めてむずかしい。どうか、大きな慈悲をもって、広く不死の門を開き、無上の教えをお説き下さい』と。(72)

無量の智慧を有する世尊は、かの多くの人々の懇請を受けて、彼等に種々の法、四諦・十二因縁の教えを宣べられた。(73)

『無明から老死に至るまでは、みな、生ずるという縁によって存在する。このような多くの過ち、わざわいを、お前たちは、知らねばならぬ』と。(74)

この法を宣べられた時、六百万億姟（という多くの衆生たち）が、多くの苦のおわりまでを究め尽すことができて、みな阿羅漢となった。(75)

第二の説法の時も、千万のガンジス河の砂の数に等しいほどの多くの人々が、あらゆるものに対して執着をはなれ、また阿羅漢となった。(76)

これより後の、解脱を得たものの数は、はかり知れず、万億劫という長時において数えても、そのおわりに達することはできないほどであった。(77)

その時に、十六人の王子たちは、出家して沙弥となって、みなそろって、かの仏に、大乗の法を演べ説きたまえと懇請した。(78)

『私ども、それに多くのつき従うものたちは、みなどうしても仏道を成就しなくてはなりません。

どうか、世尊のように、智慧の眼が最も清らかになることができますように』と。(79)

仏は、これらの童子たちの心と、過去の世の行ないとを知って、無量のいわれと、種々の譬えをもって、(80)六波羅蜜、及び多くの神通のことを説き、真実の法である、菩薩がふみ行なう道を示して、(81)この法華経の、ガンジス河の砂の数にも等しいほどの多くの詩頌を説かれた。(82)かの仏は、経を説きおえると、静かな室で瞑想に入り、専心に一ヶ所に坐られること、八万四千劫という長時であった。(83)

《甘露門》第七章の注(四二〇頁)参照。《従生縁有》十二因縁の各支において、無明を生縁として行があり、乃至(ないし)生を生縁として老死があるというように、生縁(生ずる条件)によって各支があるということ。《六百万億姟》「姟」は巨数の単位の一つ。那由他(nayuta)の漢訳語。十億を兆、十兆を京、十京を姟という。一説に百京として阿庾多(ayuta)の訳であるとする。《於諸法不受》すべてのものに対して執着をおこさず、とらわれないこと。《営従》「営」は、まもり、「従」は、従う。まもり従うおつきの者たちの意。《童子心》長行中の「我等、如来の知見を志願す」という心を指す。《宿世之所行》長行中の「已に曾て、百千万億の諸仏を供養し、浄く梵行を修して、阿耨多羅三藐三菩提を求む」のことを指す。

本段以降は偈頌(げじゅ)となる。その内容は長行部分のくりかえしである。科段も長行と対応しており、今これを便のために掲げておく。

この図で本段の部分は、結縁の由を頌する部分に相当し、この中に遠由と近由の両者があるのはすでに長行部分でみたとおりである。

是諸沙彌等
各各坐法座
一一沙彌等
彼佛滅度後
是十六沙彌
爾時聞法者
我在十六數
以是本因緣
譬如險惡道
無數千萬衆
時有一導師
衆人皆疲惓
導師作是念
尋時思方便
周匝②有園林
即作是化已
諸人既入城
導師知息已
我見汝疲極

知佛禪未出
說是大乘經
所度諸衆生
是諸聞法者
具足行佛道
各在諸佛所
曾亦爲汝說
今說法華經
逈絕多毒獸
欲過此險道
强識有智慧
而白導師言
此輩甚可愍
當設神通力
渠流及浴池
慰衆言勿懼
心皆大歡喜
集衆而告言
中路欲退還

爲無量億衆
於佛宴寂後
有六百萬億
在在諸佛土
今現在十方
其有住聲聞
是故以方便
令汝入佛道
又復無水草
其路甚曠遠
明了心決定
我等今頓乏
如何欲退還
化作大城郭
重門高樓閣
汝等入此城
皆生安隱③想
汝等當前進
故以方便力

說佛無上慧
宣揚助法化
恒河沙等衆
常與師俱生
各得成正覺
漸教以佛道
引汝趣佛慧
愼勿懷驚懼
人所怖畏處
經五①百由旬
在險濟衆難
於此欲退還
而失大珍寶
莊嚴諸舍宅
男女皆充滿
各可隨所樂
自謂已得度
此是化城耳
權化作此城

汝等(4)勤精進　當共至寶所　我亦復如是　爲一切導師
見諸求道者　中路而懈廢　不能度生死　煩惱諸險道
故以方便力　爲息說涅槃　言汝等苦滅　所作皆已辦(5)
既知到涅槃　皆得阿羅漢　爾乃集大衆　爲說眞實法
諸佛方便力　分別說三乘　唯有一佛乘　息處故說二
今爲汝說實　汝所得非滅　爲佛一切智　當發大精進
汝證一切智　十力等佛法　具三十二相　乃是眞實滅
諸佛之導師　爲息說涅槃　既知是息已　引入於佛慧

妙法蓮華經卷第三

(1)底本は「三」。ただし、高麗蔵、宋・元・明三本、春日本もすべて「五」。大正蔵の誤りか。今、改む。
(2)匝＝帀　(3)隱＝穩　(4)等＝今　宋・元・明三本も「今」。　(5)辦＝辯

是の諸の沙弥等　仏の禅より未だ出でたまわざるを知って　無量億の衆の為に　仏の無上慧を説く。
各各に法座に坐して　是の大乗経を説き　仏の宴寂の後に於いて　宣揚して法化を助く。
一一の沙弥等の　度する所の諸の衆生　六百万億　恒河沙等の衆有り。
彼の仏の滅度の後　是の諸の聞法の者　在在諸仏の土に　常に師と倶に生ず。
是の十六の沙弥　具足して仏道を行じて　今、現に十方に在って　各正覚を成ずることを得たまえり。
爾の時の聞法の者　各諸仏の所に在り　其の声聞に住すること有るは　漸く教うるに仏道を以てす。

我十六の数に在って　曽て亦汝が為に説きき。　是の故に方便を以て　汝を引いて仏慧に趣かしむ。
是の本因縁を以て　今法華経を説いて　汝をして仏道に入らしむ　慎んで驚懼を懐くこと勿れ。
譬えば、険悪道の　迥かに絶えて毒獣多く　又復、水草無く　人の怖畏する所の処あらん。
無数千万の衆　此の険道を過ぎんと欲す。　其の路、甚だ曠遠にして　五百由旬を経。
時に一りの導師有り　強識にして智慧有り　明了にして心決定せり　険きに在って衆難を済う。
衆人、皆疲惓して　導師に白して言さく　『我等、今頓乏せり　此より退き還らんと欲す』と。
導師是の念を作さく　『此の輩甚だ愍むべし　如何ぞ退き還って　大珍宝を失わんと欲する』と。
尋いで時に方便を思わく　『当に神通力を設くべし』と。　大城郭を化作して　諸の舎宅を荘厳す。
周匝して、園林　渠流及び浴池　重門高楼閣有って　男女、皆充満せり。
即ち是の化を作し已って　衆を慰めて言く　『懼るること勿れ。　汝等よ、此の城に入りなば　各所楽に
随うべし』と。
諸人、既に城に入りて　心皆大いに歓喜し　皆安隠の想を生じて　自ら已に度することを得つと謂えり。
導師は息み已んぬと知って、　衆を集めて告げて言わく　『汝等当に前進むべし　此れは是れ化城ならく
のみ。　我、汝が疲極して　中路に退き還らんと欲するを見る。　故に方便力を以て　権に此の城を化作
せり。　汝等よ、勤め精進して　当に共に宝所に至るべし』と。
我も亦復是の如し　為れ一切の導師なり。　諸の道を求むる者の　中路にして懈廃し　生死煩悩の
諸の険道を度すること能わざるを見る。
故に方便力を以て　息めんが為に涅槃を説いて　『汝等は苦滅し　所作皆已に弁ぜり』と言う。
既に涅槃に到り　皆阿羅漢を得たりと知って　爾して乃し大衆を集めて　為に真実の法を説く。

諸仏は方便力をもって　分別して三乗を説きたもう。　唯一仏乗のみあり　息処の故に二を説く。
今、汝が為に実を説く　『汝が所得は滅に非ず　仏の一切智の為に　当に大精進を発すべし。
汝、一切智　十力等の仏法を証し　三十二相を具しなば　乃ち是れ真実の滅ならん。
諸仏の導師は　息めんが為に涅槃を説きたもうも　既に是れ息み已んぬと知れば　仏慧に引入したもうなり』と。」

妙法蓮華経巻第三

〔訳〕

この（十六人の）沙弥たちは、仏が瞑想よりまだ出られないことを知って、　無量億という多くのものたちのために、仏の無上の智慧を説いた。(84)
それぞれに説法の座に坐って、この大乗経典を説いて、　仏がやすらかに入滅された後においても、この経を宣揚して、法による教化を助けた。(85)
一人一人の沙弥たちが、済度した多くの衆生たちは、　六百万億という、ガンジス河の砂の数にも等しいほどの多数であった。(86)
かの仏が入滅された後、この多くの法を聞いた者たちは、　ここかしこの多くの国土において、つねに師とともに生まれるのだ。(87)
この十六人の沙弥たちは、十分に修行をつんで仏道を実践し、　今、現に十方の方角にいて、そ

れぞれ正しい悟りを完成することができたのである。(88) それらのなかその時、教えを聞いた者たちは、それぞれ（十六人の）仏たちのもとにいたが、で声聞の位にとどまっているものには、次第次第に仏道を教えたのである。(89)

私は、第十六番目の仏として仏たちのなかにおり、かつて、またお前たちのために説法したのである。それゆえ、私は、教化の手だてによって、お前たちを仏の智慧に引き入れよう。(90) この、もとのいわれによって、今、法華経を説いて、お前たちを仏の道に入らせよう。決して、驚きおそれてはならない。(91)

たとえば、険しく困難な悪路で、はるかに人跡とだえて、害獣が多く、また水も草もなく、人の怖れる所があったとしよう。(92) 千万の無数倍という多くの人々が、この険しい道を通過しようとするが、その路は非常に遠くて五百ヨージャナもある。(93)

その時、一人の指導者がいて、記憶力にすぐれ智慧があり、賢明で心がしっかりとしており、危難にあって、多くの難を救うとしよう。(94) 人々はみな疲れ果て、指導者に向って言った。『私たちは、今はもう疲れ果ててしまった。ここで引き返したい』と。(95)

指導者は、このように考えた。『この人たちはとてもかわいそうだ。どうして引き返して、立派な珍しい宝を失おうとするのだろうか』と。(96) そこで、大きな城市ついで、教化の手だてのことを考えて、『神通力を講じよう』と思った。

を変化(へんげ)で作り出し、多くの家々をかざりたてた。(97)まわりには、園林、ほりわり、水浴の池、幾重にも設けた門、高い楼閣を配して、そのなかには男女が充ちみちていた。(98)以上の幻化をなしおわると、人々を慰めて言った。『怖れることはない。諸君、この城市に入ったならば、それぞれしたいことをしなさい』と。(99)人々は城市に入って、大いに喜び、みな心安らかな想いを生じて、(険しい道を)こえることができたと思った。(100)指導者は、彼らが休息しおえたと知って、人々を集めて告げて言った。『諸君、前進しよう。これは変化で作った城にすぎないのだ。(101)私は、諸君らが疲れきって、途中で引き返そうとしたのを見た。それ故、教化の手だての力によって、かりにこの城市を変化で作り出したのだ。諸君、頑張りはげんで、一緒に宝のありかに到ろう』と。(102)私も、またそのようである。すべてのものたちの指導者である。道を求めるものたちが、中途で怠り放棄して、輪廻(りんね)、煩悩(ぼんのう)の多くの険しい悪路をわたることができないのを見る。(103)それ故、教化の手だての力によって、彼らを休息させるために涅槃を説いて、『汝たちは、苦は滅し、なすべきことはすべてなしおわった』というのだ。(104)すでに涅槃に到達し、みな阿羅漢の地位を得たと知って、そこで多くのものたちを集めて、彼らのために真実の教えを説くのである。(105)

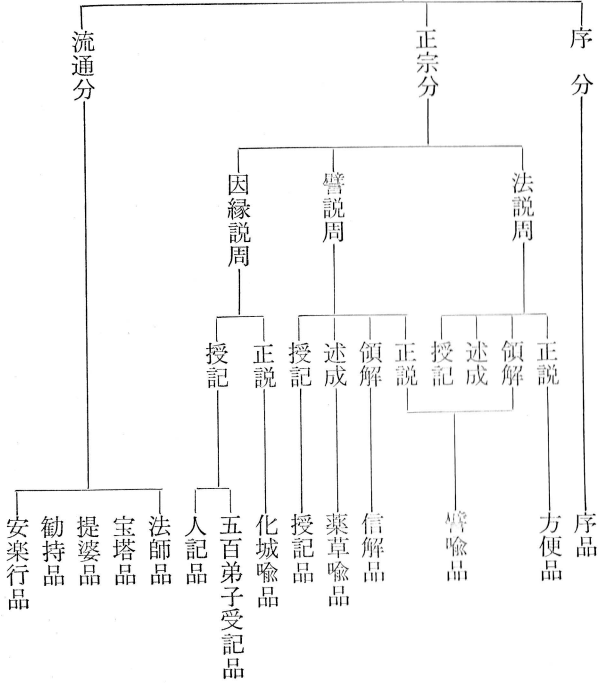
仏たちは、教化の手だての力によって、区別して三種の教えの乗りものを説かれた。しかし、ただ一つの仏の乗りもののみがあるのであって、休息処のために二種を説かれたのだ。(106)今、汝たちのために、真実を説こう。『汝たちが得たものは涅槃ではない。仏の一切智を得るために、大いなる精進(しょうじん)をおこすべきである。(107)汝たちが、一切智、十種の神通力などの仏の法を体得し、三十二種の仏の相好を具えたならば、それが真実の涅槃であるということができよう。(108)指導者である仏たちは、(人々を)休息させようとして涅槃を説かれたけれども、彼らが休息しおわったと知ったならば、仏の智慧に引き入れられるのだ』と。」(109)

《宴寂》安らかに入寂すること。ただし、ここを仏の入寂でなく、入定(禅定に入ること)とする解釈もある。**《在在諸仏土　常与師倶生》**ここかしこの仏土に、師、すなわち十六菩薩沙弥のそれぞれとつねに一緒に生まれるということ。**《以是本因縁》**本因縁とは、もともとのいわれ、という意味で、現在の釈迦牟尼仏と過去の十六菩薩沙弥、大通智勝仏とのつながり、及びその法を聞いた過去の人々と現在に法を聞いている人々とのつながりを指す。**《頓乏》**「頓」も「乏」も、倦み疲れるの意。**《尋時》**「ついで〜」の意をあらわす副詞。「即時」などと同じく、六朝訳経時代に造られた複合語。**《所作皆已弁》**阿含経典における定型句、「所作已弁」(kataṃ karaṇīyaṃ)にもとづく表現。**《息処故説二》**「二を説く」の「二」は長行には「二涅槃」とあり、今はそれに対応して有余、無余の二涅槃と解するが、この「二」を声聞乗、縁覚乗の二乗とする解釈もある。**《一切智》**一切を知る仏の智慧をいう。**《十力》**第二章の注(一一一頁)参照。**《三十二相》**第二章の注(二〇四頁)参照。

本段は、科段でいえば、正しく結縁を頌す部分の全部に相当する（四五九頁参照）。このなかに法説と譬説とがあり、法説とは十六菩薩沙弥の覆講から、昔からの師弟の因縁を明かして現在また法華を説いて仏道に入らしめるという部分までである。譬説とは化城の喩の部分である。

以上で第七章は終わるが、本章のテーマは大通智勝仏と現在の釈迦牟尼仏、昔の弟子と現在の弟子について、過去と現在を連絡づける過去の因縁を語ることであった。それ故、科段では本章を因縁説のなかの正説としているのである。

ここで科段についてまとめておくと、妙法華一経二十八章を序品から第十四章安楽行品までの前半部分を迹門、第十五章従地涌出品以下最終章の勧発品までの後半十四章を本門として大きく二分する。このうち前半の迹門について序分・正宗分・流通分の三段に分ける。序分は序品、正宗分は第二章方便品から第九章の授学無学人記品までの八章とし、流通分は第十章法師品から第十四章の安楽行品までの五章とするのである。そして、正宗分についてこれを三段に分ける。すなわち法説、譬説、因縁説の三段で、これを法・譬・因の三周説法という。法説周は方便品と譬喩品、譬説周は譬喩品の一部から第六章授記品までであり、因縁説周が本章から第九章の人記品までである（一九一―二、二三二―三、三七七―八〇頁を参照）。因縁説周のうちの正説が本章に相当し、本章に説かれた宿世の因縁を聞いた富楼那等の千二百人の声聞たちが、仏の意を領解するのが次章のはじまりである。以上の科段をまとめて図示すると次のようである。

迹門
序分
正宗分
流通分
法説周
譬説周
因縁説周
正説
領解
述成
授記
正説
領解
述成
授記
正説
授記
序品
方便品
譬喩品
信解品
薬草喩品
授記品
化城喩品
五百弟子受記品
人記品
法師品
宝塔品
提婆品
勧持品
安楽行品

妙*法蓮華經卷第四

五*百弟子受記品第八

後*秦龜茲國三藏法師
鳩摩羅什奉　詔譯

爾時。富樓那彌多羅尼子。從佛聞是。智慧方便。隨宜說法。又聞授諸大弟子。阿耨多羅三藐三菩提記。復聞宿世。因緣之事。復聞諸佛。有大自在。神通之力。得未曾有。心淨踊躍。卽從座起。到於佛前。頭面禮足。却住一面。瞻仰尊顏。目不暫捨。而作是念。世尊甚奇特。所爲希有。隨順世間。若干種性。以方便知見。而爲說法。拔出衆生。處處貪著。我等於佛功德。言不能宣。唯佛世尊。能知我等。深心本願。爾時佛告。諸比丘。汝等見是。富樓那彌多羅尼子不。我常稱其。於說法人中。最爲第一。亦常歎其。種種功德。精勤護持。助宣我法。能於四衆。示敎利喜。具足解釋。佛之正法。而大饒益。同梵行者。自捨如來。無能盡其。言論之辯。汝等勿謂。富樓那。但能護持。助宣我法。亦於過去。九十億諸佛所。護持助宣。佛之正法。於彼說法人中。亦最第一。又於諸佛。所說空法。明了通達。得四無礙智。常能審諦。清淨說法。無有疑惑。具足菩薩。神通之力。隨其壽命。常修梵行。彼佛世人。咸皆謂之。實是聲聞。而富樓那。以斯方便。饒益無量。百千衆生。又化無量。阿僧祇人。令立阿

耨多羅三藐三菩提。爲淨佛土故。常作佛事。教化衆生。諸比丘。富樓那。亦於七佛。説法人中。而得第一。今於我所。説法人中。亦爲第一。於賢劫中。當來諸佛。説法人中。亦復第一。而皆護持。助宣佛法。亦於未來。護持助宣。無量無邊。諸佛之法。教化饒益。無量衆生。令立阿耨多羅三藐三菩提。爲淨佛土故。常勤精進。教化衆生。漸漸具足。菩薩之道。過無量阿僧祇劫。當於此土。得阿耨多羅三藐三菩提。號曰法明如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。其佛以恒河沙等。三千大千世界。爲一佛土。七寶爲地。地平如掌。無有山陵。谿澗溝壑。七寶臺觀。充滿其中。諸天宮殿。近處虚空。人天交接。兩得相見。無諸惡道。亦無女人。一切衆生。皆以化生。無有婬欲。得大神通。身出光明。飛行自在。志念堅固。精進智慧。普皆金色。三十二相。而自莊嚴。其國衆生。常以二食。一者法喜食。二者禪悅食。有無量阿僧祇。千萬億那由他。諸菩薩衆。得大神通。四無礙智。善能教化。衆生之類。其聲聞衆。算數校計。所不能知。皆得具足。六通三明。及八解脫。其佛國土。有如是等。無量功德。莊嚴成就。劫名寶明。國名善淨。其佛壽命。無量阿僧祇劫。法住甚久。佛滅度後。起七寶塔。遍滿其國。

爾の時に、富楼那弥多羅尼子、仏より是の智慧の方便随宜の説法を聞き、又、諸の大弟子に、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたもうを聞き、復、宿世の因縁の事を聞き、復、諸仏の、大自在神通の力有すことを聞きたてまつりて、未曾有なることを得、心浄く踊躍し、即ち座より起ちて仏前に到り、頭面に足を礼して、却って一面に住し、尊顔を瞻仰して、目暫くも捨てず、而も是の念を作さく、

「世尊は甚だ奇特にして、所為希有なり。世間の若干の種性に随順して、方便知見を以て、為に法を説いて、

衆生の処処の貪着を抜出したもう。我等、仏の功徳に於いて、言をもって宣ぶること能わず。唯仏世尊のみ、能く我等が深心の本願を知しめせり」と。

爾の時に仏、諸の比丘に告げたまわく、

「汝等、是の富楼那弥多羅尼子を見るや不や。我常に其れ、説法人の中に於いて、最も第一たりと称し、亦、常に其の種種の功徳を歎ず。精勤して我が法を護持し助宣し、能く四衆に於いて示教利喜し、具足して仏の正法を解釈して、大いに同梵行者を饒益す。如来を捨いてよりは、能く其の言論の弁を尽くすもの無けん。汝等、富楼那は、但能く我が法を護持し、助宣するのみと謂うこと勿れ。亦、過去九十億の諸仏の所に於いても、仏の正法を護持し、助宣し、彼の説法人の中に於いても、亦最も第一なりき。又、諸仏所説の空法に於いて、明了に通達し、四無礙智を得て、常に能く審諦に清浄に、法を説いて疑惑有ること無く、菩薩神通の力を具足し、其の寿命に随って、常に梵行を修しき。彼の仏世の人、咸く皆、之を実に是れ声聞なりと謂えり。而も富楼那は、斯の方便を以て、無量百千の衆生を饒益し、又、無量阿僧祇の人を化して、阿耨多羅三藐三菩提を立てしむ。仏土を浄めんが為の故に、常に仏事を作して衆生を教化しき。諸の比丘よ、富楼那は亦、七仏の説法人の中に於いて、第一なることを得、今我が所の、説法人の中に於いても、亦第一なることを為。賢劫の中、当來の諸仏の説法人の中に於いても、亦復第一にして、皆仏法を護持し、助宣せん。亦、未来に於いても、無量無辺の諸仏の法を護持し、助宣し、無量の衆生を教化し、饒益して、阿耨多羅三藐三菩提を立てしめん。仏土を浄めんが為の故に、常に勤めて精進し、衆生を教化せん。漸漸に菩薩の道を具足して、無量阿僧祇劫を過ぎて、当に此の土に於いて、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。号を法明如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と曰わん。其の仏、恒河沙等の三千大千世界を以て一仏土と為し、七宝を地と為し、地の平かなること、掌の如くにして、山陵、谿澗、溝壑有ること無けん。七宝の台観、其の中に

充満し、諸天の宮殿、近く虚空に処し、人天交接して両ら相見ることを得ん。諸の悪道無く、亦女人無くして、一切衆生、皆以て化生し、婬欲有ること無けん。大神通を得て、身より光明を出し、飛行自在ならん。志念堅固に、精進・智慧あって、普く皆金色に、三十二相をもって自ら荘厳せん。其の国の衆生は、常に二食を以てせん。一には法喜食。二には禅悦食なり。無量阿僧祇千万億那由他の諸の菩薩衆有り、大神通、四無礙智を得て、善能く衆生の類を教化せん。其の声聞衆、算数校計すとも知ること能わざる所ならん。皆、六通、三明、及び八解脱を具足することを得ん。其の仏の国土は、是の如き等の無量の功徳有って、荘厳し成就せん。劫を宝明と名づけ、国を善浄と名づけん。其の仏の寿命、無量阿僧祇劫にして、法住すること、甚だ久しからん。仏の滅土の後、七宝の塔を起てて、其の国に遍満せん」と。

〔訳〕その時に、富楼那弥多羅尼子は、仏から以上の、智慧にもとずく教化の手だてとしての、聴く者にふさわしく説かれた説法を聞き、また多くのすぐれた弟子たちに無上の正しい悟りの予言を授けられたのを聞き、また前世のいわれのことを聞き、また、多くの仏たちが偉大な自由自在の神通力を有していることを聞いて、これまでにない思いをおぼえ、心清らかに喜びにこおどりし、すぐさま座から起って、仏のみ前に到り、頭に仏のみ足を拝して、退いて一隅に座を占め、尊い顔をあおぎみて、一時も目をはなさなかった。そして、次のように思った。

「世尊は極めて稀れで特別な存在であり、そのおこないはめったにはみられないものである。この世の人々の種々の性質に応じて、教化の手だての智慧によって法を説き、衆生たちがあちこちに貪り執着しているのをぬけ出させる。私たちは、仏の功徳を言葉によって述べることはできない。ただ

仏・世尊だけが、私たちの心の奥の本来の願いを知っておられるのだ」と。

その時に、仏は比丘たちに告げられた。

「汝たちよ、この富楼那弥多羅尼子を見よ。私は、常に、彼が説法者の中の第一人者であることを称え、また常に、その種々の功徳をほめた。彼はよくつとめて私の教法を護りたもち、私を助けて法を説き、四衆の人々に教えを示し、教導し、利益(りやく)を与え、喜ばしめた。よく十分に仏の正しい法を解釈して、清浄(しょうじょう)な行(ぎょう)を修する同行者たちに大いに利益を与えた。如来を除いては、彼ほど言論における弁舌を尽すことのできるものはいないであろう。汝たちよ、富楼那は、ただ私の教法を護りたもち、私を助けて法を説いただけと思ってはならない。また過去の九十億という仏たちの所においても、仏の正しい法を護りたもち、仏を助けて法を説き、その説法者たちの中でも第一人者であったのだ。また、仏たちの説かれた空(くう)の教えに明了に通じ、四種の自由自在な智慧を獲得して、常に明瞭に、清らかに法を説いて、何の疑惑もなく、菩薩の神通力をそなえていた。そして、その寿命の尽きるまで、常に清らかな行を修したので、その仏の世にいた人々はすべて、彼こそは本当に声聞（仏弟子）であると思っていたのだ。しかも、富楼那は、この教化の手だてによってはかりしれない百千もの衆生たちに利益を与え、またはかりしれない無数の人々を教化して、無上の正しい悟りに向かわせた。仏の国土を浄めるために、つねに仏のおこないをなし、衆生を教化したのだ。比丘たちよ、富楼那は、また過去の七仏たちのもとの説法者たちの中にあっても第一人者であった。そして、今、また私のもとの説法者たちの中にあっても第一人者である。賢劫という現在の世に、将来出現する多くの仏たちのもとの説法者の中でも第一人者であり、仏の教法を護りたもち、仏を助けて教えを説くであろう。また、

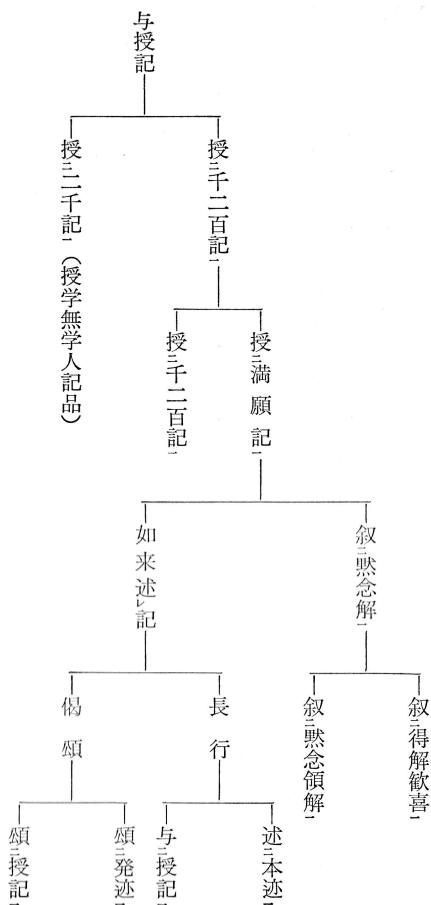
未来の世においても、はかりしれないほど多くの仏たちの法を護りたもち、仏を助けて教えを説き、無量の衆生たちを教化し、利益を与え、無上の正しい悟りに向かわせるであろう。仏の国土を浄めるために、つねに努めて精進し、衆生を教化するであろう。次第に菩薩の道をそなえてゆき、阿僧祇劫の無量倍の長時を経過して、この国土において無上の正しい悟りを獲得するであろう。その名を、法明如来、供養をうけるにふさわしい人、正しくあまねき智慧をそなえた人、智と実践とが完全にそなわった人、悟りに到達した人、世界のすべてに通じている人、最上の人、人間の調教師、諸天と人々との師、仏・世尊というであろう。その仏は、ガンジス河の砂の数にも等しい数の三千大千世界を一つの仏国土となして、地面は七宝よりなり、その平坦なことは手のひらのようであり、山や谷や溝もないであろう。七宝づくりの高楼が建ちならんで、天の神々の宮殿はその近くの虚空にあり、人間と天人とがおたがいに交わり接し、両者がともに見あうことができるであろう。さまざまな悪しき境遇も存在せず、また女人もおらず、すべての衆生はみな他によらずひとりでに生まれ、婬欲があることはないであろう。偉大な神通力を身につけ、身体から光明を放って、空中を自由自在に飛行することができるであろう。志しは堅固で、努力の力と智慧とを有し、みな一様に金色をしており、三十二種の身体的特徴によって、自身をおごそかに飾るであろう。その国土の衆生は、つねに二種の食物によっている。その一つは法を聞く喜びという食物、いま一つは禅定の喜びという食物である。阿僧祇千万億ナユタの無量倍という多くの菩薩たちがいて、偉大な神通と四種の自由自在な智慧を体得し、よく衆生たちを教化するであろう。声聞たちは、数え計算することもできないほど多くおり、みな六種、三種の神通と八種の禅定とをそなえることができるであろう。

その仏の国土は、以上のようなはかりしれない福徳があって、おごそかに飾られるであろう。(富楼那が仏となる)その劫を宝明と名づけ、その国を善浄と名づけるであろう。その仏の寿命は、阿僧祇劫の無量倍という長さであり、(仏の説いた)法は非常に長時に存続するであろう。仏が入滅した後には、七宝づくりの塔を起てて、その国中に満ちあふれさせるであろう」と。

《富楼那弥多羅尼子》 Pūrṇamaitrāyaṇīputra 第一章の語注(四四頁)参照。**《智慧方便随宜説法》** 仏の智慧にもとずいた教化の手だてとしての、相手の素質・状況に応じた説法の意。具体的には方便品、譬喩品において説かれた内容を指す。**《聞授諸大弟子阿耨多羅三藐三菩提記》** これまでの譬喩品における舎利弗、及び授記品における摩訶迦葉をはじめとする四大声聞の成仏の記莂を指す。**《宿世因縁之事》** 前章化城喩品で説かれた過去からのつながりの事実を指す。**《頭面礼足》** 顔面を仏の足に接するように近づけて下げる礼法。**《却住一面》** しりぞいて一隅に座を占めること。**《世間若干種性》** 世間の人々のあれこれの素質、性質。「種性」とは、ここでは人の素質、性質の意で、種姓(gotra)の意ではない。梵本は nānādhātukaṃ(様々な要素・性質)という(p. 199, *l* 6)。**《方便知見》** 教化の手だての智慧。ここでは具体的には衆生の素質、性質を見とおす智慧をいう。**《見……不》**「見るやいなや」と訓む。選択疑問の語法で、仏典に多用される。「か、どうか」という念押しのニュアンスを含む。ここでは比丘たちは当然富楼那を見ているので、強意の意にとり、「見よ」という命令形に訳す。**《助宣》** 助け宣べる、すなわち仏の教化を助けて法を説くこと。**《示教利喜》** 前章の語注(四三五頁)参照。**《梵行》** 第三章の語注(三二八頁)参照。**《四無礙智》** 四無礙弁ともいう。仏・菩薩の説法における四種のすぐれた理解表現の自在性をいう。㈠法無礙(教法の自在性)㈡義無礙(教えの意義内容についての自在性)㈢辞無礙(教えを語ることばの自在性)㈣楽説無礙(弁舌の自在

性)。以上の四種。《**実是声聞**》声聞は、ここでは二乗と貶称される声聞ではなく、本来の意義での仏弟子という意味。《**阿僧祇**》第一章の語注(八八頁)参照。《**七仏**》過去七仏といい、釈尊以前に出現した六人の仏と釈尊を加えた七人の仏をいう。㈠毘婆尸仏(Vippasin)㈡尸棄仏(Śikhin)㈢毘舎浮仏(Vessabhū)㈣拘留孫仏(Koṇḍañña)㈤拘那含牟尼仏(Konāgamana)㈥迦葉仏(Kassapa)㈦釈迦牟尼仏(Śākyamuni)。以上の七仏をいう。《**賢劫**》bhadra-kalpa 仏教の世界観では、この宇宙は成・住・壊・空という四つのプロセスを繰り返すという。この四つの段階のそれぞれの期間は二十中劫(劫については第一章の語注、八八頁参照)であり、これが一巡するのに要する時間(すなわち八十小劫)を一大劫という。賢劫はこの宇宙の生成生滅の四段階のうちの住劫(持続する段階の期間)のことをいい、この期間に賢人たる仏が出現するので、賢劫というとされる。なお、これには異説がある。《**仏事**》buddha-kārya 仏の事業、すなわち、衆生教化のはたらきを指す。《**法明如来……仏・世尊**》「法明」は梵本では dharma-prabhāsa(法の輝き)という。仏の十号については第一章の語注(八八―九頁)参照。《**三千大千世界**》第五章の語注(三三六頁)参照。《**七宝**》第二章の語注(一七二頁)参照。《**台観**》高い楼閣のこと。《**化生**》aupapāduka 仏教では、生きとしいけるものの生まれ方に㈠卵生(卵から生まれる)㈡胎生(母胎から生まれる)㈢湿生(湿気から生まれる)㈣化生、の四通りがあるとする。第四の化生は、さきの三通りのいずれでもなく、他の原因によらないで忽然と自身の原因(業)のみから生まれる生まれ方をいう。天上や地獄に生まれるものの生まれ方。《**法喜食**》法を聞いて生ずる喜びという食物。《**禅悦食**》禅定を行うことによって生じる悦びという食物。なお、『倶舎論』巻十二、「分別世品」によれば、人間の劫初の状態は、肢体円満、形色端麗で、身体には光明を帯び、空中を自由に飛行し、男女の区別がなく、長寿で食事は喜楽(prīti)を摂っていたという。本経のこの一段の内容との類似性がうかがわれる。《**善能**》「よく」の意をあらわす副詞。同じ意味をあらわす字を二

字重ねてつくられた複合語で、六朝期の語法の特徴。字を倒置した「能善」の語も使用される。《算数校計》数を数えて較べ計る、すなわち計算すること。《六通・三明》第三章の語注（二一四及び二六七頁）参照。《八解脱》第六章の語注（三六八頁）参照。《宝明》梵本では Ratnāvabhāsa（宝の輝き）という。《善浄》梵本では Suviśuddha（非常に浄らかな）という。

本章は富楼那弥多羅尼子をはじめとする千二百人の下根の阿羅漢たちが、前章化城喩品までの説法を聞いて仏の説法の意趣を理解したので、彼ら千二百人の阿羅漢たちに仏が授記するという内容であ

る。本章では、千二百人のうち、直接に五百人の阿羅漢に記莂（きべつ）が与えられるので、五百弟子受記品という章名になっている。

本段は、富楼那の黙念領解（もくねんりょうげ）（言葉に出さずに心の中で仏意を領解すること）に対して、仏が、その富楼那の心中を理解して、その領解を述成し、富楼那の過去を明かして授記を与え、成仏後の仏国土の様を説くところまでである。本章の本段までの科文を略記すると、前頁のようである。

本段は、右の科文のうち、「如来述記」の長行部分までである。

爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言。

諸比丘諦聽　佛子所行道　善學方便故　不可得思議
知衆樂小法　而畏於大智　是故諸菩薩　作聲聞縁覺
以無數方便　化諸衆生類　自説是聲聞　去佛道甚遠
度脱無量衆　皆悉得成就　雖小欲懈怠　漸當令作佛
內祕菩薩行　外現是聲聞　少欲厭生死　實自淨佛土
示衆有三毒　又現邪見相　我弟子如是　方便度衆生
若我具足説　種種現化事　衆生聞是者　心則懷疑惑
今此富樓那　於昔千億佛　勤修所行道　宣護諸佛法
爲求無上慧　而於諸佛所　現居弟子上　多聞有智慧
所説無所畏　能令衆歡喜　未曾有疲惓　而以助佛事

已度大神通　具四無礙智(1)　知諸(2)根利鈍　常說清淨法
演暢如是義　教諸千億衆　令住大乘法　而自淨佛土
未來亦供養　無量無數佛　護助宣正法　亦自淨佛土
常以諸方便　說法無所畏　度不可計衆　成就一切智
供養諸如來　護持法寶藏　其後得成佛　號名曰法明
其國名善淨　七寶所合成　劫名爲寶明　菩薩衆甚多
其數無量億　皆度大神通　威德力具足　充滿其國土
聲聞亦無數　三明八解脫　得四無礙智　以是等爲僧
其國諸衆生　婬欲皆已斷　純一變化生　具相莊嚴身
法喜禪悅食　更無餘食想　無有諸女人　亦無諸惡道
富樓那比丘　功德悉成滿　當得斯淨土　賢聖衆甚多
如是無量事　我今但略說

(1)智＝慧　(2)諸＝衆

爾の時に、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「諸の比丘よ、諦かに聴け　仏子所行の道は　善く方便を学せるが故に　思議すること得べからず。

衆の小法を楽いて　大智を畏ることを知れり。　是の故に諸の菩薩　声聞縁覚と作り　無数の方便を以て　諸の衆生類を化して　自ら『是れ声聞なり　仏道を去ること甚だ遠し』と説く。

無量の衆を度脱して　皆悉く成就することを得せしめ　小欲懈怠なりと雖も　漸く当に作仏せしむべし。

内に菩薩の行を秘し　外に是れ声聞なりと現ず　少欲にして生死を厭えども　実には自ら仏土を浄む。
衆に三毒有りと示し　又邪見の相を現ず　我が弟子是の如く　方便して衆生を度す。
若し、我具足して　種種の現化の事を説かば　衆生の是れを聞かん者　心に則ち疑惑を懐かん。
今、此の富楼那は　昔の千億の仏に於いて　所行の道を勤修し　諸仏の法を宣護し　無上の慧を求むるを為って　諸仏の所に於いて
弟子の上に居し　多聞にして智慧有りと現じ　所説畏るる所無くして　能く衆をして歓喜せしめ　未だ曽て疲惓有らずして　以て仏事を助く。
已に大神通に度り　四無礙智を具し　諸根の利鈍を知って　常に清浄の法を説き　是の如き義を演暢して　諸の千億の衆を教え　大乗の法に住せしめて　自ら仏土を浄めり。
未来にも亦　無量無数の仏を供養し　正法を護り助宣して　亦自ら仏土を浄めん。
常に諸の方便を以て　法を説くに畏るる所無く　不可計の衆を度して　一切智を成就せしめん。
諸の如来を供養し　法の宝蔵を護持して　其の後に成仏することを得ん　号を名づけて法明と曰わん。
其の国を善浄と名づけ　七宝の合成せる所ならん　劫を名づけて宝明と為ん　菩薩衆甚だ多く　其の数無量億にして　皆大神通に度り　威徳力具足して　其の国土に充満せん。
声聞、亦無数にして　三明八解脱あって　四無礙智を得たる　是等を以て僧と為ん。
其の国の諸の衆生は　婬欲皆已に断じ　純一に変化生にして　相を具し身を荘厳せん。
法喜・禅悦食にして　更に余の食想無けん　諸の女人有ることなく　亦、諸の悪道無けん。
富楼那比丘　功徳悉く成満して　当に斯の浄土の　賢聖衆甚だ多きを得べし。
是の如き無量の事　我、今但略して説くのみ」と。

〔訳〕その時に、世尊は、重ねて以上の意義を宣べようとして、詩頌を説いて次のようにいわれた。

「比丘たちよ、よく聴け。仏の子が修行した道は、教化の手だてを十分に学んでいるので、思いはかることはできないのだ。(1)

人々が、小さな（劣った）教えを願って、大いなる智を畏れていることを知って、そのために菩薩たちは（方便として）、声聞・縁覚となって、(2)

無数の教化の手だてによって、さまざまな衆生たちを教化し、みずからは『私たちは声聞である、仏の道から甚だ遠くはなれている』と、説くのだ。(3)

はかりしれないほどの人々を済度し、すべて（仏道を）成就することができるようにする。（彼らは）小さな欲しかなく、なまけ怠るものではあっても、次第次第に必ず仏になるようにさせるであろう。(4)

内には菩薩としての修行を秘め、外に対しては、自分たちは声聞であると現わし、少欲で、生死輪廻を厭ってみせながら、その実、みずから仏の国土を浄めるのだ。(5)

人々に、（自分たちが、貪り・いかり・おろか、の）三種の毒を有していることを示したり、また誤った見解に陥っている有様を現わしたりする。(6)

私の弟子たちは、このように、教化の手だてを設けて、衆生を救済するのだ。もし、私が、洗いざらい、種々の教化のために（彼らが）現わし出したことを説いたならば、これを聞いた衆生たちは、心に疑惑を懐くことであろう。(7)

今、この富楼那は、過去の一千億という仏たちのもとで、　ふみ行うべき修行の道をつとめ修め、
仏たちの法を説き、獲得したのだ。　この上ない智慧を求めるために。(8)

多くの仏たちのもとで、弟子たちの上首としてあり、博識で智慧のあることを示し現わし、　その説く内容には、おそれがなく（自信があり）、人々を喜ばして、　これまでうみ疲れることがない。(9)

それによって仏の教化を助けたのである。偉大な神通を体得していて、　四種の自在な智慧をそなえ、人々の能力素質の優劣を知って、つねに清らかな教えを説いた。(10)

そのような意義を説き述べて、幾千億の人々を教え、　大きな教えの乗物にとどまらせて、　みずから仏の国土を浄めたのである。(11)

未来においてもまた、はかりしれない無数の仏を供養し、　正しい教えを護り、　仏を助けて教えを説き、またみずから仏の国土を清めるであろう。(12)

つねに多くの教化の手だてを用いて、法を説くのに畏れることなく、　はかりしれないほどの人人を救済して、（彼らに、仏の）一切を知る智慧を完成させるであろう。(13)

多くの如来たちを供養し、教法の宝の蔵を護りたもって、　そののちに仏となることができるであろう。（そして、）その名を法明というであろう。(14)

その国を善浄と名づけ、それは七宝によってできており、　その劫を宝明と名づけるであろう。(15)

菩薩たちが非常に多くおり、　その数は無量億であって、　みな偉大な神通を体得し、　おごそかでおかしがたい徳の力をそなえて、　その国土いっぱいに充ちるであろう。(16)

声聞も、また無数におり、三種の神通と八種の禅定をそなえ、四種の自在な智慧を体得している。以上の人々が修行者の集団である。(17)その国の衆生たちは、みな婬欲を断じており、純粋に他によらず自然に生まれたものであり、(三十二種のすぐれた)身体的特徴をそなえて、それによって身をかざるであろう。(18)食物は法を聞く喜び、禅定の喜びという(二種の)食物であり、それ以外の食物に対する想いはないであろう。女人たちは存在せず、またさまざまな悪しき境涯も存在しないであろう。(19)富楼那比丘は、その功徳をすべて満たして、きっと、この浄土に賢人聖者たちが非常に多くいることであろう。以上のような無量のことがらを、私は今、ただ略説したにすぎないのだ」と。(20)

《仏子》七九、一五九頁の語注参照。《是故諸菩薩　作声聞縁覚》人々が、劣った教法を願って、菩薩のためのすぐれた教えに対して畏怖を懐いていることを知っているので、衆に同じて教化するために菩薩が化身して声聞・縁覚の身を現じること。《小欲懈怠》小欲とは、小法を願って大乗の教えを望まないことで、それは仏道においては、なまけ怠る心を生むことである。《示衆有三毒》三毒とは貪(むさぼり)・瞋(いかり)・癡(おろか)の三種の煩悩をいう。衆に同じて教化するため、人々にみずからこれらの煩悩があることを示すこと。舎利弗の瞋、難陀の貪、調達の癡、などの例。《又現邪見相》邪見とは、誤った見解のこと。誤った見解にとらわれているさまを示すという意味。たとえば、第三章譬喩品の偈(11)の舎利弗のことばに、「我、本、邪見に著して、諸の梵志の師と為りき」とある。また、三迦葉や須菩提が、釈尊に帰依する以前にバラモン外道の教えを信奉していたことなどもその例。

《種種現化事》現化とは、化を現ずるの意。すなわち、衆生救済のためにさまざまなものに変化して現われること。《已度大神通》「度」は「渡」に通じて、わたる、わたす、の意で、大神通という状態をわたりこえているという意に解して、すでに大神通を体得しているとする。《四無礙智》四七五頁参照。《一切智》sarvajña-jñāna 一切を知る智慧。すなわち、仏の智慧のこと。《以是等為僧》「僧」は「僧伽（saṅgha）」の略で、修行者の集り、教団のこと。大神通を得た菩薩たちや三明八解脱を得ている声聞たちを、教団の構成要員とする、の意。《純一変化生》「純一」は、まじりけなく専らに、の意。「変化生」は「化生」に同じ（四七六頁参照）。《具相荘厳身》金色の輝きや三十二相をそなえて、それによって身を飾ること。

本段は、前段長行部分の重頌にあたる段である。その内容は前段とほぼ同一であるが、現代語訳の偈番号(1)から(7)まで、原文でいえば、「諸比丘諦聽」から、「心則懷疑惑」までの二八句は長行にはないものである。本段は科文でいうと（四七七頁）、「如来述記」の偈頌全部に相当し、本段までで「授満願記」がおわり、次段から「授千二百記」の部分に入る。

爾時千二百阿羅漢。心自在者。作是念。我等歡喜。得未曾有。若世尊。各見授記。如餘大弟子者。不亦快乎。佛知此等。心之所念。告摩訶迦葉。是千二百阿羅漢。我今當現前。次第與授。阿耨多羅三藐三菩提(1)記。於此衆中。我大弟子。憍陳如比丘。當供養。六萬二千億佛。然後得成爲佛。號曰普明如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。其五百阿羅漢。優樓頻螺迦葉。伽耶迦葉。那提迦葉。迦留陀夷。優陀

夷。阿㝹樓馱。離婆多。劫賓那。薄拘羅。周陀。莎伽陀等。皆當得阿耨多羅三藐三菩提。盡同一號。名曰普明。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

憍陳如比丘　當見無量佛　過阿僧祇劫　乃成等正覺
常放大光明　具足諸神通　名聞遍十方　一切之所敬
常說無上道　故號爲普明　其國土清淨　菩薩皆勇猛
咸昇妙樓閣　遊諸十方國　以無上供具　奉獻於諸佛
作是供養已　心懷大歡喜　須臾還本國　有如是神力
佛壽六萬劫　正法住倍壽　像法復倍是　法滅天人憂
其五百比丘　次第當作佛　同號曰普明　轉次而授記
我滅度之後　某甲當作佛　其所化世間　亦如我今日
國土之嚴淨　及諸神通力　菩薩聲聞衆　正法及像法
壽命劫多少　皆如上所說　迦葉汝已知　五百自在者
餘諸聲聞衆　亦當復如是　其不在此會　汝當爲宣說

(1)底本は「薩」。高麗蔵、春日本とも「提」。大正蔵の誤りか。今、改む。

爾の時に、千二百の阿羅漢の心自在なる者、是の念を作さく、
「我等、歓喜して、未曾有なることを得つ。若し世尊、各に授記せらるること、余の大弟子の如くならば、亦、快からざらんや」と。仏、此等の心の所念を知しめして、摩訶迦葉に告げたまわく、
「是の千二百の阿羅漢に、我、今、当に、現前に次第に、阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授くべし。此の衆の

中に於いて、我が大弟子憍陳如比丘、当に六万二千億の仏を供養し、然して後に、仏に成為ることを得べし。号を普明如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と曰わん。其の五百の阿羅漢、優楼頻螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、迦留陀夷、優陀夷、阿㝹楼駄、離婆多、劫賓那、薄拘羅、周陀、莎伽陀等、皆当に、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。尽く同じく一号にして、名づけて普明と曰わん」と。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「憍陳如比丘　当に無量の仏を見たてまつりて　阿僧祇劫を過ぎて　乃ち等正覚を成ずべし。
常に大光明を放ち　諸の神通を具足し　名聞十方に遍し　一切の敬う所として　常に無上道を説かん
故に号づけて普明と為ん。
其の国土清浄にして　菩薩皆勇猛ならん。　咸く妙楼閣に昇りて　諸の十方の国に遊び　無上の供具を
以て諸仏に奉献せん。
是の供養を作し已って　心に大歓喜を懐き　須臾に本国に還らん　是の如き神力有らん。
仏の寿六万劫ならん　正法住すること寿に倍し　像法復是れに倍せん　法滅せば天・人憂えん。
其の五百の比丘　次第に当に作仏すべし。　同じく号づけて普明と曰い　転次して授記せん。
『我が滅度の後に　某甲当に作仏すべし』と。
其の所化の世間　亦、我が今日の如くならん　国土の厳浄　及び諸の神通力　菩薩声聞衆　正法及び
像法　寿命の劫の多少　皆、上の所説の如くならん。
迦葉よ、汝已に　五百の自在の者を知りぬ。　余の諸の声聞衆も　亦当に復是の如くなるべし。　其の此
の会に在らざるは　汝当に為に宣説すべし」と。

〔訳〕その時、千二百人の阿羅漢の、心に自在をえたものたちは、次のような考えを懐いた。

「私たちは、よろこんで、これまでにない思いをした。もし、世尊が、ほかの偉大な弟子たちにと同じように、私たち各々にも成仏の予言を授けられたならば、心にかなうことこれにすぎたるものはない」と。

仏は、彼らの心の思いを知って、摩訶迦葉に次のように告げられた。

「この千二百人の阿羅漢たちに、私は今、目の前で、次々に無上の正しい悟りの予言を授与しよう。ここにいる人々の中の、私の偉大な弟子である憍陳如比丘は、必ずや六万二千億の仏を供養し、そうして後に仏となることができるであろう。その名を普明如来、供養をうけるにふさわしい人、正しくあまねき智慧をそなえた人、智と実践とが完全に具わった人、悟りに到達した人、世界のすべてに通じている人、最上の人、人間の調教師、諸天と人々との師、仏、世尊というであろう。

そして(続いて)五百人の阿羅漢たち、すなわち、優楼頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・迦留陀夷・優陀夷・阿㝹楼駄・離婆多・劫賓那・薄拘羅・周陀・莎伽陀などたちは、みな無上の正しい悟りをきっと得るであろう。すべて同一の名で、普明というであろう」と。

その時に、世尊は、以上の意義を重ねて宣べようとして、詩頌をもっていわれた。

「憍陳如比丘は、はかりしれない多くの仏たちに見え、　無数劫という長時を経て、やっと正しい悟りを完成するであろう。(21)

つねに偉大な光明を放ち、多くの神通をそなえて、　その名声は十方に聞こえて、すべてのものに敬われ、　つねに無上の道を説くであろう。それ故、名づけて普明というのだ。(22)

その国土は清浄で、菩薩たちはみな勇猛であろう。　皆が皆、妙なる楼閣に昇って、多くの十方の国を遊歴し、　無上の供物（くもつ）の品を、仏たちにささげるであろう。　以上(23)〜(25)

その供養をなしおわって、心に大いなるよろこびを懐いて、　たちまちのうちに本国に帰ってくるであろう。以上のような神通力があるであろう。(26)

その仏の寿命は六万劫であろう。正しい教法が世に存続する期間は、その寿命の長さの二倍であり、(27)

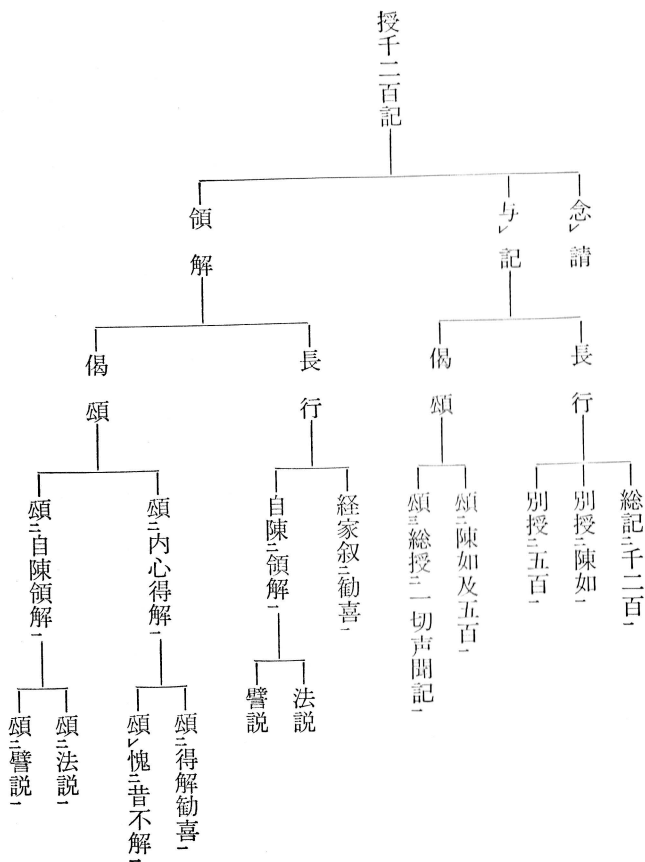
正しい教法に似た教えもまた、その二倍の期間（世に存続する）であろう。そして、（やがて）教法が消滅したならば、天（の神々）と人間は憂えるであろう。(28)

五百人の比丘たちは、次々と必ずや仏となるであろう。　その名を同じように普明といい、次から次へと順々に成仏の予言を与えるであろう。(29)

すなわち、『私が入滅した後に、だれそれは必ず仏となるであろう』と。　その仏の教化する世界は、また私の今日（教化している世界）のようであろう。　（それらの仏たちの）国土のおごそかで浄らかなさま、及び多くの神通力についても、　菩薩や声聞の人々のあつまり、正しい教法、正しい教法に似た教えについても、　（仏）の寿命の劫の長さについても、すべて先に私が説いたとおりであろう。　以上(30)〜(32)（但し(31)を闕く）

迦葉よ、汝は、すでに五百人の自在を得たものたち（の未来のこと）を知ったのだ。　そのほかの多くの声聞の人々もまた必ずこのようになるであろう。　いまこの集りの場にいないものたちに、お前は（以上のことを）説いてやりなさい」と。(33)

《**千二百阿羅漢**》千二百人の聖者たち。憍陳如をはじめとする千二百人の阿羅漢は、第二章方便品の長行に（一二四頁）「諸の声聞、漏尽の阿羅漢、阿若憍陳如等の千二百人」とあり、また偈の部分にも、舎利弗の言として「我等千二百人及び余の仏を求むる者あり」とあり（一三一頁・第37偈）、また仏の語として「千二百の羅漢、悉くまたまさに作仏すべし」とある（一八五頁・第133偈）。また第三章の譬喩品にも舎利弗の言として「この諸の千二百の心自在なる者、昔、学地に住せしに」とあり（二二〇頁）、本経において阿羅漢千二百人という数は定数となっている（但し、第一章序品の冒頭の列衆では、阿羅漢一万二千人という）。《**授記**》第六章授記品、（三六三頁）参照。《**摩訶迦葉**》第一章序品の語注（四三頁）参照。《**憍陳如比丘**》阿若憍陳如に同じ。前項と同処を参照。《**普明如來**》梵本では、Samantaprabhāsa（あまねき輝きを有するもの）という。《**優楼頻羅迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・阿㝹楼駄・劫賓那・薄拘羅**》これらについては第一章序品の語注（四三―四頁）を参照。《**迦留陀夷**》Kālodāyin の音写。訳は黒光。仏が太子であったころの侍臣で、仏の成道後出家して釈尊に帰依した。後に、波斯匿王の妃の末利夫人の師となったという。《**優陀夷**》Udāyin 烏陀夷とも音写する。カピラ城の国師の子で、釈尊の太子時代の学友。太子の出家の志を翻えす任に当たった人。釈尊成道後に出家帰依して、仏弟子中勧導第一とされる。《**離婆多**》Revata 離波多、梨婆多などとも音写する。舎利弗の実弟ともいう。《**周陀**》周陀半託迦の略。周利槃特ともいう。原語は、Cūḍapantaka 又は Śuddhipanthaka 兄の摩訶槃特とともに出家したが、その性魯鈍であったため常に人々から軽んじられた。しかし、ついには阿羅漢となる。槃特の一偈の故事は有名。《**莎伽陀**》Svāgata 莎掲哆、沙竭陀などとも音写する。善来と訳す。本章では阿羅漢の一人に数えられているが、実在の人物かどうかは不明。《**阿僧祇劫**》第一章序品の語注（八八頁）参照。《**等正覚**》第六章授記品の語注（三七二頁）参照。《**像法**》「像」とは、かたどる、似る、という意で、正しい教法に似た教えを像法という。

本段以降の科文を略記すると、次のようである。

本段は、先に富楼那に授記を与えたので、次に千二百人に授記する段である。千二百人の阿羅漢たちが、自分たちに授記されればどんなによろこばしいことかという思いをいだき、その思いを仏が知られて、彼らに対して、まず大弟子の憍陳如一人を代表せしめて授記を与え、次に五百人の阿羅漢達に授記するのである。そして本段の偈頌の最後において、五百人以外の、この場にいない阿羅漢達にも迦葉（かしょう）を通じて間接的に授記するのである。

本段は右図の「与記」の「偈頌」までに相当する。

爾時五百阿羅漢。於佛前。得受記已。歡喜踊躍。卽從座起。到於佛前。頭面禮足。悔過自責。世尊。我等常作是念。自謂已得。究竟滅度。今乃知之。如無智者。所以者何。我等應得。如來智慧。而便自以。小智爲足。世尊。譬如有人。至親友家。醉酒而臥。是時親友。官事當行。以無價寶珠。繫其衣裏。與之而去。其人醉臥。都不覺知。起已遊行。到於他國。爲衣食故。勤力求索。甚大艱難。若少有所得。便以爲足。於後親友。會遇見之。而作是言。咄哉丈夫。何爲衣食。乃至如是。我昔欲令。汝得安樂。五欲自恣。於某年日月。以無價寶珠。繫汝衣裏。今故現在。而汝不知。勤苦憂惱。以求自活。甚爲癡也。汝今可以此寶。貿易所須。常可如意。無所乏短。佛亦如是。爲菩薩時。敎化我等。令發一切智心。而尋廢忘。不知不覺。既得阿羅漢道。自謂滅度。資生艱難。得少爲足。一切智願。猶在不失。今者世尊。覺悟我等。作如是言。諸比丘。汝等所得。非究竟滅。我久令汝等。種佛善根。以方便故。示涅槃相。

而汝謂爲。實得滅度。世尊。我今乃知。實是菩薩。得受(1)阿耨多羅三藐三菩提記。以是因緣。甚大歡喜。得未曾有。

(1)受＝授

爾の時に、五百の阿羅漢、仏前に於いて、受記を得已って歓喜踊躍し、即ち座より起ちて仏前に到り、頭面に足を礼し、過を悔いて自ら責む。

「世尊よ、我等、常に是の念を作して、自ら已に究竟の滅度を得たりと謂いき。今、乃ち之を知りぬ。無智の者の如し。所以は何ん。我等、応に、如来の智慧を得べかりき。而るを便ち自ら小智を以て足りぬと為しき。世尊よ、譬えば人有り、親友の家に至りて、酒に酔うて臥せるが如し。是の時に親友、官事の当に行くべきあって、無価の宝珠を以て、其の衣の裏に繋け、之を与えて去りぬ。其の人酔い臥して、都べて覚知せず。起き已って、遊行し他国に到りぬ。衣食の為の故に、勤力求索すること、甚だ大いに艱難なり。若し少し得る所有れば、便ち以て足りぬと為す。後に親友会い遇うて、之を見て是の言を作さく、『咄なる哉、丈夫よ。何ぞ衣食の為に、乃ち是の如くなるに至る。我れ昔、汝をして安楽なることを得、五欲に自ら恣ならしめんと欲して、某の年日月に於いて、無価の宝珠を以て、汝が衣の裏に繋けぬ。今故現に在り。而るを汝知らずして勤苦し憂悩して、以て自活を求むること甚だ為れ癡なり。汝、今此の宝を以て所須に貿易すべし。常に意の如く乏短なる所無かるべし』と。

仏も亦、是の如し。菩薩為りし時、我等を教化して、一切智の心を発さしめたまいき。而るを尋いで廃忘して知らず覚らず。既に阿羅漢道を得て、自ら滅度せりと謂い、資生艱難にして、少しきを得て足りぬと為す。一切智の願、猶在って失せず。今者、世尊、我等を覚悟して是の如き言を作したまわく、『諸の比丘よ、汝等が得たる所は、究竟の滅に非ず。我、久しく汝等をして、仏の善根を種えしめたれども、

方便を以ての故に涅槃の相を示す。而るを汝、為れ実に滅度を得たりと謂えり』と。
世尊よ、我、今、及ち知んぬ。実に是れ菩薩なり。阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたもうことを得つ。是の因縁を以て、甚だ大いに歓喜して、未曾有なることを得たり」と。

〔訳〕その時に、五百人の阿羅漢たちは、仏の前で成仏の予言を受けることができ、喜びに小踊りした。そこで、ただちに座から起って仏の前に進み、頭に仏の足を礼拝して、あやまちを悔い、自責の念にかられて申し上げた。

「世尊よ、私どもは、自分たちはすでに究極の涅槃を得たのだ、と常にこう思っておりました。今、はじめて、自分たちは無智のもののようであったと知りました。なぜならば、私どもは、如来の智慧を得るはずであったのに、それを自分たちは小智でこと足れりとしてしまっていたからです。

世尊よ、それはたとえば、こういうことであります。ある人がいて、親友の家に行き、酒に酔って眠ってしまいました。この時に、その親友は、公用で出かけねばならなかったので、値のつけようのないほど立派な宝の珠を、彼の衣の裏に縫いつけ与えて出かけました。その人は、酔って寝てしまって、全く気がつかず、起きあがると、あちこちをめぐって他国に行きました。衣食のために、大層骨を折ってそれを求めましたが、非常な困難をしておりました。それで、少しでも得るものがあったならば、それで十分と満足しておりました。のちに、親友が彼にばったり出会って、彼を見てこのように言いました。

『やあ、君！　どうして衣食を得るために、こんなことになってしまったのだ。私は昔、君が安楽に

暮すことができ、五官の思いのままにさせてやろうとして、ある年月日、値のつけられないような立派な宝の珠を君の衣の裏に縫いつけておいたのだ。今もそれは現にある。それなのに、君はそれを知らずに苦労し、憂い悩んで、自活の道を求めているが、これは、はなはだおろかなことだ。君は、今、この宝を必要なものと換えてきなさい。そうすれば、いつも思いどおりになり、乏しいということはないだろう』と。

仏もまたそのようであります。仏は菩薩であった時、私どもを教化して、(仏の)一切を知る智慧の心をおこさしめられました。それなのに、私どもは、すぐにそのことを忘れはて、知らず悟らずにおりました。すでに阿羅漢の道を体得して、自分では涅槃に到達したと思い、生活に困難して、少しのものを得てこと足れりとしておりました。(それでも、仏の)一切を知る智慧を達成しようとする願いは、なおいまだ失ってはおりません。いま、世尊は、私どもを目覚めさせようとして、次のようなことばをいわれるのです。

『比丘たちよ、汝たちが得たものは、究極の涅槃ではない。私は、久しい間、汝たちに仏の善根を植えさせたが、教化の手だてのために、涅槃のすがたを示したのだ。それなのに、汝たちは、実際に涅槃を得たと思ってしまったのだ』と。

世尊よ、私は今こそ知りました。自分たちが本当は菩薩であり、無上の正しい悟りの予言を授けられることができたのだということを。このいわれによって、大いに喜んで、これまでにないものを得たのです」と。

《悔過自責》「過」とは過失のこと。これまで大乗の菩薩の道を歩まず、声聞の涅槃を真の涅槃であると思っていたことを指す。**《官事》**公けの仕事、公用。**《咄哉丈夫》**「咄」は、やあ、おい、などの呼びかけの意をあらわす語。「哉」は、感嘆、詠嘆などの意をあらわす助字。「咄哉」で、「おい、(一体どうしたのだ)」という、呼びかけて、相手の状況をいぶかしむニュアンスをあらわす。韓愈「咄哉識路行勿休、往取将相酬恩讎」(劉生詩)。従来は「咄いかな、丈夫」と訓み、「咄」を「拙」にあててその字義で解釈してきた。しかし、「咄」と「拙」は全くの別字であるから、従来の解釈は不可。訓読は「咄なる哉」とする。なお、先の第四章信解品に初出(二九三頁参照)。**《五欲》**第二章方便品の語注(一六四頁)参照。**《今故現在》**「故」は、もとより、もともとの意で、「固」と音通。従来「今故」で「いまなお」と訓む。**《貿易》**「貿」も「易」も、とりかえる、の意をあらわす。品物をとりかえ合うこと。**《乏短》**「乏」も「短」も、乏しい、不足している、の意をあらわす語。前項の「貿易」と同じく、同義の二字を重ねてつくられた熟語であるから、二字で、乏しい、あるいは不足している、という意味。**《為菩薩時》**仏が昔、十六王子の一人として、菩薩であった時のこと。**《資生艱難》**「資生」は、もと『易経』坤の卦に「彖曰、至哉坤元、万物資生(万物は坤元をもとにして生じた)乃順承天」とあり、元来「それをもとにして、取って生じる」という意味であったが、後に仏教文献では、生を資ける、生に役立てる、と解して、「資生」で、生活に役立つこと、生活の必需品、あるいは生活そのものを意味するようになった。それ故、「資生艱難」で、生活が困難という意味。**《一切智願》**仏の一切智を志向する誓願。一切智とは、すべてを知る完全な仏の智慧をいう。

本段は、先に仏より未来成仏の予言を授けられた五百人の阿羅漢たちが、今日までの誤った見解を悔い改め、自分達の領解を「繫珠の喩え」によって述べる段である。科段でいえば、領解の長行の

「経家叙歓喜」と「自陳二領解一」に相当する。

衣裏の宝珠

はじめに、前章からの連絡と、本章の梗概を示しておこう。まず、前章の化城喩品の前半では、三千塵点劫の昔に、大通智勝仏が出世して、その十六人の王子たちに法華経を説き、その十六王子たちはまた法華経を覆講して大衆に結縁し、そしてそれが、現在の釈尊と仏弟子たちとに連絡づけられた。また、後半では「化城の喩え」によって、化城である二乗の涅槃は仏の方便であり、一仏乗こそが真の宝処に導く教えである旨が説かれた。

それをうけた本章では、まず富楼那が千二百人の阿羅漢の代表として最初に登場して、これまでの仏の方便の説法、舎利弗や須菩提等の四大声聞に対する仏の授記、過去と現在との結びつき、諸仏の自在な神通力などのことを聞いて、諸仏の尊顔をあおぎ見つめたまま黙念領解する。それに対し、仏は大衆に向って富楼那についてこう言われた。富楼那は弁舌第一で、よく私の正法を護持、助宣し、人々を利益すること甚だ大であった。彼は過去世にあっても、九十億の仏に随って正法を護持し、説法第一であった。彼はこのように、現在、過去のみならず、未来においてもまた弁説第一であり、説法者の中の第一であろう。彼は未来に仏の悟りを得て、法明如来といい、時代を宝明といい、国を善浄というであろうと、こう述べられて、富楼那に授記されたのである。

この富楼那の授記を聞いた千二百人の阿羅漢たちは、心に富楼那と同じように仏より記莂を授けら

れることを願った。仏はその心を知ろしめして、摩訶迦葉に向って、これから千二百人の阿羅漢たちに未来成仏の予言を与えようと告げられ、その代表として憍陳如（きょうじんにょ）の授記を説かれたのである。すなわち、大弟子憍陳如は、六万二千億の仏につかえ、その後に仏となって普明如来（ふみょうにょらい）というであろうと。そして、続いて、五百人の阿羅漢も次から次へと成仏し、みな同じ名の普明如来という仏になるであろうと説かれて、五百人に対する授記がなされた。さて、そこで、この五百人の阿羅漢たちは、仏の授記に大いに喜び、これまでの自分たちの過失を悔いて、自らの現在の心境を喩え話によって仏に申し上げた。この譬喩譚（ひゆたん）が法華七喩のうちの第五の「繫珠（けしゅ）の喩え」である。それはどういう喩えかといえば、次のようである。

　ある人が、富裕な親友の家に行ってご馳走になり、酒に酔ってそのまま友人の家で寝こんでしまった。その親友は、この時、公務で出かけなければならなかったので、この男にやろうと思っていた非常に高価な宝石を、その男の衣服の裏に縫いつけてやり、そのままにして出かけてしまった。その男は眠ってしまっていて全然そのことに気がつかなかったのだ。その男は目がさめて起き上ると、その親友の家を出て、あちこちめぐってよその国にゆき、衣食を得るためにさんざん苦労して、少しばかりを手に入れると、それで満足してしまっていた。後になって親友がこの男にばったりと出会った。親友はその男のありさまを見てこう言った。どうして君は衣食のためにこんなに苦労しているのだ。自分は、君が楽に暮せるようにと、高価な宝石を君の衣服の裏に、君が寝こんでいる間に縫いつけておいたのだ。君はそれに気づかず、知らずに、たつきに苦労している。何ともおろかな話だ。その宝石は今でも君の衣服の裏にあるではないか。さあ、早くこの宝石で何でもほしいものを手に入れ、意

のままにするがよい、と。

以上が「繫珠の喩え」である。この喩えを、経は次のように結んでいる。

仏が、はるか昔、まだ菩薩であった時にわれわれを教化して、それでわれらは仏のさとりを得ようと志したのだが、中途でその志を忘れはててしまった。そのためにわれらは声聞二乗としての修行をなし、困難辛苦してやっと二乗の涅槃を得て、それが真実の涅槃であると思いこんで、それで満足していたのだ。ところが今、仏によって、われら自身のうちにその昔、縫いつけられた宝珠、すなわち、一仏乗の、仏智をめざす教えが今なおあることを教えられたのだ。われわれは、その昔、仏によって、仏智をめざす教えをうけていたのだから、われわれは真実には菩薩であり、未来に必ず仏になるという予言を受けることができるのだと。

この喩えにおいて、自身の衣裏にある宝石に気づかなかった男は声聞・縁覚の二乗であり、その宝石を縫いつけた親友は釈尊にたとえられ、そして宝石は一仏乗に、少分の衣食は二乗の涅槃にたとえられている。この喩えは、五百人の二乗の阿羅漢たちの領解という形式をとりながら、前章の化城喩(けじょうゆ)で明かされた二乗方便、一乗真実という意趣を再びくり返し説いたものである。第二章方便品ではじめて三乗方便、一乗真実が説かれて以来、本章に至るまで、「火宅の喩」「三草二木の喩」「化城の喩」などさまざまな喩えを駆使して、三乗、二乗が方便であり、一乗が真実であるということを経が説いているのは、この一乗真実ということがこの経の一本の大きな柱となっているからである。そして、特に従来、成仏不可能とされて貶(おと)しめられてきた二乗の作仏を説くことによって、経は成仏の可能性をすべての衆生に押し拡げて、それによって一乗を徹底せしめようと意図しているのである。この

「繫珠の喩」も、二乗は実は方便で、彼らは本来菩薩であり、仏より成仏の記を受けることができると説いて二乗作仏をいい、経の一貫した右の主張をさらに徹底させるという意義をもっている。

爾時阿若憍陳如等。欲重宣此義。而說偈言。

我等聞無上　安隱(1)授記聲　歡喜未曾有　禮無量智佛
今於世尊前　自悔諸過咎　於無量佛寶　得少涅槃分
如無智愚人　便自以爲足　譬如貧窮人　往至親友家
其家甚大富　具設諸餚饍　以無價寶珠　繫著內衣裏
默與而捨去　時臥不覺知　是人既已起　遊行詣他國
求衣食自濟　資生甚艱難　得少便爲足　更不願好者
不覺內衣裏　有無價寶珠　與珠之親友　後見此貧人
苦切責之已　示以所繫珠　貧人見此珠　其心大歡喜
富有諸財物　五欲而自恣　我等亦如是　世尊於長夜
常愍見教化　令種無上願　我等無智故　不覺亦不知
得少涅槃分　自足不求餘　今佛覺悟我　言非實滅度
得佛無上慧　爾乃爲眞滅　我今從佛聞　授記莊嚴事
及轉次受決　身心遍歡喜

(1)隱＝穩

爾の時に、阿若憍陳如等、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

「我等、無上　安隠の授記の声を聞きたてまつりて　未曾有なりと歓喜して　無量智の仏を礼したてまつる。

今、世尊の前に於いて　自ら諸の過咎を悔い　無量の仏宝に於いて　少しき涅槃の分を得　無智の愚人の如くして　便ち自ら以て足りぬと為しき。

譬えば貧窮の人　親友の家に往き至りぬが如し　其の家甚だ大いに富んで　具さに諸の餚饍を設け

無価の宝珠を以て　内衣の裏に繋著し　黙し与えて捨て去りぬ　時に臥して覚知せず。

是の人、既已に起きて　遊行して他国に詣り　衣食を求めて自ら済り　資生甚だ艱難にして　少しきを得て便ち足りぬとなして　更に好き者を願わず。　内衣の裏に　無価の宝珠あることを覚らず。

珠を与えし親友　後に此の貧人を見て　苦切に之を責め已って　示すに繋けし所の珠を以てす。

貧人、此の珠を見て　其の心大いに歓喜し　富んで諸の財物有って　五欲に而も自ら恣にす。

我等も亦是の如し　世尊、長夜に於いて　常に愍んで教化せられ　無上の願を種えしめたまえり。

我等、無智なるが故に　覚らず亦知らず　少しき涅槃の分を得て　自ら足りぬとして余を求めず。

今、仏、我を覚悟して　『実の滅度に非ず　仏の無上慧を得て　爾して乃ち、為れ真の滅なり』と言う。

我、今、仏より授記荘厳の事　及び転次に受決せんことを聞きたてまつりて　身心遍く歓喜す」と。

〔訳〕その時に、阿若憍陳如たちは、重ねて以上の義趣を宣べようとして、詩頌を説いて言った。

「私どもは、この上ない、安らかに隠やかな成仏の予言の声をお聞きして、これまでにないこ

と歓喜し、無量の智をそなえた仏を礼拝いたします。(34)
今、世尊の前で、みずから多くの過失を悔いております。無量の仏の宝のなかの、ほんの一分の涅槃を得たのみで、智慧なく愚かな人のように、自身はそれで満足しておりました。(35)
たとえば、貧に窮した人がいて、親友の家に行ったとします。その家は、非常に富裕で、さまざまな馳走の膳を設け、(36)
この上ない値の宝の珠を、その男の内衣の裏に縫いつけ、黙って与えて、彼を置いて行ってしまいました。その時、彼は眠っていて、それに気づきませんでした。(37)
その人は起きると、あちこちを巡って他国に行き、衣食を求めて自活し、たつきに非常に困難して、(38)
少しのものを得て、それで十分と思い、それ以上のよいものを願わず、内衣の裏に、この上ない値の宝の珠があることに気がつかなかったのです。(39)
その珠を与えた親友は、のちにこの貧しい人を見て、こんこんと彼を訶責(かしゃく)した後、縫いつけておいた珠を示してみせました。(40)
貧しい人はこの珠を見て、心大いに喜んで、（結果）富んで多くの財物を所有し、五官の欲するままにできるようになりました。(41)
私どもも、またそのようであります。世尊は、長きにわたって、常に私どもを愍(あわれ)んで教化(きょうけ)せられ、この上ない誓願(せいがん)を植えつけさせられました。(42)
私どもは、智慧がなかったために、それをさとらず、また知りもしませんでした。少しの涅槃

の一分を得て、それでみずから満足して、それ以上を求めませんでした。(43)今、仏は私をめざめ悟らせて、『それは真実の涅槃ではない。仏のこの上ない智慧を得てこそ、これこそ真実の涅槃である』と述べられました。(44)

私は、今、仏から成仏の予言と（仏国土の）おごそかなかざりのことと、次から次へと成仏の予言を受けることをお聞きして、身も心も大きな喜びを感じております」と。(45)

《**得少涅槃分**》二乗の証果としての涅槃を得ること。二乗の涅槃は、仏が教化のために設けた仮の涅槃であると経は説く。前章の化城に同じ。《**自済**》「みずからわたり」と訓むが、「済」は、わたる、すくうの意。「自済」はみずからすくうという意で、転じて自活することの意。《**苦切**》「苦」も「切」も、ねんごろに、という意をあらわす。苦切は同義の二字を重ねてつくられた熟語。ねんごろに、の意。《**長夜**》長い年月、長い時間にわたって、という意味。三二七頁の語注参照。

《**授記荘厳事**》未来成仏の予言を仏が授けることと、成仏したその仏の国土の荘厳のありさまのこと。《**及転次受決**》転次とは、次から次へという意で、受決とは、決、すなわち成仏するという決了を受けることで、受記と同じ。

本段は、前段の長行に対する重頌の部分で、内容は長行部分とかわりはない。科段でいえば、「領解」の「偈頌」部分に相当する（四九〇頁参照）。

以上で第八章をおわり、五百人とその会座（えざ）にいない余の七百人の、計千二百人の阿羅漢たちに対す

る授記がおわり、引き続いて次章では、有学、無学の二千人の人々に対する仏の授記がおこなわれるのである。

妙法蓮華經授学無学人記品第九

爾時阿難。羅睺羅。而作是念。我等每自思惟。設得受[1]記。不亦快乎。卽從座起。到於佛前。頭面禮足。俱白佛言。世尊。我等於此。亦應有分。唯有如來。我等所歸。又我等爲一切世間。天人阿修羅。所見知識。阿難常爲侍者。護持法藏。羅睺羅。是佛之子。若佛見授。阿耨多羅三藐三菩提記者。我願既滿。衆望亦足。爾時學無學。聲聞弟子。二千人。皆從座起。偏袒右肩。到於佛前。一心合掌。瞻仰世尊。如阿難。羅睺羅所願。住立一面。爾時佛告阿難。汝於來世。當得作佛。號山海慧自在通王如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。當供養。六十二億諸佛。護持法藏。然後得阿耨多羅三藐三菩提。教化二十千萬億。恒河沙諸菩薩等。令成阿耨多羅三藐三菩提。國名常立勝幡。其土清淨。琉[2]璃爲地。劫名妙音遍滿。其佛壽命。無量千萬億。阿僧祇劫。若人於千萬億。無量阿僧祇劫中。算數校計。不能得知。正法住世。倍於壽命。像法住世。復倍正法。阿難。是山海慧自在通王佛。爲十方。無量千萬億。恒河沙等。諸佛如來。所共讃歎。稱其功德。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

我今僧中說　阿難持法者　當供養諸佛　然後成正覺
號曰山海慧　自在通王佛　其國土清淨　名常立勝幡

教化諸菩薩　其數如恒沙　佛有大威德　名聞滿十方
壽命無有量　以愍衆生故　正法倍壽命　像法復倍是
如恒河沙等　無數諸衆生　於此佛法中　種佛道因緣

爾時會中。新發意菩薩八千人。咸作是念。我等尚不聞。諸大菩薩。得如是記。有何因緣。而諸聲聞。得如是決。爾時世尊。知諸菩薩。心之所念。而告之曰。諸善男子。我與阿難等。於空王佛所。同時發阿耨多羅三藐三菩提心。阿難常樂多聞。我常勤精進。是故我已。得成阿耨多羅三藐三菩提。而阿難。護持我法。亦護將來。諸佛法藏。教化成就。諸菩薩衆。其本願如是。故獲斯記。阿難面於佛前。自聞授記。及國土莊嚴。所願具足。心大歡喜。得未曾有。卽時憶念。過去無量千萬億。諸佛法藏。通達無礙。如今所聞。亦識本願。爾時阿難。而說偈言。

世尊甚希有　令我念過去　無量諸佛法　如今日所聞
我今無復疑　安住於佛道　方便爲侍者　護持諸佛法

(1)受＝授　(2)琉＝瑠

爾の時に、阿難、羅睺羅、而も是の念を作さく、

「我等、毎に自ら思惟すらく、設し受記を得ば、亦快からずや」と。

即ち座より起ちて、仏前に到り、頭面に足を礼し、倶に仏に白して言さく、

「世尊よ、我等、此に於いて、亦、応に分有るべし。唯如来のみ有して、我等が帰する所なり。又、我等は、為れ一切世間の天、人、阿修羅に知識せらる。阿難は常に侍者と為って、法蔵を護持す。羅睺羅は是れ仏の子

なり。若し仏、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けらるれば、我が願、既に満じて、衆の望み亦足りなん」と。

爾の時に、学・無学の声聞の弟子二千人、皆、座より起ちて、偏えに、右の肩を袒にし、仏の前に到り、一心に合掌し、世尊を瞻仰して、阿難、羅睺羅の所願の如くにして、一面に住立せり。

爾の時に仏、阿難に告げたまわく、

「汝、来世に於いて、当に作仏することを得べし。山海慧自在通王如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と号づけん。当に六十二億の諸仏を供養し、法蔵を護持して、然して後に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。二十千万億恒河沙の諸の菩薩等を教化し、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしめん。国を常立勝幡と名づけ、其の土清浄にして琉璃を地と為ん。劫を妙音遍満と名づけん。其の仏の寿命、無量千万億阿僧祇劫ならん。若し人、千万億無量阿僧祇劫の中に於いて、算数校計すとも、知ること得ること能わじ。正法世に住すること、寿命に倍し、像法世に住すること、復、正法に倍せん。阿難よ、是の山海慧自在通王仏は、十方の無量千万億恒河沙等の諸仏如来に、共に其の功徳を讃歎し称せらるることを為ん」と。

爾の時に、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「我、今、僧中にして説く　阿難持法者　当に諸仏を供養し　然して後に正覚を成ずべし。
号を山海慧　自在通王仏と曰わん　其の国土清浄にして　常立勝幡と名づけん。
諸の菩薩を教化すること　其の数恒沙の如くならん。　仏、大威徳有して　名聞十方に満ち　寿命量有ること無けん　衆生を愍れむを以ての故に。
正法、寿命に倍し　像法、復是れに倍せん　恒河沙等の如き　無数の諸の衆生　此の仏法の中に於いて　仏道の因縁を種えん」と。

爾の時に、会中の新発意の菩薩八千人、咸く是の念を作さく、

「我等、尚、諸の大菩薩の、是の如きの記を得ることを聞かず。何の因縁有ってか、諸の声聞、是の如き決を得る」と。

爾の時に、世尊、諸の菩薩の心の所念を知しめして、之に告げて曰わく、

「諸の善男子よ、我と阿難とは等しく、空王仏の所に於いて、同時に阿耨多羅三藐三菩提の心を発しき。阿難は常に多聞を楽い、我は常に勤めて精進す。是の故に我は、已に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。而るに阿難は、我が法を護持し、亦、将来の諸仏の法蔵を護って、諸の菩薩衆を教化し、成就せん。其の本願是の如し。故に斯の記を獲」と。

阿難、面り仏前に於いて、自ら授記、及び国土の荘厳を聞いて、所願具足し、心大いに歓喜して、未曾有なることを得たり。即時に過去の、無量千万億の諸仏の法蔵を憶念するに、通達無礙なること、今聞く所の如し。亦、本願を識んぬ。

爾の時に阿難、偈を説いて言さく、

「世尊は甚だ希有なり　我をして過去の　無量の諸仏の法を念ぜしめたもう　今日聞く所の如し
我、今、復疑無くして　仏道に安住しぬ　方便をもって侍者と為って　諸仏の法を護持せん」と。

〔訳〕その時に、阿難と羅睺羅は、このように思った。

「私どもは、いつもこう思っている。もし成仏の予言が仏から授けられたなら、どんなにか心にかなうことであろうか」と。

そこで、座から起ちあがって、仏の前に到り、世尊の足に頭をつけて礼拝し、ともに仏に申し上げた。

「世尊よ。私どももここで、(成仏の予言にあずかる) 資格があるはずです。ただ如来一人のみが、私どもの帰依すべき人であります。また、私どもは、あらゆる世界の天の神々、人々、阿修羅たちに知られております。阿難はつねに仏の侍者となって、教法の蔵を護り持っておりますし、羅睺羅は仏の実子であります。もし、仏が、無上の正しい悟りの予言を授けられますならば、私の願いは満たされることになり、多くの望みも、また、かなえられることでありましょう」と。

その時に、学修中の、及びすでに学ぶべきもののなくなった声聞の弟子たち二千人は、みな、座から起って、一方の右の肩を肌ぬぎして仏の前に到り、心をあわせて合掌し、世尊を見上げて、阿難と羅睺羅と同じ願いを懐いてその場に立っていた。

その時に、仏は阿難に告げられた。

「汝は、未来の世において、必ずや仏となることができるであろう。そして、その名を山海慧自在通王如来、供養を受けるにふさわしい人、正しくあまねき智慧をそなえた人、智と実践とが完全にそなわった人、悟りに到達した人、世界のすべてに通じている人、最上の人、人間の調教師、諸天と人々との師、仏、世尊と名づけるであろう。必ずや、六十二億という数の多くの仏たちに供養し、教法の蔵を護りたもって、そうして後に、無上の正しい悟りを得ることであろう。そして、ガンジス河の砂の数を倍すること二十千万億という多くの菩薩たちを教化して、彼らに無上の正しい悟りを成就させるであろう。その国を常立勝幡と名づけ、その国土は清浄で、瑠璃をその地面としているであろう。その劫を妙音遍満と名づけ、その仏の寿命は、阿僧祇の無量千万億倍劫という長時であろう。もし、人が、阿僧祇の千万億無量倍劫という長時にわたって、数え計算しても(その仏の寿命の長さ

は）知ることができないであろう。正しい教法が世にとどまる期間は、その仏の寿命に倍し、正しい教法に似た教法が世にとどまる期間は、正しい教法の期間の二倍であろう。阿難よ、この山海慧自在通王仏は、十方の無量千万億というガンジス河の砂の数に等しい多くの仏・如来に、そろってその功徳を讃嘆され、称讃されるであろう」と。

その時に、世尊は、以上の意義を宣べようとされて、詩頌を説いていわれた。

「私は、今、修行者たちの中にあって、説こう。阿難という教法をたもつものは、必ずや多くの仏たちを供養して、そうした後に正しい悟りを完成するであろう。(1)

その名を山海慧自在通王仏というであろう。その国土は清らかで、常立勝幡という名であろう。(2)

多くの菩薩たちを教化する、その数はガンジス河の砂の数のように多いであろう。その仏には偉大なおごそかな徳があって、その名声は十方に聞こえ、(3)

その寿命は、はかりしれないほどであろう。それは衆生をあわれむからである。正しい教法（の存続する期間）は、その寿命に倍し、(4)

正しい教法に似た教法（の存続する期間）は、さらにその倍であろう。この仏の教法によって、ガンジス河の砂の数に等しい、はかりしれない数の多くの衆生たちは、

仏の道に趣向するゆかりの種を植えるであろう」と。(5)

その時に、その集会にいた、新たに仏道に入った菩薩たち八千人は、みな次のように考えた。

「私たちは、多くの偉大な菩薩たちであっても、このような成仏の予言を得たということを聞いたこ

とがない。それなのに、どういういわれがあって、多くの声聞たちがこのような成仏の予言を得たのであろうか」と。

その時に、世尊は、菩薩たちの心の思いを知られて、彼らに告げていわれた。

「善男子たちよ、私と、阿難とは同じく、空王仏のもとで、同時に、無上の正しい悟りを得ようとする心をおこしたのだ。阿難は、つねに教えを多く聴くことを好み、私はつねにつとめはげんだ。それ故、私は無上の正しい悟りを達成することができた。一方、阿難は、（教えを護持する者となり、それ故）私の教法を護り持ち、また未来の仏たちの教えの蔵を護って、多くの菩薩たちを教化し（彼らの悟りを）完成させるであろう。（阿難の）その本来の誓願は、このようなものであったから、それ故にこの成仏の予言を得たのである」と。

阿難は、仏の前で、まのあたりに、成仏の予言が授けられたこと、及び（自分の）仏国土のおごそかなさまを聞いて、自らの誓願が満たされ、非常に喜んで、これまでにない思いをした。そこで、すぐさま、過去の無量千万億という多くの仏たちの教法の蔵を思い出してみると、それらにすべて通達して自由自在であり、あたかも今聞いているようであった。それにまた、過去世におこした誓願をも知ったのである。

その時に、阿難は詩頌を説いて言った。

「世尊は極めてまれな存在である。私に過去の、　無量の仏たちの教法を思い出させられた。それはあたかも今日聞いているようだ。(6)

私には、今、疑いがなくなり、仏道に安住している。　教化の手だてによって（仏の）侍者とな

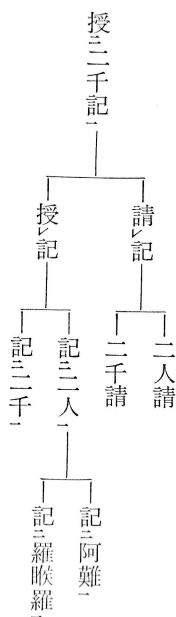
り、仏たちの教法を護り持とう」と。(7)

《毎自思惟》「毎自」は「つねにみずから」と訓むが、これを接尾辞「自」をともなった副詞とみる解釈も可能。この場合、「毎自」の意味は単に「つねに」の意で、「みずから」という意味は含まれない。この接尾辞「自」をともなった副詞は六朝時代に広く用いられ、訳経語の語彙にも「極自」「便自」「素自」などの用例がみられるという（森野繁夫「六朝訳経の語彙」〈『広島大学文学部紀要』第三六巻、一九七六年十二月〉、同じく「六朝漢語の研究――『高僧伝』について――」〈同書第三八巻(1)、一九七八年十二月〉などを参照）。なお、第一六章寿量品の終わりにも「毎自作是念」とある。**《亦応有分》**「分」は、取り分、分け前などの意で、阿難、羅睺羅にも、先に授記された人々と同じように、授記される資格が当然あるはずであるという意味。**《偏袒右肩》**第四章の語注（二八七頁）参照。**《山海慧自在通王如来》**『正法華』では、海持覚娯楽神通如来とあり、梵本では、Sāgaravaradharabuddhivikrīḍitābhijña（大海のようにすぐれた覚りをもって遊戯する神通を有する者）という。**《常立勝幡》**梵本では、Anavanāmitavaijayanta（垂れ下がることのない勝利の幡）という。**《妙音遍満》**梵本では、Manojñaśabdābhigarjita（快い音声を響かせる）という。**《正法》《像法》**第三章の注（二一〇頁）参照。**《僧中》**僧は「僧伽（saṅgha）」の略で、比丘・比丘尼の修行者の集団のことで、三人以下の人数の場合は僧伽とはいわない。仏教信者の集団には、出家の比丘・比丘尼と沙弥（具足戒を受ける前の二〇歳未満の男性の出家者）・沙弥尼（具足戒を受ける前の二〇歳未満の女性の出家者）・正学女（śikṣamāṇā 式叉摩那と音写。具足戒を受ける前の既婚の女性出家者。既婚の女性出家者は、戒を受ける年齢に達していても出家後二年間は具足戒を受けられない）の五種と、在家の優婆塞・優婆夷の二種があり、これらを合して七衆という（比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷をあわせて四衆という）。こ

のうち厳密な意味での僧伽の構成要員は、具足戒を受けた比丘・比丘尼の二種の集まりのみである。**《持法者》**仏の教法を保持する者の意。**《新発意》**navayānasamprasthita 新たに発心して仏道修行に入ること、また入った者をいう。**《決》**「記」に同じ。成仏の予言、保証。**《空王仏》**梵本では、Dharmagaganābhyudgatarāja（教えの天空に昇った王）という。**《即時憶念》**「即時」は、ただちにの意。四〇一頁参照。「憶念」には、記憶して忘れないことと、思い起こす、思い出すの意があるが、ここでは後者の意。**《本願》**菩薩が過去世においておこした誓願。

本章は、阿難・羅睺羅、及び二千人の学・無学の人々に対する授記がなされる章である。上来、上根の舎利弗（譬喩品）から中根の須菩提らの四大声聞（授記品）、そして下根の富楼那、憍陳如らと千二百人（五百弟子受記品）に、順次成仏の記莂が与えられてきて、本章に至って下根の阿難・羅睺羅ほか二千人の人々に授記が行なわれるのである。阿難と羅睺羅は、これまで多くの人々に授記がなされるのを見てきたので、自分達もその授記にあずかりたいと念じた。仏がそれにこたえて、はじめに阿難に対して、次に羅睺羅に授記される。本段は阿難に対する授記を説いた段である。

本章の構成を見やすくするために科段を略して掲げておくと、次のようである。

- 授二二千記一
  - 請レ記
    - 二人請
    - 二千請
  - 授レ記
    - 記二二人一
      - 記二阿難一
      - 記二羅睺羅一
    - 記二二千一

爾時。佛告羅睺羅。汝於來世。當得作佛。號蹈七寶華如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。當供養十世界。微塵等數。諸佛如來。常爲諸佛。而作長子。猶如今也。是蹈七寶華佛。國土莊嚴。壽命劫數。所化弟子。正法像法。亦如山海慧自在通王如來無異。亦爲此佛。而作長子。過是已後。當得阿耨多羅三藐三菩提。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

我爲太子時　羅睺爲長子　我今成佛道　受法爲法子
於未來世中　見無量億佛　皆爲其長子　一心求佛道
羅睺羅密行　唯我能知之　現爲我長子　以示諸衆生
無量億千萬　功德不可數　安住於佛法　以求無上道

爾の時に、仏、羅睺羅に告げたまわく、
「汝、来世に於いて、当に作仏することを得べし。蹈七宝華如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と号づけん。当に十世界、微塵等数の諸仏如来を供養すべし。常に諸仏の為に、而も長子と作ること、猶、今の如くならん。是の蹈七宝華仏の国土の荘厳、寿命の劫数、所化の弟子、正法、像法、亦、山海慧自在通王如来の如くにして、異なること無けん。亦、此の仏の為に、而も長子とならん。是れを過ぎて已後、当に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。
爾の時に、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「我、太子為りし時　羅睺長子と為り　我、今、仏道を成ずれば　法を受けて法子と為れり。
未来世の中に於いて　無量億の仏を見たてまつるに　皆其の長子と為って　一心に仏道を求めん。
羅睺羅の密行は　唯我のみ能く之を知れり。　現に我が長子と為って　以て諸の衆生に示す。
無量億千万の　功徳数うべからず　仏法に安住して　以て無上道を求む」と。

〔訳〕その時に、仏は羅睺羅に告げられた。
「汝は、未来世において、必ず仏となることができるであろう。その名を蹈七宝華如来、供養をうけるにふさわしい人、正しくあまねき智慧をそなえた人、智と実践とが完全にそなわった人、悟りに到達した人、世界のすべてに通じている人、最上の人、人間の調教師、諸天と人々との師、仏、世尊というであろう。必ずや、十世界を微塵にした数にも等しい多くの仏、如来を供養するであろう。つねに仏たちの長子となることが、ちょうど今のようであろう。この蹈七宝華仏の国土のおごそかなさま、寿命の劫の数、教化の弟子、正しい教法、正しい教法に似た教え（の存続する期間）については、山海慧自在通王如来の場合と同じであり、異なることはないであろう。またこの仏の長子となるであろう。そうして、その後に必ず無上の正しい悟りを得るであろう」と。
その時に、世尊は、再び以上の意趣を宣べようとして詩頌を説いていわれた。
「私が太子であった時、羅睺羅は長子であった。　私が今、仏道を完成すると、その教法を受けて、法の子となった。(8)
未来の世において、無量億の仏を見たてまつって、　そのすべての仏たちの長子となって、一心

に仏道を求めるであろう。(9)

羅睺羅の人知れずの修行は、ただ私だけがそれを知っている。　現に私の長子となって、多くの衆生たちに示している。(10)

無量億千万の、その功徳は数えることができない。　仏の教えに安住して、無上なる道を求めているのだ」と。(11)

《蹈七宝華如来》梵本では、Saptaratnapadma-vikrāntagāmin（七宝の蓮華を踏みこえてゆくもの）という。《微塵等数》微塵と等しい数の、の意。巨数をあらわす表現の一つ。《長子》jyeṣṭhaputra　当時の父系制社会のインドでは、長子であるということは、家督の相続者、後継者であることを意味し、重要な意義を有していた。それ故、出家において、仏の長子という表現は、仏の法の正統な後継者であることを意味する。第二章の方便品の三止三請の偈で舎利弗が「我はこれ仏の長子なり」（一三〇頁）と述べているのは、菩薩でなく声聞であった舎利弗が一乗真実の教えを聞いて、真の仏子（大乗仏教一般では菩薩を意味する）であることにめざめ、仏の法の正統な後継者となるということで、本経では一乗の教えと仏子とが密接な関係にあることに注意。なお、ここでは仏と羅睺羅の関係は、世俗の長子という親子関係と出家のそれとの二重の意義が含められている。なお、第一章の語注「仏子」（七九頁）を参照。《密行》人にはそれとわからずに行なわれている菩薩修行のこと。注釈家は、現在声聞の羅睺羅も、本来は菩薩であったから菩薩としての修行を行なったが、その修行は人々にはそれとは知られない、と解し、あるいは、持戒第一といわれる羅睺羅は、その戒を持つことにおいて謙虚でひそやかで、人にはそれと知られない、と解す。梵文では単に羅睺羅の修行は人には知られない、という意味。

本段は、羅睺羅に対する授記が説かれている段である。次に学・無学の二千人に対する授記が説かれるが、その前に阿難と羅睺羅の二人について一項を設けてまとめておくことにする。

阿難の過去・羅睺羅の密行

本章の内容は、阿難と羅睺羅、及びその他の二千人の学・無学の人々に対する授記である。仏の侍者阿難と仏の長子である羅睺羅とは、これまでに舎利弗をはじめ多くの声聞たちが授記されるのを見て、われらもその授記をこうむりたいと仏に願った。学・無学の二千人もまた同様であった。仏は彼らの心中の願いを知って、阿難には山海慧自在通王仏に、羅睺羅には蹈七宝華如来になるであろうとの記莂を与えられた。この時、新たに仏道に志した新発意の菩薩たち八千人は、大菩薩でさえも容易には得ることのできない仏の成仏の予言が、なぜ声聞に対してかくも与えられるのであるかという疑問を懐いた。そこで仏が、その菩薩たちの疑問に応えて説かれたのが阿難の過去であり、羅睺羅の密行であった。

阿難は釈尊の従弟である。釈尊が成道後に故郷のカピラ城へ帰られた時に、釈尊によって出家させられ、以後侍者となって釈尊の入滅までつねに随うことほぼ三十年間であった。したがって、彼はつねに釈尊のそばでその説法を聞いており、これが多聞第一と称されるゆえんであった。

阿難は情に篤い人として知られている。女性に対しても優しく、また美男でもあった。仏教教団に

女性の出家者をゆるすきっかけとなったのも、この阿難のとりなしによるものであった。釈尊の養母の摩訶波闍波提の強い出家の願いを阿難が釈尊にとりなしたのである。釈尊入滅後の仏教教団の統率者、摩訶迦葉は厳格な人として知られ、阿難とは性格的にもあい容れなかったようである。彼は五過をあげて阿難を責め、釈尊滅後、王舎城で行なわれた仏典の第一結集の際は、阿難を加えようとはしなかった。しかし、阿難は結集会議の直前に修行を完成して有学より無学に進み、結集に加わることができて、経典の編集にたずさわったという。

ちなみに、本経羅什訳と竺法護訳の漢訳二種では、阿難は摩訶迦葉、舎利弗、須菩提などの無学の大阿羅漢とともに列記されているが、サンスクリット本とチベット訳では、阿難は無学ではなく有学となっている。

さて、この阿難と仏とは、その昔、前世において、ともに同時に空王仏という仏のもとで仏道を志したのだった。阿難はつねに多聞をねがい、仏はつねにつとめて精進した。それで仏は仏道を完成することができたが、一方阿難は法の護持者となった。それで阿難は仏の法を護持し、また将来にわたっても仏の教法を護持し、多くの菩薩たちを教化するであろう。これが阿難の前世においていだいた誓願であったのだ。

以上が、仏が阿難に授記を与えたことの過去前世のいわれであり、阿難はこれを聞いて、ただちに過去の記憶をとりもどしたのである。

次に仏は長子羅睺羅に向って説かれる。羅睺羅は未来世に成仏し、無数の多くの仏につかえ、そしてそれら諸仏の長子となるであろうと。羅睺羅は出家前は釈尊の長子であり、仏道を成就した今は、

仏の法を継承し相続する長子であり、未来世にあって多くの仏の長子となるであろう、そして羅睺羅の密行はただ仏のみよく知るところである、と説くのである。

羅睺羅が仏の血縁上の長子であるという点は、他経典ではほとんど省みられてはいない。本経が、現世における世俗の肉親関係としての長子ということを出家の世界にそのまま反映させて、現世ばかりでなく過去の諸仏の長子として遡らせ、またさらに未来世における仏の長子たらしめようとしているのは、本経における仏子という概念とともに十分注意されねばならない。

爾時世尊。見學無學二千人。其意柔軟。寂然清淨。一心觀佛。佛告阿難。汝見是學無學。二千人不。唯然已見。阿難。是諸人等。當供養五十世界。微塵數。諸佛如來。恭敬尊重。護持法藏。末後同時。於十方國。各得成佛。皆同一號。名曰寶相如來。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。壽命一劫。國土莊嚴。聲聞菩薩。正法像法。皆悉同等。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

是二千聲聞　今於我前住　悉皆與授記　未來當成佛
所供養諸佛　如上說塵數　護持其法藏　後當成正覺
各於十方國　悉同一名號　俱時坐道場　以證無上慧
皆名爲寶相　國土及弟子　正法與像法　悉等無有異
咸以諸神通　度十方衆生　名聞普周遍　漸入於涅槃

爾時學無學二千人。聞佛授記。歡喜踊躍。而說偈言。

世尊慧燈明　我聞授記音　心歓喜充満　如甘露見灌

爾の時に、世尊、学・無学の二千人を見たもうに、其の意、柔軟に寂然清浄にして、一心に仏を観たてまつる。仏、阿難に告げたまわく、

「汝よ、是の学・無学の二千人を見るや不や」と。

「唯然。已に見る」と。

「阿難よ、是の諸人等は、当に五十世界微塵数の諸仏如来を供養し、恭敬尊重し、法蔵を護持して、末後に同時に、十方の国に於いて、各成仏することを得べし。皆同じく一号にして、名づけて宝相如来、応供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏、世尊と曰わん。寿命一劫ならん。国土の荘厳、声聞、菩薩、正法、像法、皆悉く同等ならん」と。

爾の時に、世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「是の二千の声聞　今、我が前に於いて住せる　悉く、皆、記を与え授く　『未来に当に成仏すべし。
供養する所の諸仏は　上に説く塵数の如くならん　其の法蔵を護持して　後に当に正覚を成ずべし。
各十方の国に於いて　悉く同じく一名号ならん　倶時に道場に坐して　以て無上慧を証し
皆名づけて宝相と為ん　国土及び弟子　正法と像法と　悉く等しくして異なること有ること無けん。
咸く諸の神通を以て　十方の衆生を度し　名聞普く周遍して　漸く涅槃に入らん』と。」

爾の時に、学・無学の二千人、仏の授記を聞きたてまつりて、歓喜踊躍して偈を説いて言さく、

「世尊は慧の燈明なり　我、授記の音を聞きたてまつりて　心に歓喜充満せること　甘露をもって灌がるるが如し」と。

〔訳〕その時に、世尊が、学修中の、及び学修を完了した二千人を見られると、彼らの心は柔軟で、静かに落着いて清らかであり、一心に仏を見たてまつっていた。仏は阿難に告げられた。

「汝は、これらの学修中の、及び学修を完了した二千人を見るか、どうか。」

「はい、見ております」

「阿難よ、この人々は、必ず五十世界の微塵の数ほどの多くの仏・如来を供養して、敬い尊崇し、教法の蔵を護り持って、最後に同時に十方の国々において、それぞれ仏となることができるであろう。すべて同じ一つの名で、宝相如来、供養をうけるにふさわしい人、正しくあまねき智慧をそなえた人、智と実践とが完全にそなわった人、悟りに到達した人、世界のすべてに通じている人、最上の人、人間の調教師、諸天と人々との師、仏、世尊というであろう。その（仏の）寿命は一劫であろう。仏国土のおごそかなさま、声聞、菩薩、正しい教法、正しい教法に似た教え（の存続する期間）については、すべてみな同じであろう」と。

その時に、世尊は、再び以上の意義を宣べようとして、詩頌を説いて言われた。

「この二千人の声聞たちの、今、私の前にいるものたちに、すべて成仏の予言を授けよう。

『未来に必ず仏になるであろう。(12)

供養する仏たちは、さきに説いた微塵の数のように多いであろう。　その教法の蔵を護り持って、

後に必ず正しい悟りを達成するであろう。(13)

それぞれが十方の国々において、すべて同一の名（の仏となる）であろう。　同時に道場に坐っ

て、この上ない智慧を証得するであろう。[14] みな名づけて宝相といい、仏国土や弟子、　正しい教法、正しい教法に似た教えについて、すべてみな等しく異なることはないであろう。[15]　その名声はあまねくゆきわたり、次第にみなさまざまな神通によって、十方の衆生を済度し、涅槃に入るであろう』と。」[16]

その時、学修中の、及び学修を完了した二千人は、仏が成仏の予言をされるのを聞いて、歓びにこおどりして詩頌を説いて申しあげた。

「世尊は智慧の燈明であります。私たちは成仏の予言を授けられるのをお聞きして、　心に歓喜がみちて、不死の天酒を灌がれるようであります」と。[17]

《汝見……不》「見るや不や」と訓み、是非選択の疑問形。念押しの表現で、仏典に特に多用される。**《唯然》**第二章方便品の語注（一三七頁）参照。**《末後》**字義は最後という意味だが、ここでは最後身、すなわち再び生存をとることのない最後の生存という意味。**《宝相如来》**梵本では Ratnaketurāja（宝の輝きの王）という。**《塵数》**微塵数の略。**《倶時》**同時にの意。第七章の語注「即時」（四〇一頁）を参照。**《甘露》**amṛta 天の神々の飲みものとされ、これを飲めば不死を得るという。味、香りとも絶妙で、仏の教法に喩えられることが多い。

本段は、二千人の学・無学の人々に対する授記を述べた段である。以上、第三章の譬喩品から本章

に至るまでに次々に声聞たちに成仏の記莂が与えられ、授記という点についていえば本経における授記の大部分はこれで完了した。後は比丘尼（びくに）たちが残っているにすぎない。比丘尼への授記は後の第十三章勧持（かんじ）品において説かれるのである。

科段についていえば、三周説法の第三、因縁説周が本章で終了した（一九一頁及び四六七頁参照）。

妙法蓮華經法師品第十

爾時世尊。因藥王菩薩。告八萬大士。藥王。汝見是大衆中。無量諸天。龍王夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人與非人。及比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。求聲聞者。求辟支佛者。求佛道者。如是等類。咸於佛前。聞妙法華經。一偈一句。乃至一念隨喜者。我皆與授記。當得阿耨多羅三藐三菩提。佛告藥王。又如來滅度之後。若有人。聞妙法華經。乃至一偈一句。一念隨喜者。我亦與授。阿耨多羅三藐三菩提記。若復有人。受持。讀誦。解說。書寫。妙法華經。乃至一偈。於此經卷。敬視如佛。種種供養。華香。瓔珞。末(1)香。塗香。燒香。繒蓋。幢幡。衣服。伎樂。乃至合掌恭敬。藥王。當知是諸人等。已曾供養。十萬億佛。於諸佛所。成就大願。愍衆生故。生此人間。藥王。若有人問。何等衆生。於未來世。當得作佛。應示是諸人等。於未來世。必得作佛。何以故。若善男子。善女人。於法華經。乃至一句。受持。讀誦。解說。書寫。種種供養經卷。華香。瓔珞。末(2)香。塗香。燒香。繒蓋。幢幡。衣服。伎樂。合掌恭敬。是人一切世間。所應瞻奉。應以如來供養。而供養之。當知此人。是大菩薩。成就阿耨多羅三藐三菩提。哀愍衆生。願生此間。廣演分別。妙法華經。何況盡能受持。種種供養者。藥王。當知是人。自捨清淨業報。於我滅度後。愍衆生故。生於惡世。廣演此經。若是善男子。善女人。我滅度後。能竊爲一人。說法華經。乃至一句。當知是人。則如來使。如來所遣。行如來事。何況於大衆中。廣爲人說。藥王。若有惡人。以不善心。於一劫中。現於

佛前。常毀罵佛。其罪尚輕。若人以一惡言。毀呰在家出家。讀誦法華經者。其罪甚重。藥王。其有讀誦。法華經者。當知是人。以佛莊嚴。而自莊嚴。則爲如來。肩所荷擔。其所至方。應隨向禮。一心合掌。恭敬供養。尊重讃歎。華香。瓔珞。末(3)香。塗香。燒香。繒蓋。幢幡。衣服。餚(4)饌(5)。作諸伎樂。人中上供。而供養之。應持天寶。而以散之。天上寶聚。應以奉獻。所以者何。是人歡喜説法。須臾聞之。卽得究竟阿耨多羅三藐三菩提故。

(1)(2)(3)末＝抹　(4)餚＝肴　(5)饌＝膳

爾の時に、世尊、薬王菩薩に因せて、八万の大士に告げたまわく、

「薬王よ、汝、是の大衆の中の、無量の諸天、龍王、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅伽、人と非人と、及び比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の声聞を求むる者、辟支仏を求むる者、仏道を求むる者を見るや。是の如き等類、咸く仏前に於いて、妙法華経の一偈一句を聞いて、乃至一念も随喜せん者には、我、皆、記を与え授く。『当に阿耨多羅三藐三菩提を得べし』と。」

仏、薬王に告げたまわく、

「又、如来の滅度の後に、若し人有って、妙法華経の、乃至一偈一句を聞いて、一念も随喜せん者には、我、亦、阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く。若し、復、人有って、妙法華経の、乃至一偈を受持、読誦し、解説、書写し、此の経巻に於いて、敬い視ること仏の如くにして、種種に華、香、瓔珞、末香、塗香、焼香、繒蓋、幢幡、衣服、伎楽を供養し、乃至合掌恭敬せん。薬王よ、当に知るべし。是の諸人等は、已に曽て、十万億の仏を供養し、諸仏の所に於いて、大願を成就して、衆生を愍むが故に、此の人間に生ずるなり。薬王よ、若し人有って、何等の衆生か未来世に於いて、当に作仏することを得べきと問わば、応に示すべし、『是の諸人等、

未来世に於いて、必ず作仏することを得ん』と。何を以ての故に。若し善男子、善女人、法華経の、乃至一句に於いても、受持し、読誦し、解説し、書写し、種種に経巻に、華、香、瓔珞、末香、塗香、焼香、繒蓋、幢幡、衣服、伎楽を供養し、合掌恭敬せん。是の人は、一切世間の、応に瞻奉すべき所なり。応に如来の供養を以て、之を供養すべし。当に知るべし。此の人は、是れ大菩薩の、阿耨多羅三藐三菩提を成就して、衆生を哀愍し、願って此の間に生まれ、広く妙法華経を演べ分別するなり。何に況んや、尽くして能く受持し、種種に供養せん者をや。薬王よ、当に知るべし。是の人は、自ら清浄の業報を捨てて、我が滅度の後に於いて、衆生を愍むが故に、悪世に生まれて、広く此の経を演ぶるなり。若し是の善男子、善女人、我が滅度の後、能く竊かに一人の為にも、法華経の、乃至一句を説かん。当に知るべし。是の人は則ち如来の使なり。如来の所遣として如来の事を行ずるなり。何に況んや、大衆の中に於いて、広く人の為に説かんをや。薬王よ、若し悪人有って、不善の心を以て、一劫の中に於いて、現に仏前に於いて常に仏を毀罵せん、其の罪尚軽し。若し人、一の悪言を以て、在家出家の、法華経を読誦する者を毀呰せん、其の罪甚だ重し。薬王よ、其れ法華経を読誦すること有らん者は、当に知るべし。是の人は、仏の荘厳を以て、自ら荘厳するなり。則ち如来の肩に、荷担せらるることを為ん。其の所至の方には、応に随って向い礼すべし。一心に合掌して、恭敬供養、尊重、讃歎し、華、香、瓔珞、末香、塗香、焼香、繒蓋、幢幡、衣服、餚饍をもってし、諸の伎楽を作し、人中の上供をもって、之を供養せよ。応に天の宝を持って、以て之に散ずべし。天上の宝聚、応に以て奉献すべし。所以は何ん。是の人、歓喜して法を説かんに、須臾も之を聞かば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟することを得んが故なり」と。

〔訳〕その時、世尊は薬王菩薩にことよせて、八万の菩薩達に告げられた。

「薬王よ、汝はこの大勢のあつまりの中の、無量の多くの天・龍王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽と、人間と人間でないもの、及び比丘・比丘尼・信男・信女と、そして声聞（の道）を求めるもの、辟支仏（の道）を求めるもの、仏の道を求めるものとを見るか。これらの類のものたちが、すべて仏の前において、『妙法蓮華経』の、ほんの一つの詩頌、ほんの一句だけでも聞いて、たといほんのひとおもいの心にも、それによって心から喜びを生ずる者には、私はすべて成仏の予言を授け与える。『必ず無上の正しい悟りを得るであろう』と。」

仏は薬王菩薩に告げられた。

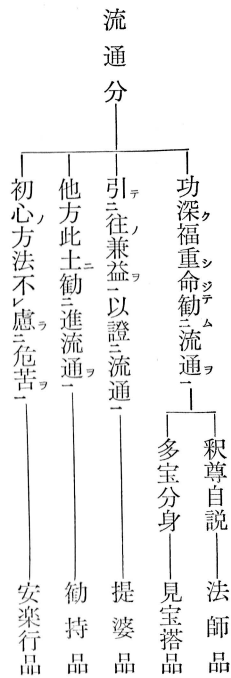
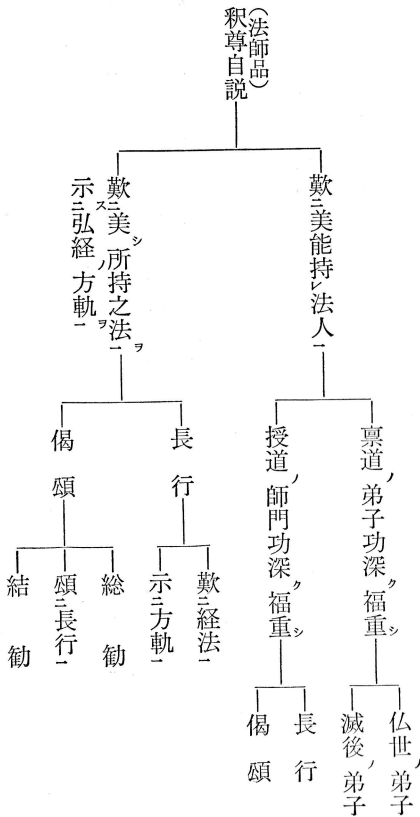
「また、如来が入滅された後に、もしある人が、『妙法蓮華経』のほんの一つの詩頌、一つの句でも聞いて、たといほんのひとおもいの心にも、それによって心から喜ぶものには、私はまた、無上の正しい悟りの予言を与え授ける。もし、またある人が、『妙法蓮華経』のほんの一つの詩頌をも、受け持ち、読誦し、解説し、書写し、この経巻をあたかも仏を敬い見るがごとくに敬い見て、種々に、花や香、装身具、抹香、塗香、焼香、きぬがさ、はたぼこ、衣服、音楽などを供養することから、そうしてまた合掌し、恭しく敬うことまでするとしよう。薬王よ、必ず知らねばならない。この人たちは、すでにかつて、十万億という仏を供養し、多くの仏たちのみもとにあって、大誓願を達成していたのだが、衆生たちを愍むが故に、この人間に生まれてきたのである。薬王よ、もしある人がいて、未来の世に、どのようなものたちが必ず仏となることができるのであろうかと問うならば、私はまさに示そう。『この人々たちこそが、未来の世にあって、必ず仏となることができるであろう』と。なぜならば、もし、善男子や善女人が、『妙法蓮華経』のほんの一句でも、受け持ち、読誦し、解説し、書

写し、種々さまざまに、経巻に花や香、装身具、抹香、塗香、焼香、きぬがさ、旗ぼこ、衣服、音楽などを供養し、合掌して恭しく敬うならば、この人はすべての世間の人々の、仰ぎ見るべき人である。当然に如来に対する供養をもって、この人に供養すべきであるからである。必ず知るべきである。この人は偉大な菩薩であり、無上の正しい悟りを達成し、衆生をあわれんで、（自から）願ってこの世界に生まれてきたものであり、広く『妙法蓮華経』を演説し、こと分けして示すのであると。ましてや、ことごとくよく受け持ち、種々に供養するものは、なおのことである。薬王よ、知るべきである。この人は、みずから清浄な業の果報を棄捨し、私の入滅後にあって、衆生を愍むが故に、（願って）悪世に生まれて、広くこの経を演説するのである。もし、この善男子、善女人が、私の入滅後、ひそかにたとえ一人のためにも、『法華経』の一句をも説くならば、この人はすなわち、如来の使者であり、如来が遣わされたものとして、如来のなすべきことを行うのであるということを知るべきである。ましてや、大ぜいの集りの中において、広く人々のために説くものにあってはなおさらのことである。薬王よ、もし悪人がいて、よこしまな心をいだいて、一劫という長い年月において、仏のみ前にあって常に仏を毀り罵ったとしよう。それでもまだその罪は軽いものである。もしある人が、一つの悪言によって、在家あるいは出家の『法華経』を読誦するものをそしったとしよう。（この時）その罪は極めて重いのである。薬王よ、そもそも『法華経』を読誦することがあるものは、この人は仏のおごそかな威厳をもってみずからのおごそかな威厳としているのだということを知るべきである。すなわち、（この人は）如来の肩にかつがれ、になわれているのである。そして、その人の到る方角には、必ず向って礼拝すべきである。一心に合掌し、恭しく敬い供養し、尊重し、讃めたたえ、花や、香、

装身具、抹香、塗香、焼香、きぬがさ、旗ぼこ、衣服、料理された食物をそなえ、多くの音楽を奏し、人々の中における最上の供えによって、この人を供養せよ。天上の宝を持って、この人の上に散らすべきである。天上の宝のあつまりを献上すべきである。なぜならば、この人が、歓んで法を説く時に、ほんの少しの間でもこの説法を聞けば、（聞くものは）直ちに無上の正しい悟りを究めつくすことができるからである」と。

《薬王菩薩》第一章の語注（四九頁）参照。**《八万大士》**八万人の菩薩たち。前章までとちがって本章から対告衆が声聞から菩薩になっていることに注意。「大士」は第一章の語注「菩薩摩訶薩」（四七頁）を参照。**《龍王……摩睺羅伽》**第一章の語注（五二―三頁）参照。**《人与非人》**人間と人間以外のもの、の意。天龍八部衆の一つ「人非人」（緊那羅 Kiṃnara）とは異なる。**《一念随喜》**ほんのちょっとおこした心にも喜びを生じて、の意。「一念」には多義があるが、ここでは梵文の原語 eka-citta-utpāda との対応から、ほんのひとおもいの心、ほんの一たびおこした心、の意にとる。梵文では、ekacittotpādenāpyanumoditamidaṃ sūtraṃ（ほんの一たび発心して、この経典を喜ぶ、p.224 *ll.* 6–7.）とある。**《受持・読誦・解説・書写》**天台では読誦を読と誦とに開いて五種の修行となし、これを修行する人について言って五種法師（ほっし）という。このうち、「受持」とは、経典の意義を了解し、信じて受けとめ、忘れないで心にとどめおくこと、「読」とは、経典を口唱すること、「誦」とは、経典を暗誦することである。**《華・香……伎楽、乃至合掌恭敬》**華から伎楽までの十種の供養を十種供養という。また繒蓋と幢幡を合して一となし、合掌まで含めて十種ともする。このうち、「瓔珞」とは、珠玉や貴金属で作った、頭や首、胸などにつける装身具のこと。「抹香」は粉末の香、沈香や栴檀などを粉にしたもの。「塗香」は、身体に塗る泥のようにした香。「繒蓋」は、きぬがさ

のこと。天蓋ともいう。仏像などの頭上にかざす傘のこと。「幢幡」は、はたぼこのこと。「幢」は旗のことで、もと王や将軍の軍旗をいった。これを魔軍に対する勝利の象徴として仏や菩薩の飾りとして用いる。「幡」は、のぼりのこと。**《善男子・善女人》**原語は、kulaputra, kula-duhitṛ 良家の子息・良家の子女の意。本経では仏が弟子たちに対する呼びかけの語として多く使用されている。**《願生此間》**みずから願って人間界に生まれること。「此間」は六朝の口語表現の複合語。「ここ」「この場所」という意味。**《自捨清浄業報》**みずからは、清らかな業の果報によって仏国土に生まれるべきところを、それをうち捨てて、悪世（この人間世界）に生まれること。**《如来使》**如来の使い、代行者。日蓮は、「能説此経、能持此経の人則ち如来の使なり、八巻、一巻、一品、一偈の人、乃至題目を唱ふる人、如来の使なり、始中終すてずして大難をとをす人、如来の使なり」（四条抄）と述べ、末世にこの経を弘めようとする自身への迫害を通じて、みずから如来使たる自覚をもつに至っており、日蓮にとってはこの語は重要な意義をもつ。**《行如来事》**如来事とは、如来のなすべきこと、すなわち衆生教化をさす。**《毀呰》**そしり、悪口をいうこと。「毀」も「呰（訾の俗字）」も、同義字。**《為如来肩所荷担》**如来の肩にかつぎになわれること。「為」は受身をあらわす助字。ただし、梵文は tathāgataṃ sa bhaiṣajyarājāṃsena pariharati ya imaṃ dharmaparyāyaṃ likhitvā pustakagataṃ kṛtvāṃsena pariharati/（薬王よ、この経説を書写して経巻となして肩にかつぐその人は、如来を肩にかつぐのである。p.227. *ll.* 8-9）とあり、「如来を肩にかつぐ（tathāgataṃ aṃsena pariharati）」という。**《餚饍》**それぞれ「餚」は「肴」の、「饍」は「膳」の別体字。二字とも、よくとりそろえた料理のこと。ごちそう。**《須臾》**ほんの短い時間。つかの間。原語は muhūrta（たちまち経過した、の意）で、本来時間の単位をいう。一日の三十分の一の時間。

（図1）
流通分
功深福重命勧流通
釈尊自説
法師品
多宝分身
見宝搭品
引往兼益以證流通
提婆品
他方此土勧進流通
勧持品
初心方法不慮危苦
安楽行品
（図2）
（法師品）釈尊自説
歎美能持法人
稟道弟子功深福重
仏世弟子
滅後弟子
授道師門功深福重
長行
偈頌
歎美所持之法
示弘経方軌
長行
歎経法
示方軌
偈頌
総勧
頌長行
結勧

本章は、前章までとうって変って、法華経という経典の崇拝とその功徳、及び弘経についてがその内容となっている。それ故、分科では、本経を迹門（前十四品）と本門（後十四品）とに二分するうち、本章以前が迹門の序分（序品）と正宗分で（方便品から授学無学人記品まで）、本章以降安楽行品第十四までが流通分とされている。この流通分は、さらに右の図1のように分けられている。また、本章の構造を見やすくするために本章の分科を略出すると、図2のようになる。

本段は右の図で、本章を「歎美能持法人」と「歎美所持之法、示弘経方軌」と大きく前後に二分するうちの前半の部分のうち、「授道師門功深福重」の長行までである。

一　法　師

前章までは、舎利弗をはじめとする多くの声聞たちに対して三乗方便一乗真実の法が説かれてきたが、本章に至っては薬王菩薩を直接の対象に、八万人の菩薩たちに対して法が説かれることになる。そして、その説法内容の中心は、末代の人にいかにしてこの法華経を弘め、受持させてゆくかという布教問題を扱っているのである。それ故、本章以下を流通分と呼んで、前章までと区別している。

本章は、法華経という経典が、諸経中最第一の経典であり、いかなる人でもこの経の一偈一句でも信受する者はすべて成仏すると説く。そして、その尊い経を受持し弘める人は如来の使者であり、如来の代行者であるという。しかしまた、この経典は如来在世の現在すら怨多いのであるから、まして末代悪世においてはこの経を弘めることは極めて困難であるといって、如来滅後にこの経を修行し弘

める者の心得を「弘経の三軌」として説いている。

本章の以上の内容の中心的な役割を荷うものが、本章のタイトルとなっている「法師」である。法師という言葉は仏教一般には、法を説いて信者を導く僧侶のことをいうが、本章ではそうではない。法華経を説くものは、出家在家を問わず、すべてが法師と呼ばれるのである。この法師の本章での原語は dharmabhāṇaka で、これは「説法者」という意味である。もっと具体的にいえば、法を読誦する人という意味で、この法華経を信者のために広く読んで聞かせることを職分とする人とされており①、出家の僧よりもむしろ在家の指導者たちがその主流であったと考えられている②。

さて、それではそのような法師は本章ではどのように説かれているであろうか。

仏は薬王菩薩をはじめとする八万の菩薩たちに告げられた。出家修行者であれ、在家修行者であれ、天の神々や人間以外のものであれ、すべて仏道を求めてこの法華経の一偈一句でも聞いて、たとい一念でも喜びを生ずるものには、みな私は成仏の予言を与えよう、これは現在ばかりでなく、如来の滅後の未来の世においても同様であると。そして続けて、この法華経を、たとい一偈でも受持し、読誦し、解説し、書写して仏のように敬い、この経典に華・香・瓔珞・抹香・塗香・焼香・繒蓋・幢幡・衣服・伎楽を供養し、合掌して敬う人のことについて説かれた。法華経経典に対してこのような修行をし、供養する人が、本章で法師と呼ばれている人々である。この受持・読誦・解説・書写の修行のうち読誦を二つに分けて、受持・読・誦・解説・書写の五種の修行とし、この修行をなす人について言って、これを五種法師と呼んでいる。第一の受持とは、経の意義を信解し心に留めたもつこと、第二の読とは、経を口に出して唱えること、第三の誦とは、経を暗誦すること、第四の解説とは、人々に対して

経を説法解説すること、第五の書写は、経典を書写して後世に弘め遺すことである。伝統的な解釈ではこの五種の修行を身（書写）・口（読・誦・解説）・意（受持）・の三業に分け、このうち受持を最も基本的なものとして正行とし、他の四種を助行とする。また、華・香・瓔珞・抹香・塗香・焼香・繒蓋・幢幡・衣服・伎楽によって経典に対する供養をなすのを十種の経典供養と呼んでいる。

以上のような経典修行と供養をなす人を経は法師というのであるが、その人々はどういう人々であるかというと、仏は説いて、実は、この人々は過去前世において十万億の仏を供養し、諸仏のもとにおいて大誓願を成就したものであり、今、衆生をあわれんで自らこの世界に衆生済度のために願って生まれてきたものたちであるといわれる。また、それ故に仏の滅度の後の未来世においてもこの人々は、願って悪世に生まれてこの法華経を弘め説く人たちであり、たとい経の一句でも説く人は、如来の使いとして、如来のなすべきことをする人であると説かれるのである。そして、そのような人々は如来の肩に荷担せられる人であって、如来の荘厳をそなえている人であるから、仏に対する供養と同じく、最高の供養をなせという。

このように本章では、法華経はその一偈一句をも聴聞する人はみな仏になることができるという尊い経典であるといって経典崇拝を説き、その経を受持し弘める人、すなわち法師の功徳の大きさを言葉を尽くして強調している（これはさらに後の分別功徳品第十七、随喜功徳品第十八、法師功徳品第十九で再び詳説されている）。さらに、本章は、法華経経典とそれを受持し弘める人に対する迫害があることを説き、そのような迫害のなかでの未来世における弘経の心得を説いているのであるが、これは後の項にゆずることにする。

① 渡辺照宏『法華経物語』pp.113-4（大法輪閣）
② 『法華経』II pp.262-3（『大乗仏典』5、中央公論社）
なお本章の「法師」については次のような論攻がある。
静谷正雄「法師 dharma-bhāṇaka について」（『印度学仏教学研究』第三号―一、一九五四年）
同　「大乗教団の成立について(上)」（『仏教史学』十三―三、一九六七年）
塚本啓祥「インド社会と法華経の交渉――dharma-bhāṇaka に関連して――」（坂本幸男編『法華経の思想と文化』平楽寺書店、一九六五年）

爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言。

若欲住佛道　成就自然智　常當勤供養　受持法華者
其有欲疾得　一切種智慧　當受持是經　并供養持者
若有能受持　妙法華經者　當知佛所使　愍念諸衆生
諸有能受持　妙法華經者　捨於清淨土　愍衆故生此
當知如是人　自在所欲生　能於此惡世　廣説無上法
應以天華香　及天寶衣服　天上妙寶聚　供養説法者
吾滅後惡世　能持是經者　當合掌禮敬　如供養世尊
上饌衆甘美　及種種衣服　供養是佛子　冀得須臾聞
若能於後世　受持是經者　我遣在人中　行於如來事

若於一劫中　常懷不善心　作色而罵佛　獲無量重罪
其有讀誦持　是法華經者　須臾加惡言　其罪復過彼
有人求佛道　而於一劫中　合掌在我前　以無數偈讚
由是讚佛故　得無量功德　歎美持經者　其福復過彼
於八十億劫　以最妙色聲　及與香味觸　供養持經者
如是供養已　若得須臾聞　則應自欣慶　我今獲大利
藥王今告汝　我所說諸經　而於此經中　法華最第一

爾の時に、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、
「若し仏道に住して　自然智を成就せんと欲せば　常に当に勤めて　法華を受持せん者を供養すべし。
其れ疾く　一切種智慧を得んと欲すること有らんは　当に是の経を受持し　並びに持者を供養すべし。
若し能く　妙法華経を受持すること有らん者は　当に知るべし、仏の所使として　諸の衆生を愍念するなり。
諸有の能く　妙法華経を受持する者は　清浄の土を捨てて　衆を愍むが故に此に生ずるなり。
当に知るべし、是の如き人は　生ぜんと欲する所に自在なれば　能く此の悪世に於いて　広く無上の法を説くなり。
応に天の華香　及び天宝の衣服　天上の妙宝聚を以て　説法者に供養すべし。
吾が滅後の悪世に　能く是の経を持たん者をば　当に合掌し礼敬して　世尊に供養するが如くすべし。
上饌、衆の甘美　及び種種の衣服をもって　是の仏子に供養して　須臾も聞くことを得んと冀うべし。
若し能く後の世に於いて　是の経を受持せん者は　我遣して人中に在らしめて　如来の事を行ぜしむるなり。

若し一劫の中に於いて　常に不善の心を懐いて　色を作して仏を罵らんは　無量の重罪を獲ん。
其れ、是の法華経　を読誦し持つこと有らん者に　須臾も悪言を加えんは　其の罪、復、彼に過ぎん。
人有って仏道を求めて　一劫の中に於いて　合掌し我が前に在って　無数の偈を以て讃めん
是の讃仏に由るが故に　無量の功徳を得ん。　持経者を歎美せんは　其の福、復、彼に過ぎん。
八十億劫に於いて　最妙の色声　及与香味触を以て　持経者に供養せよ。
是の如く供養し已って　若し須臾も聞くことを得ば　則ち応に自ら欣慶すべし　『我、今大利を獲つ』と。
薬王よ、今、汝に告ぐ　『我が所説の諸経　而も此の経の中に於いて　法華最も第一なり』と。

〔訳〕その時、世尊は、再び以上の意義を宣べようとして、詩頌を説いていわれた。

「もし、仏道のなかにとどまり、仏の自然におこる智慧を達成しようとするならば、　つねにつとめて、法華経を受け持つ人を供養すべきである。(1)

すみやかにすべてを知る仏の智慧を得ようとするならば、　この経を受け持ち、また受け持っている人を供養すべきである。(2)

もし『妙法蓮華経』をよく受け持つことができるものがあるならば、（その者は）仏の使者として、多くの衆生をあわれみおもうものであると知るべきである。(3)

多くの『妙法蓮華経』をよく受け持っているものたちは、　清らかな国土を捨てて、人々をあわれむが故に、ここに生まれたのだ。(4)

そのような人々は、生まれようと思うところを自由自在に選べるので、　この悪世に（生まれて）、

広く無上の法を説くことができるのだと知るべきである。(5)

天界の華や香、及び天の宝の衣服、　天上のすばらしい宝の数々とによって、その法を説く人を供養すべきである。(6)

私の入滅の後の悪世にあって、この経をよく保持する者を、　必ず合掌して敬い礼拝し、世尊に供養するように供養せよ。(7)

上等の供えもの、多くの美味なものと、及び種々の衣服とによって、　この仏の子に供養して、ほんの一時でも（その説法を）聞くことができるようにと願え。(8)

もし、後の世に、この経を受け持つことができる者は、　私が（彼を）人々の中に派遣して、如来の（行なうべき）ことを行なわせるのである。(9)

もし、一劫のあいだ、つねによこしまな心を懐いて、　顔色あらわに、仏をののしるならば、（その人は）無量の重罪をうるであろう。(10)

（だが、）この法華経を読誦し、保持する者に対して、　ほんの一時でも悪言を加えるならば、その罪はさらにそれ以上であろう。(11)

ある人が、仏道を求めて、一劫のあいだ、　合掌して私の面前で、無数の詩頌によって私を讃えるならば、(12)

この仏を讃えることによって、無量の功徳を得るであろう。　（だが、）経を保持する者を称讃するならば、その福徳は、さらにそれ以上であろう。(13)

八十億劫という極めて長時のあいだ、もっともすぐれた形と音声と　及び香り、味、感触とに

よって、経を保持する者を供養せよ。(14)そのように供養したのち、もしほんの一時でも（その法を）聞くことができたなら、その場合には、『私は今、大きな利益を得た』と喜ぶべきである。(15)薬王よ、今、汝に告げよう。『私が説いた多くの経典の、それらの経典のうちで、法華経がすぐれて第一のものである』と。」(15')（梵本になし）

《**自然智**》svayaṃbhūjñāna 人為的な努力を要しないでも、おのずからおこってくる無作自然の仏の智慧。第三章の語注（二四三頁）も参照。《**一切種智慧**》原語は sarvajñatva（すべてを知りつくしている状態）仏の一切を知りつくす智慧。第二章の語注（一四八頁）も参照。《**諸有能受持妙法華経者**》従来は「諸の能く妙法華経を受持すること有らん者は」と訓んでいるが、今は、「諸有」を主格にとる。「諸有」は、あらゆる（＝所有）とか、もろもろの多くのなどの意。ここは後者の意。《**自在所欲生**》業報による生でなくて、意欲によって自在に欲するところに生まれること。《**上饌**》「饌」は供えもの。すぐれた上等の供えものの意。《**仏子**》本章では、仏の滅後に法華経を受持する者を「仏子」と呼んでいる。《**作色而罵仏**》「作色」とは、怒って顔色をかえること。この場合の「色」は、顔色の意。（『史記』巻六十九「蘇秦列伝」に「韓王勃然作色」とある。）

本段は、先の段の長行に対する重頌であり、科文（五三二頁参照）からいうと、「授道師門功深福重」の偈頌に相当する。ここまでで、能持の人を歎美する部分はおわり、以下に「所持の法を歎美し、弘経の方軌を示す」段に入る。

爾時佛復告。藥王菩薩摩訶薩。我所說經典。無量千萬億。已說。今說。當說。而於其中。此法華經。最爲難信難解。藥王。此經是諸佛。祕要之藏。不可分布。妄授與人。諸佛世尊。之所守護。從昔已來。未曾顯說。而此經者。如來現在。猶多怨嫉。況滅度後。藥王。當知如來滅後。其能書持讀誦供養。爲他人說者。如來則爲。以衣覆之。又爲他方。現在諸佛。之所護念。是人有大信力。及志願力。諸善根力。當知是人。與如來共宿。則爲如來。手摩其頭。藥王。在在處處。若說。若讀。若誦。若書。若經卷所住(1)處。皆應起七寶塔。極令高廣嚴飾。不須復安舍利。所以者何。此中已有。如來全身。此塔應以。一切華香瓔珞。繒蓋。幢幡。伎樂。歌頌。供養恭敬。尊重讚歎。若有人得見此塔。禮拜供養。當知是等。皆近阿耨多羅三藐三菩提。藥王。多有人。在家出家。行菩薩道。若不能得。見聞讀誦。書持供養。是法華經者。當知是人。未善行菩薩道。若有得聞。是經典者。乃能善行。菩薩之道。其有衆生。求佛道者。若見若聞。是法華經。聞已信解。受持者。當知是人。得近阿耨多羅三藐三菩提。藥王。譬如有人。渴乏須水。於彼高原。穿鑿求之。猶見乾土。知水尙遠。施功不已。轉見濕土。遂漸至泥。其心決定。知水必近。菩薩亦復如是。若未聞未解。未能修習。是法華經者。(2)當知是人。去阿耨多羅三藐三菩提尙遠。若得聞解。思惟修習。必知得近阿耨多羅三藐三菩提。所以者何。一切菩薩。阿耨多羅三藐三菩提。皆屬此經。此經開方便門。示眞實相。是法華經藏。深固幽遠。無人能到。今佛敎化。成就菩薩。而爲開示。藥王。若有菩薩。聞是法華經。驚疑怖畏。當知是爲。新發意菩薩。若聲聞人。聞是經。驚疑怖畏。當知是爲。增上

慢者。藥王。若有善男子。善女人。如來滅後。欲爲四衆。説是法華經者。云何應説。是善男子。善女人。入如來室。著如來衣。坐如來座。爾乃應爲四衆。廣説斯經。如來室者。一切衆生中。大慈悲心是。如來衣者。柔和忍辱心是。如來座者。一切法空是。安住是中。然後以不懈怠心。爲諸菩薩。及四衆。廣説是法華經。藥王。我於餘國。遣化人。爲其集聽法衆。亦遣化。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。聽其説法。是諸化人。聞法信受。隨順不逆。若説法者。在空閑處。我時廣遣。天龍鬼神。乾闥婆。阿修羅等。聽其説法。我雖在異國。時時令説法者。得見我身。若於此經。忘失句逗。我還爲説。令得具足。

(1)住處＝住之處　(2)者＝春日本になし。

爾の時に仏、復、薬王菩薩摩訶薩に告げたまわく、

「我が所説の経典、無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説かん。而も其の中に於いて、此の法華経、最も為れ難信難解なり。薬王よ、此の経は是れ、諸仏の秘要の蔵なり。分布して、妄りに人に授与すべからず。諸仏世尊の、守護したもう所なり。昔より已来、未だ曾て顕説せず。而も此の経は、如来の現在すら、猶怨嫉多し。況んや滅度の後をや。

薬王よ、当に知るべし。如来の滅後に、其れ能く書持し、読誦し、供養し、他人の為に説かん者は、如来則ち、衣を以て之を覆いたもう為し。又、他方の現在の諸仏に護念せらるることを為ん。是の人は、大信力、及び志願力、諸善根力有らん。当に知るべし。是の人は、如来と共に宿するなり。則ち、如来の手をもって、其の頭を摩でたもうを為ん。薬王よ、在在処処に、若しは説き、若しは読み、若しは誦し、若しは書き、若しは経巻所住の処には、皆、応に七宝の塔を起てて、極めて高広厳飾ならしむべし。復、舍利を安んずることを須いず。

所以は何ん。此の中には、已に如来の全身有す。此の塔をば、応に一切の華、香、瓔珞、繒蓋、幢幡、伎楽、歌頌を以て、供養恭敬、尊重讃歎したてまつるべし。若し人有って、此の塔を見たてまつることを得て、礼拝し供養せんに、当に知るべし、是等は皆、阿耨多羅三藐三菩提に近づきぬ。薬王よ、多く人有って、在家、出家の、菩薩の道を行ぜんに、若し是の法華経を見聞し、読誦し、書持し、供養すること得ること能わずんば、当に知るべし。是の人は、未だ善く菩薩の道を行ぜざるなり。若し、是の経典を聞くこと得ること有らん者は、乃ち、能善く菩薩の道を行ずるなり。其れ衆生の、仏道を求むる者有って、是の法華経を、若しは見、若しは聞き、聞き已って信解し受持せば、当に知るべし。是の人は、阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり。

薬王よ、譬えば人有って、渇乏して水を須めんとして、彼の高原に於いて、穿鑿して之を求むるに、猶乾ける土を見ては、水尚遠しと知る。功を施すこと已まずして、転た湿える土を見、遂に漸く泥に至りぬれば、其の心決定して、水必ず近しと知らんが如く、菩薩も亦復是の如し。若し是の法華経を、未だ聞かず、未だ解せず、未だ修習すること能わずんば、当に知るべし、是の人は、阿耨多羅三藐三菩提を去ること尚遠し。若し聞解し、思惟し、修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ。所以は何ん。一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は、皆此の経に属せり。此の経は、方便の門を開きて、真実の相を示す。是の法華経の蔵は深固幽遠にして、人の能く到る無し。今、仏、菩薩を教化し成就して為に開示す。

薬王よ、若し菩薩有って、是の法華経を聞いて、驚疑し怖畏せんに、当に知るべし。是れを新発意の菩薩と為づく。若し声聞の人、是の経を聞きて、驚疑し怖畏せんに、当に知るべし。是れを増上慢の者と為づく。

薬王よ、若し善男子、善女人有って、如来の滅後に、四衆の為に是の法華経を説かんと欲せば、云何が応に説くべき。是の善男子、善女人は、如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐して、爾して乃し四衆の為に広く斯の経を説くべし。如来の室とは、一切衆生の中の大慈悲心是れなり、如来の衣とは、柔和忍辱の心是れ

なり。如来の座とは、一切法空是れなり。是の中に安住して、然して後に、不懈怠の心を以て諸の菩薩、及び四衆の為に、広く是の法華経を説くべし。

薬王よ、我、余国に於いて、化人を遣して、其れが為に聴法の衆を集め、亦、化の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を遣して、其の説法を聴かしめん。是の諸の化人、法を聞いて信受し、随順して逆わじ。若し説法者、空閑の処に在らば、我、時に広く天、龍、鬼神、乾闥婆、阿修羅等を遣して、其の説法を聴かしめん。我、異国に在りと雖も、時時に説法者をして、我が身を見ることを得せしめん。若し此の経に於いて、句逗を忘失せば、我、還為に説いて、具足することを得せしめん」と。

〔訳〕　その時に、仏は再び薬王大菩薩に告げられた。

「私が説く経典は、無量千万億という多数にものぼり、すでに説き、現在も説き、また未来にも説くであろう。そして、それらのなかで、この法華経こそが、最も信じがたく、理解しがたいものなのだ。薬王よ、この経は、仏たちの秘密の教えである。（これを）分かち広めて、みだりに人に授けてはならない。（この経は）多くの仏・世尊が守護されてきたものであり、昔から今に至るまで、明らかに説かれたことはなかったのである。しかも、この経に対しては、如来がいる現在でも怨や嫉みが多い。ましてや如来の入滅の後では、なおさらのことであろう。

　薬王よ、必ず知るがよい、如来の入滅の後に、（この経を）書写して保持し、読誦し、供養し、他の人々に説こうとする者は、如来が、その衣によって彼を覆うであろう。また、他の国土に現在おられる仏たちによって心にかけて護られるであろう。その人には、大きな信心の力、誓願の力、善行を

なす多くの力とがあるであろう。必ず知らねばならぬ、この人は如来と同じ所に住むのである。つまり、如来のみ手によって、その頭をなでられるのである、と。

薬王よ、いかなる所であっても、（この経を）説法したり、読んだり、誦したり、書写したり（するところ）、あるいはこの経巻がおいてあるその場所には、すべて七宝づくりの塔を建立し、その塔をきわめて高く広く且つおごそかに飾るべきである。また、（その塔には）仏陀の遺骨を安置する必要はない。なぜかといえば、この塔の中にすでに如来の全身がおわしますからである。この塔を、すべての華・香・装身具・きぬがさ・旗ぼこ・音楽・讃歌によって、供養し、恭しく敬い、尊び、讃歎すべきである。もし、人がこの塔を見ることができ、礼拝し供養したならば、その人たちすべては、無上の正しい悟りに近づいたと知るべきである。

薬王よ、多くの人々が、在家であれ、出家であれ、菩薩の道を修行していても、もし、この法華経を見聞きしたり、読誦したり、書写して保持したり、供養したりするということができない場合には、必ず知らねばならない、その人々は、まだよく菩薩の道を修行していないのだ、ということを。（それとは逆に）もし、この経典を聞くことができた者は、そのものこそがよく菩薩の道を修行しているのだ。およそ衆生で仏道を求めるものは、この法華経を見たり、聞いたり、聞いて信じ理解して受け持ったりするならば、その人は無上の正しい悟りに近づくことができたと知るべきである。

薬王よ、たとえば、ある人が、のどが渇いて水を求めるとしよう。そこで、さる高原に穴を掘って水を得ようとする場合に、まだ乾いた土を見ているあいだは、水までまだ遠いと知る。その作業をやめずに続けていって、次第に湿った土を見、ついにようやく泥に到達したなら、心にはっきりと、水

は必ず近いと知るであろう。菩薩についてもまた、それと同様である。もし、この法華経を、まだ聞きもせず、理解もせず、修行することもできないのならば、必ず知らねばならぬ、この人は無上の正しい悟りからはまだ遠く隔っているのだ、ということを。(それとは反対に)もし聞いて理解し、考え、修行することができたならば、(その人は)間違いなく無上の正しい悟りに近づくことができたのだと知れ。なぜならば、あらゆる菩薩の無上の正しい悟りは、すべてこの経の中にあるからである。この経は、教化の手段という門を開いて真実の(教えの)すがたを示すものである。この法華経の(教えの)蔵は、奥深くもの静かで、人が容易に到達することはできない。今、仏は菩薩を教化して(仏道を)完成させ、(真実の教えのすがたを)開き示すのである。

薬王よ、もし菩薩がいて、この法華経を聞いて驚き疑い、怖れを懐くならば、この人は新しく仏道修行に意をおこした人であると知るべきである。もし声聞の人が、この経を聞いて、驚き疑い、怖れを懐いたならば、この人はたかぶり思い上ったものであると知るべきである。

薬王よ、もし善男子・善女人が、如来の入滅の後に、比丘・比丘尼・信男・信女の四種の会衆(えしゅ)の人人に対して、この法華経を説こうとするならば、一体どのように説けばよいであろうか。それは、この善男子・善女人は、如来の室に入り、如来の衣を着て、如来の座に坐して、そうしてこそ四種の会衆の人々に広くこの経を説くべきである。如来の室とは、すべての衆生たちに対する大きな慈悲の心のことであり、如来の衣とは、柔和と忍耐の心のことである。如来の座とは、あらゆる存在の無実体性(「空」)のことをいうのである。この(存在の無実体性の)中に安らかにとどまり、そうして後に、おこたりのない心によって、多くの菩薩たちや四種の会衆の人々のために、広くこの法華経を説くべ

きである。
薬王よ、私は他の国土において、変化の人を遣わして、その（法華経を説く）人のために説法を聴く会衆を集め、また変化の比丘・比丘尼・信男・信女を遣わして、その説法を聴かせよう。これらの多くの変化の人々は、説法を聞いて、それを信じ受け入れ、信順して逆らうことはないであろう。もし、説法者が静かな場所にいるならば、私はその時、広く天・龍・鬼神・乾闥婆・阿修羅たちを遣わして、その説法を聴かせよう。たとい私が異なる国土にいようとも、その時々に説法者が私の身を見ることができるようにしよう。もし（説法者が）、この経典の文章の区切れを忘れてしまったならば、私は、再び説いて完全になるようにしてやるであろう」と。

《已説・今説・当説》 それぞれがどの経をさすかについて解釈が分れる。天台では「已説」を大品般若以上の頓・漸の諸教、「今説」を無量義経、「当説」を涅槃経とし、法華経はこの「已・今・当」の三説（すなわち法華経以外のすべての経）を超過した最第一の経であるとする（『文句』巻八上）。一方、光宅法雲（『法華義記』巻七）と嘉祥吉蔵（『法華義疏』巻九）は、已説を法華以前の大小乗の教、当説を涅槃経とする点は同様であるが、今説を法華経と解している。**《諸仏秘要之蔵》** 諸仏の秘密肝要の教えの蔵という意味。梵本では、ādhyātmikadharmarahasya（内心の法の秘要〈p. 230, *l*. 9〉）という。本経では、この経が「秘密」「秘要」（原語は rahasya）であるということが随処に繰り返し説かれている（たとえば、方便品の偈に「是の妙法は諸仏の秘要なり」とある。本書一八六頁）。「秘密」「秘要」という言葉は、本経が成立当時、他の人々より怨嫉や迫害を受けるに至った教えの内容そのものを指す。その内容とは、当時新思想であった一乗であり、その根拠としての「仏性」であったと解されている。平川彰「法華経における『一乗』の意味」（金

倉円照編『法華経の成立と展開』）pp. 595—600 を参照。**《如来現在猶多怨嫉、況滅度後》**本経の弘通に身命を賭して度重なる迫害をうけたわが国の日蓮は、この一文によって経文の正しさを身をもって体験したといい、自身は法華経を色読（身体で読むこと）したと述べている（「南条兵衛七郎殿御書」）。**《諸善根力》**さまざまな善根の力。善根（kuśalamūla）とは、よい果報をもたらす善行のこと。それを、花をさかせ実を結ぶ植物の根にたとえたもので、この「根」（mūla）は indriya（器官・能力）の訳語としての根ではない。**《若経巻所住処、皆応起七宝塔》**本経では、仏の舎利に対して供養をなし、仏塔（stūpa）を建立することを随処に説き（方便品、授記品、五百弟子受記品、本章の後の見宝塔品、提婆品、寿量品、薬王品など）、仏塔信仰が見られる。しかし、本章では経巻のある所に七宝の塔（原語は stūpa ではなく、caitya もと聖地・霊蹟・廟・祀堂などの意。本経では両者ほぼ同義に用いられている）を建てて、経巻を礼拝し、仏舎利は必ずしも安置しなくてよいと説いている。これは経塔崇拝、あるいは経巻崇拝というべきもので、このことは本章以前の前九章までは説かれておらず、本章に至ってはじめて説かれ、以後の第十七章分別功徳品、第二十一章の神力品においても再出する。なお、本経の仏塔信仰、経塔信仰に関しては、布施浩岳『法華経成立史』（大東出版、昭和九年）、平川彰『初期大乗仏教の研究』（春秋社、昭和四十三年）同「大乗仏教における法華経の位置」（講座・大乗仏教4—『法華思想』春秋社、昭和五十八年）などを参照。**《乃能善行》**「能善」で「よく」と訓む。ほぼ同義の二字を重ねて造られた複合語。六朝期に多用される。「善能」「能熟」などもその例。**《譬如有人……於彼高原・穿鑿求之》**この喩を高原穿鑿の喩といい、法華七喩のうちの第六に数える。種々の解釈があるが、天台の解釈によれば、乾土を三蔵教（阿含小乗）に、湿土を方便を帯して中道の義を説く方等般若に、泥を直ちに無上道を説く法華に喩え、水を仏性、中道の理に喩える（『文句』巻八上）。なお水を仏性に喩えるのは世親『法華論』による（大正蔵巻二六・十頁a）。**《此**

経開方便門、示真実相》この一文について古来さまざまな解釈が加えられている。法華経が説かれる以前は、三乗の教えはそれぞれ立場を異にする教えとして別々に存在していて一乗真実への門は閉じられていたが、法華に至ってはじめて三乗は一仏乗のための方便であると明かされて門が開かれ、真実相が示された、という意。「門を開く」ということについて、一仏乗の教えが説かれた今、方便の教を捨てて廃除するという解釈（光宅『法華義記』）と、方便の教がそのまま一仏乗であるとして三乗を止揚統合して一仏乗の中に融合摂取する（これを開会（かいえ）という）解釈がある。天台は後者の解釈。なお梵本では、ここの方便に対応するのは paramasaṃdhābhāṣya（最高の秘密の意をこめて語られたことば、p. 233. *l*. 11）とあり、この法華経の教説が最高の秘説を解明するという意味になっている。このことは、語注「随宜所説」（本書一一〇頁）「方便随宜所説」（一九五頁）「随宜説法」（三三七頁）を参照。**《深固幽遠》**「深固」は、吉蔵の解釈によれば「淵淵として測り難きを深となし、古今改まらざるを固となす」という（『法華義疏』巻九）。すなわち、奥深く不易な意ととっている。「幽遠」は奥深いという意味。**《入如来室・著如来衣・坐如来座》**古来この三事を「衣座室（えざしつ）の三軌（さんき）」といい、如来滅後に法華経を弘通する者の心得を説いたものとして「弘経（ぐきょう）の三軌（さんき）」と称する。**《如来座者、一切法空是》**「一切法空」とは、現象界の一切の存在は縁起によって成りたったもので、そこには実体というものは存在せず空であるということ。それ故、これを悟った仏は何ものにもとらわれず、融通無碍である。如来の座に坐るということは、仏のこの空性の悟りの境地にわが身を置くということ。**《化人》**仏が神通力によって作り出した変化の人。原語は nirmita **《空閑処》**人里を、遠すぎず近すぎないほどに離れた閑静な修行に適する場所のこと。原語は araṇya（阿蘭若と音写）で、もと森林を意味した。**《天……阿修羅等》**第一章の語注「八龍王」（五二頁）を参照。**《句逗》**「逗」は、区切り、とどめの意で「読」と同義。句逗は文章の切れ目、区切りのこと。句読に同じ。

以上、本段は比較的長文であるが、分科からいえば（五三二頁参照）、「所持の法を歎美し、弘経の方軌を示す」という大段の長行部分に相当する。本段長行部分は大きく二分して「経法を歎ず」という段と、「方軌を示す」という段に分けることができる。後半部分の始まりは「薬王よ、若し善男子善女人ありて、如来の滅後に四衆の為に、是の法華経を説かんと欲せば、云何が応に説くべき」という部分からである。

前半部分では、この法華経は難信難解であり、諸仏の秘説である。この経に対しては現在も未来においても迫害があるであろうが、未来にこの経を受持・読誦し、説く者には、如来がその衣で彼を包み、如来の手によって頭をなでられるであろう、と説く。さらに、経巻所住の所に経塔（チャイトヤ）を建てて供養せよ、といって経巻崇拝を説いている。そして、この法華経を見聞し、信受したものは無上の悟りに達し、知らざる者は成仏に程遠いとして、そのことを高原穿鑿の喩によって説く。

後半部分は、如来滅後の世においてどのようにこの法華経を説くべきかとして、説法者の心得としての衣座室の三軌を説いている。これについては以下、項を立てて説明を加えることにする。

二　弘経の三軌

経は、この法華経は、如来の現在すらなお怨嫉多く、いわんや末代悪世にあってはいかにこの経を説くことが困難であるか、といい、ここに如来滅後に法華経を説くための心構えを次のように説く。

「如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐して、爾して乃し四衆の為に広くこの経を説くべし。如来の室とは、一切衆生の中の大慈悲心これなり。如来の衣とは、柔和忍辱の心これなり。如来の座とは、一切法空これなり」と。

如来の室とは、衆生に対する広大な慈悲の心であり、如来の衣とは、柔和な心と忍耐心、そして如来の座とは、一切法が空であるとさとることであるという。後世、この如来の室に入り、如来の衣を着、如来の座に坐して法を説くことを「衣座室の三軌」あるいは「弘経の三軌」と呼んで、末代に法華経を説く方軌として称揚しているのである。これは、すべての人々に対して慈悲の心をもって働きかけ、どんな迫害に遇っても耐え忍んで法を説け、ということである。その法を説く場合に重要なことが、「如来の座に坐す」ということ、すなわち一切法が空であるという悟りの境地に身を置いて説くということである。一切法空、すなわちすべての存在には実体というものがないと照了した時、菩薩修行者には、この世界が彼此愛憎といった差別相対のない絶対平等の世界として映じ、そして、何のとらわれもない自在無碍の境地が現じてくる。このような境地に身を置いてこそ、すべての人々に等しく慈悲心をいだくことができ、また迫害にも耐えることができるようにもなるのである。これを経は「如来の座とは、一切法空これなり。この中に安住して、然して後に、不解怠の心をもって諸の菩薩、及び四衆の為に、広くこの法華経を説くべし」と説いている。

この弘経の三軌が説かれたのは、如来滅後の世に法華経を説く者のための心構えを示すためであるが、それではなぜそのような心構えが必要なのであろうか。それは、この経に対しては如来の現在すら怨嫉が多いからであり、後の偈頌部分に説かれるように、刀杖瓦石の迫害を受けるからである。で

は、一体なぜこの法華経を説くと迫害を受けるのであろうか。本章ではこの問いに対する具体的な答えは見当らない。しかし、後の勧持品第十三になると、その偈頌の部分には、未来のこととして具体的に迫害の内容が説かれている。詳細は後に譲って、今、その要点を拾ってみると、

㈠人里離れた閑静な場所で修行し、粗末な衣をまとった修行者たちが、法華経を説く者に対して軽蔑し、そしるということ。これは、法華経を信奉し広める人々をそしるのは、従来の出家としてのきまり（頭陀行（ずだぎょう））に忠実に随って修行する出家修行者たちであるということである。

㈡その、そしる人々の言い分は、「彼ら法華経集団の修行者たちは、外道（げどう）（仏教外の教え）の論議を説き、自らの名声を求めて勝手に経典を作って世間をたぶらかしている」というものであること。これは、法華経集団を非難する人々（すなわち従来の出家修行者）にとっては、法華経が勝手にでっち上げられたもので、しかもその内容が邪見の外道の論にも等しいものと受けとられていたということを示している。

㈢さらに、その非難、悔り（あなど）の弁は、「お前たちはみな仏になるのだな」ということであること。これは、従来の法華経以前の経典を信奉し、それによって修行している者たちにとっては、すべてのものが等しく仏になることができるという法華経の一乗の教えがとても信じられず、軽蔑に値するものとして受けとられていたことを示し、㈡とともに法華経の説く一仏乗による皆成（かいじょう）思想が、彼らにはとうてい受け容れられるものでなかったということを物語っている。

以上のような点をみてみると、出家在家の区別を設けず、おそらくは在家の方が多かったであろう法華経集団の人々が、従来の経はすべてこの法華経のための方便であり、法華経こそが最第一のもの

である、この法華経をほんの少しでも信受し、経典に供養すれば、すべての人が仏になることができると主張したならば、出家の生活を厳格に守り、粒々辛苦して悟りに近づこうと修行している従来の出家修行者は、小乗の人であれ、大乗の人であれ、驚天動地のことだと思われたであろうし、世間をたぶらかすもの、邪見の外道と罵ったであろうことは容易に想像される。おそらく以上のことが迫害の原因であろうと思われるが、その原因の由って来たるところは一仏乗の教えであるということはいうまでもない。当時の世間に容易にうけ容れられない教えであったからこそ、経はこの法華経を自ら「秘密蔵」「秘要蔵」と呼び、本章に「妄(みだ)りに人に授与(じゅよ)すべからず」と説いているのである。

このように、うけ容れられない教説を説くからこそ、弘経の三軌が説かれ、経典受持の功徳、説法者の功徳が強調されていると考えられるのである。

本章は、先にも述べたように前章までと内容が一変して、法華経経典の受持とその弘通がテーマとなっており、経典成立史の上からも本章から嘱累品(ぞくるいほん)までを一まとめとして扱っている。そして、菩薩行の実践を説くこの一まとまりの部分こそが法華経の本論の中心部であるとし[1]、さらにこの一まとまりの最初である本章を起点に本経を再検討しようとする試みがある[2]。

最後に、本章には竺法護訳の『正法華経』のテキストでは、前段部分が存在する。これは梵本、チベットテキストにもなく『正法華』のみにあって、その章名は「薬王如来品」となっている(大正蔵巻九、九九a―一〇〇b)。このようなことから、本章は経典成立史の上からも問題のある章となっている。

(1)田村芳朗『法華経』p. 48(中公新書)。

同　「法華経における菩薩精神」（西義雄編『大乗菩薩道の研究』p. 237 ff. 平楽寺書店、一九六八年）。
苅谷定彦「法華経修行道の構造——法師品の研究——」（『日本仏教学会年報』第四五号昭和五十五年三月）。
なお、これと対立する意見として、この法師品以下を本経にあっては第二次的性格のものとする見解もある
（横超慧日編『法華思想』p. 88. 平楽寺書店、一九六九年）。
②河村孝照「法華経法師品（DHARMA-BHĀṆAKA-PARIVARTAḤ）について」（東洋大学東洋学研究所
『東洋学研究』第二十一号、一九八六年）。

爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言。

欲捨諸懈怠　應當聽此經　是經難得聞　信受者亦難
如人渴須水　[1]穿鑿於高原　猶見乾燥土　知去水尚遠
漸見濕土泥　決定知近水　藥王汝當知　如是諸人等
不聞法華經　去佛智甚遠　若聞是深經　決了聲聞法
是諸經之王　聞已諦思惟　當知此人等　近於佛智慧
若人説此經　應入如來室　著於如來衣　而坐如來座
處衆無所畏　廣爲分別説　大慈悲爲室　柔和忍辱衣
諸法空爲座　處此爲説法　若説此經時　有人惡口罵
加刀杖瓦石　念佛故應忍　我千萬億土　現淨堅固身
於無量億劫　爲衆生説法　若我滅度後　能説此經者

我遣化四衆　比丘比丘尼　及清信士女　供養於法師
引導諸衆生　集之令聽法　若人欲加惡　刀杖及瓦石
則遣變化人　爲之作衞護　若說法之人　獨在空閑處
寂寞無人聲　讀誦此經典　我爾時爲現　清淨光明身
若忘失章句　爲說令通利　若人具是德　或爲四衆說
空處讀誦經　皆得見我身　若人在空閑　我遣天龍王
夜叉鬼神等　爲作聽法衆　是人樂說法　分別無罣礙
諸佛護念故　能令大衆喜　若親近法師　速得菩薩道
隨順是師學　得見恒沙佛

（1）底本は「穽」。高麗蔵は「穿」。春日本も同じ。大正蔵の誤りか。今、改む。

爾の時に、世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

「諸の懈怠を捨てんと欲せば　応当に此の経を聴くべし。　是の経は聞くことを得難し　信受する者、亦難し。

人の渇して水を須めんとして　高原を穿鑿するに　猶乾燥ける土を見ては　水を去ること尚遠しと知る

漸く湿える土泥を見ては　決定して水に近づきぬと知らんが如し。

薬王よ、汝、当に知るべし　是の如き諸人等　法華経を聞かずんば　仏智を去ること甚だ遠し。

若し是の深経の　声聞の法を決了する　是れ諸経の王なるを聞き　聞き已りて諦かに思惟せんに　当に知るべし、此の人等は　仏の智慧に近づきぬ。

若し人、此の経を説かば　応に如来の室に入り　如来の衣を著　而も如来の座に坐して　衆に処して
畏るる所無く　広く為に分別し説くべし。
大慈悲を室と為し　柔和忍辱を衣とし　諸法の空を座と為す　此に処して為に法を説け。
若し此の経を説かん時　人有って悪口し罵り　刀杖瓦石を加うとも　仏を念ずるが故に応に忍ぶべし。
我、千万億の土に　浄堅固の身を現じて　無量億劫に於いて　衆生の為に法を説く。
若し、我が滅度の後に　能く此の経を説かん者には　我、化の四衆　比丘比丘尼　及び清信士女を遣わして　法師を供養せしめ　諸の衆生を引導して　之を集めて法を聴かしめん。
若し人、悪　刀杖及び瓦石を加えんと欲せば　則ち変化の人を遣わして　之が為に衛護と作さん。
若し説法の人　独り空閑の処に在りて　寂寞として人の声無からんに　此の経典を読誦せば　我、爾の時に為に　清浄　光明　の身を現ぜん。若し章句を忘失せば　為に説いて通利せしめん。
若し人、是の徳を具して　或は四衆の為に説き　空処にして経を読誦せば　皆、我が身を見ることを得ん。
若し人、空閑に在らば　我、天・龍王　夜叉・鬼神等を遣わして　為に聴法の衆と作さん。
是の人、法を楽説し　分別して罣礙無からん　諸仏護念したもうが故に　能く大衆をして喜ばしめん。
若し法師に親近せば　速かに菩薩の道を得　是の師に随順して学せば　恒沙の仏を見たてまつることを得ん」と。

〔訳〕その時、世尊は重ねて以上の意義を宣べようとして、詩頌を説いて言われた。
「さまざまな、なまけ、怠たりの心を捨てようとするならば、まさにこの経を聴聞すべきである。

この経を聞くことは得がたく、信じ受け入れる者もまた得がたい。(16)
人がのどが渇いて水を求めようとして、高原に穴を穿（うが）ったとすると、まだ乾いた土を見ては、水はなお遠いと知る。(17)・(18)
だんだんと湿った土泥を見ると、きっと水は近いと知るであろう。(19)
薬王よ、汝は必ず知らねばならぬ、そのような人々は、法華経を聞かなければ、仏の智慧から懸（はる）か隔（へだた）っているのだ。(20)
もし、この深い（義趣の）経が、声聞の教えを解決し明らかにしていることから、諸経の王であるということを聞き、聞いた後によく考えるならば、(21)
この人々は、仏の智慧に近づいたのだと知らねばならぬ。(22)
もし、人がこの経を説くならば、如来の室に入り、如来の衣を着て、そして如来の座に坐って、人々の中にあっておそれることなく、広くことわけして説くべきである。(23)
大きな慈悲心を室とし、柔和と忍耐とを衣とし、一切存在の空を座とする。この（座）にとどまって、法を説け。(24)
もし、この経を説く時、人が悪口をいって罵（ののし）ったり、刀や杖、瓦や石によって危害を加えたとしても、仏を心に念ずることで忍ぶべきである。(25)
私は千万億という多くの国土に、清らかで堅固な身体を現わして、無量億劫という長時のあいだ、衆生のために法を説く。(26)
もし、私が入滅した後に、この経を説くことができる者には、私は変化（へんげ）の四種の人々、すなわ

ち比丘・比丘尼と、(27) 多くの衆生を引き導いて、彼らを集めて説法信男・信女とを遣わして、説法者を供養せしめ、を聴かせよう。(23)

もし、人が憎悪、刀や杖、瓦や石によって危害を加えようとするならば、そこで変化の人を遣わして、その人の護衛としよう。(29)

もし、説法する人が、独りで閑静な場所にいて、しんと静まりかえって人語もしない、（そのような所で）この経典を読誦すれば、(30)

その時、私は、清らかで光明に輝く身体を現わそう。もし、文句を忘れたのならば、私が説いてよく通じるようにしてやろう。(31)

もし、人がこの（経典読誦の）徳をそなえて、あるいは四種の人々のために説き、閑静な場所で経を読誦するならば、みな私の身体を見ることができるであろう。(33)

もし、人が閑静な場所にいるのならば、私が天神・龍王や、夜叉・鬼神らを遣わして、法を聞く聴衆としよう。(32)（梵本は第(32)偈と(33)偈は倒置。）

この人は法をこころよく説き、ことわけして（解説し）、何の障碍もなく自在であろう。多くの仏たちが心にかけて護られるので、大ぜいの会衆を喜ばすことができるであろう。(34)

もし、説法者に親しく近づくならば、速やかに菩薩の道を得るであろう。この師に順って学習するならば、ガンジス河の砂の数ほどの多くの仏にまみえることができるであろう」と。(35)

《**応当**》同義反復の複合語。二字で一語として「まさに」と訓む。六朝時代に多用される。「当応」「宜当」「宜応」「当可」などその例は多く、本経でみられる承接の連詞「即便」「便即」なども同様の例。《**決了声聞法**》「決了」は、……であると解決し明らかにするという意。「了」は宋代以降に完了の補助動詞として定着したとされ（香坂順一「近世・近代漢語の語法と語彙」〈『中国文化叢書①言語』〉p. 323f.）、六朝時代にはまだ動詞本来の「さとる」の意義を残していたとされる（森野繁夫「六朝訳経の語法(1)」〈『広島大学文学部紀要』第三三巻所収〉pp. 258—9)。声聞法を解決し明らかにするとは、声聞の教えが実は仏乗のための方便であると明らかにすること、の意にとる。《**清信士女**》優婆塞、優婆夷に同じ。在家の信男、信女のこと。《**空処**》空閑処の略。前注（五四九頁）参照。《**楽説**》こころよく法を説くこと。《**罣礙**》邪魔、さまたげ、障害のこと。

以上の偈頌の部分は、その前段の長行(じょうごう)部分に対応しており、内容もほぼ同一である。しかし、刀杖(とうじょう)瓦石(がしゃく)の迫害があり、その場合には変化の人を遣わして衛護とするということは長行部分にはなく、本段の偈頌で説かれていることである。分科でいえば（五三二頁参照）、本段偈頌部分を三つに分けるうちの第一「総勧」は初めの四句一偈、次に「長行を頌す」は次の「如人渴須水」の句から、最後の四句一偈の前「分別無罣礙」の句まで、「結勧」は最後の四句一偈に相当する。

以上で本章を終わるが、本章の内容はさらに後の第十三章勧持品、第十七章分別功徳品、第十九章法師功徳品などで詳説されている。

著者略歴

田 村 芳 朗　たむら　よしろう

大正10年4月11日　大阪に生まれる。
昭和24年3月　東京大学文学部印度哲学梵文学科卒業。
東洋大学教授，東京大学教授を経て，東京大学名誉教授，立正大学教授。
1989年3月20日逝去。
〔著書〕『鎌倉新仏教思想の研究』，『人間性の発見―涅槃経』，『法華経』，『日本仏教史入門』，『伝統の再発見―仏教の文化観』，『絶対の真理＜天台＞』（共著），『天台本覚論』（共編著）等。

藤 井 教 公　ふじい　きょうこう

昭和23年11月27日　静岡県湖西市に生まれる。
昭和58年3月　東京大学大学院（印度哲学）博士課程修了。
現在　常葉学園浜松大学教授，横浜市立大学講師，立正大学法華経文化研究所研究員，財団法人大倉精神文化研究所研究員。
〈現住所〉　浜松市住吉5－4－10
〔著書論文等〕『法華経』上（共著，昭和63年，大蔵出版），「勝鬘経義疏」（大乗仏典・中国日本篇16），『聖徳太子・鑑真』平成2年，中央公論社），「天台智顗における『涅槃経』の受容」（『大倉山論集』第29輯，平成3年），「大乗『涅槃経』におけるアートマン説」（前田専学博士還暦記念論文集『〈我〉の思想』平成3年，春秋社），「天台智顗における〈心〉の理解」（『大倉山論集』第30輯，平成3年）等。

一九八八年三月三十日　初版発行
一九九五年五月三十日　再版発行

≪佛典講座7≫
法華経　上

検印廃止

著者　田村芳朗
　　　藤井教公
発行者　鈴木正明
印刷所　株式会社　厚徳社
〒112　東京都文京区目白台一－十七－六
発行所　大蔵出版株式会社
TEL（三九四一）一九五〇番
FAX（三九四三）三七四〇番

ISBN4-8043-5426-3 C3315